

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (52)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書 (Ⅲ)

**中ノ原遺跡(Ⅱ)**  
**中原山野遺跡**  
**西原掩体壕跡**

(第5分冊)

1990. 3

鹿児島県教育委員会

---

## 序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が国道 220号鹿屋バイパス建設に先だって、昭和60年度から昭和63年度にかけて実施した中ノ原・中原山野・前畑遺跡の発掘調査の記録です。

これらの遺跡からは、縄文・弥生時代から中・近世にわたる時期の遺物・遺構をはじめ、太平洋戦争における掩体壕等の戦跡遺構など、地域的特色を示す数多くの遺物・遺構が発見され、多大の成果を収めました。

本書は、南九州の歴史を明らかにするうえで貴重な手掛かりを提供するものと考えており、地域の歴史的研究や文化財保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった建設省九州建設局大隅工事事務所や地元の方々に心から感謝いたします。

平成 2 年 3 月

鹿児島県教育委員会

教育長 濱 里 忠 宣

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査に至るまでの経過

昭和53年、建設省九州地方建設局により一般国道 220号鹿屋バイパス建設が計画されたことに伴い、鹿児島県教育委員会は、建設省九州地方建設局大隅工事事務所の依頼を受けて、昭和54年11月、工事予定地内の遺跡分布調査を実施した。

その結果、笠ノ原～祓川地区については王子遺跡をはじめ4遺跡が発見され、昭和56年度から昭和59年度にかけて県教育委員会によって発掘調査が実施された。

大浦・郷之原地区については、昭和59年4月、第二次調査として分布調査を実施し、7地点の遺物散布地が確認された。

分布調査の結果、7地点の確認調査が必要となり、建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づき、建設省大隅工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ確認調査が実施されることとなった。

## 第 2 節 確認調査

委託契約に基づき、確認調査は昭和60年度4月22日～5月25日に実施した。確認調査の結果、第6地点では遺跡は確認されなかったが、他の6地点では遺跡の存在が確認され本調査が必要となった。さらに、確認調査時の詳細分布調査において、新たに第8地点が発見された。

## 第 3 節 発掘調査

本調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会文化課の協議に基づき建設省九州建設局大隅工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が締結され実施の運びとなった。

本調査は、確認調査が散布地点の遺跡の有無を確認するだけのものであったので、建設予定地内の遺跡の範囲を限定する調査（二次確認調査）を実施しながら全面調査に移行するという方法で行った。さらに、工事が長期にわたる橋梁部分などについては、その部分を先行して本調査を実施することで協議が整った。

一般国道 220号鹿屋バイパス道路は、高隈山地から南方向にのびる遺跡の立地する台地に対してほぼ東西方向から横切る計画である。各遺跡の調査ではこのバイパス道路の中心杭の二点を使用して調査区画を設定した。なお、中心杭を調査区画の主軸（基準）に設定したのは、この中心杭より南側が、今回のバイパス工事が計画されている部分であり、かつ今回の調査対象地でもあるためである。また、この中心杭より北側は緑地帯が計画され、今回のバイパス工事

からは除外されている。ただし、川ノ上遺跡については、遺跡の性格上、調査区画（グリッド）の設定は上記の方法とは別にした。調査区画（グリッド）は、中心杭の二点を主軸に調査対象区間を10m×10mのグリッドに分割した。そして各遺跡の立地のうえから東側から或は西側から道路進行方向に向かって1区、～10区とし、南側から北側へA区、～D区とした。従って場所の指定は、B5区等というかたちとなる。

各種遺跡の年次ごとの調査は、以下のとおりである。

#### 【昭和60年度の調査】

《中ノ原遺跡の発掘調査》 昭和60年10月7日～昭和61年3月17日  
《中ノ丸遺跡の発掘調査》 昭和61年2月12日～昭和61年3月17日

#### 【昭和61年度の調査】

《榎田下遺跡の発掘調査》 昭和61年5月7日～6月24日  
《中ノ原遺跡の発掘調査》 昭和61年6月23日～7月17日、10月3日～昭和62年3月4日  
《川ノ上遺跡の発掘調査》 昭和61年9月16日～10月15日

#### 【昭和62年度の調査】

《中原山野遺跡の発掘調査》 昭和62年6月15日～7月14日、10月19日～昭和63年1月26日  
《前畑遺跡の発掘調査》 昭和62年6月19日～昭和63年3月9日

#### 【昭和63年度の調査】

《中原山野遺跡の発掘調査》 昭和63年4月27日～8月31日  
《前畑遺跡の発掘調査》 昭和63年4月19日～9月2日

### 第4節 報告書の作成

発掘調査の本格的な整理作業は、昭和63年9月から実施した。昭和63年度の発掘調査報告書は、概要編（第1分冊）、榎田下遺跡（第2分冊）、中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡（第3分冊）、中ノ原（Ⅰ）遺跡（第4分冊）を鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（48）として刊行した。

平成元年度は、中ノ原（Ⅱ）遺跡、中原山野遺跡、前畑遺跡、西原掩体壕跡及び誘導路跡の整理作業を実施した。本報告書が平成元年度分の発掘調査報告書である。

### 第5節 調査の組織

発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所と鹿児島県知事との委託契約に則り、鹿児島

県教育委員会文化課が担当した。調査の組織は次の通りである。

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	山田 克穂 (昭和60年度・61年度)
〃	〃	〃	濱里 忠宣 (昭和62～平成元年度)
調査責任者	鹿児島県教育庁	文化課 課長	桑原 一廣 (昭和60年度・61年度)
〃	〃	〃	吉井 浩一 (昭和62～平成元年度)
調査企画者	〃	課長補佐	坂口 肇 (昭和60年度)
〃	〃	〃	川畑 栄造 (昭和61年度・62年度)
〃	〃	〃	奥園 義則 (昭和63～平成元年度)
〃	〃	主 幹	中村 文夫 (昭和60年度・61年度)
〃	〃	〃	森田 齊 (昭和62年度)
〃	〃	〃	立園多賀生 (昭和63～平成元年度)
〃	〃	主任文化財研究員	向山 勝貞 (昭和60年度)
〃	〃	主任文化財研究員兼 埋蔵文化財係長	立園多賀生 (昭和61年度・62年度)
〃	〃	文化財研究員兼 埋蔵文化財係長	吉元 正幸 (昭和63年度)
〃	〃	主任文化財研究員兼 埋蔵文化財係長	吉元 正幸 (平成元年度)
調査事務担当者	〃	主幹兼管理係長	寺園 晃 (昭和60年度)
〃	〃	企画助成係長	浜松 巖 (昭和61年度・62年度)
〃	〃	〃	京田 秀允 (昭和63～平成元年度)
〃	〃	主 査	浜松 巖 (昭和60年度)
〃	〃	〃	京田 秀允 (昭和61年度・62年度)
〃	〃	〃	平山 章 (昭和63～平成元年度)
〃	〃	主 事	田中 孝子 (昭和60年度)
〃	〃	〃	川畑由紀子 (昭和61年度・62年度)
〃	〃	〃	植木園 均 (昭和62年度)
〃	〃	〃	末永 郁代 (昭和63～平成元年度)
調査担当者	〃	主 査	新東 晃一 (昭和60～平成元年度)
〃	〃	主 事	井ノ上秀文 (昭和60年度)
〃	〃	〃	宮田 栄二 (昭和60年度)
〃	〃	文化財調査員	前迫 亮一 (昭和60～62年度)
〃	〃	〃	上田 耕 (昭和61年度)
〃	〃	〃	山畑 泰子 (昭和62年度)

調査担当者	鹿児島県教育庁	文化財調査員	梅北 浩一 (昭和63年度)
〃	〃	〃	八木澤一郎 (昭和63～平成元年度)
〃	〃	〃	中村 和美 (昭和53年度)
〃	〃	〃	関 一之 (平成元年度)
〃	〃	〃	知花 一正 (平成元年度)

調査指導者	奈良国立文化財研究所遺構調査室長	宮本長二郎 (集落遺構)
〃	鹿児島県文化財保護審議会委員	河口 貞徳 (考古学)
〃	南九州古石塔研究会副会長	河野 治雄 (古石塔)
〃	鹿児島大学歯学部教授	小片 丘彦 (人類学)
〃	鹿児島大学法文学部教授	上村 俊雄 (考古学)
〃	愛媛大学法文学部教授	下條 信行 (考古学)
〃	北九州市立考古博物館副館長	武末 純一 (考古学)
〃	九州帝京短期大学経済学部講師	櫻木 晋一 (経済学)
〃	鹿児島大学法文学部助手	本田 道輝 (考古学)
〃	鹿児島玉龍高校教諭	成尾 英仁 (地質学)

尚、調査中、次の方々から指導助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

川路則友・峰和治・山本美代子・岡元満子(鹿児島大学歯学部) 渡辺誠(名古屋大学教授) 泉拓良(奈良大学助教授) 新田栄治(鹿児島大学助教授) 宮本一夫(愛媛大学助教授) 西健一郎(九州大学助手) 中村愿(沖縄国際大学助手) 岸本義彦・島袋洋(沖縄県教育委員会) 松永幸男・坪根伸也(鹿児島大学) 瀬戸口望(志布志町文化財保護委員) 米元史郎(志布志町教育委員会) 雨宮瑞生・金貞姫(筑波大学大学院) 松園政男(鹿児島県考古学会員) 青崎和憲・弥栄久志(霧島青年の家) 峰崎幸清・鈴木順一(国分市教育委員会) 中島哲郎・長谷川順一(川内市歴史資料館) 松下重信(鹿児島県考古学会員)

工事主体者	建設省九州建設局大隅工事事務所	所 長	吉田 三郎 (昭和60年度～62年度)
〃	〃	〃	板垣 治 (昭和63～平成元年度)
〃	〃	副所長	藤原栄吉郎 (昭和60年度)
〃	〃	〃	上山 秋男 (昭和61～平成元年度)
〃	〃	〃	重水 治雄 (平成元年度)
〃	〃	課 長	内田 昇 (昭和60年度・61年度)
〃	〃	〃	栢木 威 (昭和62～平成元年度)
〃	〃	〃	犬童 正夫 (平成元年度)
〃	〃	道路調査係長	江崎 嘉男 (昭和60年度)

工事主体者	建設省九州建設局大隅工事事務所	道路調査係長	富安 文夫 (昭和61年度・62年度)
〃	〃	〃	山崎 千昭 (昭和63～平成元年度)
〃	〃	主任	丸久 哲郎 (昭和63～平成元年度)
〃	〃	技師	吉川 丈次 (昭和60・61年度)
〃	〃	〃	丸久 哲郎 (昭和62年度)

### 発掘調査作業員

#### 【昭和60～61年度の発掘調査】

確認調査・榎田下遺跡・中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡の発掘調査

連絡・調整者 大浦町振興会々長 牧迫正夫 (昭和60年度) 新地 宏 (昭和61年度)

〔大浦地区〕 立元清志・立元操・西ノ原一則・本白水重成・内田利用・清水良雄・新地辰夫・西門功・葎迫幸雄・村上政義・岸元ハツエ・岩元フミ子・岩元フジエ・内田ツル子・内田マツ子・岡元キミエ・岡元ミエ子・岡元ミツ・尾迫サツ子・尾迫サヨ子・大須イネ・川井田チエ子・倉狩米子・蔵ヶ崎ミエ子・新地サダ子・新地スエ子・新地フキ子・新地ハツエ・新地美代子・立元和子・永吉キヨ子・中村陽子・西門エミ子・西門ヒサ子・西ノ原ムツ子・西ノ原のり子・牧迫フミエ・牧迫ミル・的場キミ子・的場春子・葎迫フミエ・本白水フジエ

#### 【昭和62～63年度の発掘調査】

前畑遺跡・中原山野遺跡の発掘

連絡・調整者 郷之原町振興会々長 郷原益雄 (昭和62～63年度)

〔郷之原地区〕 奥村丈夫・東正春・森山芳夫・森山幸男・森山幸雄・山口益夫・郷原恒男・吉元盛幸・奥村タエ子・奥村和子・奥村ハギエ・郷原キヨ子・郷原多美子・郷原キヨ・郷原マス子・郷原カズ子・郷原カズ子・郷原フミエ・郷原ナル・郷原サチ子・郷原ハル・郷原圭子・郷原フミ・郷原ハツエ・郷原ノブ子・郷原ヨシエ・郷原ヨシミ・郷原陸子・郷原スギ・郷原フミ子・郷原ヨシミ・前ノ原康江・前ノ原キクエ・前ノ原千代子・前ノ原ユリエ・森山サエ子・森山キヨ・森山マサエ・吉元キクエ・吉元順子・吉元美代子・吉元マツ子・山口タミエ・東トヨ子・東キヌ子・原田ユキミ 〔大浦地区〕 川井田智栄子・新地美代子・大須イネ・西門サキ子・蔵ヶ崎美江子・西門エミ子・西門ナミエ・的場フジ子・的場春子・的場喜美子・西ノ原ムツ子・尾迫サツ子・尾迫サヨ子・岡元ミス子・内田カズ子

#### 【昭和61～平成元年度の整理作業】 鹿児島県教育庁文化課埋蔵文化財収蔵庫整理作業員

前之園俊子・中原己美子・脇田美律江・白井綾子・岩坪千枝子・喜入カツ子・有留瑛美・野口久子・宮岡雪子・高倉晴美・永野香代子・木田安枝・岡村典子・川畑恵子・四丸久美子・浜田幸江・山下治子・東しづ子・徳永美喜子・本多直子・下畠節子・鳥巢のり子・前田まさ子・有満和子・安永一葉・志和地和恵・杉森和子・杉森敏子・岩爪美津子・上野智恵子

## 中ノ原遺跡(Ⅱ)



## 例 言

1. この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の「中ノ原遺跡」の発掘調査報告書である。
2. この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)の「中ノ原遺跡(Ⅱ)」(第5分冊)である。  
なお、第4分冊「中ノ原遺跡」(1)の続編である。
3. 中ノ原遺跡は、鹿屋市大浦町(旧字名中ノ原)に所在する。
4. 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
5. 発掘調査は、昭和60年10月7日～昭和61年3月17日と昭和61年6月22日～昭和63年3月4日に実施した。整理作業は、昭和63年度と平成元年度に実施した。
6. 発掘調査に当たっては、鹿屋市教育委員会や大浦町内会の協力・援助を得た。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者(新東晃一・前迫亮一・上田耕)で行った。  
出土遺物の実測・製図は八木澤一郎・前迫・新東が行ない、本書の執筆は、新東が担当した。
9. 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東がこれを担当した。

# 本文目次

第 I 章	はじめに	1
第 1 節	調査に至るまでの経過	1
第 2 節	確認調査	1
第 3 節	発掘調査	1
第 4 節	報告書の作成	2
第 5 節	調査の組織	2
第 II 章	中ノ原遺跡の概要	1
第 1 節	調査の経緯	1
第 2 節	発掘調査の経過	1
第 3 節	発掘調査の概要	3
第 III 章	弥生時代の調査	7
第 1 節	調査の概要	7
第 2 節	遺構	7
第 3 節	出土遺物	17
第 IV 章	歴史時代の調査	33
第 1 節	調査の概要	33
第 2 節	遺構	33
第 V 章	発掘調査のまとめ	43

## 挿 図 目 次

第1図	Ⅲ層遺構配置図及び遺物分布図	5
第2図	遺物出土状況図	7
第3図	1号住居址遺物分布図	8
第4図	1号住居址遺物出土状況図	9
第5図	1号住居址実測図	10
第6図	1号住居址出土遺物実測図(1)	11
第7図	1号住居址出土遺物実測図(2)	11
第8図	2号住居址実測図	12
第9図	3号住居址遺物分布図	13
第10図	3号住居址遺物出土状況図	14
第11図	3号住居址実測図	15
第12図	3号住居址出土遺物実測図	16
第13図	Ⅲ層出土遺物実測図(1)	18
第14図	Ⅲ層出土遺物実測図(2)	19
第15図	Ⅲ層出土遺物実測図(3)	20
第16図	Ⅲ層出土遺物実測図(4)	22
第17図	Ⅲ層出土遺物実測図(5)	23
第18図	Ⅲ層出土遺物実測図(6)	24
第19図	Ⅲ層出土遺物実測図(7)	25
第20図	Ⅲ層出土遺物実測図(8)	26
第21図	Ⅲ層出土遺物実測図(9)	27
第22図	中～近世遺構配置図	34
第23図	古道跡実測図	35
第24図	溝状遺構実測図	35
第25図	1号掘立柱建物実測図	37
第26図	2号掘立柱建物実測図	38
第27図	2号・3号掘立柱建物配置図	40
第28図	3号掘立柱建物実測図	41
第29図	土師器出土状態	42
第30図	土師器実測図	42

## 表 目 次

第1表	出土遺物一覽表(1)	28
第2表	出土遺物一覽表(2)	29
表3表	出土遺物一覽表(3)	30
第4表	出土遺物一覽表(4)	31
第5表	出土遺物一覽表(5)	32
第6表	1号掘立柱建物跡一覽表	37
第7表	2号掘立柱建物跡一覽表	38
第8表	3号掘立柱建物跡一覽表	40

## 図 版 目 次

図版 1	1. CD1・2区Ⅲ層の発掘調査風景	45
	2. 1号住居址検出状況（北から）	
図版 2	1. 検出状況（北から） 2. 掘り下げ状況（東から）	46
	3. 埋土状況（北から） 4. 埋土状況（東から）	
	5. 1号住居址検出状況（東から）	
図版 3	1. 1号住居址全景（北から）	47
	2. 1号住居址全景（北から）	
図版 4	1. 1号住居址出土遺物（土器）	48
	2. 1号住居址出土遺物（石器）	
図版 5	1. 2号住居址全景（東から）	49
	2. 3号住居址検出状況（東から）	
図版 6	1. 3号住居址全景（東から）	50
	2. 3号住居址出土遺物	
	3. 完形土器出土状況（149）	
図版 7	1. 弥生土器（1） 2. 弥生土器（2）	51
図版 8	1. 弥生土器（3） 2. 弥生土器（4）	52
図版 9	1. 弥生土器（5）	53
図版 10	1. 弥生土器（6）	54
図版 11	1. 弥生土器（7） 2. 弥生土器（8）	55
図版 12	1. 弥生土器（9）	56
図版 13	1. 弥生土器（11）	57
図版 14	1. 弥生土器（12）	58
図版 15	1. 弥生土器（13）	59
図版 16	1. 弥生土器（14）	60
図版 17	1. 1号掘立柱建物検出状況	61
	2. 1号掘立柱建物全景	
図版 18	1. 2号・3号掘立柱建物全景	62
	2. 土師器出土状況（柱穴） 3. 土師器出土状況（柱穴）	
	4. 出土土師器（内面） 5. 出土土師器（底面）	

## 第Ⅱ章 中ノ原遺跡の概要

### 第1節 調査の経緯

中ノ原遺跡は、大浦町のほぼ中央の台地に立地し、この台地上に遺物が広く散布している。昭和59年の分布調査の結果に基づき、この中ノ原台地の西方寄りの散布地を第3地点とし、中央付近を第7地点とした。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会文化課との協議の結果、昭和60年度4月に確認調査を実施し、その後昭和60年10月以降に本調査を実施することになった。確認調査の結果、第3地点は分布調査地域のほぼ全域に遺跡の存在が確認された。第7地点は、第3地点寄りに遺跡が存在するが、東方に向けては谷状の凹地となり遺跡の可能性は無いことが判明した。第3地点と第7地点は、確認調査の結果や遺物の散布状況や地形からみて一連の遺跡であることが考えられ、後には二地点併せて中ノ原遺跡とすることになった。

### 第2節 発掘調査の方法と経過

発掘調査は、昭和60年度と昭和61年度の二年度にわたって実施した。

昭和60年度は、昭和60年10月7日から昭和61年3月17日の間に実施した。昭和60年度の発掘調査は、橋梁部分の工事が早く発注されるため、その部分にあたる台地西側部分を中心に行った。昭和61年度は、他の地点の発掘調査との関係で昭和61年6月22日から7月17日の間と昭和61年10月3日から昭和62年3月4日の間の二期にわたって実施した。昭和61年度の発掘調査は、昭和60年度の残りとして第3地点から第7地点までを実施し、中ノ原遺跡の調査は完了した。

発掘調査は、工事用センター杭No.354とNo.360を基準に10m×10mのグリッド網を調査対象区域に被せ実施した。そして、グリッドは西端から1～44区と南からA～I区として、各グリッドはA1区、………A44区、D1区………D10区などと呼称することにした。

#### 【昭和60年度の調査】 昭和60年10月7日～昭和61年3月17日

10月は、発掘調査の準備および調査の開始。調査事務所等を建設し、伐採作業と調査区の設定を行い、橋梁部分に関係する7区以西の調査を手掛けた。表土下には中世の包含層と弥生時代の包含層が存在するが、区域によって残存度に濃淡がある。D7区には早くも弥生時代に該当する竪穴住居址等の遺構が検出され中世・弥生時代・縄文時代の遺物等が出土。遺構の検出とA～C7区以西の表土剥ぎ作業を中心に行う。

11月は、表土剥ぎ作業を継続しながら、遺構検出を並行して行う。新たにC1区～C3区にかけての谷の凹地の調査にも入る。この部分は上の台地の遺物が流堆積した状態で弥生時代の遺物が集中する。中世の溝状遺構等の検出作業が続く。端部の遺構・遺物の少ないところは、処理を終え、下層確認のためのトレンチを設定し断面図を作成する。

12月は、F7区以西の一部、端部の残り部分の伐採作業や表土剥ぎ作業等を行い調査区全体の調整につとめる。一方では、縄文時代後期の遺構・遺物の検出作業を行い、実測作業等で遺物の取り上げ処理等を行う。24日、河口貞徳県文化財保護審議会委員の発掘調査指導。27日で年末の作業は終了。

昭和61年1月は、6日から作業開始。前日からの大雪のため午前中は発掘調査は中止。C1区・C2区付近の谷部の遺物包含層は、大量に遺物が出土し作業難行。D7区の竪穴住居址（1号）の掘り下げ開始。C5区～D5区にかけて掘立柱建物跡検出。時期は中世。2間×4間の間取り。他の調査区は縄文時代後期の検出作業。住居址や掘立柱建物跡等の遺構の調査は少人数で行うため、新たにD14区～16区の表土剥ぎ作業に入る。

2月は1号住居址掘り下げ続行。消失家屋で炭化木多量検出のため作業難行。C5区、C・D6区など縄文時代後期層まで終了したところは下層確認のため深掘り作業。12日から2パーティに分かれ中ノ丸遺跡も調査にかかる。住居址1号を中心にD7区以西の仕上げ。15日にG2区に花卉状の間仕切りをもつ円形住居址検出。21日、F2区に縄文時代晩期住居址検出。

3月は、弥生時代住居址（3基）および縄文時代住居址の発掘作業に終始。各住居址の実測・清掃・写真撮影作業。4日、河口県文化財保護審議会委員の発掘調査指導。17日、橋梁建設に係わる部分の中ノ原遺跡の調査終了。

**【昭和61年度の調査】** 昭和61年6月23日～7月17日、10月3日～昭和62年3月4日

6月23日から第7地点（後に中ノ原遺跡に含めた）の確認調査に入る。D25区～D29区は東側の確認トレンチ調査を開始。6月末まで確認調査続行。

7月は、それ以东の30区～44区について盛土を重機で旧耕作土まで排土し、東西方向に5m毎にトレンチ設定。この部分には遺構・遺物は検出されず。これで第7地点つまり中ノ原遺跡の東端はD29区までと確認される。続いて昭和60年度の延長部の調査に入る。F5区～F7区の元事務所付近に入る。一日毎に悪天候のため足場の良いB10区以东の表土剥ぎを並行して進める。F6区、F7区に掘立柱建物跡を検出。17日、中ノ丸遺跡の調査が急ぐため中ノ原遺跡の発掘調査を一時中断。

10月3日から再び中ノ原遺跡の発掘調査開始。東端の29区～24区付近とD6区・F7区付近の掘立柱建物跡の調査に分かれて入る。D24区付近は縄文時代後期該当土器出土。25日、高校歴史部会の中ノ原遺跡の現地見学。縄文時代後期層の検出・写真撮影・実測終了後、遺物取り上げ作業。終了地点は深掘りトレンチで下層確認調査。

11月は、1週がD29区～D24区付近の深掘り作業続行。縄文時代早期該当層には、遺物は確認されない。D23区～D20区の表土剥ぎから後期包含層掘り下げ作業に入る。続いてD18区・D19区に入る。順次縄文時代後期包含層の掘り下げ作業続行。

12月は、CD8区以东とCD17区以西の両方から弥生時代包含層と縄文時代後期包含層の検出作業継続。CD12区～CD13区付近には弥生土器もかなり出土。包含層の処理の済んだとこ

ろは順次下層確認の深掘りトレンチ掘り下げを実施。26日で年末は終了。

1月は、6日から調査開始。DC12区・DC13区付近で市来式土器が多量出土。18日、DC10区付近にはほぼ一個体分の縄文時代晩期土器の集中する箇所検出。22日、DC18区～DC19区の深掘りトレンチで縄文時代早期包含層検出。早期包含層の平面調査開始。貝殻文系円筒土器が二個体分程度出土。

2月は、DC9区～DC14区にかけて後期包含層の掘り下げ作業と実測作業継続。EF6区～EF7区付近の掘立柱建物跡の再検出とその周辺の検出作業。F6区に弥生土器完形品の出土。掘立柱建物跡の柱穴から土師器の完形品出土。写真・実測。DC7区の住居址1号の切断とその下層の調査。この付近は取り付け道路が入るため現道路下も調査に入る。

3月は、DE6区～DE7区のアカホヤ火山灰下層に縄文時代早期包含層を検出。平面調査を開始。土器の細片が出土。最後の深掘りトレンチの実測作業。中ノ原遺跡の調査終了。

### 第3節 発掘調査の概要

昭和60年度の発掘調査は、台地西端部のA～I1～7区を行った。その結果、近世～中世、弥生時代中期、縄文時代晩期～前期の数時期の遺構・遺物が出土した。

近世～中世の遺構は、古道・溝状遺構・掘立柱建物跡等がある。古道は、F～G5区に南北方向に検出され、幅1.5mを測る比較的しっかりした道路跡である。おそらく、この時期のこの地域の幹線道と考えられる。そのほか断片的に溝状遺構が確認されている。農地整備や開畑のため途中が削平を受けているが、小道としての機能があるものと考えられる。掘立柱建物跡は、C5区・D5区・C6区にかけて検出された。略東西方向に2間×4間の掘立柱建物跡であるが、東西に延びる桁行は南側は一つ飛の2間となっている。車庫状の特殊な柱間を持つ掘立柱建物跡であり注目される。

弥生時代の遺構は、竪穴住居址が3基検出された。緑地帯保存部分と現道によって削平されて全体像の把握は困難であるが、まとまりのある集落の存在が想定される。住居址の時期は、いずれも弥生時代中期から後期初頭の山ノ口式系の土器を伴う。1号住居址はD7区に検出され、約5m×4.5mの方形プランを呈し東南隅に張り出しを付した形態のものである。中央部が一段低くなりその四隅に四本柱を持つタイプである。2号住居址は、14区に住居址の4分の1が検出され、主体は用地外に延びるものである。住居址の形態は不明である。3号住居址は、G1区・G2区に検出され直径約4.5mの円形を基調とする住居址である。住居址内には四ヶ所の花弁状の間仕切りを持ち、中央が一段低くなるタイプの住居址である。CD1～3区は凹地となり、この部分に弥生土器を大量に含む包含層が形成されている。

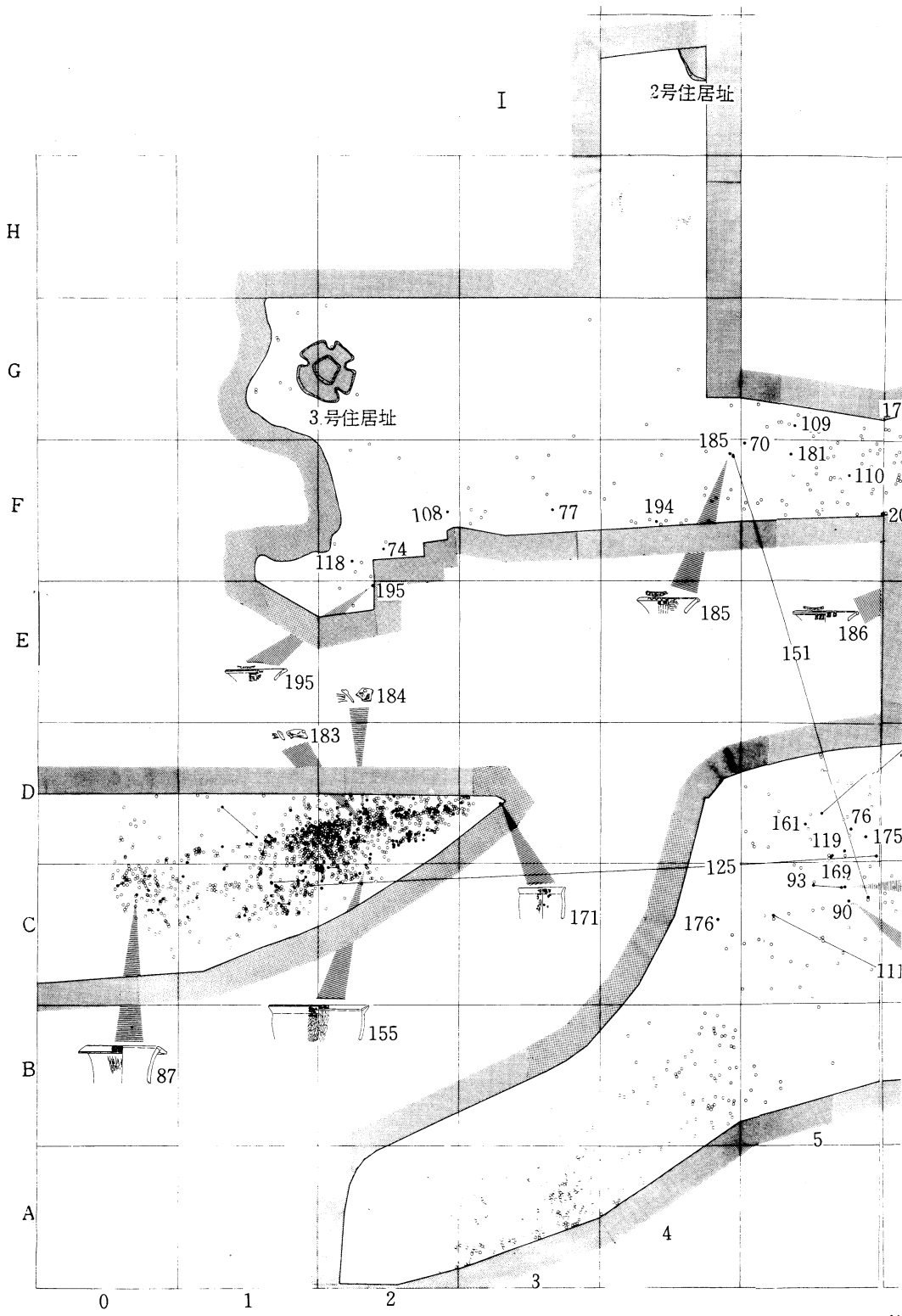
縄文時代の遺構としては、竪穴住居址と集石遺構が検出された。住居址は、直径2.7mの円形を呈するタイプでF2区に検出された。住居址は縄文時代晩期前半期の土器を伴う時期である。集石遺構は、3基検出された。1号集石はA2区に、2号集石はA4区に、3号集石は

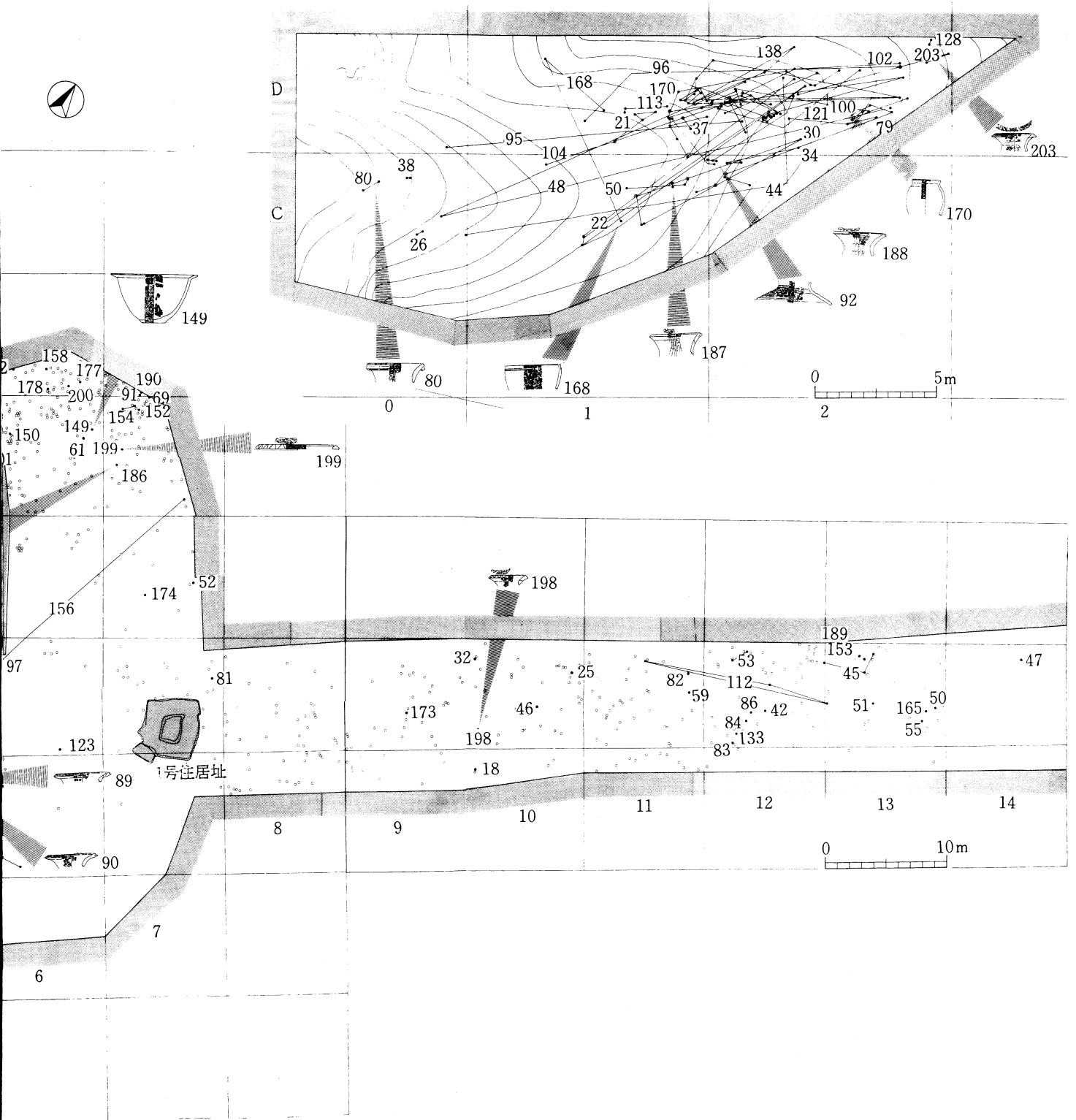


F 2 区に、いずれも台地の先端近くに検出されている。確実な年代は不明であるが、1号集石・2号集石の近辺には縄文時代前期の縄式土器系統の条痕文土器が出土しており、ほぼこの時期に属することが想定される。

昭和61年度の発掘調査は、昭和60年度の残部と第7地点にかけての確認調査と本調査を実施した。E～G 6区付近からA B 29区にかけてが本調査であり、A B 30区からA B 44区にかけては確認調査である。その結果、中世や弥生時代中期終末～後期初、縄文時代晩期～前期及び早期の遺構・遺物が出土した。中世では、E F 6区付近に2棟の掘立柱建物跡が検出された。建物跡は重複しており、1棟の建物の柱穴には土師器の坏の完形品が2個埋納された注目すべき事実も得られた。そのほか、弥生時代中期の遺物包含層及び縄文時代後期を中心として晩期から前期の遺物包含層を調査しさらに、D E 6区付近とD E 18区付近には、X層中から縄文時代早期の土器片の検出もあった。

なお、縄文時代については、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)「中ノ原遺跡(I)」において報告した。





第1図 Ⅲ層遺構配置図及び遺物分布図

## 第 III 章 弥生時代の調査

### 第 1 節 調査の概要

今回の発掘調査においては、緑地帯保存部分や農道によって削平された部分が多くて弥生時代の遺跡の全体像を把握することは困難ではあった。しかし、遺跡の分布や遺構の配置から、遺跡は広範囲におよぶことが想定される。

弥生時代の遺構は、竪穴住居址が3基検出された。住居址は、いずれもⅦ層からⅨ層を基盤に構築されている。竪穴住居址の時期は、いずれも弥生時代中期から後期初頭に位置付けられる山ノ口式系土器を伴う時期に該当している。3基の住居址は、それぞれが約30m～60m離れて検出されている。しかも、1号住居址は、方形プランを呈し東南隅に張り出し部を持つタイプで、3号住居址は花卉型の間仕切りを備えた円形住居址であり、形態上の違いも大きい（2号住居址は用地外へ延びるため形態は不明である）。

C～D 1～3区付近は遺跡の所在する台地の傾斜地にあたり、この傾斜地には大量に弥生土器を含む遺物包含層が形成されている。

平坦地の包含層には、出土遺物は以外と少ない。第2図は、F 6区に出土した唯一完形の弥生土器である。土器は若干斜めに検出されたが、原位置をとどめていることが考えられる。しかし、その性格は不明であった。

弥生時代の遺跡の範囲は、遺物の分布や遺構の広がりからこの西側の傾斜地付近からD 9区付近までに想定される。

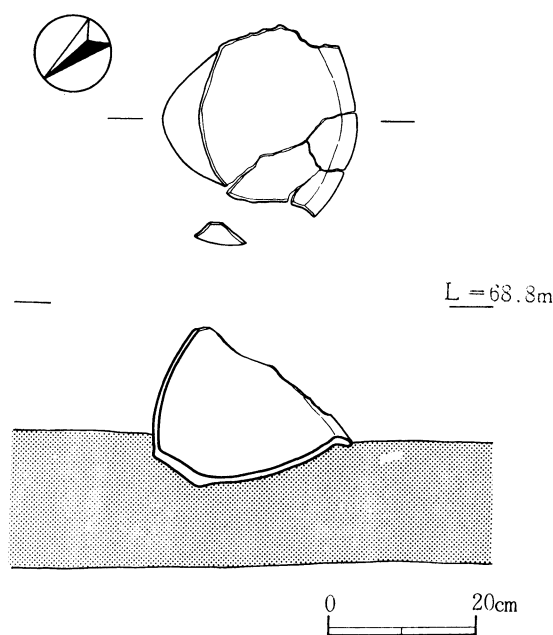
### 第 2 節 遺構

#### 1 竪穴住居址

中ノ原遺跡のⅢ層検出の遺構は、竪穴住居址が3基発見された以外には他の遺構は検出されていない。1号住居址はD 7区に、2号住居址は14区に、3号住居址はG 1区・G 2区間にそれぞれ検出された。

##### (1) 1号住居址 (第3図～第7図)

1号住居址は、B 7区に検出された。住居址はⅦ層からⅨ層の火山灰に掘り込まれ、住居址の床面はⅨ層下部を利用している。ほぼ



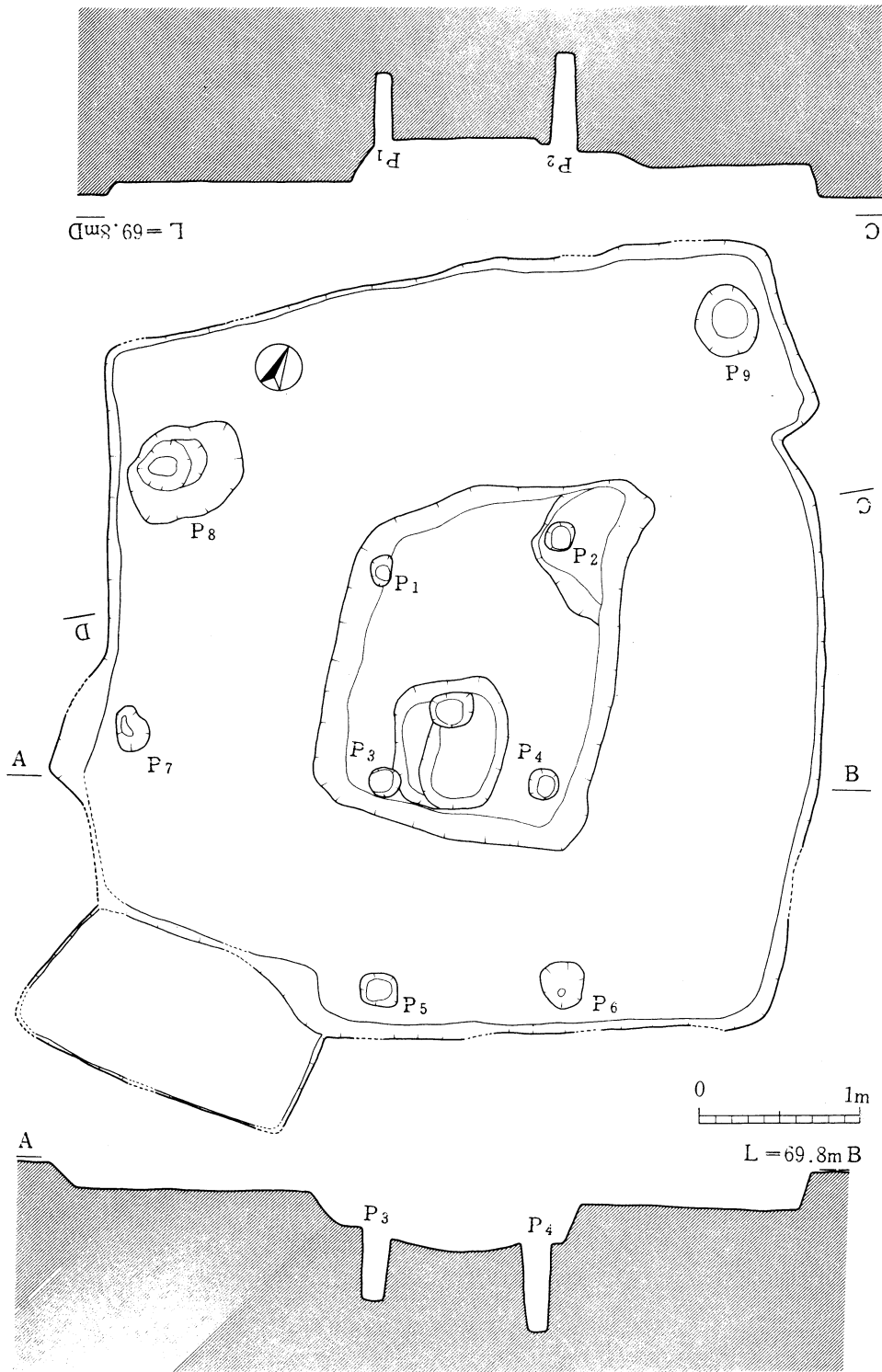
第2図 遺物出土状況図



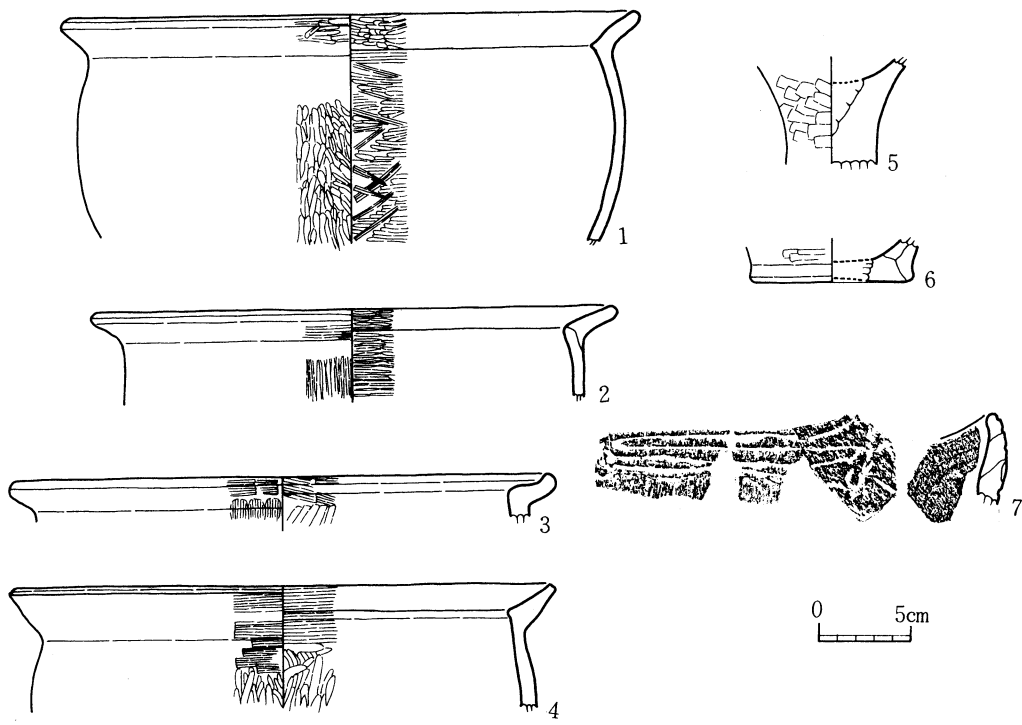
第3图 1号住居址遺物分布图



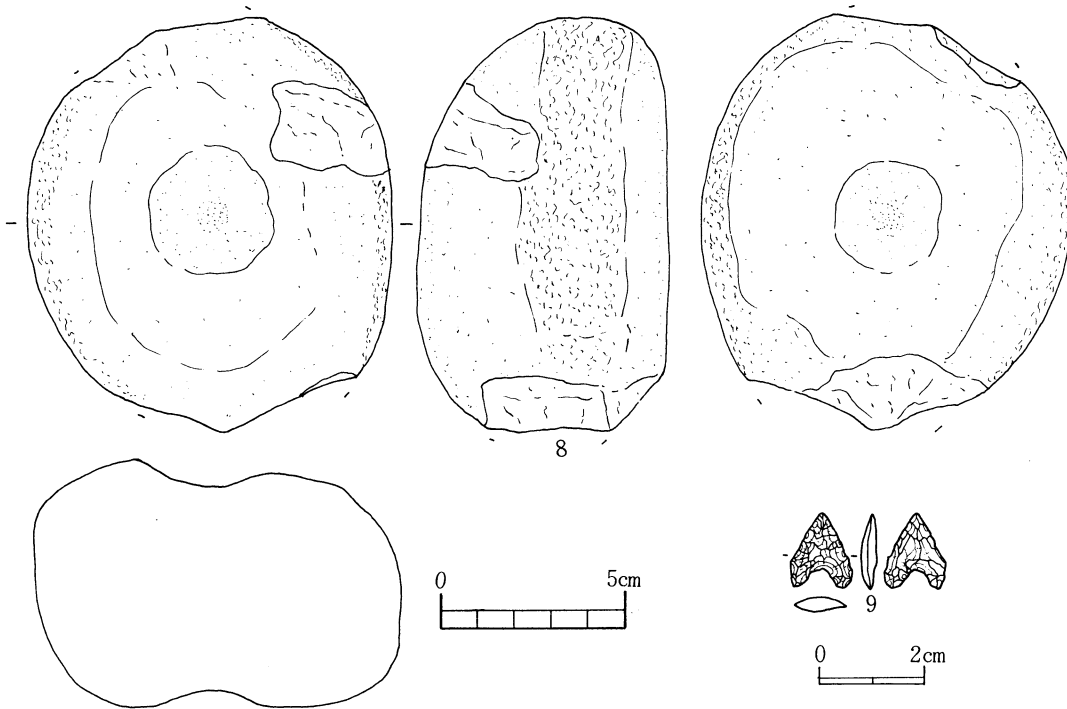
第4図 1号住居址遺物出土状況図



第5图 1号住居址实测图



第6图 1号住居址出土遗物实测图(1)



第7图 1号住居址出土遗物实测图(2)



方形プランを呈する住居址で、検出面での平面規模は、東西 4.5m × 約 5.0m を測る。検出面から床面の深さは、約30cmを測る。床面の中央部は、一段深く掘り下げられて掘りコタツ状になる。床面からは、さらに約30cm深くなる。この中央の床面の一段低い面の四隅に、4個の柱穴が検出された。住居址の主柱と考えられる。柱穴の直径は20~15cmと小さいが、深さは40~50cmを測る。柱間は、東西は約1.05m、南北は1.55mを測る。なお、南西隅に、幅 1.0m × 長さ 1.8mの張り出し部を備えている。側壁付近に浅いピットが検出されるが、柱穴の可能性は少ない。また、北西隅に径70cmで深さ80cmを測る大形のピットが検出されたが、埋土が異なり住居址に付属するものかは不明である。

住居址内には出土遺物は少ないが、炭化木が中央部に集中して検出された。削平のためか、炭化木は側壁付近にはみられない。さらに、この炭化木は、中央部に向かって放射状に検出されており、その形状から焼失家屋と考えられる。

住居址内からは、総数153点の遺物が出土している。しかし、土器片はいずれも細片で形態の明らかなものは少ない。1~5は、弥生土器である。1と4は、口縁部は「く」字に外反し胴部は丸味をもって張り出した鉢状の器形を呈する。ヘラみがき整形の堅緻な仕上げがみられる。2・3は、甕形土器の口縁部である。5は、甕形土器の脚部である。6は縄文晩期の底部で、7は後期の口縁部片である。縄文期のものが混入したのであろう。

石器は、2点出土した。8は石鏃で、表面は細かな二次的剥離面でおおわれ、裏面は比較的大きな剥離面からなる。えぐりが深く、寸づまりの全形を呈している。本遺跡では1号住居址の周辺の下層は縄文期の包含層がみられるところから、縄文期の混入と考えられる。9は、凹石である。表裏面がやや滑らかで、周辺部にあらい平坦面をもつ円礫であり、表裏面に大きくぼみを有する。

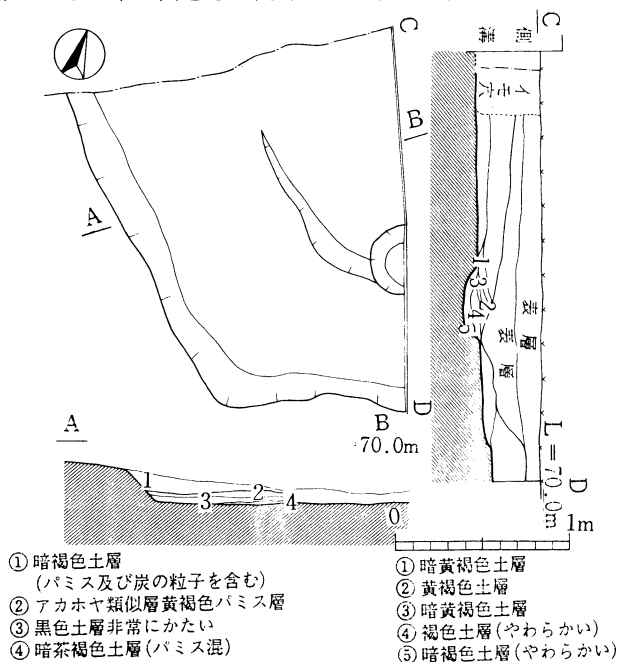
### (2) 2号住居址 (第8図)

2号住居址は、14区に所在する。住居址のコーナー部分がほぼ4分の1程度検出されたもので、主体は用地外に延びる。張り床面らしき状態とピットが検出されたが、住居址の形態はほとんど不明である。出土遺物は5点と少なく、形態の判明するものはない。

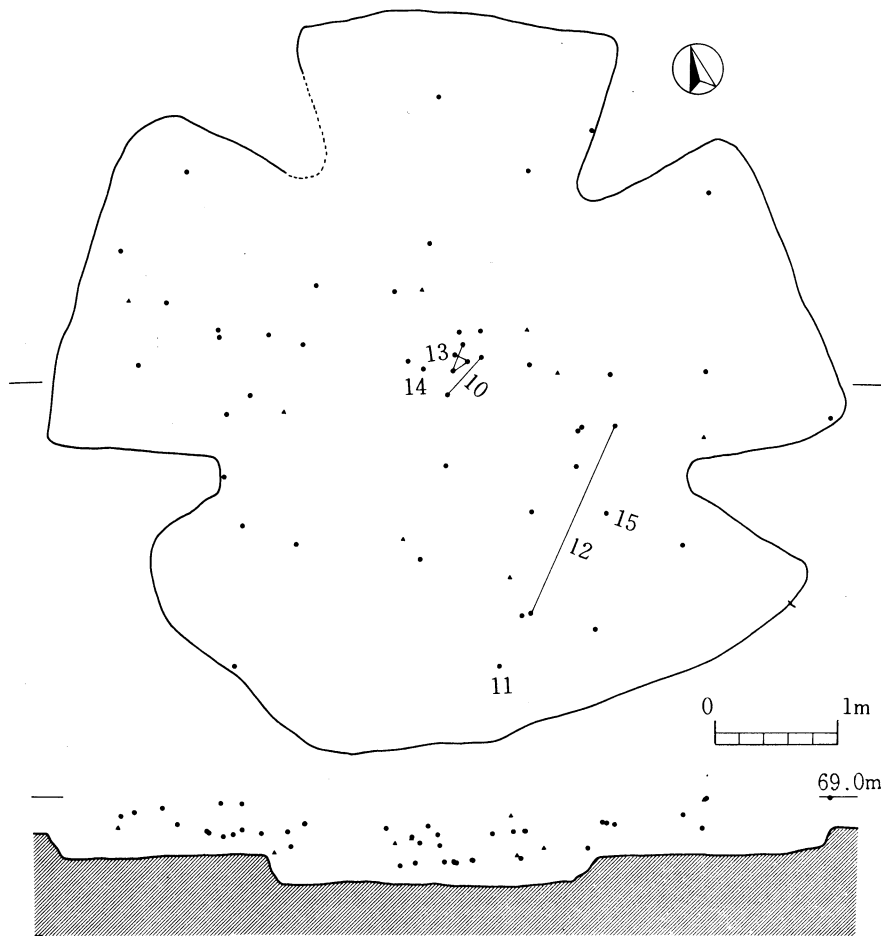
### (3) 3号住居址

(第9図~第12図)

3号住居址は、G1区とG2区間に検出された。住居址は、Ⅶ層からⅨ層



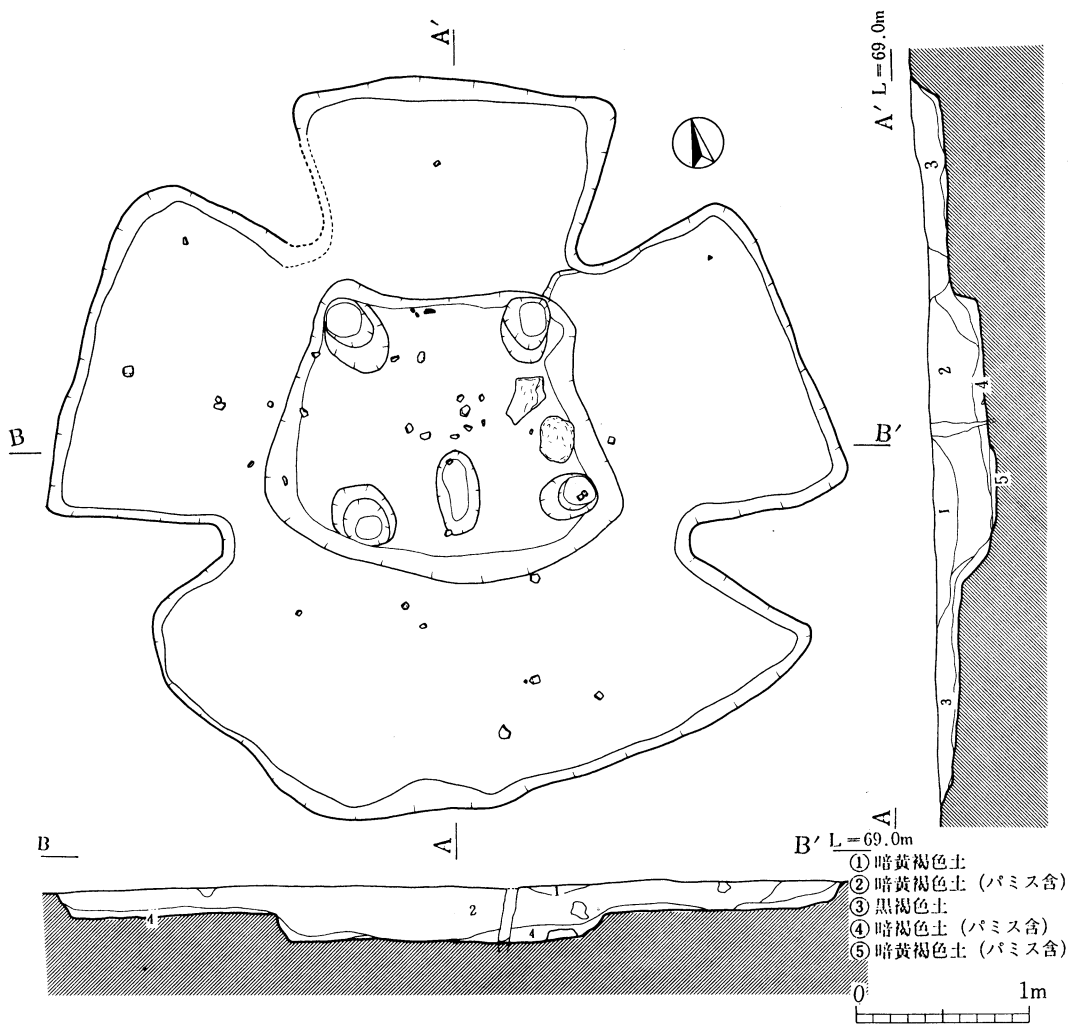
第8図 2号住居址実測図



第9図 3号住居址遺物分布図

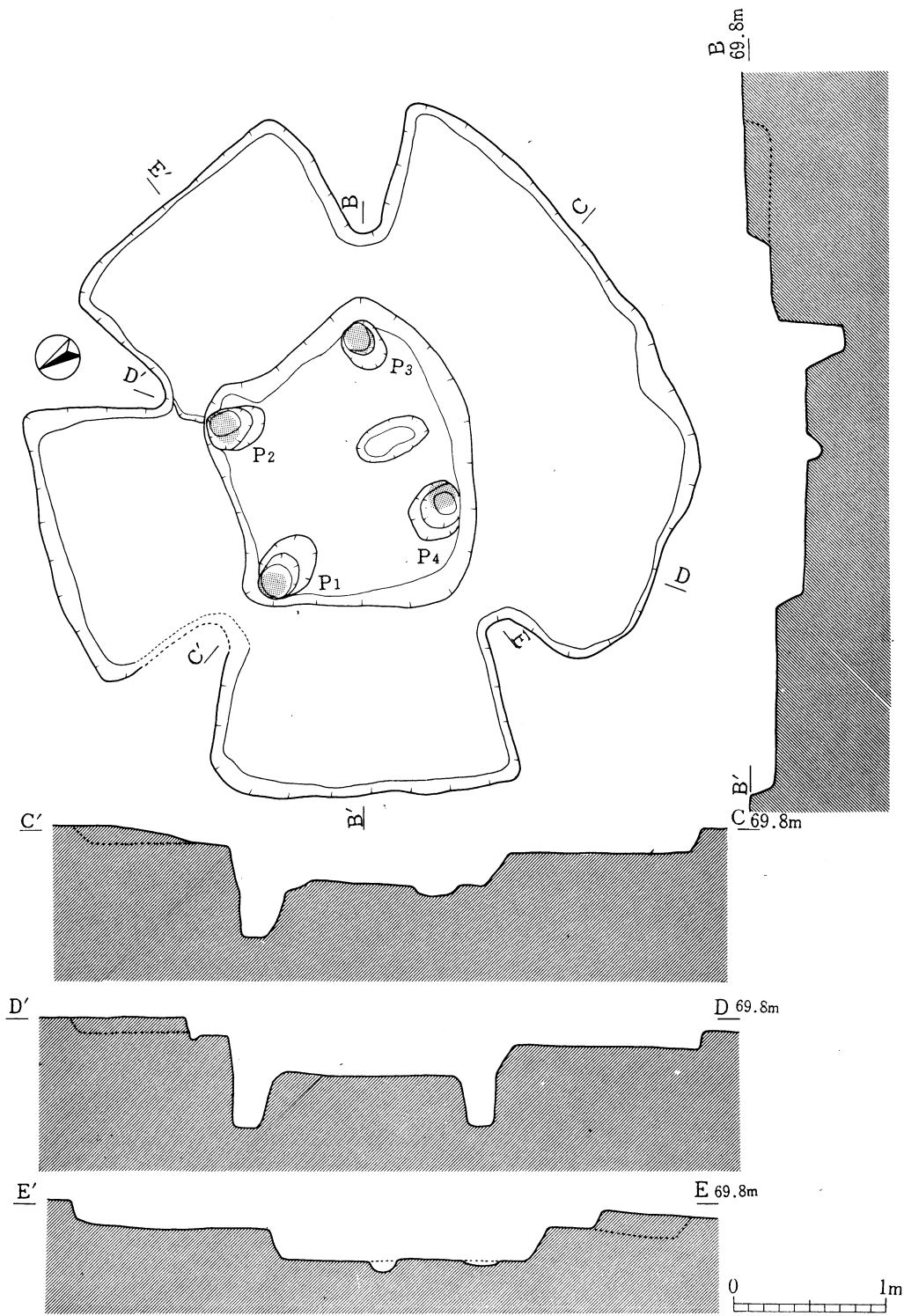
の火山灰に掘り込まれ、床面はⅩ層下面に位置している。住居址は、4つの間仕切りをもついわゆる花卉形の平面プランを呈す。住居址内部に飛び出す間仕切り部以外の周壁は、直径約4.5mの円形プランを基調としている。検出面から床面の深さは浅く、約20cmを測る。住居址の中央部は、1号住居址同様に掘りゴツツ状に方形に一段深くつくる。住居址の主柱は、この方形のほぼ四隅に位置している。柱穴は、中央に飛び出す間仕切りに対応している。柱間は約110cmで、ほぼ正方形に配置している。

住居址内からは、総数36点の遺物が出土している。しかし、土器片はいずれも細片で形態の明らかなものは少ない。10は、口縁部に凹線文を施した土器である。細片のため器形は定かではないが、壺形土器では外反を呈する。11・13は、縄文晩期の土器である。11は屈曲をもつ胴部片である。12は、口縁部が肥厚し外反する。13は胴部の下半部の破片で、これも晩期の可能

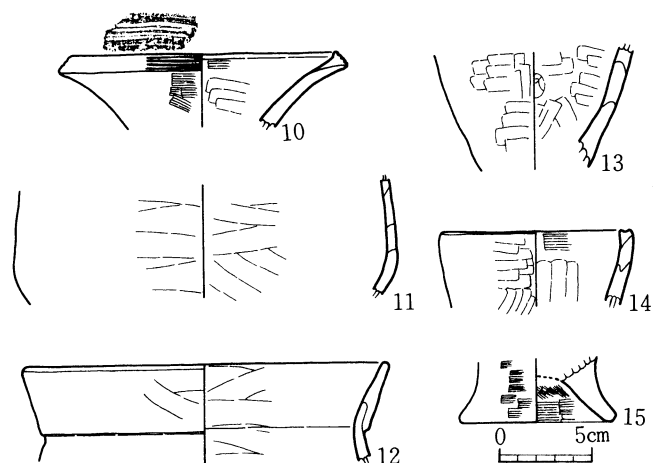


第10図 3号住居址遺物出土状況図

性が高い。縄文晩期については、住居址周辺から住居址を始め多数の遺物が出土しており、住居址埋土に混在したことが考えられる。14は、口縁部片で、鉢状の器形を呈する。口唇部は平坦におさめ、若干凹面をつくる。15は、らっぱ状を呈する底部片である。



第11图 3号住居址实测图



第12图 3号住居址出土遗物实测图

### 第3節 出土遺物

中ノ原遺跡の弥生時代の出土遺物は、CD12区に集中して発見され、弥生期の純粋な包含層はこの区付近だけである。住居址の検出される平坦地では、弥生時代の包含層が純粋に形成される部分は少なく、縄文時代晩期あるいは後期の包含層と重複する部分が多い。

出土遺物は、土器がほとんどである。石器は、凹石や敲石など、弥生期にもみられるものについては時期の判別が難しく縄文期に包括して既に説明した(第4分冊)。磨製石鏃など明らかに弥生期に該当する器種は出土していない。

#### 1 土器

土器は、大きく甕形土器、壺形土器、鉢形土器、特殊土器に分けられる。

##### 1) 甕形土器 (第13図～第15図-16～79)

甕形土器は、大型の甕と一般的な甕形土器に分かれる。大甕は、器形が一般的に大きく口縁部直下に太い突帯を一条巡らす。そして、底部は平底を呈する。一般的な甕は、口径が30cm前後が普通で、高さも30cm程度のものである。肩部から頸部近くには数条の貼付突帯文を巡らせる。底部は、充実した脚台である。両者は、形態的には大きく異なっている。

16～18は、大型の甕に属す。16は、口径47cmを測る大型の甕形土器である。口縁部は直線的に大きく「く」字状に外反し、口縁部直下の頸部付近には台形状に大きく拡張した貼付突帯を巡らせる。突帯文の端部平坦面には、凹線文状の凹みをつける。外面は、口縁部と貼付突帯文に横位の丁寧な刷毛ナデ整形が施され、それ以外はヘラ磨き状の整形がみられる。

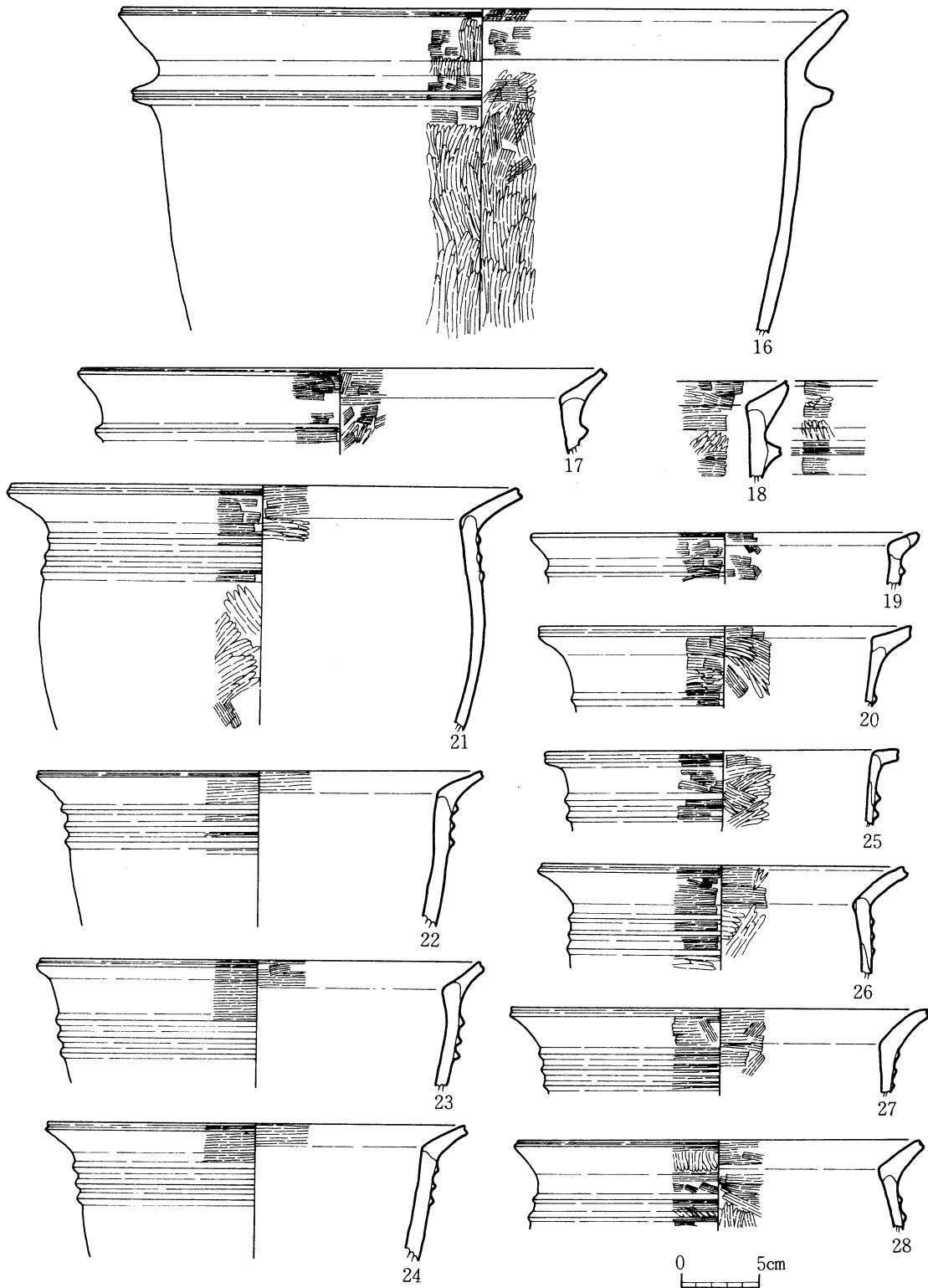
19～79は、一般的な甕形土器である。21～41は、甕形土器の口縁部から頸部付近である。ほとんどが「く」字状に外反するタイプであるが、端部には細かなバリエーションが多い。

21は、口径33.4cmを測る口縁部である。口縁部は大きく「く」字状に外反し、口縁内面にはシャープな稜をつくる。口縁端部の平坦面には、凹線文状の凹みをつける。口縁直下で口縁部が外反してできる屈曲部(頸部)から下には、三条の突帯文を巡らせる。この貼付突帯文は、この頸部直下から巡らせるもの(19・21～24・26・30・35など)と、頸部の直下に少し隙間を置いてから突帯文を巡らせるもの(20・29・31・32など)がある。

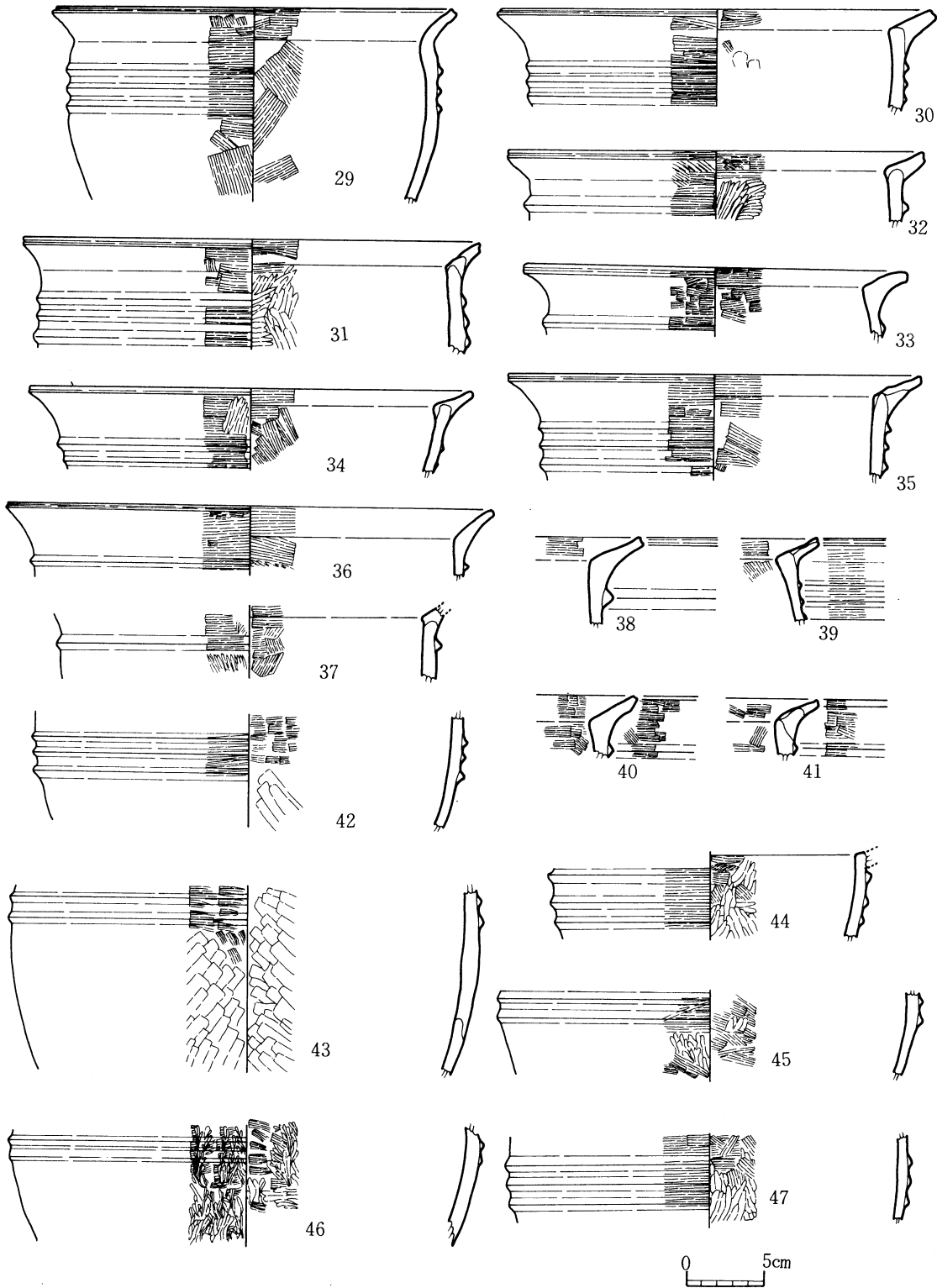
胴部は、球状に僅かに膨らむのが一般的であるが、24のように直線的なものもある。口縁部付近と貼付突帯文付近は、横位の丁寧な刷毛ナデ状の整形で仕上げられるが、そのほかの部分は刷手目が施される。28のように胴部下半では、ヘラ磨き状の整形で仕上げるものもある。

54～79は、甕形土器の底部である。甕形土器の底部は、裾部が若干広がり、底面が充実した脚台である。底部裾部の端部は、面取りがおこなわれ、その上に凹線状の凹みが施される。しかし、64・65・69・70のように面取りをおこなわず丸味をもって仕上げるものもある。

一般的には、底面は平坦な平底を呈する。しかし、56・57・61・67のように、底面が上げ底

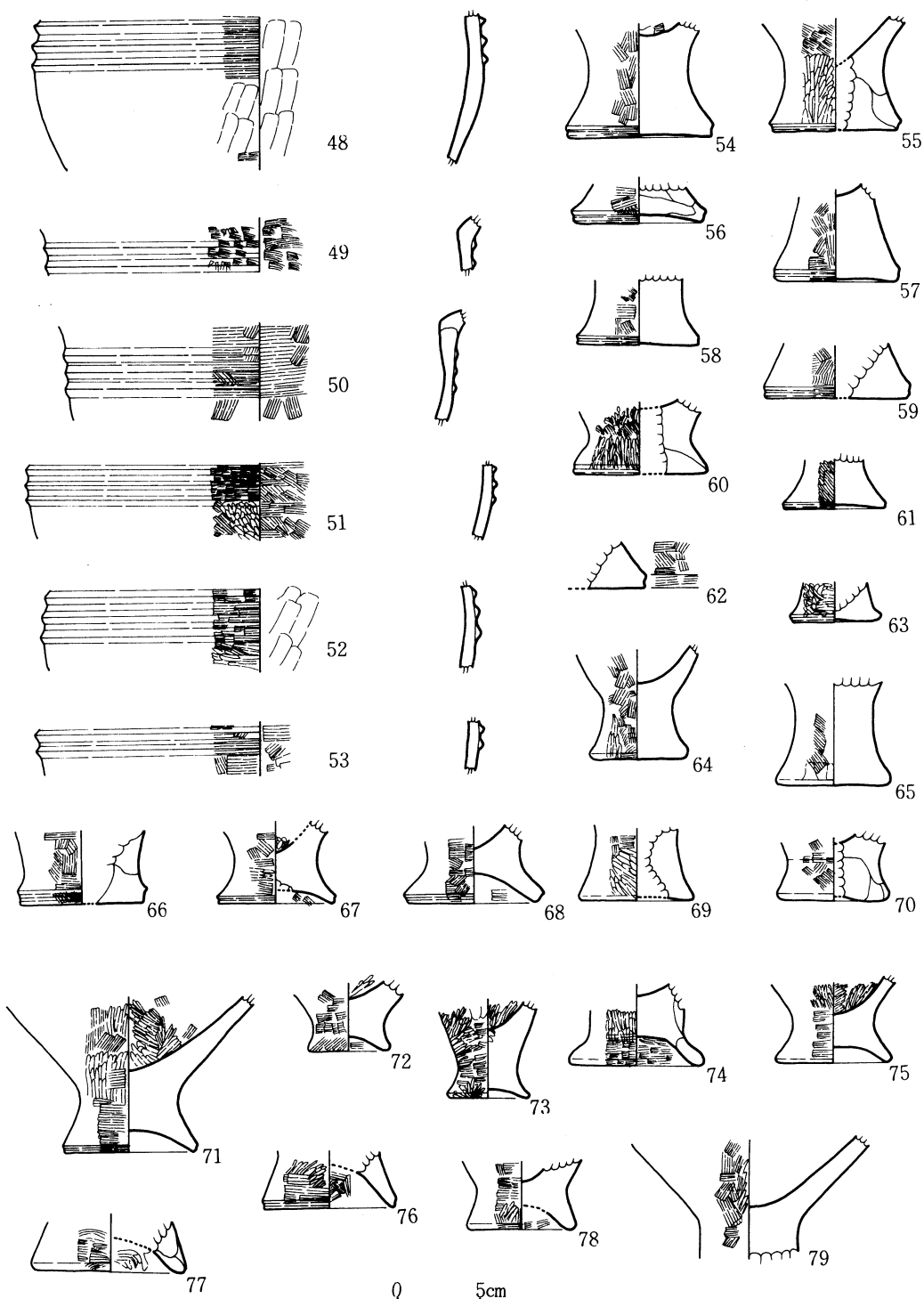


第13图 Ⅲ层出土遗物实测图(1)



第14图 Ⅲ層出土遺物実測図(2)





第15图 Ⅲ层出土遗物实测图(3)

状にわずかに凹面をつくるものもある。

68・71～78は、脚部がラップ状に大きく上げ底を呈するタイプである。71・76のように、脚の裾部が甕形土器の脚部と同様な仕上げが施されるが、底面は平坦ではなくラップ状に上げ底になるものもある。68・71～78などは細片で器形が不明な点が多いが、胴部から口縁部の器形は甕形土器ではなく、鉢形土器などの別な器形になる可能性もある。

## 2) 壺形土器 (第16図～第18図—80～148)

壺形土器は、口縁部の形態に細かなバリエーションが多くみられる。口縁部には、大きく次の三種類があり、さらに小型の壺形土器がある。

### ① 口縁部が直線的に外反して口唇部側面直下に台形状の突帯文を貼付して巡らせて口縁の拡張部とするタイプ (80～85)

口径は11cm～18cmと小さく、比較的短頸の口縁部をつくる。口唇部側面直下に突帯を巡らし口縁部を幅広くしており、強固な口縁部をつくる。84・85は同様な口縁部のつくりがみられるが、口縁部の器形は若干異なる。壺形土器以外の器種が考えられる。86も同様な突帯の付け方がみられるが、頸部から口縁部の立ち上がりが異なる。

### ② 口縁部端部が逆「L」字状で若干垂れ下がり気味に外反するタイプ (87・88)

口縁部端部は幅広く垂れ下がる華麗な口縁部のつくりで、整形手法も丁寧である。

### ③ 口縁部は大きく外反し口縁部下面に粘土板を貼付け口唇部を二重にした二又状口縁のタイプ (89・90)

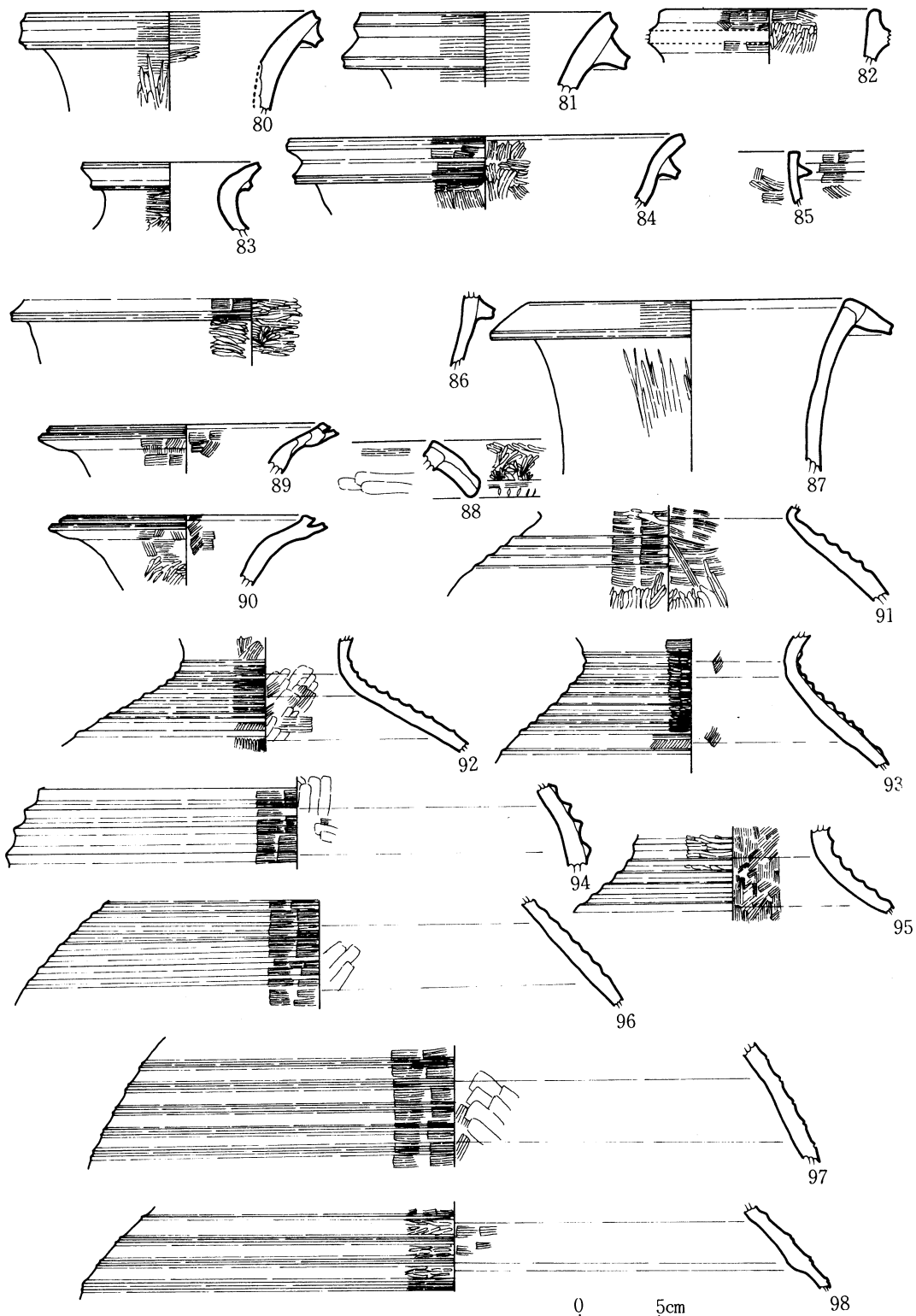
口唇部を二重にした二又状口縁の複雑な口縁部をつくる。非常に丁寧な整形手法で、特殊な壺形土器の可能性も考えられる。

### ④ 細片のため定かでないが、口縁部が短く外反するだけの単調なつくりで、比較的口径の小さい小型の壺が想定されるタイプ (105～123)

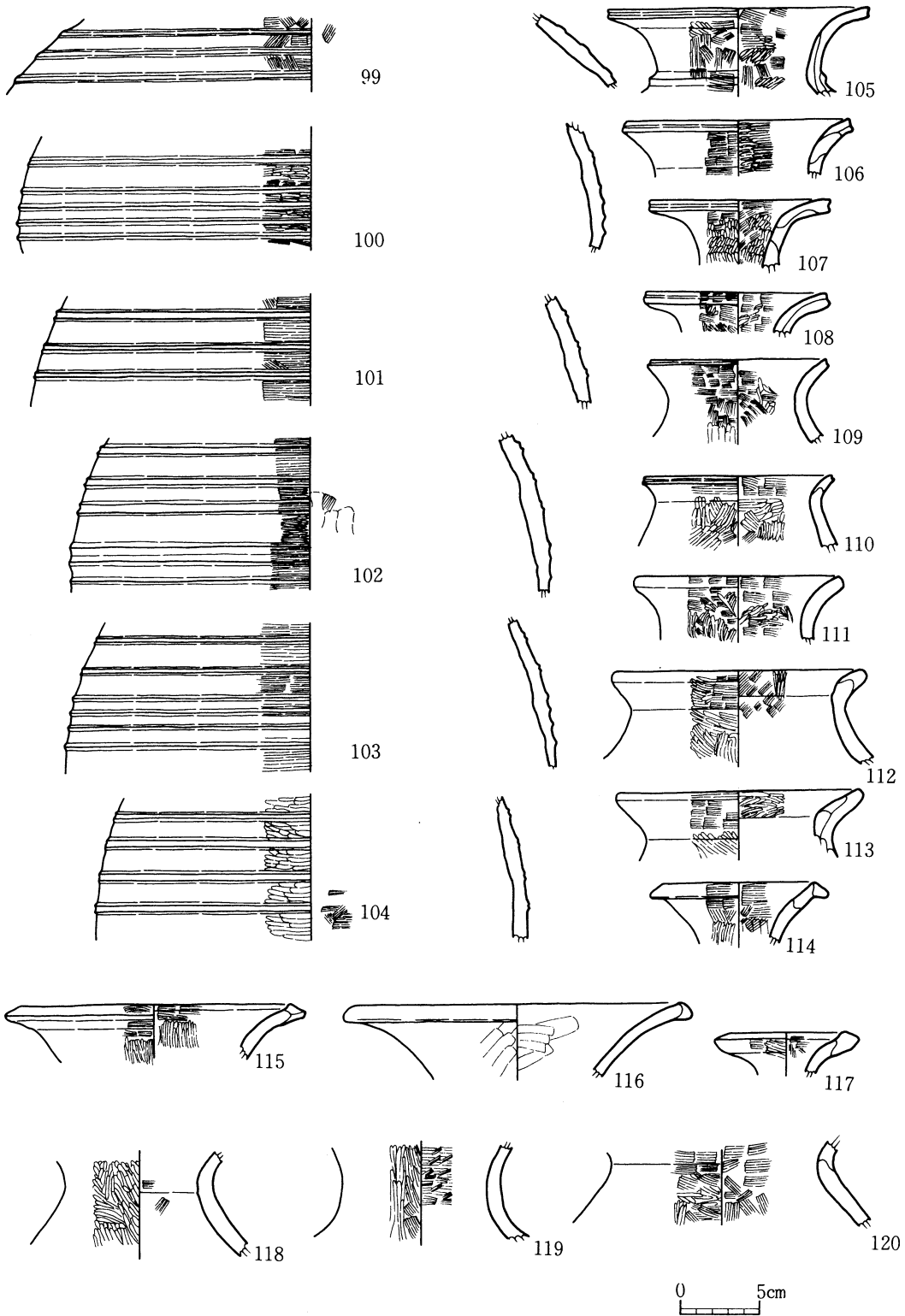
105のように、口唇部平坦面に凹線状の凹みをつけ頸部に突帯を巡らすものもある。

92～104は、頸部から肩部・胴部である。91～93のように、頸部から肩部にかけて多条の三角突帯文を密に貼付するものもある。97・104のように口唇状突帯を巡らせるものもある。これらの整形は非常に丁寧で、焼成は堅緻である。

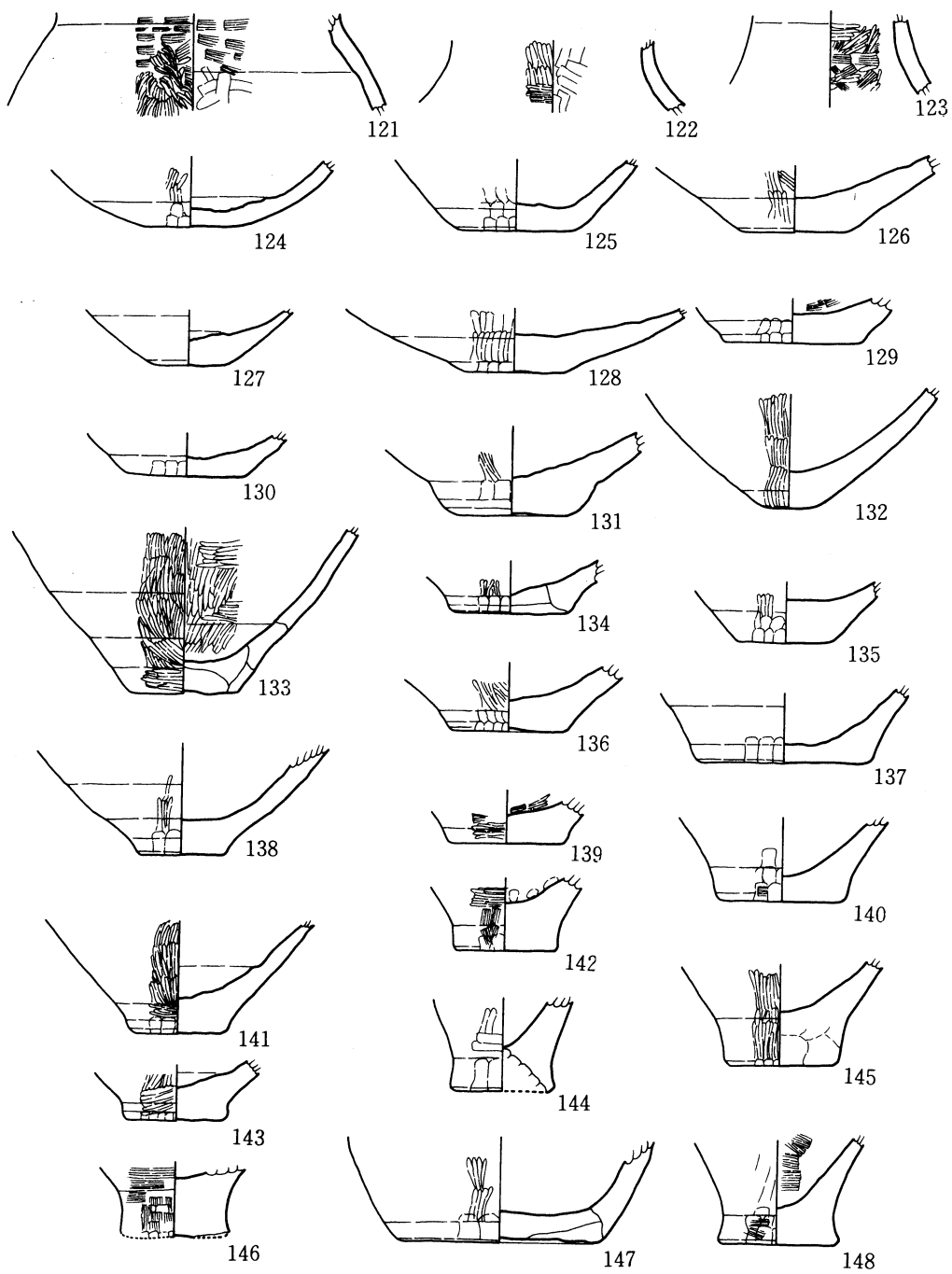
125・148は、壺形土器の底部である。底部は平底を呈するが、底部の形態にもバリエーションが多くみられる。小さい平底の底部から大きく外反して胴部に立ち上がるタイプ(124～130)や底部の円盤の上面から胴部へ立ち上がるタイプ(131)や底部側面が若干張り出すタイプ(144～148)などがある。



第16图 Ⅲ層出土遺物実測图(4)



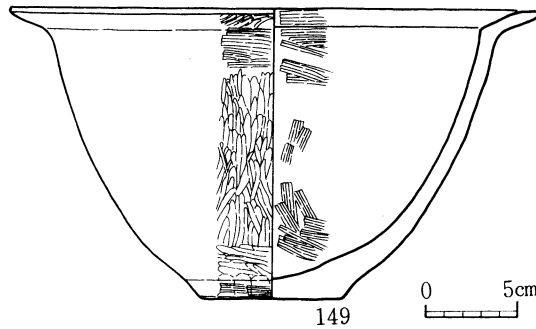
第17圖 Ⅲ層出土遺物実測圖(5)



第18图 Ⅲ層出土遺物実測图(6)

### 3) 鉢形土器 (第19図～第21図—149～172)

鉢形土器は、149のように大形のものから169のように小形のものまでである。また器形および口縁部のつくりも様々である。149は、唯一完形で出土した甕形土器である。口縁部は「く」字状に大きく外反し、底部は平底を呈する。口径は28.4cmで、高さは15.8cmを測る。口径が広く高さの低い、いわゆるヘルメット状の器形である。口縁部付近は丁寧な横位の刷毛ナデ整形が



第19図 Ⅲ層出土遺物実測図(7)

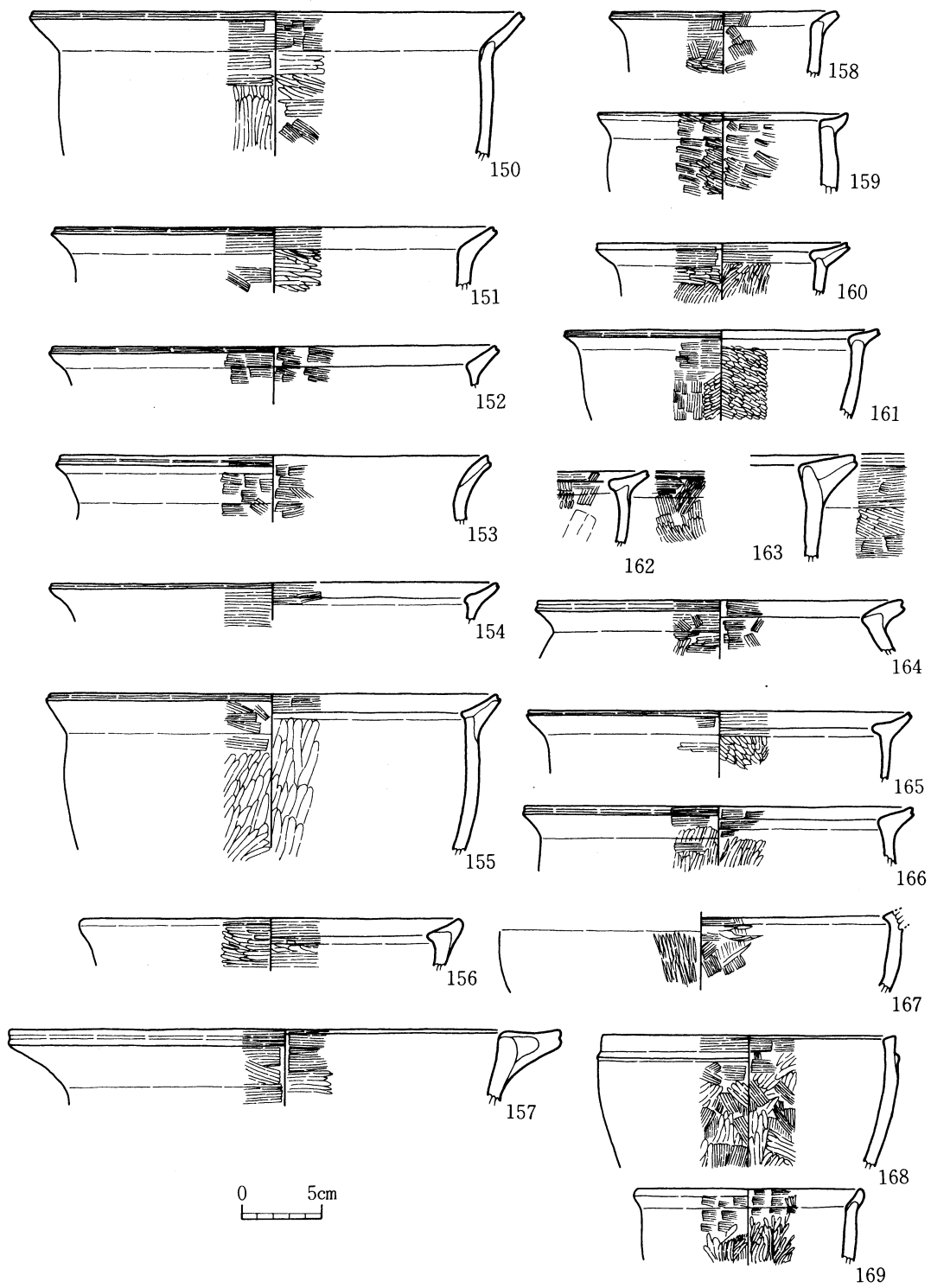
施され、胴部から底部へはヘラ磨きの整形が看取される。149のように、甕形土器と同様に口縁部を「く」字状に外反するタイプが一般的に多い。このタイプの鉢形土器の場合は、胴部や胴部は突帯文などは貼付されず、無文のままの場合が多い。168は、口縁部は内湾気味に直行した口縁部を呈し、口縁外面に一条の突帯文を巡らす特殊なタイプである。また、170は、胴部は球状に張り、頸部で締め、口縁部はわずかに外反する。広口の小壺の可能性も考えられる。

### 4) 特殊土器 (第21図—173～203)

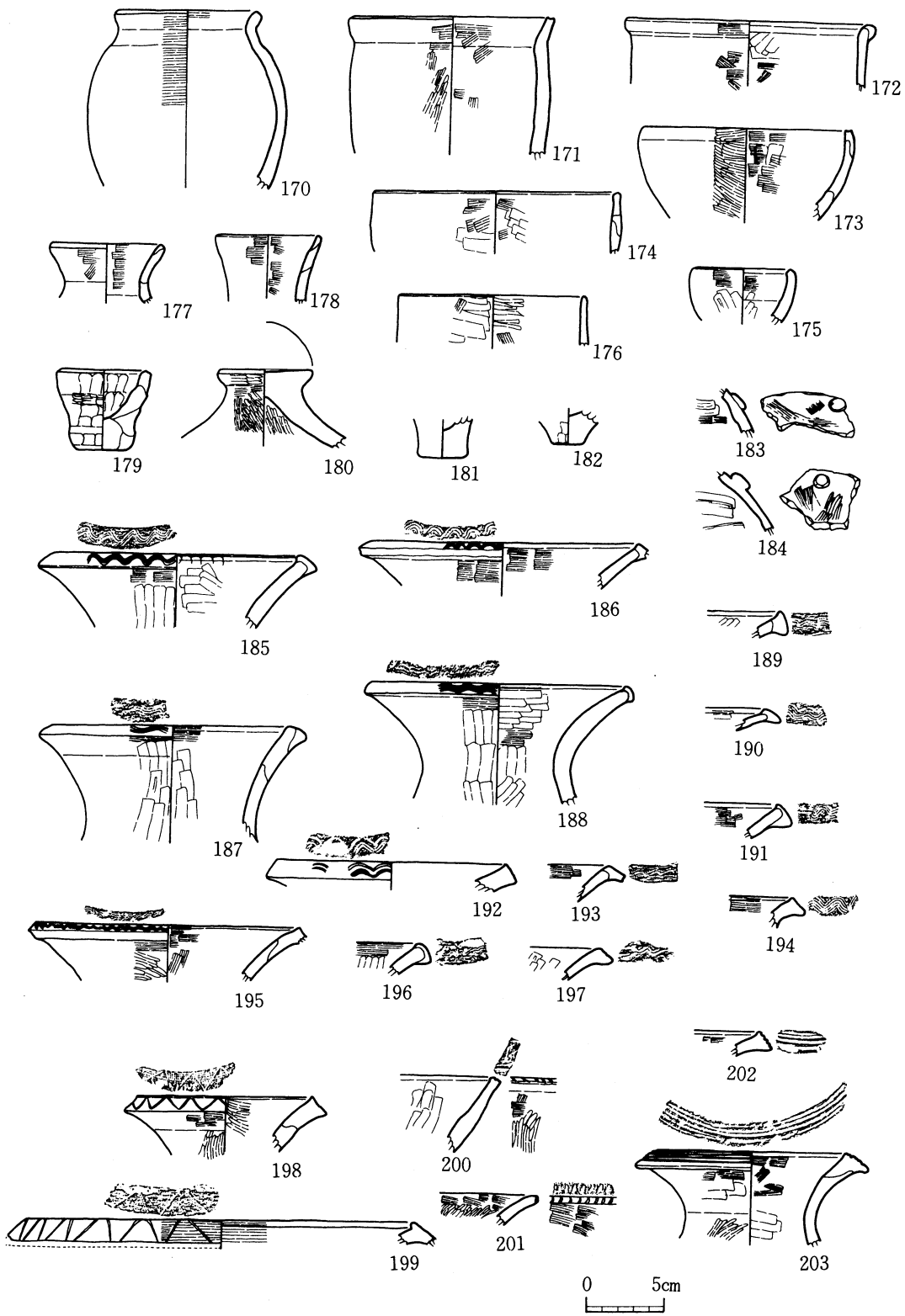
特殊な器形や特殊な紋様をもつものをここに一括した。

173・175は球状に丸味をもって張った胴部から口縁部では若干内湾しておさめる。ワン状の器形を呈するものである。174・176は広口の直行口縁で、177・178は狭口の直行口縁である。179は、口径6cmで高さ5.2cmの小形の手捏土器である。180は、約6cmのつまみを備えた大形の蓋形土器である。181・182は非常に小形の底部でミニチュア土器の底部と考えられる。183・184は、肩部付近と考えられる部分に、特徴的な円形の浮文を貼付した破片である。

185～203は、口縁口唇部の平坦部に特殊な紋様を施文したものである。いずれも胎土はきめ細かく、丁寧な整形が看取される。細片のため、器形は定かでないものも存在する。185～197は、壺形土器の口縁口唇部に楡描きの波状文を施文した類である。楡描波状文は、比較的狭い口唇平坦部に丁寧に描かれている。198・199は、壺形土器の口縁口唇部に沈線で据歯文を描くものである。200・201は、外反する口縁部の薄い口唇部に刻目を施すもので、202・203は、外反した壺形土器の口縁部の若干拡張した平坦な口唇部に丁寧な凹線文を施す。



第20図 Ⅲ層出土遺物実測図(8)



第21图 Ⅲ層出土遺物実測図(9)



第1表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)	胎土	調整	焼成	色調	備考			
1	弥	68.49	他	D-7	住1	鉢	口縁部	口径 30.6	石英・長石 雲母	⑧ミガキ ⑨	良好	外暗茶褐色 内暗灰褐色		
2	弥	68.51	他			甕		27.8						
3	弥	68.77						28.6		⑧ハケ→ナデ ⑨		外暗茶褐色 内暗灰褐色		
4	弥	68.39	他			鉢		28.9		⑧ハケ目 ⑨ハケ→ナデ		外暗茶褐色 内暗褐色		
5	弥	68.44	他			甕	底部	底径 4.8		⑧ミガキ	普通	外明茶褐色	外面剝落	
6	弥	68.74						8.8	石英・長石 細砂粒	⑧ハケ→ナデ ⑨	良好	外明茶褐色 内		
7	繩	68.65					口縁部	器壁厚 0.7~1.3	石英・長石 砂粒			外暗茶褐色 内黒褐色~茶褐色		
10	弥	68.48	他		住3			14.4	石英・長石 黒雲母	⑧ミガキ ⑨ハケ→ナデ		外暗茶褐色 内茶褐色	凹線文	
11	弥	68.70				胴部	胴径 21.0		石英・長石 微粒	⑧ミガキ ⑨		外暗茶褐色 内		
12	弥	68.725				口縁部	口径 19.6		石英・長石 黒雲母・微粒	⑧ミガキ ⑨ハケ→ナデ		外暗茶褐色 内暗灰褐色	スス付着	
13	弥	68.475	他			底部 付近	胴径 10.9			⑧ミガキ ⑨		外暗茶褐色 内		
14	弥	68.475				碗形 土器	口縁部	口径 9.2	石英・長石 細砂粒	⑧ハケ→ナデ ⑨		外暗茶褐色 内黒褐色	スス付着	
15	弥	67.79				甕	底部	底径 8.6	石英・長石 砂粒	⑧ハケ→ナデ ⑨ハケ目		外明黄褐色~暗黄褐色 内暗黄褐色		
16	弥	64.16	他	CD-2	Ⅲ		口縁部	口径 47.0	石英・長石 黒雲母	⑧ハケ→ナデ ⑨		外暗茶褐色 内暗茶褐色		
17	弥	64.465			Ⅱ		口縁部	33.6	石英・長石 小礫	⑧ハケ目 ⑨ハケ→ナデ	良好	外明茶褐色 内		
18	弥	70.26	C-10				器壁厚 1.1		石英・長石 黒雲母	⑧ハケ→ナデ ⑨		外暗茶褐色 内		
19	弥	64.46	CD-2	Ⅲ			口径 24.6		石英・長石	⑧ハケ目 ⑨ハケ→ナデ		外明灰褐色 内		
20	弥	64.85			Ⅱ下			23.8	石英・長石 黒雲母・砂粒	⑧ハケ→ナデ ⑨		外暗褐色 内		
21	弥	63.575	他	D-1			口縁部	33.4	石英・長石 黒雲母			外暗茶褐色 内		
22	弥	64.24	他		Ⅲ		口縁部	28.6		⑧ハケ→ナデ ⑨		外暗灰褐色 内暗黄褐色		
23	弥	68.54	C-1	Ⅱ				28.4	石英・長石 小礫	⑧ハケ? ⑨	普通	外明燈褐色 内	内外面共に剝落	
24	弥	64.065	他	C-2	Ⅲ			27.0	石英・長石 黒雲母	⑧ハケ目・ナデ ⑨ハケ→ナデ	良好	外茶褐色 内暗灰褐色		
25	弥	70.21	D-10	Ⅱ				22.0		⑧ハケ目 ⑨ハケ→ナデ		外暗茶褐色 内	スス付着	
26	弥	62.695	他	C-0	Ⅲ			23.2		⑧ハケ→ナデ ⑨		外暗茶褐色 内茶褐色	スス付着	
27	弥	64.07	CD-2					26.8		⑧ハケ目 ⑨ハケ→ナデ		外暗茶褐色~暗褐色 内暗褐色~暗黄褐色		
28	弥	71.97	F-24					26.0				外暗茶褐色 内		
29	弥	64.145	他	CD-2			口縁部	25.4		⑧ハケ目ミガキ ⑨ハケ→ナデ		外暗褐色~暗茶褐色 内明茶褐色		
30	弥	63.82	他	C-1	Ⅱ下		口縁部	26.4	石英・長石 黒雲母・砂粒	⑧ハケ目 ⑨剝落	普通	外暗茶褐色 内		
31	弥	69.105			Ⅱ			29.2	石英・長石 雲母	⑧ハケ→ナデ ⑨	良好	外暗黄褐色 内暗灰褐色		
32	弥	70.01	D-10					26.6				外暗茶褐色 内暗黄褐色		
33	弥	64.73	CD-2	Ⅱ下				24.5	石英・長石 黒雲母	⑧ハケ目 ⑨		外暗褐色 内暗灰褐色		
34	弥	64.48	他					28.4		⑧ハケ→ミガキ ⑨ハケ→ナデ		外暗茶褐色 内茶褐色		
35	弥	63.735	D-1	Ⅲ				26.4		⑧ハケ目 ⑨ハケ→ナデ		外暗茶褐色 内暗茶褐色		
36	弥	64.09	CD-2					31.0		⑧ハケ目 ⑨		外暗灰褐色 内暗茶褐色		
37	弥	63.85	他	CD-1			口縁部 付近	胴径 24.4	石英・長石 砂粒	⑧ミガキ ⑨ハケ→ナデ		外明灰褐色 内		
38	弥	62.65	他	C-0			口縁部	器壁厚 0.7~1.5	石英・長石 小礫	⑧ハケ目 ⑨	普通	外暗灰褐色 内暗茶褐色	内外面剝落	
39	弥	64.19	CD-2					0.6~1.5	石英・長石 黒雲母			外暗灰褐色 内暗茶褐色	内外面若干剝落	
40	弥	64.185			Ⅲ下			0.8~1.5		⑧ハケ目 ⑨	良好	外暗灰褐色 内暗茶褐色		
41	弥	64.185			Ⅱ			0.4~1.5		⑧ハケ→ナデ ⑨		外暗茶褐色 内		
42	弥	70.6	D-12	Ⅱ		胴部	胴径 27.6		石英・長石 雲母			外明燈褐色~暗黄褐色 内暗燈褐色		
43	弥	63.915	C-1	Ⅱ下				30.0			普通	外暗茶褐色 内		

第2表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
44	弥	69.20	C-1 II	甕	胴部	胴径 20.2	石英・長石 雲母	外ハケ→ナデ 内ハケ	良好	外暗茶褐色~暗黄褐色 内暗黄褐色	
45	〃	70.565 他	D-12 II	〃	〃	〃 27.0	石英・長石 黒雲母	外ミガキ 内ハケ	良好	外暗茶褐色~暗灰褐色 内茶褐色~暗灰褐色	
46	〃	70.15	D-10 II	〃	〃	〃 30.4	〃	外ミガキ 内ハケ→ナデ	〃	外明灰褐色 内暗褐色	
47	〃	70.885	D-14 III	〃	〃	〃 25.6	〃	外ハケ→ナデ 内ハケ	〃	外茶褐色 内ハケ	
48	〃	62.81 他	C-1 II下	〃	〃	〃 27.4	石英・長石 雲母	〃	〃	外暗茶褐色 内ハケ	
49	〃	64.685	CD-2 III	〃	〃	〃 26.6	石英・長石 黒雲母	外ハケ→ナデ 内ハケ目	〃	外暗灰褐色 内暗茶褐色	
50	〃	63.84	C-1 II下	〃	口縁部 付近	〃 24.8	石英・長石 黒雲母・砂粒	外ハケ目 内ハケ	普通	外暗茶褐色 内ハケ	内外面共に剝落
51	〃	70.78	D-13 II	〃	胴部	〃 28.4	石英・長石 黒雲母	外ミガキ 内粗いハケ目	良好	外黒褐色~暗茶褐色 内茶褐色	
52	〃	67.94	E-7 III	〃	〃	〃 26.8	〃	外ミガキ 内ハケ→ナデ	〃	外暗茶褐色 内暗灰褐色	
53	〃	70.64 他	D-12 II	〃	〃	〃 27.4	石英・長石 黒雲母	外ハケ目 内ハケ→ナデ	〃	外暗灰褐色 内暗茶褐色	
54	〃		IT II	〃	底部	底径 9.0	石英・長石 砂・砂粒	外粗いハケ目 内ハケ→ナデ	〃	外暗茶褐色 内暗褐色	
55	〃	70.99	D-13 III	〃	〃	〃 8.0	石英・長石 黒雲母・小礫	外ハケ→ナデ 内ハケ	〃	外暗茶褐色 内黒褐色	
56	〃	64.47	CD-2 III	〃	〃	〃 8.0	石英・長石 黒雲母	外ハケ→ナデ 内ハケ	〃	外暗灰褐色 内ハケ	
57	〃	64.275	〃 III	〃	〃	〃 7.8	石英・長石 砂	〃	〃	外暗灰褐色 内暗茶褐色	
58	〃	70.885	D-13 III	〃	〃	〃 7.4	石英・長石 小礫	〃	〃	外茶褐色 内ハケ	
59	〃	63.79	C-1 II下	〃	〃	〃 9.0	石英・長石 砂	〃	〃	外暗灰褐色 内ハケ	
60	〃	70.085	〃 III下	〃	〃	〃 8.4	石英・長石 小礫	外ミガキ 内ハケ→ナデ	〃	外茶褐色 内ハケ	
61	〃	68.645	F-6 III	〃	〃	〃 6.3	石英・長石 黒雲母	外ハケ→ナデ 内ハケ	〃	外暗灰褐色 内ハケ	
62	〃	70.845	D-12 II	〃	〃	〃	石英・長石 雲母	外ミガキ 内ハケ	〃	外暗茶褐色 内ハケ	
63	〃	64.255	CD-2 III	〃	〃	〃 5.7	石英・長石 小礫	外ハケ→ナデ 内ハケ	〃	外茶褐色 内ハケ	
64	〃	〃	C-2 II下	〃	〃	〃 6.0	石英・長石 細粒	外ハケ→ナデ 内ハケ	〃	外暗灰褐色 内暗灰褐色	
65	〃	62.84	C-0 III	〃	〃	〃 6.8	〃	外ハケ→ナデ 内ハケ	普通	外明黄褐色 内ハケ	
66	〃	62.445	〃 III	〃	〃	〃 7.6	石英・長石 砂	外ハケ→ナデ 内ハケ	良好	外暗茶褐色 内ハケ	
67	〃	64.175	CD-2 III	〃	〃	〃 7.2	石英・長石 黒雲母・砂粒	〃	〃	外暗茶褐色 内黒褐色	
68	〃	64.10	D-1 III	〃	〃	〃 8.5	石英・長石 雲母	外ハケ→ナデ 内ハケ	〃	外暗茶褐色 内ハケ	
69	〃	69.87	F-7 II	〃	〃	〃 7.0	石英・長石 小礫	外ハケ→ナデ 内ハケ	〃	外暗灰褐色 内ハケ	
70	〃	68.92	F-5 II	〃	〃	〃	石英・長石 黒雲母・砂粒	外ハケ→ナデ 内ハケ	〃	外暗茶褐色 内暗褐色	
71	〃	63.755	C-1 II下	〃	〃	〃 8.2	〃	〃	〃	外暗茶褐色 内ハケ	
72	〃	64.19	CD-2 III	〃	〃	〃 5.0	石英・長石 黒雲母・細粒	外ハケ→ナデ 内ハケ	普通	外暗茶褐色 内暗黄褐色	
73	〃	64.22	〃	〃	〃	〃	石英・長石 黒雲母	外ハケ目 内ハケ→ナデ	良好	外茶褐色 内暗黄褐色	
74	〃	64.08	CD-1	〃	〃	〃 8.2	石英・長石 小礫	外ハケ目 内ハセ→ナデ	〃	外暗茶褐色 内ハケ	
75	〃	63.66	D-1 III	〃	〃	〃 7.2	石英・長石 黒雲母	〃	〃	外暗茶褐色 内黒褐色	
76	〃	68.47	D-5 II	〃	〃	〃 8.0	石英・長石 小礫	外ハケ→ナデ 内ハケ	〃	外暗黄褐色 内ハケ	
77	〃	68.8	F-3 II	〃	〃	〃 9.4	〃	〃	〃	外暗黄褐色 内ハケ	
78	〃	70.995 他	D-13 III	〃	〃	〃 6.6	石英・長石 小礫	外ハケ目 内ハケ	〃	外暗茶褐色 内ハケ	
79	〃	64.81 他	CD-2 II下	〃	〃	〃 6.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	外ミガキ 内ハケ目	〃	外暗茶褐色 内暗灰褐色	
80	〃	62.145 他	C-0 III	壺	口縁部	口径 18.8	〃	外ミガキ 内ハケ	〃	外暗茶褐色 内ハケ	二又口縁
81	〃	68.795	D-7 III	〃	〃	〃 16.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	外ハケ→ナデ 内ハケ	普通	外明黄褐色 内ハケ	〃
82	〃	70.34	D-11 II	〃	〃	〃 13.0	石英・長石 砂	外ハケ目 内ハケ→ナデ	〃	外暗黄褐色~明黄褐色 内明黄褐色	
83	〃	70.655 他	D-12 II	〃	〃	〃 10.8	石英・角閃石	外ミガキ 内ハケ	良好	外茶褐色 内ハケ	
84	〃	70.67	〃	〃	〃	〃 24.6	石英・長石 小礫	〃	〃	外暗灰褐色 内ハケ	二又口縁

第3表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚 cm)	胎土	調整	焼成	色調	備考
85	弥	70.245	C-10 II	壺	口縁部	器壁厚 0.6	石英・長石 小礫	④ミガキ ④剝落	良好	④明茶褐色 ④	
86	〃	70.59	D-12 II	〃	〃	口径 30.7	〃	④ミガキ ④	〃	④明灰褐色 ④	二又口縁
87	〃	62.33	C-0 III	〃	〃	〃 19.8	石英・長石 黒雲母	④ミガキ・ナデ ④ハケ→ナデ	〃	④燈褐色 ④	
88	〃		F-3 イモ穴	〃	〃	器壁厚 1.3	〃	〃	〃	④明灰褐色 ④暗褐色	
89	〃	68.625	C-5 III上	〃	〃	口径 17.2	石英・長石 黒雲母・砂粒	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色 ④	
90	〃	68.63	〃 III	〃	〃	〃 15.0	〃	④ミガキ ④ハケ目	〃	④暗茶褐色 ④燈褐色	内面若干 剝落
91	〃	69.79	G-7 II	〃	頸 ~肩部	頸径 14.6	〃	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④黒褐色 ④明褐色	
92	〃	64.07 他	CD-2 III	〃	〃	〃 10.6	〃	〃	〃	④茶褐色 ④暗褐色	
93	〃	68.605 他	C-5 III上	〃	〃	〃 13.9	〃	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色 ④暗褐色	
94	〃	68.52 他	F-2 II上	〃	肩部	〃 36.4	〃	〃	〃	④暗茶褐色 ④暗黄褐色	
95	〃	62.73 他	C-1 III	〃	〃	〃 20.4	〃	④ミガキ ④ハケ目	〃	④暗茶褐色 ④暗黄褐色	
96	〃	68.94 他	CD-2 III	〃	〃	〃 38.4	石英・長石 黒雲母・小礫	④ハケ目 ④ハケ目	〃	④暗燈褐色 ④暗黄褐色	
97	〃	68.36	D-6 III上	〃	〃	〃 46.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色 ④暗褐色	
98	〃	64.25	CD-2 III	〃	〃	〃 47.2	〃	④ミガキ ④ハケ目	〃	④暗茶褐色 ④	
99	〃	64.195	CD-2 III下	〃	〃	〃 38.0	石英・長石 黒雲母	④ハケ ④ハケ→ナデ	〃	④暗褐色~明燈褐色 ④暗灰褐色	
100	〃	64.055 他	CD-2 III	〃	〃	〃 37.0	〃	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色 ④暗褐色	内面剝落
101	〃	69.39	D-1 III下	〃	〃	〃 35.4	〃	④ミガキ ④剝落	〃	④暗茶褐色 ④暗褐色	
102	〃	64.49 他	CD-2 III	〃	〃	〃 30.4	〃	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色 ④暗褐色	
103	〃	64.135 他	〃	〃	〃	〃 31.0	〃	④ミガキ	普通	④茶褐色~暗茶褐色	内面剝落
104	〃	64.1 他	C-1 II	〃	〃	〃 27.4	〃	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色 ④暗黄褐色	
105	〃	64.14	CD-2 III	〃	口縁 ~頸部	口径 16.4	〃	④粗いハケ目 ④ハケ→ナデ	良好	④暗褐色~暗黄褐色 ④暗黄褐色	
106	〃	64.08	C-2 II下	〃	〃	〃 13.8	〃	④ハケ→ナデ ④	〃	④明茶褐色 ④暗黄褐色	
107	〃	64.42	〃 III	〃	〃	〃 11.4	〃	④ミガキ ④	〃	④暗茶褐色 ④	
108	〃	68.825	F-2 III下	〃	〃	〃 11.0	〃	④ミガキ ④	〃	④黒褐色~暗茶褐色 ④暗茶褐色	
109	〃	69.00	G-5 II	〃	〃	〃	石英・長石 雲母	④粗いハケ目 ④ハケ→ナデ	〃	④明茶褐色~暗黄褐色 ④黒褐色~暗褐色	暗文
110	〃	68.735	F-5 II	〃	〃	〃 11.9	〃	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④暗黄褐色 ④	
111	〃	68.96	C-5 III上	〃	〃	〃 12.6	〃	④ハケ目・ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④明茶褐色 ④	
112	〃	70.58 他	D-12 II	〃	〃	〃 15.4	石英・長石 黒雲母	④ミガキ ④	〃	④明茶褐色 ④茶褐色	
113	〃	68.84 他	C-1 III	〃	〃	〃 15.2	石英・長石 雲母	④ハケ目・ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④明茶褐色 ④	
114	〃	一括	D-2 II	〃	〃	〃 9.5	石英・長石 黒雲母	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④茶褐色 ④暗茶褐色	
115	〃	64.46	CD-2 III	〃	〃	〃 17.2	石英・長石 黒雲母・小礫	④ハケ→ナデ ④	〃	④暗黄褐色 ④	
116	〃	64.82	〃 II下	〃	〃	〃 20.4	石英・長石 黒雲母・砂粒	④ハケ目 ④	〃	④茶褐色 ④暗茶褐色	内外面若 干剝落
117	〃		G-3 イモ穴	〃	〃	〃 7.2	石英・長石 黒雲母	④ハケ→ナデ ④	〃	④暗茶褐色 ④	
118	〃	68.62	F-2 III	〃	頸部	頸径 9.6	〃	〃	〃	〃	
119	〃	68.50	D-2 II下	〃	〃	〃 10.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色 ④	
120	〃	63.855	CD-1 III下	〃	〃	〃 13.9	〃	④ハケ→ナデ ④	〃	④暗茶褐色 ④暗茶褐色	
121	〃	64.46 他	〃 III	〃	肩部	〃 17.4	石英・長石 黒雲母・細粒	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	④明茶褐色 ④暗灰褐色	
122	〃	64.05	〃 III	〃	〃	〃 11.8	石英・長石 黒雲母・砂粒	④ミガキ ④	〃	④暗茶褐色 ④	
123	〃	68.86	D-6 III	〃	〃	〃 10.0	石英・長石 雲母・細粒	④ハケ目 ④ミガキ	〃	④暗黄褐色~明茶褐色 ④暗褐色~明茶褐色	
124	〃	64.245	CD-2 III	〃	底部	底径 7.8	石英・長石 雲母	④ミガキ ④ハケ→ナデ	〃	〃	
125	〃	63.775 他	C-1 II下	〃	〃	〃 7.0	石英・長石 雲母・小礫	④ハケ→ナデ	普通	④暗褐色	内面剝落

第4表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
126	弥	63.735	C-1 III	壺	底部	底径 6.4	石英・長石 雲母・小礫	⑨ハケ→ナデ	普通	⑨暗褐色～暗茶褐色	内面剥落
127	〃	63.825	C-1 II下	〃	〃	〃 5.0	石英・長石 黒雲母・小礫	⑨	〃	⑨暗茶褐色	〃
128	〃	64.685	CD-2 III	〃	〃	〃 6.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	⑨ミガキ	〃	⑨	〃
129	〃	64.13	〃	〃	〃	〃 8.0	石英・長石 雲母	⑨ハケ→ナデ	良好	⑨暗茶褐色 ⑨暗褐色	〃
130	〃	63.78	C-1 II	〃	〃	〃 7.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	〃	〃	⑨明茶褐色 ⑨暗灰褐色	〃
131	〃	64.19	CD-2 III	〃	〃	〃 7.0	〃	〃	普通	⑨暗茶褐色	内面剥落
132	〃	64.02 他	〃	〃	〃	〃 3.0	〃	⑨ミガキ ⑨ハケ→ナデ	良好	⑨黒褐色～暗茶褐色 ⑨暗褐色	〃
133	〃	70.64	D-12 III	〃	〃	〃 6.2	石英・長石 雲母	⑨ミガキ	〃	⑨黒褐色～暗茶褐色 ⑨暗黄褐色	〃
134	〃	64.225	C-1 II下	〃	〃	〃 6.6	石英・長石 雲母・砂粒	⑨ハケ→ナデ	〃	⑨黒褐色 ⑨暗灰褐色	〃
135	〃	68.685	C-1 II	〃	〃	〃 5.4	石英・長石 黒雲母・砂粒	〃	〃	⑨暗茶褐色 ⑨明茶褐色	⑨スス付着
136	〃	62.575	C-0 III	〃	〃	〃 6.4	〃	〃	〃	〃	〃
137	〃	64.345	C-2 II下	〃	〃	〃 9.0	石英・長石 黒雲母・小礫	⑨ハケ目	良好	⑨暗茶褐色 ⑨	剥落が激しい
138	〃	64.28 他	CD-2 III	〃	〃	〃 5.2	〃	⑨ミガキ ⑨剥落	〃	⑨暗褐色 ⑨暗茶褐色	〃
139	〃	64.525	〃	〃	〃	〃 6.6	石英・長石 小礫	⑨ハケ→ミガキ	〃	⑨暗褐色～明褐色 ⑨明褐色	〃
140	〃	64.245	D-2 II下	〃	〃	〃 7.2	石英・長石 黒雲母・小礫	⑨ハケ目	〃	⑨暗茶褐色 ⑨	〃
141	〃	65.21 他	CD-3 III	〃	〃	〃 5.0	石英・長石 小礫	⑨ミガキ ⑨ハケ目	〃	⑨茶褐色 ⑨暗褐色	〃
142	〃	64.24	〃	〃	〃	〃 6.0	石英・長石 雲母・小礫	⑨ハケ目	〃	⑨暗褐色～暗茶褐色 ⑨暗茶褐色	〃
143	〃	64.455	〃	〃	〃	〃 5.6	石英・長石 小礫	⑨ミガキ ⑨ハケ目	〃	⑨暗褐色～茶褐色 ⑨明茶褐色	〃
144	〃	64.05	〃 II下	〃	〃	〃 5.4	石英・長石 黒雲母	⑨ハケ目	〃	⑨暗茶褐色 ⑨暗茶褐色	〃
145	〃	63.865	D-1 III	〃	〃	〃 5.8	石英・長石 黒雲母	⑨ミガキ ⑨ハケ目	〃	⑨茶褐色 ⑨暗黄褐色	〃
146	〃	63.666	〃	〃	〃	〃 6.2	石英・長石 雲母	⑨ハケ目	〃	⑨灰褐色 ⑨	〃
147	〃	65.04	CD-2 II下	〃	〃	〃 12.0	石英・長石 黒雲母	⑨ミガキ ⑨剥落	〃	⑨茶褐色 ⑨	〃
148	〃	63.795	C-1 II下	〃	〃	〃 6.4	〃	⑨ハケ→ナデ ⑨粗いハケ目	〃	⑨暗褐色～茶褐色 ⑨茶褐色	〃
149	〃	69.57	F-6 II	鉢	完形	口径部 口径 28.4 器高 15.8	〃	⑨ハケ→ナデ	〃	⑨暗茶褐色～暗黄褐色 ⑨暗茶褐色	〃
150	〃	64.37	〃 II下	甕	口径部	口径 31.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	⑨ミガキ ⑨ハケ→ナデ	〃	⑨暗茶褐色 ⑨	〃
151	〃	68.565 他	C-5 III他	〃	〃	〃 27.2	石英・長石 雲母・細粒	⑨ハケ→ナデ	〃	⑨黒褐色～暗褐色 ⑨明茶褐色	スス付着
152	〃	69.71	F-7 II	〃	〃	〃 27.7	石英・長石 黒雲母	⑨ハケ→ナデ	〃	⑨暗茶褐色 ⑨茶褐色	〃
153	〃	70.585	D-13 II	〃	〃	〃 26.8	〃	〃	〃	⑨明茶褐色 ⑨	〃
154	〃	69.7	F-7 II	〃	〃	〃 28.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	〃	〃	⑨茶褐色 ⑨	〃
155	〃	64.33	CD-2 II下	〃	〃	〃 27.8	石英・長石 黒雲母	⑨ミガキ ⑨ハケ→ナデ	〃	⑨明茶褐色 ⑨茶褐色	〃
156	〃	70.145	F-7 II	〃	〃	〃 23.5	石英・長石 黒雲母・小礫	〃	〃	⑨黒褐色 ⑨暗茶褐色	〃
157	〃	〃	F-2 表	〃	〃	〃 32.0	石英・長石 黒雲母	⑨ハケ目 ⑨ハケ→ナデ	〃	⑨茶褐色 ⑨	〃
158	〃	70.035	G-6 II	〃	〃	〃 13.8	石英・長石 黒雲母・小礫	⑨ミガキ ⑨ハケ→ナデ	〃	⑨黒褐色～暗茶褐色 ⑨明茶褐色	〃
159	〃	70.43	D-11 II	〃	〃	〃 15.6	石英・長石 黒雲母・砂粒	〃	〃	⑨暗茶褐色 ⑨黒褐色	〃
160	〃	〃	D-14, 15表	〃	〃	〃 15.6	石英・長石 黒雲母	〃	〃	⑨明茶褐色 ⑨暗黄褐色	〃
161	〃	68.365	D-5 II	〃	〃	〃 19.7	〃	〃	〃	⑨黒褐色～暗黄褐色 ⑨暗黄褐色	〃
162	〃	〃	D-14, 15表	〃	〃	器壁厚 0.45~0.6	石英・長石 黒雲母	〃	〃	⑨黒褐色 ⑨暗黄褐色	〃
163	〃	68.795	D-1 II	〃	〃	〃 0.85	石英・長石 黒雲母・砂粒	⑨ハケ→ナデ	〃	⑨暗黄褐色～暗茶褐色 ⑨明燈褐色	スス付着
164	〃	64.115	CD-2 III	〃	〃	口径 22.6	石英・長石 黒雲母	⑨ミガキ ⑨ハケ→ナデ	〃	⑨茶褐色 ⑨暗茶褐色	〃
165	〃	70.985	D-13 III	〃	〃	〃 23.6	石英・長石 黒雲母・小礫	⑨ハケ ⑨ハケ→ナデ	〃	⑨暗茶褐色 ⑨暗灰褐色	スス付着
166	〃	68.7	D-1 II	〃	〃	〃 24.0	石英・長石 黒雲母	⑨ハケ目 ⑨ハケ→ナデ	〃	⑨暗茶褐色 ⑨	〃

第5表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) cm	胎土	調整	焼成	色	備考
167	弥	64.32	CD-2 III	甕	口縁部	口径 24.0	石英・長石 雲母	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	良好	④暗燈褐色 ⑤暗黄褐色	
168	〃	69.105 他	D-1 II	〃	〃	〃 18.8	〃	④ハケ→ナデ	〃	④明茶褐色	
169	〃	68.465	D-5 II下	〃	〃	〃 14.4	石英・長石 黒雲母・細粒	〃	〃	④暗茶褐色～暗褐色 ⑤暗黄褐色	
170	〃	63.96 他	CD-2 III	小型壺	口縁部 ～胴部	口径 8.8 胴回り 12.8	〃	〃	〃	④明茶褐色	
171	〃	64.915	D-3 II下	甕	口縁部	口径 12.2	石英・長石 雲母	④ハケ→ナデ	良好	④黒褐色～暗燈褐色 ⑤暗茶褐色	
172	〃	69.97	G-6 II	〃	〃	〃 15.4	〃	〃	〃	④明茶褐色 ⑤暗茶褐色	
173	〃	70.08	D-9 III	碗	〃	〃 13.0	〃	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	〃	④明茶褐色～暗茶褐色	
174	〃	69.565	E-7 III	小型甕	〃	〃 15.5	〃	〃	〃	④暗黄褐色 ⑤明茶褐色	
175	〃		D-5 II	小型碗	〃	〃 6.1	〃	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	〃	④茶褐色	
176	〃	68.145	C-4 IV上	甕	〃	〃 11.6	〃	④ハケ→ナデ	〃	④黒褐色～暗茶褐色 ⑤暗黄褐色	
177	〃	69.905	G-6 II	小型壺	〃	〃 7.0	石英・長石 黒雲母	〃	〃	④茶褐色	
178	〃	69.77		円座り 研削土器	〃	〃 6.3	石英・長石 雲母	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	〃	④茶褐色 ⑤暗黄褐色	
179	〃		C-23 表	手捏ね 土器	完形	口径 5.3 高さ 5.2	石英・長石 黒雲母	④ユビナデ ⑤ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色	
180	〃	63.92	CD-1 III下	蓋	〃	径 6.1	〃	〃	〃	④暗茶褐色 ⑤暗灰褐色	
181	〃	68.87	F-5 II	壺	底部	底径 3.0	〃	〃	〃	④暗茶褐色 ⑤明茶褐色	
182	〃	72.485	C-24 表	〃	〃	〃 2.0	石英・長石 雲母	〃	〃	④明燈褐色 ⑤暗褐色	
183	〃	64.195	CD-2 III下	〃	胴部	器壁厚 0.7	〃	④ミガキ	〃	④茶褐色 ⑤暗茶褐色	円形 貼付文
184	〃	64.295	〃 III	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	〃	④暗茶褐色 ⑤明茶褐色	〃
185	〃	68.96	F-4 II	〃	口縁部	口径 15.8	石英・長石 黒雲母・砂粒	〃	〃	④茶褐色	楕圓 液状文
186	〃	70.6	F-7 III	〃	〃	〃 17.2	〃	④ハケ→ナデ ⑤ミガキ	〃	④暗茶褐色～暗茶褐色 ⑤暗茶褐色	スス付着
187	〃	63.98 他	CD-2 III	〃	〃	〃 15.6	〃	④ハケ	普通	④暗茶褐色～明茶褐色	〃
188	〃	64.28 他	〃	〃	〃	〃 16.4	〃	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	良好	④茶褐色 ⑤明燈褐色	〃
189	〃	70.71	D-13 II	〃	〃	器壁厚 0.7	〃	④ハケ→ナデ	〃	④茶褐色 ⑤暗黄褐色	〃
190	〃	69.98	G-7 II	〃	〃	〃 0.4	〃	〃	〃	④明褐色 ⑤暗黄褐色	〃
191	〃	63.855	D-1 II下	〃	〃	〃 0.7	〃	〃	〃	④茶褐色	〃
192	〃	64.73	CD-2 II下	〃	〃	口径 14.6	〃	〃	〃	④明茶褐色 ⑤明燈褐色	〃
193	〃	64.20	D-2 III	〃	〃	器壁厚 0.6	〃	〃	〃	④茶褐色	〃
194	〃	68.74	F-4 III上	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	〃	④暗茶褐色 ⑤茶褐色	〃
195	〃	68.475	E-2 III下	〃	〃	口径 17.0	〃	④ミガキ	〃	④茶褐色 ⑤暗茶褐色	〃
196	〃	64.035	CD-2 III下	〃	〃	器壁厚 0.9	〃	④ハケ→ナデ ⑤ミガキ	〃	④茶褐色 ⑤暗黄褐色	〃
197	〃		I-4 表	〃	〃	〃 0.7	〃	④ハケ→ナデ	〃	④茶褐色	〃
198	〃	70.21	D-10 II	〃	〃	〃 1.15	石英・長石 黒雲母	④ミガキ	〃	④明褐色 ⑤暗黄褐色	〃
199	〃	68.69	F-7 III	〃	〃	〃 0.9	石英・長石 黒雲母・砂粒	〃	〃	④暗灰褐色 ⑤暗黄褐色	〃
200	〃	69.85	G-6 II	〃	〃	〃 0.7~1.1	石英・長石 雲母	④ミガキ	〃	④暗茶褐色 ⑤暗褐色	スス付着
201	〃	68.60	F-6 II	〃	〃	〃 0.75	石英・長石 黒雲母	④ハケ→ナデ	〃	④暗黄褐色 ⑤暗黄褐色	〃
202	〃	64.135	CD-1 III	〃	〃	〃 0.8	石英・長石 黒雲母・砂粒	〃	〃	④茶褐色 ⑤暗黄褐色	〃
203	〃	64.815	〃	〃	〃	口径 12.0	〃	④ミガキ	〃	④茶褐色 ⑤暗茶褐色	凹線文系
204	土		F-6 中世柱穴	土師器	完形	口径 8.1 高さ 1.6	〃	ナデ	〃	黄茶褐色	〃
205	〃		〃	〃	〃	口径 9.5 高さ 1.8	〃	〃	〃	〃	〃

## 第Ⅳ章 中・近世の調査

### 第1節 調査の概要

近世から中世に該当する遺構・遺物は、縄文時代などに比較すると非常に少なく断片的であり、機能や時期が不明なものが多い。

近世から中世に該当する遺構は、古道・溝状遺構・掘立柱建物等が検出された。

古道は、F～G 5区付近に南北方向に検出され、幅約1.5mを測る比較的しっかりした道路跡である。おそらく、この地域のこの時期の幹線道路と想定される。そのほかに、溝状遺構が検出されている。農地整備や開畑のため途中が削平を受け断片的な残存であるが、小道としての機能が考えられる。

掘立柱建物は、3棟検出された。2間×4間（1号掘立柱建物跡）の規模のものと、2間×3間（2号・3号掘立柱建物跡）に底がつくタイプがある。2号と3号掘立柱建物跡は、柱穴などの直接の切り合いはみられないが、同場所に重複して検出されている。また、2号掘立柱建物跡のP20からは、土師器の完形品が2個重なって出土している。儀礼的なものか、注目される資料である。

### 第2節 遺構

近世から中世に該当する遺構は、古道・溝状遺構・掘立柱建物等が検出された。いずれも、時期は定かではないが、中・近世のいずれかに該当するものである。

#### (1) 古道（第23図）

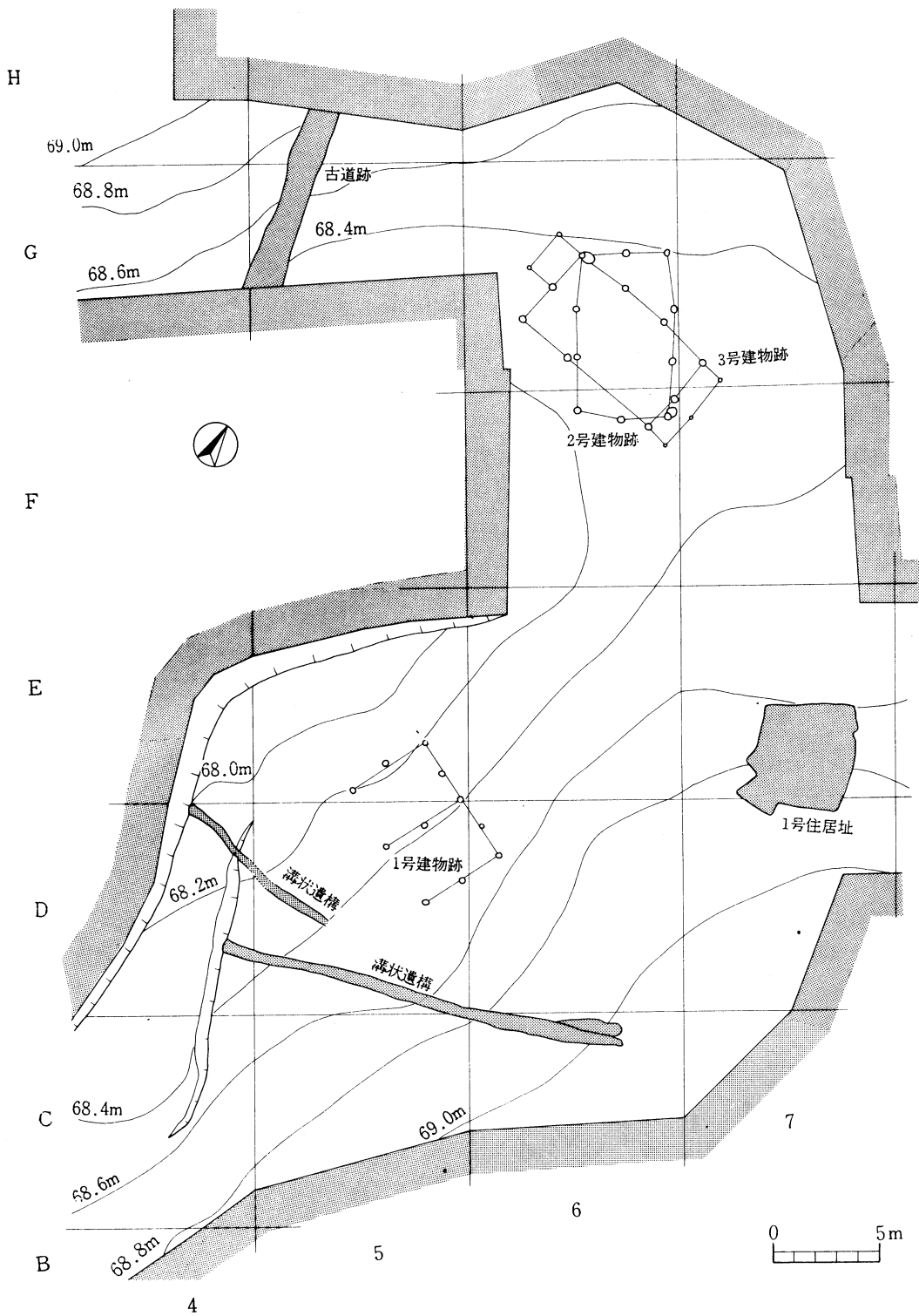
古道は、F～G 5区に南北に向いた方向で検出されている。埋土には、表土下のⅡ層（黒色土層）が混入している。幅約1.5mを測る比較的しっかりした道路跡である。おそらく、この地域のこの時期の幹線道路と想定される。

#### (2) 溝状遺構（第24図）

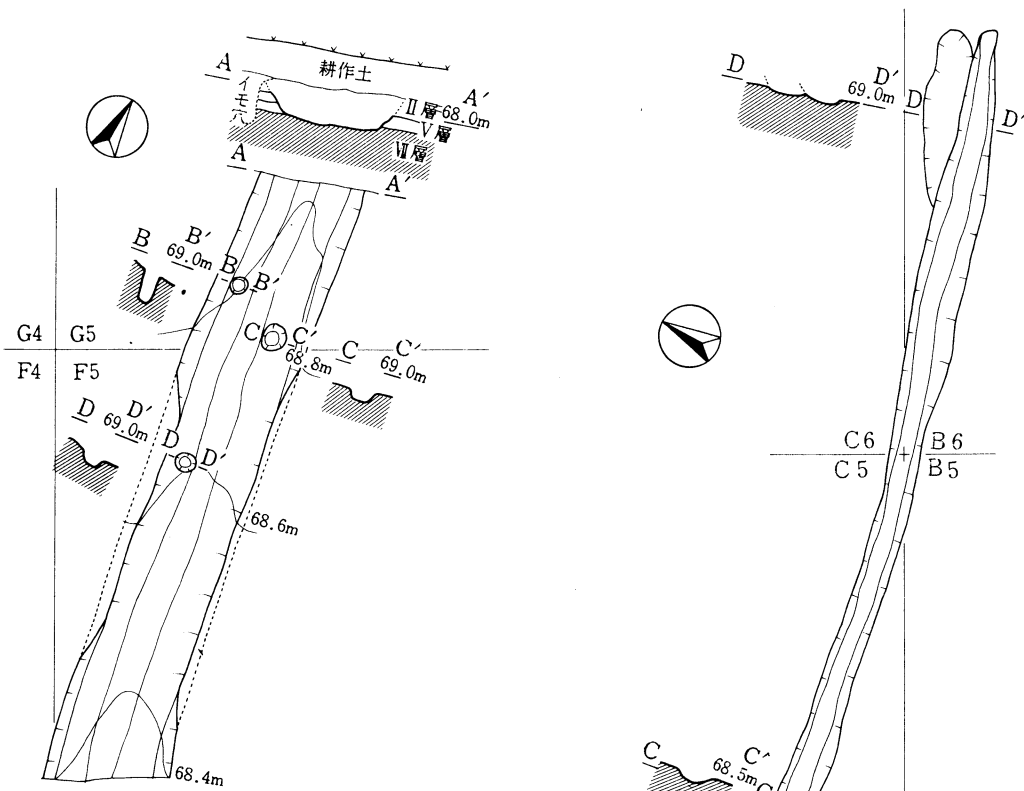
溝状遺構は、CD 5～6区にかけて検出されている。埋土には、Ⅱ層（黒色土層）が混入している。幅40cm～80cmの幅狭い溝状の落ち込みであるが、小道として利用されていた可能性も考えられる。しかし、開拓や農地整備のため途中が削平を受け断片的な残存である。

#### (3) 掘立柱建物跡

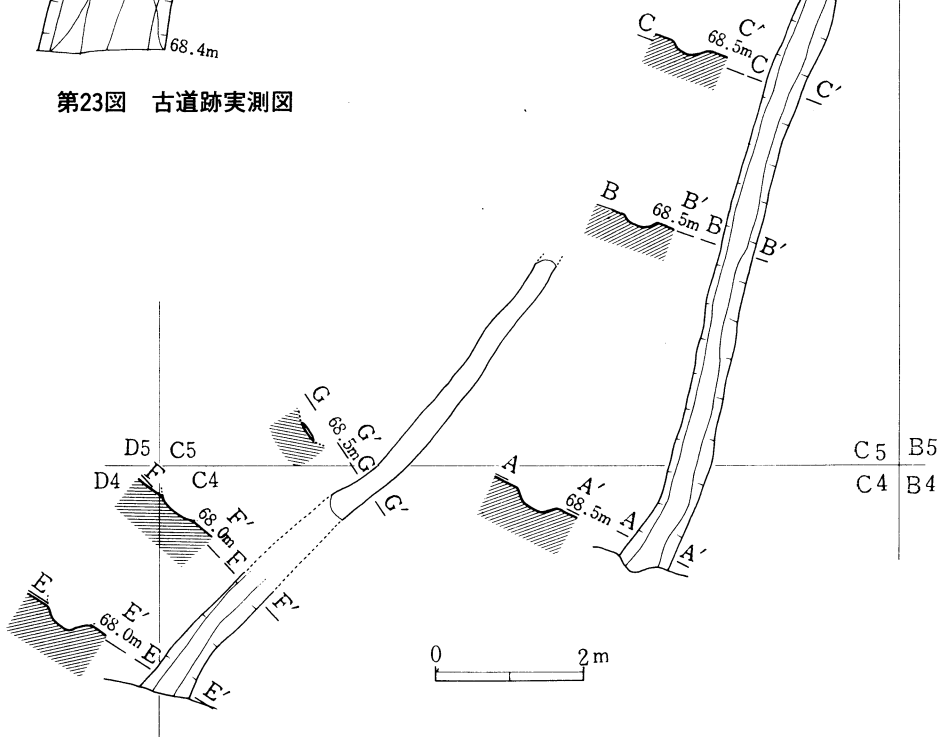
掘立柱建物跡は、3棟検出された。基本的には2間×4間と2間×3間のタイプであるが、柱間の数や底の有無など、形態はいずれも異なっている。柱穴の埋土には、Ⅱ層に該当する黒



第22図 中～近世遺構配置図



第23図 古道跡実測図



第24図 溝状遺構実測図



色土が混入するが、時期は定かではない。ただ、3号掘立柱建物跡の柱穴のP<sub>20</sub>に土師器が二個重なって出土しており、貴重な時期の決め手となっている。

### 1. 1号掘立柱建物跡 (第25図)

1号掘立柱建物跡は、C5区とD5区に検出された。2号や3号掘立柱建物跡の略南方向に位置している。

掘立柱建物跡は基本的には2間×4間の規模で、主軸(長軸)をN-65°-Wの方向を向いている。掘立柱建物跡の形態は、西側の桁行柱間が二本欠けるもので、西側の桁行間は2間となっている。

各柱穴は、径約25cm~35cmの範囲の小規模なものである。

柱穴位置での建物規模は、次の通りである。

略南側の梁間間(P<sub>1</sub>-P<sub>9</sub>)は404cmで、北側の梁間間(P<sub>5</sub>-P<sub>11</sub>)は403cmとほぼ等距離を測る。しかし、中央の梁間間(P<sub>3</sub>-P<sub>10</sub>)は411cmを測り、若干長く中膨らみとなっている。東側の桁行間(P<sub>1</sub>-P<sub>5</sub>)は636cmで、西側の桁行間(P<sub>9</sub>-P<sub>11</sub>)は640cmとほぼ等距離を測る。しかし、中央の桁行間(P<sub>6</sub>-P<sub>8</sub>)は666cmを測り、若干長く中膨らみとなっている。このように、ほぼ四隅は、均整な柱穴の配置がおこなわれた建物跡である。

柱間の計測数値は、南側の梁間柱間はP<sub>1</sub>-P<sub>6</sub>=205cm、P<sub>6</sub>-P<sub>9</sub>=201cmを測る。中央はP<sub>3</sub>-P<sub>7</sub>=207cm、P<sub>7</sub>-P<sub>10</sub>=205cmを測り、北側はP<sub>5</sub>-P<sub>8</sub>=204cm、P<sub>8</sub>-P<sub>11</sub>=200cmを測る。なお、梁間柱間の平均値は、203.66cmとなる。

桁行柱間は、東側はP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>=164cm、P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>=151cm、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>=163cm、P<sub>4</sub>-P<sub>5</sub>=160cmを測り、中央はP<sub>6</sub>-P<sub>7</sub>=347cm、P<sub>7</sub>-P<sub>8</sub>=320cmを測り、西側はP<sub>9</sub>-P<sub>10</sub>=315cm、P<sub>10</sub>-P<sub>11</sub>=325cmを測る。西側に対応した桁行柱間の平均値は、323.83cmを測る。

以上が、1号掘立柱建物跡の柱穴の配置規模であるが、ほぼ均整な柱穴の配列であることが考えられる。しかし、1号掘立柱建物跡は、西側の桁行柱間が1本ずつ欠けるという特殊な柱配列の建物である。

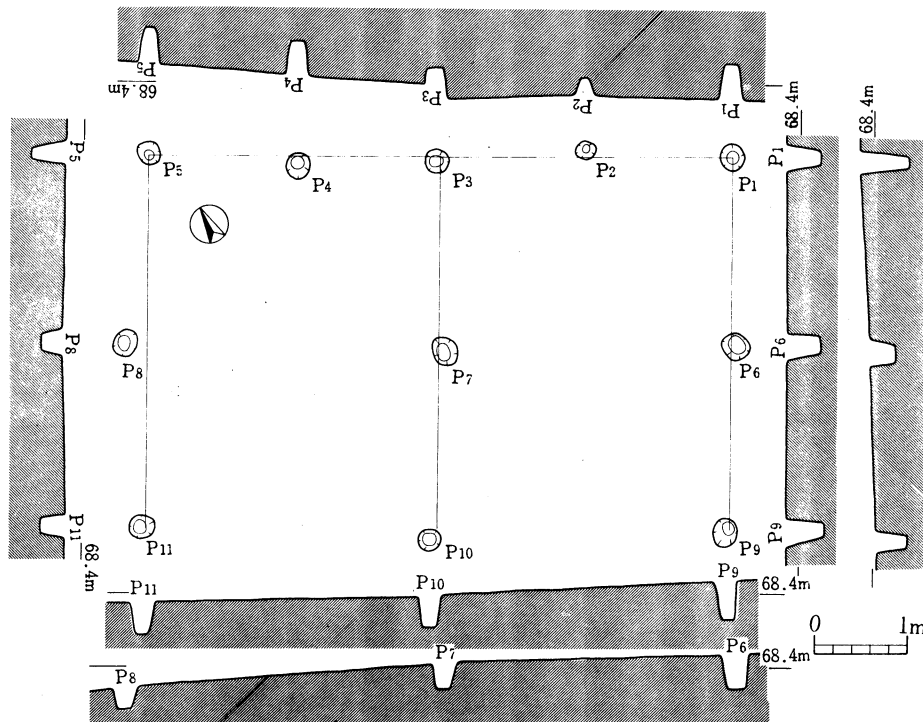
### 2. 2号掘立柱建物跡 (第26図)

2号掘立柱建物跡は、E6区とF6区に検出された。1号掘立柱建物跡の略北方向に位置し、3号掘立柱建物跡とは重なっている。

掘立柱建物跡は2間×3間の規模で、主軸(長軸)をN-28°-Wの方向を向いている。

各柱穴は、径約25cm~40cmの範囲の小規模なものである。

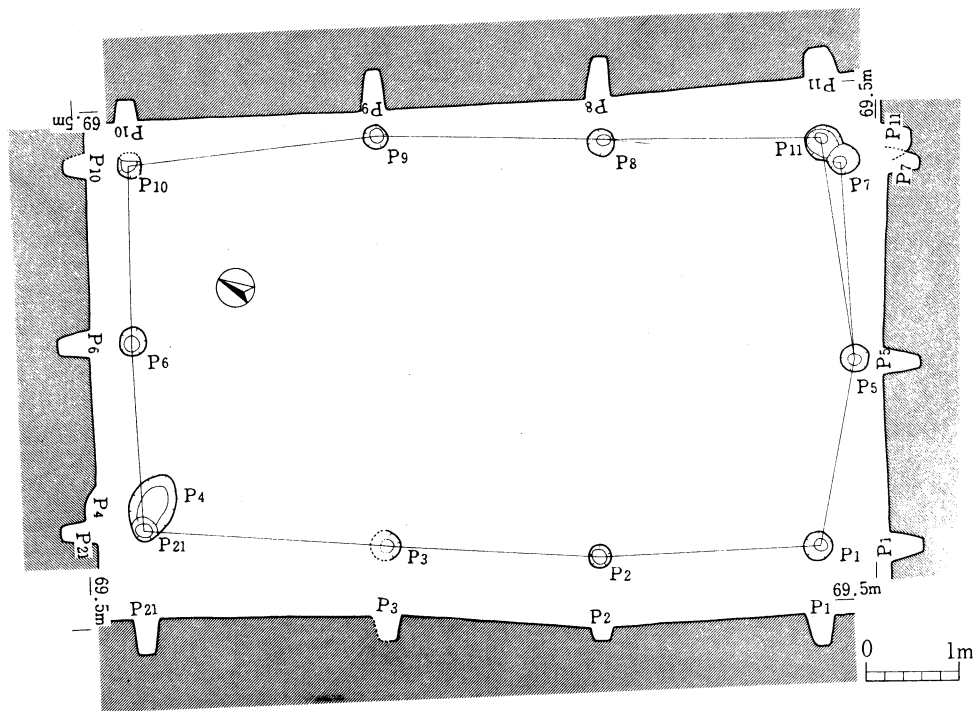
柱穴位置での建物規模は、次の通りである。なお、柱穴P<sub>7</sub>とP<sub>11</sub>は重複しており、立替えの可能性が考えられる。



第25図 1号掘立柱建物実測図

第6表 掘立柱建物1号一覧表

建物跡	1号		P	長径×短径×深さ (level)	P	長径×短径×深さ (level)
主軸方位	N-65°-W		1	28×25×37 (67.87)	10	25×24×34 (68.03)
出土区	C5、D5		2	29×26×36 (67.96)	11	32×26×42 (68.12)
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	28×27×53 (68.03)	備考
$P_1 - P_5 = 205$ $P_6 - P_8 = 201$	$P_1 - P_8 = 404$	$P_1 - P_2 = 164$ $P_2 - P_3 = 151$ $P_1 - P_3 = 314$ $P_2 - P_4 = 163$ $P_1 - P_5 = 160$ $P_3 - P_5 = 322$	$P_1 - P_3 = 636$	4	24×20×18 (68.34)	
$P_2 - P_7 = 207$ $P_7 - P_{10} = 205$				5	30×27×37 (68.19)	
$P_5 - P_8 = 204$ $P_8 - P_{11} = 200$	$P_5 - P_{11} = 403$	$P_6 - P_7 = 347$ $P_7 - P_8 = 320$	$P_8 - P_8 = 666$	6	30×25×23 (67.95)	
				7	34×27×28 (68.17)	
		$P_9 - P_{10} = 315$ $P_{10} - P_{11} = 325$	$P_9 - P_{11} = 640$	8	32×30×37 (68.18)	
				9	29×25×27 (67.95)	



第26図 2号掘立柱建物実測図

第7表 掘立柱建物2号一覽表

建物跡	2号			P	長径×短径×深さ (level)	P	長径×短径×深さ (level)
主軸方位	N-28°-W			1	32×32×35 (69.00)	9	28×25×44 (69.17)
出土区	E 6区、F 65			2	26×24×15 (69.15)	10	30×26×24 (69.38)
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	33×28×28 (69.25)	11	40×38×32 (69.12)
P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> =205 P <sub>5</sub> -P <sub>7</sub> =216 P <sub>8</sub> -P <sub>11</sub> =244	P <sub>1</sub> -P <sub>7</sub> =404 P <sub>1</sub> -P <sub>11</sub> =443	P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> =240 P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> =230 P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> =264	P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> =732	4	30×27×39 (69.2)	備 考	
	P <sub>2</sub> -P <sub>5</sub> =453		P <sub>5</sub> -P <sub>8</sub> =782	5	31×30×41 (69.02)		
	P <sub>2</sub> -P <sub>5</sub> =453		P <sub>5</sub> -P <sub>8</sub> =782	6	30×28×34 (69.24)		
	P <sub>2</sub> -P <sub>5</sub> =453		P <sub>5</sub> -P <sub>8</sub> =782	7	36×32×37 (69.03)		
P <sub>4</sub> -P <sub>8</sub> =204 P <sub>4</sub> -P <sub>10</sub> =195	P <sub>4</sub> -P <sub>10</sub> =397	P <sub>7</sub> -P <sub>5</sub> =247 P <sub>11</sub> -P <sub>8</sub> =220 P <sub>8</sub> -P <sub>5</sub> =206 P <sub>8</sub> -P <sub>10</sub> =215	P <sub>7</sub> -P <sub>10</sub> =769 P <sub>11</sub> -P <sub>10</sub> =750	8	31×29×43 (69.13)		

略西側の梁間間 ( $P_1-P_{11}$ ) は443cmで、東側梁間間 ( $P_4-P_{10}$ ) は397cmと西側が長い距離を測る。北側の桁行間 ( $P_1-P_4$ ) は 732cmで、南の桁行間 ( $P_{11}-P_{10}$ ) は 750cmと南側が若干長い。しかし、中央の桁行間 ( $P_5-P_6$ ) は 782cmを測り、若干長く中膨らみとなっている。このように、若干いびつな柱穴の配置がおこなわれた建物跡である。

柱間の計測数値は、西側の梁間柱間は  $P_1-P_5=205\text{cm}$ 、 $P_5-P_{11}=244\text{cm}$ を測る。東側は  $P_4-P_6=204\text{cm}$ 、 $P_6-P_{10}=195\text{cm}$ を測る。なお、梁間柱間の平均値は、212cmとなる。

桁行柱間は、北側は  $P_1-P_2=240\text{cm}$ 、 $P_2-P_3=230\text{cm}$ 、 $P_3-P_4=264\text{cm}$ を測り、南側は  $P_{11}-P_8=220\text{cm}$ 、 $P_8-P_9=216\text{cm}$ 、 $P_9-P_{10}=215\text{cm}$ を測る。桁行柱間の平均値は、230.83cmを測る。

以上が、2号掘立柱建物跡の柱穴の配置規模であるが、若干いびつな柱穴の配列であることが考えられる。

### 3. 3号掘立柱建物跡 (第28図)

3号掘立柱建物跡は、EF6区とEF7区に検出された。1号掘立柱建物跡の略北方向に位置し、2号掘立柱建物跡とは重なっている。

掘立柱建物跡は2間×3間の規模で、両梁間には庇が付けられる。主軸(長軸)をN-78°-Wの方向を向いている。なお、柱穴 $P_{20}$ の埋土中から、土師器が二個重なった状態で出土した。建物の時期を決める重要な手掛かりとなる。

各柱穴は、径約25cm~35cmの範囲の小規模なものである。

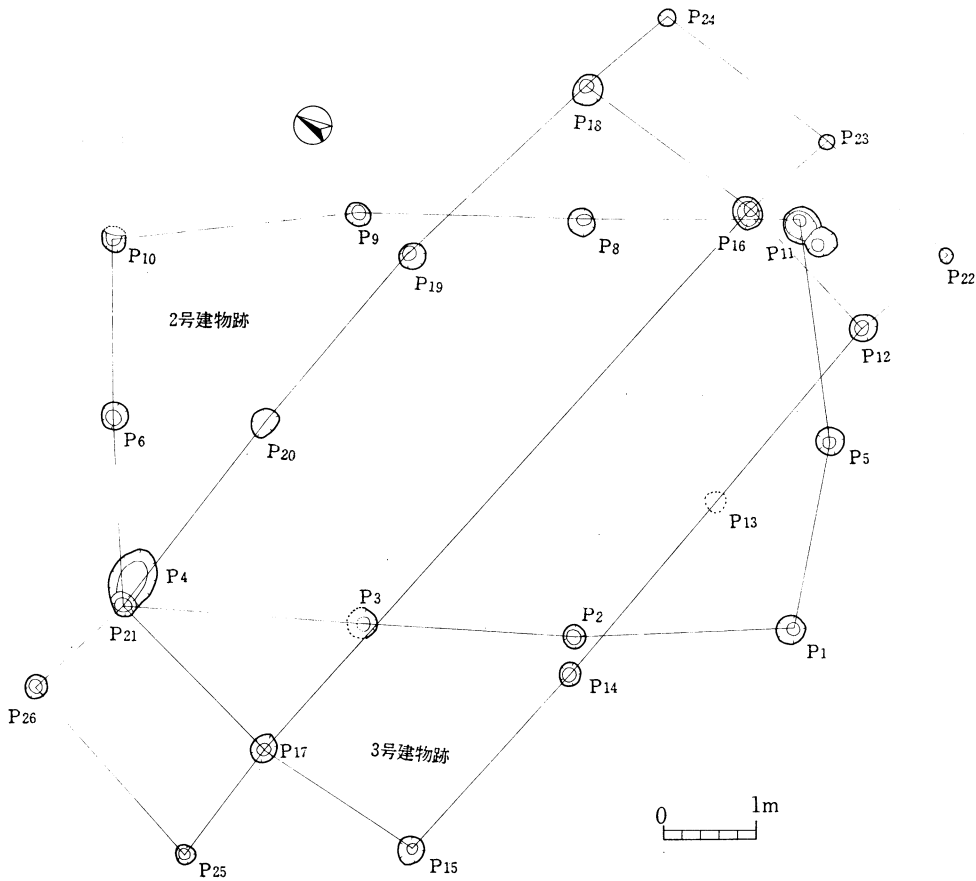
柱穴位置での建物規模は、次の通りである。

略南側の梁間間 ( $P_{12}-P_{18}$ ) は 400cmで、北側梁間間 ( $P_{15}-P_{21}$ ) は 412cmと北側が若干長い距離を測る。西側の桁行間 ( $P_{12}-P_{15}$ ) は 745cmで、東の桁行間 ( $P_{18}-P_{21}$ ) は756cmと東側が若干長い、しかし、中央の桁行間 ( $P_{16}-P_{17}$ ) は 790cmを測り、若干長く中膨らみとなっている。このように、若干いびつな柱穴の配置がおこなわれた建物跡である。

柱間の計測数値は、南側の梁間柱間は  $P_{12}-P_{16}=177\text{cm}$ 、 $P_{16}-P_{18}=225\text{cm}$ を測る。北側は  $P_{15}-P_{17}=195\text{cm}$ 、 $P_{17}-P_{21}=220\text{cm}$ を測る。なお、梁間柱間の平均値は、204.25cmとなる。

桁行柱間は、西側は  $P_{12}-P_{13}=247\text{cm}$ 、 $P_{13}-P_{14}=247\text{cm}$ 、 $P_{14}-P_{15}=255\text{cm}$ を測り、東側は  $P_{18}-P_{19}=265\text{cm}$ 、 $P_{19}-P_{20}=243\text{cm}$ 、 $P_{20}-P_{21}=252\text{cm}$ を測る。桁行柱間の平均値は、251.50cmを測る。

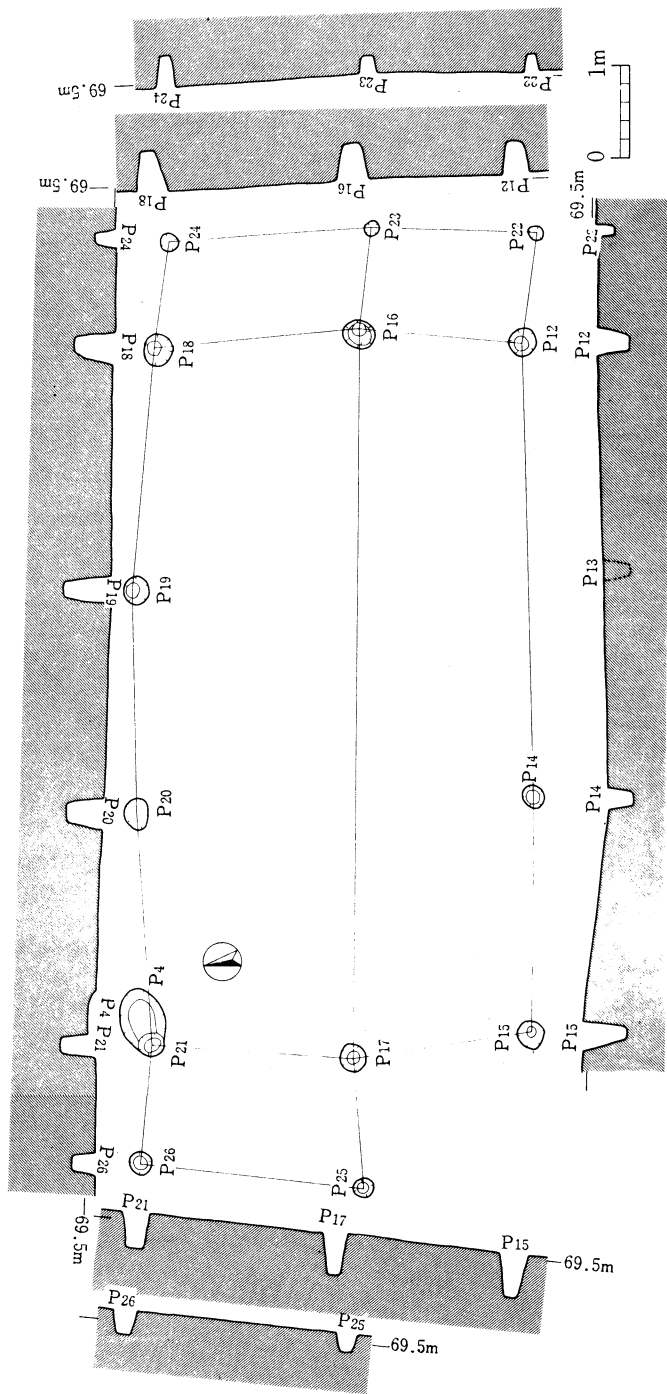
その他に3号掘立柱建物跡には両梁間に庇が付く。南側の庇は、 $P_{12}-P_{22}=122\text{cm}$ 、 $P_{16}-P_{23}=111\text{cm}$ 、 $P_{18}-P_{24}=116\text{cm}$ を測る。南側の庇の平均値は、116.3cmを測る。北側の庇は、 $P_{17}-P_{25}=143\text{cm}$ 、 $P_{21}-P_{26}=131\text{cm}$ を測る。北側の庇の平均は137.0cmを測る。このように、北側の庇が南側の庇よりも若干長い。



第27図 2号・3号掘立柱建物配置図

第8表 掘立柱建物3号一覽表

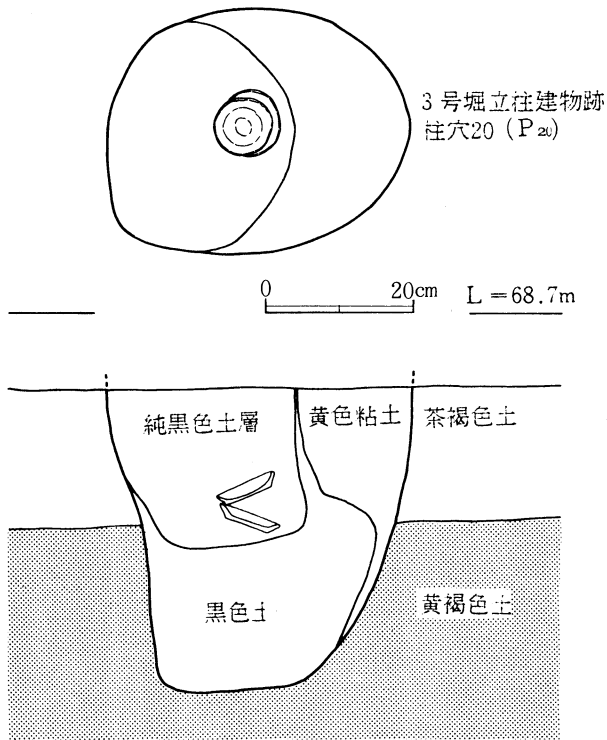
建 物 跡	3号		P	長径×短径×深さ (level)	P	長径×短径×深さ (level)	
主 軸 方 位	N-78°-W			12	32×29×35 (69.10)	23	19×16×20 (69.23)
出 土 区	EF 6区、EF 7区			13	?	24	20×20×25 (69.28)
梁 間 柱 間	梁 間 間	桁 行 柱 間	桁 行 間	14	25×22×27 (69.02)	25	23×19×19 (69.40)
P <sub>1,2</sub> -P <sub>1,4</sub> =177 P <sub>1,4</sub> -P <sub>1,6</sub> =225	P <sub>1,2</sub> -P <sub>1,6</sub> =400	P <sub>1,2</sub> -P <sub>1,3</sub> =247 P <sub>1,3</sub> -P <sub>1,4</sub> =247 P <sub>1,4</sub> -P <sub>1,5</sub> =255	P <sub>1,2</sub> -P <sub>1,5</sub> =745	15	32×30×48 (69.06)	26	24×22×27 (69.35)
	P <sub>1,2</sub> -P <sub>1,6</sub> =430		P <sub>1,4</sub> -P <sub>1,5</sub> =790	16	36×31×40 (69.08)	備 考	
	P <sub>1,4</sub> -P <sub>2,0</sub> =431			17	30×27×45 (69.12)		
P <sub>1,5</sub> -P <sub>1,7</sub> =195 P <sub>1,7</sub> -P <sub>2,1</sub> =220	P <sub>1,5</sub> -P <sub>2,1</sub> =412	P <sub>1,6</sub> -P <sub>1,9</sub> =265 P <sub>1,9</sub> -P <sub>2,0</sub> =243 P <sub>2,0</sub> -P <sub>2,1</sub> =252	P <sub>1,6</sub> -P <sub>2,1</sub> =766	18	35×32×43 (69.11)		
P <sub>2,2</sub> -P <sub>2,3</sub> =180 P <sub>2,3</sub> -P <sub>2,4</sub> =221	P <sub>2,2</sub> -P <sub>2,4</sub> =400			19	30×28×53 (69.08)		
P <sub>2,5</sub> -P <sub>2,6</sub> =245		P <sub>1,2</sub> -P <sub>2,2</sub> =122 P <sub>1,6</sub> -P <sub>2,3</sub> =111 P <sub>1,8</sub> -P <sub>2,4</sub> =116		20	33×25×41 (69.19)		
		P <sub>1,7</sub> -P <sub>2,5</sub> =143 P <sub>2,1</sub> -P <sub>2,6</sub> =131		21	30×27×39 (69.2)		
				22	15×15×20 (69.26)		



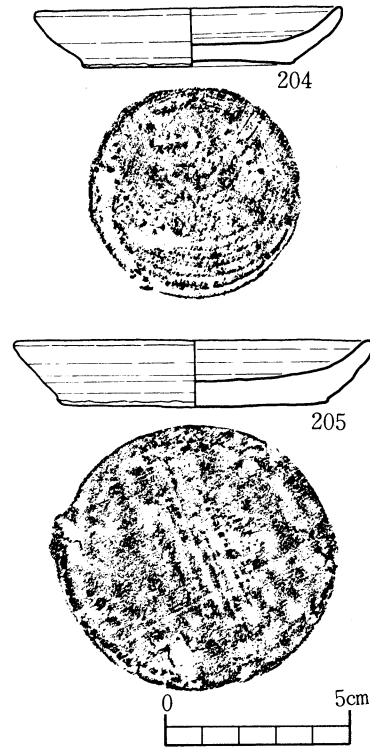
第28图 3号掘立柱建筑物实测图

以上が、2号掘立柱建物跡の柱穴の配置規模であるが、若干いびつな柱穴の配列であることが考えられる。

3号掘立柱建物跡の柱穴P<sub>20</sub>から、土師器の坏が二点出土した。204は、口径8.2cm、高さ1.65cmで底面は糸切りである。205は、口径9.6cm、高さ1.9cmで底部面はヘラ切りである。



第29図 土師器出土状態



第30図 土師器実測図

## 第 V 章 発掘調査のまとめ

中ノ原遺跡の今回の発掘調査は、緑地帯保存部分と農道によって削平された部分とが多く、弥生時代の遺跡の全体像を把握することは非常に困難であった。しかし、遺跡の分布や遺構の配置から、遺跡はかなり広範囲におよぶことが想定された。

### 第 1 節 弥生時代について

弥生時代の遺構は、竪穴住居址が 3 基検出された。住居址は、いずれもⅦ層からⅨ層のアカホヤ火山灰層を基盤に構築されている。竪穴住居址の時期は、従来、弥生時代中期から後期初頭に位置付けられる山ノ口式土器を伴う時期に該当している。3 基の住居址はかなりの距離をもって検出されており、しかも、1 号住居址は方形プランを呈し東南隅に張り出し部を持つタイプであり、3 号住居址は花卉型の間仕切りを備えた小型の円形住居址であり、形態上の違いが大きい。さらに、住居址からの出土遺物は少なく、時期を限定する遺物はみられない。

1 号住居址は、約 5 m × 4.5 m の方形プランを呈し東南隅に張り出しを付した形態の一般的な大きさのものである。床面は、中央部が掘りコタツ状に一段低くなり、その四隅に四本柱を持つタイプである。この手法は方形住居址でも間仕切りをもつ円形住居址でもよくみられる一般化した方法である。2 号住居址は、方形の可能性はあるが主体は用地外に延びるため不明である。3 号住居址は、直径約 4.5 m の円形を基調とする比較的小型の花卉形住居址である。住居址内には四ヶ所の花卉状の間仕切りを持ち、中央が一段低くなるタイプである。しかも、間仕切りに対応して柱穴が配置されている。この花卉状の間仕切りをもつ住居址は、王子遺跡<sup>(1)</sup> (14 号住)、中ノ丸遺跡 (2 号住)、中原山野遺跡 (1 号住) などで見られるものはいずれも直径 7 m 程度で大型である。中ノ原遺跡の小型の花卉型住居址が時期の違いによるものか、今後の課題である。

出土遺物は、調査区全体から万遍なく出土するが、特に C D 1 ~ 3 区にあたる傾斜面に形成された包含層からの出土は多い。

土器は、大きく甕形土器、壺形土器、鉢形土器、特殊土器に分けられる。中ノ原遺跡では、特に、櫛描波状文や凹線文等の施された特殊土器が比較的多く出土しており、共伴する在地土器の形態と他の遺跡との比較が注目された。関連する調査では中原山野遺跡や前畑遺跡、さらには王子遺跡などのタイプとは若干異なる部分が見られ、鹿屋市高付遺跡<sup>(2)</sup>や山川町成川遺跡<sup>(3)</sup>と形態的に類似するところがある。

形態の違いが顕著にみられる器形は、甕形土器である。大甕は、口縁部が直線的に長く「く」字状に大きく外反してその屈曲部の直下に台形状の厚い突帯文が巡るタイプである。高付遺跡例も同様である。しかし、中原山野遺跡や王子遺跡等にみられるタイプは、口縁部は短く逆「



L」字状に外反して若干の隙間を置いて突帯文を巡らしている。甕形土器は、前畑遺跡や中原山野遺跡では「く」字状口縁の直下に隙間を置いて突帯文が巡らされるのに対し、本遺跡では「く」字状口縁部の屈曲部の直下から数条の突帯文が巡っているものが多い。このタイプは高付遺跡でも顕著にみられる。脚台の底部は、中原山野遺跡や前畑遺跡のほとんどが充実するのに対し、中ノ原遺跡のものは底面が充実するものも含まれるが上げ底状になるものが顕著である。壺形土器にはさほど差異は認められないが、外反するだけの比較的小型の口縁部が存在する。そしてこれらの口縁平坦面には櫛描波状文や凹線文が施されるものもある。そのほか口縁部に鋸歯状沈線を描くものや胴部に円形浮文を貼付するものもみられる。これは高付遺跡や成川遺跡でも同様な傾向で出土している。

このようにしてみると、中ノ原遺跡出土の弥生土器は、高付遺跡や成川遺跡と形態の類似が顕著であり、中原山野遺跡や前畑遺跡とは若干の差異を確認することができる。この差異が、現在問題にされている山ノ口式土器の細分の決め手になるか即断はできないが、移入土器<sup>(4)</sup>を含めて在地土器の形態の移行期であることが察知される。ここでは、中期終末期の形態としてとらえておきたい。

## 第2節 中・近世について

中世～近世の遺構は、古道・溝状遺構・掘立柱建物跡等がある。古道は、F～G 5区に南北方向に検出され、幅 1.5m を測る比較的しっかりした道路跡である。おそらく、この時期のこの地域の幹線道と考えられる。そのほか断片的に溝状遺構が確認されている。農地整備や開畑のため途中が削平を受けているが、小道としての機能があるものと考えられる。

掘立柱建物跡は3棟検出されたが、1号建物は2間×4間の掘立柱建物跡であり、桁行間が一つ飛の2間となっている。車庫状の特殊な柱間を持つ掘立柱建物跡として注目される。

中世では、2棟の掘立柱建物跡が検出された。共に2間×3間の建物跡で、梁間に庇の付くタイプである。建物跡は重複しており、1棟の建物の柱穴には糸切り底の土師器の坏の完形品<sup>(5)</sup>を2個埋納した注目すべき事実も得られた。この土師器の埋納は、建物建立の地鎮・鎮壇遺構<sup>(5)</sup>の可能性が強い。

### 註

- (1) 鹿児島県教育委員会 1985 「王子遺跡」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 (34)
- (2) 鹿屋市教育委員会 1984 「高付遺跡」 『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』 (2)
- (3) 鹿児島県教育委員会 1983 「成川遺跡」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 (24)
- (4) 中村耕治 1986 「弥生時代」 『鹿児島考古』 第20号
- (5) 都城市教育委員会 1989 「都之城本丸跡」 『都城市文化財調査報告書』 (10)

図 版

PLATES



1. CD1・2区Ⅲ層の発掘調査風景



2. 1号住居址検出状況（北から）



1. 検出状況 (北から)



2. 掘り下げ状況 (東から)



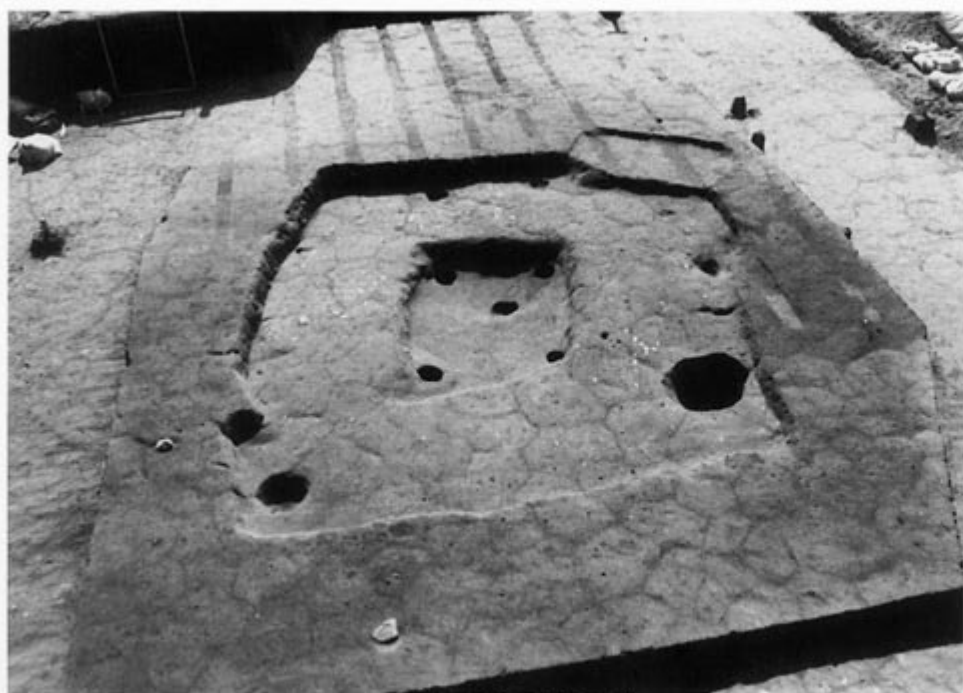
3. 埋土状況 (北から)



4. 埋土状況 (東から)



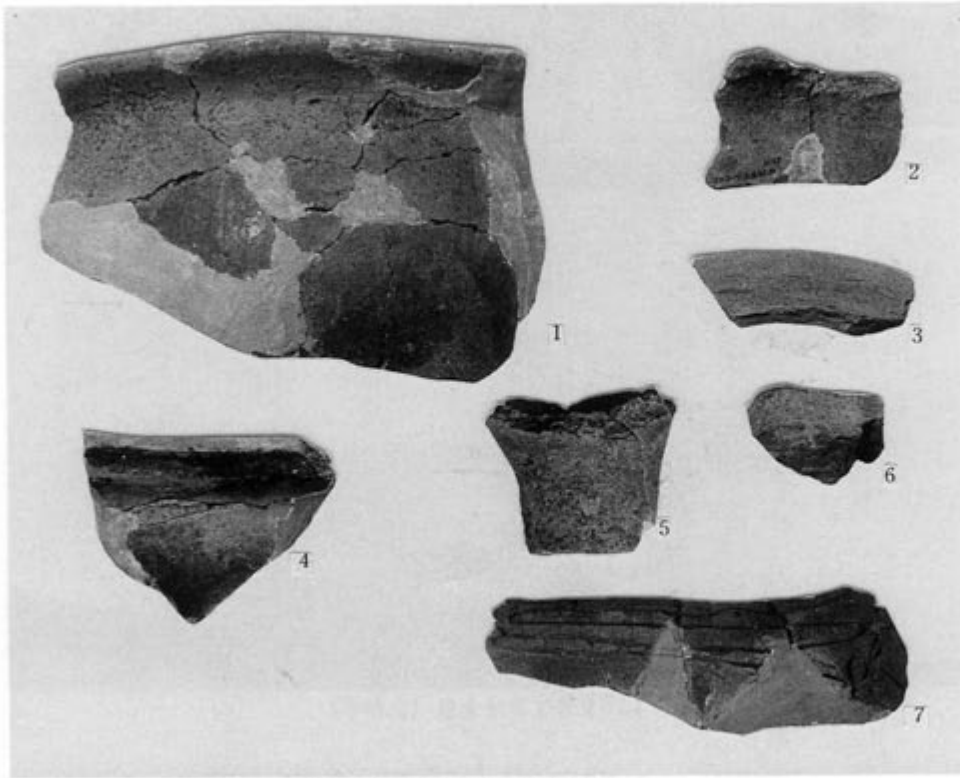
5. 1号住居址検出状況 (東から)



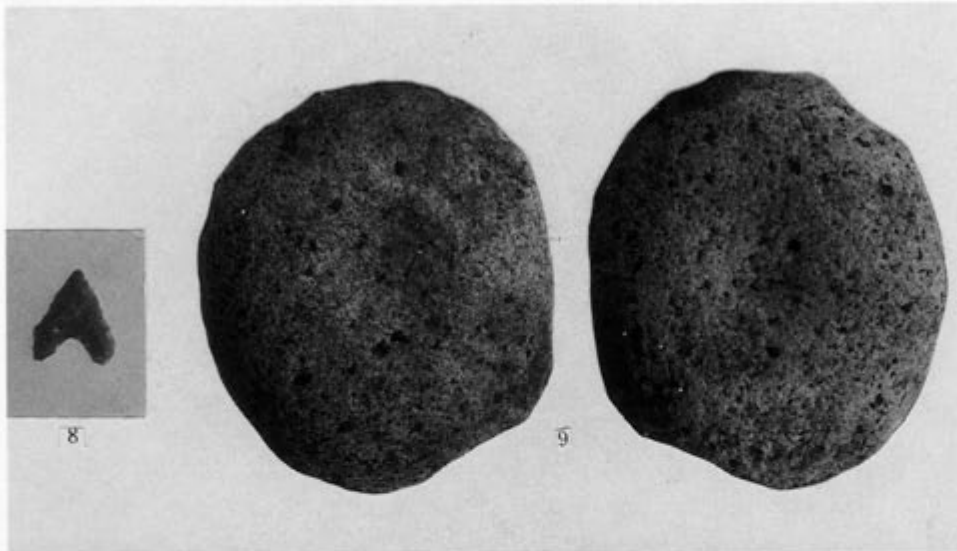
1. 1号住居址全景（北から）



2. 1号住居址全景（北から）



1. 1号住居址出土遺物 (土器)



2. 1号住居址出土遺物 (石器)



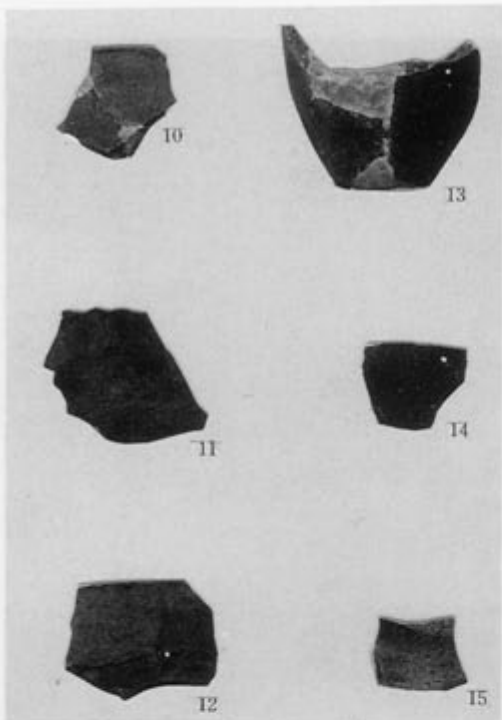
1. 2号住居址全景 (東から)



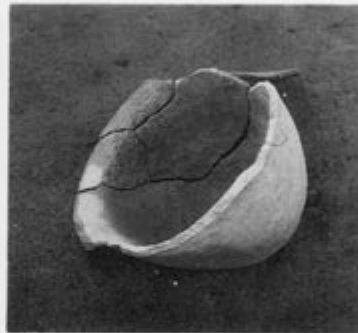
2. 3号住居址検出状況 (東から)



1. 3号住居址全景 (東から)



2. 3号住居址出土遺物

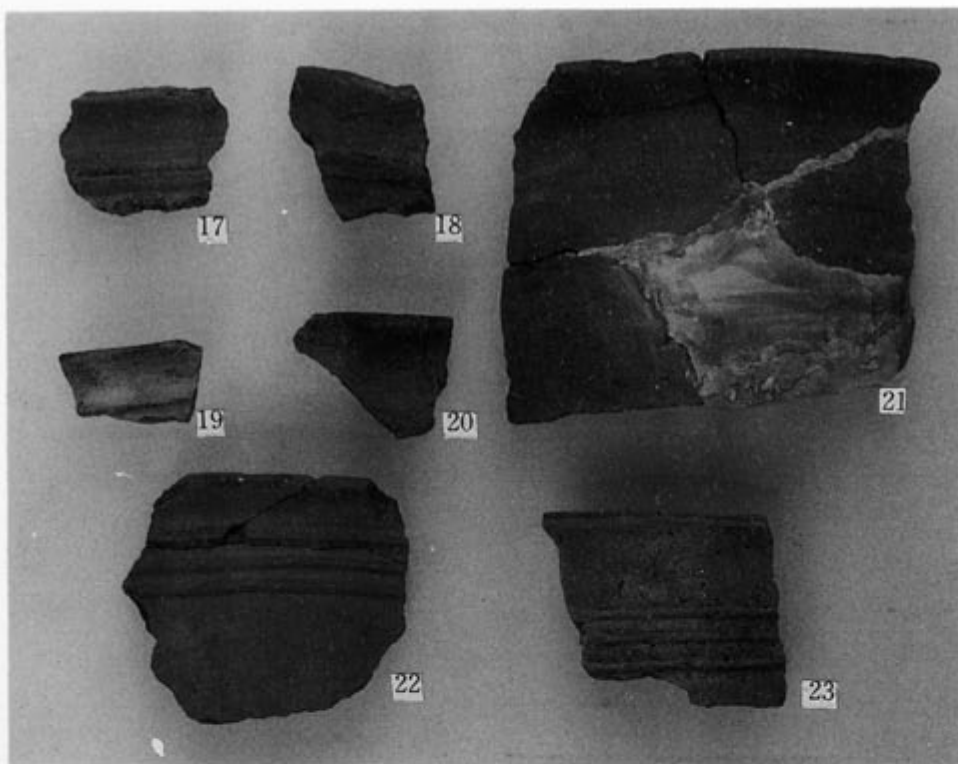


3. 完形土器出土状況 (149)

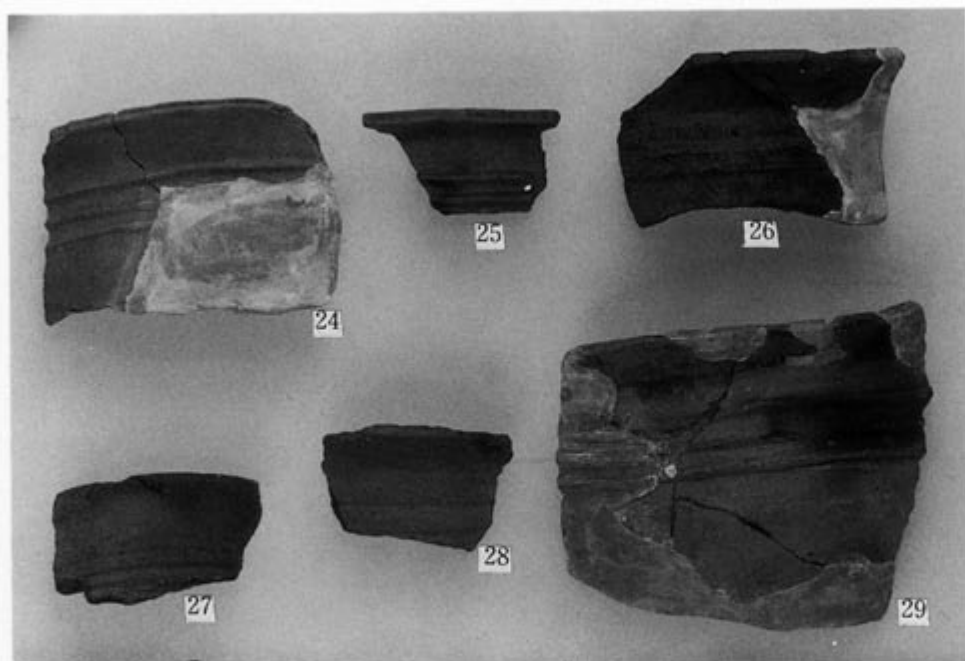




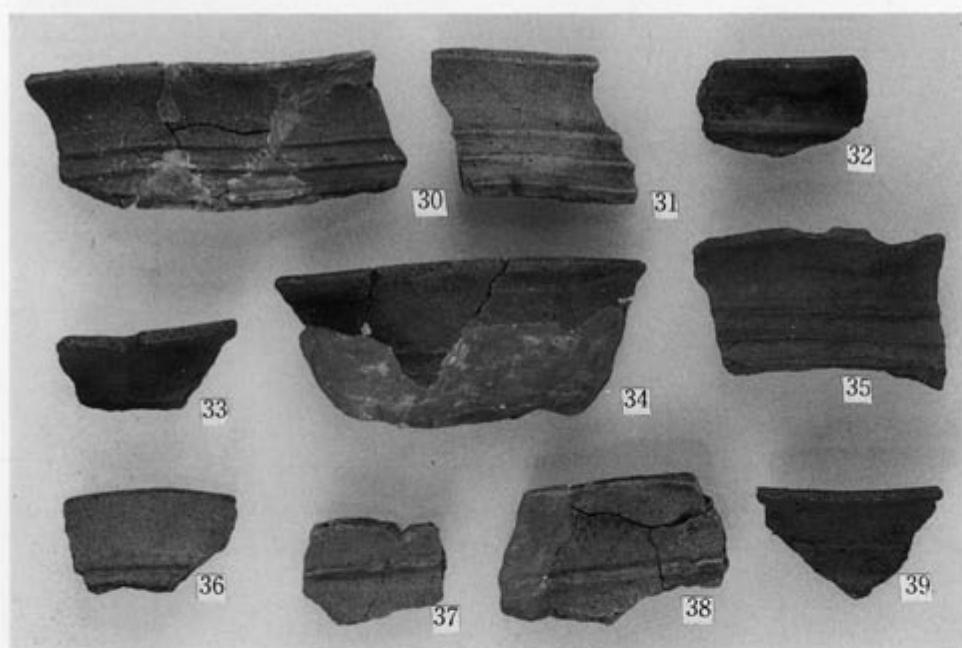
1. 弥生土器 (1)



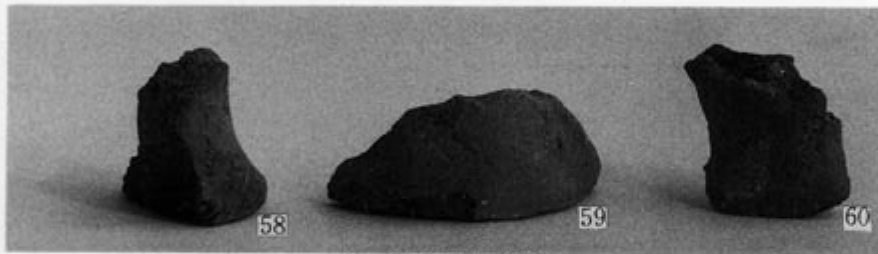
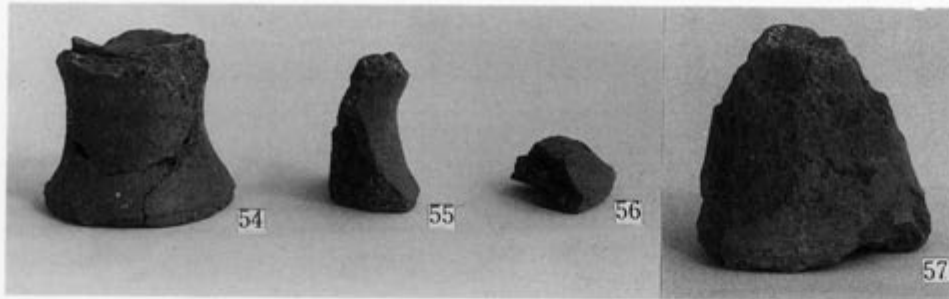
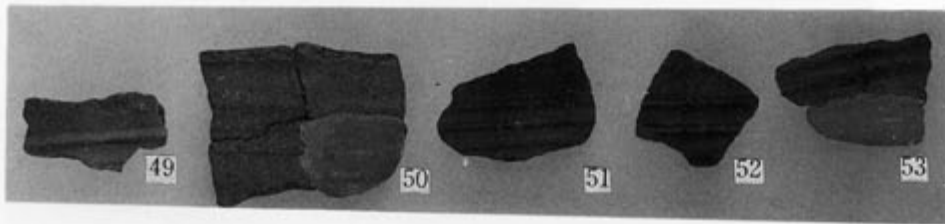
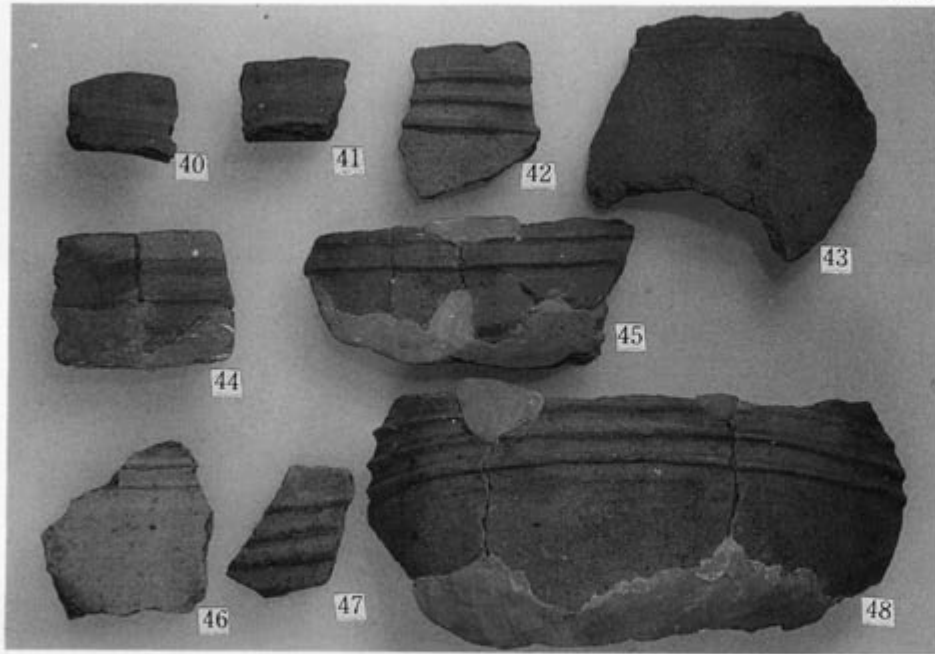
2. 弥生土器 (2)



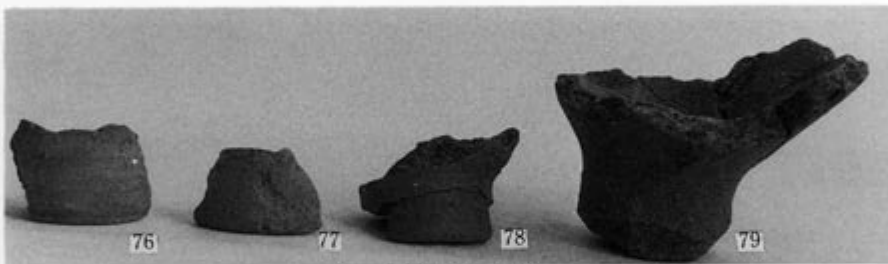
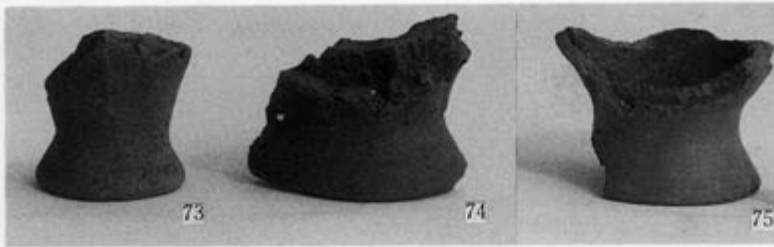
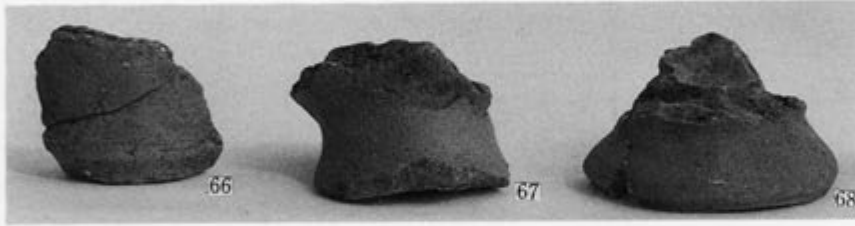
1. 弥生土器 (3)



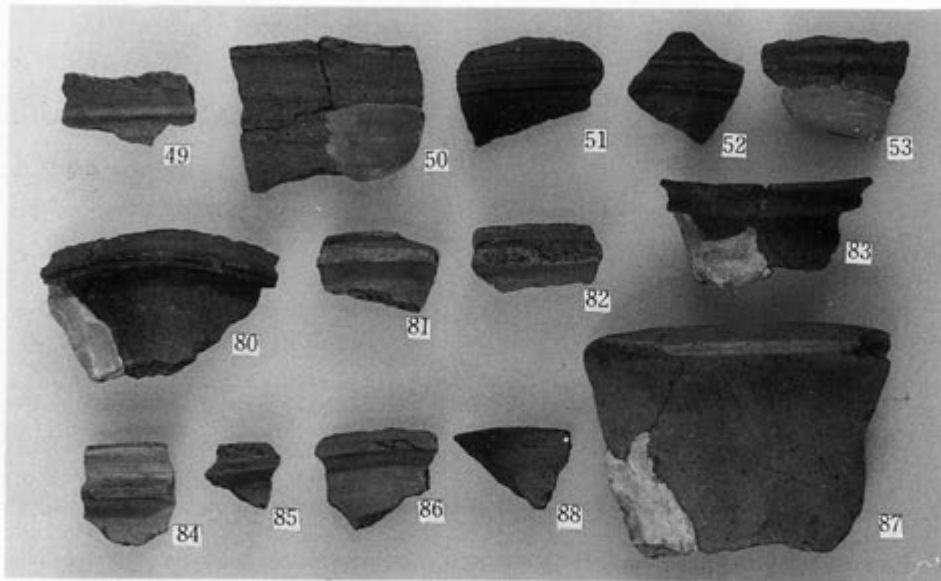
2. 弥生土器 (4)



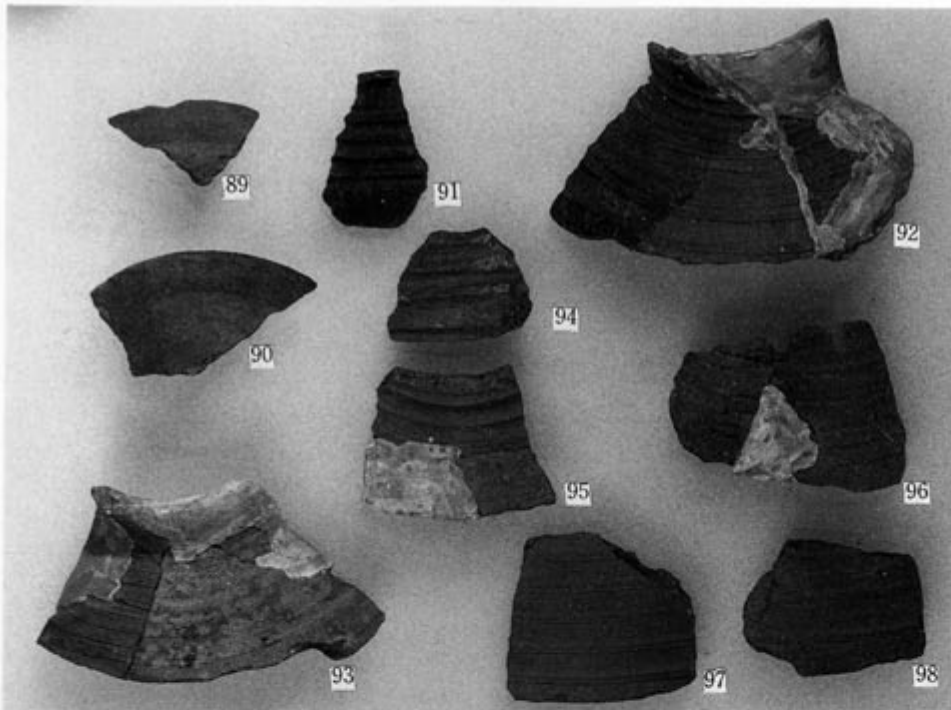
1. 弥生土器 (5)



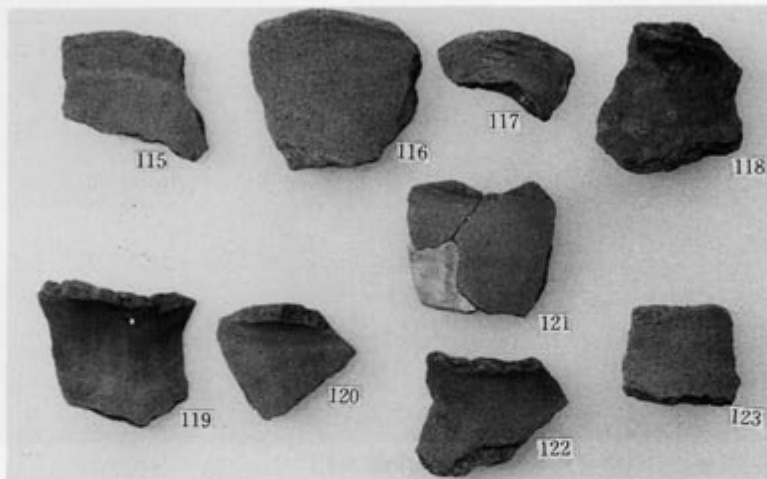
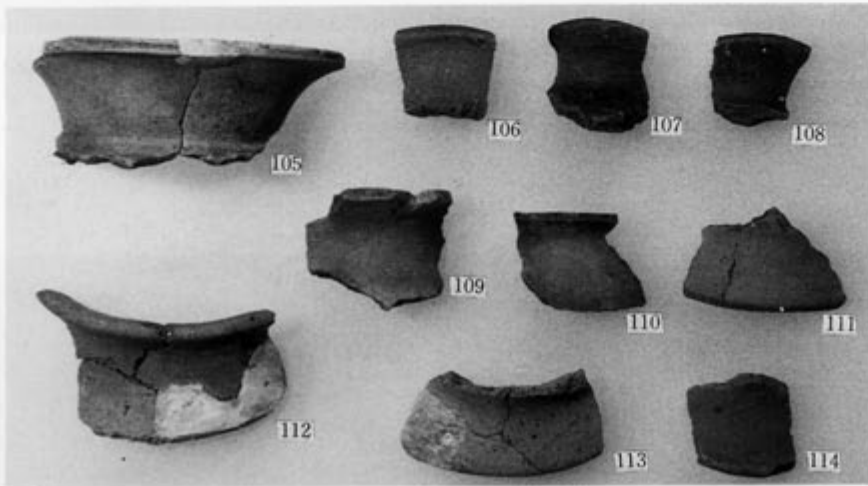
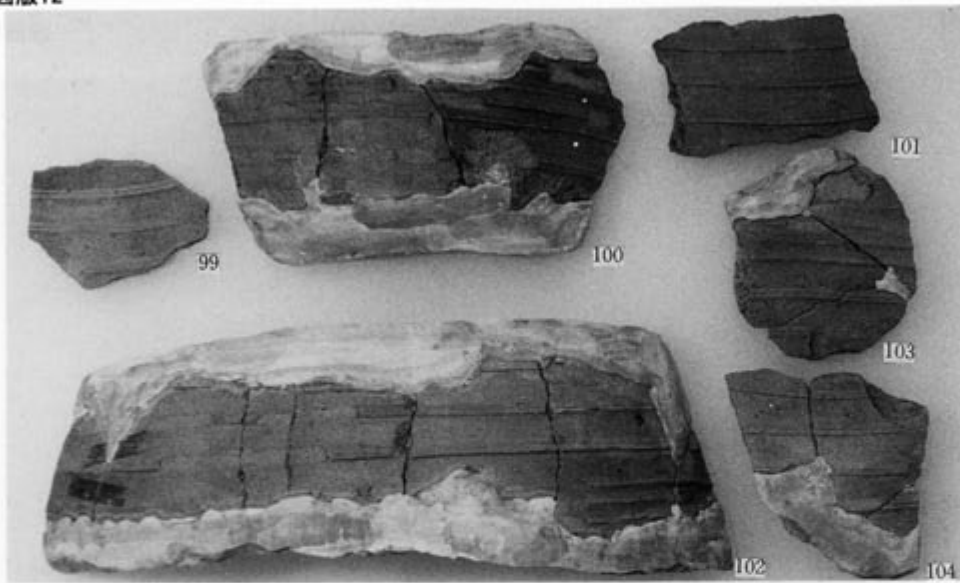
1. 弥生土器 (6)



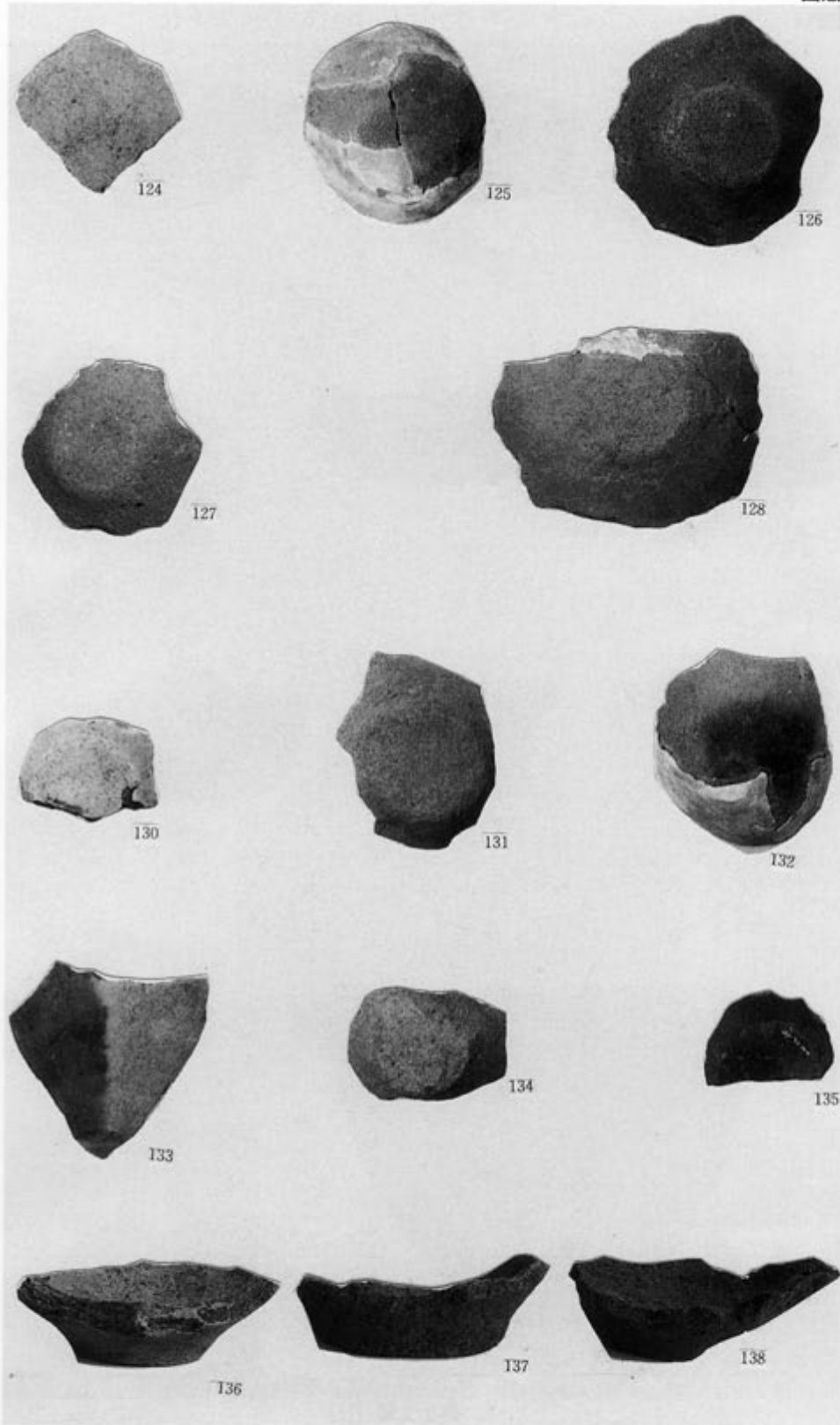
1. 弥生土器 (7)

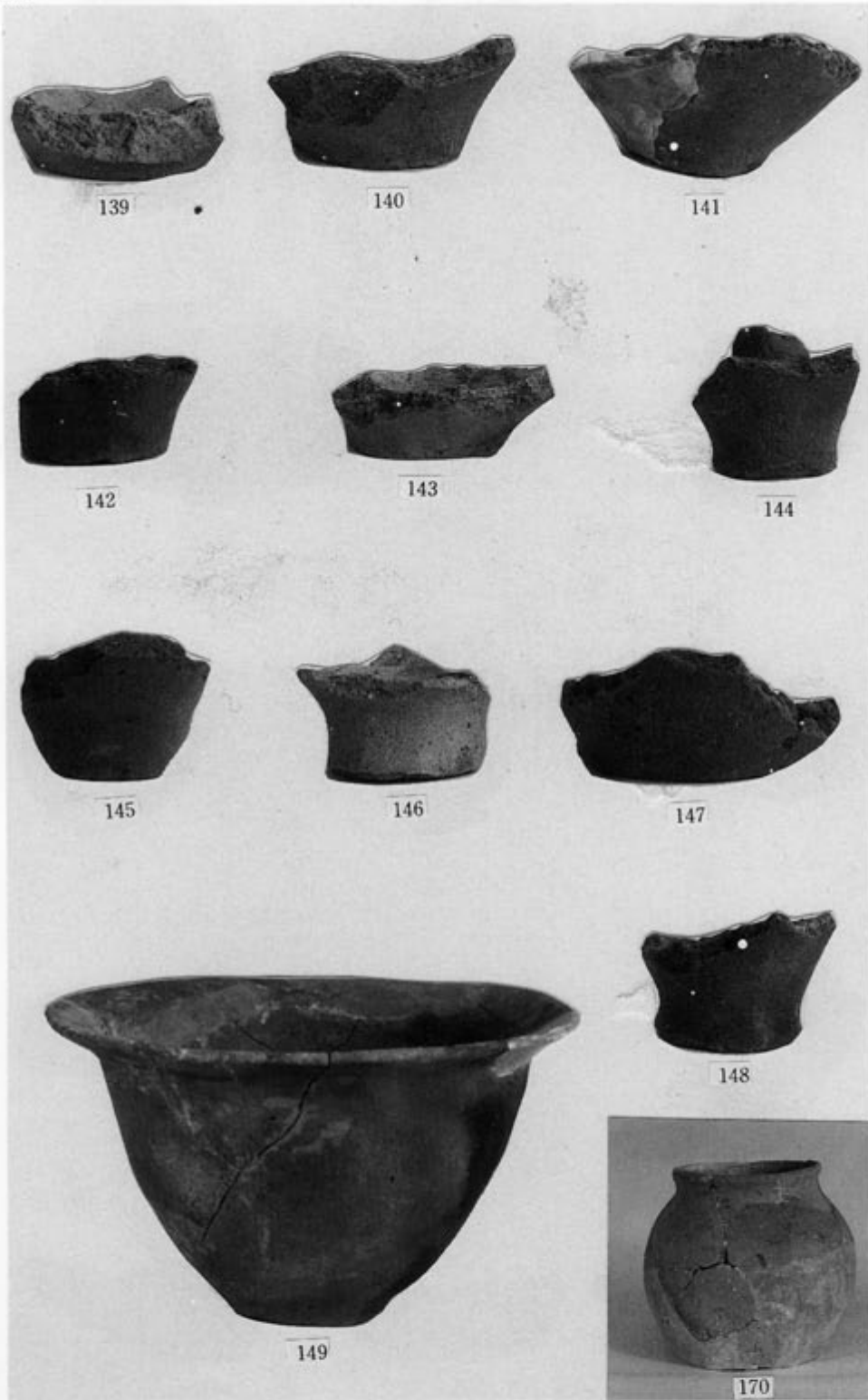


2. 弥生土器 (8)



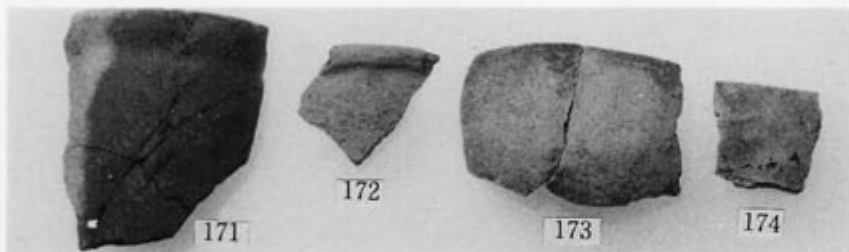
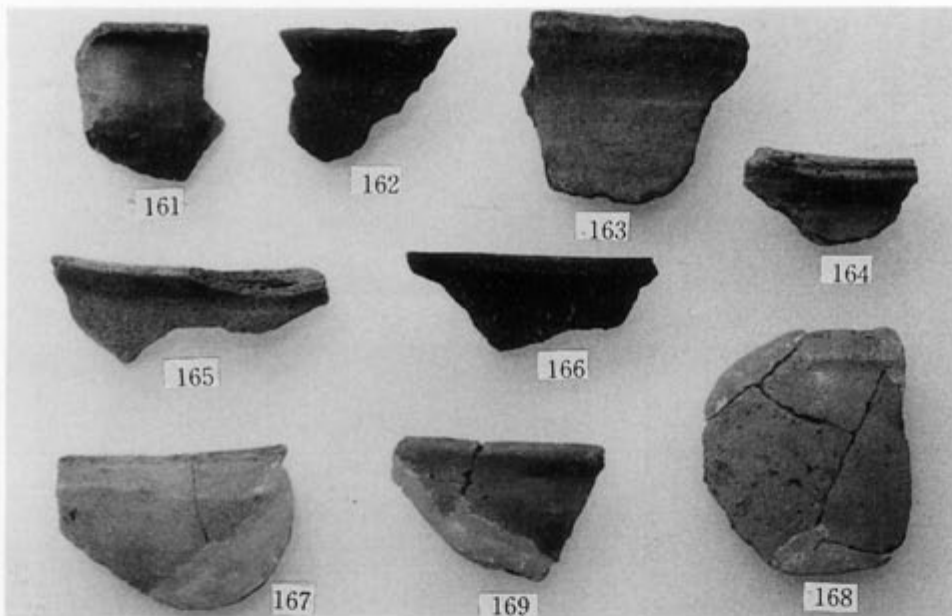
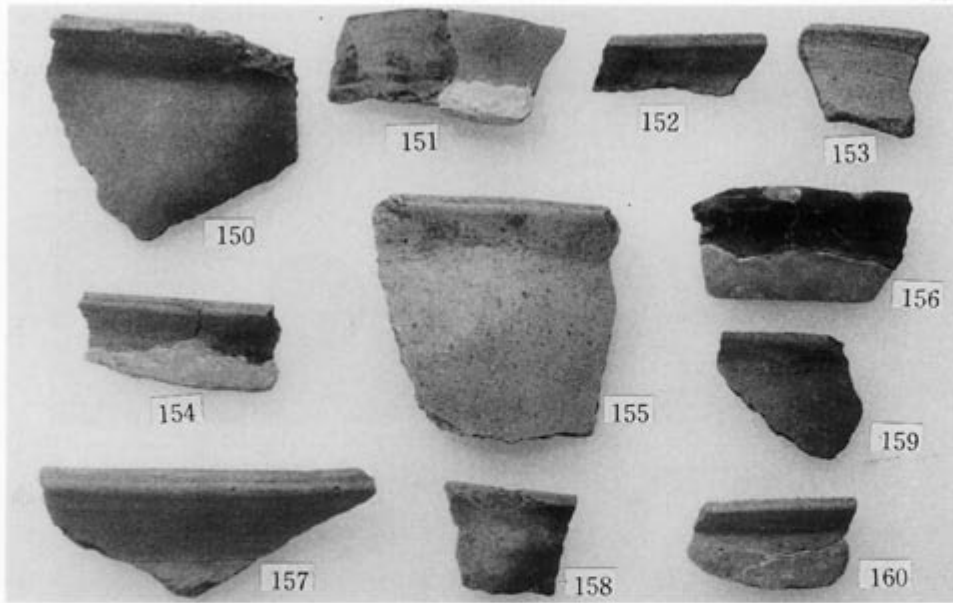
1. 弥生土器 (9)

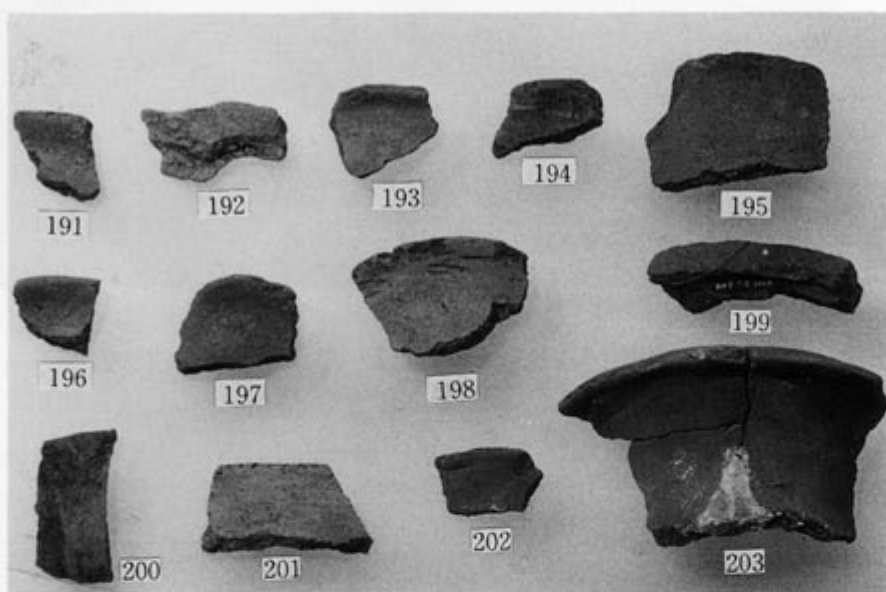
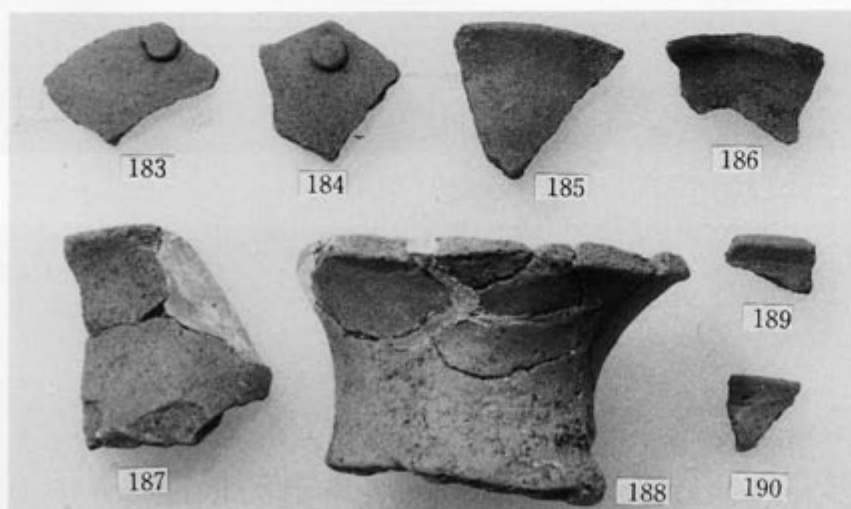
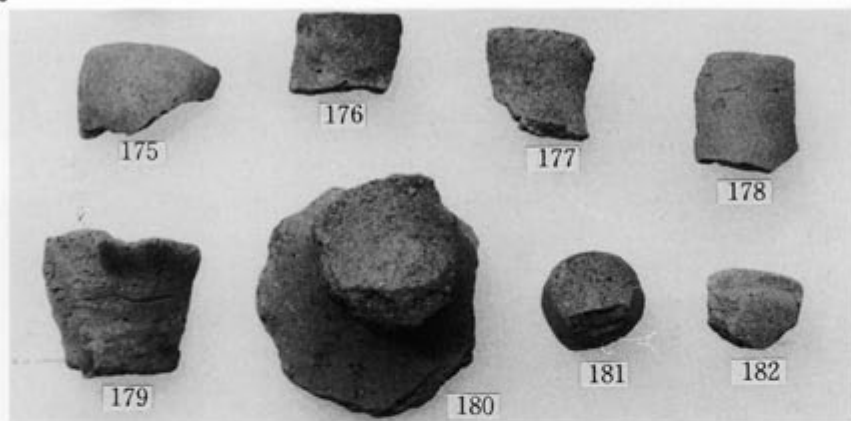




1. 弥生土器 (11)







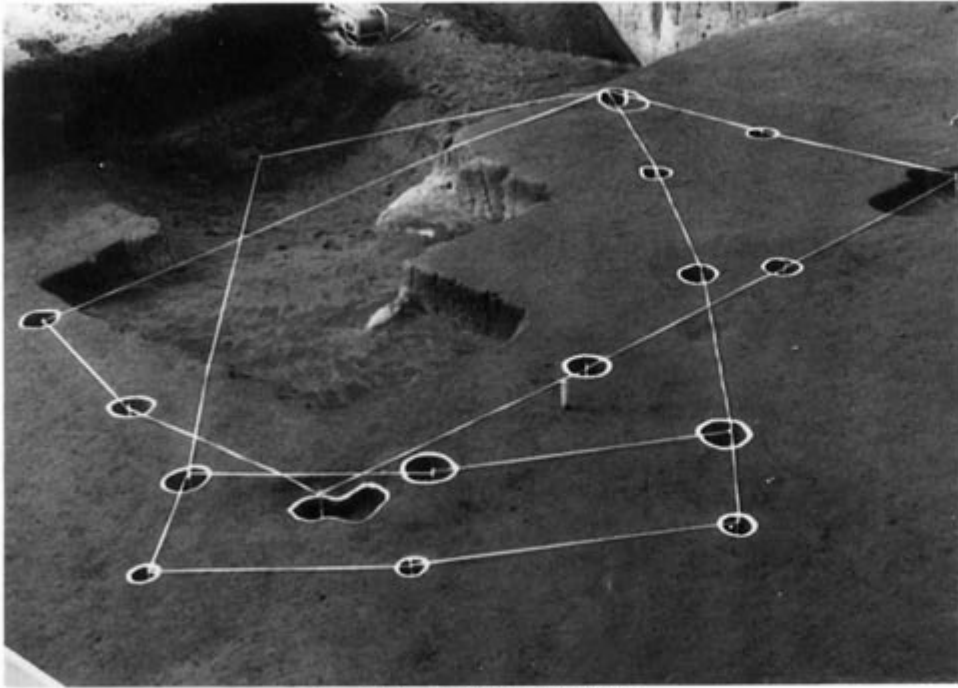
1. 弥生土器 (13)



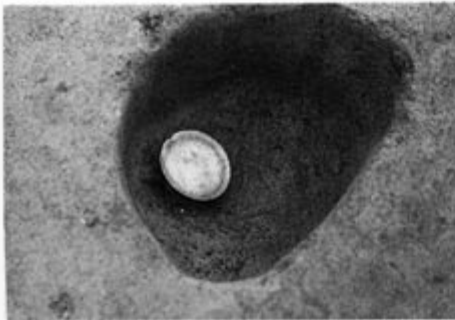
1. 1号掘立柱建物検出状況



2. 1号掘立柱建物全景



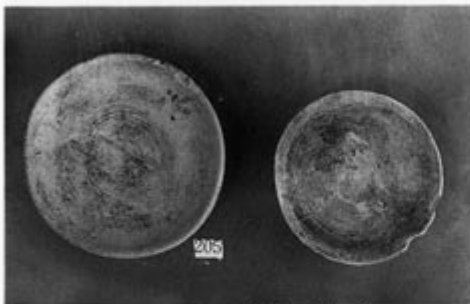
1. 2号・3号掘立柱建物全景



2. 土師器出土状況 (柱穴)



3. 土師器出土状況 (柱穴)



4. 出土土師器 (内面)



5. 出土土師器 (底面)

# 中原山野遺跡

## 例 言

1. この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の発掘調査「中原山野遺跡」の調査報告書である。
2. この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)の「中原山野遺跡」(第6分冊)である。
3. 中原山野遺跡は、鹿屋市郷之原町(旧字名中原山野)に所在する。
4. 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
5. 発掘調査は、中原山野遺跡は昭和62年6月15日～昭和63年3月9日と昭和63年4月27日～8月31日に実施した。整理作業は、平成元年度に実施した。
6. 発掘調査に当たっては、鹿屋市教育委員会や郷之原町内会の協力・援助を得た。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者(新東晃一・前迫亮一・梅北浩一・八木澤一郎・中村和美)で行った。
9. 出土遺物の実測・製図は八木澤一郎・新東が行ない、本書の執筆は、新東が担当した。
10. 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東がこれを担当した。

# 本文目次

第 I 章 中原山野遺跡の概要	1
第 1 節 調査の経緯	1
第 2 節 調査の方法と経過	1
第 3 節 発掘調査の概要	4
第 4 節 遺跡の層位	4
第 II 章 縄文時代の調査	11
第 1 節 調査の概要	11
第 2 節 X層の調査	11
第 3 節 V層の調査	18
第 III 章 弥生時代の調査	20
第 1 節 調査の概要	20
第 2 節 III層の調査	20
第 IV 章 発掘調査のまとめ	39

## 挿 図 目 次

第1図	中原山野遺跡の地形とグリッド配置図	2
第2図	大浦・郷之原地区の基本的層序と中原山野遺跡の層位	5
第3図	中原山野遺跡の層位図(1)	7
第4図	中原山野遺跡の層位図(2)	9
第5図	X層の遺構と遺物分布図	12
第6図	1号集石実測図	13
第7図	1号集石の石塊の最大長と重量比	13
第8図	土器実測図(1)	15
第9図	土器実測図(2)	16
第10図	土器実測図(3)	17
第11図	石器実測図	17
第12図	V層の遺物分布図	18
第13図	土器実測図	19
第14図	石器実測図	19
第15図	Ⅲ層の遺構と遺物分布図	21
第16図	1号住居址の遺物分布図	23
第17図	1号住居址の遺物出土状況図	24
第18図	1号住居址実測図	25
第19図	1号住居址出土遺物実測図(1)	27
第20図	1号住居址出土遺物実測図(2)	28
第21図	1号住居址出土遺物実測図(3)	29
第22図	1号住居址出土遺物実測図(4)	30
第23図	1号住居址出土遺物実測図(5)	31
第24図	1号住居址出土遺物実測図(6)	32
第25図	1号住居址出土の破碎礫出土状況	32
第26図	1号住居址出土の破碎礫	33
第27図	出土遺物実測図	35



## 図 版 目 次

図版 1	1. 中原山野遺跡遠景（西から）	43
	2. 確認調査風景	
図版 2	1. D区列発掘調査状況（東から）	44
	2. B14区以東確認調査状況（西から）	
図版 3	1. 縄文土器（早期）	45
図版 4	1. 石器（早期）	46
	2. 中原山野遺跡の層序	
	3. D10区付近のⅥ層谷部状況	
図版 5	1. 縄文土器（Ⅵ層）	47
	2. 石器（Ⅵ層）	
図版 6	1. 1号住居址掘り下げ状況（北西から）	48
	2. 1号住居址遺物出土状況（北から）	
図版 7	1. 1号住居址全景（北から）	49
	2. 1号住居址全景（北から）	
図版 8	1. 1号住居址出土遺物（1）	50
図版 9	1. 1号住居址出土遺物（2）	51
図版10	1. 1号住居址出土遺物（3）	52
図版11	1. 1号住居址出土遺物（4）	53
図版12	1. 弥生土器（1）	54
	2. 弥生土器（2）	

# 第 I 章 調査の概要

## 第 1 節 調査の経緯

中原山野遺跡は、郷之原台地の中央を通る県道郷之原～西原線の東側の平坦地に位置し、前畑遺跡に隣接している。

昭和59年度の分布調査では、ほぼ中央部の庭木生産畑地で遺物の散布がみられたため、これを第5地点とした。

建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づき、昭和60年4月確認調査を実施した。確認調査は、遺物散布地部分は庭木生産畑地のためにトレンチは設定できず、その東側の畑地に1本設定した。確認調査の結果、この部分は丁度谷状の凹地となっており、その黒色の腐植土中に流堆積した状態で土器片が出土した。この出土状態から、遺跡は、その西側に存在することが想定された。

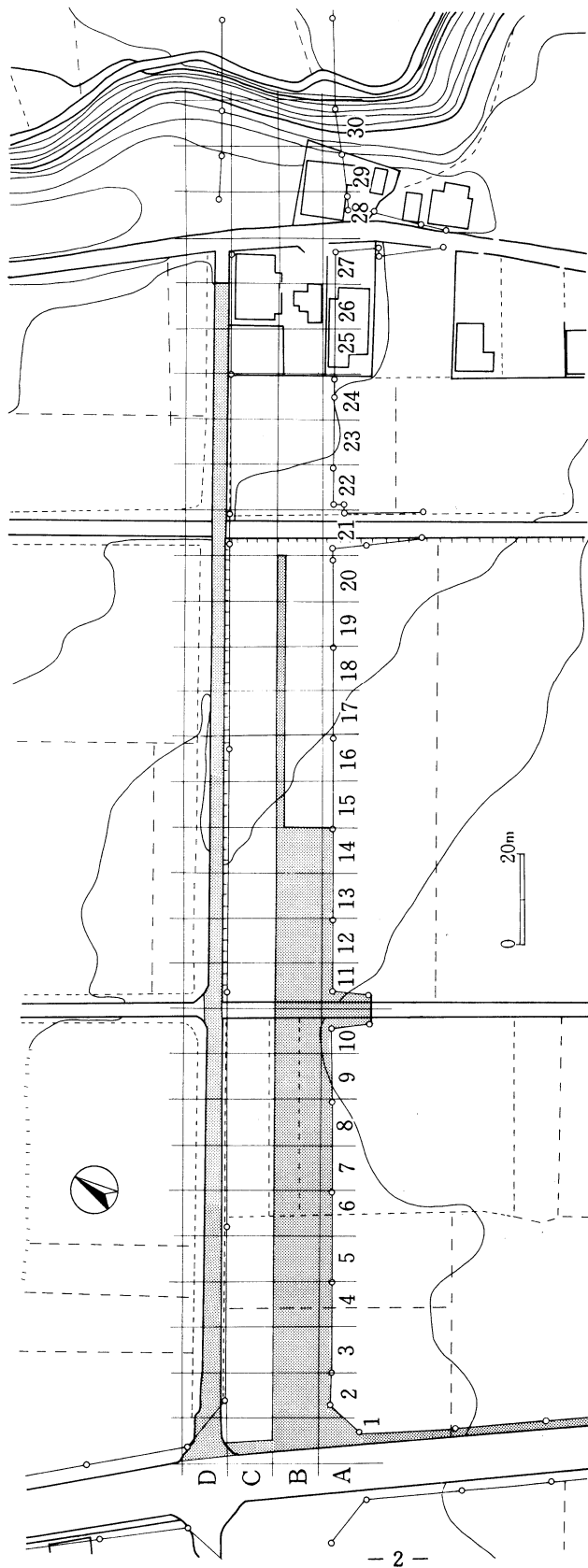
建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、この第4地点は、昭和62年度に再度確認調査を実施することとした。

## 第 2 節 発掘調査の方法と経過

中原山野遺跡の再度の確認調査は、昭和62年6月15日から7月15日の1ヶ月間、前畑遺跡の確認調査と並行して実施した。遺跡の想定をもとに、工事用センター杭No.407とNo.410を基準に10m×10mのグリッド網を確認調査対象区に被せ実施した。そして、グリッドは、西端から1～10区と南からA～C区として、各グリッドはA1区……A10区、B1区……B10区などと呼称することにした。そのグリッドの東側に2m×10mの確認調査トレンチを1グリッド毎に設定した。しかし、AB13区以東は未買収地のため、用地買収後さらに実施することとし一応確認調査を終了した。

昭和62年度の中原山野遺跡の発掘調査は、用地買収完了部分の確認調査と配水溝建設部分・上水道埋設部分等の確認調査及び発掘調査を実施した。発掘調査は、昭和62年6月15日から昭和63年3月9日に実施したが、工事との関係で前畑遺跡と並行して実施せざるを得なかった。本道部分は、本年度は用地買収完了部分の確認調査だけで調査は終了した。排水溝建設部分・上水道埋設部分（通信ケーブル・電線ケーブルを含む）の調査は、まず確認調査後、続けて本調査を実施した。

昭和63年度の調査は、AB1区・AB2区の縄文時代早期の調査とAB7区～AB14区付近の弥生時代の調査を行なった。その結果、AX10区・AX11区に約7m級の大型住居址を検出して発掘調査を終了した。以下、発掘調査の経過は日誌抄をもって説明する。



第1図 中原山野遺跡の地形とグリッド配置図

### 【昭和62年度の調査】

(昭和62年 6月15日～7月14日、昭和62年10月19日～昭和63年 1月26日)

6月15日から発掘調査の準備及び調査の開始。調査事務所等を建設し調査区を設定して、トレンチ4からトレンチ9の確認調査。その間、前畑遺跡の確認調査も並行する。

7月は、トレンチ11・12の掘り下げに入る。A B12区以西の確認調査トレンチの掘り下げ作業に終始。未買収地があるため14日で確認調査を一旦終了する。

10月19日、調査再開。A B 1区～A B 4区付近の本調査に入る。誘導路の発掘。清掃・写真撮影。28日、排水溝工事の現農道の新規発掘調査に入る。

11月は、D 1区～D26区までの確認調査を実施。戦跡遺構や道路、ピットなどが確認される。確認トレンチの断面図や戦跡遺構の検出に終始。

12月は、D 1区から南の県道西原～郷之原線に沿った上水道埋設工事及び電話・電気埋設工事に伴う調査に終始。戦跡遺構と縄文時代早期の包含層を検出。年度末は25日で終了。

1月は6日から発掘調査開始。D 8区～D14区の弥生時代包含層の調査。D11区からD12区付近が最も低く谷状になる。さらに、弥生時代の下層に黄褐色軽石粒混暗褐色土層の火山灰類似の層が厚く確認され、その下の黒褐色土層中から縄文時代晩期の土器片を検出。平面に広げて晩期層を調査。26日、本年度の中原山野遺跡の調査は終了する。

### 【昭和63年度の調査】 (昭和63年 4月27日～8月31日)

4月は、発掘調査の準備及び調査の開始。昨年度の残部から調査を始める。前畑遺跡から調査に入り、中原山野遺跡には若干遅れて27日から入る。A B 7区～A B 8区の表土剥ぎ作業から開始。前畑遺跡と並行して調査を進める。

5月は、前半はA B 7区～A B 8区の遺構検出。前畑遺跡の調査との関係で一時中断し、23日からA B14区以西のトレンチ調査を再開。その結果、A B14区までの弥生時代包含層が確認され、中原山野遺跡の範囲が確認される。弥生時代以降については削平を受けている。

6月は、A B10区～A B14区の平面調査。表土剥ぎから弥生時代包含層の掘り下げ作業。12日は『古代探訪』開催。中原山野遺跡と前畑遺跡で遺跡発掘実践活動。その後は、前畑遺跡へ移動し、中原山野遺跡の調査は休止。

7月は、前半A B 7区～A B14区の遺構検出作業を行い前畑遺跡の都合でしばらく休止。月末C 1区～C 4区の誘導路部分の拡張区の調査。

8月は、A B10区付近の旧道と取り付け道路部分に入る。表土剥ぎから弥生時代包含層に達する。17日、A X10区～A X11区に弥生時代住居址検出。約7m級の大型の間仕切りを持つタイプの住居址。主居址の掘り下げ、実測、写真撮影等の作業を月末まで継続。B C11区～B C14区の最終の検出作業。下層確認の深掘りを完了し、住居址1号の最終実測・写真撮影を終了。31日、中原山野遺跡の発掘調査を終了する。

### 第3節 発掘調査の概要

中原山野遺跡の本道部分の確認調査は、A～B26区まで実施した。その結果、戦跡遺構及び弥生時代遺物包含層、縄文時代（晩期・早期）遺物包含層が確認された。

A～B1区からA～B4区までの全面調査を実施したところ、幹線にあたる誘導路（戦跡遺構）が検出された。誘導路は、約17m幅を測り、両脇に排水溝を備えたものである。誘導路は中央に、鹿屋市荒平産の採石を敷いた大規模な道路である。両脇の排水溝内には、戦時中の遺品が多量に出土している。なおB7区付近から以東については、農地整備や耕作のために削平されている。

弥生時代の遺物包含層は、A B7区～A B14区にかけてⅢ層に存在する。そして、A B10区の取付道路付近で、花卉状の間仕切りを持つ竪穴住居址が検出された。直径約7mの円形住居址で、内部からは遺物がかかり出土している。住居址は一基だけの発見であったが、集落は南側の用地外に延びる可能性がある。

そのほか、A B1・2区付近やそれ以南の上水道埋設部分から縄文時代早期の包含層が検出された。確認調査の結果、中原山野遺跡の早期包含層は、A B2区以東には確認されなかった。包含層の広がりには前畑遺跡へ延びており、前畑遺跡の縄文時代早期包含層に包括される状態である。

排水溝建設部分の確認調査及び本調査の結果、D1区～D26区にかけて道路や溝やピットなどの戦跡遺構が検出された。さらに、D8区～14区にかけては弥生時代（中期）の遺物包含層と縄文時代（晩期）の遺物包含層を発掘調査した。

中原山野遺跡の層位では、特に弥生時代包含層の下部にみられる黄白色土層に注目される。この層は、二次堆積の可能性も強いが、他の遺跡でも弥生時代包含層の下層に確認される無遺物層であるところから、この時期の鍵層となることが考えられる。

### 第4節 遺跡の層位

中原山野遺跡の層位は、発掘調査対象区が約300mに長きに及び、しかも中央部に大きな谷部が形成されるため大きな変化がみられる。提示した層位柱状図は谷部近くのB16区付近であるが、この付近はⅣ層が最も厚く整然とした堆積がみられる。Ⅳ層は、中ノ原遺跡や前畑遺跡でみられた弥生時代包含層の下位に確認された火山灰状の層にあたり、中原山野遺跡でその層の実態が明かとなった。しかも、普通弥生時代の竪穴住居址はアカホヤ火山灰（Ⅷ層）を床面として構築されているが、本遺跡ではこのⅣ層を床面として構築されている。非常に興味ある事実を確認したことになる。

挿図の第2図～第3図は、中原山野遺跡の層位断面図である。層位断面図の作成にあたっては、発掘調査対象区が道路建設で東西に長く延びるため、南北に延びた台地を輪切りにした形

でB区列の北側断面図を1本通した。そして、東側に原則として2グリッド毎に層位図を作成し、東側断面図を提示した。

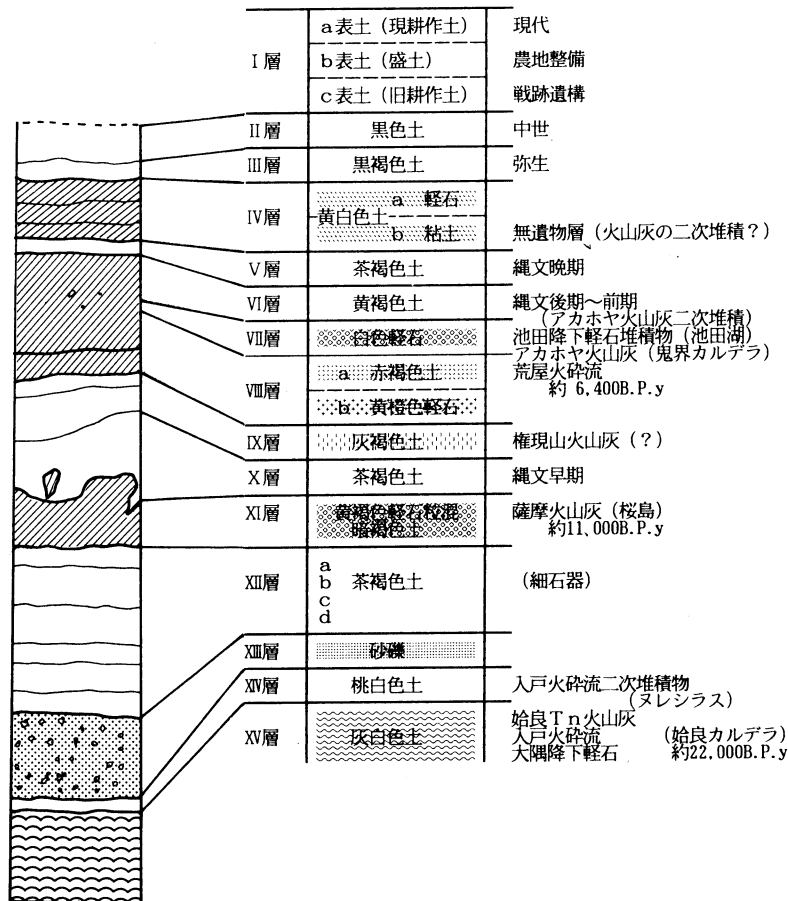
中原山野遺跡の層位は、ほぼ大浦・郷之原地区の基本的層位に対応している。各層は、順次みると次のようになる。

I層は、旧地形が凹部ため比較的良く残存している。b層（農業基盤整備時の盛土）やc層（旧耕作土）も比較的良く残存しており、農業基盤整備以前の旧道路等も確認される。

II層は、黒色土層でA B 7区～A B 14区付近は良好に残存しているが、これに伴うと考えられる遺構・遺物は確認されていない。

III層は、黒褐色土層でA B 7区～A B 14区付近にみられ、弥生時代包含層を形成する。そして、A X 10区～A X 11区には、約7m級の大型の竪穴住居址が検出された。竪穴住居址は、下層のIV層を基盤に築かれている。III層の弥生時代包含層は、ほぼ中央の北側の用地外には谷部が形成されているところから、この住居址や包含層はその北限と考えられ、その中心は南側の用地外に延びることが想定される。

IV層は、黄白色土層の40cm～60cmの厚い堆積層で確認される。上層（a層）は軽石層を形成



第2図 大浦・郷之原地区の基本的層序と中原山野遺跡の層位

し、下層（b層）は堅い粘質土層である。中ノ原遺跡や前畑遺跡などで弥生時代包含層下に確認される火山灰状の黄白土層がこれに当たり、中原山野遺跡では軽石層と粘質土層に区分された厚い堆積土層を形成している。従来、アカホヤ火山灰層を基盤にして床面が築かれる弥生時代の竪穴住居址は、本遺跡ではこのIV層を床面としている。このIV層は、それほど厚くしっかりした堆積層となっている。

V層は、茶褐色土層～黒褐色土層を呈する層で、D8区～D10区では縄文時代晩期の土器を包含している。特に、上層のIV層が厚い本遺跡では、若干黒色が強い傾向がみられる。

VI層は、黄褐色土層で下層（VII層）の白色軽石層でやっと区分される。VI層は、従来、縄文時代前期～後期の遺物包含層を形成する 경우가多いが、中原山野遺跡では遺物は包含していない。

VII層は、VI層とVIII層の間に見られる軽石層であり、白色軽石粒が浮遊した状態で看取され、明瞭な層の形成はみられない。軽石層は、池田湖の噴出物で「池田降下軽石」と呼ばれているものである。

VIII層は、赤褐色土層と下位に黄橙色軽石層を含むもので、鬼界カルデラ噴出の「アカホヤ火山灰」に相当する。VIII層は非常に堅いVIII a層の赤褐色土層が大部分を占め、「幸屋火砕流」に比定されるものである。これまでこの「幸屋火砕流」直下の炭化木から得られた<sup>14</sup>C測定年代値は約6,400 B.P.yで、これが「アカホヤ火山灰」の降灰年代とされている。

IX層は、中原山野遺跡では部分的に確認され、全体的には見られない。この層は、「権現山火山灰」と呼ばれるものに相当する。

X層は、茶褐色土層の粘質土で縄文時代早期の包含層を形成する。この縄文時代早期包含層は、AB1区～AB2区にかけて確認されており、基本的には前畑遺跡の包含層の領域に含まれるものであろう。

XI層は、黄褐色軽石粒混暗褐色土層で「薩摩火山灰」と呼ばれる火山灰堆積物である。中原山野遺跡では、部分的にブロック状に止切れる部分もあるが、ほとんどが層形成されて残存している。この「薩摩火山灰」は、<sup>14</sup>C測定年代値によって約11,000 B.P.yの降灰とされている。

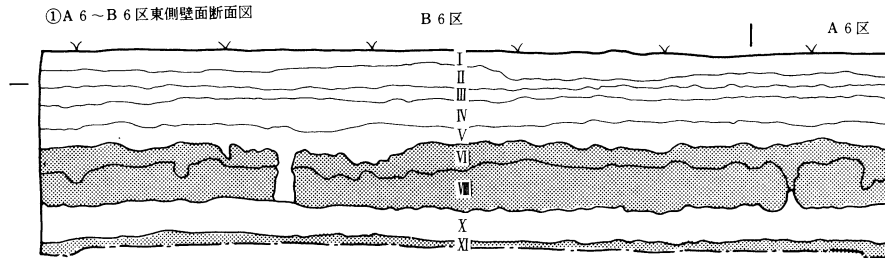
XII層は、茶褐色土層の粘質土層である。この層は南九州ではチョコレート層と呼ばれ一般的には細石器が包含されるが、中原山野遺跡では細石器包含層は確認されていない。

XIII層は、砂礫層である。中原山野遺跡では、砂礫混土層を含めて東側の台地先端部に形成されている。榎田下遺跡や中ノ丸遺跡でも東側台地先端にみられ、同様な傾向で形成されるようである。

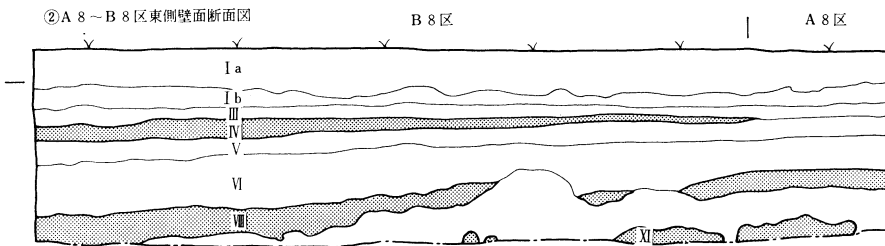
XIV層は、桃白色土層の通称「ヌレシラス」と呼ばれる「入戸火砕流」の二次堆積物である。

XV層は、「入戸火砕流堆積物」で通称「シラス」と呼ばれている。本県では、通常数m～数十mの厚い堆積がみられる。本遺跡では基盤層となっている。

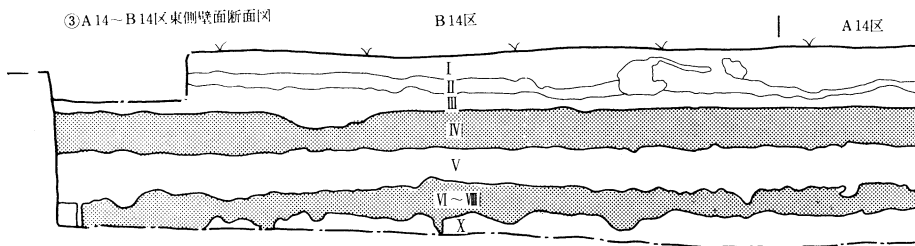
①A 6~B 6区東側壁面断面図



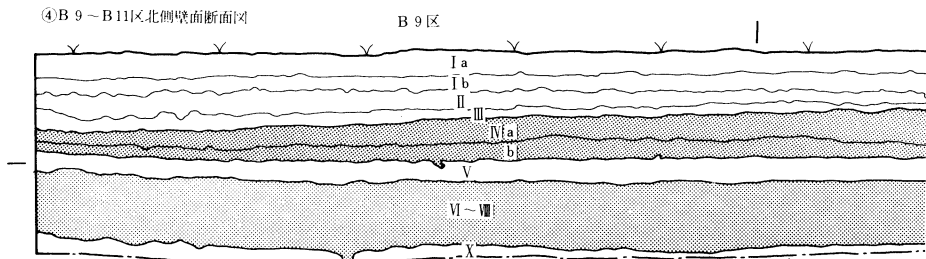
②A 8~B 8区東側壁面断面図



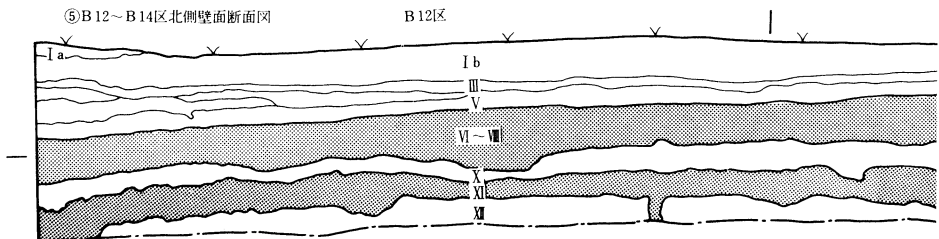
③A 14~B 14区東側壁面断面図



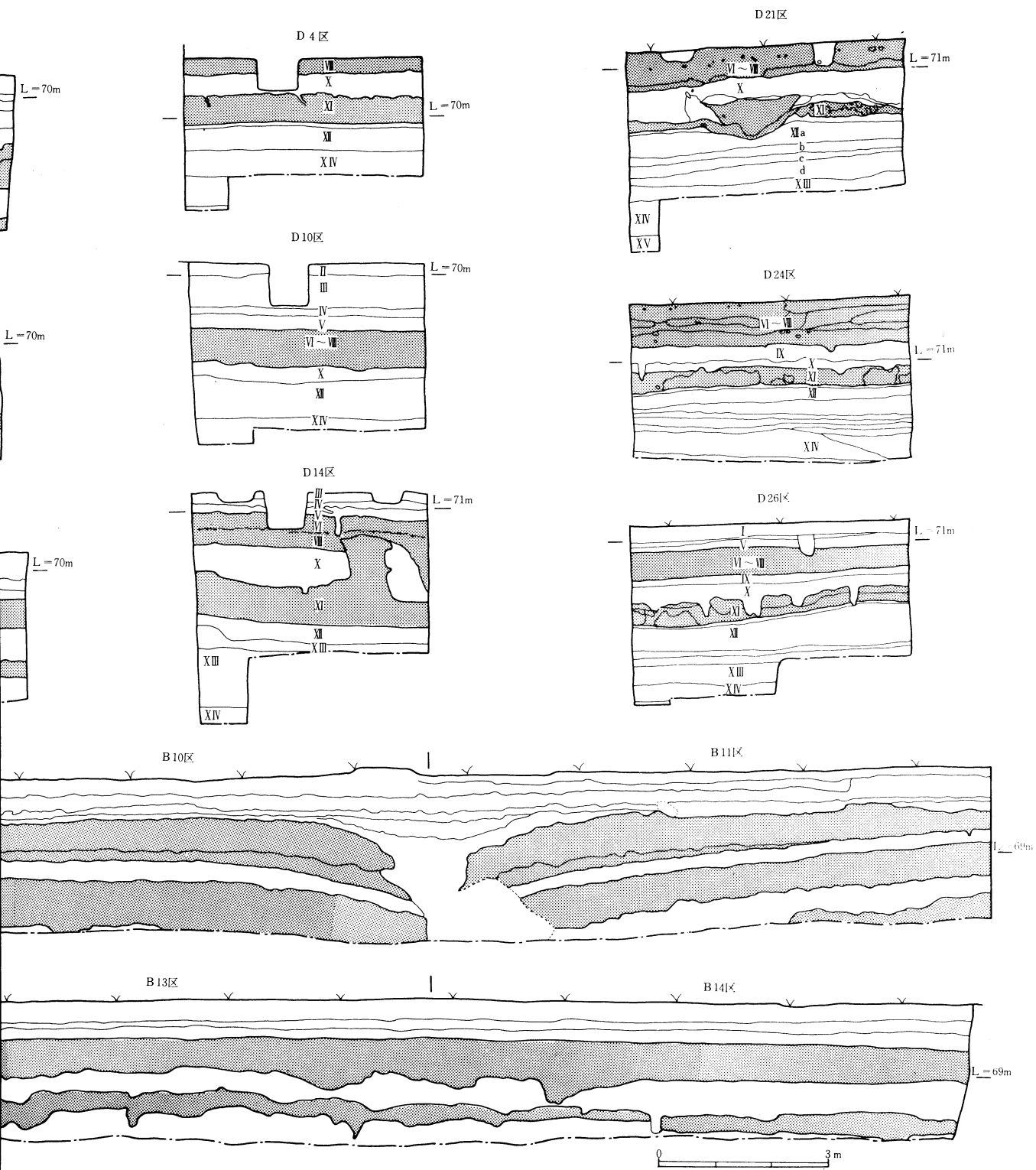
④B 9~B 11区北側壁面断面図



⑤B 12~B 14区北側壁面断面図







第3図 中原山野遺跡の層位図(1)

## 第 II 章 縄文時代の調査

### 第 1 節 調査の概要

縄文時代の調査は、確認調査の結果をもとに上層の中・近世～弥生時代の調査終了後に行なったが、建設工事の進行と年度毎の進捗状況によって各区の調査行程は若干異なっている。

中原山野遺跡の縄文時代は、X層（アカホヤ火山灰下層）に早期に該当する時期（Y～D区－1～2区の範囲）と、V層に晩期に該当する時期（D8区～D10区の範囲）の2時期の包含層が検出された。

調査は、該当層の遺物包含層の掘り下げ作業後、遺物の検出作業、出土状態の写真撮影・実測作業、遺構検出作業の順の行程で進行した。

縄文時代（X層・V層）の確認調査については、AB2区～AB14区までは20m毎に2m×12mの南北トレンチで確認調査を実施し、AB15区以东についてはB区北側に東西のトレンチ調査を実施した。その結果、X層の包含層はY～B1区からAB2区に確認され、V層の包含層はD8区～D10区に確認された。そして各々の全面調査を行なった。

X層は、総数232点の遺物のほか集石遺構1基が検出されている。V層には、総数11点の遺物の出土がみられた。

### 第 2 節 X層の調査

#### 1 X層の概要

X層で早期包含層が確認されたのは、本道建設部分のA～B1～2区と県道西原～郷之原線の水道管理設工事部分のY～Z1区の範囲である。このことから包含層の分布範囲は西側の県道西原～郷之原線に沿った僅かな部分であり、基本的には西側に隣接する前畑遺跡の早期包含層に包括される可能性が強い。X層の包含層からは、集石遺構1基（A2区）のほか総数232点の遺物が出土している。

X層の出土遺物は、調査地点が遺跡の末端部に位置し、さらに包含層の広がり狭いことから、比較的少ない。出土土器は総数229点を数え、1点（Ⅱ類土器）を除きほとんど同形態であることが考えられる。これらは、断片的な資料ではあるが前畑遺跡の主体をなす土器群に類似している。このことから前畑遺跡との関連が考慮される。石器は、打製石鏃（2点）と磨石のわずか3点と少ない。

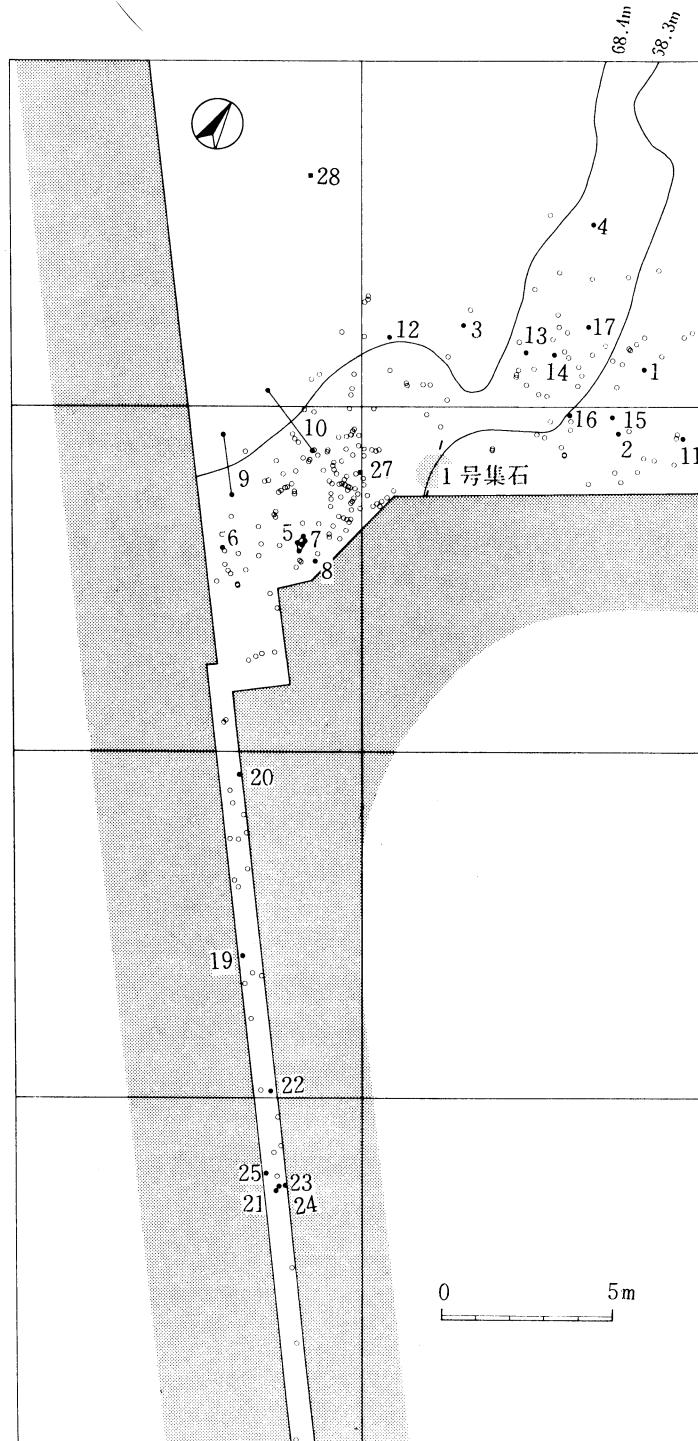
#### 2 遺構

遺構は、X層下面に集石遺構が1基検出された。集石遺構の時期は、共伴する確かな遺物はみられないが、遺物の層位的な出土傾向から包含層の形成された時期に該当することが考えら

れる。遺跡は、包含層の検出状態から南側の用地外から前畑遺跡へと広がることが想定される。

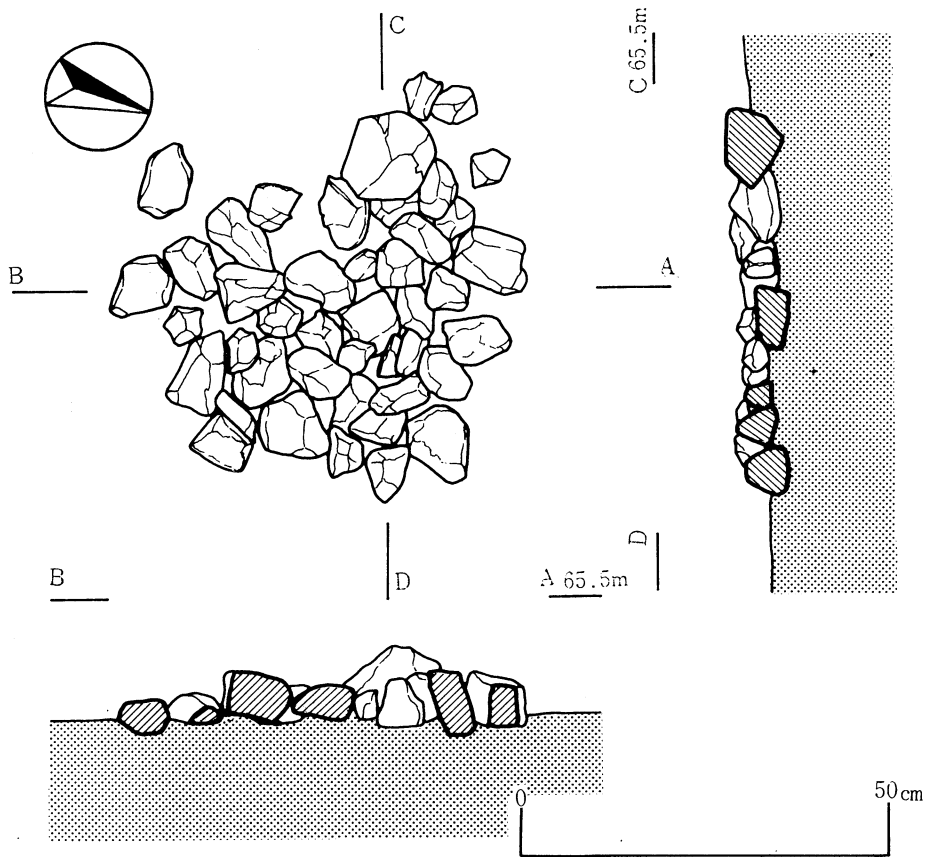
**集石1号 (第6図)**

集石遺構1号は、A2区の用地外に近い位置に検出されている。集石1号は、径60cm×60cmの円形プランを呈した小規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数47個で、ほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系(現在の採石場と同じ岩)に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5cm未満のものが2個と10cm以上のものが6個で、他の39個は5cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、0~100g=5個、101~200g=15個、201~300g=8個、301~400g=12個、401~500g=3個、

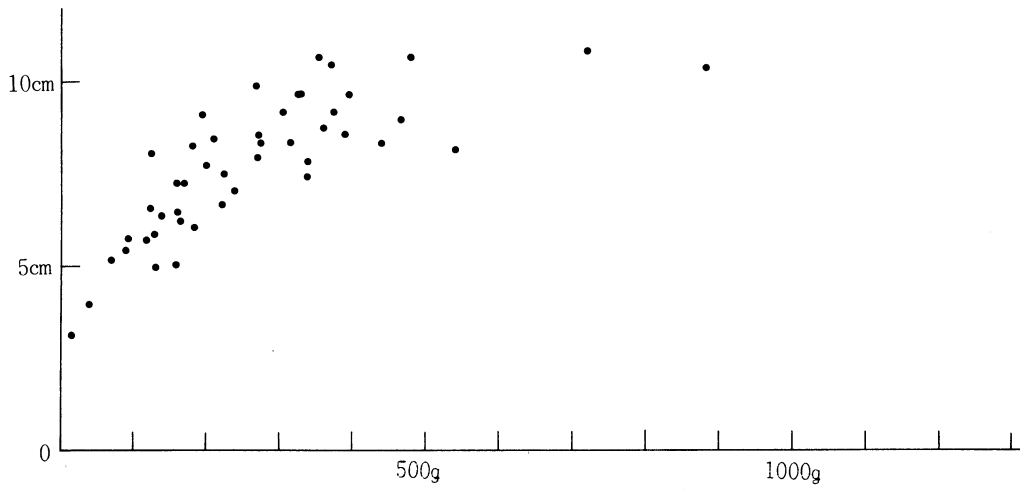


第5図 X層の遺構と遺物分布図

501 g 以上  
 = 4 個で、  
 100~400 g  
 の重さに集  
 中している。  
 第7図は大  
 きさ・重さ  
 の重量比を  
 現わしたグ  
 ラフである  
 が、大きさ・  
 重さとも比  
 較的小振り  
 な礫を使用  
 しているこ  
 とになる。



第6図 1号集石実測図



第7図 1号集石の石塊の最大長と重量比

### 3 出土遺物

X層出土の遺物には、土器と石器がある。土器は、総数 229 点を数えるが、大部分が細片で文様などは明確でなく保存状況は比較的悪い。石器は、打製石鏃（2 点）と磨石の計 3 点と少ない。

#### ① 土器

X層出土の土器は、総数 229 点の出土があり、そのうち実測可能なものは 25 点である。

出土土器は、本道建設部分の A～B 1～2 区と県道西原～郷之原線の水道管理設部分の Y～Z 1 区に分かれるが、18（D11 区出土）の 1 点を除けばほぼ類似する形態である。このため、本道建設部分の A～B 1～2 区出土の 1～17 と県道西原～郷之原線の水道管理設部分の Y～Z 1 区出土の 19～25 をⅠ類土器に類別する。そして、形態が若干異なる D11 区出土の 18 は、Ⅱ類土器に類別して説明する。

#### Ⅰ類土器（第 8 図～第 10 図－1～17・19～25）

Ⅰ類土器は、A～B 1～2 区と Y～Z 1 区にかけて総数 228 点の出土がみられ、そのうち 24 点の実測可能なものであった。基本的には、口縁部は「く」字に外反して波状口縁をなすタイプである。1・2 のように凹線文と円形刺突連点文で文様を構成するものが考えられるが、5・6 に代表されるように器形は類似するが文様が施文されない無文のタイプが比較的多いのが本遺跡の特徴といえる。以下、個別に説明する。

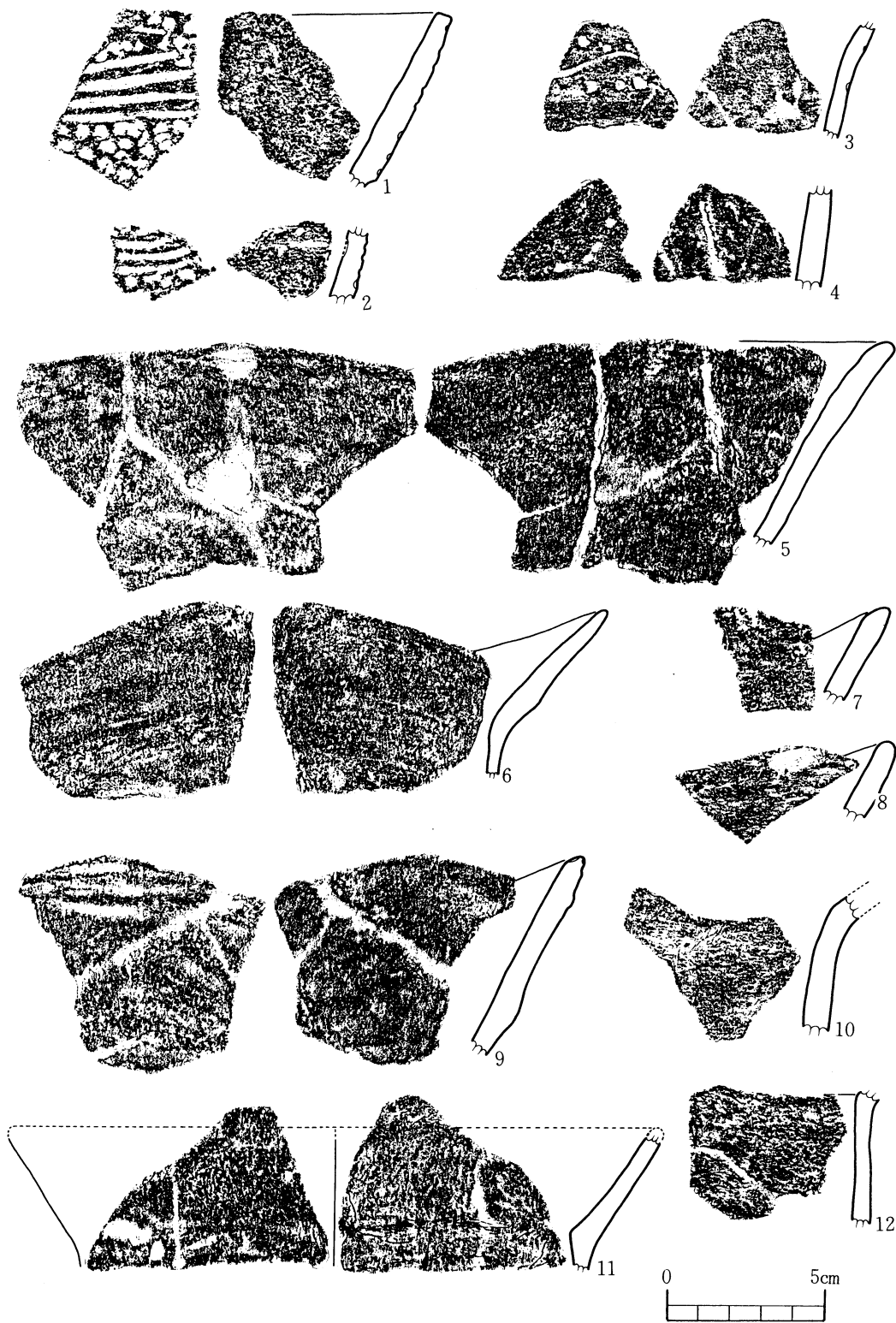
1・2 は、同施文形態で同一個体と考えられるもので、外反する口縁部片である。口唇部は平坦に納め、その平坦面には刻目を施す。口縁外面には、平行凹線文と円形刺突連点文を施文する。

3 は、頸部から口縁部付近の外反する部位で、2 列の円形刺突連点文間には波状の凹線文が施文される。4 は、保存が悪く拓本が鮮明に打ち出されていないが、円形刺突連点文が幾何学的に施文されるタイプである。

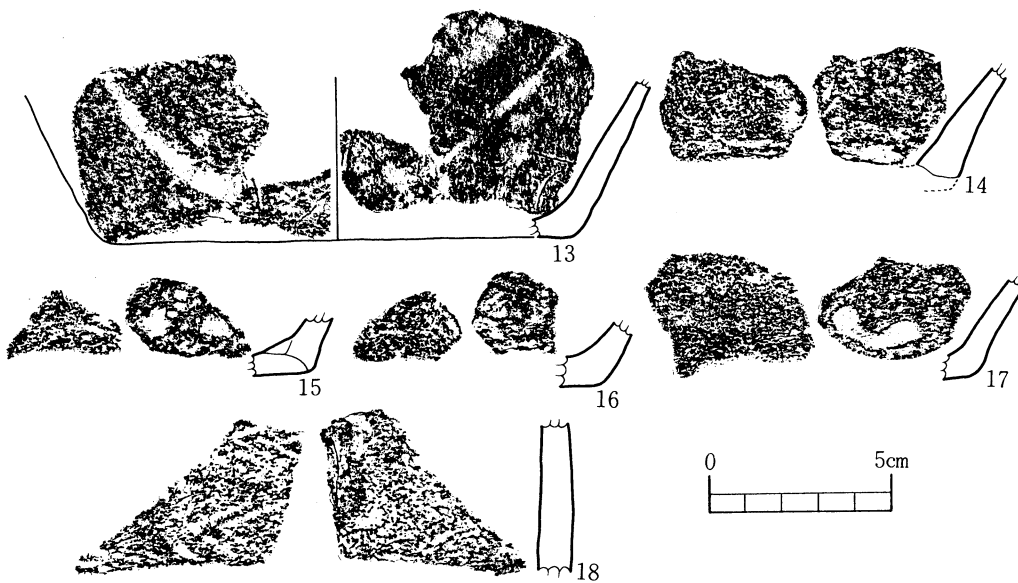
5～11 は、口縁部付近の破片で無文のタイプである。5 は平縁口縁が看取されるが、6～9 は波状口縁を呈する。口縁部は、二重口縁状の屈曲をもって大きく外反する。ほとんどが無文であるが、9 の波頂部には僅かに施文がみられる。波頂部の口唇平坦部には刻目が施され、口縁外面の波頂部下位には横位に突帯文が貼付される。そのほかの器内外面はいずれも無文である。

「く」字口縁をなす頸部の状態を観察できるものは少ないが、6・10 は丸みをもって屈曲している。11・12 は鋭く屈曲して内面に稜をつくる。この違いは型式の違いが考えられるが、いずれも器面が無文のため不明である。

13～17 は、底部片である。いずれも平底の底部から胴部へ大きく外反して立ち上がる。13 は底径が観測できるものであるが、約 12.8cm と比較的大きい底径をもつ。器面は摩滅が強いが、



第8図 土器実測図(1)



第9図 土器実測図(2)

丁寧なナデ整形が看取される。

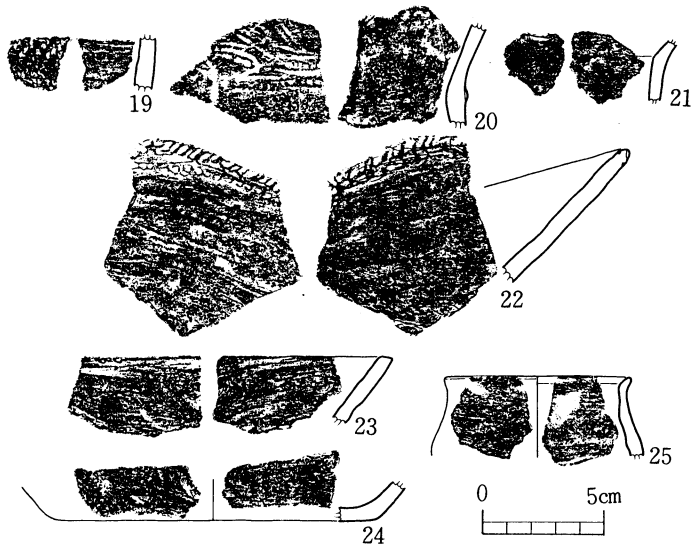
19～25は、県道西原～郷之原線の水道管理設部分のY～Z 1区出土のものである。

19は細片であるが、縄文の施文が看取される。20は、頸部の屈曲部付近である。内面には稜はみられず比較的柔らかく屈曲し、屈曲部分の外面には突帯文を施し、その上には刺突文が施されるが、全体に摩耗が激しいため不明瞭である。突帯文の上には凹線文が施文されるが、これも摩耗のため不明瞭である。21も頸部屈曲付近である。頸部が鋭く屈曲するため内面には稜をつくる。22・23は、口縁部片である。22は波状口縁の波頂部で、口唇部付近に施文がみられる。口唇部の外側の稜部には斜位に刻目が施文され、口唇部の内側と外側の刻目の直下には半截竹管状の施文具の刺突文が施文されるだけで、他の器面は無文で放置される。23も無文の口縁部片であるが、口唇部は平坦面をつくる。細片のため平縁口縁状にみられるが、波状口縁の可能性も強い。24は、底径約13cmが推測される底部片である。

25は、口縁部が締まった壺形の器形を呈する細片である。内外面はナデ整形で仕上げた無文の壺形土器で、口径約7.5cmの小形である。

## Ⅱ類土器 (第9図-18)

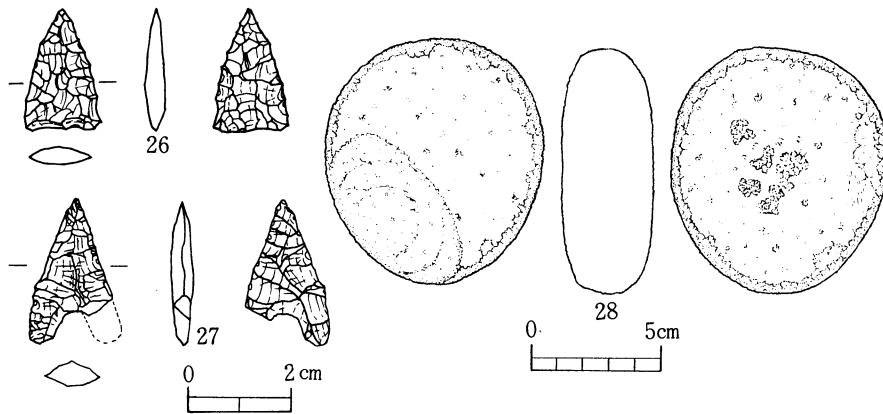
18は、D11区のⅢ層出土の胴部片である。Ⅱ類土器は、Ⅰ類土器とは出土区が全然異なり、また、出土層位もⅢ層の弥生期の包含層に混入して出土している。さらに、摩耗が激しく、土器片の表面は剥落している。しかし、胎土には長石や石英粒を多量に含み、非常に堅緻な焼成である。器面には、貝殻腹縁の刺突文が羽状に施文されている。



第10図 土器実測図(3)

② 石器 (第11図-26~28)

石器は、打製石鏃2点と磨石1点の計3点の出土である。26は、D1区のX層出土の打製石鏃である。長さ2.3cm、幅1.2cm、重さ1.0gを測る平基式のタイプである。石材は、石英である。



第11図 石器実測図

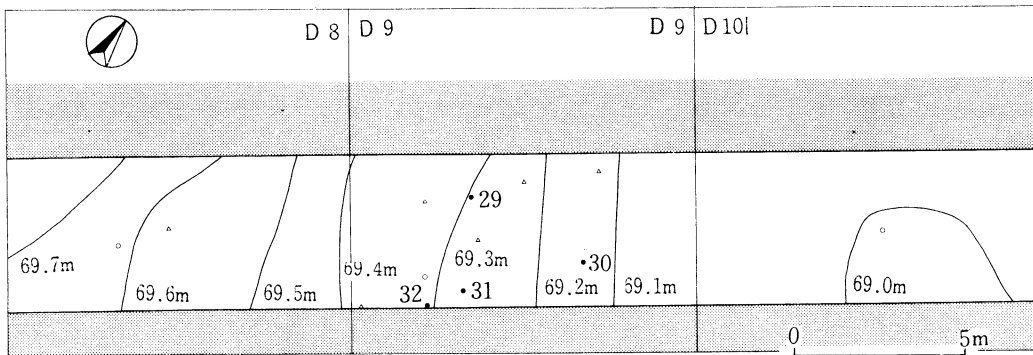


27は、A1区のX層出土の打製石鏃である。長さ2.8cm、幅1.6cm、重さ1.4gを測る凹基式のタイプである。石材は、黒耀石である。

28は、B1区のX層出土の磨石である。長さ9.5cm、幅8.3cm、重さ410gを測る。石材は、花崗岩である。

## 第2節 V層の調査

V層の調査は、確認調査の各トレンチにおいて包含層の確認を行なった。その結果、D8区～D10区において遺物包含層が確認され、この部分を拡張して調査を行なった。遺物総数は7点で、すべて土器である。土器は、研磨仕上げの精製土器と条痕仕上げの粗製土器があり、4点が実測可能であった。V層包含層からは、そのほかに6点の礫が確認されている。V層出土の土器は、その形態から縄文時代晩期に該当するもので、層位的にも符合するものである。V層出土の土器を、Ⅲ類土器とする。なお、周辺のV層該当層やⅢ層から磨製石斧1点と打製石斧2点が出土している。



第12図 V層の遺物分布図

### ① 土器

#### Ⅲ類土器 (第13図-29～32)

V層出土の縄文時代晩期に該当する土器は7点出土し、そのうち4点が実測可能であった。いずれも細片のため、器形等は不明である。

29・30は、研磨仕上げの精製土器である。29は、若干膨らみをもって厚くなり口唇部を丸く納める口縁部片である。30は、内面に外反するとき生じた稜をもつ頸部付近の破片である。

31・32は、器内外面を条痕で仕上げるタイプで、特に外面の条痕は強く深い。

### ② 石器 (第14図-33～35)

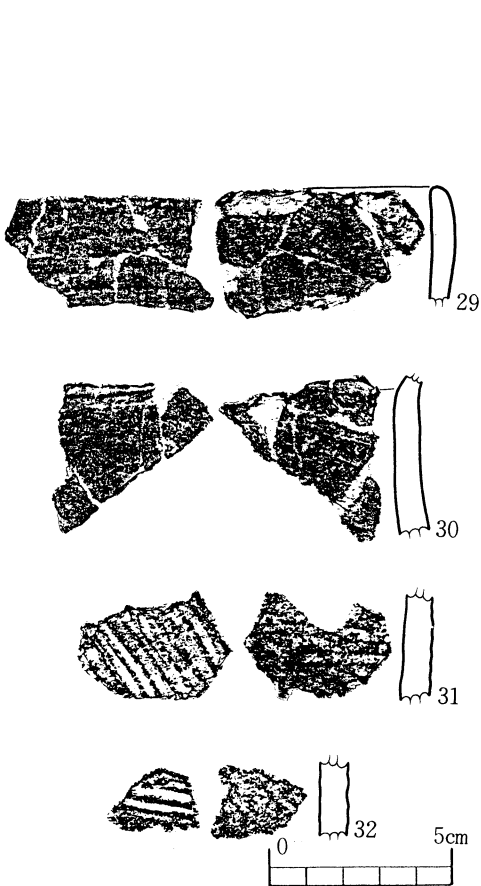
石器は、V層該当層やⅢ層(弥生時代包含層)から磨製石斧片1点と打製石斧2点が出土し

ている。縄文時代後期から晩期に該当するものと考えられる。

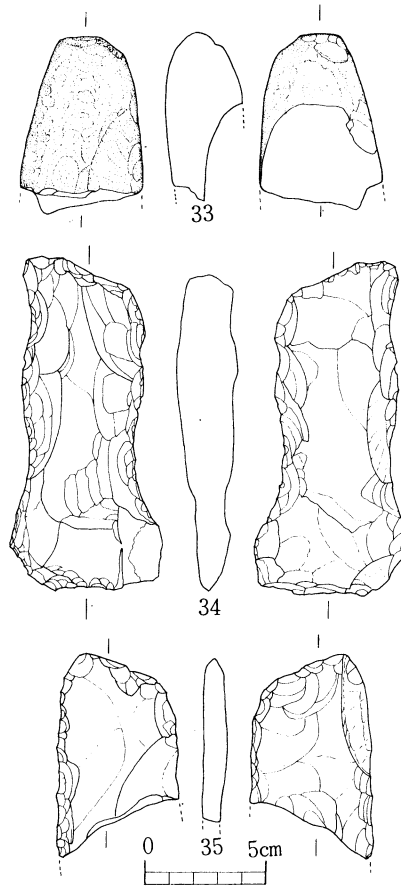
33は、D22区のV層出土の磨製石斧片である。乳棒状石斧の形態で、大きく破砕された基部だけの残存部と考えられる。石材はホルンフェルスである。

34は、表採資料の打製石斧である。上下端を僅かに欠くがほぼ完形に近いものである。中央より下半に有肩状のえぐりをもつものである。石材は、粘板岩である。

35は、D12区の弥生時代包含層から出土した打製石斧の半截品である。石材は、粘板岩である。



第13図 土器実測図



第14図 石器実測図

## 第Ⅲ章 弥生時代の調査

### 第1節 調査の概要

中原山野遺跡は、確認調査では、A B 7区～A B 14区間に弥生時代の遺物が散発的に出土した。

本調査の結果、弥生時代包含層は後世の削平を受け辛うじて残存する形であったが、A B 10区の取り付け道路付近に花卉状の間仕切りを備えた竪穴住居址が検出され、弥生時代の遺構の存在が確認された。

弥生時代の地形はB 11区を中心にして北側に向けて大きく凹地を形成しており、今回の本線調査区部分は中原山野遺跡の北端に位置していることを窺い知ることができる。すなわち、A B 10区で検出された住居址はこの集落の最北端の遺構として捉えることができ、中心は南側の用地外に存在することが想定される。

本遺跡で注目すべき成果のひとつに、弥生時代包含層や遺構（住居址）の基盤となっているⅣ層の火山灰状の軽石・粘土層の存在である。この軽石・粘土層は、アカホヤ火山灰層に酷似している。これまで、中ノ原遺跡や中ノ丸遺跡、前畑遺跡などにおいてはⅧ層のいわゆるアカホヤ火山灰を基盤として弥生時代の各遺構が存在しているが、本遺跡ではⅧ層に酷似した土質のⅣ層上に遺構が存在している。このことは、地層と弥生時代の遺構との問題に新たな視点を与えてくれた。

### 第2節 遺構

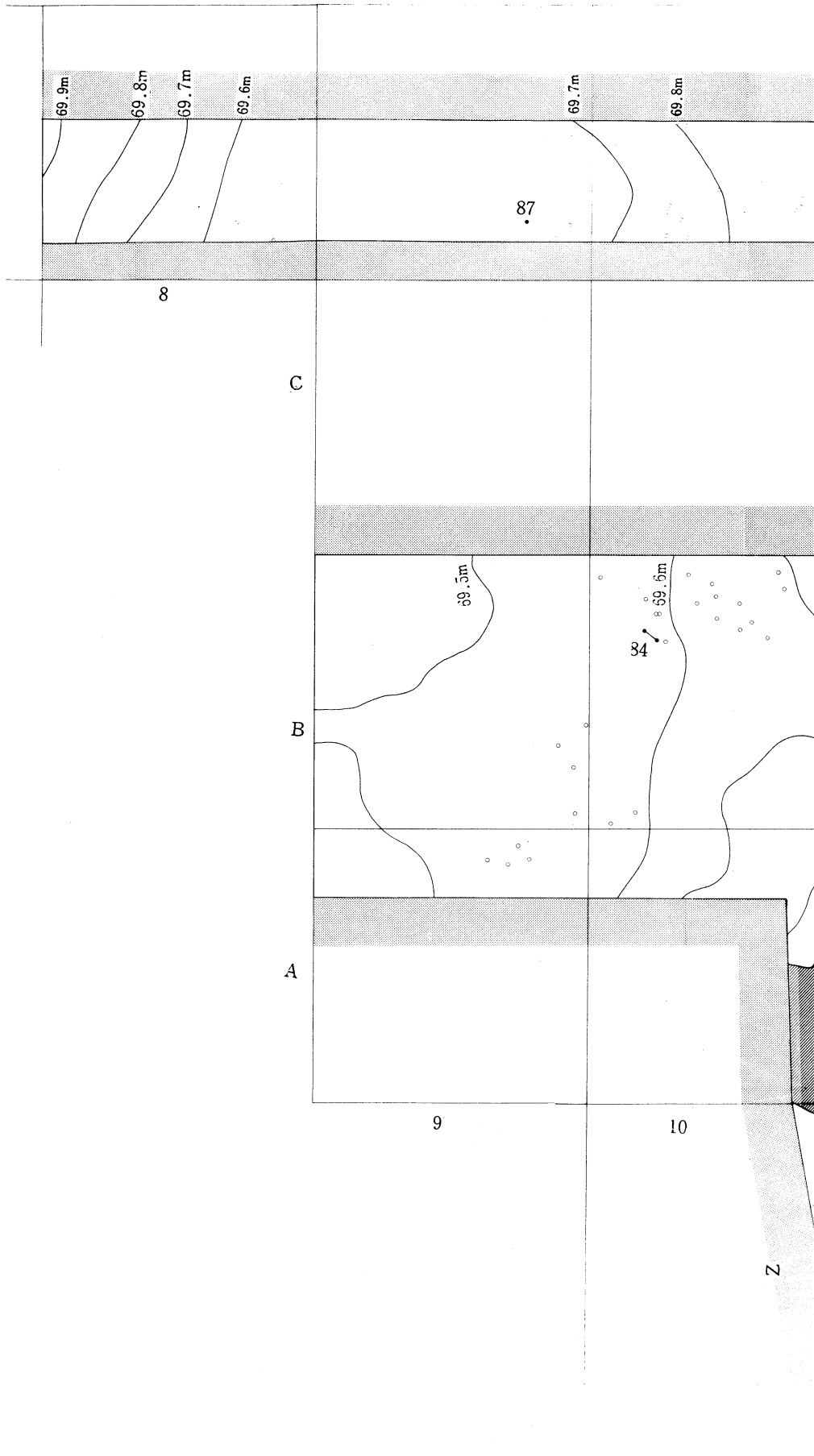
弥生時代の遺構は、A 10区を中心に検出された竪穴住居址が1基のみで他の遺構はみられない。しかし、今回の発掘調査によって、中原山野遺跡の北端を確認することができ、遺跡の中心は南側の用地外に広がることが判明した。

1号住居址は、A 10区を中心とした取り付け道路付近に検出され、住居址の一部は西側のA 9区へ延びている。なお、B区列の本道調査区では出土遺物はみられるものの遺構は検出されないところから本住居址は、本遺跡の北限の遺構と考えられる。発掘調査の結果、住居址の内部構造は次のようである。

#### 1 1号住居址（第16図～第18図）

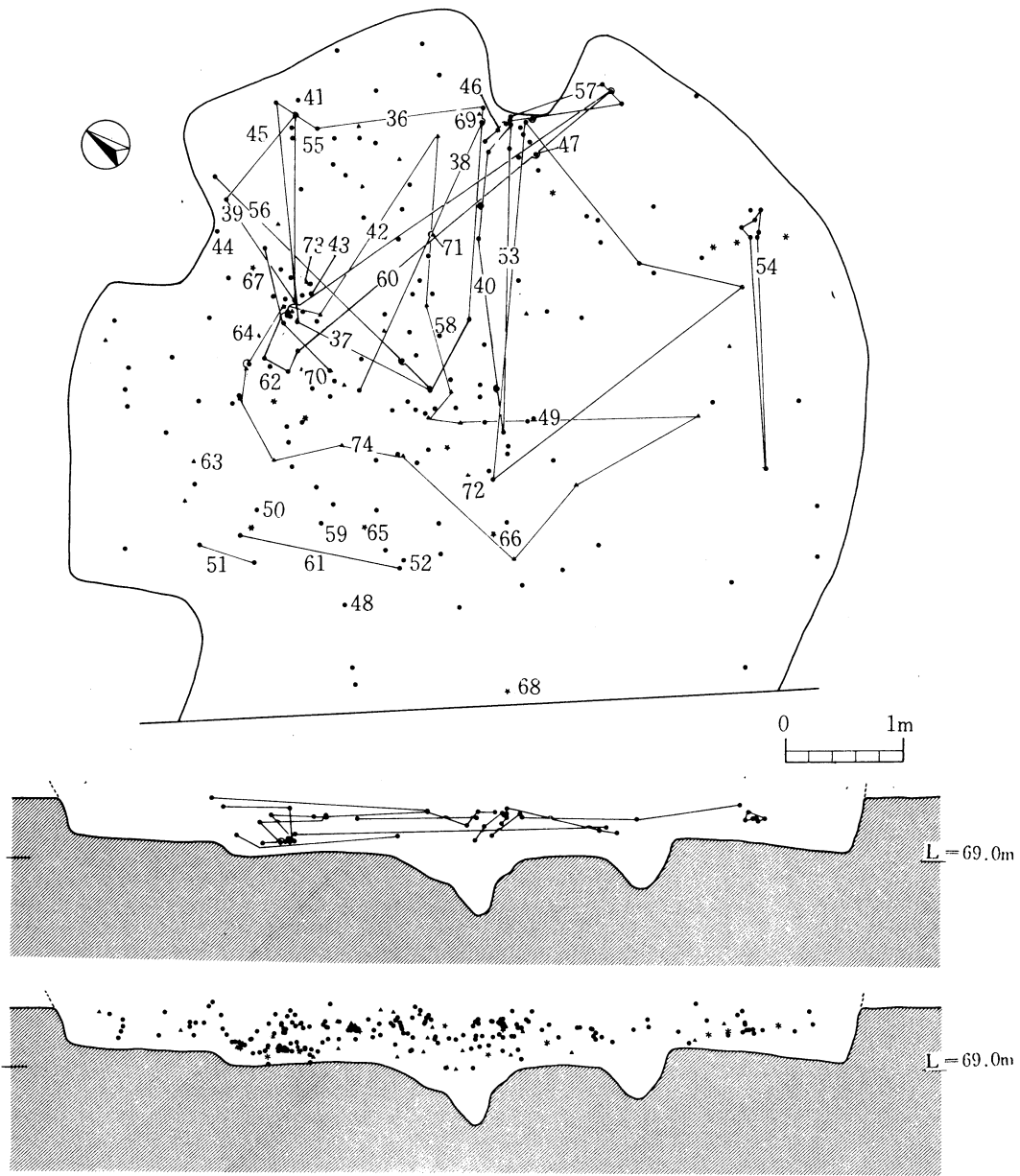
1号住居址は、ほぼ円形のプランで検出され、西側は一部用地外に延びる。住居址は、Ⅳ層の火山灰堆積層に掘り込まれ、この火山灰堆積層の下部を床面にしている。

検出面での住居址の平面プランの直径は、6.90m から7.20m を測り、約7m程度の規模である。住居址の周壁は、北西側と北東側と東側の三ヶ所に住居址の内部へ延びた間仕切りをつく

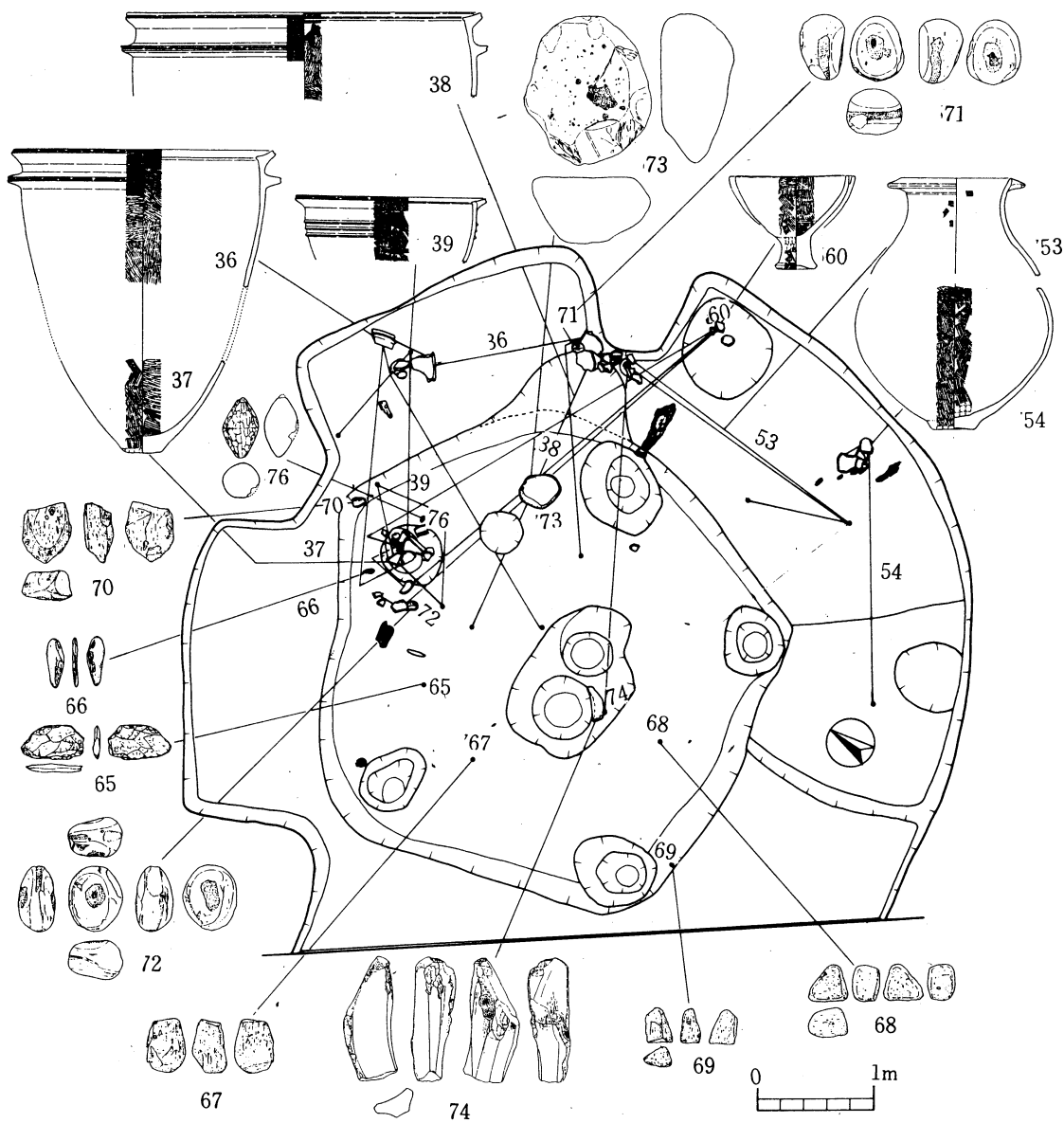




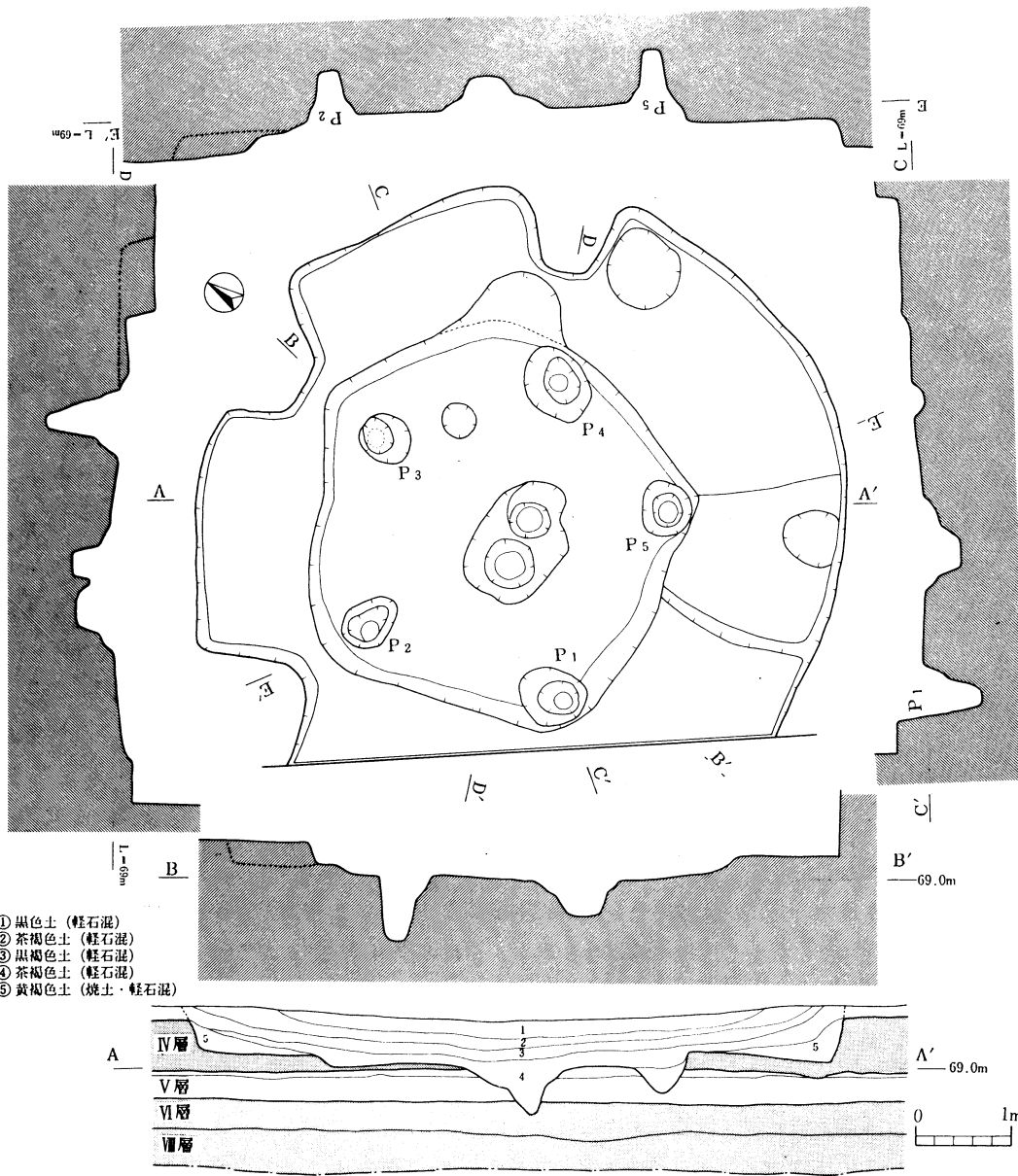
第15図 Ⅲ層の遺構と遺物分布図



第16図 1号住居址の遺物分布図



第17図 1号住居址の遺物出土状況図



第18図 1号住居址実測図



る。いわゆる花卉型住居址のタイプに属する。

住居址の床面は、中央が掘りコタツ状に一段低くなるタイプである。一段低い中央床面の深さは、約20cmを測る。そして、この中央の一段低くなった床面の隅には五本の主柱が位置している。主柱間の距離は、P<sub>1</sub>～P<sub>2</sub>は2.20m、P<sub>2</sub>～P<sub>3</sub>が2.05m、P<sub>3</sub>～P<sub>4</sub>が2.00m、P<sub>4</sub>～P<sub>5</sub>が1.80m、P<sub>5</sub>～P<sub>1</sub>が2.25mを測る。各柱穴は、ほぼ均一に配置している。住居址中央には、1.40m×0.90mの楕円形の掘り形をもつピットが存在する。そして、ピット内はさらに二つのピットに分かれる。ピットの深さは、床面から約0.50m～0.60mを測る。ピット内の埋土には、灰が多量に存在しており、炉穴の可能性が高い。

柱穴の規模は、P<sub>1</sub>は径55cm×深さ60cm、P<sub>2</sub>は径50cm×深さ50cm、P<sub>3</sub>は径60cm×深さ70cm、P<sub>4</sub>は径75cm×深さ75cm、P<sub>5</sub>は径50cm×深さ60cmを測り、いずれも規模は大きい。

周壁から延びる間仕切りは、約0.7m～0.8m程度、住居址内部へ張り出し、また、この三ヶ所の間仕切りの延長上には住居址の柱穴が位置している。この間仕切りに囲まれた部分は、一種のベッド状遺構となる。検出面の間仕切り上部から床面の格差は、25cm～30cmを測る。間仕切り間の距離は、P<sub>2</sub>～P<sub>3</sub>間は約2.60m、P<sub>3</sub>～P<sub>4</sub>間が2.70mとほぼ同幅を測る。これは住居址の柱穴の均等な配置に対応したことが考えられる。柱穴P<sub>5</sub>に対応する間仕切りは無く、この部分で西側に傾斜したわずかな段をつくる。これは、間仕切りが存在したものが住居址内のその後の利用の仕方を取り払われた可能性が考えられる。柱穴P<sub>1</sub>に対応する間仕切りは、周壁が用地外に延びるため不明である。

## 2 1号住居址の出土遺物 (第19図～第24図・第26図-36～74)

住居址内の出土遺物は、土器や石器など多彩で多い。特に、柱穴P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の付近から周壁にかけて集中している。

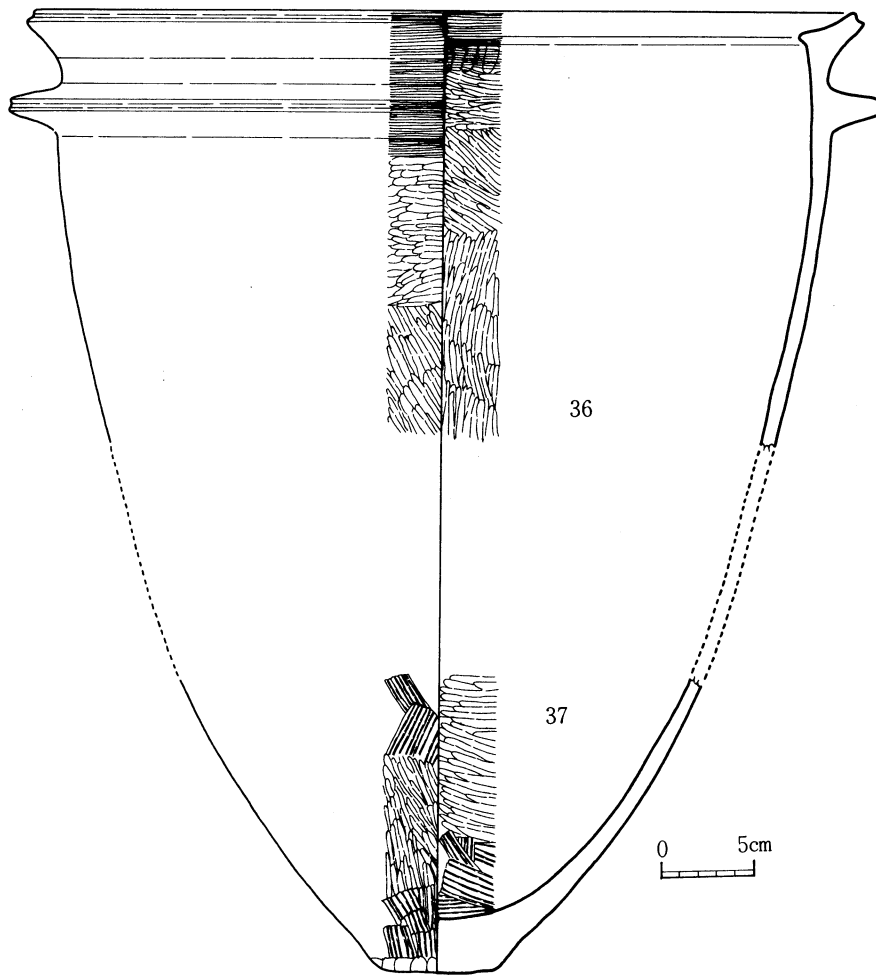
また、出土遺物と共に、比較的大きな炭化木が存在している。柱穴P<sub>4</sub>から南東に向けて検出された炭化木は、大木で主柱の可能性が高い。一種の焼失家屋であろう。

出土土器は、大甕、甕、壺、台付き鉢など多種の器形がみられる。石器は、スクレーパー、軽石製品、凹石、台石、砥石などである。そのほか、特異な遺物に、柱穴P<sub>3</sub>付近から土製の投弾が出土している。

土器は、大甕、甕、壺、台付き鉢の器種に分けられる。

36・37は、口径46.8cmを測る大型の甕形土器である。形態・胎土が類似するところから同一固体とした。口縁部はわずかに内湾し、端部は「く」字状に外反する。口縁部端面は、凹めて仕上げる。口縁内面は、わずかに内部に張り出す。口縁部外側直下には、断面台形状の太い貼付突帯文を巡らす。突帯文の端面は凹めて仕上げる。底部は平底で、外方へ大きく立ち上がり胴部へ続く。外面は、口縁部から貼付突帯まで横位のていねいな刷毛ナデの整形が施され、それ以下の突帯から底部までヘラ磨きで整形される。

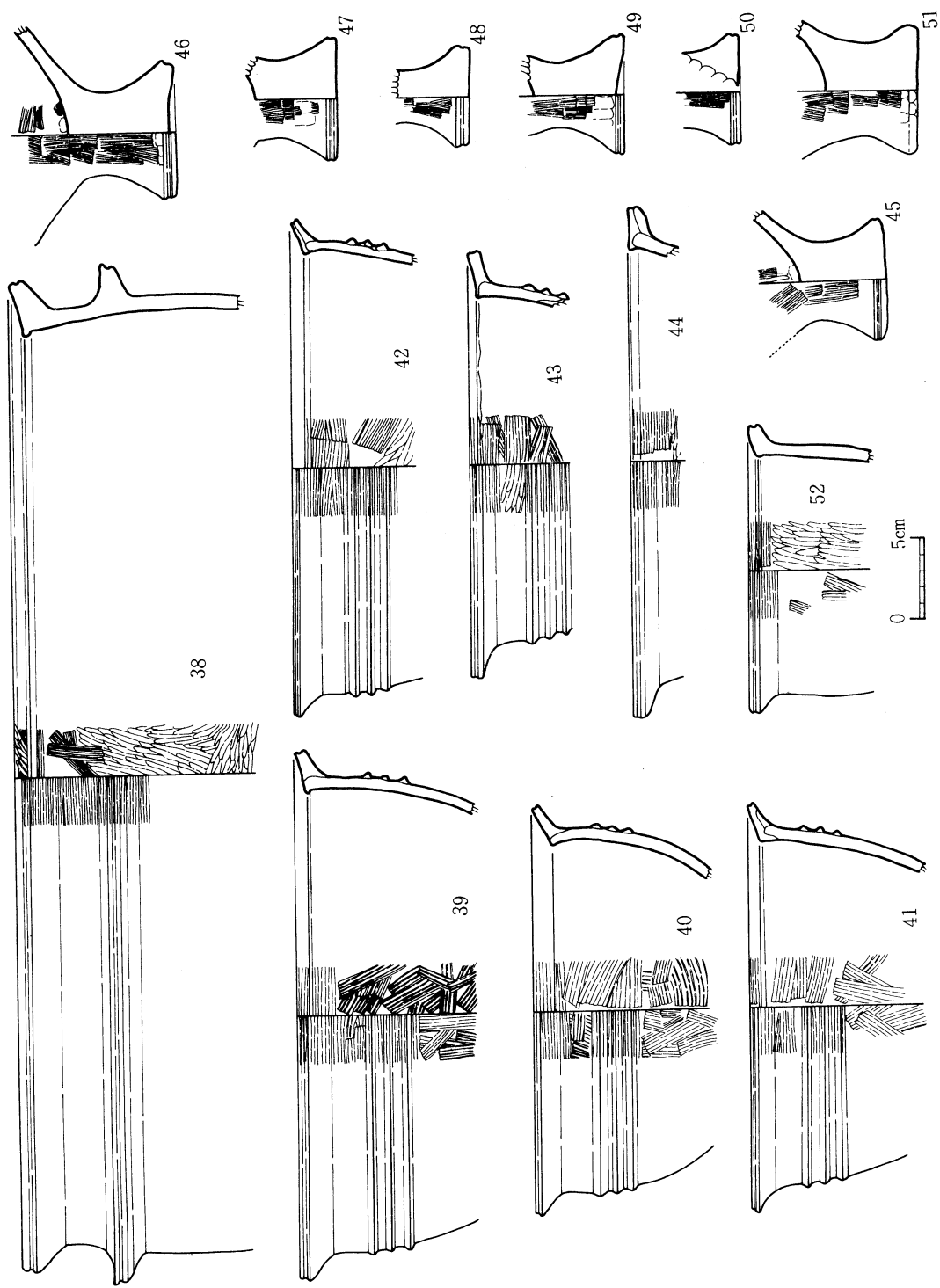
38も大型の甕形土器である。口径は、61.3cmと大きい。口径の大きさは異なるが、形態は36



第19図 1号住居址出土遺物実測図(1)

とほとんど同じである。

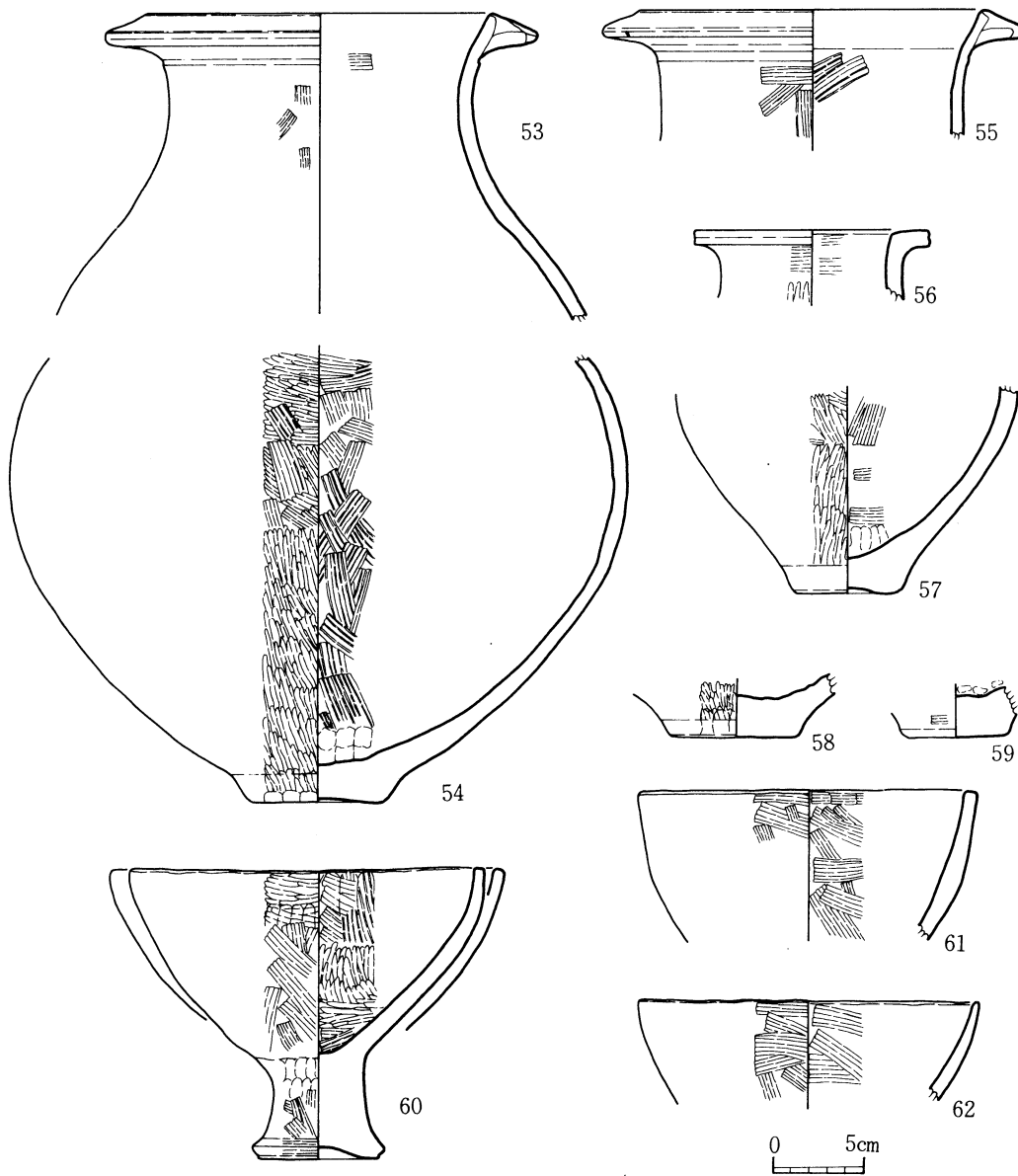
39～51は、甕形土器である。39～43は甕形土器の口縁部で、45～51はその底部である。口縁部は、「く」字状に外反するタイプで頸部には三条程度の貼付突帯文を巡らす。39・40のように胴部は球状に丸味をもって張るものと、42・43のように直線的な胴部がある。口縁部と突帯文間は横位のていねいな刷毛ナデ整形が施されるが、その他の部分は縦・横・斜位の粗い刷毛目がみられる。底部は、裾部が若干広がり、底面が充実した脚台である。一般的には底面は平坦な平底を呈するが、46・49のように上げ底状の凹面をつくるものもある。底部裾部の端部は面取りがおこなわれ、凹線状の凹みが施される。中には、51のように面取りをせず丸く仕上げるものもある。44は口縁部は平坦に外方に拡張するが、細片のため定かでない。52は、口縁部を「く」字状に外反させるタイプであるが、口径は18cmと小さく鉢状の器形を想定させる。



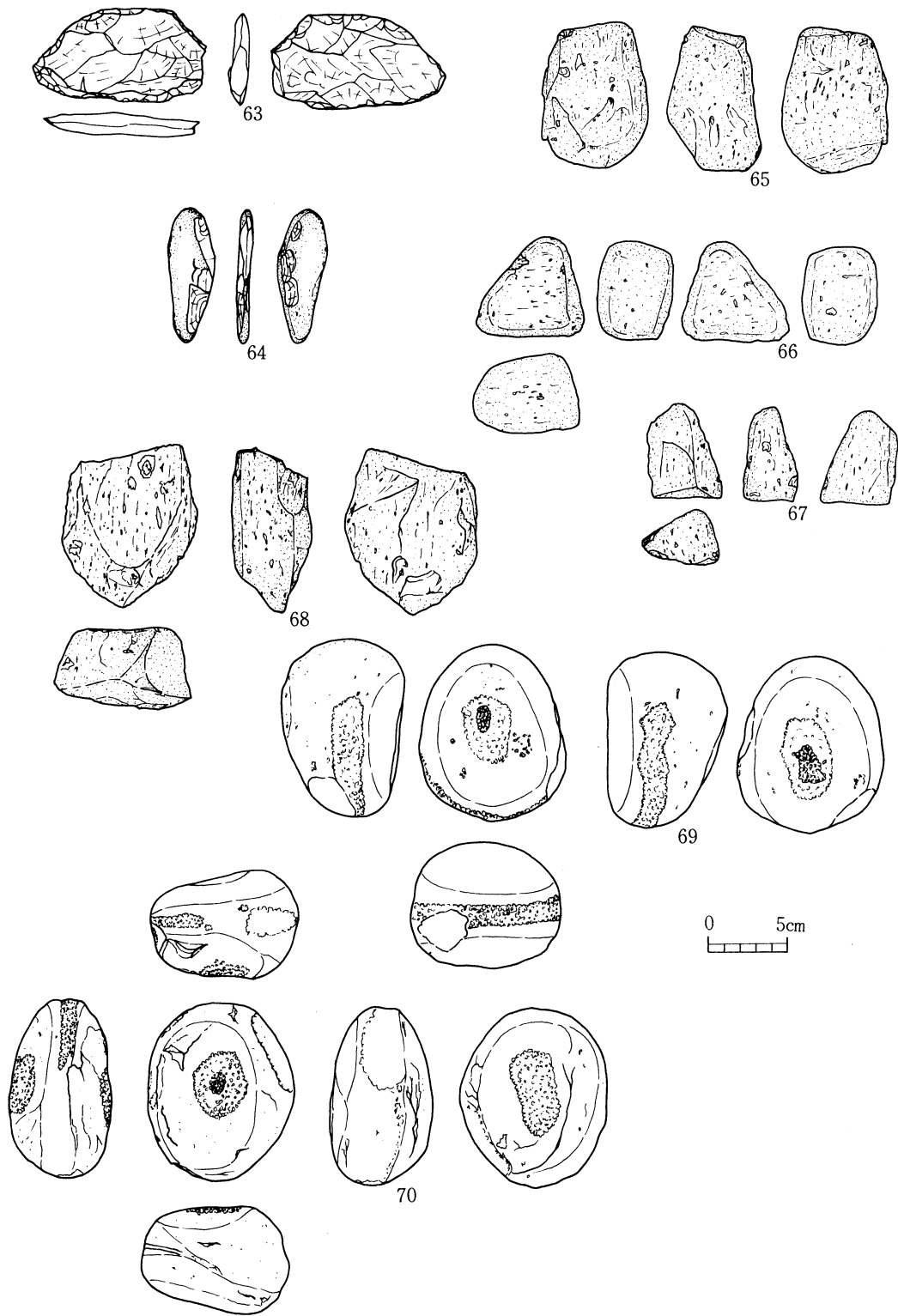
第20图 1号住居址出土遗物实测图(2)

53～59は、壺形土器である。53・55・56は口縁部片で、54・57～59は底部片である。53・55の口縁部は、頸部から直線的に立ち上がりわずかに外反して逆「L」字状の拡張部をつくる。拡張部は、先端が丸味をなす三角形のタイプである。56は、頸部から直線的に立ち上がり口縁は逆「L」字状に外反する。口径は13cmと小さく、小型壺の器形であろう。口縁部は丁寧な刷毛ナデ整形仕上げで、頸部は刷毛仕上げである。

54・57～59は、壺形土器の底部である。底径は、5.6～8.0cm程度の小型の底部である。小さ



第21図 1号住居址出土遺物実測図(3)



第22图 1号住居址出土遺物実測図(4)

い底部から大きく外反して立ち上がり、胴部は球状に膨らむ。胴部は刷毛目仕上げで、それ以下底部付近はヘラ磨き整形が施される。

60～62は、鉢形の器形を呈する。60は完形品であるが、鉢に脚台を付けた特殊な器形を呈する。口径は18cm×21cmを測り、平面形は楕円形を呈する。器高は、16cm程度の高さを測る。底部から外反して立ち上がり、口縁部付近はわずかに内湾し、口縁端部は平坦におさめる。60の脚部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台である。底面は、上げ底状のわずかな凹面をつくる。壺形土器の底部に類似する。

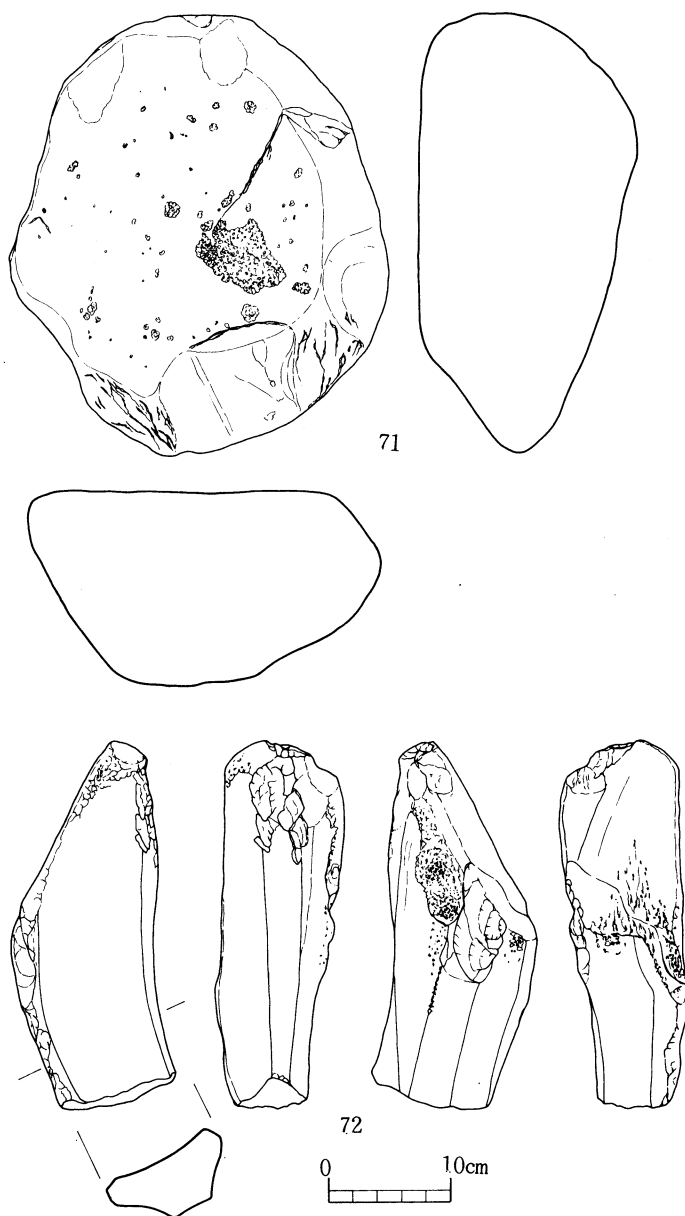
出土石器は、スクレーパー、軽石製品、凹石、台石、砥石などである。

63は、粘板岩製の横刃形のスクレーパーである。

64は細長い扁平な自然礫であるが、横位置に剝離が施される。

65～68は、軽石である。部分的に擦り面が観察される。

69・70は、凹石・敲石である。69は、安山岩を使用した凹石であるが、敲石にも利用している。長径11.1cm、短径9.3cm、厚み7.6cm、重さ1,070gを測る。表裏とも、浅く広い凹みが存在する。側縁には敲打痕がみられ、敲石にも使用されている。70は半花崗岩を使用した凹石であるが、敲石にも利用している。長径11.2cm、短径9.3cm、厚み6.3cm、重さ865gを測る。表には浅く広い凹みが存

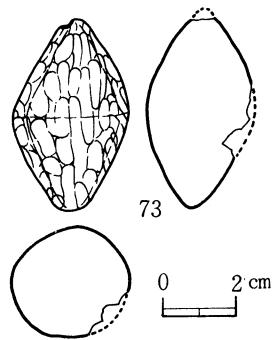


第23図 1号住居址出土遺物実測図(5)

在し、裏面にはわずかに凹んだ敲打痕跡が残る。側縁には敲打痕がみられ、敲石にも利用している。

71は台石で、柱穴P<sub>3</sub>の北側に出土した。長径36.1cm、短径31.0cm、厚さ18.0cmを測る。平坦面は滑らかになって、部分的に敲打痕が確認される。石材は、砂岩質ホルンフェルスである。

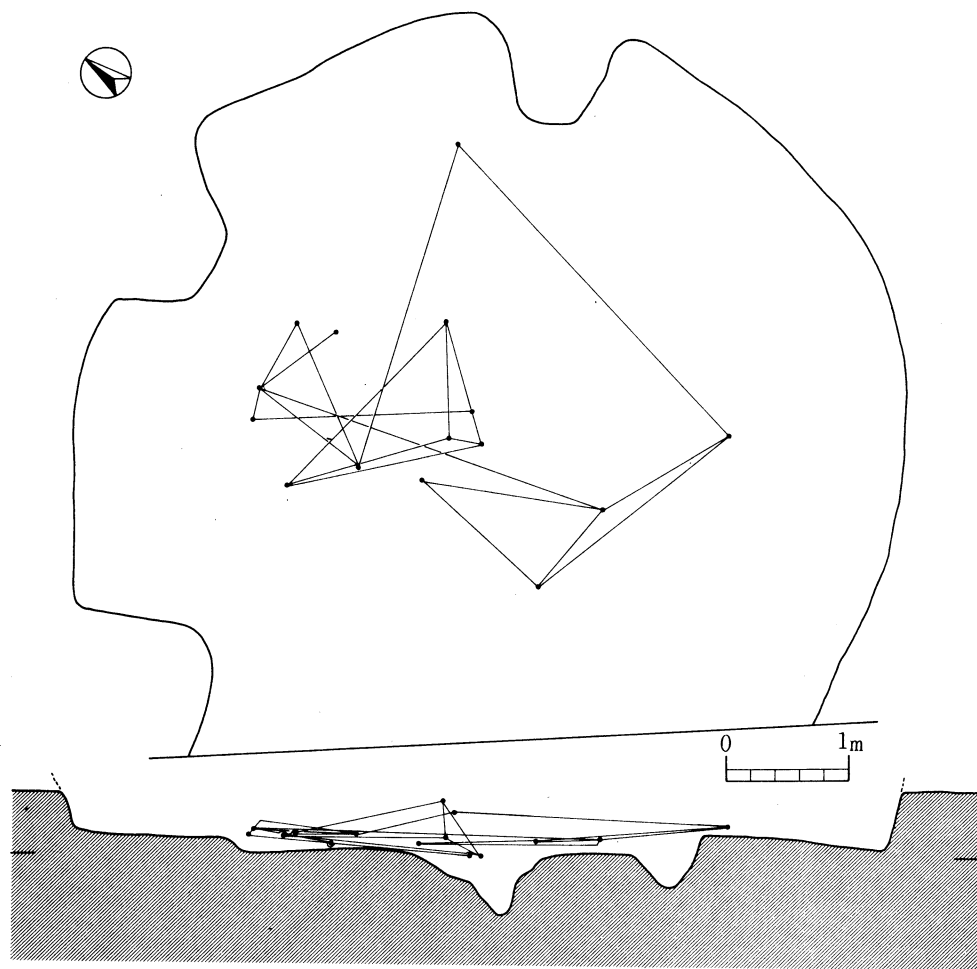
72は砂岩製の砥石で、住居址の中央ピット内からの出土である。最大長30.0cm、最大幅11.6cm、重さ3,600gを測る。自然礫面を多く残すが、よく使用され5面から6面にかけて研ぎ面がみられる。



第24図 1号住居址出土遺物実測図(6)

そのほか、特異な遺物に、柱穴P<sub>3</sub>付近から土製の投弾が出土している。

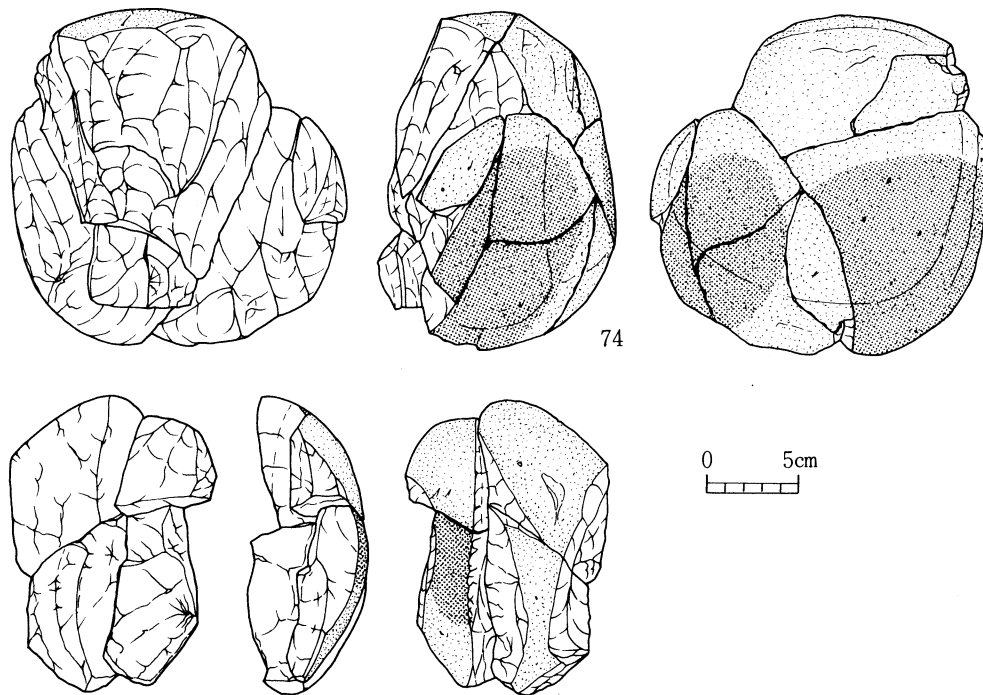
73が土製の投弾で、紡錘形(ラグビーボール状)を呈するが、先端部をわずかに欠損してい



第25図 1号住居址出土破碎礫分布図

る。長さ5.1cm、厚さ3.2cm×2.9cm、重さ37gを測る。投弾は紡錘形で、最大径はほぼ中央に位置し、堅く焼きしめられ、先端の一部と最大部の一部がわずかに剝離欠損している。

74は、破碎礫である。この破碎礫は、人工的に打撃を加えて破碎した痕跡はみられない。住居址の中央部の床面を中心に出土した破碎礫が、接合されたものである（第25図）。本来は一固体のものであるが、破碎礫が若干不足するため二固体となっている。接合礫は直径約13cm程度の円形に近い形の河原石で、表面は滑らかである。砂岩質である。接合礫を観察すると、火を受けた痕跡が強く残っている（第26図の網目部分）。つまり、火力で破碎した可能性が強い。



第26図 1号住居址内出土の破碎礫



### 第3節 出土遺物

中原山野遺跡では、1号住居址を除けば包含層から一般の出土遺物は少ない。AB7区～AB14区にかけて土器片が総数約1,100点出土した程度で土器以外の出土がみられない。

#### 1 土器 (第27図-75～87)

##### 1) 甕形土器

75～80は、甕形土器である。75は、口縁部は「く」字状に外反するタイプである。胴部は膨らみを持ち、口縁部直下で胴部のやや上部に三条の貼付突帯を巡らせる。76は口縁部が同じく「く」字状に外反するタイプであるが、75とは形態が若干異なる。「く」字状の口縁端部は、同じ厚さで力強く平坦におさめ、端部の平坦面には凹線状の凹みをつける。口縁下の貼付突帯文は、台形状のしっかりしたもので端部は口唇状に凹む。このタイプは、平底の甕形土器の可能性もある。いずれも、口縁部や突帯間は、横位の丁寧な刷毛ナデ整形が施され、その他の部分は、刷毛目仕上げである。77・78は細片のため定かでないが、口縁部が逆「L」字状から水平に拡張するタイプである。79・80は、甕形土器の底部である。底部は、裾部が若干広がり、底面が充実した脚台である。底面は、平坦な平底を呈する。底部裾部の端部は面取りがおこなわれ、凹線状の凹みが施される。81は、低い脚台で裾部も広がらず裾端部の面取りもおこなわないもので、一般的な甕形土器の底部とは若干異質な器形を呈する。

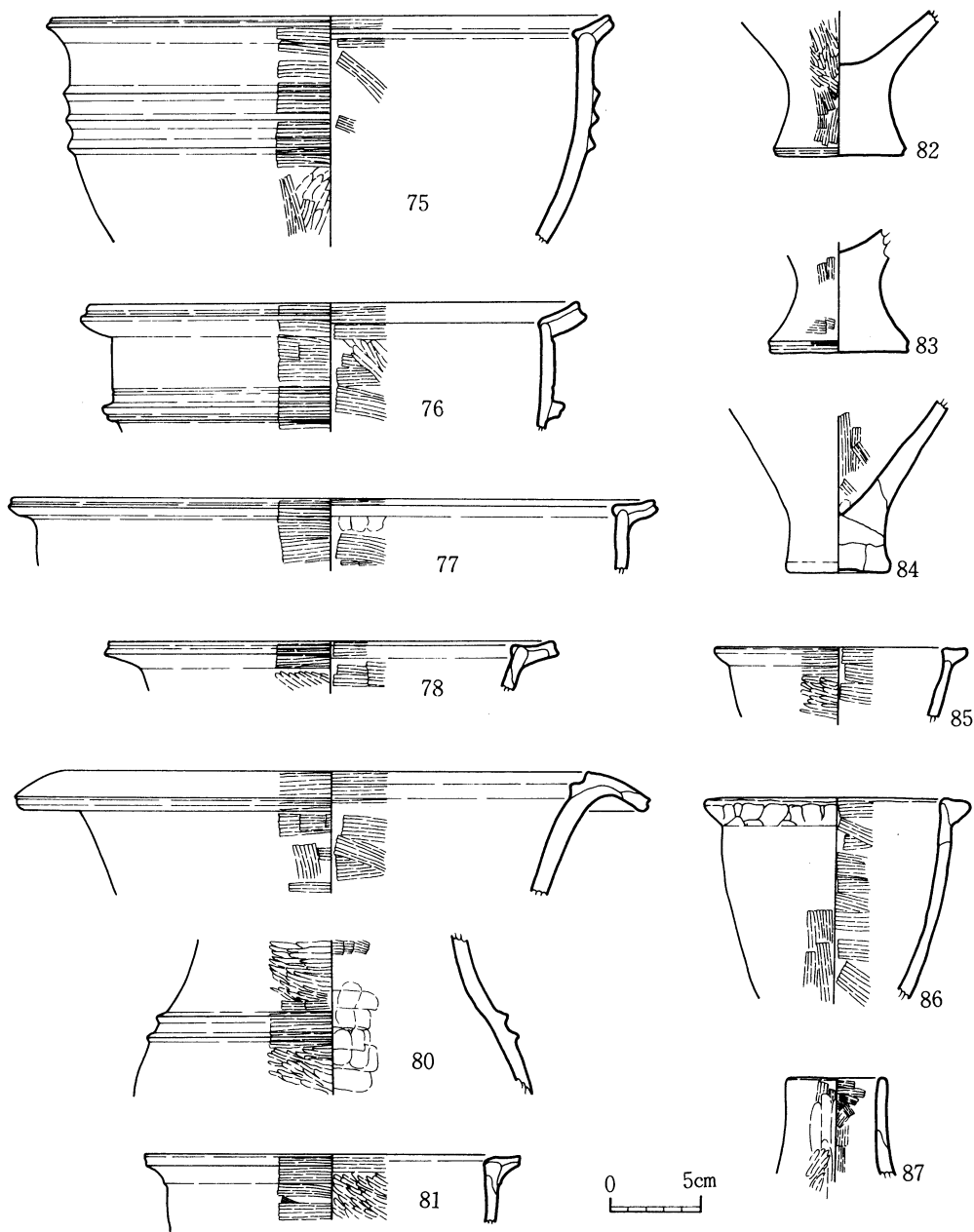
##### 2) 壺形土器

82・83は、壺形土器である。82は、大きく外反した口縁部は外方に垂れ下がり気味に拡張する。口径は大きく、35cmを測る。口縁内面には、削り出した突帯文を巡らせている。83は、頸部から肩部片で、肩部には二条の突帯文を巡らせている。

##### 3) 鉢形土器

84～86は、鉢形土器である。口径は、84は20.7cmと大きい、85は14.0cmで86は14.6cmを測る一般的な大きさを呈する。胴部は直線的に外反し、口縁部は逆「L」字状に短く拡張する。86は、口縁拡張部を指頭で貼付した痕跡を残す。

87は、口径5.6cmを測る直行口縁部片である。



第27图 出土遺物実測図

第1表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)	胎土	調整	焼成	色調	備考
1	I	70.35	2-B X	深鉢	口縁部	器壁厚 0.65~0.9	長石・石英	ナ デ	良好	暗褐色	
2	〃	69.28	A-2 〃	〃	胴部	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	茶褐色	
3	〃	69.545	B-2 〃	〃	〃	〃 0.5~0.6	〃	〃	〃	〃	
4	〃	69.34	〃 〃	〃	〃	〃 0.85	〃	〃	〃	〃	
5	〃	69.53 他	A-1 〃	〃	口縁部	〃 0.6~0.8	長石・石英 角閃石	〃	〃	〃	
6	〃	69.46	〃 〃	〃	〃	〃 0.35~0.8	長石・石英 細粒	〃	〃	〃	無文
7	〃	69.36	〃 〃	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	
8	〃	69.555	〃 〃	〃	〃	〃 0.65~0.8	〃	〃	〃	〃	
9	〃	69.395 他	〃 〃	〃	〃	〃 0.7~0.85	〃	〃	〃	〃	
10	〃	69.59	〃 〃	〃	口縁部 近く	〃 0.75~0.85	〃	〃	〃	黄茶褐色	
11	〃	69.345	A-2 〃	〃	〃	口径 20.4	長石・石英 微粒	〃	〃	茶褐色	
12	〃	69.51	B-2 〃	〃	〃	器壁厚 0.5~0.65	長石・石英 細粒	〃	〃	〃	
13	〃	69.39	〃 〃	〃	底部	底径 12.8	長石・石英	〃	〃	赤褐色	
14	〃	69.465	〃 〃	〃	底部 近く	器壁厚 0.5~1.1	長石・石英 細粒	〃	〃	黄褐色	
15	〃	69.275	A-2 〃	〃	底部	〃 0.75~1.0	長石・石英 微粒	〃	〃	茶褐色	
16	〃	69.31	〃 〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	長石・石英 細粒	〃	〃	茶褐色	
17	〃	69.41	B-2 〃	〃	〃	〃 0.5~0.75	長石・石英	〃	〃	赤褐色	
18	II	70.0	D-11 〃	〃	胴部	〃 0.8~0.9	長石多量 石英	〃	〃	茶褐色	器面は全体 剝落、貝殻 羽状刺突文
19	I	69.145	Z-1 〃	〃	〃	〃 0.65~0.75	長石・石英	〃	〃	〃	縄文施文
20	〃	69.155	〃 〃	〃	〃	〃 0.55~0.9	長石・石英 細粒	〃	〃	〃	
21	〃	69.015	Y-1 〃	〃	口縁部 近く	〃 0.4~0.6	長石・石英 細粒金雲母	〃	〃	〃	
22	〃	68.985	Z-1 〃	〃	口縁部	〃 0.5~0.7	長石・石英 細粒	〃	〃	〃	
23	〃	69.08	Y-1 〃	〃	〃	〃 0.6~0.7	砂粒を 含まない	〃	〃	〃	
24	〃	69.085	〃 〃	〃	底部	底径 13.0	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
25	〃	68.945	〃 〃	〃	口縁部	口径 7.5	長石・石英 細粒	〃	〃	〃	
29	晩	69.42	D-9 V	〃	〃	器壁厚 0.5~0.65	〃	〃	〃	〃	研磨土器
30	〃	69.135	〃 〃	〃	口縁部 近く	〃 0.5~0.8	長石・石英	〃	〃	〃	〃
31	〃	69.275	〃 〃	〃	胴部	〃 0.7~0.8	長石 石英・多粒	条痕	〃	〃	
32	〃	69.44	〃 〃	〃	〃	〃 0.75	〃	〃	〃	〃	
36	弥	69.29 他	1号住	甕	復元	口径44.0 復元高 52	石英・長石 黒雲母	㊸ミガキ ㊹ハケ→ナデ	〃	㊸暗黄褐色~黒褐色 ㊹暗黄褐色~燈褐色	スス付着

第2表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
37	弥	69.36	他	1号住	甕 復元	底径 6.4 復元高 5.2	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ ㊦ハケ→ナデ	良好	㊦茶褐色 ㊦黒褐色	
38	〃	69.35	他	〃	口縁部	口径 61.3	長石・石英 黒雲母	㊦ナデ・ハケ目 ㊦粗いハケ目	〃	燈褐色	
39	〃	69.455	他	〃	口縁 ~胴部	〃 32.4	〃	㊦	〃	茶褐色~暗茶褐色	スス付着
40	〃	69.2	他	〃	〃	〃 24.8	〃	〃	〃	〃	
41	〃	69.495	他	〃	〃	〃 24.6	〃	〃	〃	㊦黒褐色 ㊦暗茶褐色	スス付着
42	〃	69.1	〃	〃	〃	〃 30.2	〃	〃	〃	〃	
43	〃	69.175	〃	〃	〃	〃 26.0	〃	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊦暗黄褐色	
44	〃	69.56	〃	〃	〃	〃 26.4	〃	㊦ハケ目 ㊦	〃	㊦暗茶褐色 ㊦	
45	〃	69.34	〃	〃	底部	底径 7.5	〃	㊦ナデ・ハケ目 ㊦	〃	㊦暗黄褐色 ㊦	
46	〃	69.4	他	〃	〃	〃 8.8	〃	㊦	〃	㊦暗茶褐色 ㊦	
47	〃	69.745	他	〃	〃	〃 7.8	〃	〃	〃	㊦明黄褐色 ㊦	
48	〃	69.245	〃	〃	〃	〃 6.0	〃	㊦ハケ目 ㊦ナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦	
49	〃	69.365	〃	〃	底部	底径 7.5	長石・石英 黒雲母	㊦ヘラケズリ・ナデ ㊦ハケ目・ナデ	良好	㊦暗黄褐色 ㊦暗茶褐色 ㊦暗黄褐色	
50	〃	69.245	〃	〃	〃	〃 7.0	長石・石英 黒雲母・砂粒	㊦ハケ目・ナデ ㊦ナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦暗黄褐色	
51	〃	69.38	他	〃	〃	〃 8.0	長石・石英 黒雲母	〃	〃	㊦暗黄褐色 ㊦	
52	〃	69.39	〃	〃	口縁 ~胴部	口径 18.0	〃	㊦ハケ目・ナデ ㊦	〃	㊦暗褐色 ㊦暗黄褐色	スス付着
53	〃	69.205	他	〃	壺	〃 18.7	長石・石英 黒雲母・砂粒	㊦ハケ目 ㊦	剥落	㊦暗黄褐色 ㊦	
54	〃	69.35	他	〃	〃	胴径 33.8 底径 8.0	〃	㊦ミガキ ㊦ハケ→ナデ	良好	㊦茶褐色~暗茶褐色 ㊦黒褐色~暗黄褐色	
55	〃	69.305	〃	〃	口縁部	口径 18.3	長石・石英 黒雲母・砂粒	㊦ハケ目 ㊦	剥落	㊦暗黄褐色 ㊦暗茶褐色	
56	〃	69.51	他	〃	〃	〃 13.0	長石・石英 黒雲母	㊦ハケ目・ナデ ㊦	良好	㊦茶褐色 ㊦暗茶褐色	
57	〃	69.23	他	〃	底部	底径 6.4	〃	㊦ミガキ・ナデ ㊦ハケ目・ナデ	〃	㊦暗黄褐色 ㊦暗褐色	
58	〃	69.255	〃	〃	〃	〃 6.6	長石・石英 黒雲母・砂粒	㊦ハケ目・ナデ ㊦剥落	〃	㊦暗茶褐色 ㊦	
59	〃	69.14	〃	〃	〃	〃 5.6	〃	㊦ハケ目 ㊦ユビナデ	〃	㊦茶褐色 ㊦	
60	〃	69.275	他	〃	鉢 復元	口径 18.0 復元高 16.0	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦茶褐色~暗黄褐色 ㊦茶褐色~暗茶褐色	
61	〃	69.21	他	〃	口縁 ~胴部	口径 17.6	長石・石英 黒雲母	㊦ハケ目 ㊦ハケ目・ナデ	〃	㊦茶褐色 ㊦暗茶褐色	スス付着
62	〃	69.145	〃	〃	〃	〃 18.6	〃	㊦ハケ目・ナデ ㊦	〃	㊦暗茶褐色~暗褐色 ㊦暗褐色	〃
75	〃	69.53	他	A-11 III	甕	〃 31.5	〃	〃	〃	㊦黒褐色 ㊦暗茶褐色	〃
76	〃	69.595	他	B-12 III	〃	〃 28.0	長石・石英 黒雲母・砂粒	〃	〃	㊦黒褐色~茶褐色 ㊦暗茶褐色	
77	〃	69.58	他	〃	〃	〃 35.8	長石・石英 黒雲母・砂粒	〃	〃	㊦茶褐色 ㊦	
78	〃	69.425	〃	A-12 III	〃	〃 25.0	長石・石英 黒雲母・細粒	〃	〃	㊦黒褐色~暗茶褐色 ㊦暗茶褐色	

第3表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚) cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
79	弥	69.715	他	B-11	甕 底部	底径 7.4	長石・石英 黒雲母・細粒	⑧ハケ目・ナデ ⑨ハケ目・ナデ	良好	⑧暗茶褐色 ⑨黒褐色	
80	〃	69.87		D-12	Ⅲ	〃 7.8	〃	〃	〃	⑧暗黄褐色 ⑨暗褐色	
81	〃	69.67		B-11	Ⅲ	〃 7.8	〃	⑧剥落 ⑨ハケ目・ナデ	〃	⑧茶褐色 ⑨暗茶褐色	
82	〃	70.03		D-11	Ⅲ	口縁部 口径 35.0	〃	⑧ハケ目・ナデ ⑨ハケ目・ナデ	〃	⑧暗褐色～茶褐色 ⑨ハケ目・ナデ	
83	〃	69.59		A-11	Ⅲ	壺 胴部 胴径 22.0	長石・石英 黒雲母	⑧ハケ目・ナデ ⑨ガキ ⑩ユビナデ	〃	⑧茶褐色 ⑨暗褐色	
84	〃	69.58	他	B-10	Ⅲ	口縁部 口径 20.7	〃	⑧ハケ目・ナデ ⑨ハケ目・ナデ	〃	⑧暗黄褐色 ⑨暗褐色	スス付着
85	〃	69.87	他	B-11	Ⅲ	鉢 〃 14.0	〃	〃	〃	⑧暗茶褐色 ⑨茶褐色	
86	〃	69.58	他	B-13	Ⅲ	口縁部 ～胴部 〃 14.6	〃	⑧ハケ目・ナデ ⑨粗いハケ目	〃	⑧明黄褐色 ⑨暗茶褐色	
87	〃	69.64		D-9	Ⅲ	口縁部 〃 5.6	〃	⑧ハケ目・ナデ ⑨ハケ目・ナデ	〃	⑧暗茶褐色～茶褐色 ⑨明黄褐色	

第4表 出土石器一覧表

番号	品 種	出土区	層	標高	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重 量 (g)	備 考
26	石 鏃	D-1	X	69.53	石 英	2.3	1.25	1.01	
27	〃	A-1	〃	69.255	黒 輝 石	2.8	1.6	1.41	
28	磨 石	B-1	〃	69.595	花 崗 岩	9.5	8.3	410.0	
33	磨製石斧	D-22	Ⅵ	72.735	ホルンフェルス	7.3	5.0	120.0	
34	打製石斧		表		粘板岩	13.8	6.3	270.0	
35	〃	D-12	Ⅲ	70.055	〃	7.7	4.9	55.0	
63	横刃形石器	1号住		69.345	〃	5.9	10.9	108.27	
64	パンチ	〃		69.12	〃	8.4	2.9	23.00	
65	軽石製品	〃		69.32	軽 石	11.3	6.8	85.38	
66	〃	〃		69.11	〃	6.3	6.9	48.97	
67	〃	〃		69.15	〃	11.3	8.5	87.75	
68	〃	〃		69.355	〃	6.0	4.8	17.58	
69	凹石・敲石	〃		69.15	安山岩	11.1	9.3	1070.0	
70	〃	〃		69.175	半花崗岩	11.2	9.3	865.0	
71	台 石	〃			砂岩ホルンフェルス	36.1	31.0		
72	砥 石	〃			砂 岩	30.0	11.6	3600.0	
73	投 弾	〃		69.15	土 製	5.1	3.2	37.06	
74	礫 (接合)	〃		69.12	砂 岩	13.0	12.8	1510.0 340.0	

## 第Ⅳ章 発掘調査のまとめ

中原山野遺跡は、上層から戦跡遺構、弥生時代文化層、縄文時代文化層の三時代に及ぶ成果が得られた。調査区の幅が狭いこともあって断片的な資料ではあるが、用地外に延びる遺跡の在り方に重要な示唆を与えてくれた遺跡といえる。

### 第1節 縄文時代早期について

X層はA～B 1～2区に遺物の分布は限定され、遺跡は用地外の南側から西側の前畑遺跡に延びることが推定される。

X層はアカホヤ火山灰層直下に位置し、早期に該当することが想定される。A 2区の用地外寄りの位置に集石が1基検出された以外は、遺物の出土だけである。集石は、角礫総数僅か47個を保持するもので非常に小規模である。遺構は、遺物の分布からみると、南の用地外に拡がることが考えられる。

出土遺物には土器と石器があるが、石器は僅か3点と断片的である。土器は二類に細分され、本遺跡ではⅠ類を中心に出土しているが、Ⅱ類は僅か1片の出土で、しかもⅢ層に混入して発見された早期後半の土器である。

X層出土の主な土器は、Ⅰ類土器である。Ⅰ類土器は、紋様を有するものは少なく、その形態から、ほぼ一型式とすることができる。

第8図—1、2のように、数条の凹線文帯の両側に円形刺突文を施し幾何学的な紋様を構成するもの、円形刺突文間に波状凹線文を施すもの、口縁部に突帯文を貼付するものがある。これらの形態は、早期後半の平椀式土器に比定することができる。その他の口縁部の形態は、6、9のように、大きく外反し、途中で屈曲部をもったいわゆる二重口縁状を呈するタイプである。しかし、本遺跡出土の土器の特徴は、口唇部に刻目を施すだけで器面は無文のタイプがほとんどである。無文ではあるが、口縁部、頸部、胴部、底部の形態は、平椀式土器に類似し、平椀式土器の範ちゅうに属するものと考えられる<sup>(1)</sup>。

さらに、注目すべきは、25の器形である。僅か1点で細片ではあるが、深鉢にはみられない器形である。口縁部が内傾して細まり、深鉢にはみられない特殊な器形となる。この時期、前畑遺跡では壺形の器形が存在しており、平椀式土器の段階では顕著に器形変化を起こす時期と考えられる。今後の資料の増加を待ちたい。

Ⅱ類は、保存が悪いが貝殻腹縁刺突文で羽状文を施すタイプで、下剝峰式土器に比定されるものである<sup>(2)</sup>。

V層については包含層が僅かに残存し少量の遺物を出土するが、今回の調査区においてはその中心を捉えることはできなかった。

## 第2節 弥生時代について

本調査の結果、弥生時代包含層は後世の削平を受け幸うじて遺存する形であった。さらに、A B10区の取り付け道路付近に花卉状の間仕切りを備えた竪穴住居址が一基検出され、弥生時代の遺構の存在が確認された。そして、住居址内からは多量の遺物が出土しており、土器編年上、一括資料としての価値が高い。

弥生時代包含層はB11区を中心にして北側に向けて大きく凹地を形成しており、今回の本線調査区部分は中原山野遺跡の北端に位置していることを窺い知ることができる。すなわち、A B10区で検出された住居址はこの集落の最北端の遺構として捉えることができ、中心は南側の用地外に存在することが想定される。

本遺跡で注目すべき成果のひとつに、弥生時代包含層や遺構（住居址）の基盤となっているⅣ層の火山灰状の軽石・粘土層の存在である。この軽石・粘土層は、アカホヤ火山灰層に酷似している。これまで、中ノ原遺跡や中ノ丸遺跡、前畑遺跡などではⅧ層のいわゆるアカホヤ火山灰を基盤として弥生時代の各遺構が存在しているが、本遺跡ではⅧ層に酷似した土質のⅣ層上に遺構が存在している。このことは、地層と弥生時代の遺構との問題に新たな視点を与えてくれた。つまり、竪穴住居址の床面の位置が、如何に火山灰層と密接な係わりがあるかということである。本遺跡のⅣ層は、Ⅷ層のアカホヤ火山灰と性質・厚さとも酷似している。そのため、竪穴住居址の床面として最も条件の良いⅣ層中に床面が選定されたことを窺い知ることができる。同様なことは、喜入町下大原遺跡においても成川式土器期の住居址が薩摩火山灰層を床面にした珍しい例<sup>(3)</sup>が存在している。このことは、住居址床面の選定においては、その土地の地層をある程度選択していることが窺い知れる。

本遺跡では、竪穴住居址は一基のみの発見であったが、ほぼ円形のプランで直径は約7m程度の大型住居址の部類にはいるものである。住居址は三ヶ所に間仕切りをつくる花卉型住居址で、床面は、中央が掘りコタツ状に一段低くなりこの中央の一段低くなった床面の隅には五本の支柱が位置している。住居址中央のピット内の埋土には、灰が多量に存在しており、炉穴の可能性が強い。

周壁から延びる間仕切りには、柱穴が位置している。この間仕切りに囲まれた部分は、一種のベッド状遺構となる。

柱穴P<sub>5</sub>に対応する間仕切りは無く、この部分で西側に傾斜したわずかな段をつくる。これは、間仕切りがあったものが住居址内のその後の利用の仕方を取り払われた可能性が考えられる。

住居址内の出土遺物は、土器や石器など多彩であり多い。特に、柱穴P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の付近から周壁にかけて集中している。

また、出土遺物と共に、比較的大きな炭化木が存在している。柱穴P<sub>4</sub>から南東に向いて検

出された炭化木は、大木で主柱の可能性が高い。一種の焼失家屋であろう。

出土土器は、大甕、甕、壺、台付き鉢など多種の器形がみられる。石器は、スクレーパー、軽石製品、凹石、台石、砥石などである。そのほか、特異な遺物に、柱穴P<sub>3</sub>付近から土製の投弾が出土している。

土器は大甕、甕、壺、台付き鉢などの器種に分けられるが、住居址内出土で一括資料として一級の資料といえる。但し、山ノ口式系の在り土器だけの組み合わせであり、器種の組み合わせは補強されるが、編年の決め手とは成りえない。

平底の大型の甕形土器や脚台付きの甕形土器は、王子遺跡でもセットで出土しており、形態上もほぼ同時期であることが考えられる。<sup>(4)</sup> 壺形土器は出土量は少ないが、形態上は王子遺跡でもこの期に伴うタイプである。さらに、脚台付き鉢形土器の出土がある。脚台は、甕形土器の脚台と同様な形態であり、高環形土器を持たない山ノ口式系文化においてはその役目を果たした可能性もある。

出土石器は、スクレーパー、軽石製品、凹石、敲石、台石、砥石などがある。特に、凹石や敲石は、前回報告の中ノ丸遺跡や王子遺跡などでは必携の住居址出土遺物であり、この地方の大きな特徴といえる。また、住居址に頻繁にみられるものに台石があり、これも凹石同様、この集落の生産形態を知る一助となろう。

そのほか、特異な遺物に、土製の投弾が出土している。従来、本県での出土例では金峰町松木蘭遺跡に次いで二件目である。<sup>(5)</sup> この紡錘形（ラグビーボール状）を呈する投弾は、北部九州や東九州で出土するタイプと同類であり、移入品の一つと考えられる。

さらに、特異な出土遺物に熱破砕礫がある。住居址内に散乱していたものが、接合されたものである。意図して熱破砕されたものか、偶然熱破砕されたものか、また、接合に不足するものは石器などに利用されたものか、興味ある課題である。

中原山野遺跡の遺構や出土遺物は、弥生時代中期終末期に位置付けておきたい。

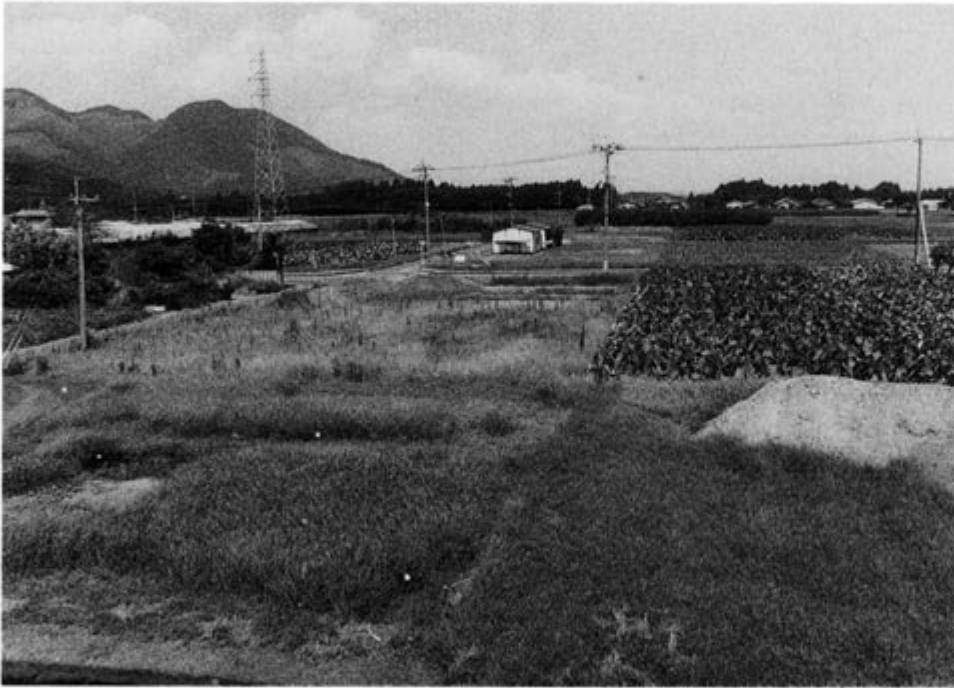
#### 註

- (1) 河口貞徳 1972 「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』6号  
新東晃一 1989 「塞ノ神・平椀式土器様式」『縄文土器大観』1
- (2) 西之表市教育委員会 1978 「下剝峯遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書』1
- (3) 喜入町教育委員会 1988 「下大原遺跡」『喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
- (4) 鹿児島県教育委員会 1985 「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(34)
- (5) 本田道輝 1983 「松木蘭遺跡出土の土弾」『指宿史談』第3号

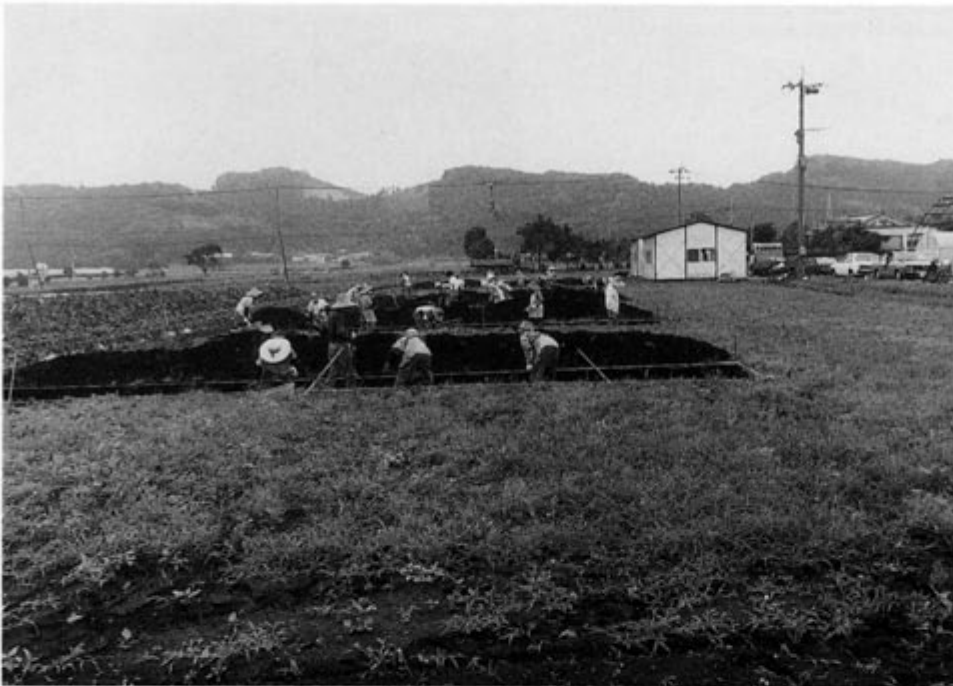


図 版

PLATES



1. 中原山野遺跡遠景 (西から)



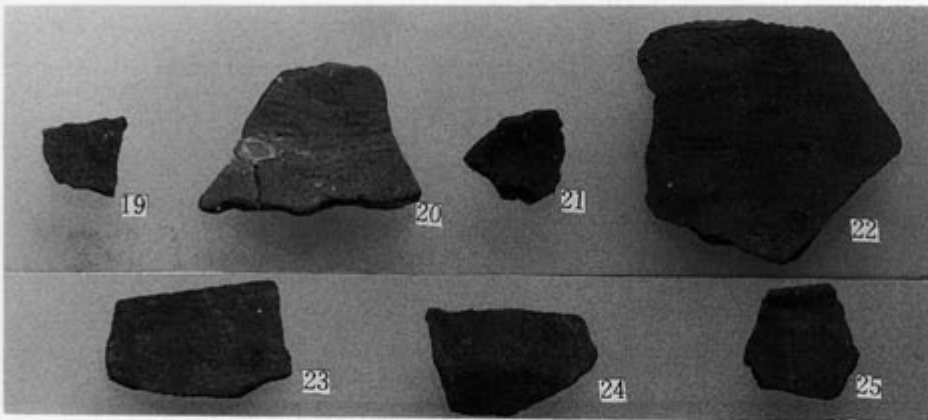
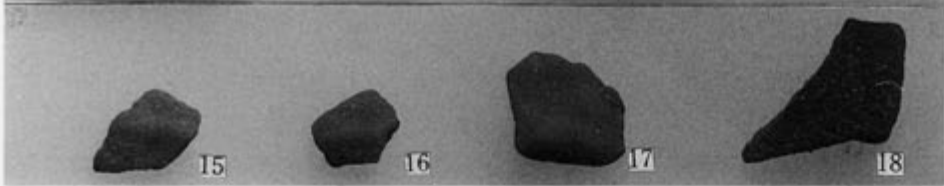
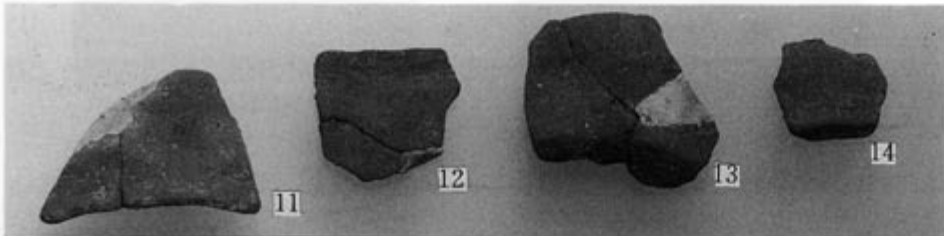
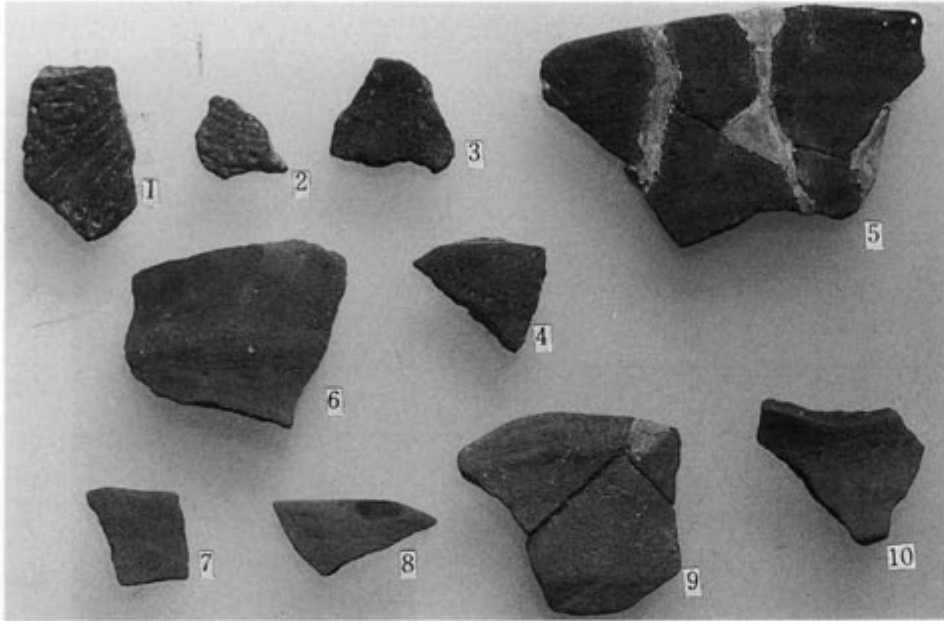
2. 確認調査風景 (東から)



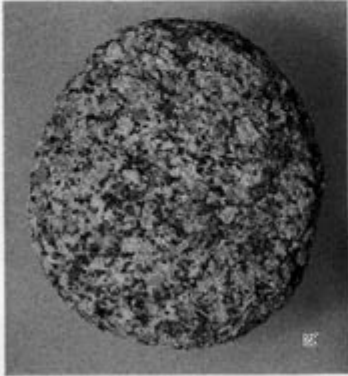
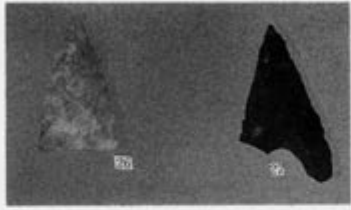
1. D区列発掘調査状況（東から）



2. B14区以東確認調査状況（西から）



1. 縄文土器 (早期)



1. 石器 (早期)



III層

IV層

V層

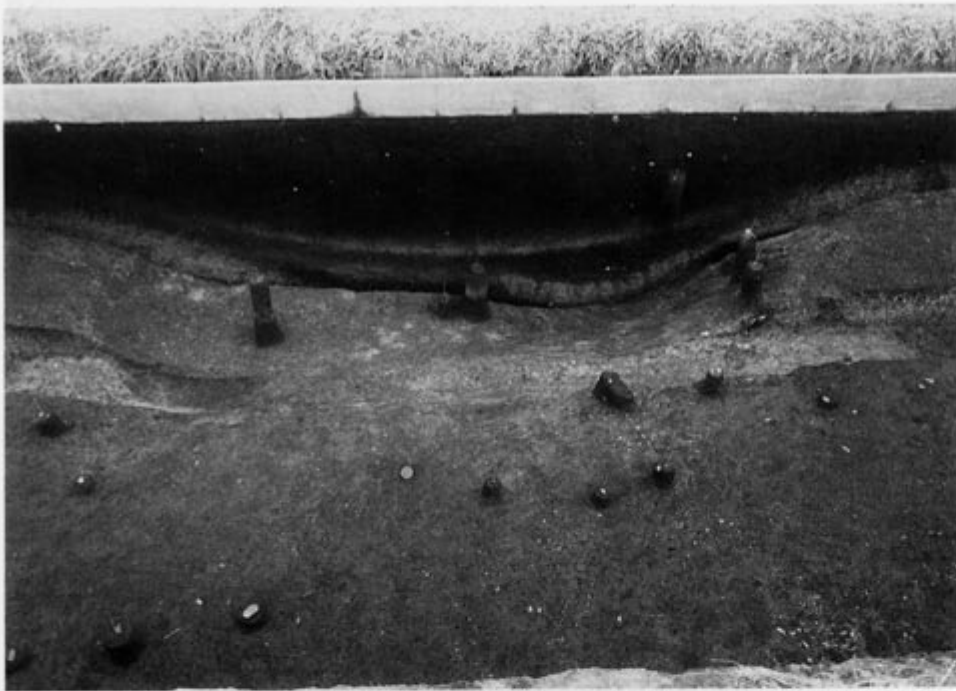
VI

VIII層～VII層

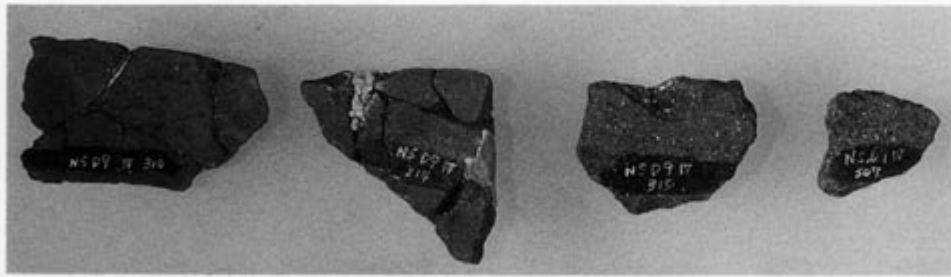
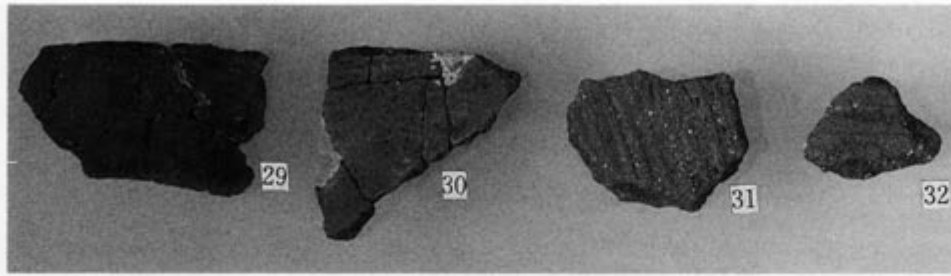
X層

XI層

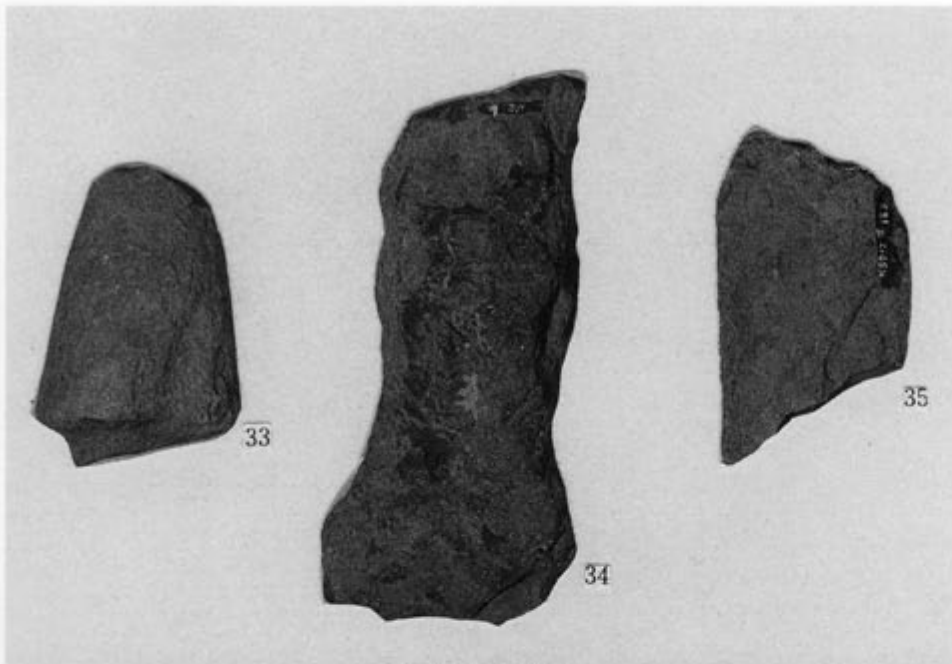
2. 中原山野遺跡の層序



3. D10区付近のVI層谷部状況



1. 縄文土器 (VI層)



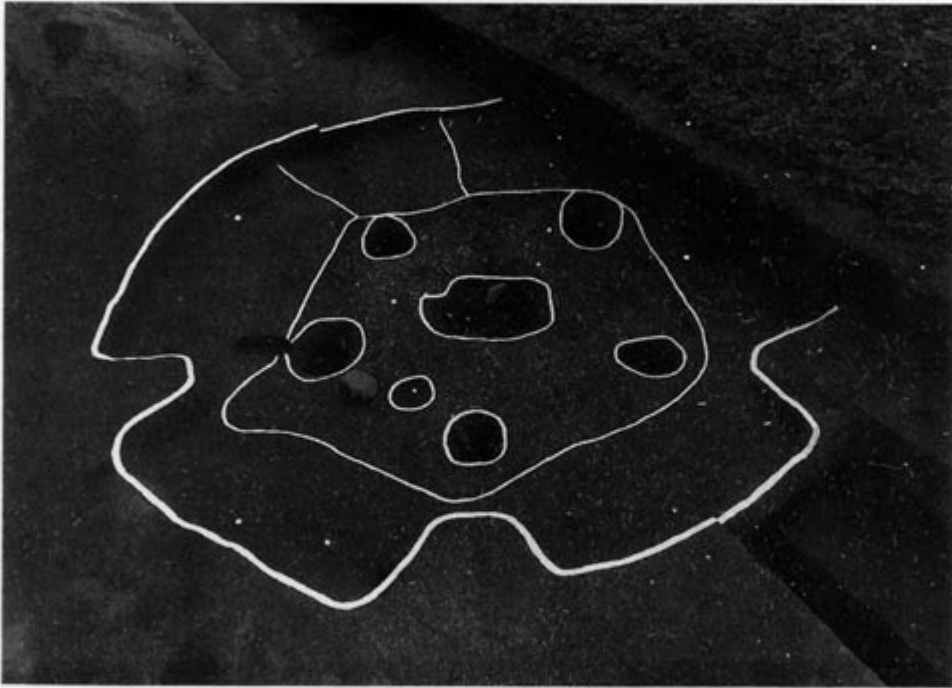
2. 石器 (VI層)



1. 1号住居址掘り下げ状況（北西から）



2. 1号住居址遺物出土状況（北から）

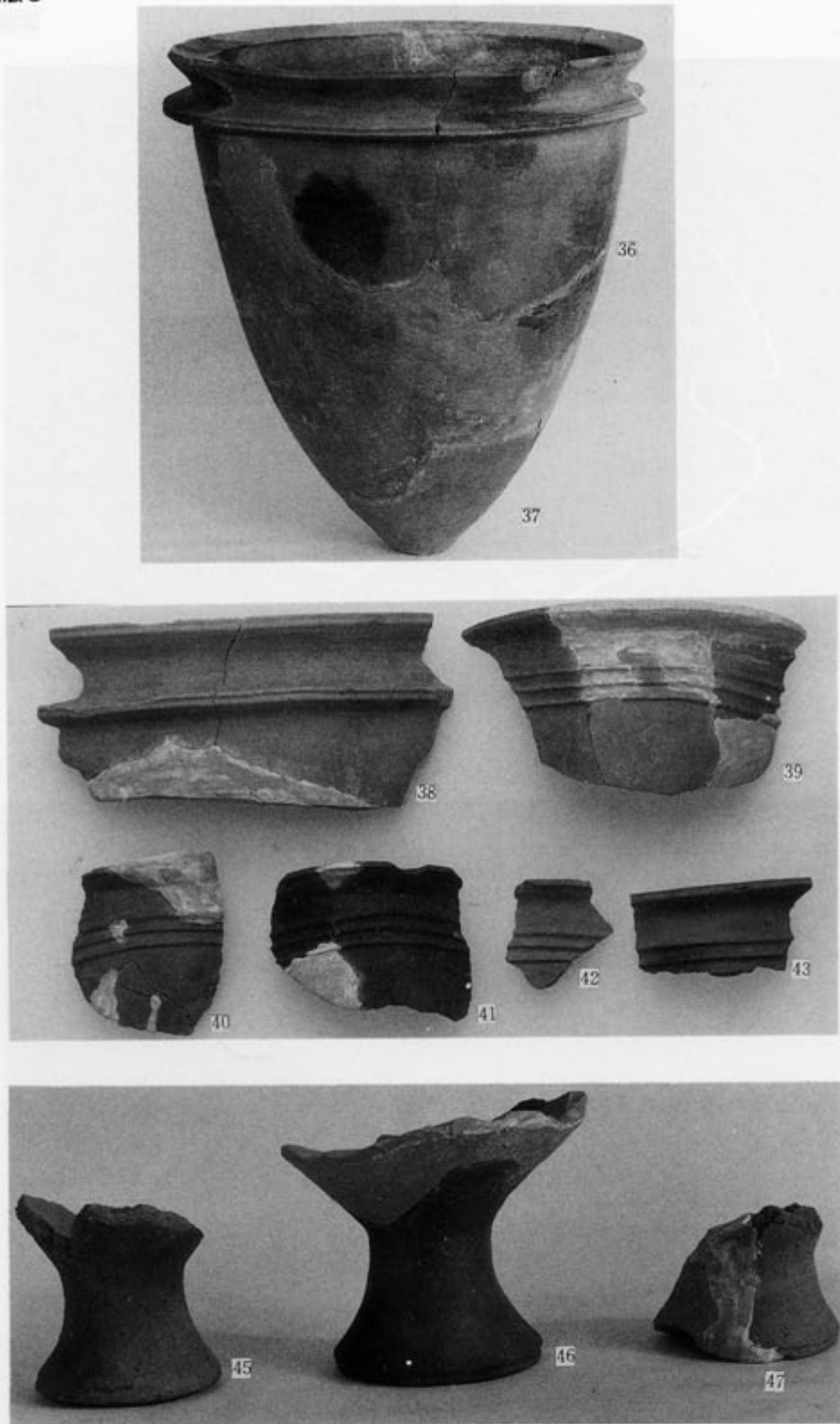


1. 1号住居址全景（北から）

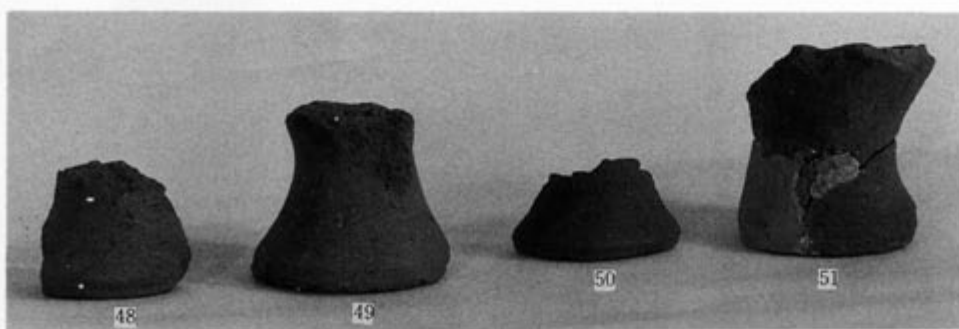
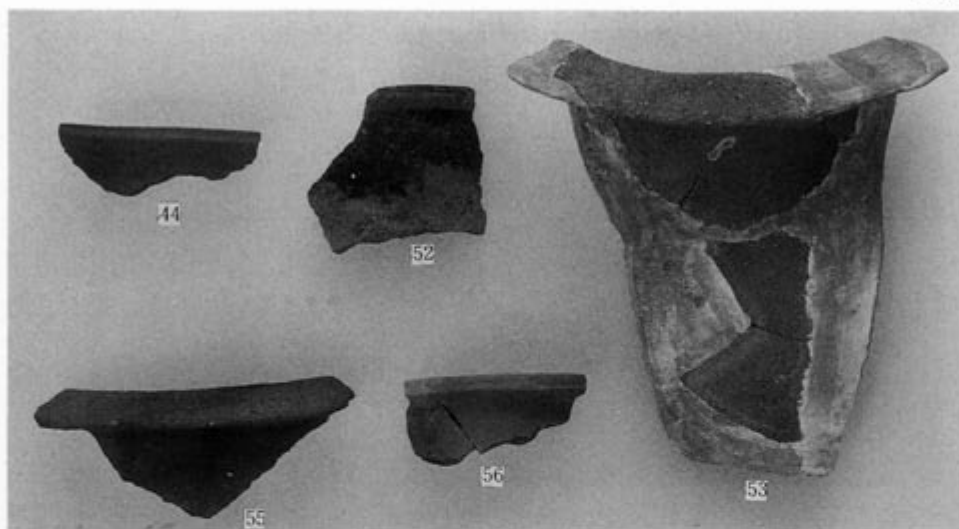


2. 1号住居址全景（北から）

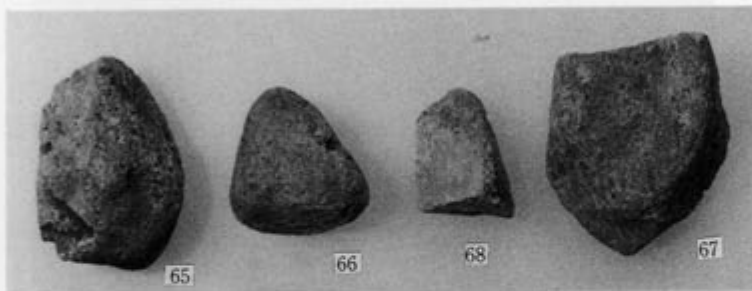
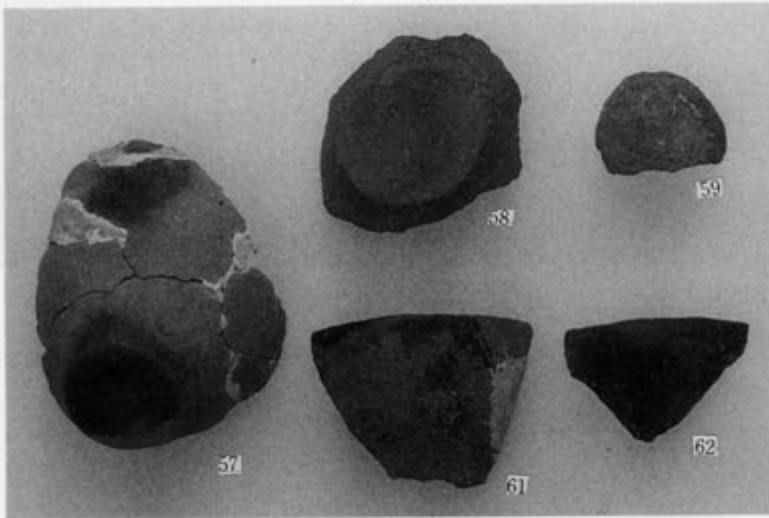




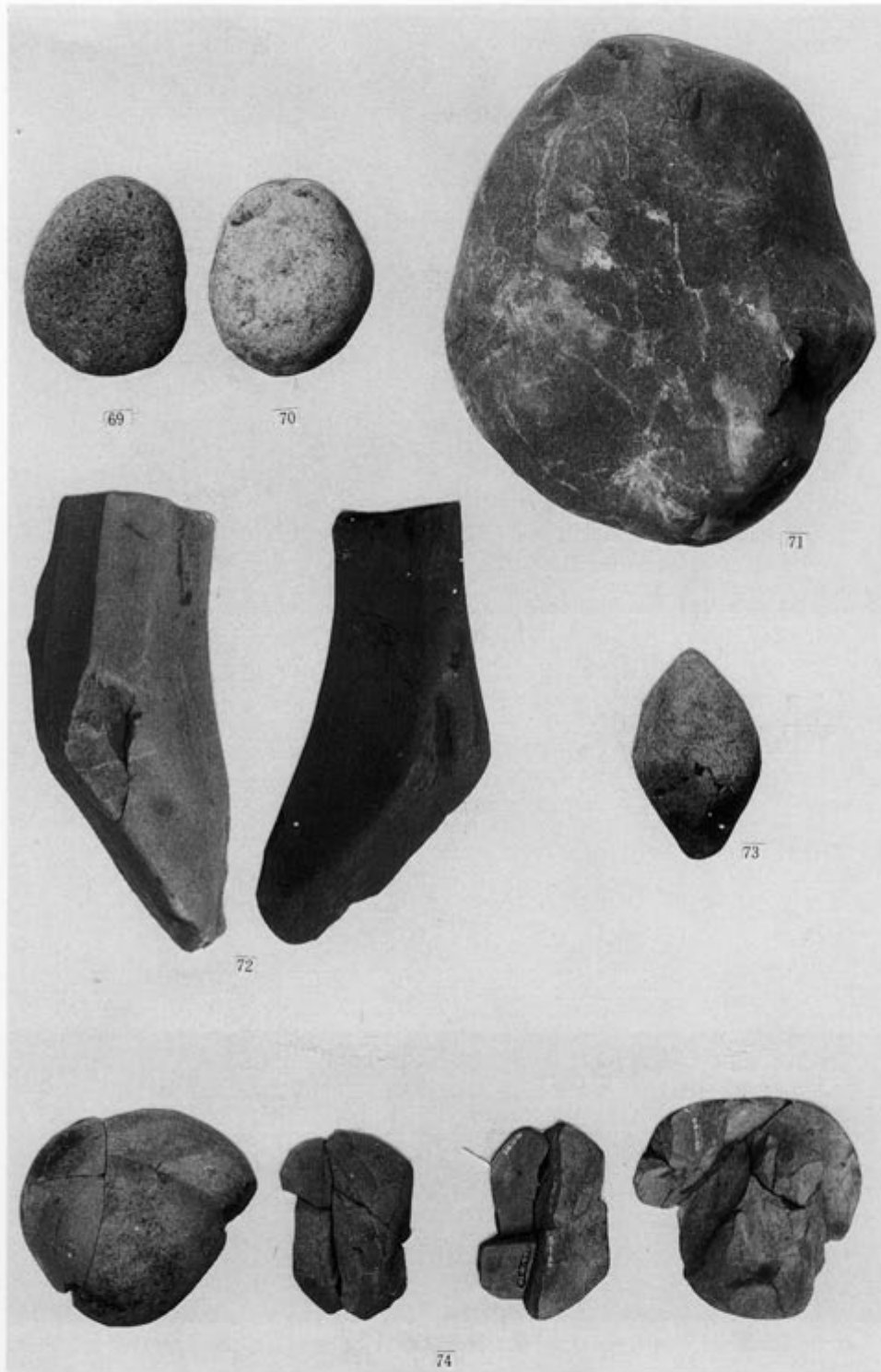
1. 1号住居址出土遺物(1)



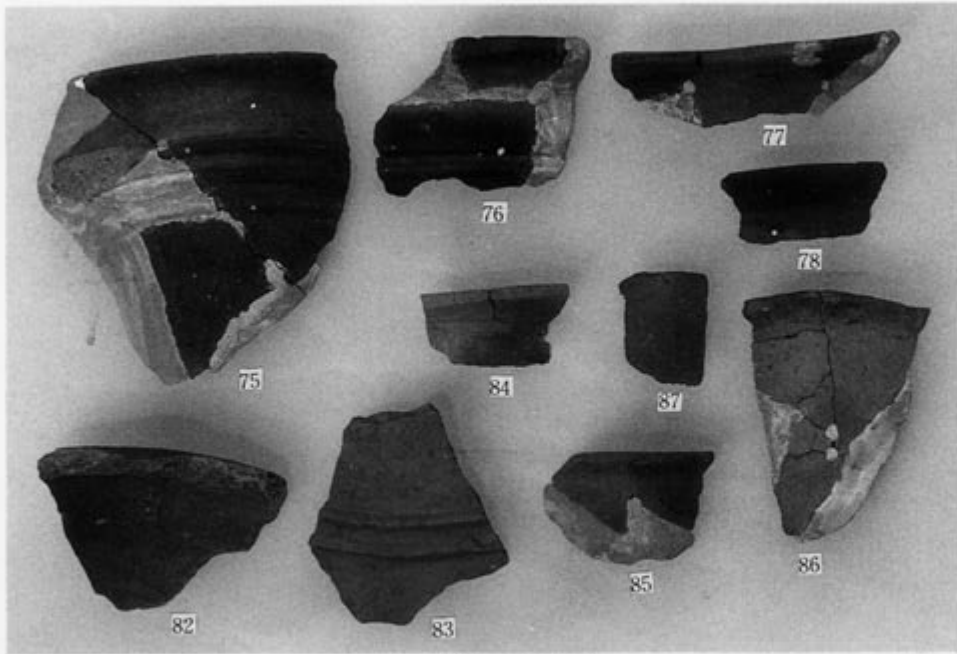
1. 1号住居址出土遺物(2)



1. 1号住居址出土遺物(3)



1. 1号住居址出土遗物(4)



1. 弥生土器 (1)



2. 弥生土器 (2)

# 西原掩体壕跡

## 例 言

1. この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の「西原掩体壕跡」の発掘調査報告書である。
2. この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)の第5分冊である。
3. 西原掩体壕跡は、鹿屋市郷之原町(旧字名中原山野及び前畑)に所在する。
4. 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
5. 発掘調査は、昭和62年6月15日～昭和63年3月9日と昭和63年4月27日～8月31日の間に実施した。整理作業は、平成元年度に実施した。
6. 発掘調査に当たっては、鹿屋市教育委員会や大浦町内会の協力・援助を得た。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 弾薬については、陸上自衛隊第8師団司令部大崎修次郎氏に、名札については熊本県多良木町教育委員会宮ヶ野實氏に教示を得た。
9. 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者(新東晃一・前迫亮一)で行った。
10. 出土遺物の実測・製図は知花一正・中村耕治・新東が行ない、本書の執筆は、新東が担当した。
11. 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東がこれを担当した。

# 本文目次

第 I 章 調査の概要	1
第 1 節 字図と郷之原の古絵図	1
第 II 章 戦跡遺構	6
第 1 節 戦跡遺構の概要	6
第 2 節 掩体壕跡	6
第 3 節 誘導路跡	10
第 III 章 出土遺跡	14
第 1 節 戦時品	14
第 2 節 遺品	16
第 3 節 生活品	16
第 IV 章 発掘調査のまとめ	24



## 挿 図 目 次

第1図	大浦・郷之浦地区の字地図（昭和63年1月現在 鹿屋市役所）	2
第2図	西原掩体壕及び誘導路配置図（昭和18年8月 原田盛雄氏作成）	3
第3図	郷之原地区の軍隊配置図（昭和20年1月 原田盛雄氏作成）	4
第4図	昭和7年現在郷之原部落図（昭和7年 原田盛雄氏作成）	5
第5図	西原掩体壕跡の戦跡遺構配置図	7
第6図	掩体壕跡実測図	8
第7図	松の樹根跡及び掩体壕の外壕・墓塚跡	9
第8図	誘導路跡実測図	11
第9図	竪穴No.1 実測図	12
第10図	竪穴No.2 実測図	13
第11図	竪穴No.3 実測図	13
第12図	弾薬実測図	15
第13図	名札写図	16
第14図	ガイシ実測図	17
第15図	陶磁器実測図（1）	18
第16図	陶磁器実測図（2）	19
第17図	陶磁器実測図（3）	20
第18図	ビン類実測図（1）	22
第19図	ビン類実測図（2）	22
第20図	薬きょうの構造模式図	23

## 図 版 目 次

図版 1	1. 掩体壕跡遠景（東から）	27
	2. 掩体壕跡の外壕（北西から）	
図版 2	1. 掩体壕跡の外壕（南西から）	28
	2. 掩体壕跡の外壕の断面（D15区）	
	3. 掩体壕跡の外壕の断面（B19区）	
	4. 掩体壕跡の内壕（東から）	
	5. 掩体壕内の旧道跡（南から）	
図版 3	1. 松の樹根跡全景（源氏松） 2. 松の樹根跡近景	29
	3. 誘導路跡（2）の水路跡（東から）	
	4. 誘導路跡（2）の水路跡（西から）	
	5. 誘導路跡（2）の水路跡の断面	
図版 4	1. 誘導路跡（1）の全景（南から）	30
	2. 碎石敷き部分と東側水路（南から）	
	3. 碎石敷き部分（南から）	
	4. 中原山野遺跡のD区別全景（東から）	
	5. 中原山野遺跡のD区列全景（西から）	
図版 5	1. 旧道跡（中原山野遺跡D 8・9区）	31
	2. 水路跡（中原山野遺跡X 1区）	
	3. 水路跡（前畑遺跡U 1区）	
	4. 竪穴（1）（中原山野遺跡D22区・D23区）	
	5. 竪穴（2）（前畑遺跡A B 8区・A B 9区）	
図版 6	1. 源氏松	32
	2. 弾・葉きょう	
図版 7	1. 名札 2. ガイシ 3. 甕	33
	4. 白磁大皿 5. 染付大皿	
図版 8	1. 染付大皿 2. 赤絵染付皿	34
	3. 染付碗・湯呑茶碗 4. 急須・祭器	
図版 9	1. ビン類（1） 2. ビン類（2）	35

# 第 I 章 調査の概要

## 第 1 節 字図と郷之原の古絵図

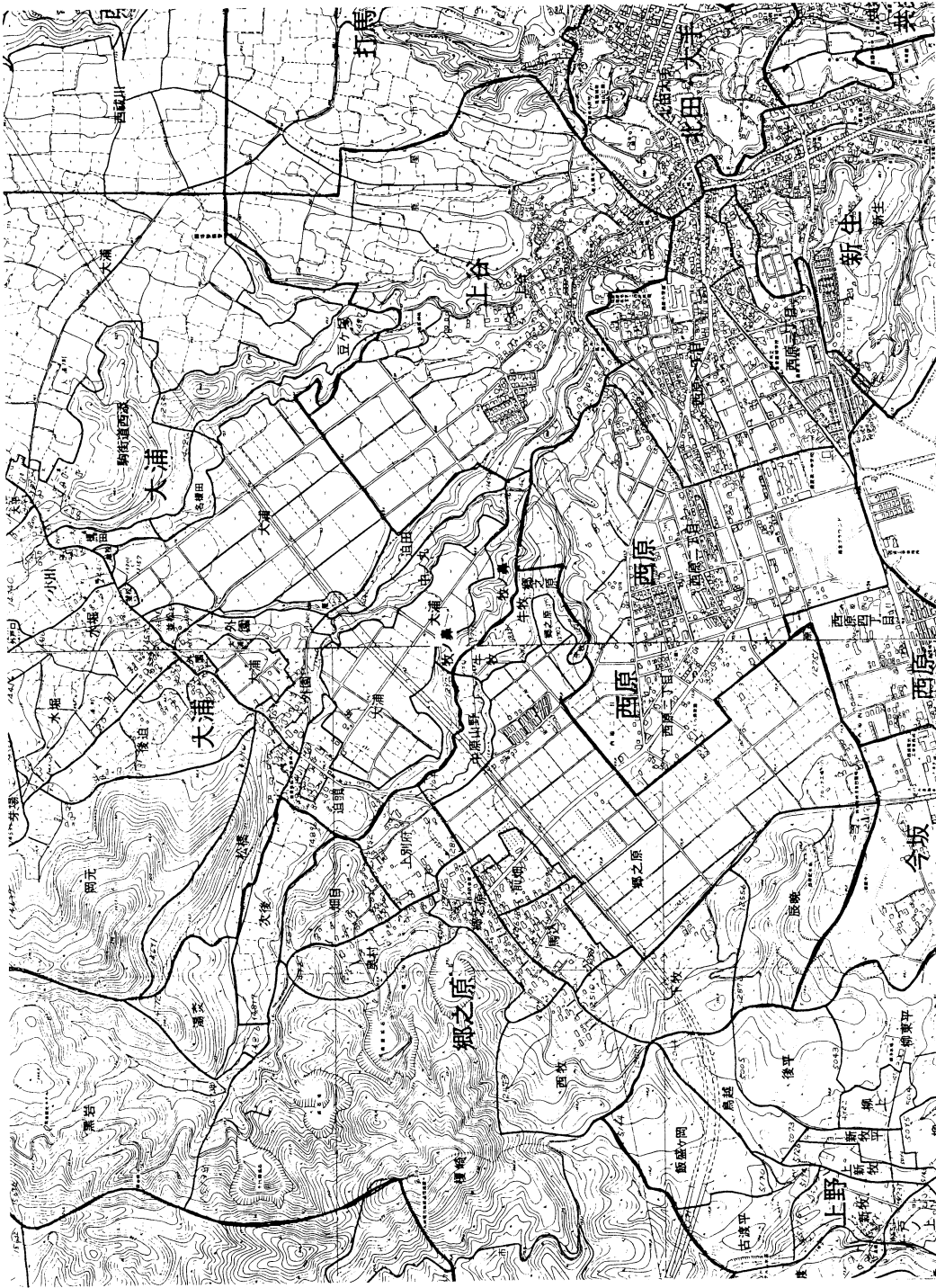
一般国道 220 号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の分布調査では、7 地点の散布地を確認した。確認調査の段階では、この地点名で作業を進めながら対象地点の地名の収集に努めた。結果的には、地主から収集して建設省九州建設局大隅工事事務所に確認をとって現在の遺跡名を付けることになり、昭和 60 年度からの本調査以来、これらの遺跡名に統一して発掘調査を進めてきた。

第 1 図は、鹿屋市役所発行（昭和 63 年 1 月）の最新の字地図である。この字地図によると、当時の字名とは大きく変更されている。榎田下遺跡は「名榎田」字に入り、中ノ原遺跡は西端の一部に「中ノ原」字が残り台地の大部分は「大浦」字に変更されている。中ノ丸遺跡だけは、ほぼ「中ノ丸」字のままである。川ノ上遺跡の字名はすでに消滅し、「迫頭」字に吸収されている。中原山野遺跡の字名は、台地の東端だけに残り、遺跡の範囲は「郷之原」字に変更されている。前畑遺跡も従来の「前畑」字は北側の宅地部分に限定され、畑地部分は「郷之原」字に変更されている。

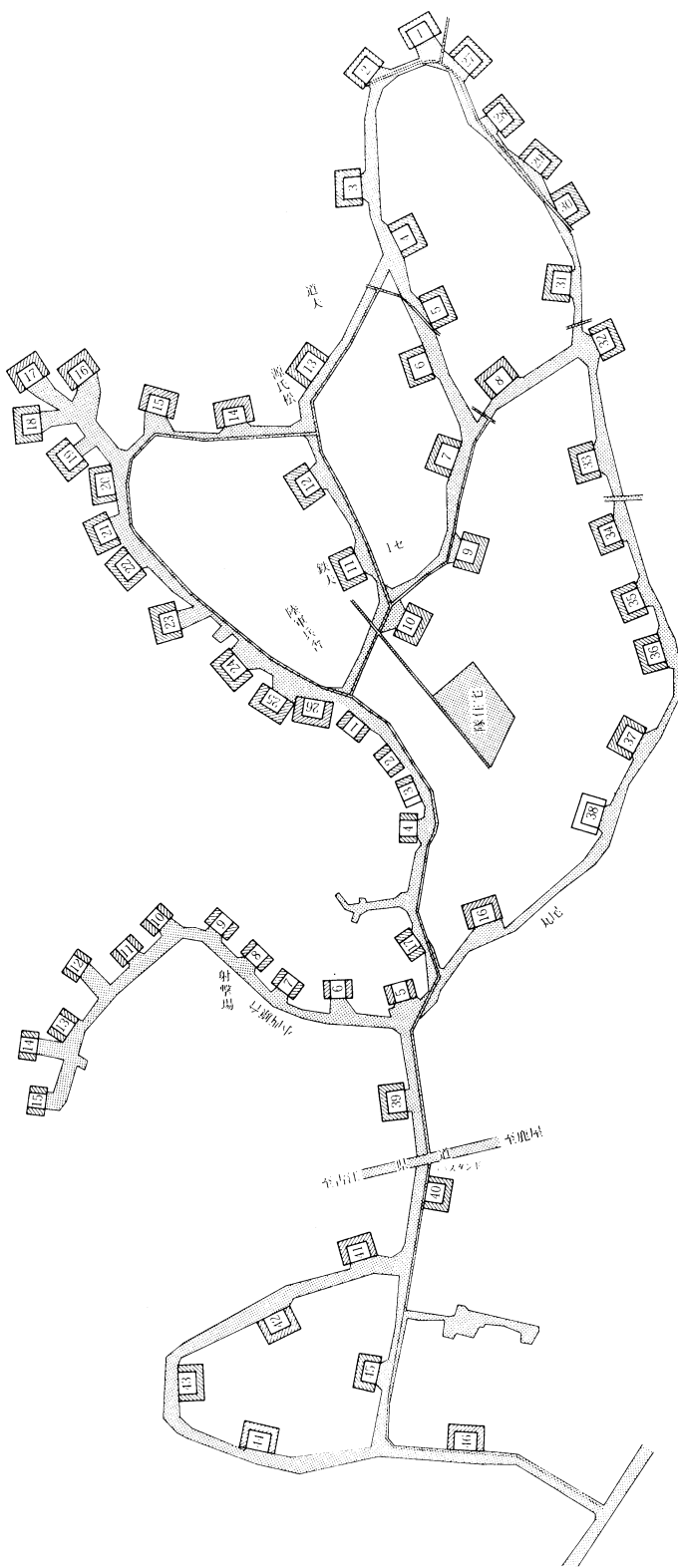
前畑遺跡の発掘調査で、確認調査の資料を基に縄文時代早期の遺跡の予定で調査を進めると、表土下に壕跡や溝跡が検出された。調査が進むにつれて作業員や地域住民の人々の記憶からこれらの壕や溝は、戦時中の掩体壕跡や誘導路跡であることが判明してきた。調査が進むと掩体壕跡や誘導路跡の一角が姿を現わし、壕内や溝内からは当時の遺品が多量に出土した。掩体壕は、幅 10m 程度の土塁（高さ 7～8m 程度といわれている）を「コ」の字に囲むように盛土したもので、その土塁の囲みの中に飛行機を避難させる施設であるが、その規模が今回の発掘調査でほぼ判明した。第 2 図は、在住の原田盛雄氏作成（昭和 18 年 8 月）の「西原掩体壕及び誘導路」の配置図である。この配置図によると、今回の発掘調査で判明した掩体壕は No. 13 にあたる。そしてこの周辺の誘導路が検出されたことになる。さらにこの地の古くからのシンボリック的存在であった「源氏松」がこの付近に存在していたことは知られていたが、今回の発掘調査でこの掩体壕の盛土部分に樹根が検出され「源氏松」の位置を確実にした。

第 3 図は、郷之原町に配置された軍隊の施設の配置絵図である。同じく在住の原田盛雄氏によって昭和 20 年 1 月 20 日に作成された絵図で、今回の発掘調査の場所は絵図の中央付近の「クラブ」を東西に横切る位置になる。

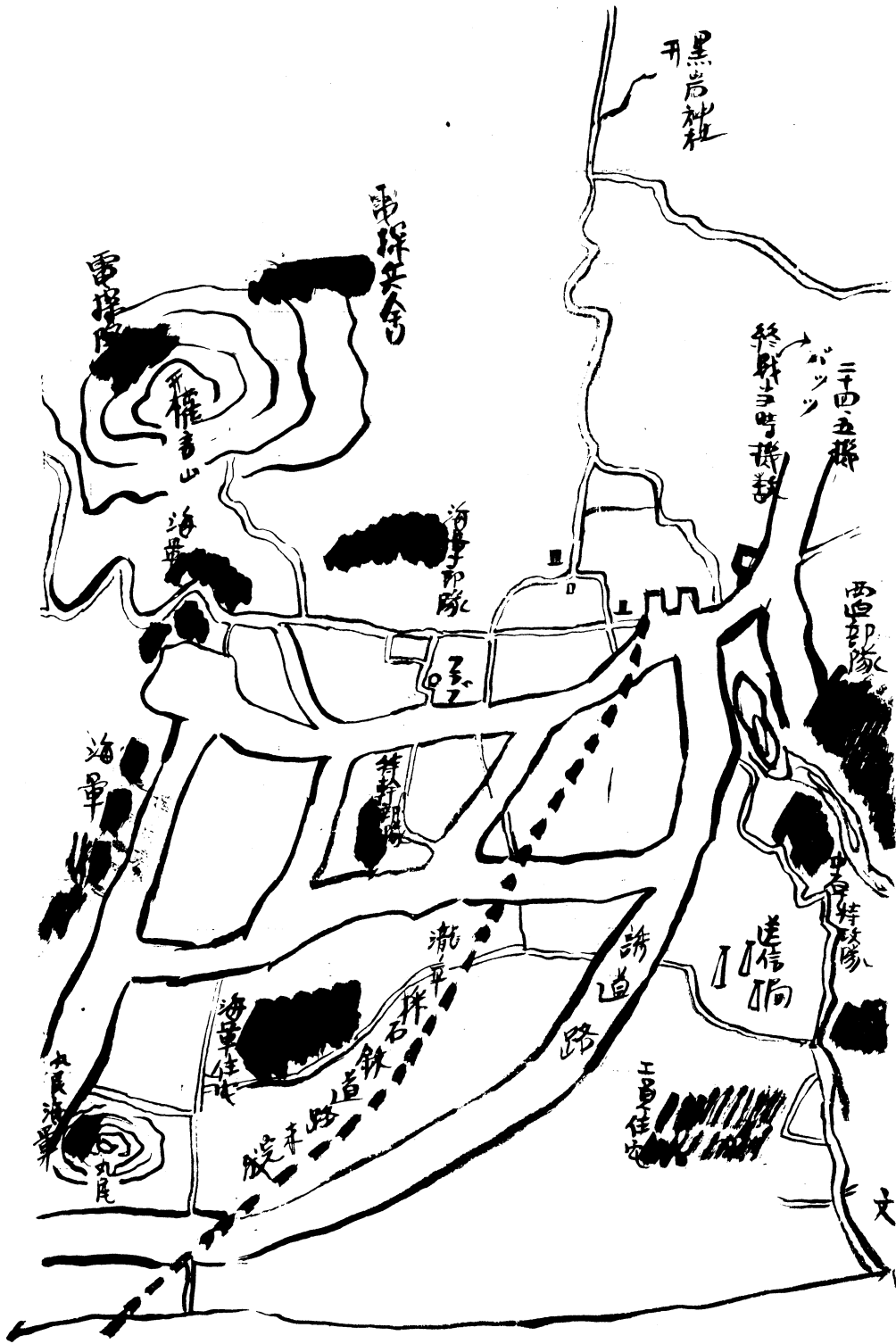
第 4 図は、昭和初期の郷之原町内の絵図である。同じく在住の原田盛雄氏によって昭和 7 年に作成されたものである。今回の発掘調査の場所は、絵図の中心付近の「倶楽部」と「源氏松」をかすめる位置にあたる。「源氏松」のところに墓のしるしが記入されているが、発掘調査においてもこの付近に近世墓が 1 基検出されている。



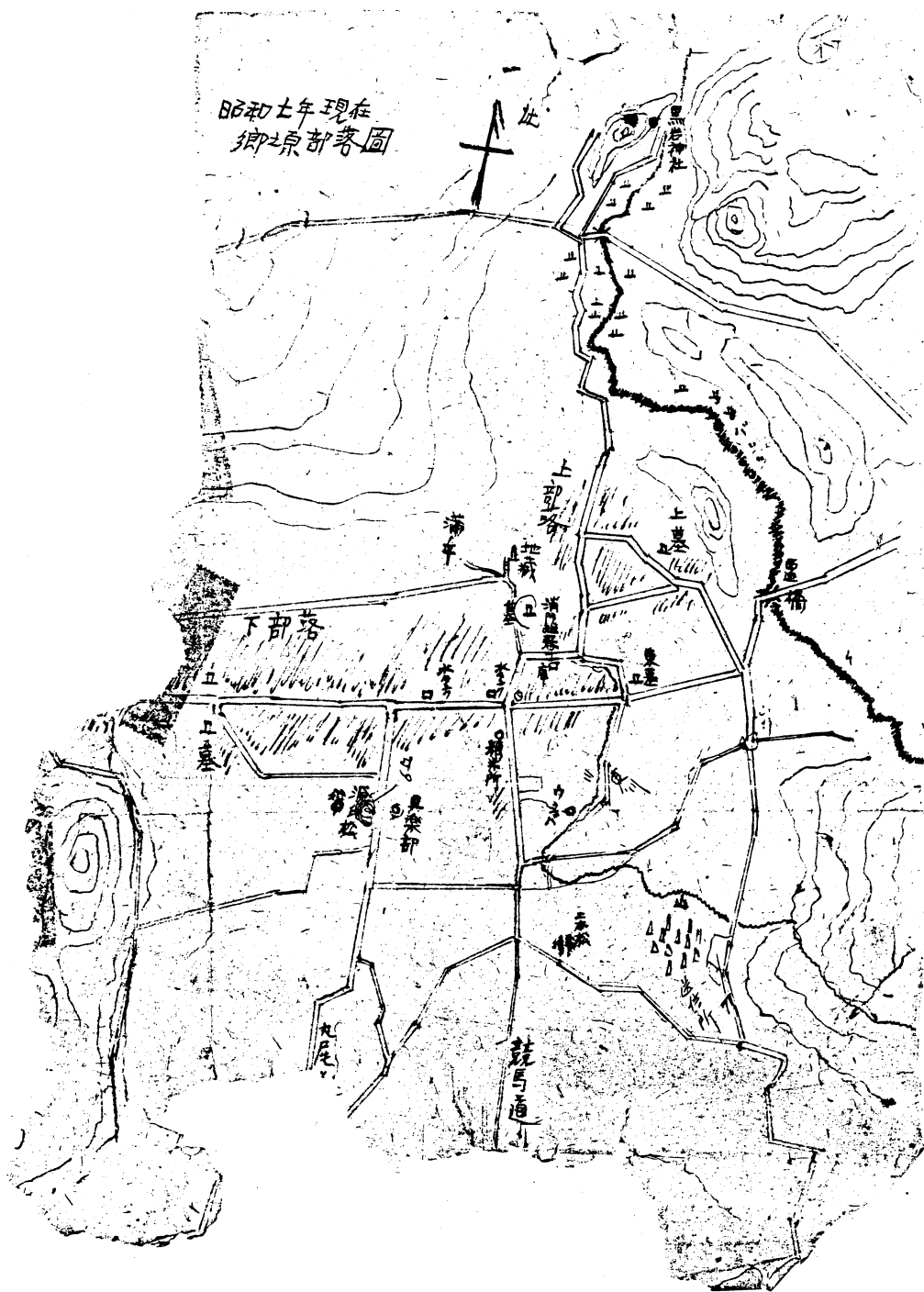
第1図 大浦・郷之原地区の字地図 (昭和63年1月現在 鹿屋市役所)



第2図 西原掩体壕及び誘導路配置図 (昭和18年8月 原田盛雄氏作成)



第3図 郷之原地区の軍隊配置図 (昭和20年1月 原田盛雄氏作成)



第4圖 昭和7年現在郷之原部落圖 (昭和7年 原田盛雄氏作成)

## 第 II 章 戦跡遺構

### 第 1 節 戦跡遺構の概要

中原山野遺跡および前畑遺跡の発掘調査において、表層直下から戦時中のものと考えられる遺構が発見された。古老や年輩の作業員の聞き取り調査でもほぼ同様な結果が得られ、さらには遺構から出土する遺物によっても裏付けられた。

発掘調査の対象地が幅12mと狭い幅員ではあったが、断片的ながら多種の遺構を検出した。これらの遺構は、太平洋戦争中の激戦下に一時的に作られたものであり、これに関しては語り伝えられるのみでももちろん記録もほとんどない。

遺構は、主に掩体壕跡と誘導路跡であり、その他に誘導路の付属施設がある。

### 第 2 節 掩体壕跡

#### 1 掩体壕跡 (第 6 図)

掩体壕跡は、前畑遺跡の A B 15 区～ A B 20 区の間を検出された。掩体壕は戦闘機の爆破防堤で、「コ」字に土塁を巡らし戦闘機を防備するための構築物であり、その基部を検出された。さらに、この掩体壕の土塁にあたる付近には、巨大な松の木の樹根跡や墓跡も確認された。そして、墓跡と掩体壕築造の関係でも、興味ある事実も判明している。

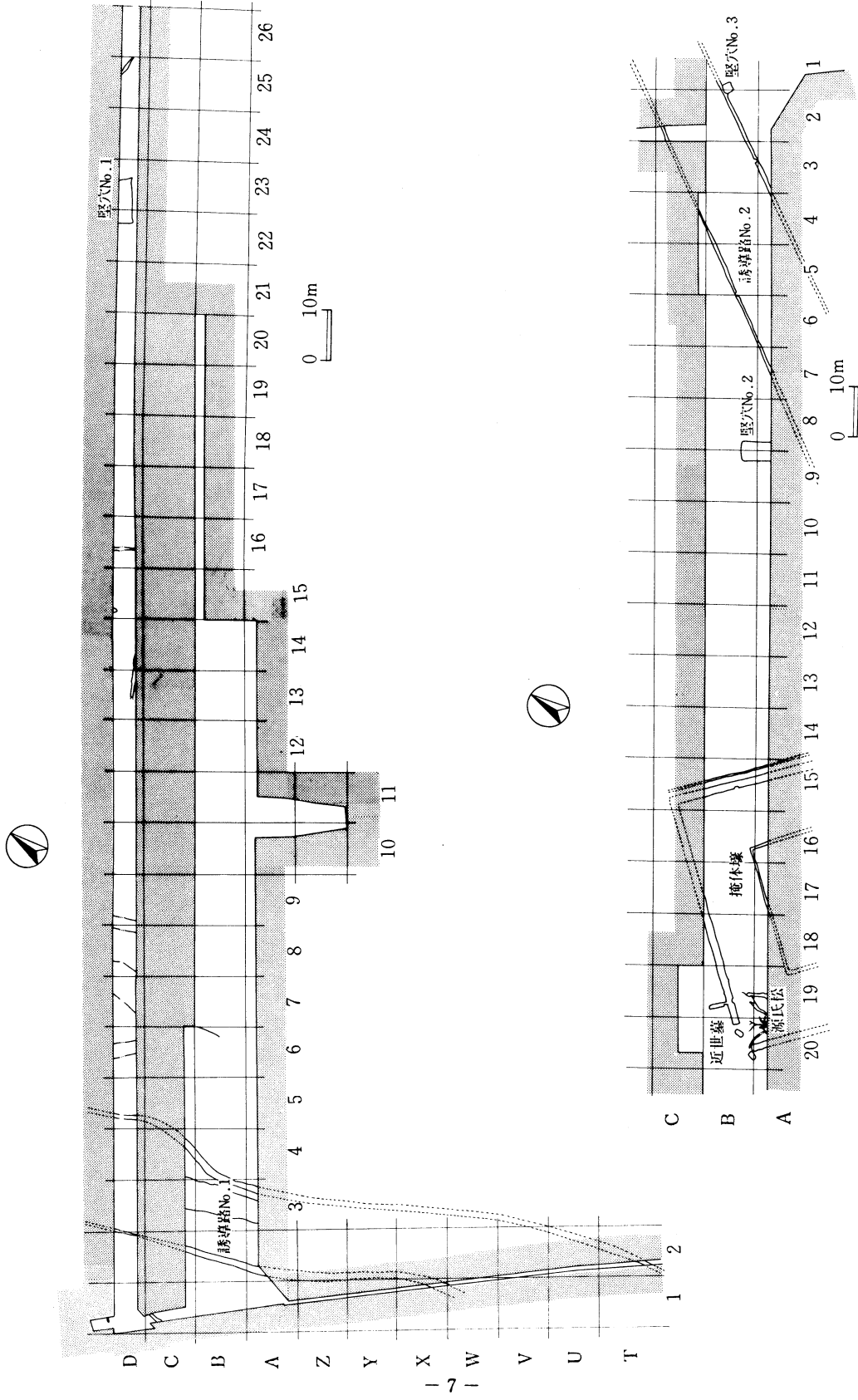
##### (1) 外壕

掩体壕跡は、A B 15 区～ A B 20 区に検出された。調査区が幅12mと狭いため、遺構の基部の部分的な検出であったが、検出面や遺構の形態及び出土遺物から、戦時中に築造された「掩体壕」の一部分であることが確認された。さらに、第 2 図の西原掩体壕及び誘導路図によると『源氏松』の位置から Nα13 の掩体壕に該当することが判明した。

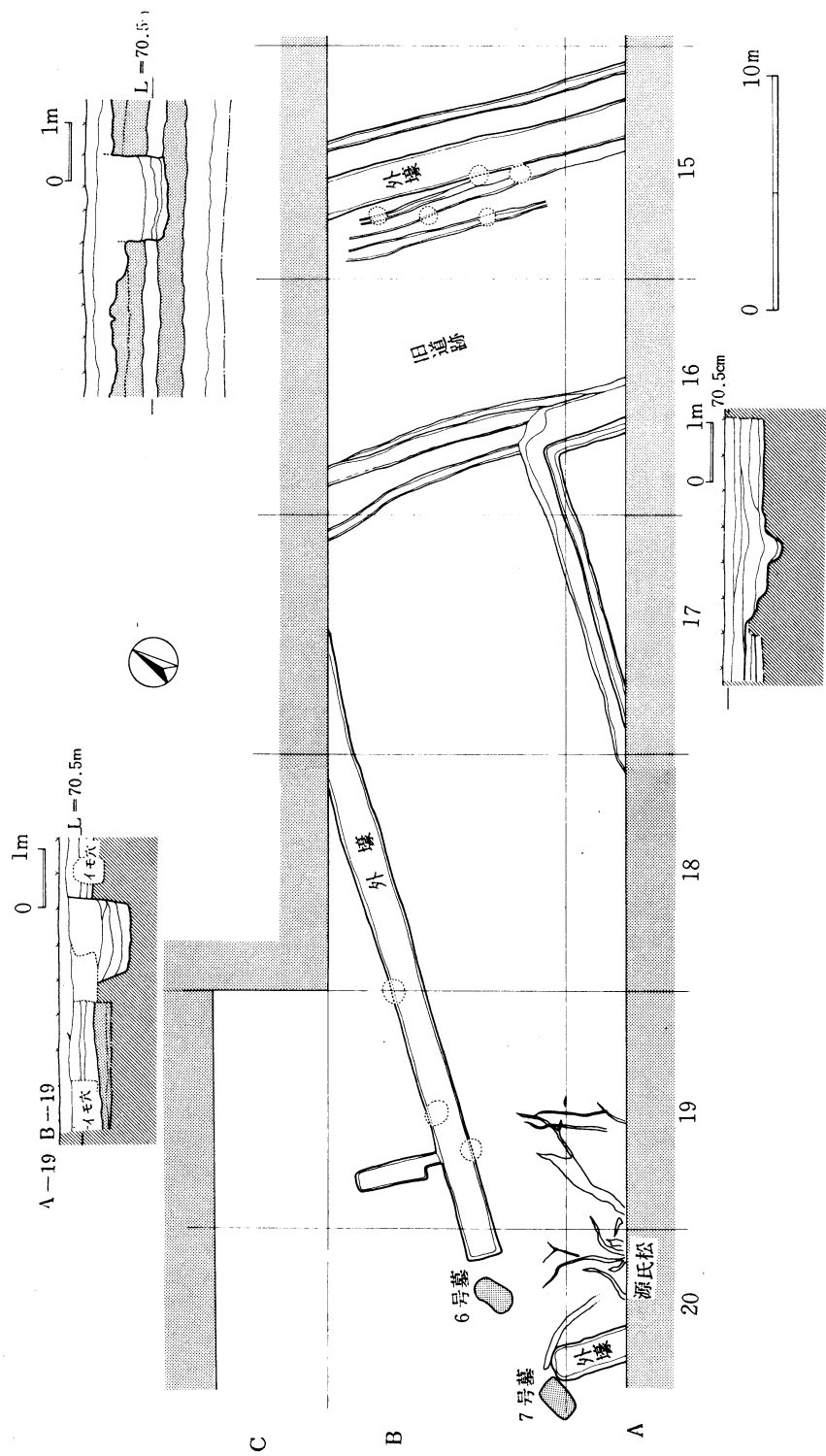
掩体壕跡は、土塁を巡る壕や溝などの基部だけの検出であるが、おおよそその規模は推定できる。まず、B 15 区に略北西に走る二本の溝が検出されている。西側の溝は幅 1.5 m で深さが 1 m の大きな規模で、いわゆる壕にあたる。この壕は、掩体壕の外堀にあたり、さらに用地外に抜け、途中で南西方向に直角に曲がり、B 18 区・ B 19 区に検出された壕に続くことが想定される。壕の床面は、B 15 区では南の方向に傾斜している。この壕内からは、多量の戦時中の生活用品や遺品が出土している。もう一本の溝は、幅 40 cm で深さ 30 cm の小溝であり、壕に並行して走っている。ここの掩体壕の土塁にあたる部分には、旧道の痕跡が確認されている。掩体壕の東側の土塁はこの旧道部分に築造された。このため、旧道はこの東側の土塁の外側に変更されている。

B 18 区から B 19 区に検出された壕は、B 20 区で止めている。さらに、B 19 区には、幅 1 m で





第5図 西原権体壕跡の戦跡遺構配置図



第6図 掩体壕跡実測図

約4mの竪穴が壕の外側に直行して付設されている。直行する竪穴の取り付け部は、片袖状に狭くなる。床面のほぼ中央部分には、焼土が確認される。

B20区の止まっている壕の約1m南西前方には、墓壙（6号墓）が検出されている。この墓が存在するため外壕は止められた可能性が強い。このことは、次の7号墓とA20区に所在するもう一つの壕の関係でもみられる。

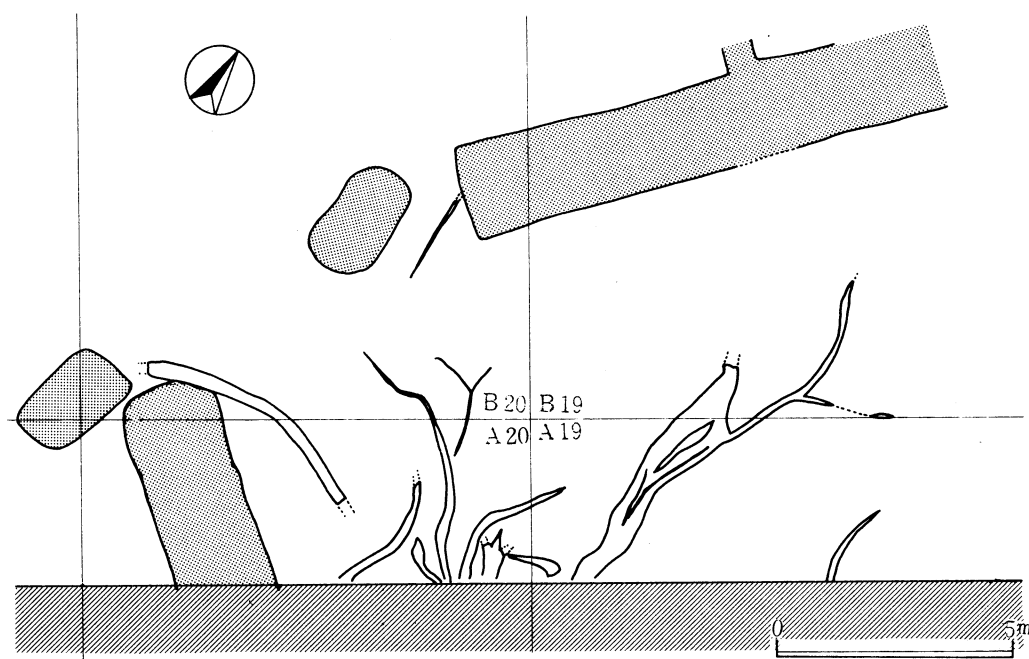
A20区のB区寄りに北西で止まって東南方向の用地外に延びるもう一つの壕がある。この壕の走る方向は、AB15区の壕と並行する。この壕は削平が大きく検出面からの深さは浅いが、その規模はAB15区の並行して走る壕とほぼ同様である。壕が止まっている北西部に隣接して7号墓の墓壙が検出されている。

## (2) 内壕

A16区からA17区には、直角に曲がる小溝が検出された。この小溝は、対応する外側の壕と並行して掘られている。この直角に曲がるコーナーが確認されたことによって、外壕も直角に曲がるのが推定されたのである。小溝の外側の土塁側は、浅い段を作る。つまり土塁は内側に犬走りが築かれたことが考えられる。

## 2 源氏松跡 (第7図)

A20区の壕の東側の土塁にあたる部分に、松木の樹根が形成する空洞と木の芯が縦横に確認されている。これがこの地区でシンボル化されて『源氏松』と呼称された大木の松の樹根であ



第7図 松の樹根跡及び掩体壕の外壕・墓壙跡

ることが、ほぼ判明した。さらに、『源氏松』の近くには墓石が存在したと云われているが、7号墓がこれにあたることも推定された。

「源氏松」は、図版6のように、戦前は畑の中に聳える大松であり、戦中は掩体壕築造で土塁に取り込まれ、その中腹から聳える形となる。

### 3 墓跡 (第7図)

掩体壕の壕に隣接して、2基の墓跡が検出された。一基は、B18区からB19区を北東に走る外壕の止まった西南端から1mの位置に所在し、長さ1.70m×幅0.97mの長方形プランを呈する墓壇である。墓壇内からは、付着した古銭が17枚程度埋納されている。最上部の古銭は「洪武通寶」と判読されたところから、中世墓の可能性が強い。

もう一基はA20区とB20区の境部分に検出されている。北西部分で止まった西側の掩体壕の外壕に隣接して位置する。長さ1.70m×幅0.90mの長方形プランを呈する墓壇である。墓壇内には、比較的大きい鉛玉1個とガラス玉6個が埋納されている。

## 第3節 誘導路跡

誘導路は、戦闘機を掩体壕に運ぶための道路で、中原山野遺跡と前畑遺跡の両遺跡で調査区を横切る形で検出されている。

### 1 誘導路跡No.1 (第8図)

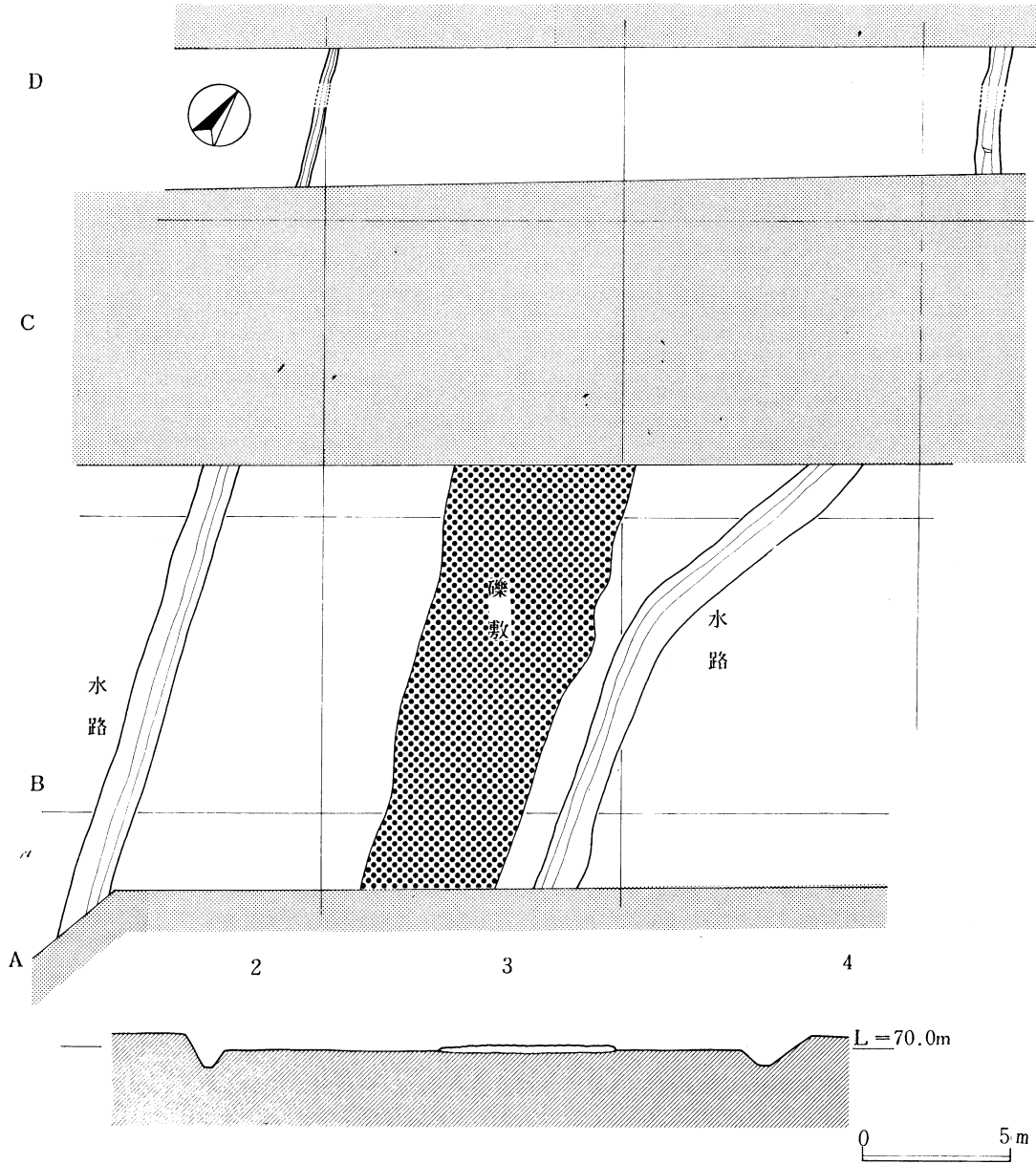
誘導路跡No.1は、中原山野遺跡のA～C2～4区に検出された。両側に水路を備え、一部碎石を敷いた道路である。A～C2～4区ではほぼ北を向いて走るもので、北部のD2区とD5区では削平を受けているが両側の水路だけが検出された。また、水道管理設工事部分の調査でも水路跡の南側の延長部が確認されている。

第8図のA～C2～4区に検出された部分は保存が良く、誘導路の状態を最も良く知ることができる。両側の水路は、検出面からの深さは約1.2～1.3mを測り、路面からの深さは0.6～0.7mを測る。東側の水路は若干東寄りに曲がって走り、途中で道路が分岐する可能性がある。水路に挟まれた道路面の幅は、約14mを測る。路面の中央から東寄りには、碎石を5～6mの幅で敷いている。碎石は、赤褐色の軟質の特徴あるもので鹿屋市荒平産の岩石を用いている。

### 2 誘導路跡No.2 (第5図)

誘導路跡No.2は、前畑遺跡のA～C1～7区に検出されている。誘導路跡No.2は大きく削平を受け、両側の水路だけ検出されている。水路は、幅0.5～0.6mで深さ0.4mを測る。削平を受けているが、水路に挟まれた部分が誘導路で、幅14mを測る。誘導路No.1と同規模であり

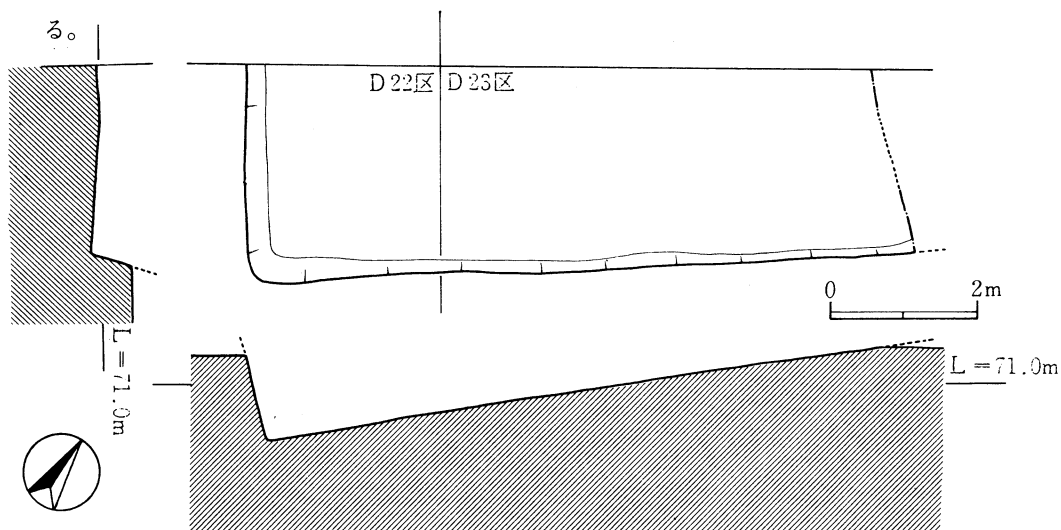
道路幅の規格があったことを窺い知ることができる。この誘導路の南側の水路にはB 1区で豎穴No 3が付属し、A B 8区では豎穴No 2が接続する位置にある。さらに、A B 15区～A B 20区の掩体壕跡もこれに接続する位置にある。



第8図 誘導路跡 (1)

### 3 竪穴跡No.1 (第9図)

竪穴No.1は、中原山野遺跡のD22区とD23区に位置する。長方形の竪穴遺構であるが、床面は傾斜をなす。竪穴No.1は、ほぼ東方向を向いて検出されている。約9mの長さで検出されているが、東側は削平を受けており若干延びることが想定される。幅は約3mが検出され、北側の用地外に延びる。床面は、最も深い西側隅で検出面から1.20mを測り東側で検出面に立ち上がる。このように床面は、約9°の傾斜をつくる。D25区付近に削平を大きく受けた溝状の痕跡が確認されるが、誘導路の水路の可能性が強い。竪穴No.1は、誘導路に付属する施設と考えられる。



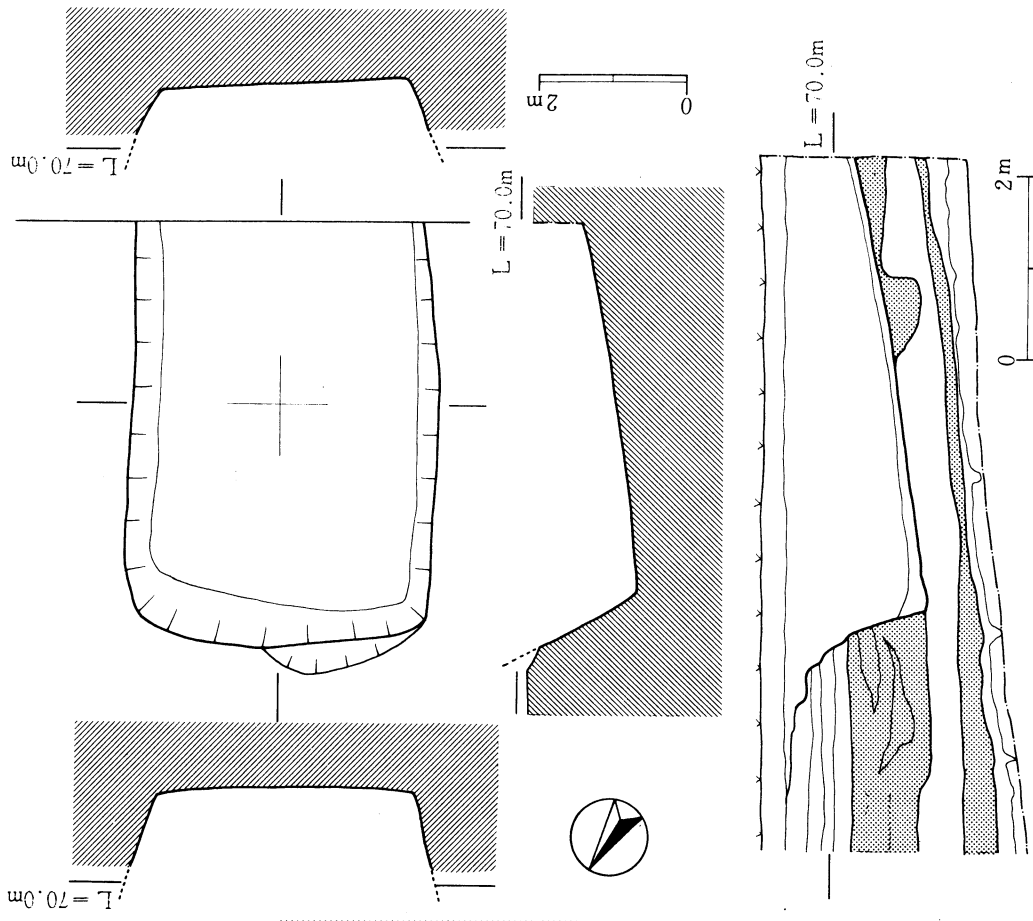
第9図 竪穴No.1実測図

### 4 竪穴跡No.2 (第10図)

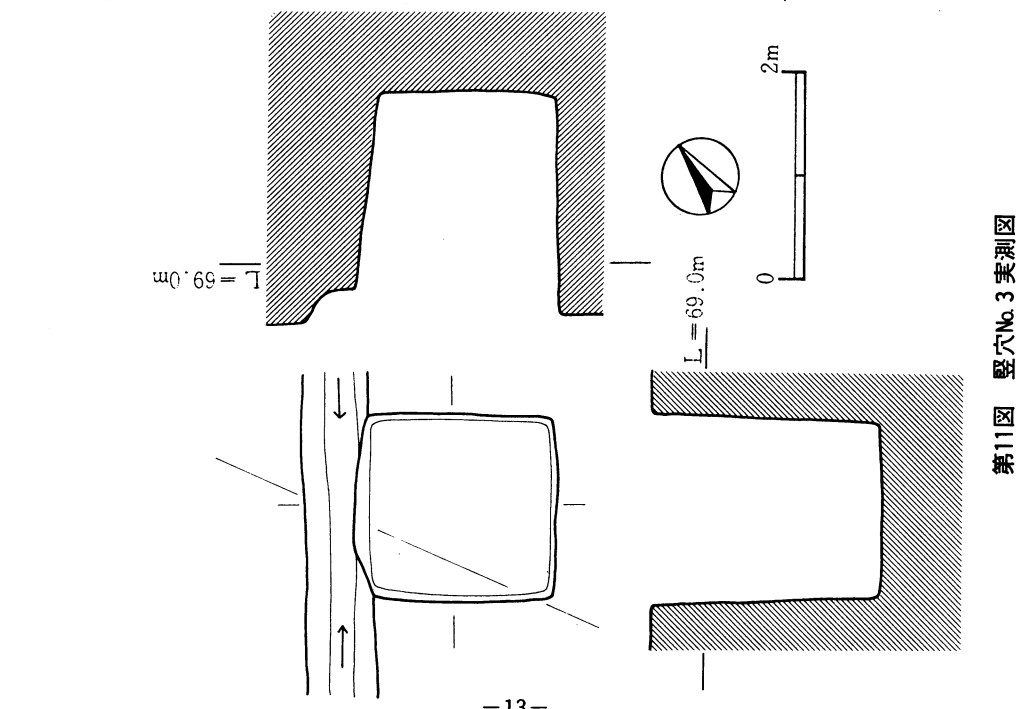
竪穴No.2は、前畑遺跡のAB8区とAB9区に位置する。長方形の竪穴遺構であるが、床面は傾斜をなす。竪穴No.2は、ほぼ南方向を向いて検出されている。約5.80mの長さで検出されているが、南側は用地外に延びる。幅は、約4.20mを測る。床面は、最も深い北側隅で検出面から約1.50mを測り、南端では約0.70mを測り、以南は用地外となる。すなわち、約10°の傾斜をもって南側に立ち上がる。竪穴No.2の南側の用地外には誘導路が位置するが、誘導路に付属した施設であることが考えられる。

### 5 竪穴跡No.3 (第11図)

竪穴No.3は、前畑遺跡のB1区とB2区の誘導路の水路に付属して検出された。水路の外側に付属した竪穴No.3は、2.00m×1.80mの方形の竪穴遺構である。竪穴の深さは、2.20mと深い。竪穴No.3が付属した水路は竪穴No.3に向かって東西方向とも低くなり、さらに竪穴No.3の接続する水路の壁は切り取られている。つまり、誘導路の南側水路の流れは、この竪穴No.3に集まる形につくられている。竪穴No.3は、水路の水溜め池あるいは沈砂池の役目を果たすものであろう。



第10图 竖穴No. 2 実测图



第11图 竖穴No. 3 实测图

## 第Ⅲ章 出土遺物

戦跡遺構からは、戦時中の物と考えられるかなりの量の出土遺物がみられた。特に、掩体壕の外壕には、一時的に埋められた状態で多量の出土遺物がみられた。弾丸や薬きょうは調査区の至る所に散乱し、激しいものはⅢ層の弥生時代の住居址の埋土中（表土下50cm～70cm）まで貫入しているものもあり、激戦の様相を窺い知ることができる。戦時品（弾薬など）や遺品（名札など）、生活品（日用品）など種々の出土がみられた。

### 第1節 戦時品

戦時品には、弾丸や薬きょう等の弾薬や照明弾、戦闘機の破片などがある。戦闘機を格納する掩体壕があったためか、弾丸や薬きょうは調査区の至る所から出土した。B20区の掩体壕の外壕内からは、薬きょうが一ヶ所に集中して発見された。集めた薬きょうを戦後ここにまとめて捨てた人が出現し、発掘調査中、このような新事実も判明した。

#### 1 弾薬（第12図）

弾薬は、弾丸と薬きょうに分かれる。弾丸はさほど多くは発見されなかったが、薬きょうの出土は多い。

##### ① 薬きょう（第12図-1～9・11）

薬きょうは、小型のもの9個と大型のもの1個を図示したが、小型のもの発見が多い。薬きょうの大きさは、小型のもの（1～9）が最大直径2cm、全長10cmを測る。1～9は、ほとんど同寸法である。大型のものは（11）、最大直径4.24cm、全長16.3cmを測る。

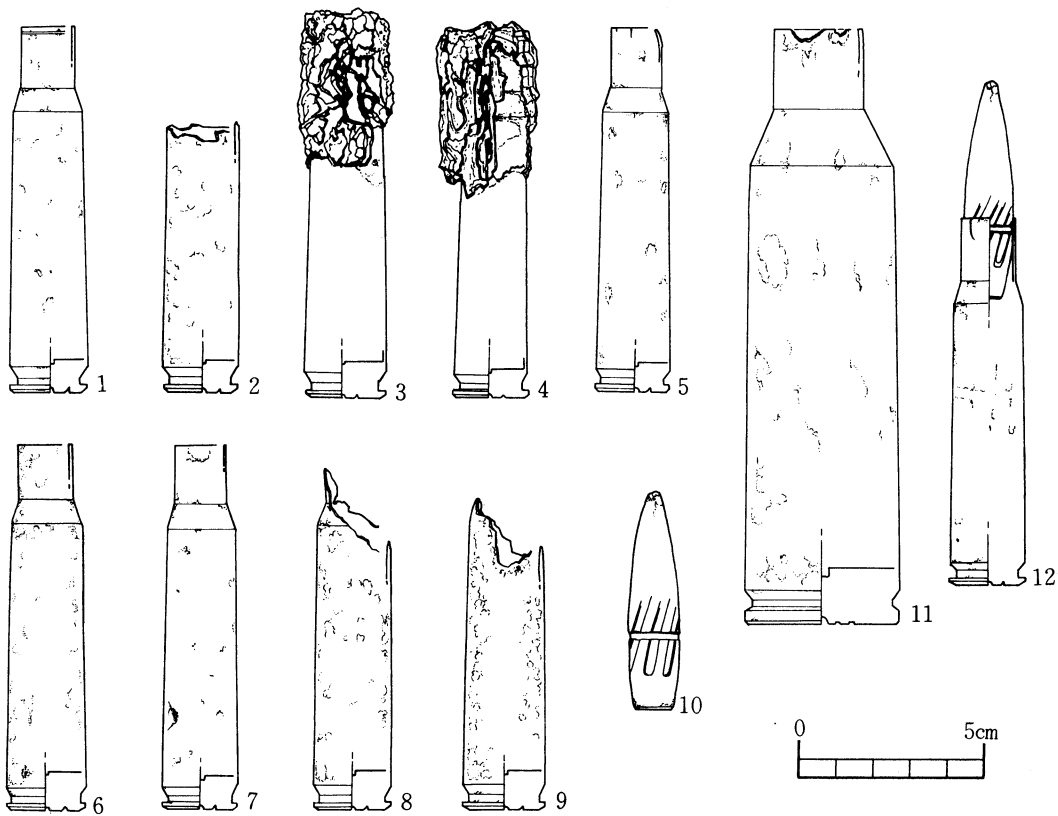
薬きょうの底面は平坦で、中央には雷管とその打痕が確認される。雷管の周囲には、U、DM、S、UMや4 2、4、4 3、などの記号が付けられている。U、DM、UMなどは、製造所識別符号とのことである。4、4 3などは、製造年号を示すものとのことである（43=1943年）。底面の上は細くなった抽筒溝があり、次が体部であるが中は空洞である。ここには火薬がつめられる。肩部で若干細くなり、首部は外径1.4cmを測る。そして、12に図示したように首部には弾丸をはめ込む方式である。

鑑定によれば、製作国と使用国はアメリカ合衆国であり、使用火器は『12.7mm重機関銃』とのことである。

##### ② 弾丸（第12図-10）

弾丸は、A4区とA5区その他、特異な場所としてはC19区の弥生時代の竪穴住居址内の埋土





第12図 弾薬実測図

中から発見された。弾丸はいずれも弥生時代包含層の位置するⅢ層中付近の深い位置から出土している。

図示した10（第12図）は、A 5区のⅢ層出土の弾丸である。弾丸は、直径1.30cm、長さ5.80cm、重さ39.6gを測る。先端は鋭く尖り、後ろは少し細くなり平たくおさめる。弾丸の表面の中央よりやや後ろの周囲には、弾丸が発射された時につく施条痕が明確に確認できる。他の二個もほとんど同じタイプである。

## 2 その他

そのほか、誘導路跡の水路からは照明弾も出土している。照明弾は、直径10cm、長さ41cmの大型の筒状のものである。また、堅穴No.3からは沢山の金属性やジュラルミン性の破片が出土している。これらのなかには戦闘機など飛行機の部品と考えられるものなどが混在している。

## 第2節 遺品

### 1 名札 (第13図)

B15区の掩体壕の外壕から多数の生活品と共に、一枚の姓名の書かれたネームプレートが発見された。ネームプレートは、縦9cm、横6.25cm、厚さ1.60mmを測る。ジュラルミンの板を切りとって作成されたものである。

プレートには、

『熊本懸球磨郡 黒肥地村

千六百五六 皆越』

と記載されている。

このネームプレートについては、熊本県球磨郡多良木町教育委員会宮ヶ野貴氏の調査、御教示の結果、次のような事実が判明した。

ネームプレート記載の住所は、

現在、下記に変更されている。

熊本県球磨郡多良木町大字黒肥地西4区

(昭和30年合併により多良木町となる)

ネームプレートの所有者は、調査の結果、下記の方であった。

氏名＝皆越光喜 生年月日＝明治41年5月1日

徴兵＝昭和19年6月30日 鹿屋航空隊黒木隊所属

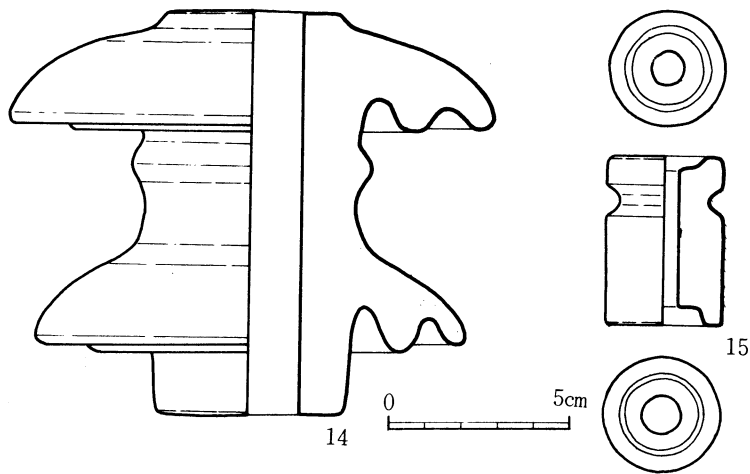
死亡通知＝昭和20年6月 沖縄海上にて



第13図 名札写図

## 第3節 生活品

戦時中の生活品と考えられる出土遺物は、主に掩体壕の外壕と誘導路に付属する竪穴Na3にまとまって出土している。近年、この地区の畑地は、大々的圃場整備が行なわれ、起伏の激しい台地が平坦な畑地に開拓されている。そのため、高台の遺構はほとんどが削平されている。そして、大型機械の導入などによって、畑地の耕作土は入念に耕されている。残存する遺物は戦後、凹地に捨てられたものがかろうじて発見されたものであろう。



第14図 ガイシ実測図

## 1 電気備品 (第14図)

電気の備品が比較的多く発見されている。電柱に付けられる備品が多い。電柱の上部に取り付けられる鉄骨やガイシの類のものである。

### ① 特高ガイシ (第14図-14)

特高ガイシや懸垂ガイシなどと呼ばれる陶器製のものである。一個は笠状の輪が二段の重なったもので、笠の輪は直径が13.2cmで、二段の高さは11.2cmを測る。輪の中央には、直径2.80cmの穴が開けてある。ガイシは白色の陶器であるが、笠の輪には赤色や青色が塗られている。

### ② 低圧ガイシ (第14図-15)

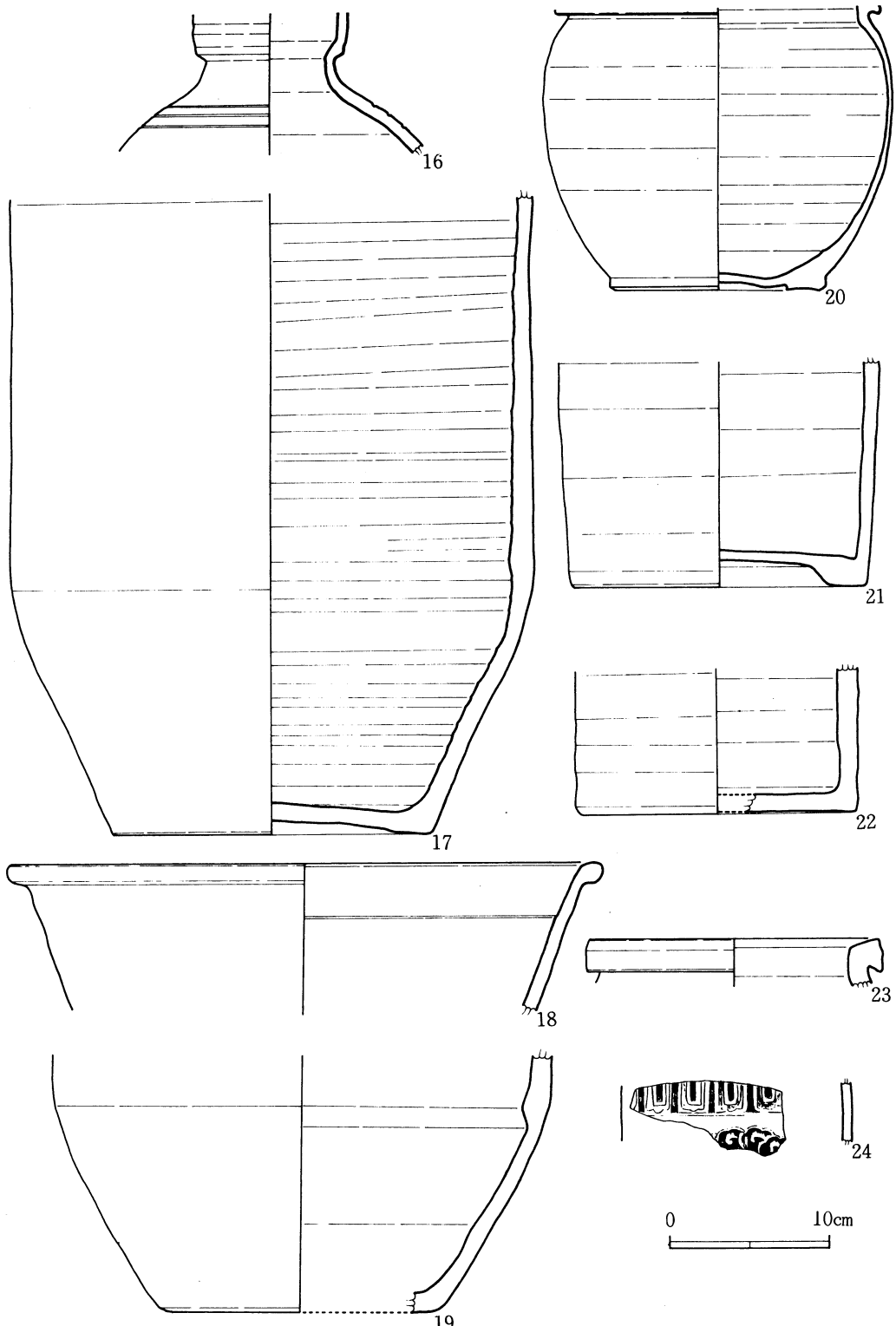
以前、一般的な電柱にみられた家庭用の電線を結ぶガイシで、低圧ガイシと呼ばれるものである。直径3.20cmで高さ4.70cmの円柱形で棒状のもので、上部に溝が巡っている。中央は止め具の穴が開けられている。

## 2 陶磁器類 (第15図～第17図)

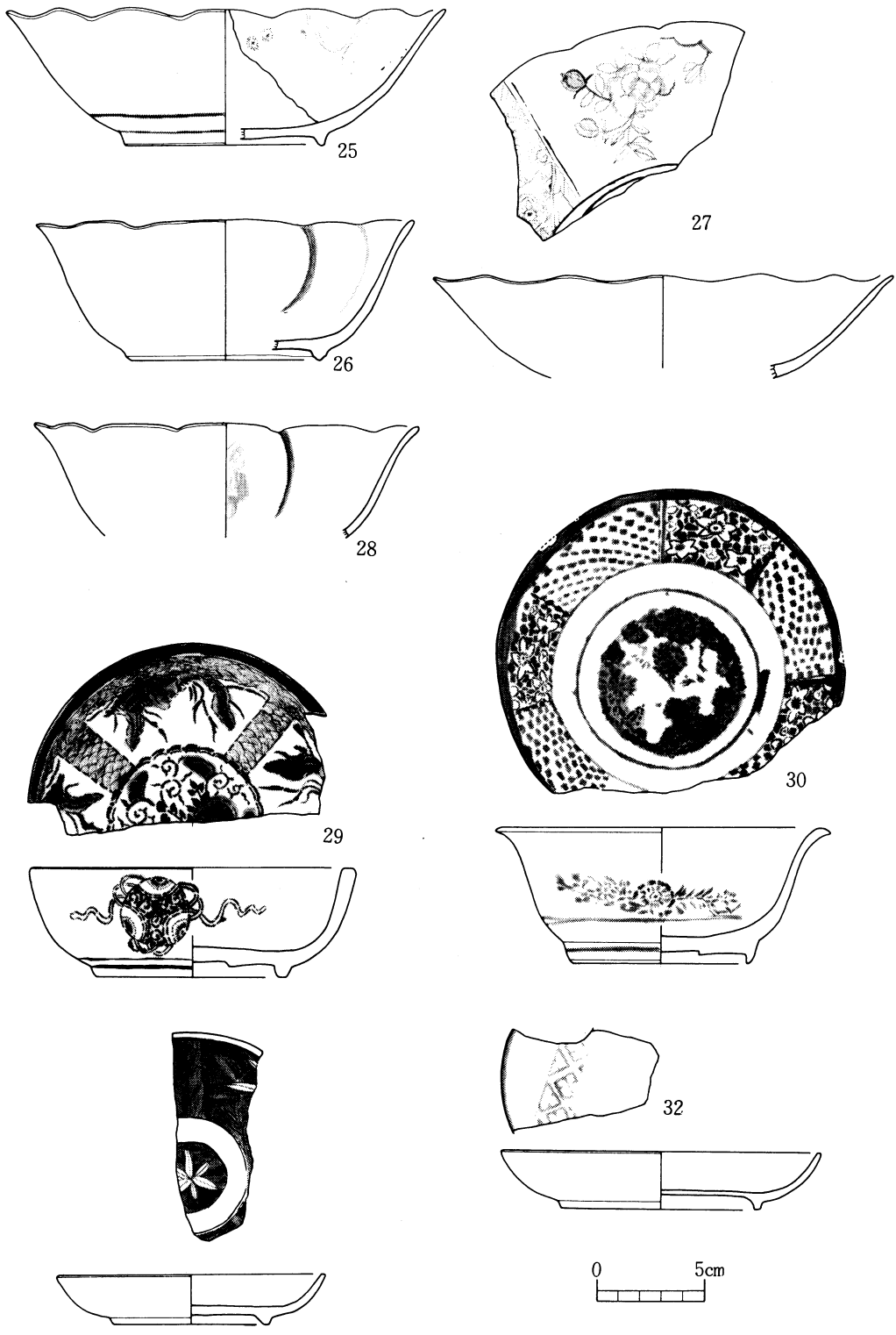
陶磁器類は、陶器と磁器に分かれる。陶器は比較的大型の容器で、磁器は茶碗・皿など小物の類である。

### ① 陶器類 (第15図-16～24)

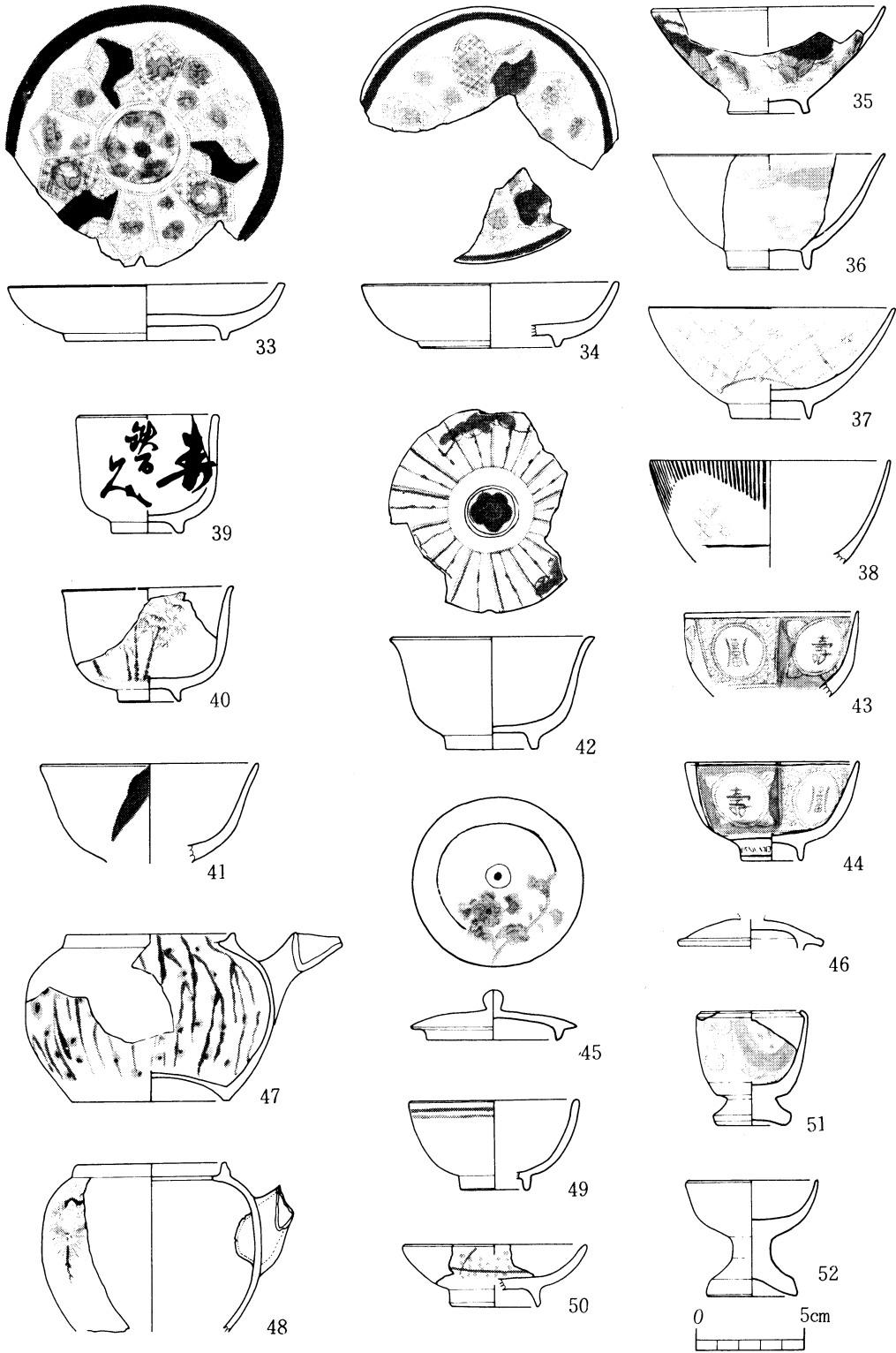
16は、口径9.8cmの埴状の口縁部である。口縁部は、二重口縁状に膨らみをもち頸部で締まる。肩部には、三本のヘラ状の沈線が巡る。17は、平底を呈する甕の胴部から底部である。器面には、底部を除き全体に褐釉をかける。19もほぼ同様である。18は播鉢で、口縁内面の沈線



第15图 陶磁器实测图(1)



第16图 陶磁器实测图(2)



第17图 陶磁器实测图 (3)

下には摺目が全面に施される。口縁部は、わずかに外反して玉縁状に太くなる。20は、口径20.4cm、高さ18.2cmの中甕である。底部は広く、胴部は球状の膨らみをなす。口縁部は大きく外反して垂れ下がる。底部を除き、器面全体に褐釉を施す。21、22は、底部が平底で胴部はそのまま立ち上がる筒状の器形を呈する。21は上げ底を呈し、22は平坦な平底である。いずれも瓦質で施釉はみられない。筒状の火鉢の底部と考えられる。23は甕の口縁部で、口縁は外側に台形状に拡張して縁をつくる。24は、染付を施した筒状の胴部片である。筒状の火鉢の胴部片と考えられる。

## ② 磁器類 (第16図・第17図—25～52)

25～28は、白磁の皿である。25はほぼ完形に復元でき、口径20.6cm、器高6.40cmを測る。高台は、シャープな三角形を呈する。いずれも口縁は多弁花状を呈している。27は内面に、色絵で植物を図化している。

29、30は、肉厚の器厚で身が深い皿である。30で、口径15.6cm、器高6.40cmを測る。口縁部は、29はそのまま太く平坦に納め、30は外反して先端を端反に仕上げる。内外面には、草葉文や草花文などを描く。

31～34は身の浅い皿類である。33は、口径12.9cm、器高2.60cmを測る。いずれも内面や見込みには、草葉文や草花文の色絵を描いている。

35～38は、いわゆる碗類である。37で、口径5.75cm、器高5.25cmを測る。器外面に、草葉文や草花文を描いている。

39～44は、いわゆる湯呑み茶碗である。39・43・44は草葉文の他に文字が記銘されている。「寿」「福」などが読み取れる。

45・46は蓋類である。45の表面は草花文で飾る。茶家蓋であろう。

47・48は茶家類である。

49・50は猪口である。49は、口径7.90cm、器高4.15cmで坏部が深い。50は、口径8.60cm、器高2.90cmで坏部が浅い。

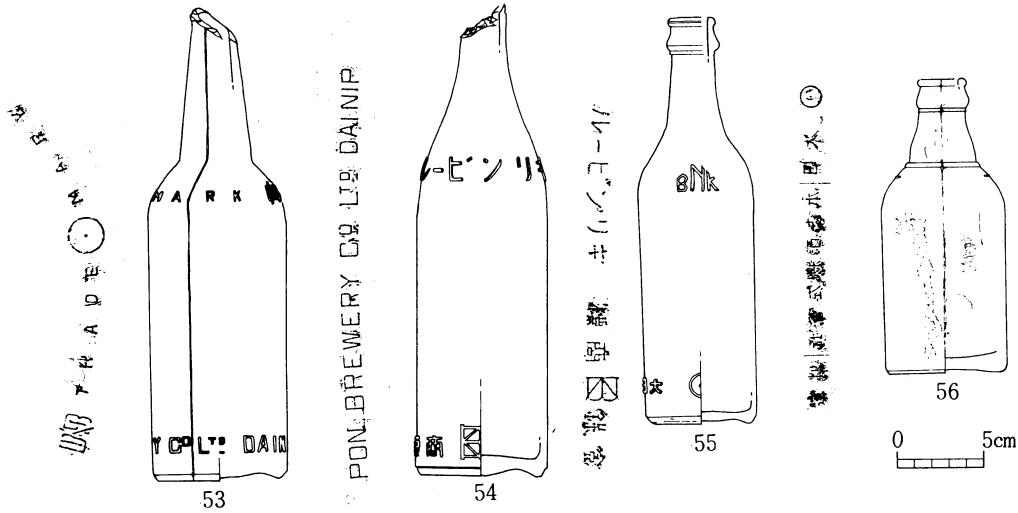
51・52は器台形の猪口であろう。51は、口径4.80cm、器高5.30cmを測る。52は、口径6.10cm、器高5.40cmで脚部が高い。

## 3 ビン類 (第18図・第19図)

ビン類は、各種みられる。ビールビンや薬用ビンや飲料水ビンなどがある。

### ① ビールビン (第18図—53～55)

53～55は、ビールビンである。53は、口部が欠けて高さは不明であるが、胴部の直径は7.40cmである。ビンには文字が浮書きされている。肩部には「D.N.B TRADE © MARK」が巡り、底部側面には「DAINIPPON BREWERY C° L<sup>TD</sup>」の文字が陽刻されている。54も口部を欠



第18図 ビン類実測図 (1)

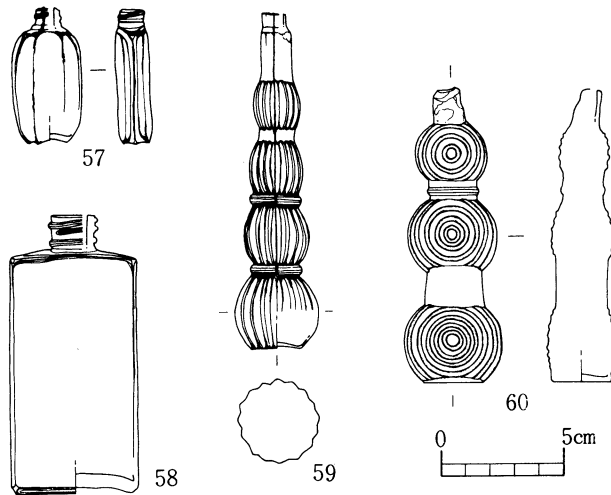
くが、胴部は直径7.40cmである。肩部には「ルービンリキ標商KB録登」とカタカナで巡り、底部側面には「ルービンリキ標商KB録登」と陽刻されている。55は、完形で高さ23.5cm、胴部の直径6.30cmを測る。肩部に「BNK」底部側面に「造製社会式株酒麦本日大」と陽刻されている。

56は、ビンの器面には文字がみられない。完形で高さ17.2cm、胴部の直径7cmを測る。飲料水のビンであろうか。

② 薬用ビン (19図-57・58)

57は、非常に小型のビンである。高さ5.50cm、幅2.90cm、厚さ1.45cmを測る。肩部や底は、独特の丸みをもつ。目薬などの薬用ビンであろうか。

58は、高さ11.4cm、幅5.30cm、厚さ3.53cmを測る。肩部や底は方形に角張る。これも、薬用ビンであろうか。



第19図 ビン類実測図 (2)

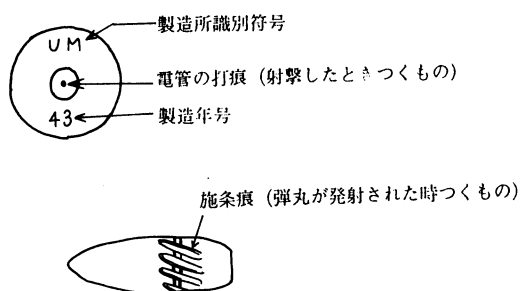
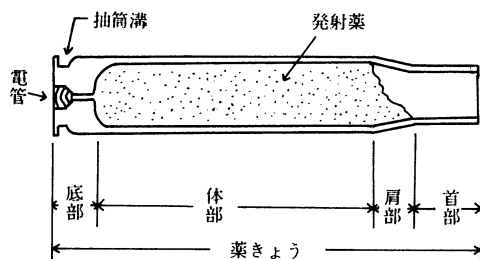
③ 飲料水ビン

(第19図-19・20)

59・60は、装飾ビンでガラス質はもろい。59は、球状の胴部が大きいものから小さいものへ4個連なる形を呈する。最下の大きい球の胴部は直径3.40cmで、



最上の小さい球の胴部は1.90cmを測る。全長の高さは13.8cmである。60は、球形の円盤状の胴部を縦に3個連ねる形を呈する。最下の大きい球の直径は4cmを測り、三段目の小さい球の直径は2.90cmを測る。全長の高さは11.9cmである。このように、二者とも形態状大きく異なるが、容器内に入れるものは同様な感がある。ニッキなどの飲料水であろうか。



第20図 薬きょうの構造模式図

## 第Ⅳ章 発掘調査のまとめ

### 第1節 西原掩体壕跡及び誘導路跡

鹿屋市は、海軍航空基地が所在し、日本の重要な軍事基地の一つであった。そのため、昭和20年の沖縄戦線時には、米軍の激しい空襲を受けている。海軍航空基地周辺への空襲は、268回、延べ2,092機による空襲を受け、三月以降の空襲日は52日に及んだという。米軍偵察機の航空写真によると、航空基地周辺には、太い白線を引いたような誘導路が縦横に廻り、その誘導路に付設された沢山の掩体壕がみえる。その掩体壕内には、戦闘機が格納されている様子が実写されている。特に、今回発掘調査を実施した郷之原台地（中原山野遺跡及び前畑遺跡）は、基地の北側に広がる格好の広い台地で掩体壕の設置も多い。

第2図は、「西原掩体壕」と呼称された掩体壕の配置図である。これによると郷之原地区に設置された掩体壕や誘導路の位置が良く判明し、郷之原地区には総数44基程度の掩体壕が設置されていたことになる。幸いに『源氏松』も注記されており、今回の発掘調査に関係する掩体壕や周辺の誘導路を特定することも可能となった。

### 第2節 戦跡遺構について

幅12mという狭い幅の調査範囲ではあったが、掩体壕跡や誘導路跡及びその付属施設等の戦跡遺構を確認することができた。

掩体壕は、調査の結果、幅約11mの土塁を築き、外側に幅1.5mの壕を廻らせ、土塁の内側にも幅約40cmの小壕を廻らせている。排水を充分考えた壕と推定される。北側の外壕と内壕との幅は約11m程度で東側は11.5mを測る。これが土塁の基部にあたり、古老によると電柱高さ程度の土盛とのことである。A B15区の東側外壕とA20区の西側外壕の間隔は約49mを測り、掩体壕の規模を知ることができる。また、東側の土塁の幅から推定すると掩体壕内部の広さは約25m程度が想定できる。つまり、飛行機を格納する掩体壕内部の規模は、25m程度となる。

続いて、この掩体壕の発見に関連して、次のような事実も判明した。まず、この地のシンボルとされた『源氏松』（図版6）は、その後、掩体壕の土塁に取り込まれたと伝えられていた。発掘調査の結果、掩体壕の土塁に位置するA20区を中心にかなり大きな松の樹根が放射状に広がって検出された。樹根の規模から、これが『源氏松』であることが判明した。さらに、『源氏松』の近くに所在したと伝えられる墓についても、調査の結果、二基の墓壇が検出され、ほぼこれに該当することが判明した。さらに、興味深いことは、掩体壕の外壕は墓壇の直前で止まり、墓壇を避けるように掘られている。つまり、掩体壕築造においては、墓を保護する意図が十分に考えられたことがわかる。

誘導路は、No.1（中原山野遺跡・A B2～4区）とNo.2（前畑遺跡・A B1～7区）の二カ

所でほぼ誘導路の規模が判明した。特に、No.1は、両側の水路や路面が使用時の状態で検出され、あまり削平を受けていない。水路は鋭く「V」字状に掘られ、路面も水平で丁寧である。誘導路は、いずれも約14m幅であり、道路作りにおいても規格性がみられる。さらに、中央より東側寄りに幅5～6mの礫敷きが見られ、大規模な工事であったことも窺い知ることができる。

竪穴跡は、いずれも誘導路の付属施設と考えられるが、形状から二種類の性格が考えられる。No.3はその位置や形状から水路の水溜め池、或は沈砂池であることが推定される。また、No.1、No.2については、竪穴の規格は長さ10m×幅4.2m程度を測り、床面は9°～10°の傾きをもって誘導路へ取り付けられる形である。戦車や高射砲車や軍用車などを格納する軍事施設であった可能性も存在するが定かではない。

いずれにせよ、これらの戦跡遺構は、築造された状態の比較的良好な形で検出されており、築造から廃棄までの時間の経過は少なく、急造の仕業であることを窺い知ることができる。

### 第3節 出土品について

出土遺物は、戦時品から遺品、生活用品等の幅広い種類がみられた。戦時品では、弾薬が多く発見されたが、そのなかの弾丸は約60～70cmの深さに及び、弥生時代包含層や竪穴住居址の埋土まで達している。その威力の大きさには不気味ささえ感じた。

遺品の名札は、出土遺物の中では最も心打たれるものであった。几帳面に書かれた名前、追跡調査の結果など、戦争の悲惨さを物語るものである。

生活用品については、電気備品、陶磁器類、ビン類等があるが、そのほとんどが当時を偲ばせるものである。例え半世紀前の戦時中とはいえ、モノの変化を知る事は歴史を知る上で大切な事である。出土した生活用品については、代表的なものを断片的にしか取り扱えず、図化出来ない物も多分に多い。

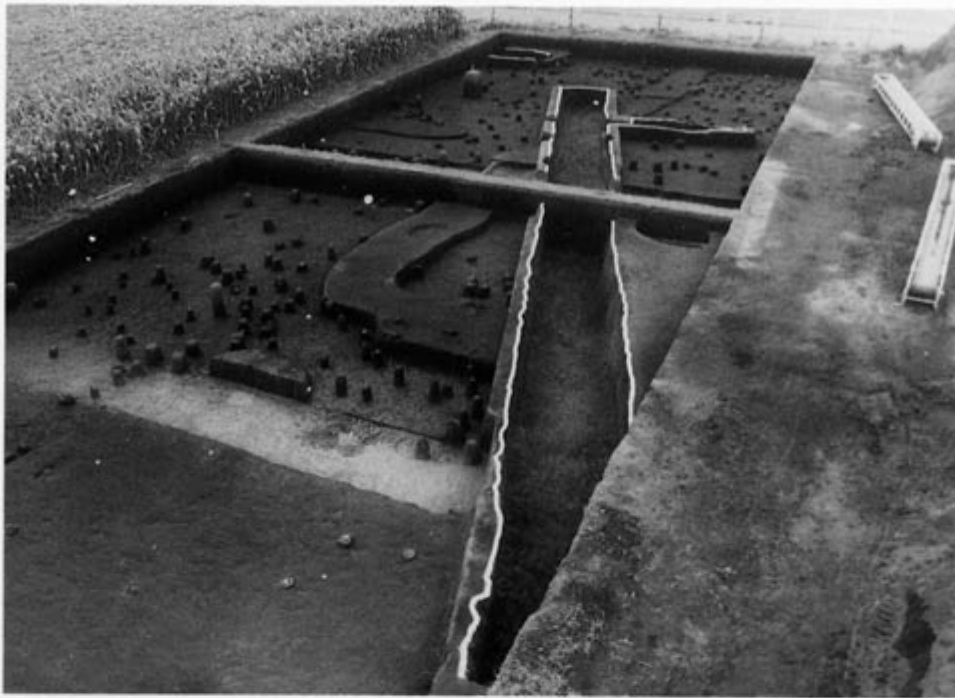
以上、弥生時代や縄文時代の調査に先駆けて、戦跡遺構の調査を行なう結果となった。先史時代の調査を行なう過程で避けては通れぬものであったが、しかし、この調査の成果もこの地域の歴史的な流れを知る上の大切な記録となろう。

圖 版

PLATES



1. 掩体壕跡遠景（東から）



2. 掩体壕跡の外壕（北西から）



1. 掩体壕跡の外壕 (南西から)



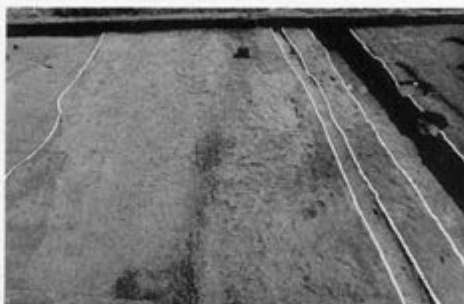
2. 掩体壕跡の外壕の断面 (D15区)



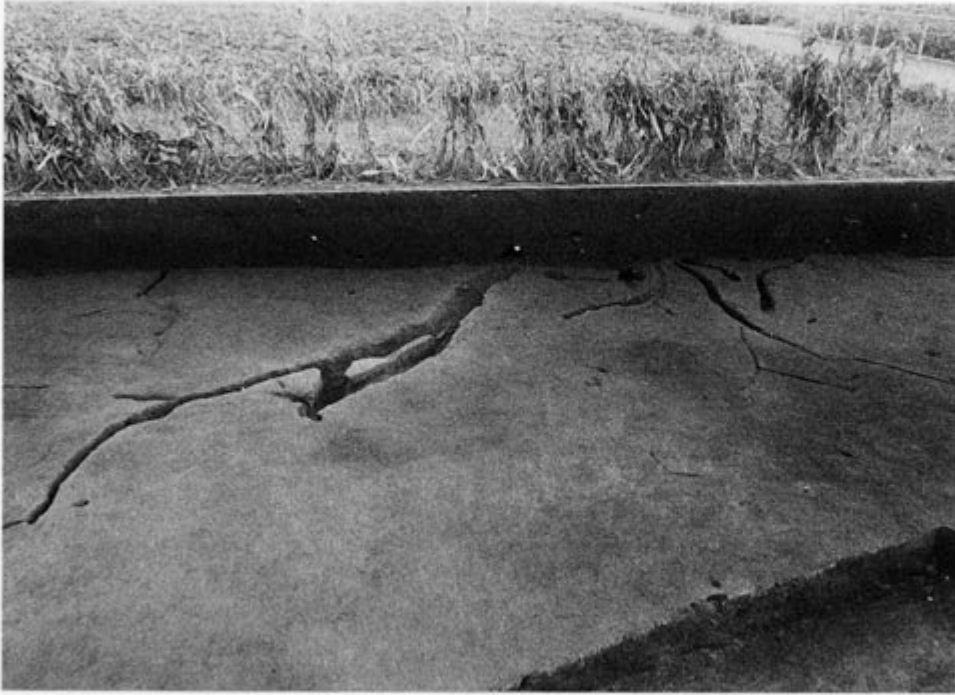
3. 掩体壕跡の外壕の断面 (B19区)



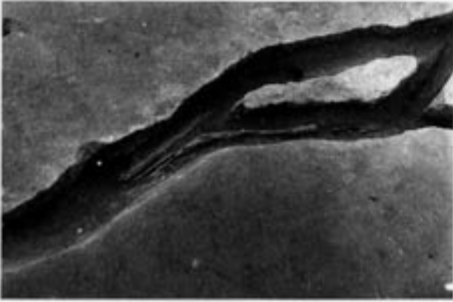
4. 掩体壕跡の内壕 (東から)



5. 掩体壕内の旧道跡 (南から)



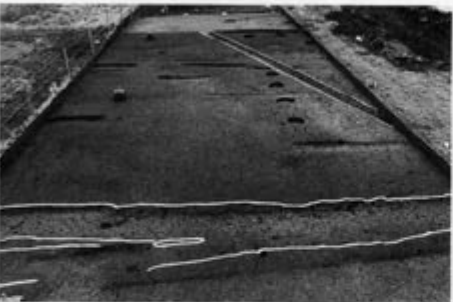
1. 松の樹根跡全景 (源氏松)



2. 松の樹根跡近景



3. 誘導路跡(2)の水路跡 (東から)



4. 誘導路跡(2)の水路跡 (西から)



5. 誘導路跡(2)の水路跡の断面



1. 誘導路跡(1)の全景 (南から)



2. 碎石敷き部分と東側水路 (南から)



3. 碎石敷き部分 (南から)



4. 中原山野遺跡のD区列全景 (東から)



5. 中原山野遺跡のD区列全景 (西から)





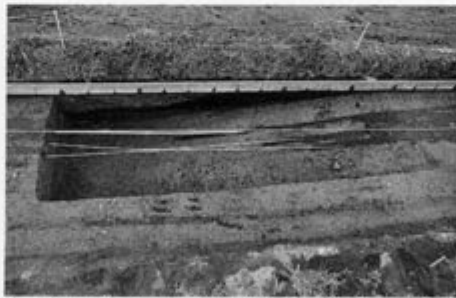
1. 旧道跡 (中原山野遺跡D8・9区)



2. 水路跡 (中原山野遺跡X1区)



3. 水路跡 (前畑遺跡U1区)



4. 竪穴(1) (中原山野遺跡D22区・D23区)



5. 竪穴(2) (前畑遺跡AB8区・AB9区)



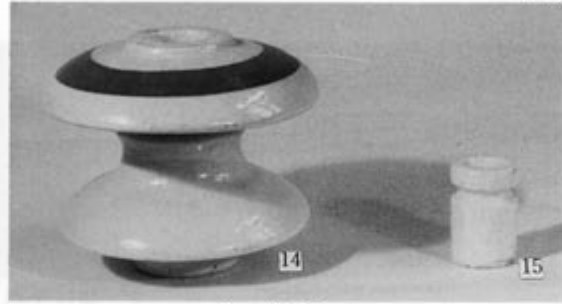
1. 源氏松



2. 弾・薬きょう



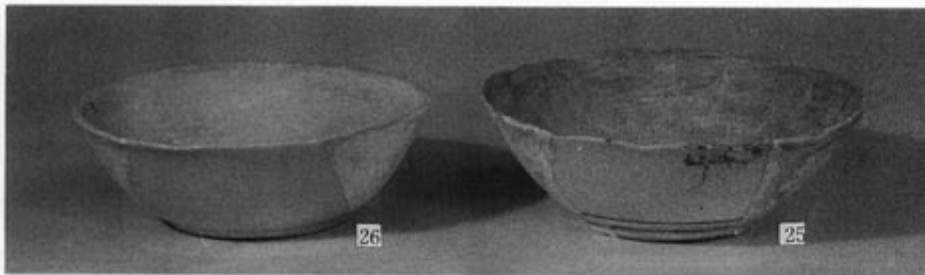
1. 名札



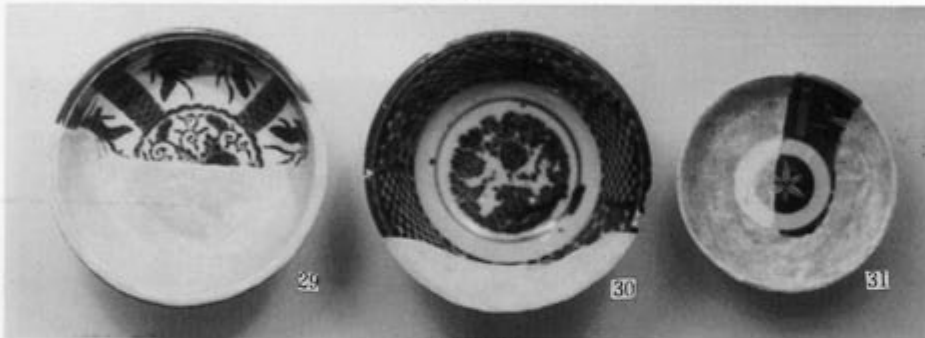
2. ガイシ



3. 甕



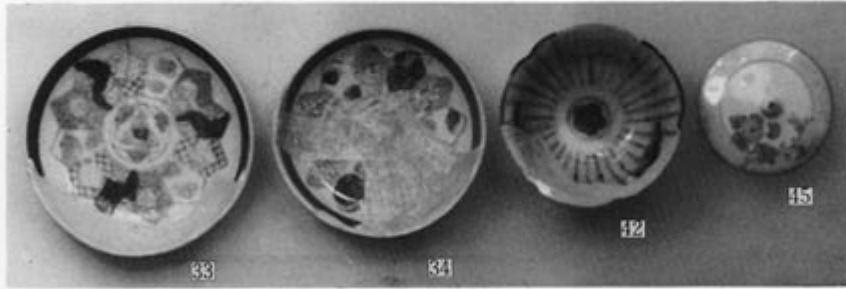
4. 白磁大皿



5. 染付大皿



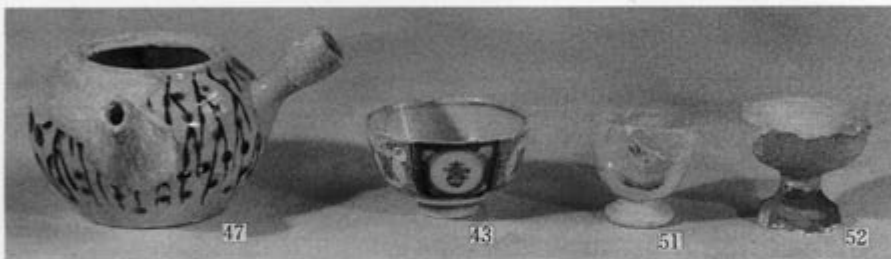
1. 染付大皿



2. 赤絵染付皿



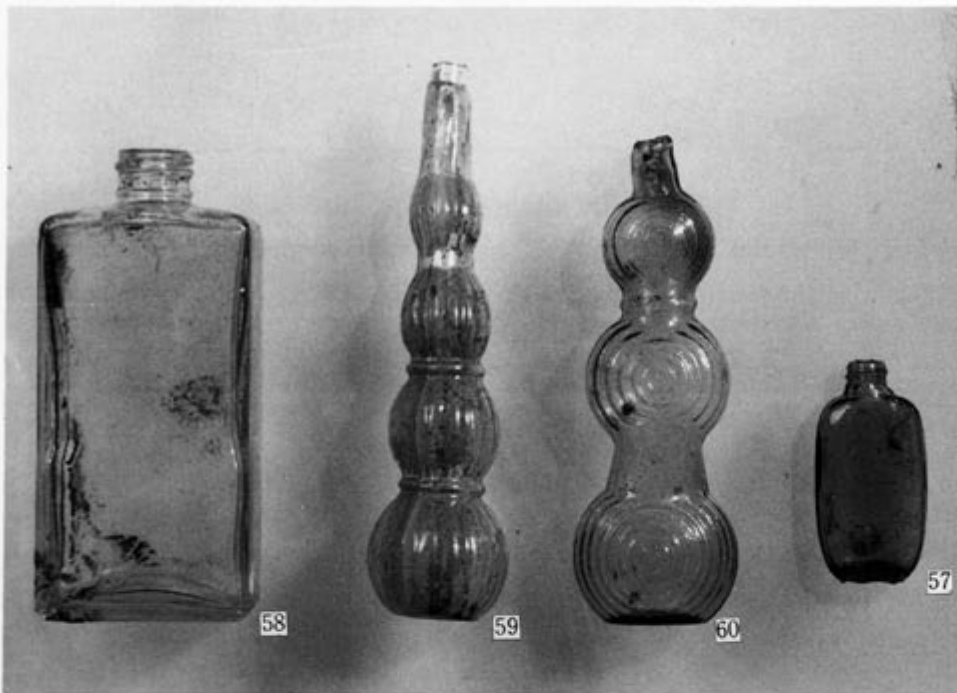
3. 染付碗・湯呑茶碗



4. 急須・祭器



1. ビン類 (1)



2. ビン類 (2)

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (52)  
一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書 (Ⅲ)

中ノ原遺跡 (Ⅱ) 第5分冊

中原山野遺跡

西原掩体壕跡

発行日 平成2年3月

発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 中央印刷株式会社 〒892 鹿児島市春日町12番16号

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (52)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書 (Ⅲ)

# 前 畑 遺 跡

(第6分冊)

1990. 3

鹿児島県教育委員会

## 例 言

1. この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の「前畑遺跡」の発掘調査書である。
2. この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)の「前畑遺跡」(第6分冊)である。
3. 中ノ原遺跡は、鹿屋市郷之原町(旧字名前畑)に所在する。
4. 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
5. 発掘調査は、昭和62年6月19日～昭和63年3月9日間と昭和63年4月19日～9月2日の間に実施した。整理作業は、昭和63年度と平成元年度に実施した。
6. 発掘調査においては、鹿屋市教育委員会や大浦町内会の協力・援助を得た。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 現地調査においては、河口貞徳(鹿児島県文化財審議会審議員)・宮本長二郎(奈良国立文化財研究所遺構調査室長)・小片丘彦(鹿児島大学歯学部教授)・成尾英仁(鹿児島玉龍高校教諭)の御指導を得た。報告書作成作業においては、下篠信行(受媛大学法文学部教授)・上村俊雄(鹿児島大学法文学部教授)・武末純一(北九州市立考古博物館副館長)・櫻木晋一(九州帝京短期大学経済学部講師)・本田道輝(鹿児島大学法文学部助手)・成尾英仁(鹿児島玉龍高校教諭)の御指導を得た。
9. 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者(新東晃一・前迫亮一・梅北浩一・中村和美・八木沢一郎)で行った。出土遺物の実測・製図は雨宮瑞生・関一乏・八木沢・前迫・新東が行なった。
10. 本書の執筆は、小片丘彦・峰 和治(第Ⅳ章第3節)、櫻木晋一(第Ⅳ章第4節)に玉稿を頂き、そのほか石器を雨宮(第Ⅱ章第2節2(2))と関(第Ⅱ章第2節2(2)M)と梅北(第Ⅱ章第3節2)が分担し、他を新東が担当した。
11. 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東がこれを担当した。



# 目 次

第 I 章	調査の概要	1
第 1 節	調査の経緯	1
第 2 節	発掘調査の方法と経緯	1
第 3 節	発掘調査の概要	4
第 4 節	遺跡の層位	6
第 II 章	縄文時代の調査	8
第 1 節	調査の概要	8
第 2 節	X 層の調査	8
1	X 層の概要	8
2	遺構	8
3	出土遺物	22
第 3 節	V 層の調査	85
1	V 層の概要	85
2	出土遺物	85
第 III 章	弥生時代の調査	99
第 1 節	調査の概要	99
第 2 節	III 層の調査	99
1	遺構	99
2	出土遺物	136
第 IV 章	近世墓の調査	152
第 1 節	近世墓の概要	152
第 2 節	鹿屋市前畑遺跡出土の近世人骨 小片丘彦・峰 和治	161
第 3 節	前畑遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭 櫻木晋一	167
第 V 章	発掘調査のまとめ	173

## 挿 図 目 次

第1図	前畑遺跡の地形とグリッド配置図	3
第2図	大浦・郷之原地区の基本的層序と前畑遺跡の層位	7
第3図	前畑遺跡の層位図(1)	9
第4図	前畑遺跡の層位図(2)	11
第5図	集石遺構と礫の分布状況	13
第6図	1号集石実測図	15
第7図	2号集石実測図	16
第8図	3号集石実測図	17
第9図	4号集石実測図	18
第10図	5号集石実測図	19
第11図	6号集石実測図	20
第12図	集石遺構の石塊の最大長と重量比	21
第13図	X層の遺物出土分布図	23
第14図	X層の土器出土分布図	25
第15図	I類・II類土器実測図	27
第16図	III類土器実測図	28
第17図	IV類土器出土分布図	31
第18図	IV類土器実測図(1)	33
第19図	IV類土器実測図(2)	34
第20図	IV類土器実測図(3)	35
第21図	IV類土器実測図(4)	36
第22図	IV類土器実測図(5)	37
第23図	IV類土器実測図(6)	39
第24図	IV類土器実測図(7)	40
第25図	IV類土器実測図(8)	41
第26図	IV類土器実測図(9)	42
第27図	IV類土器実測図(10)	43
第28図	IV類土器実測図(11)	44
第29図	IV類土器実測図(12)	45
第30図	IV類土器実測図(13)	46
第31図	IV類土器実測図(14)	47
第32図	IV類土器実測図(15)	48
第33図	IV類土器実測図(16)	49

第34図	Ⅳ類土器実測図 (17)	50
第35図	Ⅳ類土器実測図 (18)	51
第36図	Ⅳ類土器実測図 (19)	54
第37図	Ⅳ類土器実測図 (20)	55
第38図	Ⅳ類土器実測図 (21)	56
第39図	Ⅳ類土器実測図 (22)	57
第40図	Ⅳ類土器実測図 (23)	58
第41図	Ⅴ類土器の分布と他類土器との比較	59
第42図	Ⅴ類土器実測図 (1)	63
第43図	Ⅴ類土器実測図 (2)	64
第44図	Ⅴ類土器実測図 (3)	65
第45図	Ⅵ類土器実測図	65
第46図	X層石器出土分布図	67
第47図	石器実測図 (1)	69
第48図	石器実測図 (2)	70
第49図	石器実測図 (3)	71
第50図	石器実測図 (4)	72
第51図	石器実測図 (5)	73
第52図	石器実測図 (6)	74
第53図	石器実測図 (7)	75
第54図	石器実測図 (8)	76
第55図	石器実測図 (9)	77
第56図	石器実測図 (10)	78
第57図	石器実測図 (11)	79
第58図	石器実測図 (12)	80
第59図	石器実測図 (13)	81
第60図	石器実測図 (14)	82
第61図	石器実測図 (15)	83
第62図	Ⅴ層出土遺物分布図	85
第63図	Ⅴ層土器出土状況	86
第64図	土器実測図	87
第65図	石器実測図	88
第66図	Ⅲ層遺構配置図	100
第67図	1号住居址遺物分布図	101
第68図	1号住居址遺物出土状況図	102

第 69 图	1 号住居址実測図	103
第 70 图	1 号住居址出土遺物実測図	103
第 71 图	2 号住居址遺物分布図	104
第 72 图	2 号住居址遺物出土状況図	105
第 73 图	2 号住居址実測図	106
第 74 图	2 号住居址出土遺物実測図 (1)	107
第 75 图	2 号住居址出土遺物実測図 (2)	107
第 76 图	2 号住居址出土遺物実測図 (3)	108
第 77 图	3 号住居址遺物分布図	109
第 78 图	3 号住居址遺物出土状況図	110
第 79 图	3 号住居址実測図	111
第 80 图	3 号住居址出土遺物実測図 (1)	112
第 81 图	3 号住居址出土遺物実測図 (2)	113
第 82 图	3 号住居址出土遺物実測図 (3)	114
第 83 图	1 号掘立柱建物跡遺物出土状況図	115
第 84 图	1 号掘立柱建物跡実測図	116
第 85 图	1 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	117
第 86 图	2 号掘立柱建物跡遺物出土状況図	120
第 87 图	2 号掘立柱建物跡実測図	121
第 88 图	2 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1)	123
第 89 图	2 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (2)	124
第 90 图	2 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (3)	125
第 91 图	3 号掘立柱建物跡実測図	126
第 92 图	4 号掘立柱建物跡実測図	128
第 93 图	5 号掘立柱建物跡実測図	129
第 94 图	6 号掘立柱建物跡実測図	130
第 95 图	7 号掘立柱建物跡実測図	131
第 96 图	8 号掘立柱建物跡実測図	133
第 97 图	8 号掘立柱建物跡出土遺物実測図	134
第 98 图	円形周溝遺構実測図	134
第 99 图	円形周溝出土遺物実測図	135
第100 图	Ⅲ層遺物出土分布図	137
第101 图	Ⅲ層出土遺物実測図 (1)	139
第102 图	Ⅲ層出土遺物実測図 (2)	140
第103 图	Ⅲ層出土遺物実測図 (3)	141
第104 图	Ⅲ層出土遺物実測図 (4)	142

第105図	Ⅲ層出土遺物実測図（5）	143
第106図	Ⅲ層出土遺物実測図（6）	143
第107図	Ⅲ層出土遺物実測図（7）	145
第108図	Ⅲ層出土遺物実測図（8）	146
第109図	Ⅲ層出土遺物実測図（9）	147
第110図	近世墓の配置図	152
第111図	墓壙配置図（1）	153
第112図	1号墓実測図	154
第113図	1号墓出土古銭	154
第114図	2号墓実測図	155
第115図	2号墓出土古銭	155
第116図	3号墓実測図	156
第117図	3号墓出土古銭	156
第118図	4号墓・5号墓実測図	157
第119図	4号墓・5号墓出土古銭	157
第120図	墓壙配置図（2）	158
第121図	6号墓実測図	159
第122図	6号墓出土古銭	159
第123図	7号墓実測図	160
第124図	7号墓出土ガラス玉実測図	160

## 表 目 次

第1表	遺跡出土遺物一覧表	89
第2表	遺跡出土遺物一覧表	90
第3表	遺跡出土遺物一覧表	91
第4表	遺跡出土遺物一覧表	92
第5表	遺跡出土遺物一覧表	93
第6表	遺跡出土遺物一覧表	94
第7表	遺跡出土遺物一覧表	95
第8表	遺跡出土遺物一覧表	96
第9表	出土石器一覧表	96
第10表	出土石器一覧表	97
第11表	出土石器一覧表	98
第12表	1号掘立柱建物跡の一覧表	118
第13表	2号掘立柱建物跡の一覧表	124
第14表	3号掘立柱建物跡の一覧表	127

第 15 表	4号掘立柱建物跡の一覧表	128
第 16 表	6号掘立柱建物跡の一覧表	129
第 17 表	7号掘立柱建物跡の一覧表	131
第 18 表	8号掘立柱建物跡の一覧表	132
第 19 表	遺跡出土遺物一覧表	148
第 20 表	遺跡出土遺物一覧表	149
第 21 表	遺跡出土遺物一覧表	150
第 22 表	出土石器一覧表	151

## 図 版 目 次

図版 1	1. 前畑遺跡・中原山野遺跡遠景（南西から）	179
	2. 前畑遺跡の層位	
図版 2	1. 集石遺構検出状況（西から）	180
	2. 石斧（306）出土状況	
	3. X層検出状況      4. 土器（30）出土状況	
図版 3	1. 4号集石と周辺の検出状況	181
	2. 3号集石      3. 3号集石断面	
	4. 6号集石      5. 6号集石断面	
図版 4	1. 縄文土器（X層）（1）	182
図版 5	1. 縄文土器（X層）（2）	183
図版 6	1. 縄文土器（X層）（3）	184
図版 7	1. 縄文土器（X層）（4）	185
図版 8	1. 縄文土器（X層）（5）	186
図版 9	1. 縄文土器（X層）（6）	187
図版 10	1. 縄文土器（X層）（7）	188
図版 11	1. 縄文土器（X層）（8）	189
図版 12	1. 縄文土器（X層）（9）	190
図版 13	1. 縄文土器（X層）（10）	191
図版 14	1. 縄文土器（X層）（11）	192
図版 15	1. 縄文土器（X層）（12）	193
図版 16	1. 縄文土器（X層）（13）	194
図版 17	1. 縄文土器（X層）（14）	195
図版 18	1. 縄文土器（X層）（15）	196
図版 19	1. 石器（X層）（1）	197

図版20	1. 石器 (X層) (2).....	198
図版21	1. 石器 (X層) (3).....	199
図版22	1. 石器 (X層) (4).....	200
図版23	1. 石器 (X層) (5).....	201
図版24	1. VI層遺物出土状態 (東から) .....	202
	2. VI層土器出土状態 (386)	
	3. 縄文土器 (VI層)	
図版25	1. 石器 (VI層) .....	203
図版26	1. III層 (弥生時代) 全景 (東から) .....	204
	2. III層 (弥生時代) 全景 (北東から)	
図版27	1. III層 (弥生時代) 遺構近景 (北から) .....	205
	2. III層 (弥生時代) 遺構近景 (西から)	
図版28	1. III層遺物出土状況遠景 (東から)    2. 土器出土状況.....	206
	3. 土器出土状況                      4. 土器出土状況	
	5. 石器 (536) 出土状況    6. 鉄片出土状況	
	7. 石鏃 (527) 出土状況	
図版29	1. 1号住居址遠景 (東から)                      2. 1号住居址検出状況.....	207
	3. 1号住居址掘り下げ状況 (北から)    4. 1号住居址掘り下げ状況 (南から)	
	5. 柱炭化木検出状況                      6. 1号住居址出土遺物	
図版30	1. 1号住居址全景                      2. 1号住居址全景.....	208
図版31	1. 2号住居址検出状況    2. 住居址掘り下げ状況.....	209
	3. 炭化木出土状況                      4. 住居址床面検出状況	
	5. 2号住居址遠景 (南から)	
図版32	1. 2号住居址検出状況 (南から) .....	210
	2. 2号住居址全景 (南から)	
図版33	1. 2号住居址出土遺物 (1) .....	211
図版34	1. 2号住居址出土遺物 (2) .....	212
図版35	1. 3号住居址掘り下げ状況 (1)    2. 3号住居址掘り下げ状況 (2) .....	213
	3. 3号住居址全景                      4. 3号住居址遠景	
	5. 3号住居址全景	
図版36	1. 1号掘立柱建物掘り上げ状況 (1) .....	214
	2. 1号掘立柱建物掘り下げ状況 (2)	
図版37	1. 1号掘立柱建物検出状況    2. 掘り下げ状況 (1) .....	215
	3. 掘り下げ状況 (2)                      4. 検出状況	
	5. 1号掘立柱建物検出状況	

図版38	1. 柱穴掘り下げ状況	2. 溝1断面(1)	216
	3. 溝1断面(2)	4. 建物内路址検出状況	
図版39	1. 1号掘立柱建物・溝1出土遺物		217
図版40	1. 2号掘立柱建物検出状況(北から)		218
	2. 2号掘立柱建物掘り下げ状況(北から)		
図版41	1. 溝2遺物出土状況(南から)	2. 溝2遺物出土状況(南から)	219
	3. 2号掘立柱建物検出状況(北から)	4. 溝2全景(東から)	
	5. 柱穴掘り下げ状況(北から)	6. 2号掘立柱建物遠景(北から)	
図版42	1. 2号掘立柱建物(溝内)出土遺物		220
図版43	1. 4号掘立柱建物掘り下げ状況	2. 作業風景	221
	3. 4号建物と溝3遠景	4. 4号掘立柱建物全景	
図版44	1. 6号・7号建物検出状況(1)	2. 6号・7号建物検出状況(2)	222
	3. 6号・7号建物掘り下げ状況	4. 6号・7号・8号建物全景	
	5. 6号・7号掘立柱建物全景		
図版45	1. 8号建物掘り下げ状況(東から)	2. 建物群遠景(西から)	223
	3. 8号建物柱穴出土遺物	4. 柱穴掘り下げ状態	
	5. 8号建物全景(東から)		
図版46	1. 柱穴検出状態		224
図版47	1. 柱穴検出状態		225
図版48	1. III層出土土器(1)		226
図版49	III層出土土器(2)		227
図版50	III層出土土器(3)		228
図版51	1. III層出土土器(4)		229
図版52	1. III層出土石器		230
図版53	1. 中・近世溝状遺構(A B 区)		231
	2. 中・近世溝状遺構(A B 区)		
図版54	1. 1号墓(北から)	2. 1号墓遺物出土状態	232
	3. 1号墓作業風景	4. 2号・3号墓(東から)	
	5. 2～5号墓(北から)	6. 2～5号墓(北西から)	
図版55	1. 3～5号墓(東から)	2. 4号墓出土状態	233
	3. 4号・5号墓(東から)	4. 6号墓(北から)	
	5. 7号墓出土遺物	6. 7号墓(東から)	
図版56	1. 古銭(1号～4号墓)	2. ガラス玉(2号墓)	234
	3. 古銭(6号墓)	4. 櫛(4号墓)	
	5. 古銭(6号墓)	6. 数珠玉(7号墓)	



# 第 I 章 調査の概要

## 第 1 節 調査の経緯

前畑遺跡は、郷之原台地の中央を通る県道西原～郷之原線の西側の平坦地に位置し、中原山野遺跡には隣接している。

昭和59年度の分布調査では、県道から排水路までの遺物の散布がみられたため、これを第4地点とした。

建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づき、昭和60年4月確認調査を実施した。確認調査は、ほぼ中央の畑地にトレンチを1本設定した。確認調査の結果、この部分でアカホヤ火山灰の下層に縄文時代早期の包含層を確認した。遺物は密集しており遺跡の中心部と考えられた。

建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、この第5地点は、昭和62年度に再度確認調査を実施することとした。

## 第 2 節 発掘調査の方法と経過

前畑遺跡の昭和62年度の発掘調査は、本道部分の確認調査と一部の本調査及び上水道埋設部分等の確認調査及び本調査を実施した。発掘調査は、昭和62年6月19日から昭和63年3月9日に実施したが、工事の関係で中原山野遺跡と並行して実施せざるを得なかった。本道部分は、散布域のA B 20区付近までの確認調査を終了した。A B 20区付近の確認調査の結果、A B 20区以西にも遺跡が拡張することが判明した。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、A B 20区以西に確認調査を追加することになった。

発掘調査は、昭和62年度と昭和63年度の2年度にわたって実施した。

前畑遺跡の昭和62年度の発掘調査は、昭和62年6月19日から昭和63年3月9日の間に実施したが、工事の関係で中原山野遺跡と並行して実施せざるを得なかった。本道部分は、散布域のA B 20区付近までの確認調査を昭和62年6月19日から7月15日の1カ月間、中原山野遺跡の確認調査と並行して実施した。遺跡の想定をもとに、工事用センター杭No.415とNo.420を基準に10m×10mのグリッド網を確認調査対象区に被せ実施した。そして、グリッドは、東端から1～10区と南からA～C区として、各グリッドはA 1区-----A 10区、B 1区-----B 10区などと呼称することにした。そのグリッドの東側に2m×10mの確認調査トレンチを1グリッド毎に設定した。

A B 20区付近の確認調査の結果、A B 20区以西にも遺跡が広がることが判明した。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、A B 20区以西に確認調査を追加すること

になった。以下、発掘調査の経過は日誌抄をもって説明する。

**【昭和62年度の調査】 昭和62年6月19日～昭和63年3月9日**

6月は、グリッド設定を行い確認調査に入る。B7区～B17区までトレンチを設定。6月は確認調査に終始。表土直下から戦跡遺構、その下には弥生時代と縄文時代晩期が、さらに下層には縄文時代早期の包含層が確認された。

7月は、6月の継続とB19区、B20区の確認トレンチ掘り下げ作業。ほぼ遺物分布範囲のトレンチ設定は完了。すべてのトレンチで包含層を確認する。AB20区以西の部分にも遺跡の広がりが見込まれ、建設省大隅工事事務所と協議を行う。AB20区付近から以東に平面調査を実施する。AB15区～AB20区に掩体壕跡を検出。清掃・写真撮影・実測作業を行う。その下層に、AB17区～AB20区に弥生時代包含層を検出し掘り下げ開始。7月26日『かごしまの古代探訪』。

8月は、掩体壕の精査と周辺の弥生時代包含層の掘り下げ作業。AB12区・AB13区の平面調査で近世墓検出。10日、小片丘彦鹿児島大学教授近世墓調査。11日、建設省よりAB20区以西の確認調査の依頼があり、B23区～AB27区にトレンチ設定。その結果、AB24区付近まで弥生時代包含層が残存することが確認される。AB17区～AB20区に住居址や掘立柱建物跡等の弥生時代遺構検出。この区の遺構の配置をほぼ確認する。

9月は、AB21区～AB25区の弥生時代の遺構の検出作業。表土剥ぎ作業を行い、表土直下に弥生時代包含層を検出。遺物実測・取り上げ作業の処理を行い遺構検出作業。17日、掘立柱建物跡5基を確認する。この区は、建物跡だけ存在する。遺構の精査と平面実測に入る。並行して18日からは、AB6区～AB12区の弥生時代包含層の掘り下げに入る。

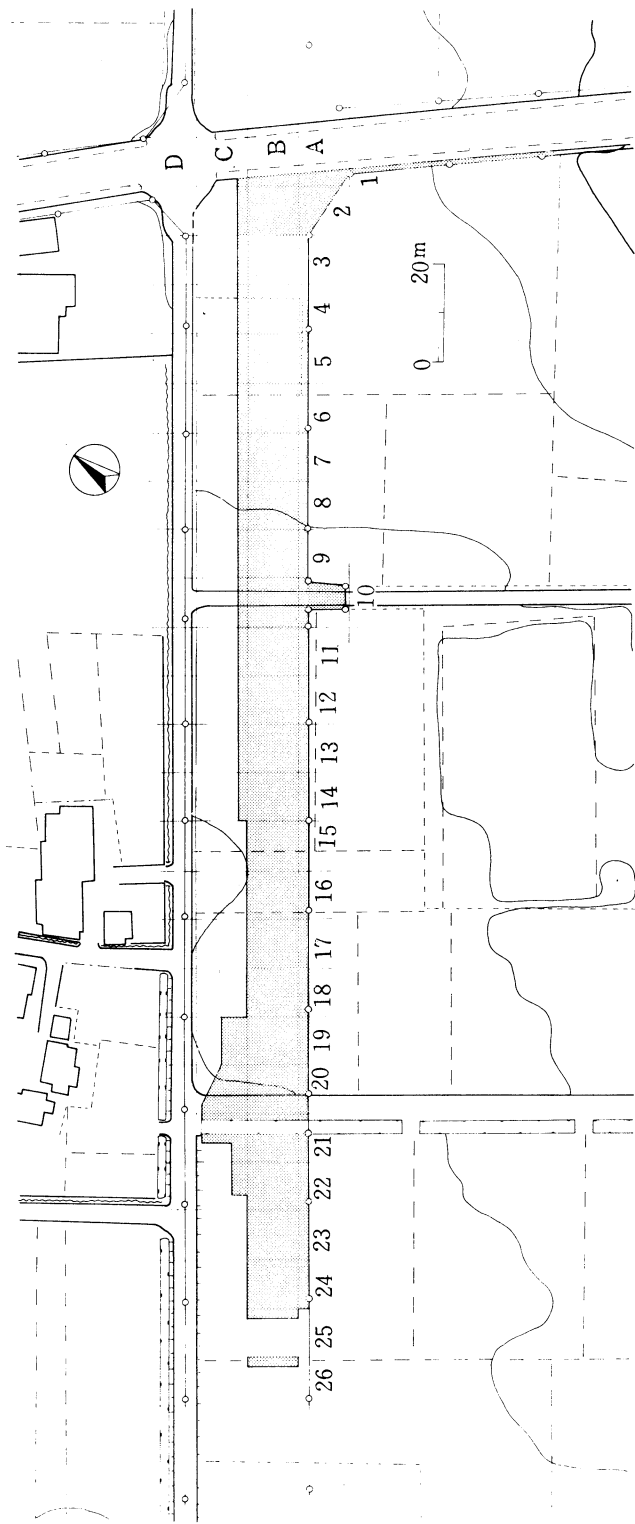
10月は、工事の関係で中原山野遺跡の調査を中心に行う。その間、AB13区～AB15区のアカホヤ火山灰上部の清掃とAB11区・AB12区縄文時代早期包含層の調査を開始。

11月は、中原山野遺跡の調査に主力を置く。一部、C1区とD1区の電話線埋設部分の調査を行う。そしてAB11区・AB12区縄文時代早期包含層の調査。

12月は、県道西原～郷之原線の前畑遺跡分の上水道埋設部分の調査に入る。戦跡遺構と縄文時代早期包含層を検出。また、20区～21区にかかる排水溝の建設のため、C19区・C20区を拡張する。22日からAB13区・AB14区のアカホヤ火山灰層を排土し、早期包含層の掘り下げ作業を行う。年度末は25日に終了。

1月は、6日調査開始。AB11区～AB14区縄文時代早期包含層の調査から開始する。早期の遺物が多量に出土。継続してAB20区・AB21区の道路部分の掘り下げ作業を行う。道路下の弥生時代包含層は遺物が多量に出土する。遺物の処理後、遺構検出作業。月末は住居址1号～3号の掘り下げに主力を置く。

2月は、住居址1号～3号の掘り下げ作業及び実測。並行してAB11区～AB13区の早期包含層の掘り下げ作業継続。続いて建物跡の一段掘りを行い建物跡の配置を確認。10日、河口貞



第1図 前畑遺跡の地形とグリッド配置図

徳県文化財保護審議会委員現地指導。12日、全体写真撮影。排水溝工事のため建物跡2及び建物跡3の柱穴掘り下げ。月末、21区以西の建物跡の調査に主力を置き終了する。宮本長二郎奈良国立文化財研究所遺構調査室長、建物跡調査指導。

3月は、住居址1号～3号及び建物跡1号～3号の実測・写真撮影を行い終了。今年度の工事区間については9日で終了する。

#### 【昭和63年度の調査】 昭和63年4月19日～9月2日

4月は、昨年度の残部のAB4区・AB5区の表土剥ぎ作業を行い遺構検出。戦跡遺構（誘導路）を検出。さらに、AB13区・AB14区は縄文時代早期の遺物の検出及び実測取り上げ作業継続。弥生時代住居址1号・2号の最終面の写真实測。

5月は、AB11区～AB14区間の縄文時代早期包含層の掘り下げ検出作業を継続。大量の遺物とともに集石遺構検出。集石は3基検出。写真撮影及び実測作業。

6月は、しばらく先月の継続。AB11区～AB14区の早期包含層の掘り下げ作業。13日からAB3区～AB4区の早期包含層掘り下げに移る。20日からAB5区～AB6区の早期包含層に移る。AB3区～AB4区は下層確認の深掘り作業。AB7区～AB9区へ移動。早期包含層はほとんど全域に広がる。

7月は、AB7区～AB9区の早期包含層の掘り下げ及び実測・遺物取り上げ作業。10区へも入る。AB9区～AB10区付近が最も遺物が多く難行。

8月は、AB7区～AB10区の早期包含層の最終面の調査。C3区～C6区の拡張区の早期包含層の掘り下げ作業に入る。C3区拡張区より縄文時代早期の特殊石斧が出土。AB7区、AB9区の下層確認の深掘りトレンチ掘り下げ作業続行。断面実測。集石遺構の実測。集石3号～8号は平面実測から開始。1号・2号は断面実測に移る。月末終了。17日から、C7区～C14区の早期包含層の掘り下げ開始。遺物実測。取り上げ作業の継続。掘り下げ作業は8月31日で終了。9月1日～2日、残部の断面実測を終了し、機材等を撤去し運搬。前畑遺跡の全ての発掘調査を完了する。

### 第3節 発掘調査の概要

昭和62年度の発掘調査は、戦跡遺構と弥生時代の住居址・掘立柱建物跡等の集落跡の調査及び縄文時代早期包含層の一部の調査である。

本発掘調査は、上層から順次行った。その結果、AB1区～AB20区にかけては、戦時中の遺構・遺物が多量に出土した。AB1区～AB10区には、誘導路と付属施設が検出された。さらに、AB14区～AB20区には、飛行機を格納するための掩体壕が検出されている。

その下層には、近世の溝状遺構と墓が検出されている。溝状遺構は、AB7区～AB8区、AB11区～AB12区、AB17区～AB24区にかけて検出されたが用途は不明である。近世墓は

A B 12区～A B 13区、A B 20区にかけて7基発見されている。

A B 16区～A B 25区の間に弥生時代の、遺物包含層・遺構が検出された。遺構は、竪穴住居址3基、掘立柱建物跡8棟、円形周溝1基、溝状遺構3基（但し、建物に付随するものが2基）検出された。時期は、弥生時代中期末～後期初頭の山ノ口式土器に該当するものである。

住居址は、B 7区（1号）、B C 19区（2号）、B 20区（3号）に所在し、いずれも方形の平面プランを呈するものである。1号及び2号住居址は、焼失家屋であり、炭化木が住居址内に多量に出土している。

掘立柱建物跡は、二通りのタイプがみられる。一つのタイプは1号～3号建物で、梁間が3間のものである。3号は現水路で破壊されているため全形は知り得ないが、1号、2号建物は、梁間×桁間が3間×4間である。1号、2号には、中央付近に炉跡状の変色部分が確認され、さらに北側に溝状の遺構が付設されている。なお、1号建物には、棟持柱状の柱穴が梁間外側に確認された。平地式建物の可能性が大きい。

二つ目のタイプは、梁間が1間のものである。4号建物は、1間×1間のタイプである。5号建物は用地外に延びるが、1間×2間の建物の可能性が強い。6号～8号建物は、1間×2間の同一タイプのものである。外側の4本柱が主柱で掘り方が大きく深い。中柱は小さく浅いため添え柱の可能性が強い。高床倉庫跡の可能性が大きい。

円形周溝は、C 20区に1基発見された。2号建物と3号建物に切られているため、この円形周溝が一番古い段階の構築物であることがわかる。用途は不明である。

溝状遺構は1号・2号は建物跡に付随するものである。建物跡に付随した溝は全国的にも珍しく極めて貴重である。3号溝は直角に曲がる形で検出されたが、削平されて全容は不明である。

特に、竪穴住居址、平地式建物跡、円形周溝遺構、高床式建物跡の遺跡内での配置は、集落構成を知るための貴重な資料となった。

縄文時代晩期の時期は、A B 1区～A B 9区の間を確認された。この区間については、包含層の掘り下げで終了した。遺構は検出されていない。

縄文時代早期の時期は、A B 1区～A B 17区間を確認され一部を終了し、残りについては昭和63年度に継続して実施することになった。早期の時期は、集石遺構等が確認されている。早期該当の時期は、平椀式土器を中心に出土し、石坂式土器・塞ノ神式土器が若干含まれる。

昭和63年度の発掘調査は、A B 4区～A B 5区の未調査（未買収）の部分の調査とA B 11区～A B 14区の縄文時代早期包含層の掘り下げ作業を行う。さらに、建設省から2m幅の工事拡張のための調査依頼があり、その部分を追加して調査を行う。

調査は、ほとんど縄文時代早期包含層の掘り下げ作業で集石遺構8基に伴って大量の遺物が出土している。A B 9区～A B 11区付近が微高地状に高くなり、その微高地は南の用地外に広がる。特に縄文時代早期の遺物の中心は、A B 9区～A B 13区付近で用地外は南側に広がる事が予想される。

集石遺構は、この微高地の北側の端部に配置されている。調査範囲内で8基の検出であり、用地外を含めると相当な存在が予想される。

微高地上の集石遺構に囲まれた中央に広場状の空間が存在するが、住居址等の遺構は存在しない。

なお、C3区の拡張区の縄文時代早期包含層中から、敲打仕上げの特殊な石斧が出土し注目されている。

#### 第4節 遺跡の層位

前畑遺跡の層位は、発掘調査対象区域が約250mにも及ぶため区によっては大きな変化がみられる。先に記載（第一分冊「概要編」・第三章・第1節）した大浦・郷之原地区の基本的層序と比較すると、欠落する層位や若干変容する層位もかなりみられる。そのためここでは、前畑遺跡のうち安定した地層と考えられるB10区とB11区付近の層位から前畑遺跡の層位的特徴を説明する。

挿図の第3図と第4図は、前畑遺跡の層位断面図である。層位断面図は、発掘調査対象区が道路建設のため12m幅で台地を輪切りにした形で長く延びるため、センター部分つまりB区列の北側断面を1本通した。それが、第3図①～第4図⑧である。そのほかに、台地の縦位の地層を知るために20m毎に東側断面を提示した。それが、第3図～第4図である。

前畑遺跡の層位をみると、ほぼ基本的層序に準じている。このなかで前畑遺跡で確認されず欠落することが考えられる層は、Ⅷ層の砂礫層である。この砂礫層は入戸火砕流堆積後の自然現象によるもので、台地端部などに局部的形成が考えられるものであり、台地中央部に位置する前畑遺跡で欠落するのは当然の現象である。

I層は、a～cの3つに分離しているが、前畑遺跡ではほとんどがa、bの2層が確認される。特に、縄文時代早期遺跡が所在するB3区からB15区付近は高台のためか、削平されて旧地形をとどめていない。ただ、弥生時代の遺構が検出されたB19区～B20区の一部の付近だけはa～c層やその直下の層が残存しているようである。

II層は、純黒色の綺麗な土層である。B7区付近からB11区の途中までとB19区の途中からB22区の途中までに残存している。いずれも下層が凹地を形成している部分にあたる。確かな遺構・遺物は確認されていないが、実態の不明な溝状遺構がみられるのみである。

III層は、黒褐色土層で弥生時代中期～後期初頭の包含層である。弥生時代の遺構をはじめ多くの遺物が出土している。A B16区～A B24区付近の範囲である。

IV層は、黄茶褐色土層を呈する。黄色の微粒子を含み火山灰状を呈している。この層は、中原山野遺跡の調査の結果、中原山野遺跡の黄白色土層に対比されることが判明した。しかもこの層は火山灰層ではなく、下層のⅪ層にあたる薩摩降下軽石火山灰層の二次堆積の可能性が高い。中原山野遺跡では厚い独立層を形成するが、縁辺部の遺跡ではこのように薄い形状の堆積

になる。

V層は、茶褐色土層で縄文時代晩期の包含層を形成している。本遺跡では、6～9区に包含層が残し遺物が出土している。他の地区は、削平されている。

VI層は、黄褐色土層であり、一般的にはアカホヤ火山灰層の二次堆積層である。下層にVII層にあたる池田降下軽石層が浮遊した状態で堆積し、この軽石層より上面がVI層にあたる。

VII層は、池田降下軽石火山灰層に相当するが、この付近では層は形成されていない。

VIII層は、アカホヤ火山灰層に相当する。VIII層はVIII a層の赤褐色土層が大部分を占めるが、これは幸屋火砕流に比定されるものである。

IX層は、前畑遺跡ではほとんどみられない。権現山火山灰と呼ばれるものに相当する。

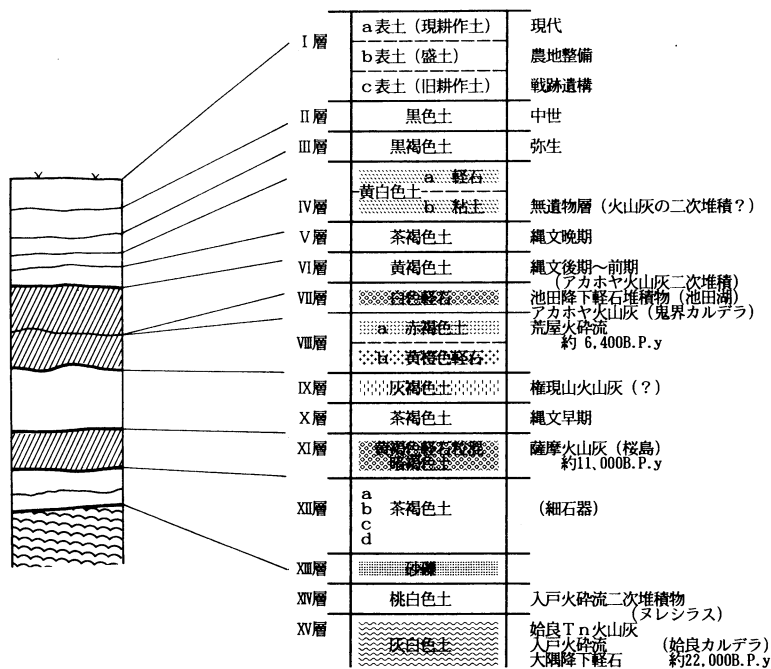
X層は、茶褐色土層の粘土層で、一般的に縄文時代早期の包含層を形成する。前畑遺跡ではA B 2区付近からA B 14区付近まで包含層が形成され、集石遺構や多量の遺物がみられる。

XI層は、黄褐色軽石粒混暗褐色土層でいわゆる「薩摩火山灰層」と呼ばれる火山灰堆積物から成っている。部分的に止切れる部分もみられるが、ほとんどの地点で層形成がみられる。

XII層は、茶褐色土層の粘土層である。一般的には細石器文化が包含されるが、本遺跡では層は存在するが細石器文化は確認されていない。

XIII層は、桃白色土層で、通称ヌレシラスと呼ばれる入戸火砕流の二次堆積物である。

XIV層は、入戸火砕流で通称「シラス」と呼ばれる堆積物である。通常本県では、数m～数十mの厚い堆積がみられ、本遺跡では基盤層と成っている。



第2図 大浦・郷之原地区の基本的層序と前畑遺跡の層位

## 第Ⅱ章 縄文時代の調査

### 第1節 調査の概要

縄文時代の調査は、確認調査の結果をもとに上層の戦跡遺構、近世遺構及び弥生時代の調査終了後に行なったが、道路建設工事の進行と年度毎の進捗状況によって各区の調査行程は若干異なっている。

前畑遺跡の縄文時代は、Ⅹ層（アカホヤ火山灰下層）中から早期に該当する時期（AB8区～AB14区を中心にした範囲）と、Ⅴ層に晩期に該当する時期（AB6区～AB8区の範囲）の2時期の包含層が検出された。

調査は、該当層の遺物包含層の掘り下げ作業後、遺物の検出作業、出土状態の写真撮影・実測作業、遺構検出作業の順の行程で進行した。

縄文時代（Ⅹ層・Ⅴ層）の確認調査については、AB2区～AB24区までは20m毎に2m×12mの南北トレンチ調査で確認調査を実施した。その結果、Ⅴ層の包含層はAB6区～AB8区に確認され、Ⅹ層の包含層はAB8区～AB14区に確認された。そして、Ⅴ層から引き続き全面調査を実施した。

Ⅹ層は、総数約4,500点の遺物のほか集石遺構6基以上が検出されている。Ⅴ層には、総数117点の遺物の出土がみられた。

### 第2節 Ⅹ層の調査

#### 1 Ⅹ層の概要

Ⅹ層で早期包含層が確認されたのは、本道建設部分のAB1～14区の区域であるが、その中心はAB8区～AB14区付近である。

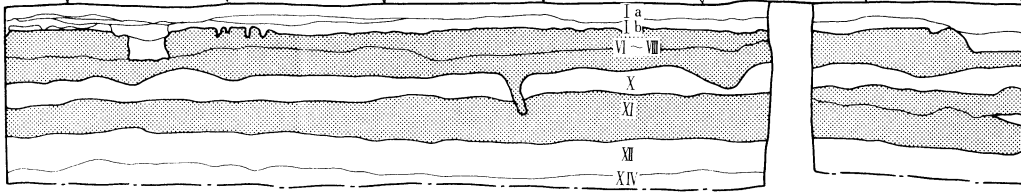
Ⅹ層からは、6基以上の集石遺構が検出されたが、住居址などの他の遺構は確認されなかった。Ⅹ層からの出土遺物は、総数約4,500点を数える。

#### 2 遺構

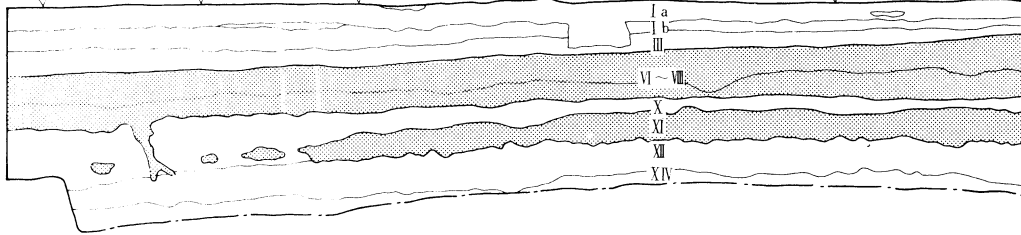
遺構は、Ⅹ層下面に集石遺構が6基以上が検出された。集石遺構として検出したものは6基であったが、包含層中に検出される礫の分布状況（第5図）をみると、これ以外にも存在したことが考えられる。つまり、包含層の形成時に流失した可能性がある。また、集石は、遺跡の存在する微高地の縁辺部端に構築されている。集石遺構の時期は、共伴する確かな遺物はないが、遺物の層位的な出土傾向から包含層の形成された時期に該当することが考えられる。遺跡は、包含層や遺構の検出状態からその中心は南側の用地外へ広がることが想定される。調査区



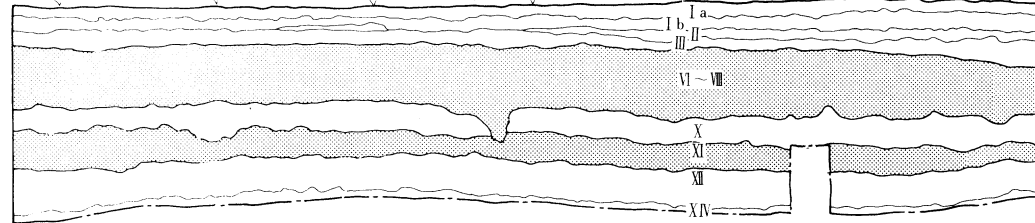
① B 3 ~ B 5 区北側壁面断面図



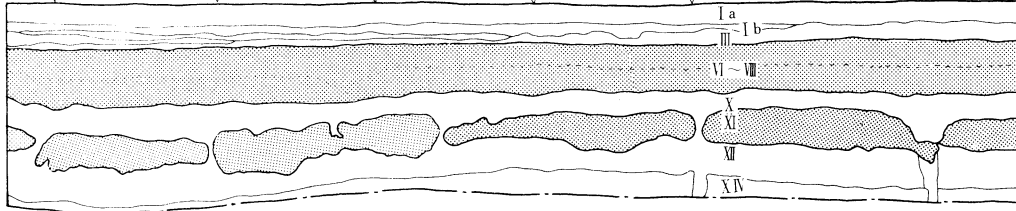
② B 6 ~ B 8 区北側壁面断面図



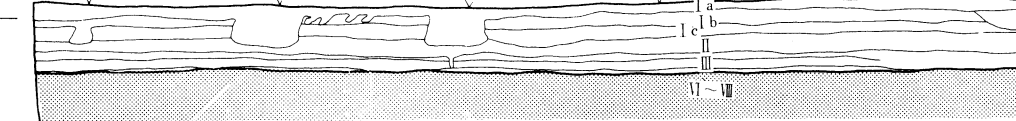
③ B 9 ~ B 11 区北側壁面断面図



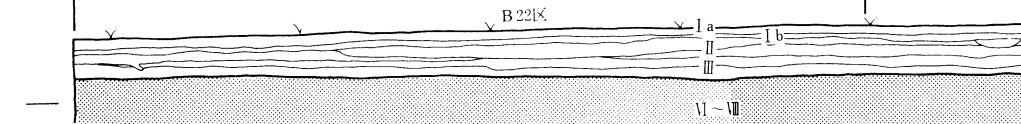
④ B 12 ~ B 14 区北側壁面断面図

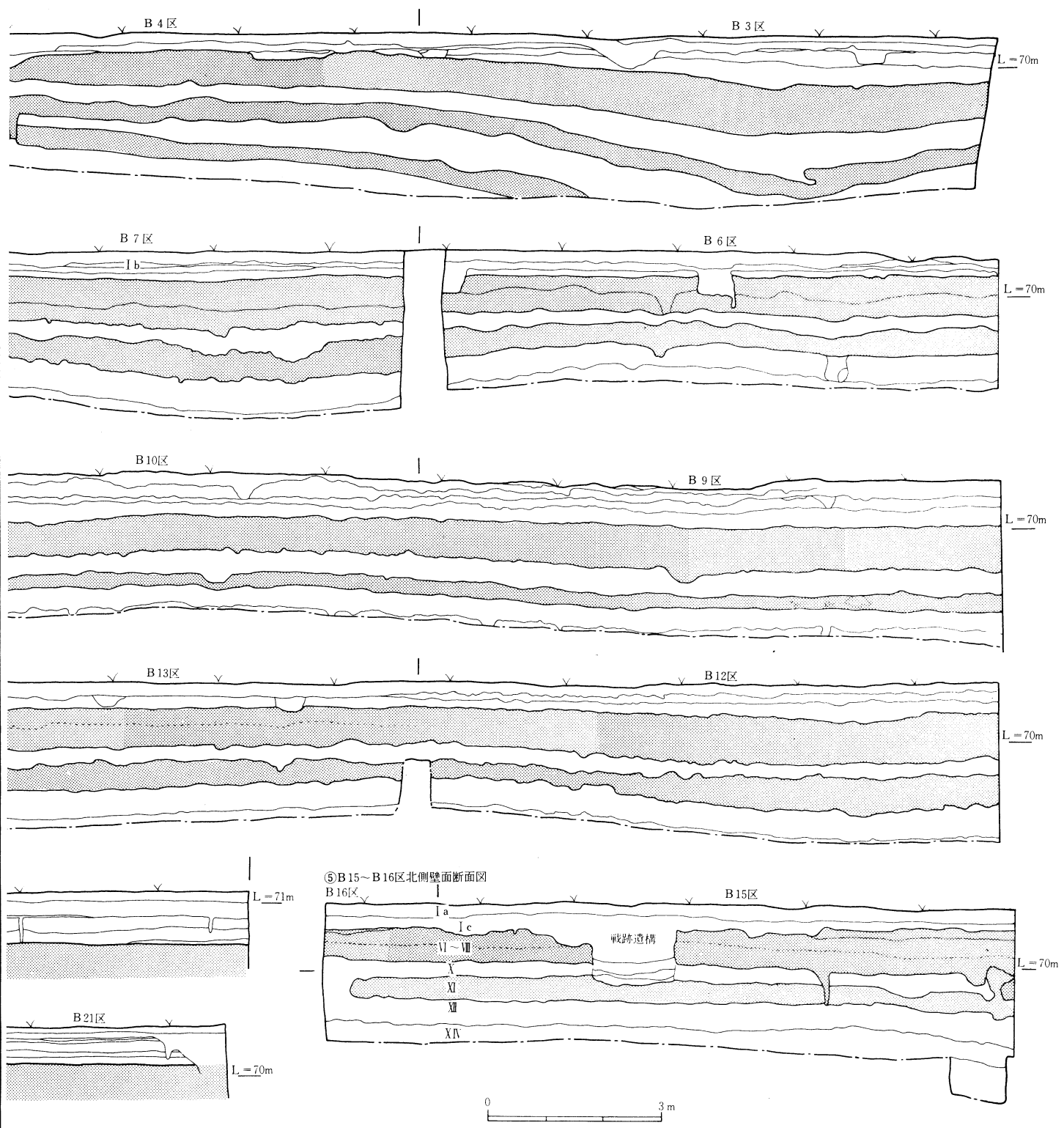


⑥ B 19 ~ B 21 区北側壁面断面図

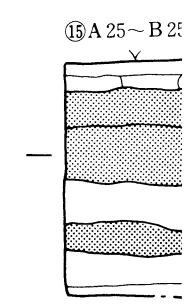
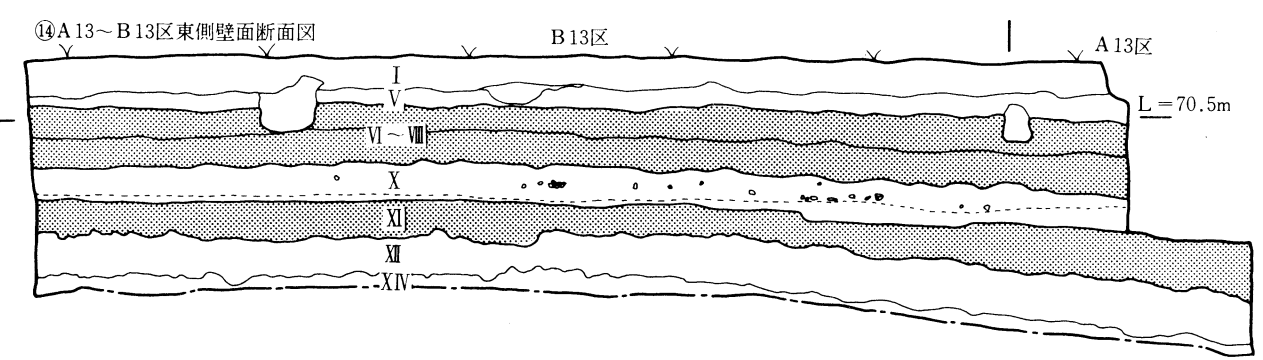
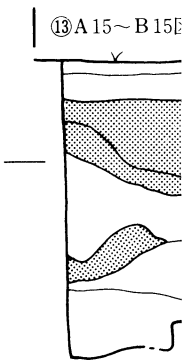
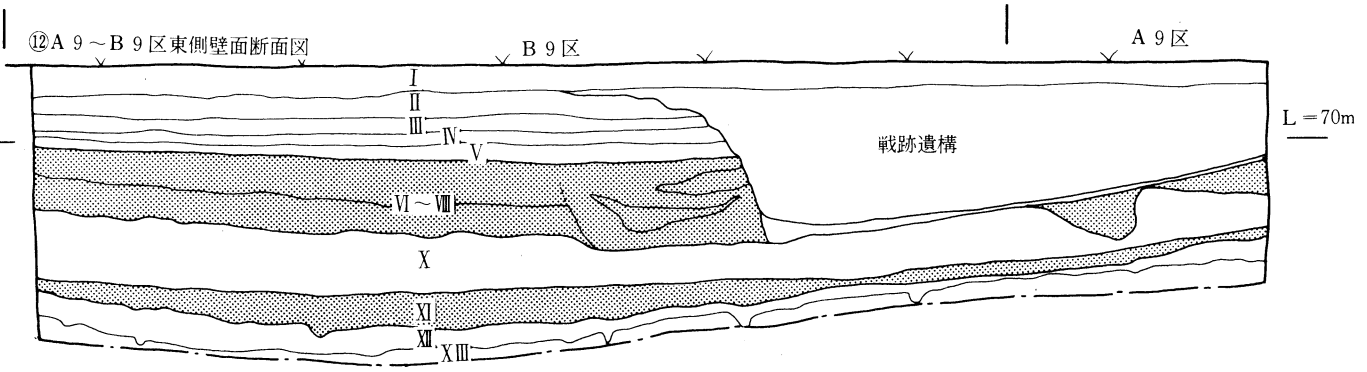
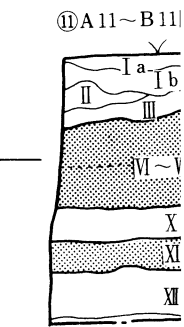
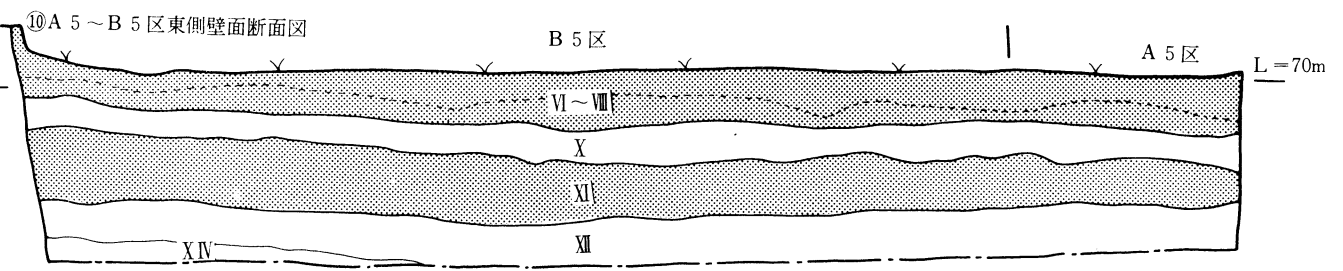
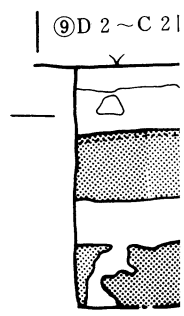
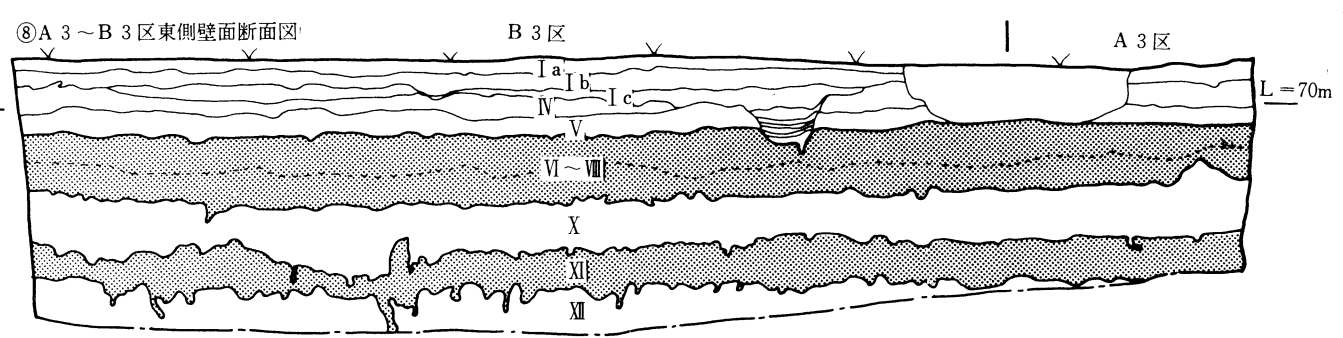


⑦ B 21 ~ B 22 区北側壁面断面図

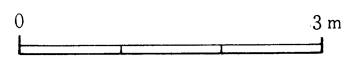
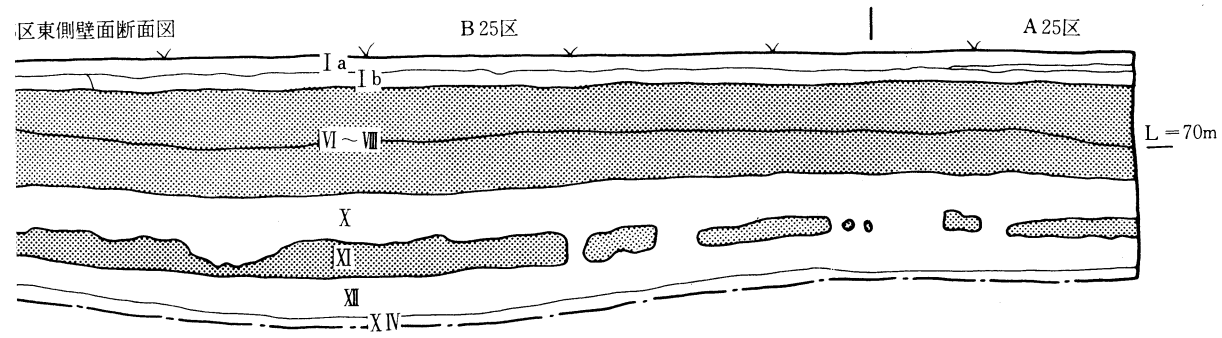
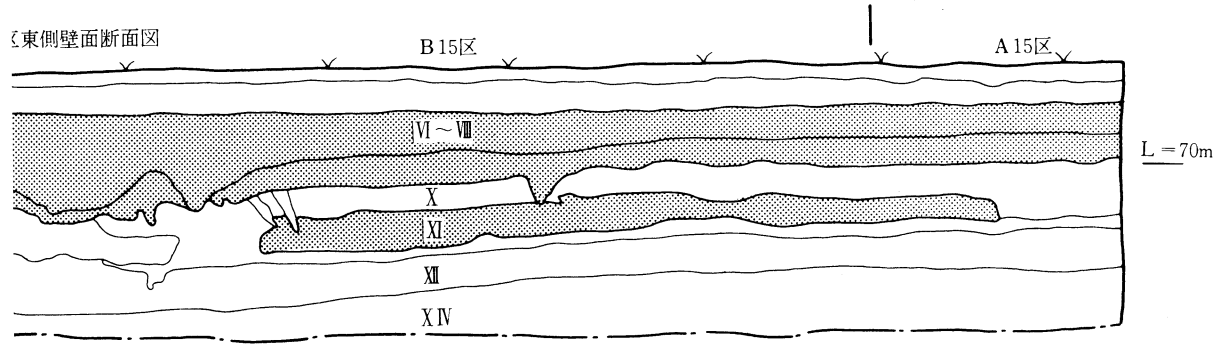
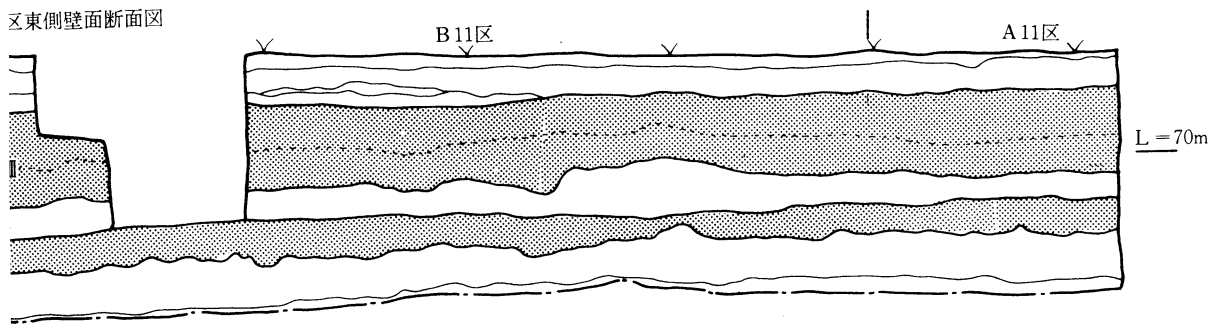
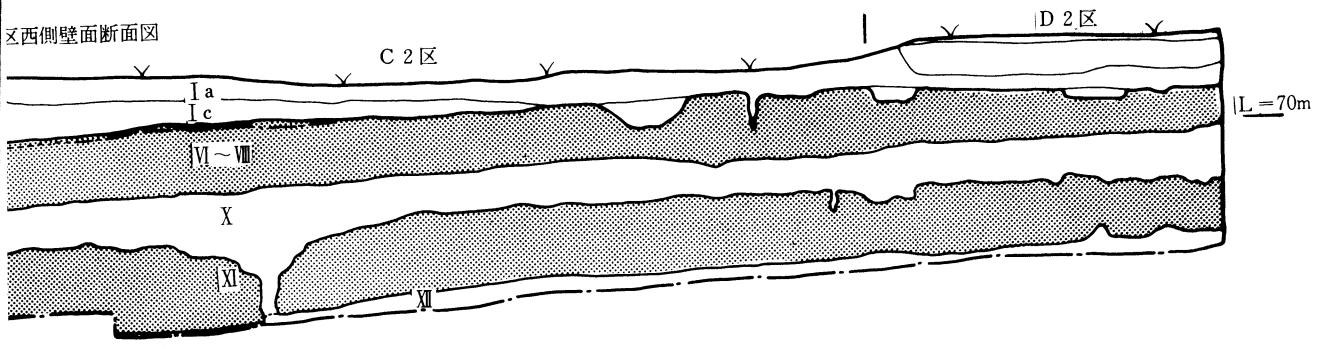


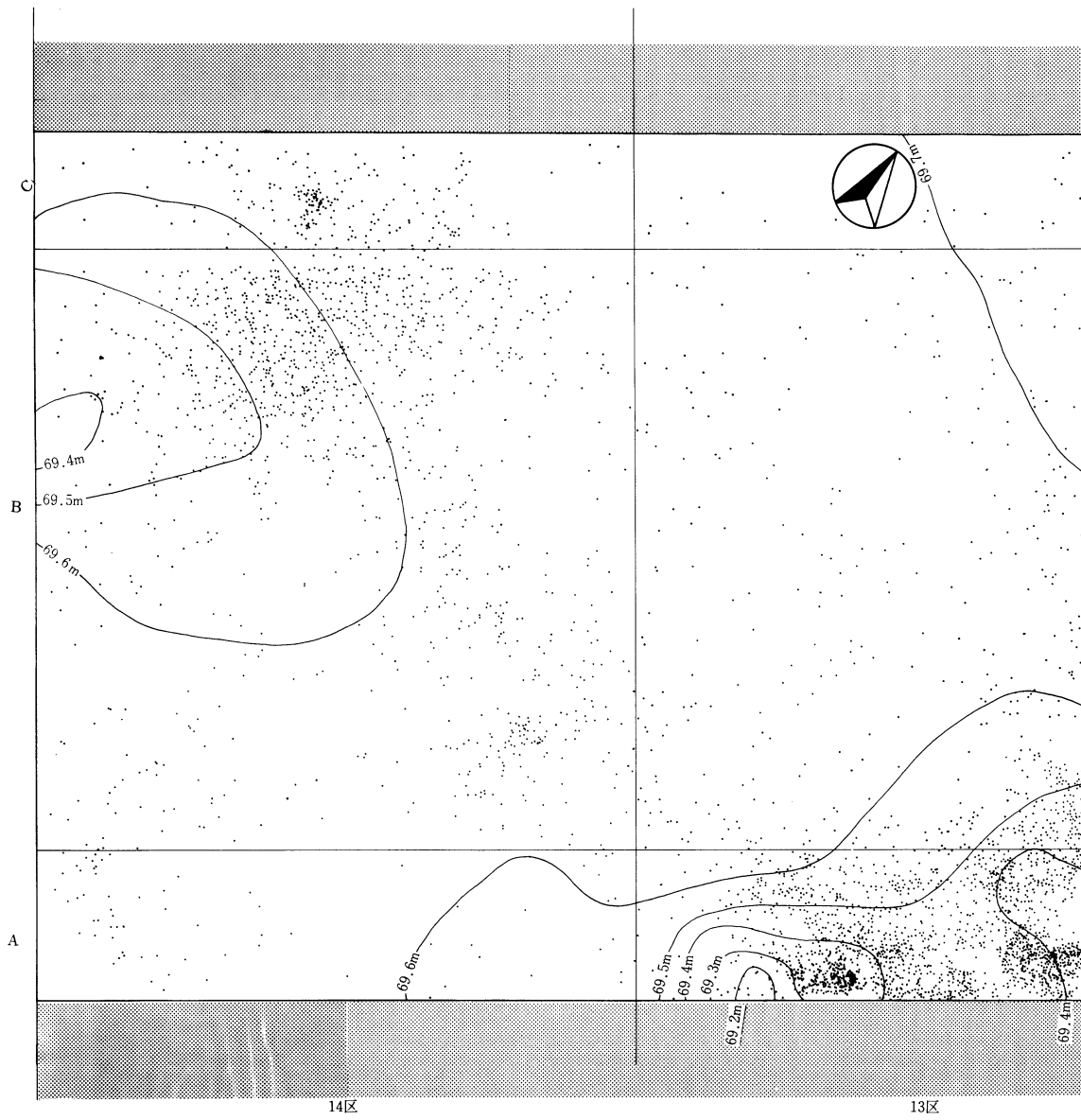


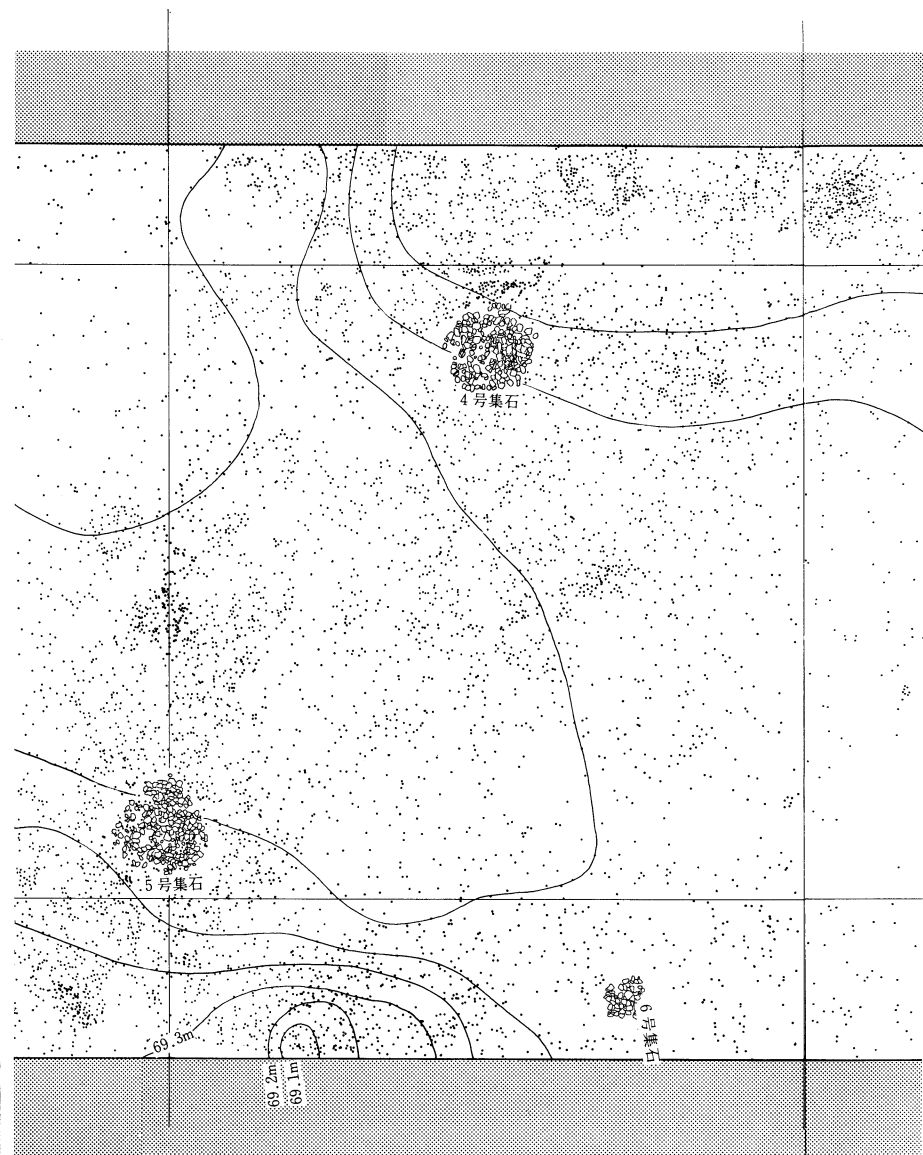
第3図 前畑遺跡の層位図(1)



第 4 図 前畑遺跡の層位図 (2)



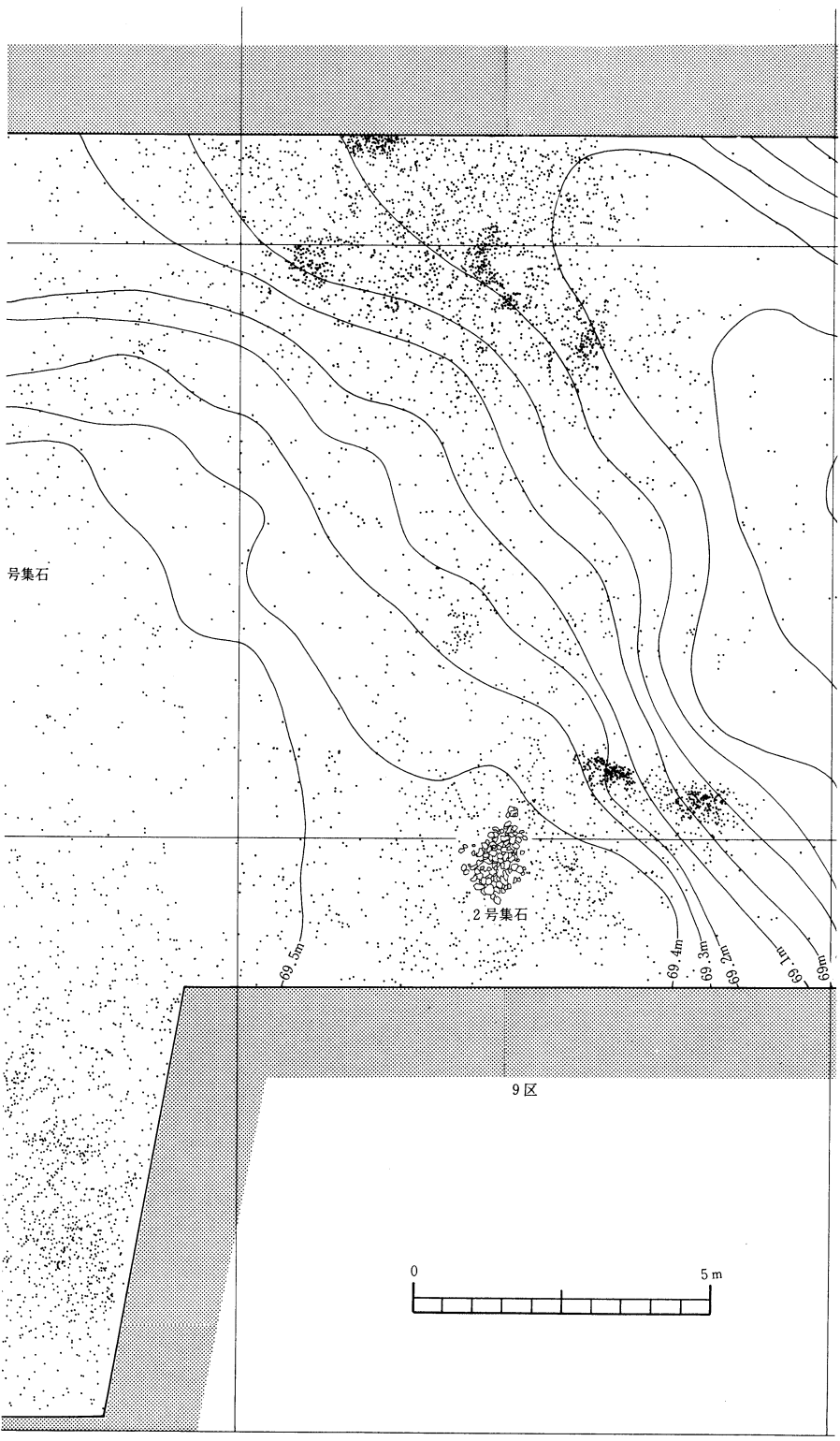




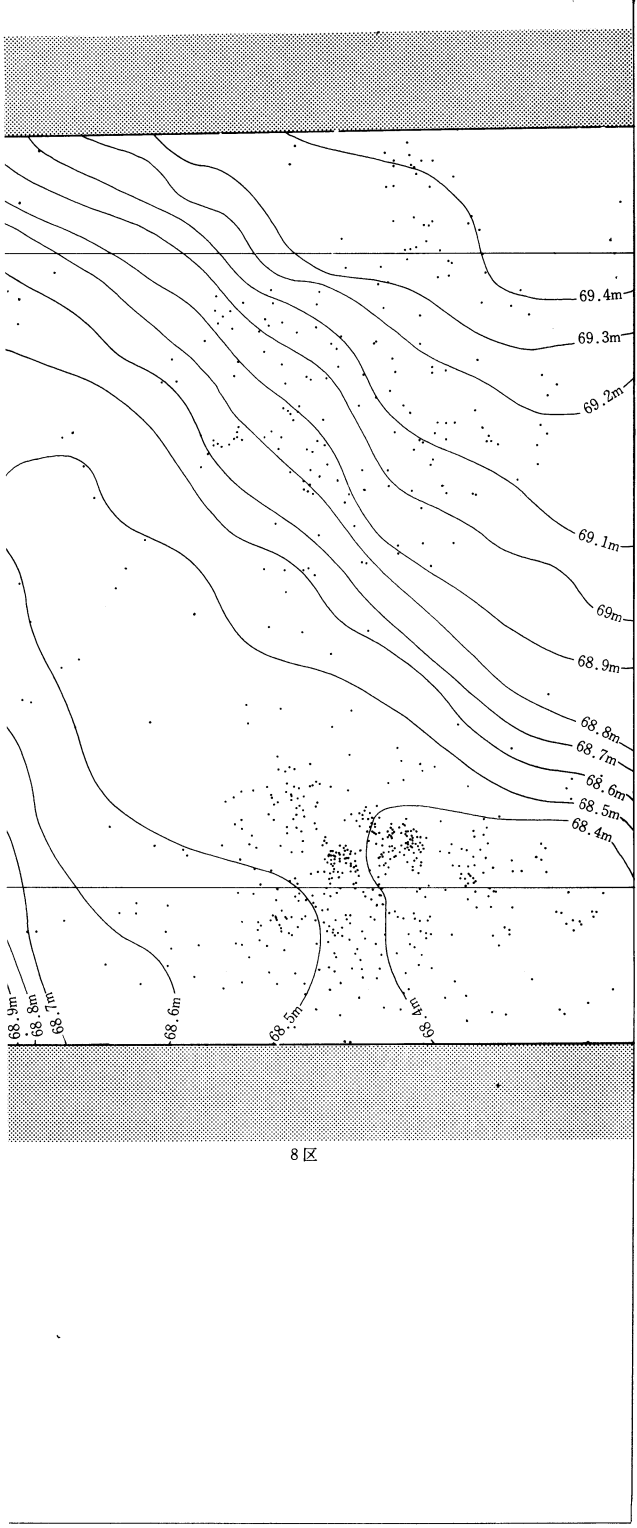
12区



第5図 集石遺構と礫の分布状況







8 区

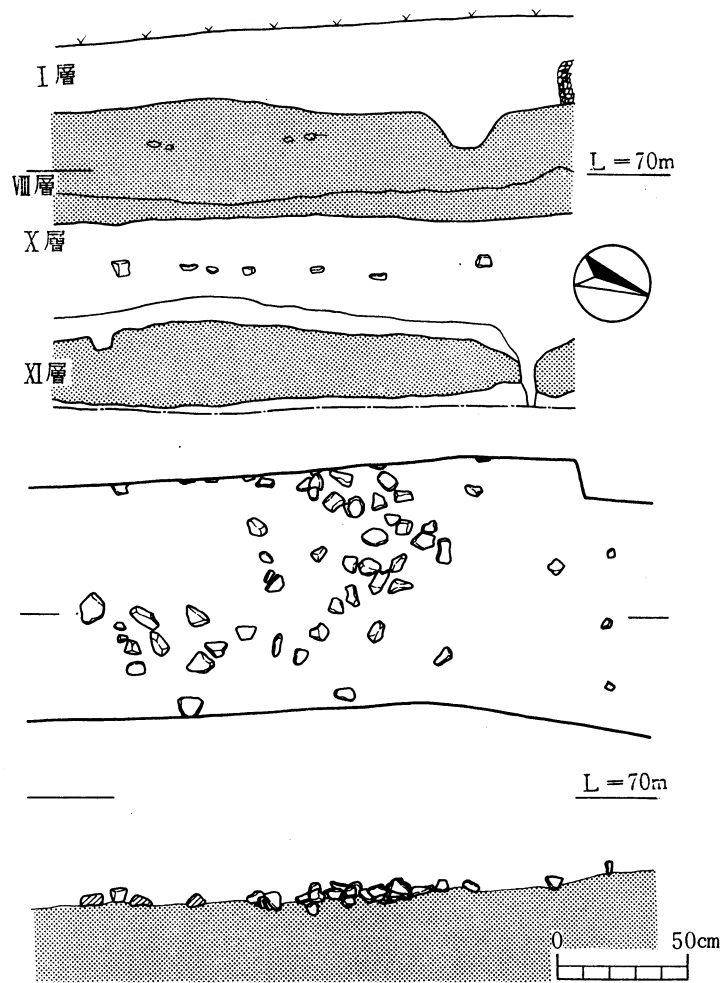
内においては住居址などの他の遺構は検出されていないが、遺跡の北端の様相を如実に示している。

### (1) 集石遺構

集石遺構は、A B 1区からA B 14区間に6基検出されたが、礫の検出状況からこれ以外にも存在したことは確実である。1号のように礫の散乱したものは多数検出されたが、2号～6号のようなまとまりをもつ集石は5基の確認に留まった。集石遺構はほとんどが平坦面状に集積しており、下面が摺り鉢状をなす集石は3号の1基のみである。

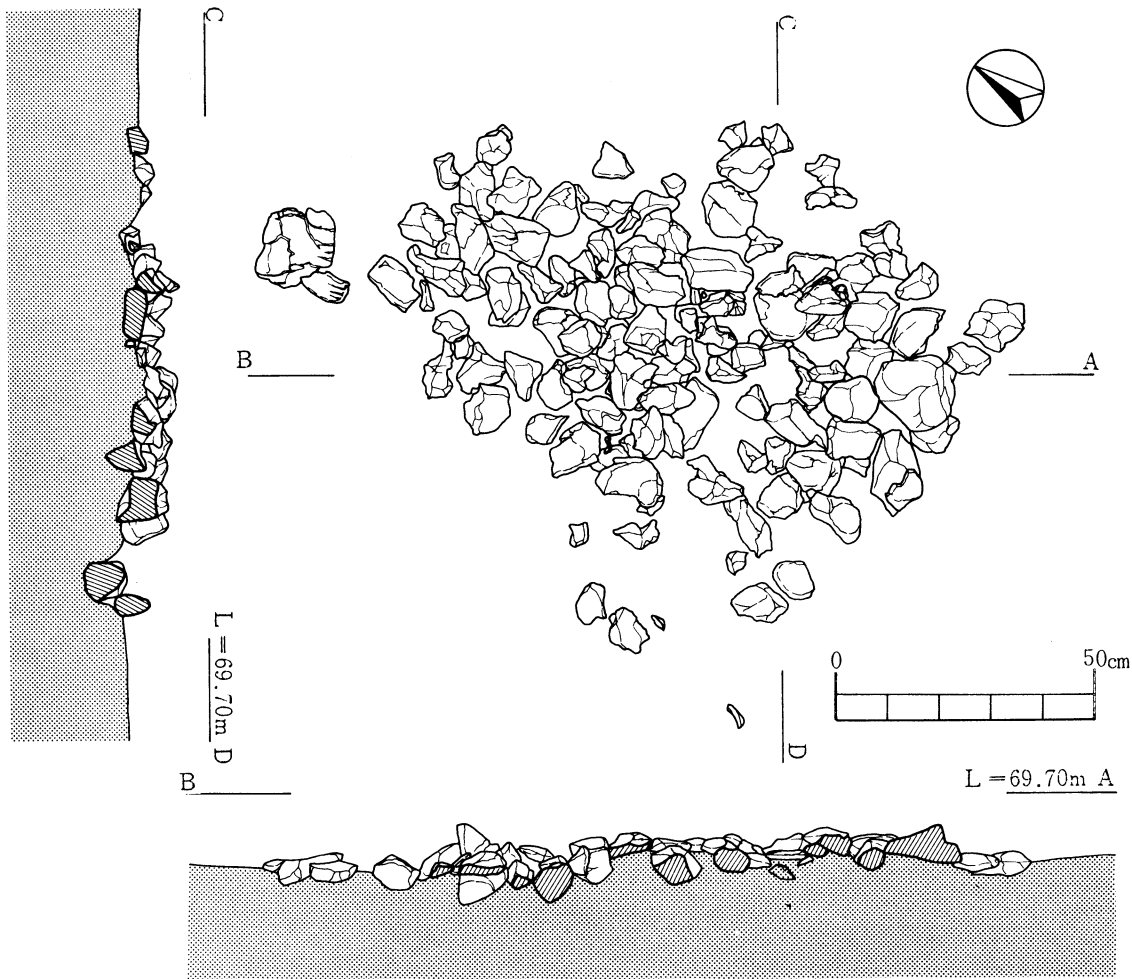
#### 集石1号 (第6図)

集石遺構1号は、B 1区の用地外に近い位置に検出されている。緑地保存地帯内の水道管理設溝内の検出である。集石1号は、第5図のように礫が散乱した状態であり、集石遺構とは呼び難いが、周辺には存在する可能性がみられる。集石は、層位的にはX層の中ほどに形成されており、包含層から出土する遺物の時期に対応することが考えられる。



集石2号 (第7図)  
集石遺構2号は、A 9区の北部に位置し一部B 9区に広がって検出されている。集石の形状は、南北約130cm、東西約100cmの楕円形プランを呈したものである。集石は、掘り込みはみられず平坦

第6図 1号集石実測図

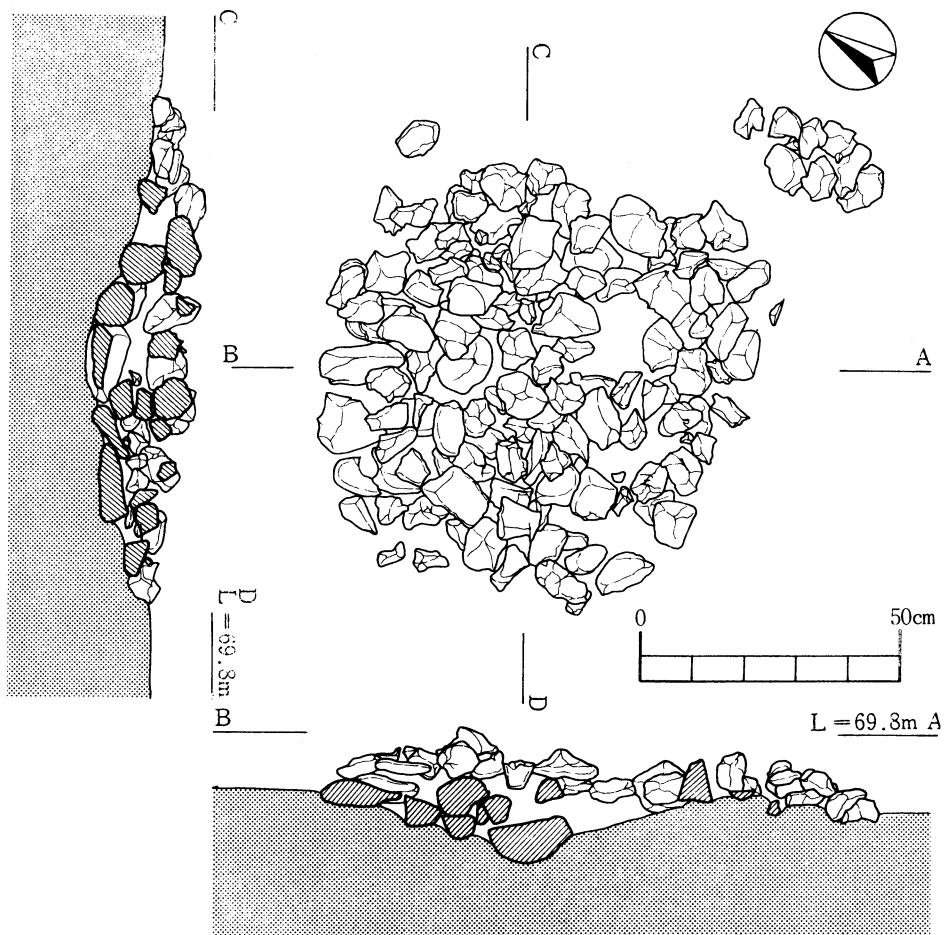


第7図 2号集石実測図

面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数 423 個を数えほとんどが破碎された角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5 cm 未満のものが 149 個と 10 cm 以上のものが 52 個で、他の大多数を占める 222 個は 5 cm から 10 cm 内に納まる大きさである。重さでみると、1～100g=199 個、101～200g=67 個、201～300g=48 個、301～400g=27 個、401～500g=25 個、501g 以上=57 個で、1～500g の重さに集中している。第 12 図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。

集石3号 (第8図)

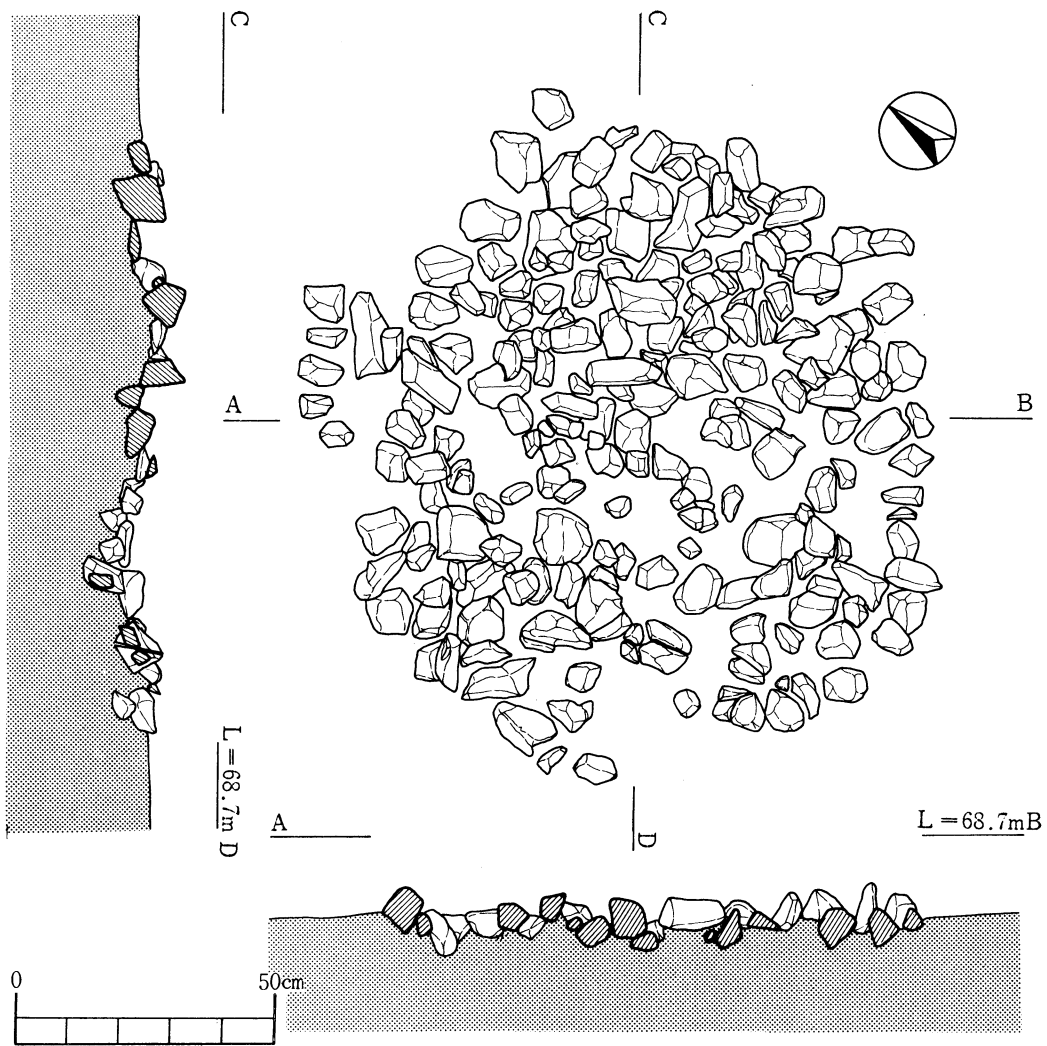
集石遺構3号は、B10区のほぼ中央に検出されている。集石1号は、径80cmの円形プランを呈した中規模なものである。集石は、掘り込みがみられ、下面に比較的大きな礫が置かれた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数89個でほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5cm未満のものが34個と10cm以上のものが13個で、他の大多数を占める42個は5cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1～100g=39個、101～200g=10個、201～300g=12個、301～400g=10個、401～500g=4個、501g以上は14個で、1～500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。



第8図 3号集石実測図

集石4号 (第9図)

集石遺構4号は、B12区の北側に検出されている。集石4号は、径110cmの円形プランを呈した中規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数389個を数え、ほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系(現在の採石場と同じ岩石)に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5cm未満のものが129個と10cm以上のものが59個で、他の大多数を占める201個は5cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1~100g=166個、101~200g=60個、201~300g=59個、301~400g=38個、401~500g=19個、501g以上=47個で、1~500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重

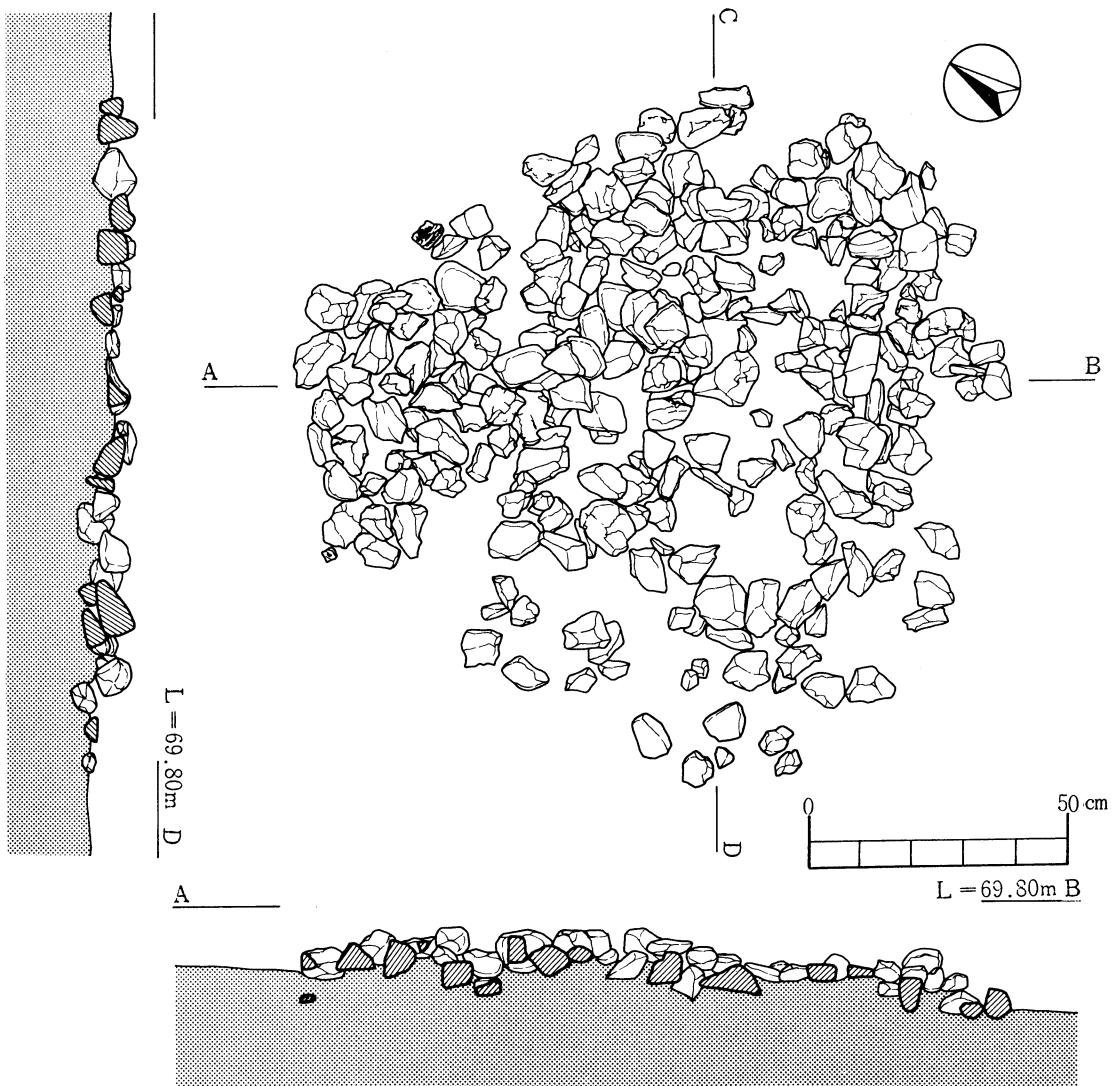


第9図 4号集石実測図

さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。

### 集石5号 (第10図)

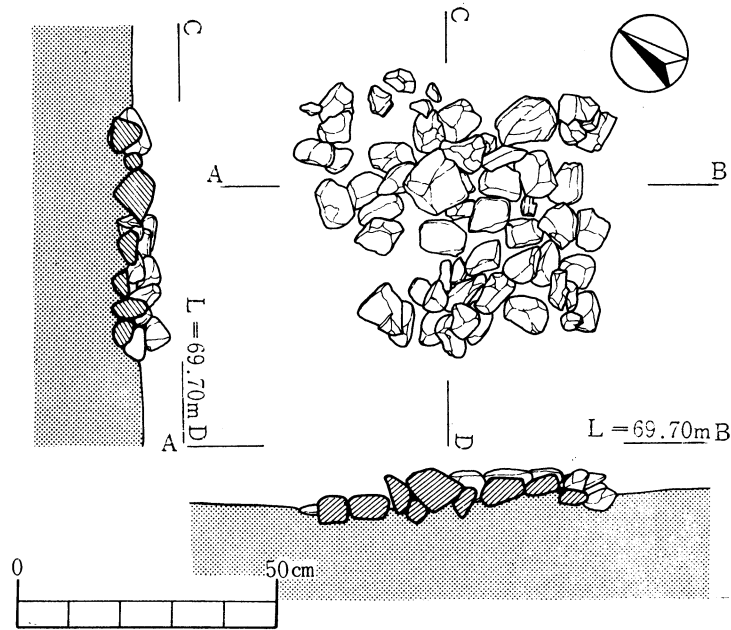
集石遺構5号は、B12区とB13区の南側の境上に検出されている。集石5号は、径130cmの略円形プランを呈した中規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数347個を数え、ほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系(現在の採石場と同じ岩石)に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの



第10図 5号集石実測図

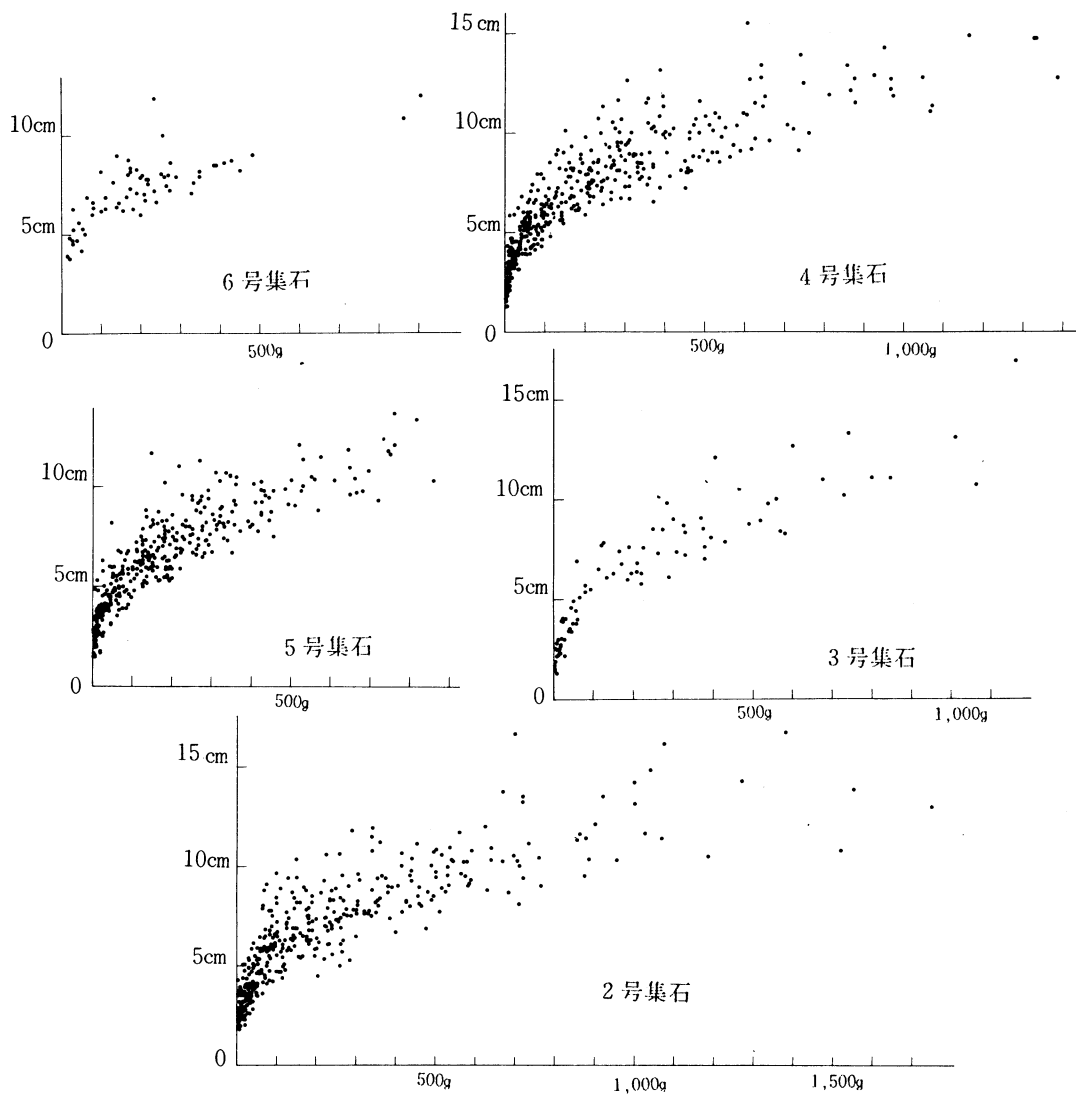
内訳は、次のようになる。大きさは、5 cm未満のものが108個と10cm以上のものが29個で、他の大多数を占める210個は5cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1~100g=139個、101~200g=89個、201~300g=50個、301~400g=28個、401~500g=18個、501g以上=23個で、1~500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さともに比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。

**集石6号 (第11図)**  
 集石遺構6号は、A12区のA11区よりの北部に位置して検出されている。集石6号は、径60cmの円形プランを呈した最も小規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数67個と最も少なくほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩



第11図 6号集石実測図

は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたため若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5 cm未満のものが10個と10cm以上のものが3個で、他の大多数を占める54個は5 cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1~100g=20個、101~200g=18個、201~300g=17個、301~400g=6個、401~500g=4個、501g以上=2個で、1~500gの重さにほとんど集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。



第12図 集石遺構の石塊の最大長と重量比



### 3 出土遺物

#### (1) 土器

X層出土の土器は、形態上の特徴からⅠ類～Ⅵ類に大きく6つの類別を試みた。そのうち、今回の調査区においては、Ⅳ類に類別したものが圧倒的に多い。すなわち、本遺跡では、このⅣ類土器が主体を占める遺跡といえよう。Ⅰ類～Ⅲ類及びⅤ類・Ⅵ類は数量的にはわずかな出土で、本遺跡の今回の調査区においては客体としての様相を示している。

#### 1. 類別の基準

次のような形態的特徴から、Ⅰ類～Ⅵ類土器に類別した。

##### ①Ⅰ類土器 (第15図-1～8)

円筒形で平底を呈し、口縁部はわずかに外反する。口縁部付近は貝殻刺突文を施文し、胴部は斜位の無造作な条痕文が施されるタイプである。

##### ②Ⅱ類土器 (第15図-9～10)

円筒形土器の胴部破片である。器面には、横位の太めの条痕が施文されるタイプである。

##### ③Ⅲ類土器 (第16図-11)

山形の回転押型文土器である。わずか1点の出土であるが、同包含層出土の他の土器型式と関連して興味深い。

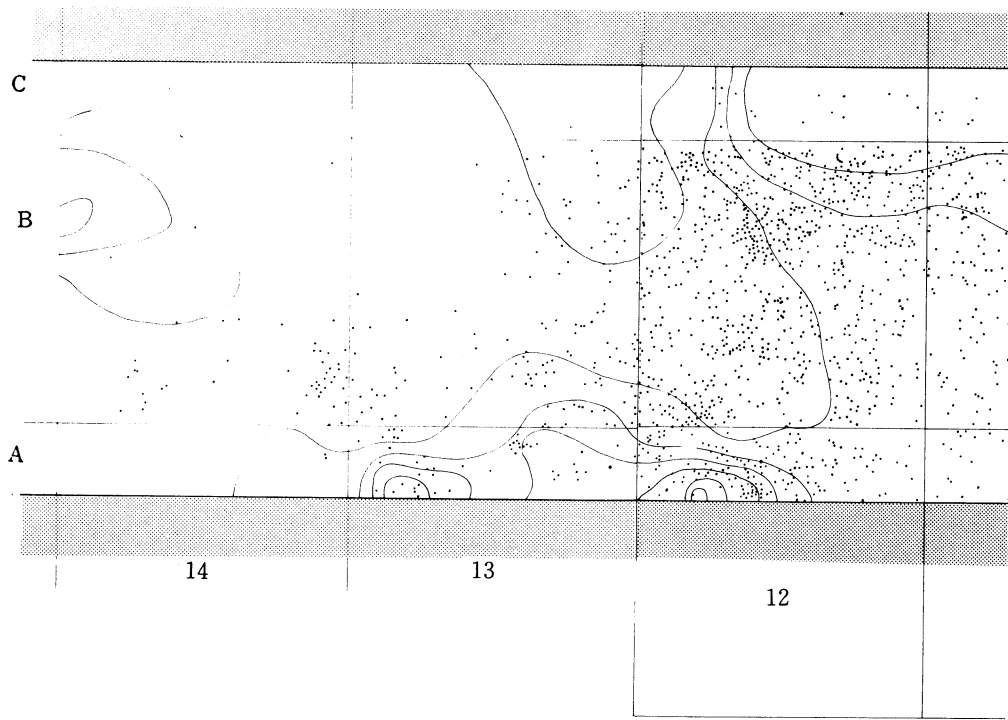
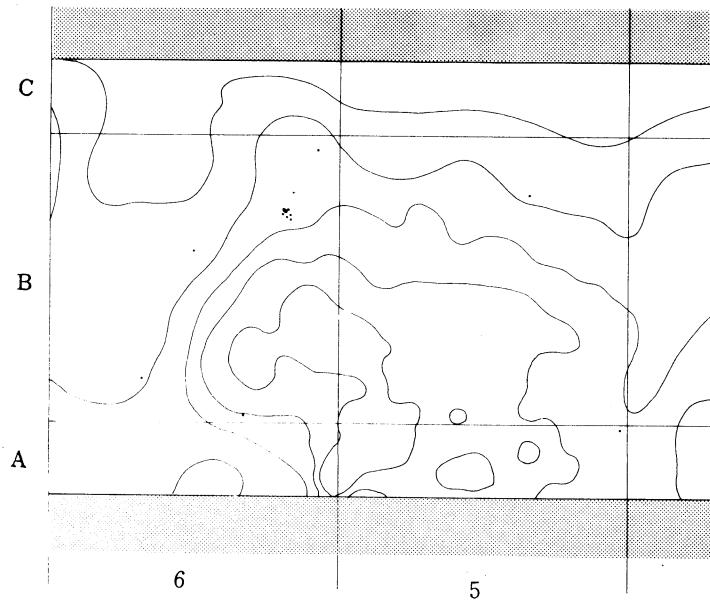
##### ④Ⅳ類土器 (第18図-12～278)

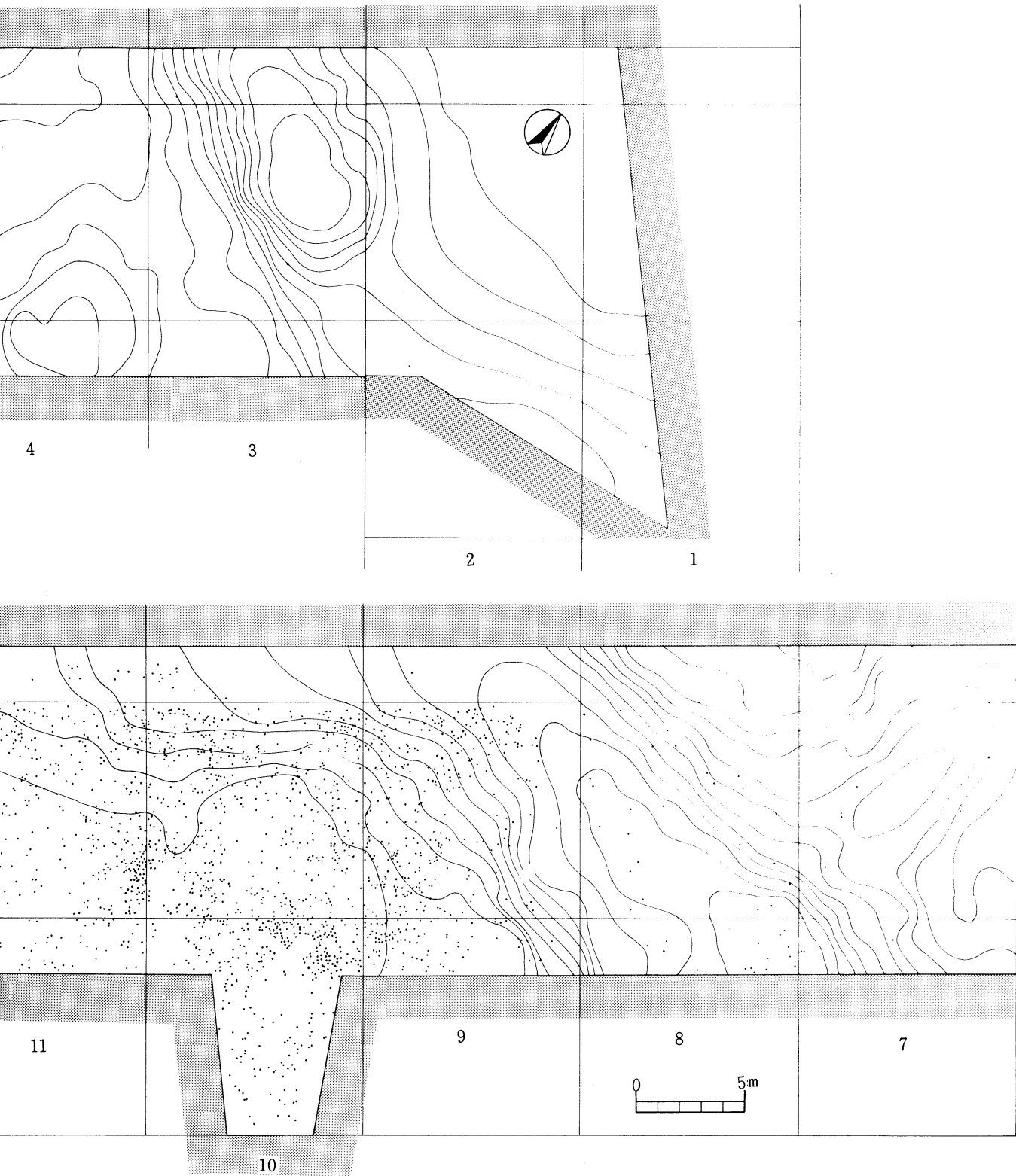
Ⅳ類土器は本遺跡の主体を占める土器で、バリエーションが多彩で、数量も多い。器形上、深鉢形(1)と壺形(2)の二者に分かれる。

(1) 深鉢形=口縁部に特徴があり、幅広肥厚口縁(イ)と幅狭肥厚口縁(ロ)とその他(ハ)に分けられる。さらに、各々は紋様の特徴からイ類=a～g、ロ類=a～c、ハ類=a・bに細別される。

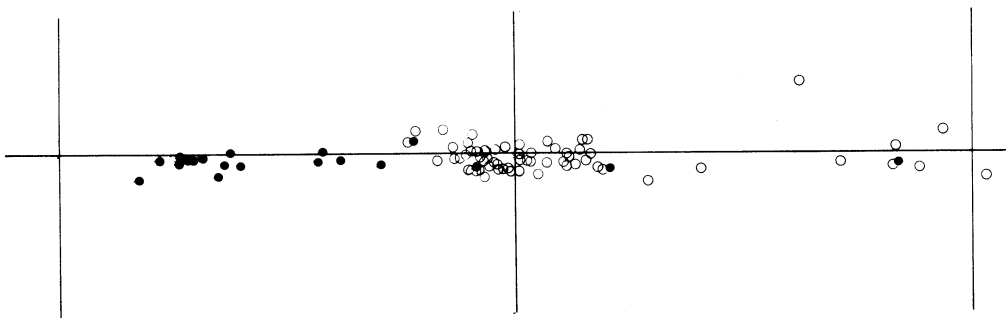
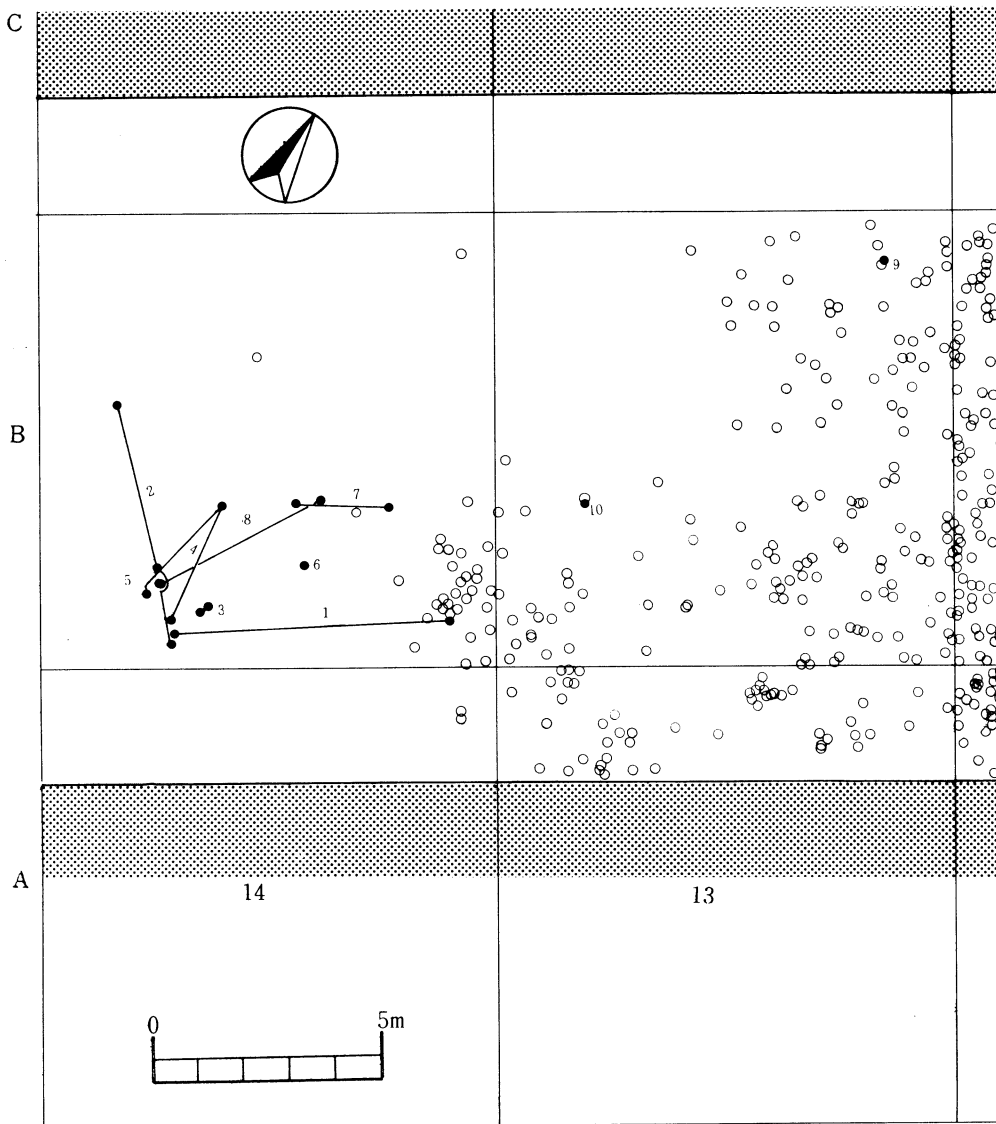
なお、頸部片、胴部片、底部片については、そのほとんどが深鉢に属するため、ここに含め説明する。

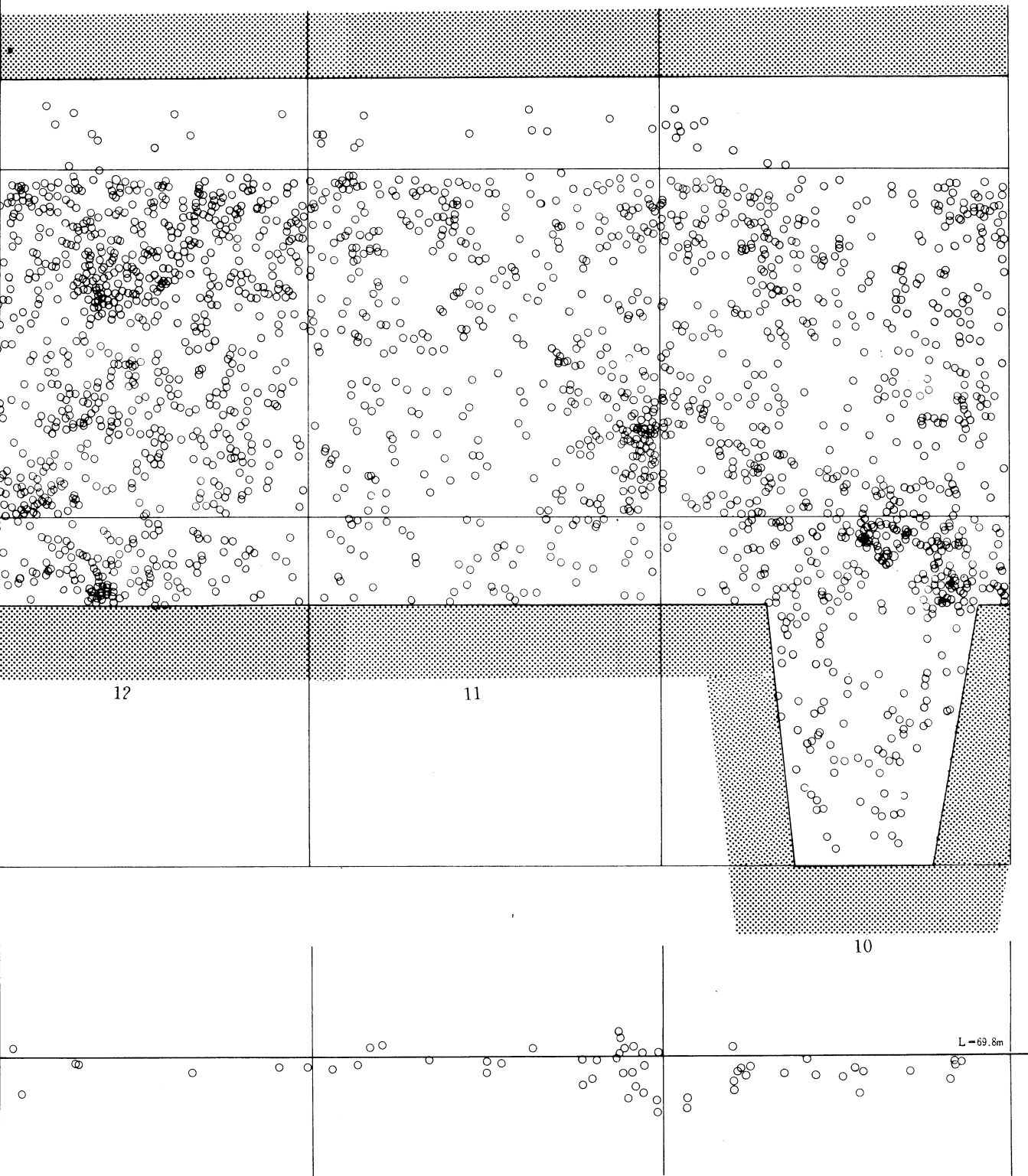
(2) 壺形=細部には若干のバリエーションがみられるものの壺形として一括して捉え、紋様の有無からa・bに細別して説明する。



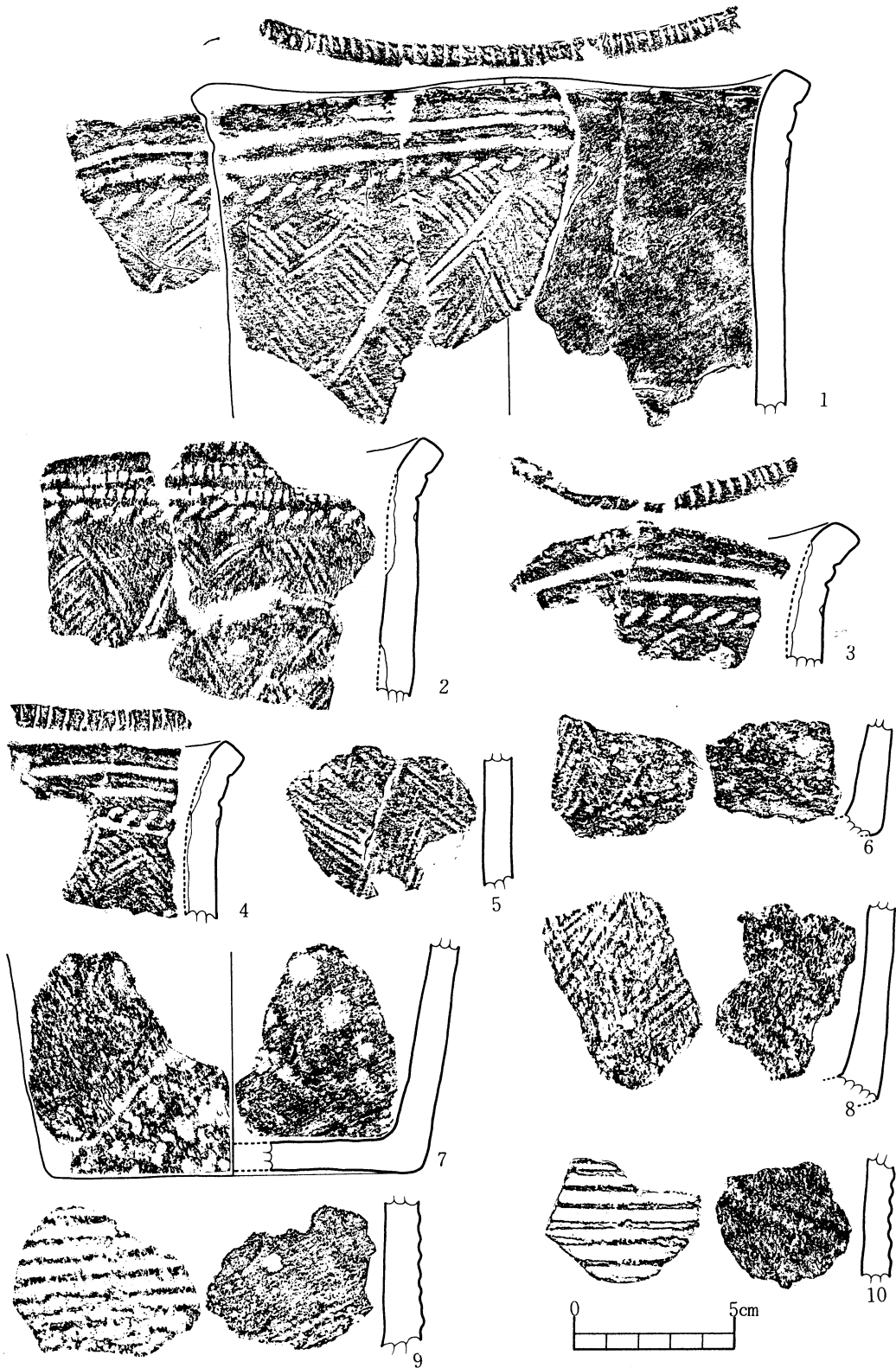


第13図 X層の遺物出土分布図





第14図 X層の土器出土分布図



第15圖 I類・II類土器実測図

⑤V類土器 (第42図-279~290)

口縁部は、二重口縁状に屈曲して波状口縁を呈し大きく外反する。胴部は円筒状を呈し、底部は平底のタイプである。口縁部の紋様は微隆突帯文と凹線文で飾る。胴部は、格子の捺糸文帯を縦位に施文する。華麗で特徴的なタイプである。

⑥VI類土器 (第45図-291)

口縁部は大きく外反し、胴部は若干膨らみを持った円筒形を呈するタイプである。紋様は、口縁部は貝殻刺突連続文を施し、胴部は条線文帯で飾る。

以上の類別に従って、I類からVI類の順に説明する。

2. I類土器 (第15図-1~8)

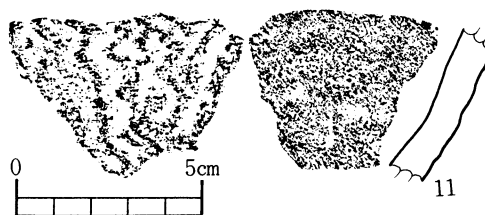
1~8は、すべてB14区からの出土である。1~4は、口縁部片である。1は口径17.8cmを測る。胴部は円筒形を呈し、口縁部はわずかに外反して波状をなす。口唇部は平坦に納め、その上に丁寧な刻目を施す。口縁外面には、櫛歯状(おそらく貝殻腹縁)の刺突文を連続施文した二条の沈線文を巡らす。その下端には同様の施文具で、斜位の刺突連点文を施している。胴部器面には、斜位の粗い条痕が確認される。6~8は底部片で、わずかな上げ底状の平底である。内面の整形は、胴部から口縁部にかけての上半に丁寧なナデ仕上げがみられ、下半はケズリ仕上げである。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石・石英粒を含み堅緻である。

3. II類土器 (第15図-9・10)

円筒形土器の胴部破片である。B13区の出土である。器外面には、丁寧に横位に施されたうねりの多い条痕が施文される。内面は丁寧なナデ整形が施される。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石・石英粒を含み堅緻である。

4. III類土器 (第16図-11)

11はA13区出土で、縦位に施文された山形の回転押型文土器である。山形の頂間は1.2cmと比較的大形で彫りも太い。わずか1点の出土であるが、他の土器型式と関連して興味深い。内面は丁寧なナデ整形である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には長石・石英粒のほかに金雲母を含み堅緻である。



第16図 III類土器実測図

## 5. IV類土器 (第18図-12~278)

IV類土器は本遺跡の主体を占める土器で、バリエーションが最も多彩で、数量も多い。出土区は、A B 9区~A B 13区の間に出土しているが、37 (C 6区) と 249 (B 3区) が離れた区に出土したものもある。器形上、深鉢形(1)と壺形(2)の二者に分けられる。

### (1) 深鉢形 (第18~38図-12~265)

#### ① 口縁部

深鉢は、口縁部に著しく特徴がみられ、その形態から(イ)幅広肥厚口縁と(ロ)幅狭肥厚口縁と(ハ)その他に分類される。さらに、各々は、紋様の特徴からイ類はa~g、ロ類はa~c、ハ類はa・bに細分されるが、これは個体差の可能性もある。

なお、頸部片、胴部片、底部片(第29~38図-131~265)については、そのほとんどが深鉢に属するため、ここに含め説明する。

#### (イ) 幅広肥厚口縁 (第18~22図-12~58)

外反する口縁部は幅広くカマボコ状に肥厚するタイプである。口縁は四隅が山形を呈し、波状口縁をつくる。(なお、細片のため不明なものは平縁状に実測している)

口唇部は、平坦面をつくるものとわずかに丸くおさめるものがある。さらに、この口唇部には丁寧な刻目を施すのが一般的である。また、肥厚部分の下端にも刻目を施すものが多い。

この肥厚部分の外面に施される紋様によって、a~gに細別した。なおこの細別は、量的には少ないものであり、個体差を示すだけのものもある。

#### a: 凹線文と連続刺突文を組み合わせて紋様を構成するもの(12~29)

凹線文を二本~三本を単位にして半弧状や三角形をつくり、その間に連続竹管文を施文するもので、12~29まではこれに該当する。凹線文と竹管文の組み合わせは、特に波状部分の頂部の位置においては、紋様構成上、複雑な構図が描かれ華麗さを増して表現している。

口唇部には丁寧な刻目が施されている。肥厚部分の直下には、刺突連続文が施文される。刺突連続文は、三日月状に施文される部分もみられるが、これは施文具のあて方によって生ずるもので施文具は半截竹管ではなく丸竹管である。

12は、完形に復元される数少ない土器の一つである。口縁部から頸部・胴部・底部の形態と紋様の把握が可能な資料である。口径21.3cm、器高17.5cmを測る。

器形は、底部は平底で若干上げ底状で凹面をつくる。底部から直線状に立ち上がり、胴部中央は僅かに丸味をもって張り、頸部付近では僅かに内湾する。頸部から口縁部へ大きく屈曲して外反し、口縁部は二重口縁状に大きく屈曲しながら外反する。口縁は、波状を呈する。

肥厚口縁部はa類の紋様を呈するが、肥厚口縁直下には刺突文を横位に巡らしている。この場



合、施文具は、右から左へ横方向から突いている。さらに、口縁部下端には二列の連続刺突文を巡らせる。上列は、施文具を器面に垂直に突き、正円形文を横位に連続して施文する。下列は、下から上方向に突きながら連続刺突するという違いがある。この刺突文間には、凹線文の波状文が施文される。それ以下は胴部で、器面全体の底部側面まで二個の結節をもつ縄文（R L撚り）を転がして施文している。結節はLの撚りで作る。

26～28は、三～四本の凹線と二列の連続刺突文線を半弧状に交互に施文し、28のように波頂部では円形文になって紋様を誇張するものもある。

**b：連続刺突文と波状文を組み合わせて紋様を構成するもの（30・31）**

肥厚口縁の上位と中位と下位にそれぞれ横位の連続刺突文線を巡らせる。連続刺突文は、上位列は下から上に突くタイプで、中位列は器面に垂直に突き、下位列は二条で下から上に突く手法で施文している。そして、この刺突文間に波状凹線文を施文する。肥厚口縁下には上下に波状凹線文を巡らせる。そして、屈曲部の頸部は突帯状に盛り上がり、その上に刻目が施される。胴部の紋様はLRの縄文にRの結節を結ぶ（30）。

**c：凹線文で真線文と波状文を交互に施文するもの（32～34）**

肥厚口縁の上・中・下位に凹線文の直線を巡らせ、その間に凹線文の波状文を巡らすものである。肥厚口縁の下端には刻目が施される。口縁下部と頸部以下は不明である。

**d：凹線文帯で鋸歯文や渦文を描くもの（35・36）**

口縁肥厚部に三条程度の凹線文で鋸歯文や渦文を描くもので、肥厚口縁下端には直線や連続刺突文が施される。35の口縁下部には、連続刺突文と波状文がみえる。

**e：羽状文や斜線文を描くもの（37～41）**

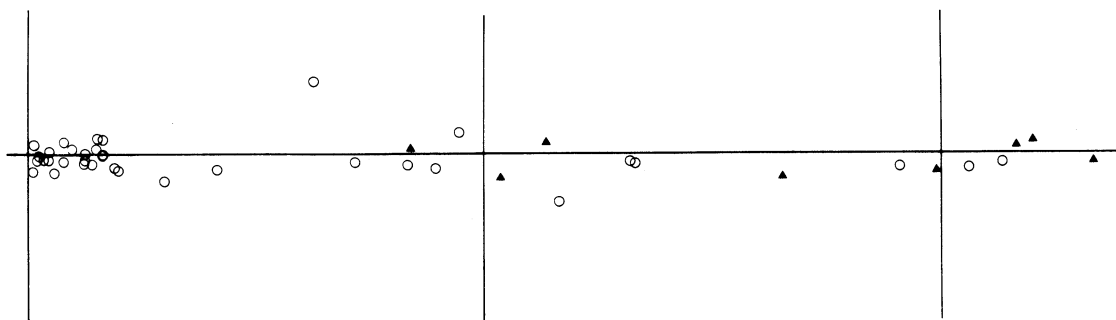
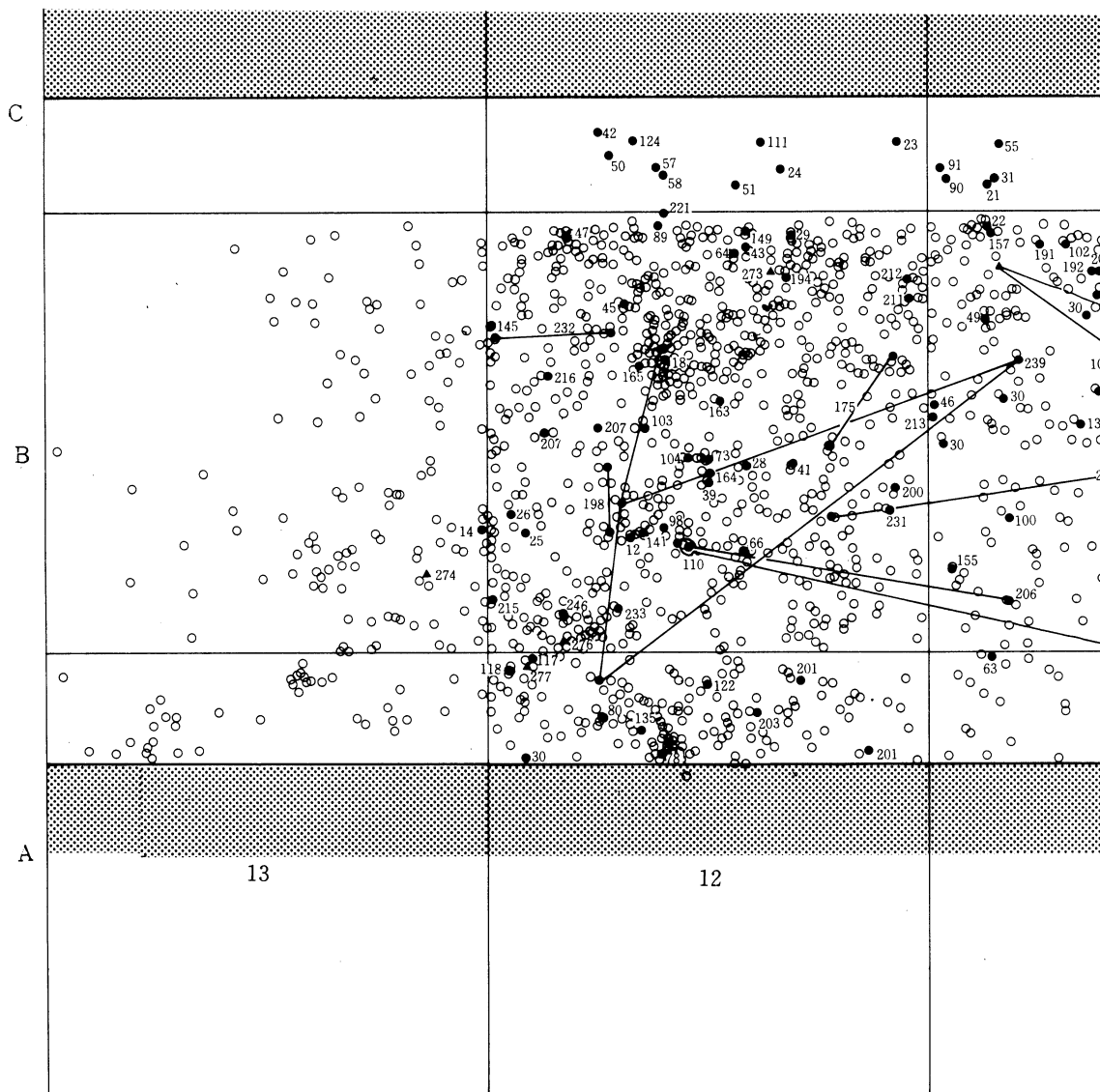
肥厚口縁全体に短線で羽状文や斜線文を描く最も単純な紋様構成であるが、肥厚部は厚く堅固である。口唇部と肥厚口縁下端には刻目が施される。41の肥厚口縁下には突帯文が巡らされ、その上には刻目が施される。

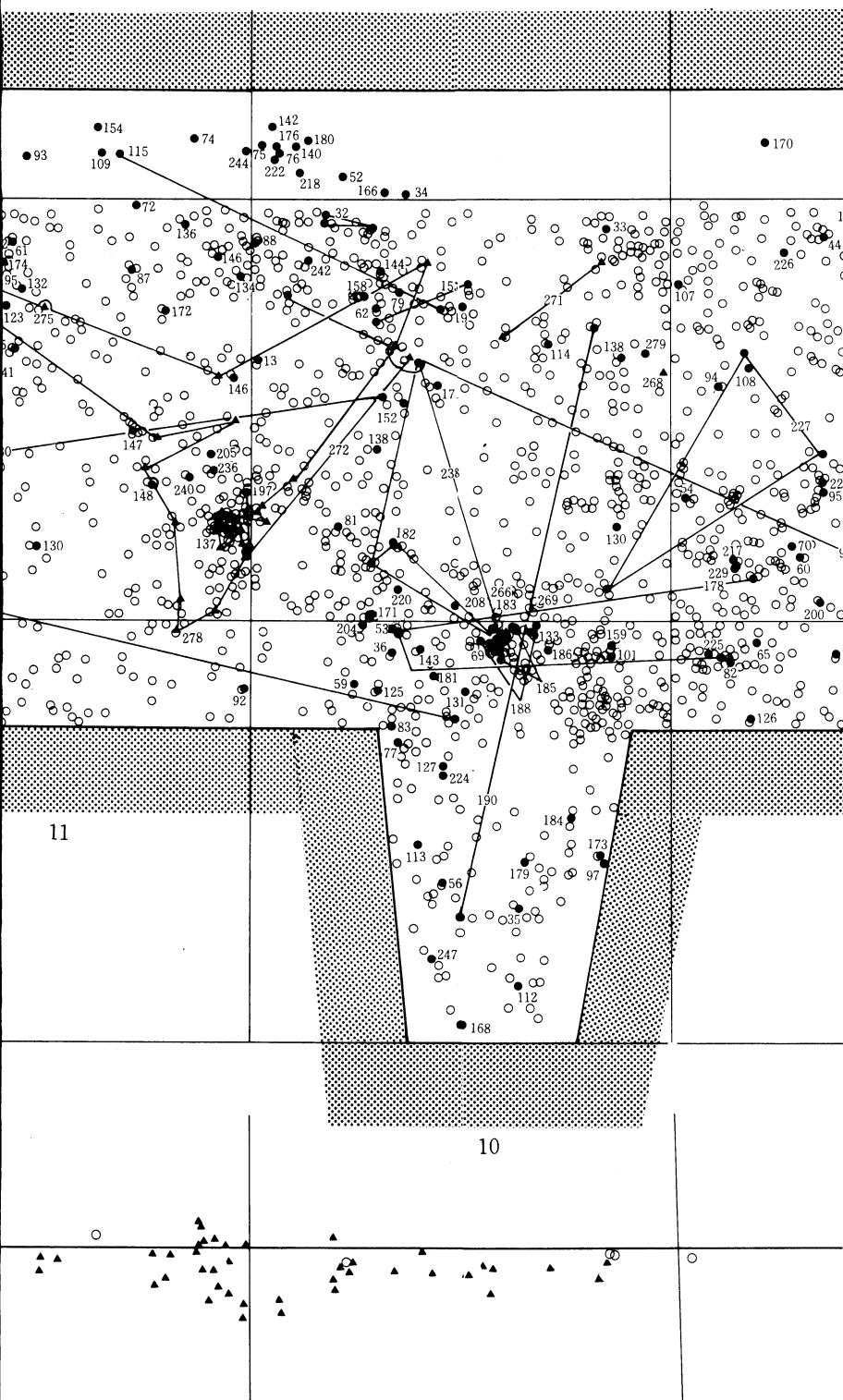
**f：縄文が施されるもの（42～55）**

肥厚口縁部の全面に、縄文が施文されるものである。縄文の他には、口唇部と肥厚口縁下端に刻目が施されるものやどちらか一方に刻目が施文されるものなどがある。

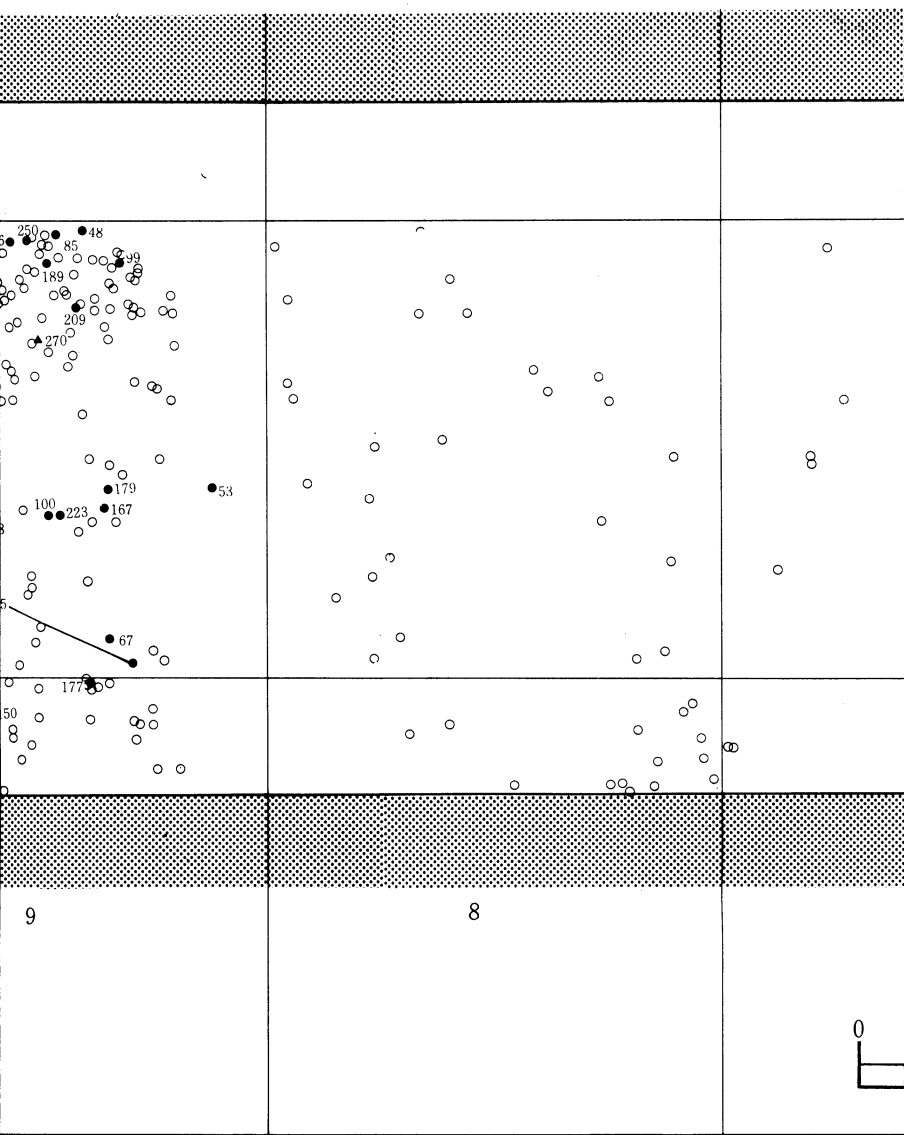
**g：肥厚口縁が無文のもの（56～58）**

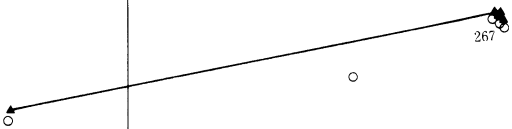
口縁部の上半が肥厚するだけで、紋様が付けられないものである。本遺跡出土のものには、僅かではあるが各器種や各器形に無文のものが含まれている。





第17图 IV類土器出土分布区

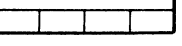




7

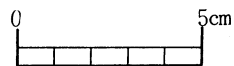
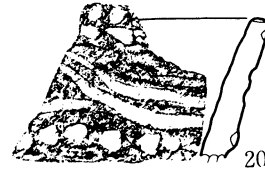
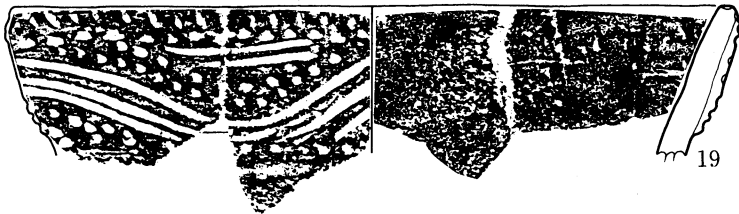
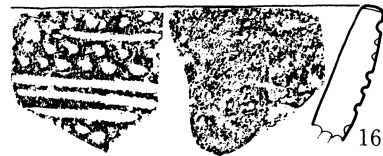
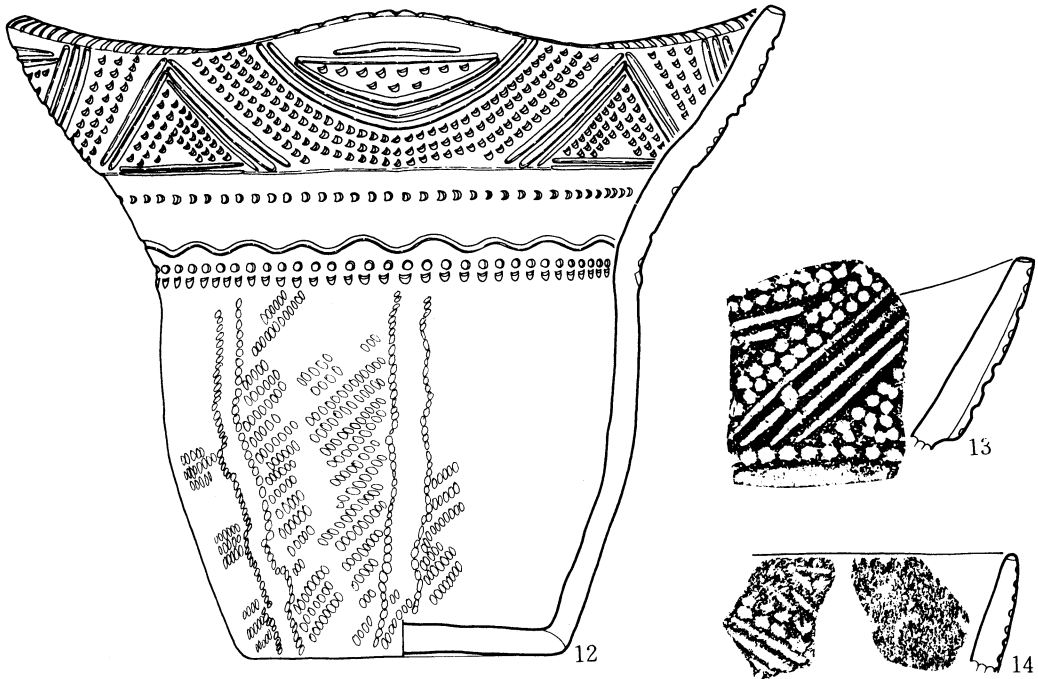
6

5m

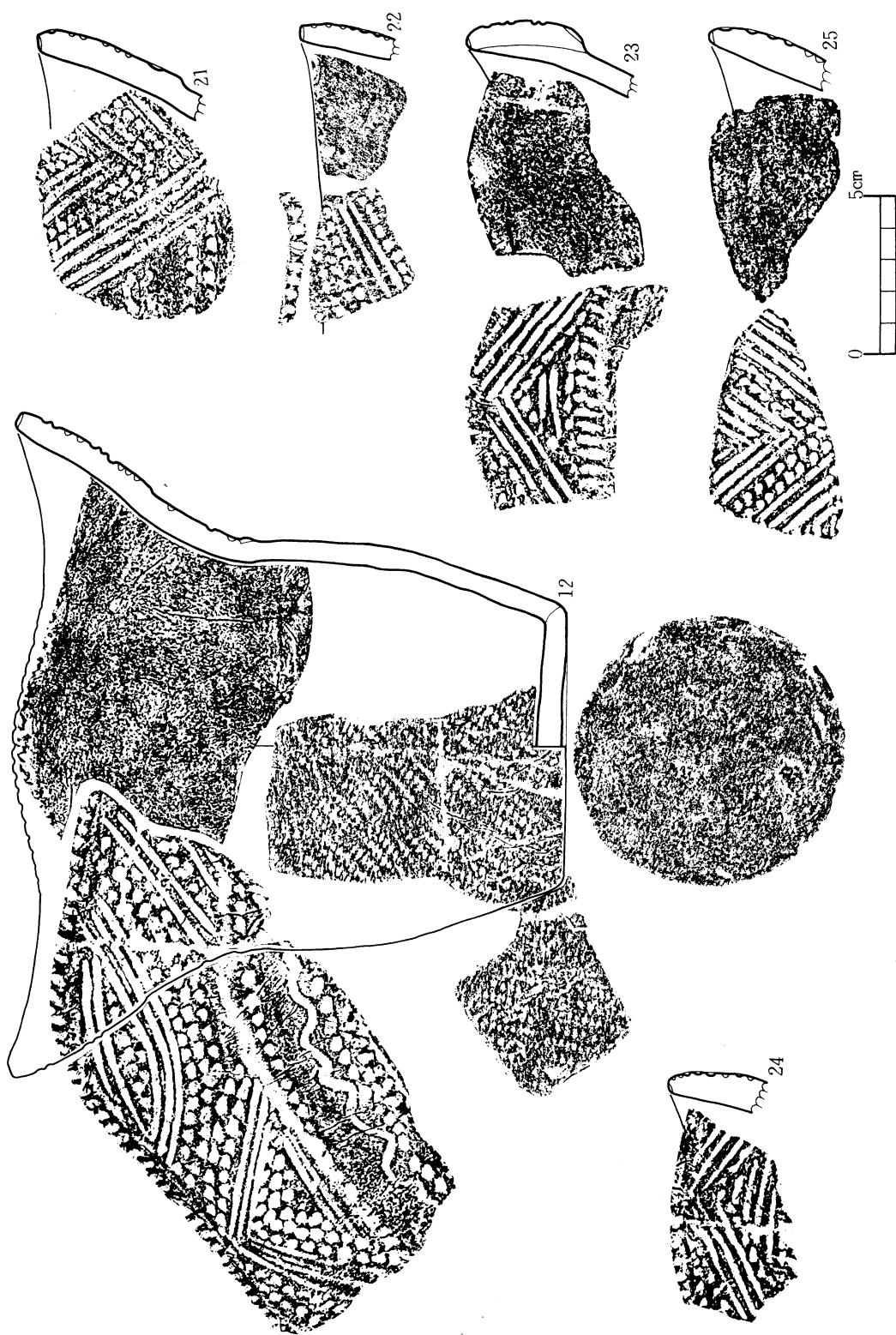


$L = 69.3 \text{ m}$

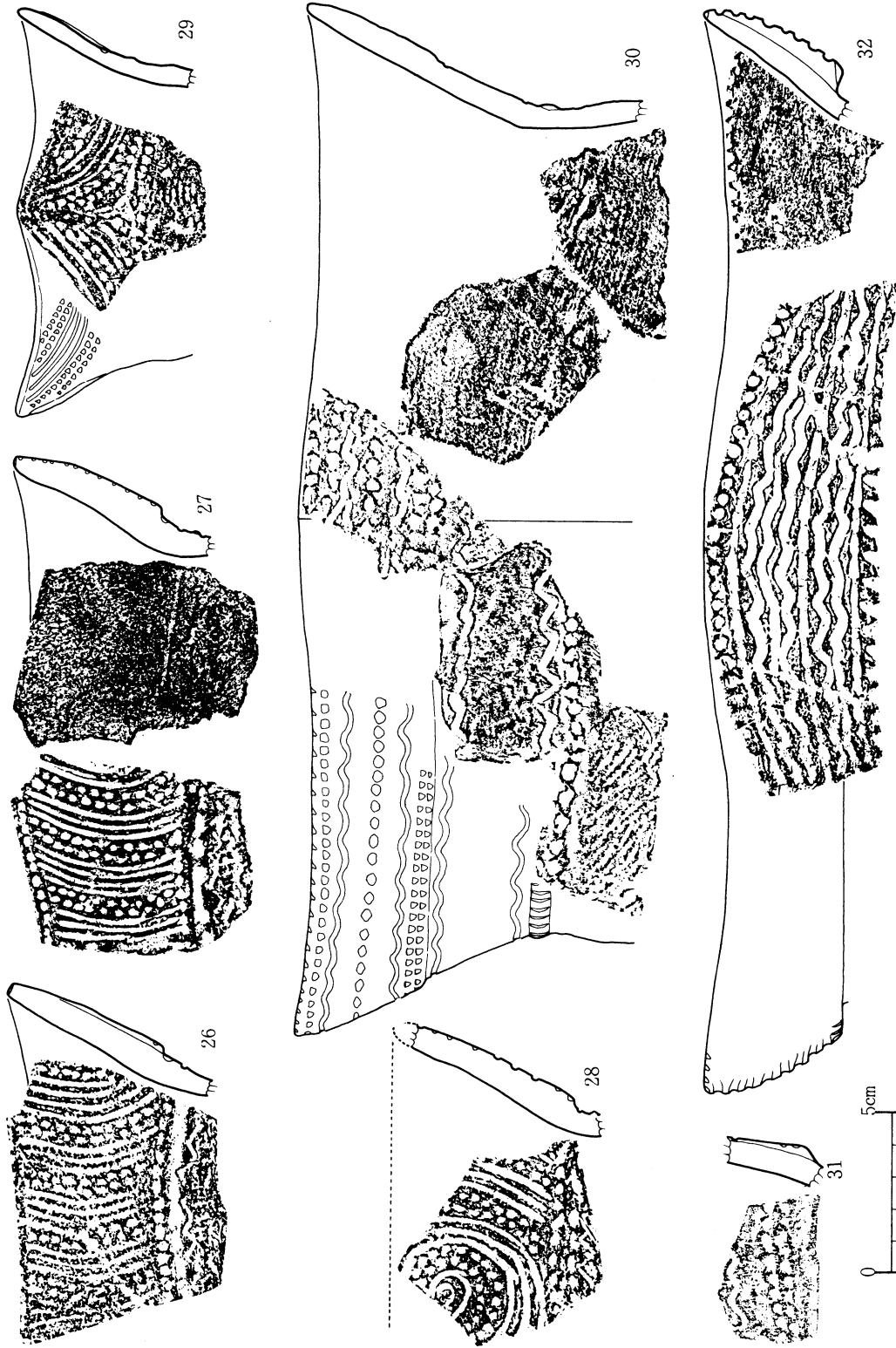




第18图 IV類土器実測図(1)

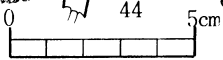
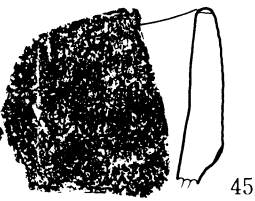
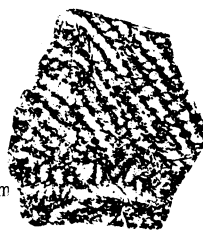
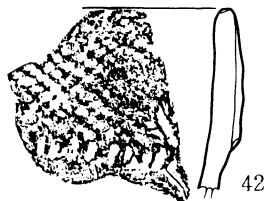
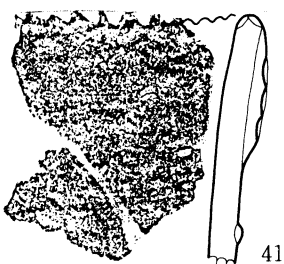
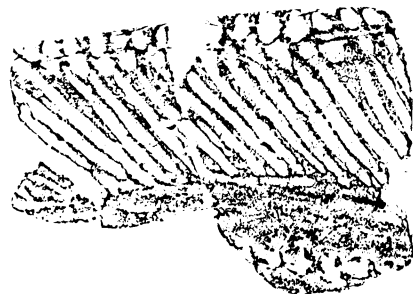
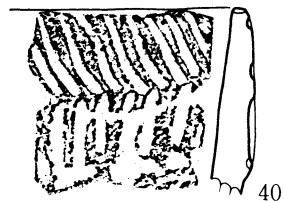
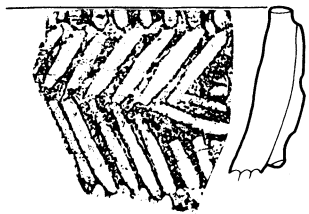
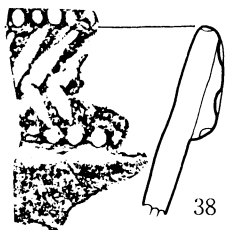
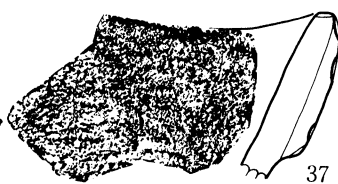
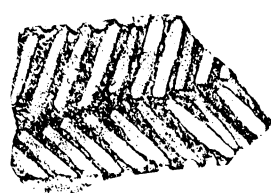
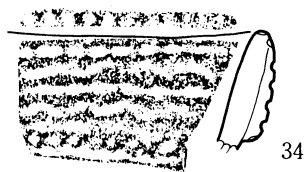
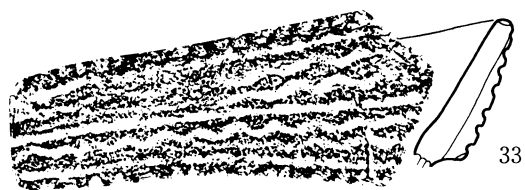


第19図 IV類土器実測図(2)

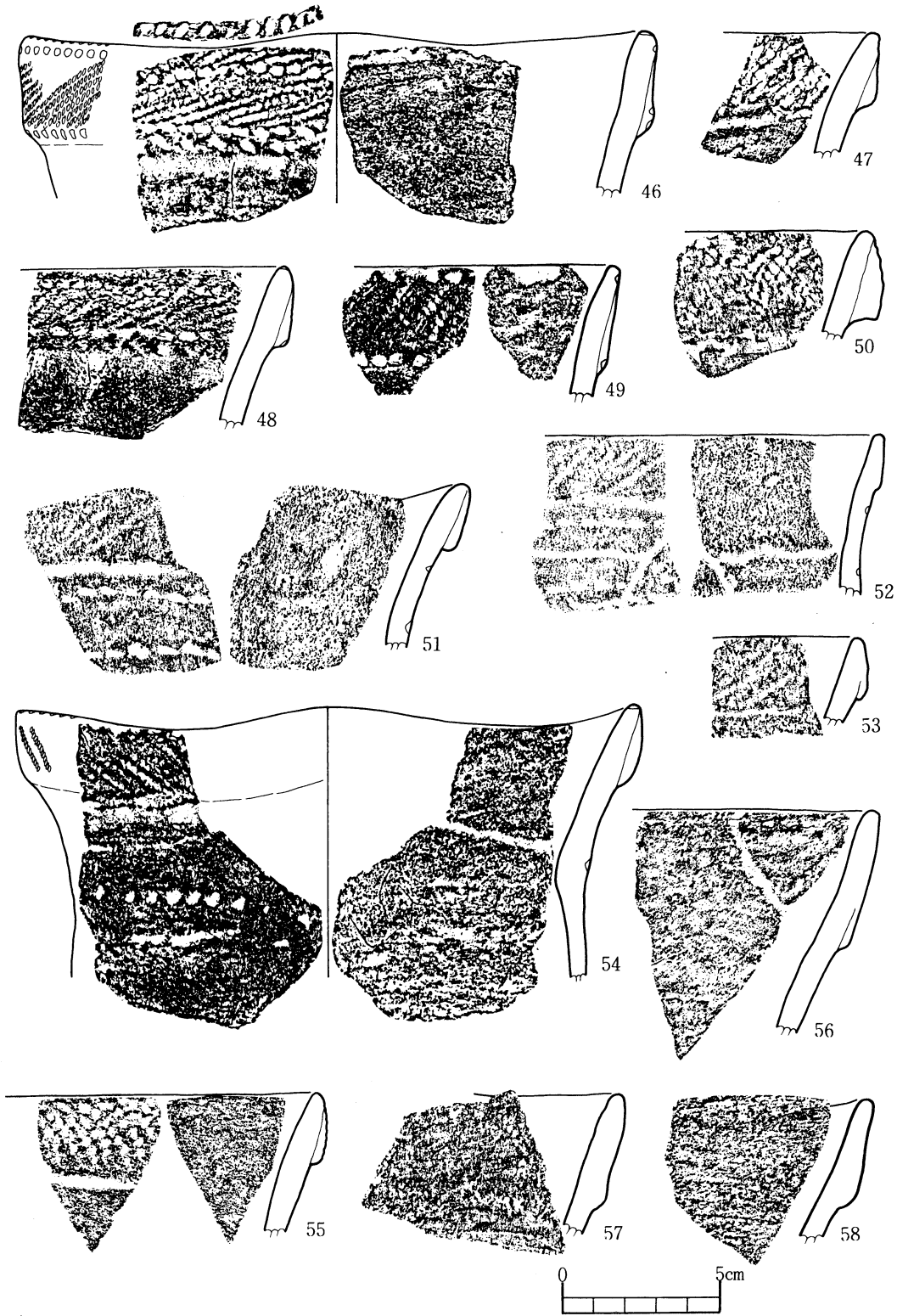


第20图 IV類土器美測図(3)





第21图 IV類土器実測图(4)



第22図 IV類土器実測図(5)

**(口) 幅狭肥厚口縁** (第23～27図-59～112)

大きく外反する口縁部が、幅狭で玉縁状に肥厚するタイプである。細片のため平縁状に作図したが、83等のように口縁の四隅が山形を呈した緩やかな波状口縁をつくるものも多い。一般的に大型の器形が多く、100のように緩やかな波状を呈するものが多い。玉縁状の肥厚部は狭いため、紋様も単純化される傾向にある。この肥厚部分の外面に施される紋様によって、a～f 類別した。なおこの類別は、量的に少ないものがあり、個体差を示すだけのものもある。

**a：凹線文で羽状文を描くほの** (59～66)

肥厚口縁全体に短線で羽状文を描くものである。最も単純な紋様構成であるが、象徴的な紋様である。肥厚部は厚く、堅固である。口唇部には丁寧な刻目が施されるが、肥厚口縁下端にも施文されるものがある。41の肥厚口縁部直下には突帯文が巡らされ、その上には刻目が施される。このタイプは、幅広口縁(Ⅰ-e類)にも同施文があり、Ⅳ類の代表的な紋様の一つといえる。

**b：凹線文で鋸歯文や斜線文を描くもの** (67～79)

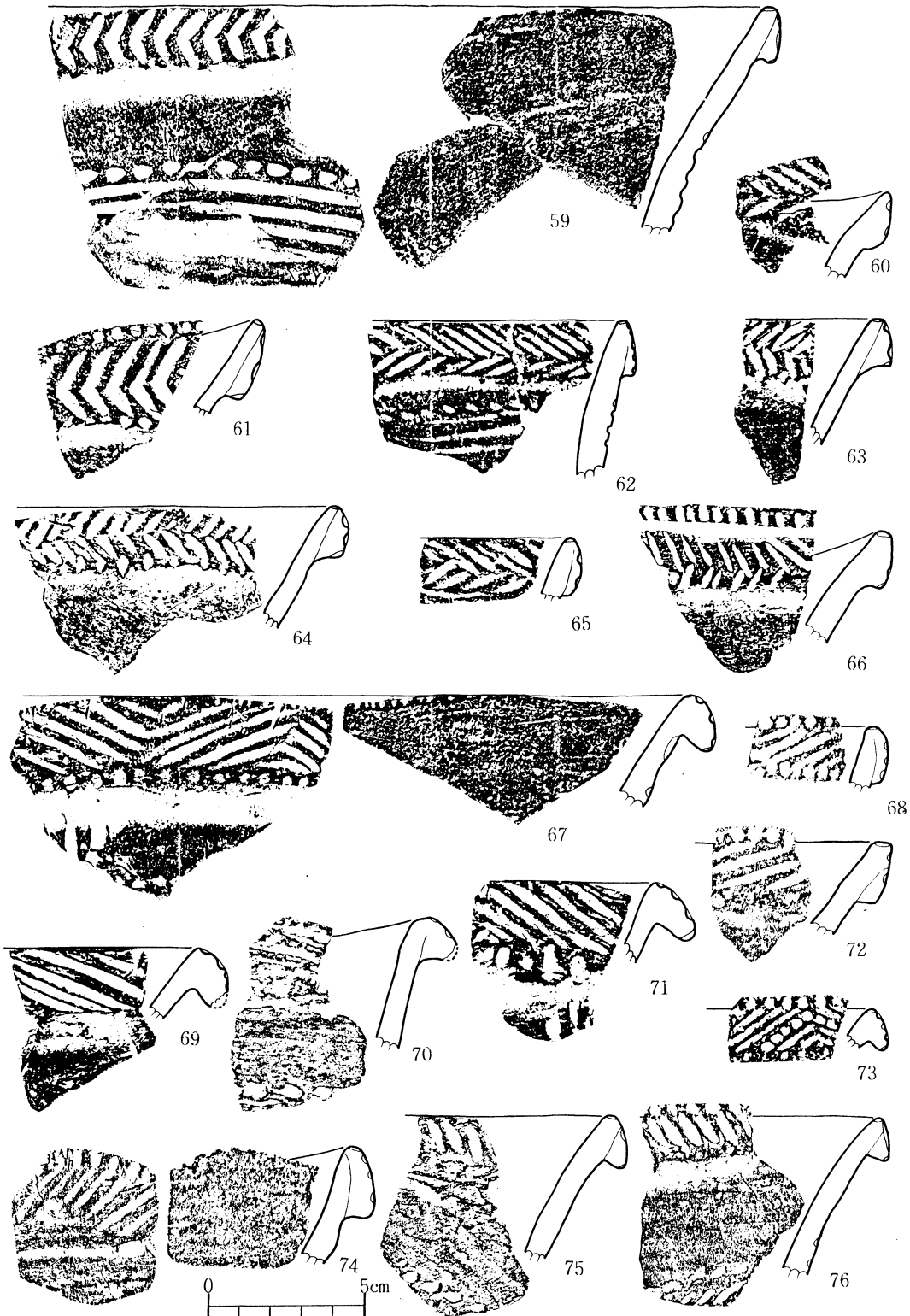
口縁肥厚部に大きく凹線文で鋸歯状の山形を描くもので、斜線文も含めた。肥厚口縁部下端には刻目が施されるものもある。73のように、鋸歯文の凹線文間に連続刺突文を施すものもある。Ⅰ-d類に凹線文帯で鋸歯文をつくるものがあるが、この類とは別であり、基本的には羽状文に含まれるであろう。

**c：凹線文で平行線を描くもの** (80～87)

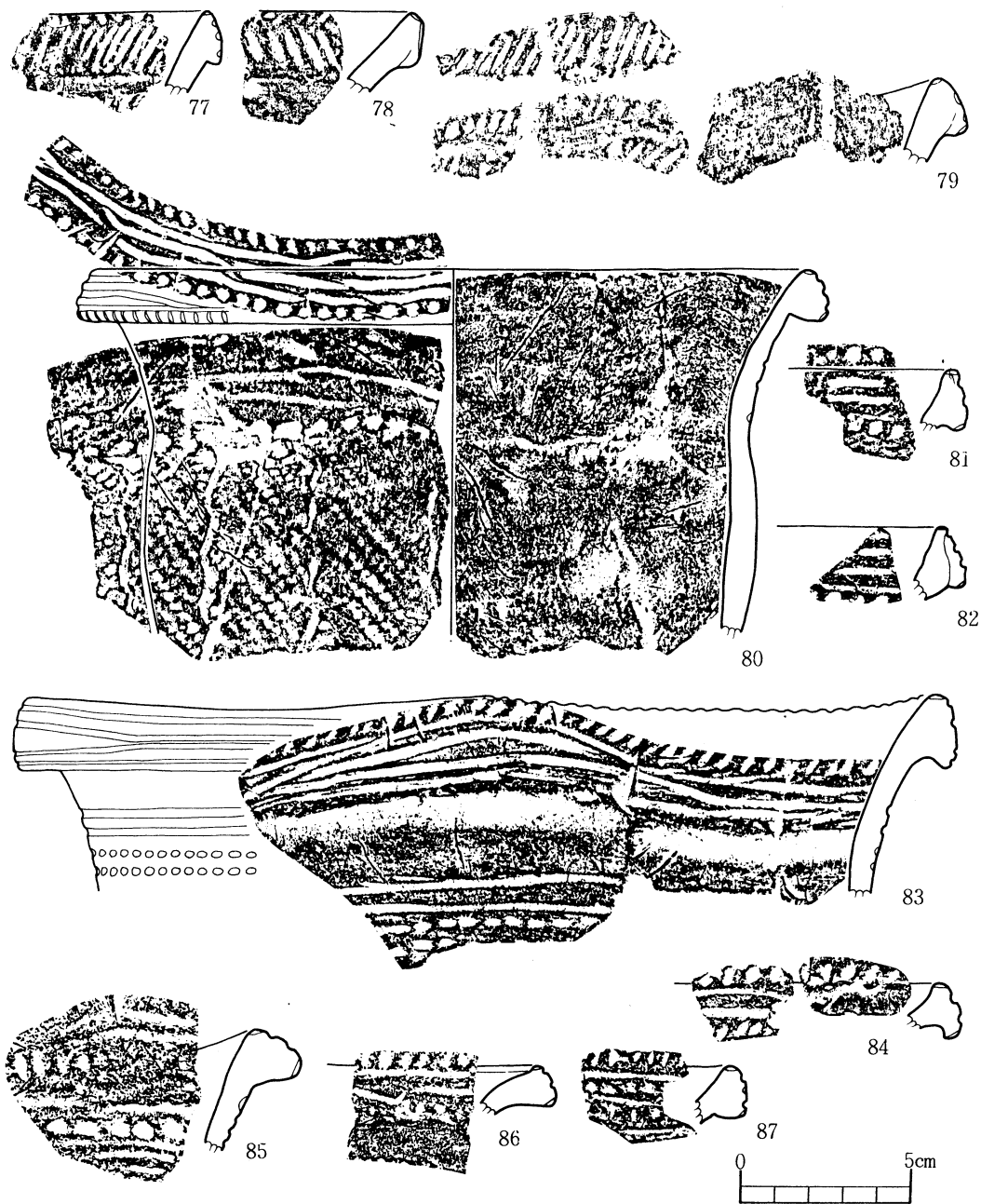
口縁肥厚部に平行線文を描くものである。肥厚口縁部下端には刻目が施されるものもある。波状の波頂部は、幅広になり凹線文間も広くして誇張する。80と83はこれに属する比較的大きい破片であるが胴部は僅かに張り、頸部で僅かに締まり、屈曲して口縁部は大きく外反する。口縁部は肉厚で幅狭い肥厚部となる。80は口径20.8cmを測る平縁口縁である。頸部から大きく外反した口縁部の肥厚部までの口辺部には、二条の凹線文が巡るだけで無文である。僅かに屈曲する頸部付近には、刺突文が巡る。胴部には一個の結節をもつ縄文が施される。縄文はLRで結節はRでつくる。

**d：円弧状の波状文を描くもの** (88～91)

肥厚口縁部に押し引き状の凹線文で、丁寧な円弧状の波状文を描くものである。押し引き状の手法で波状の凹線文はより華麗さを増す。88は、肥厚部下の口辺部に押し引き状の同手法で二条の凹線文を上・下位に巡らせ、その間には波状文を描いている。



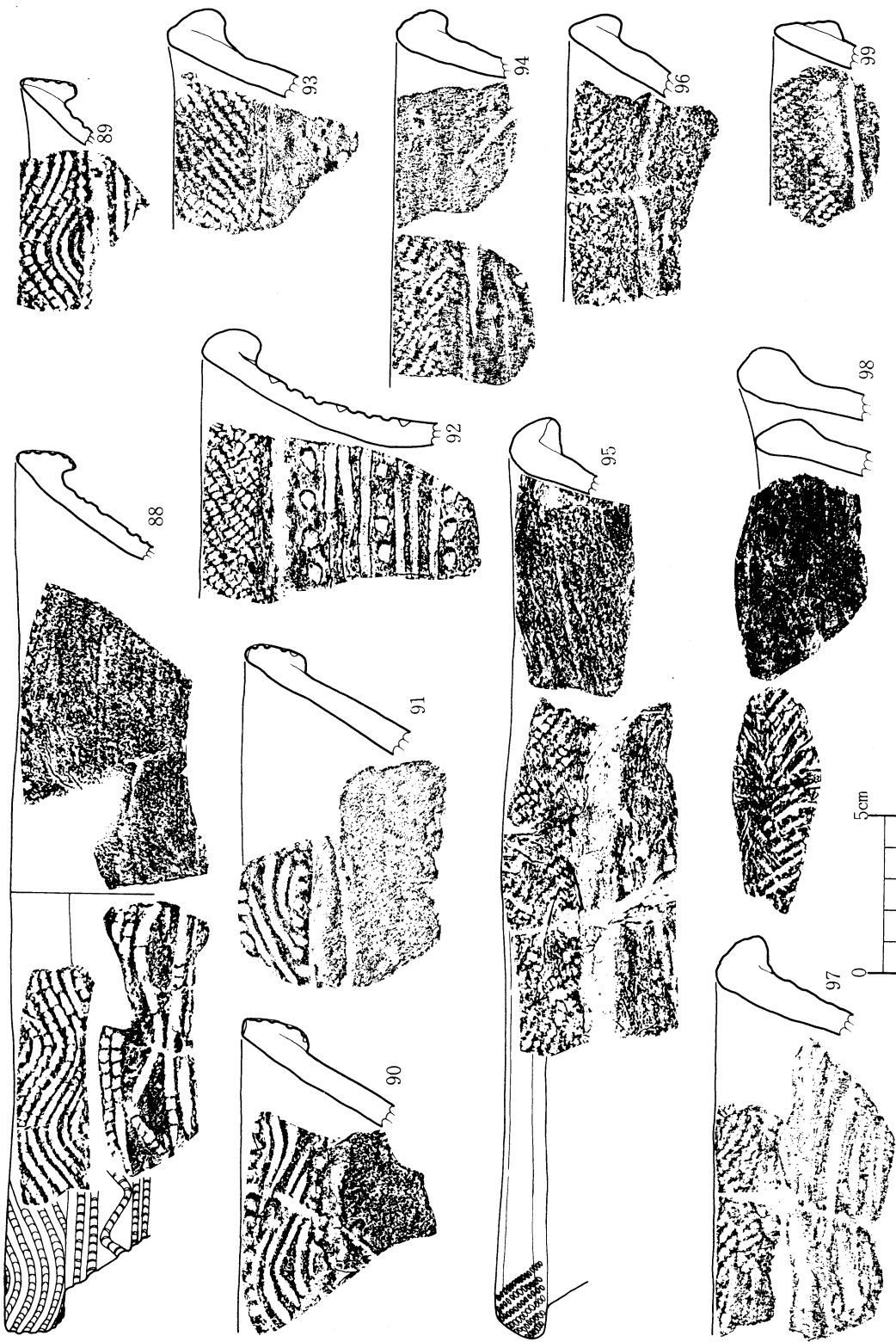
第23图 IV類土器実測図(6)



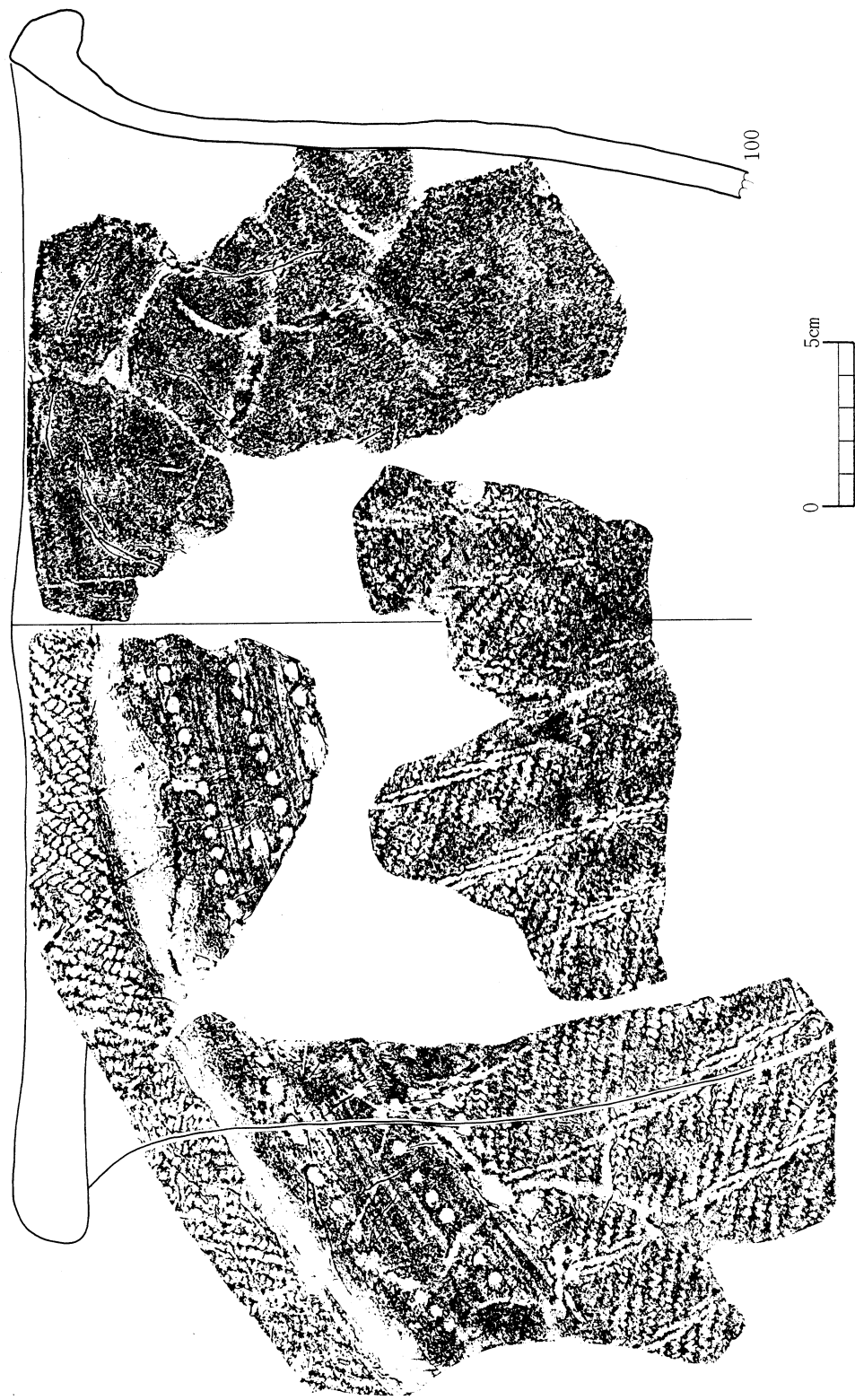
第24図 IV類土器実測図(7)

e : 肥厚部に縄文を施文するもの (92~100)

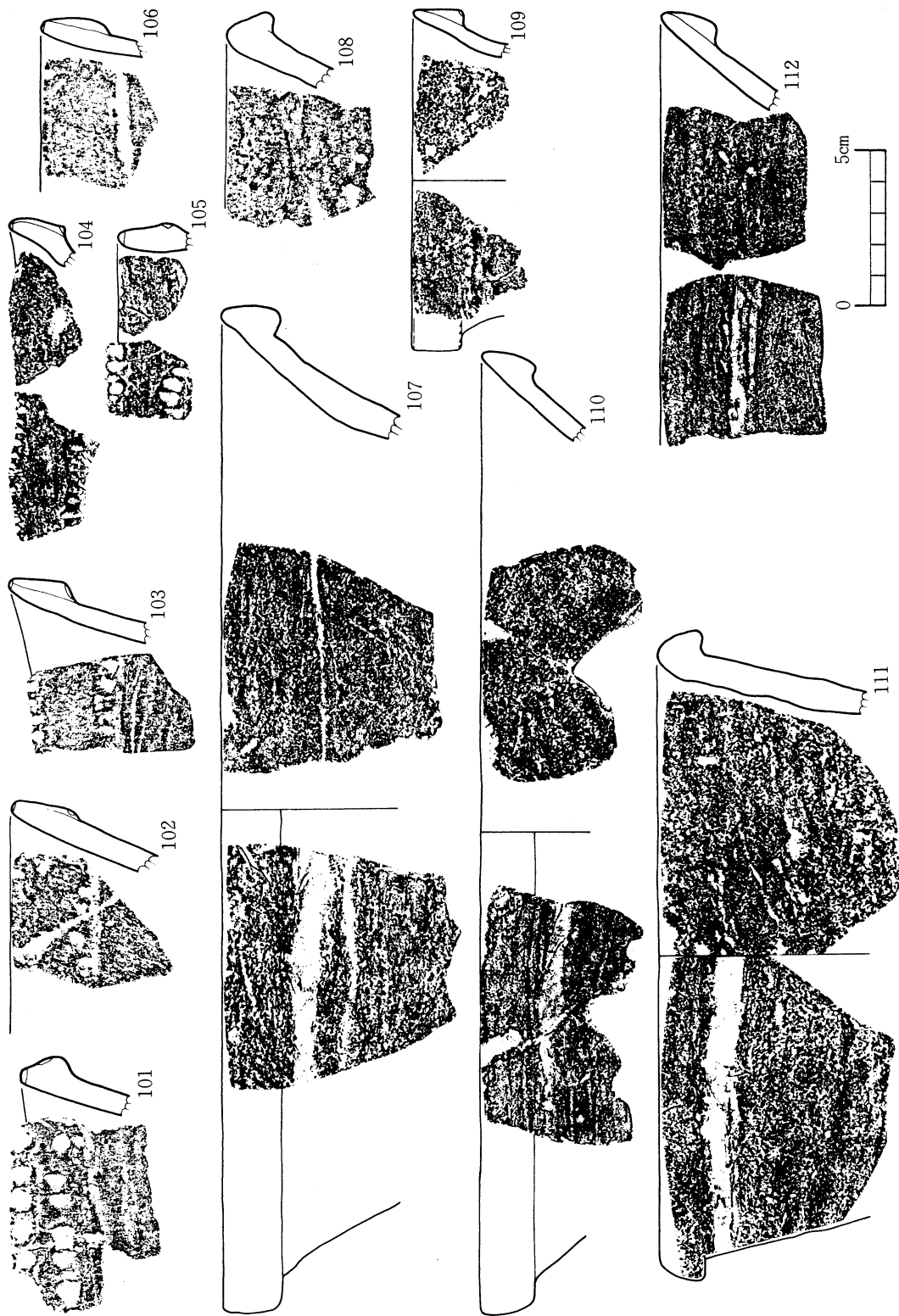
口縁肥厚部の全面に、縄文を施文するものである。この場合、口唇部や肥厚部下端には刻目は施されない。100は、胴部上半部が判明するものである。口径34.6cmを測る。口縁肥厚部は緩やかに波状を呈す。肥厚口縁部下から頸部付近には、刺突連点文が横位に3条程度巡る。



第25图 IV類土器実測図(8)

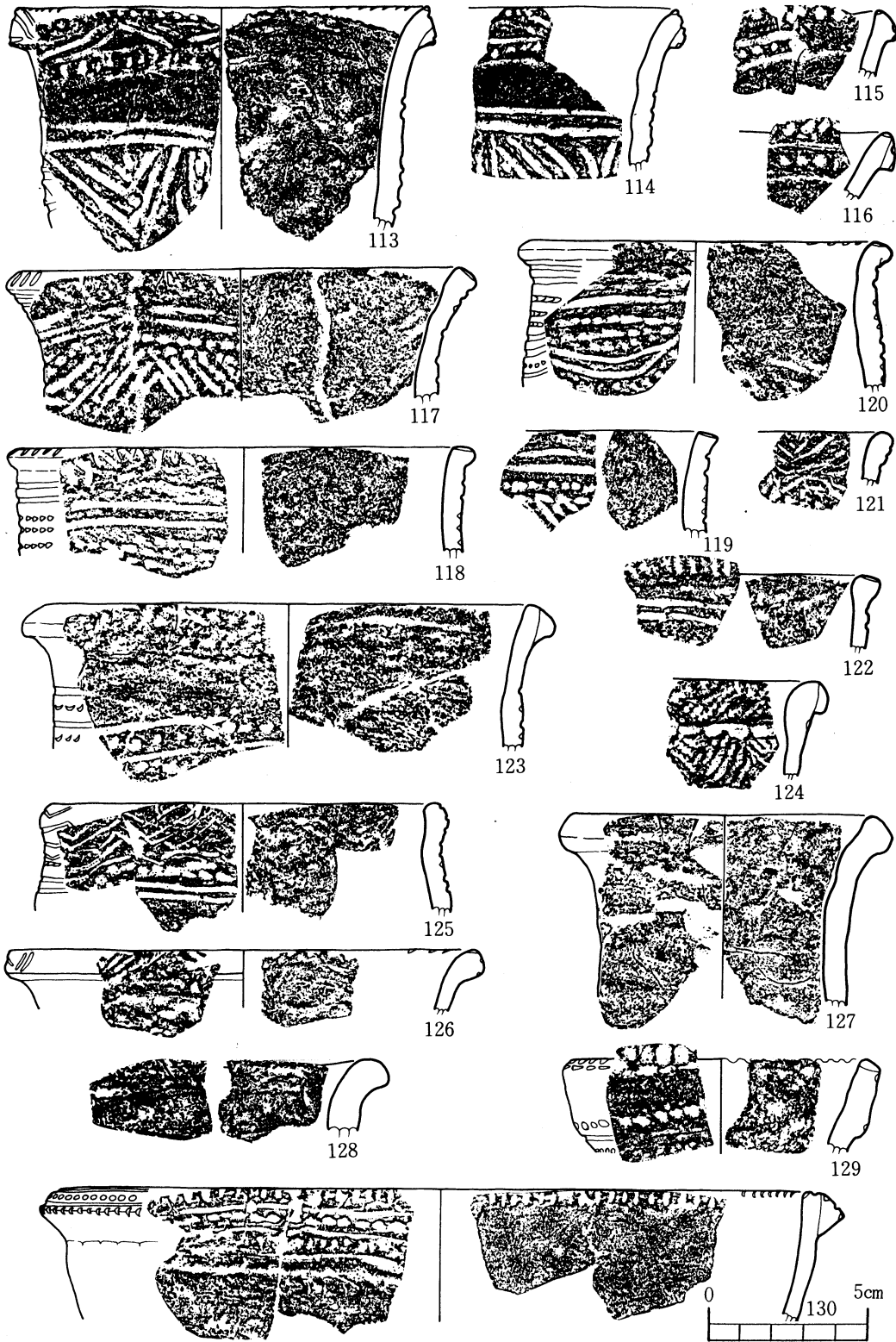


第26图 IV類土器実測図(9)

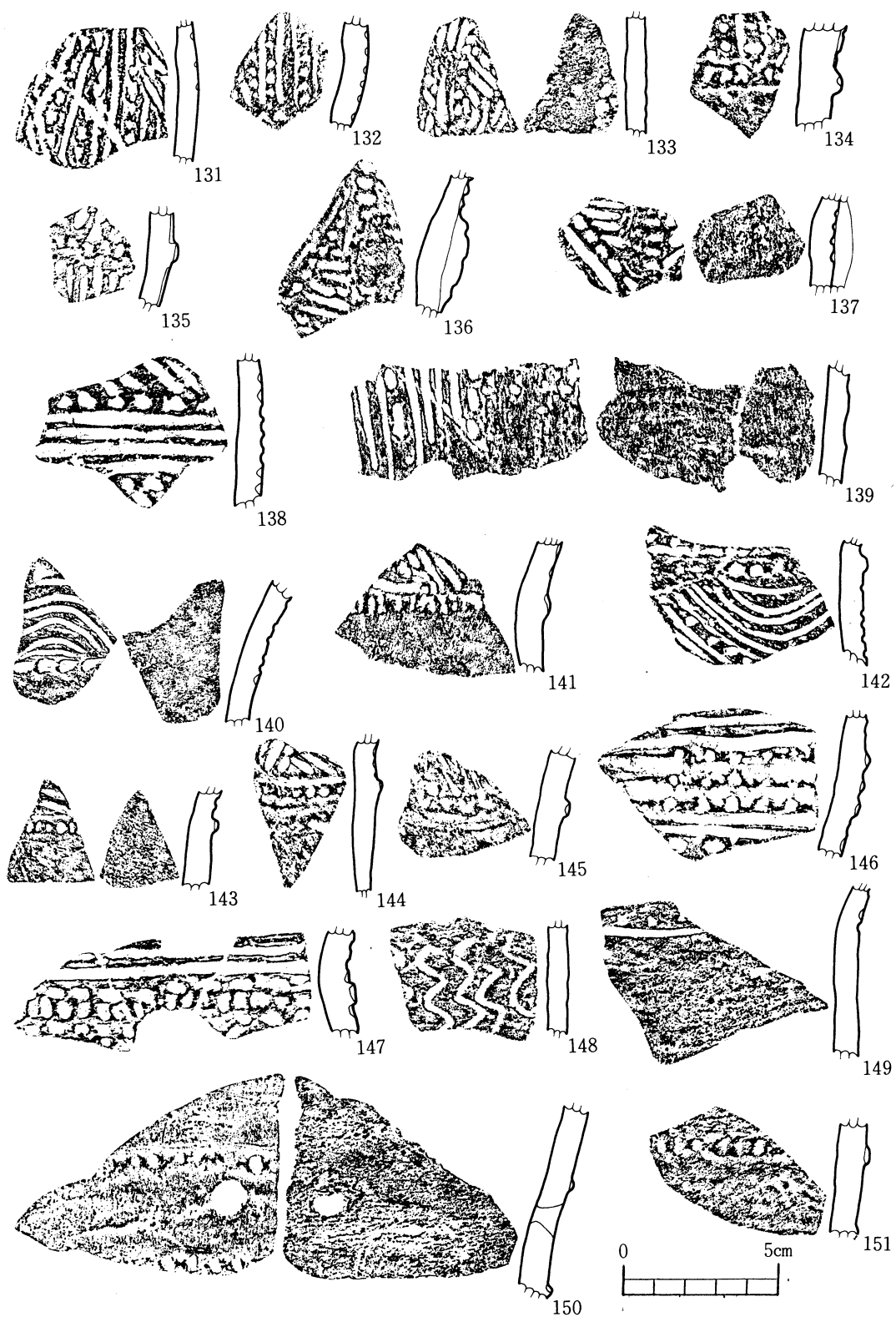


第27图 IV類石器実測図(10)

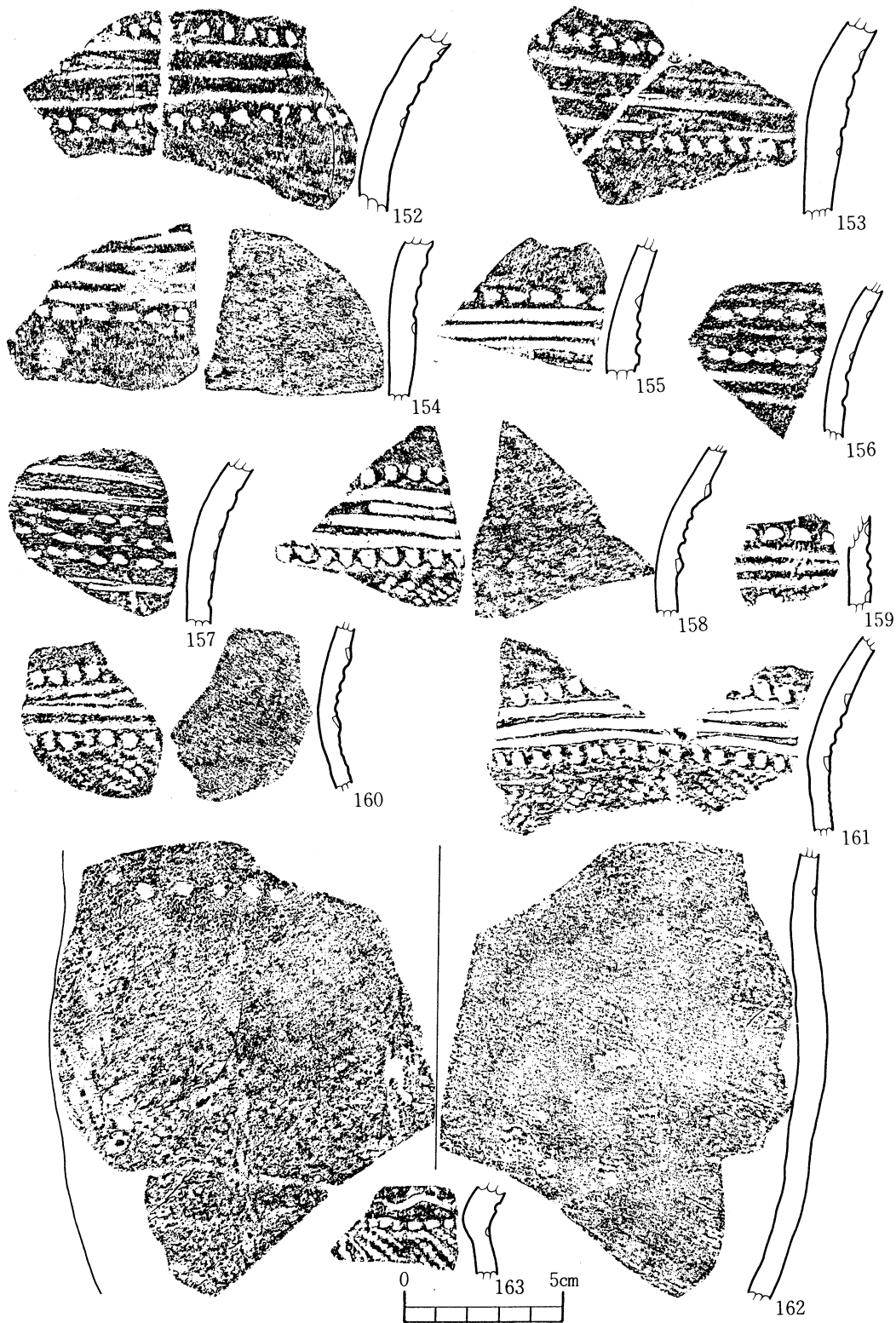




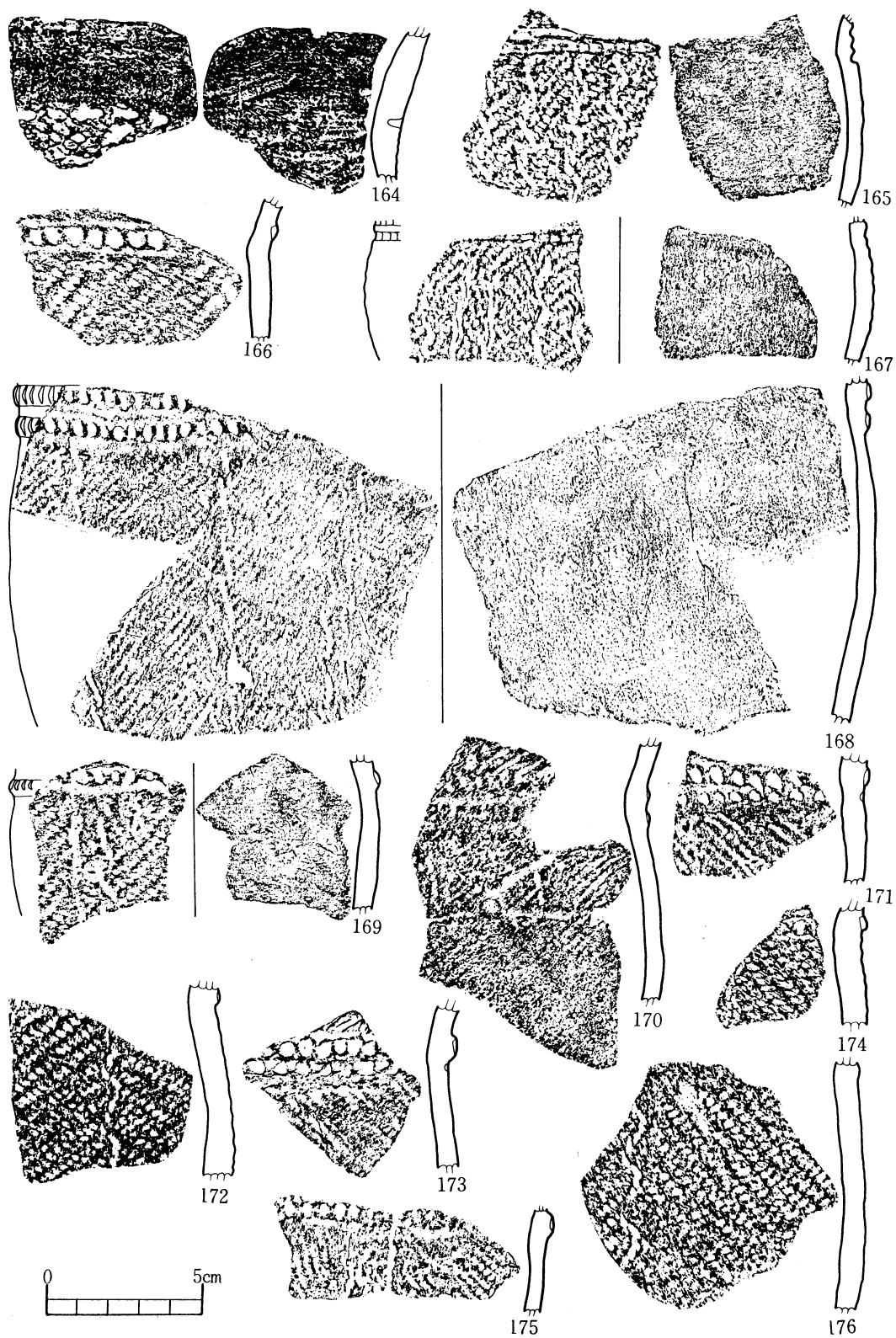
第28图 IV類土器実測図(11)



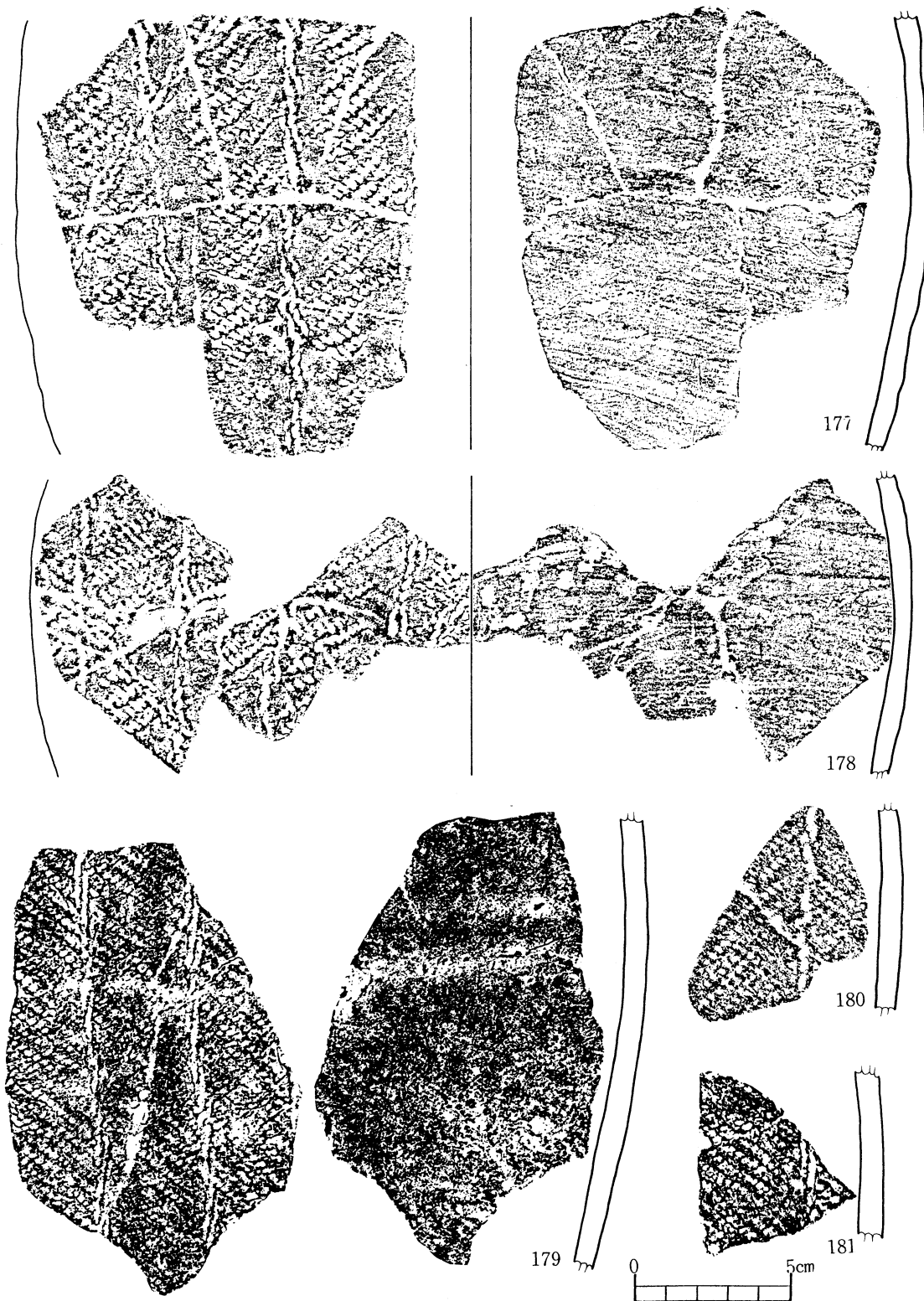
第29图 IV類土器実測图 (12)



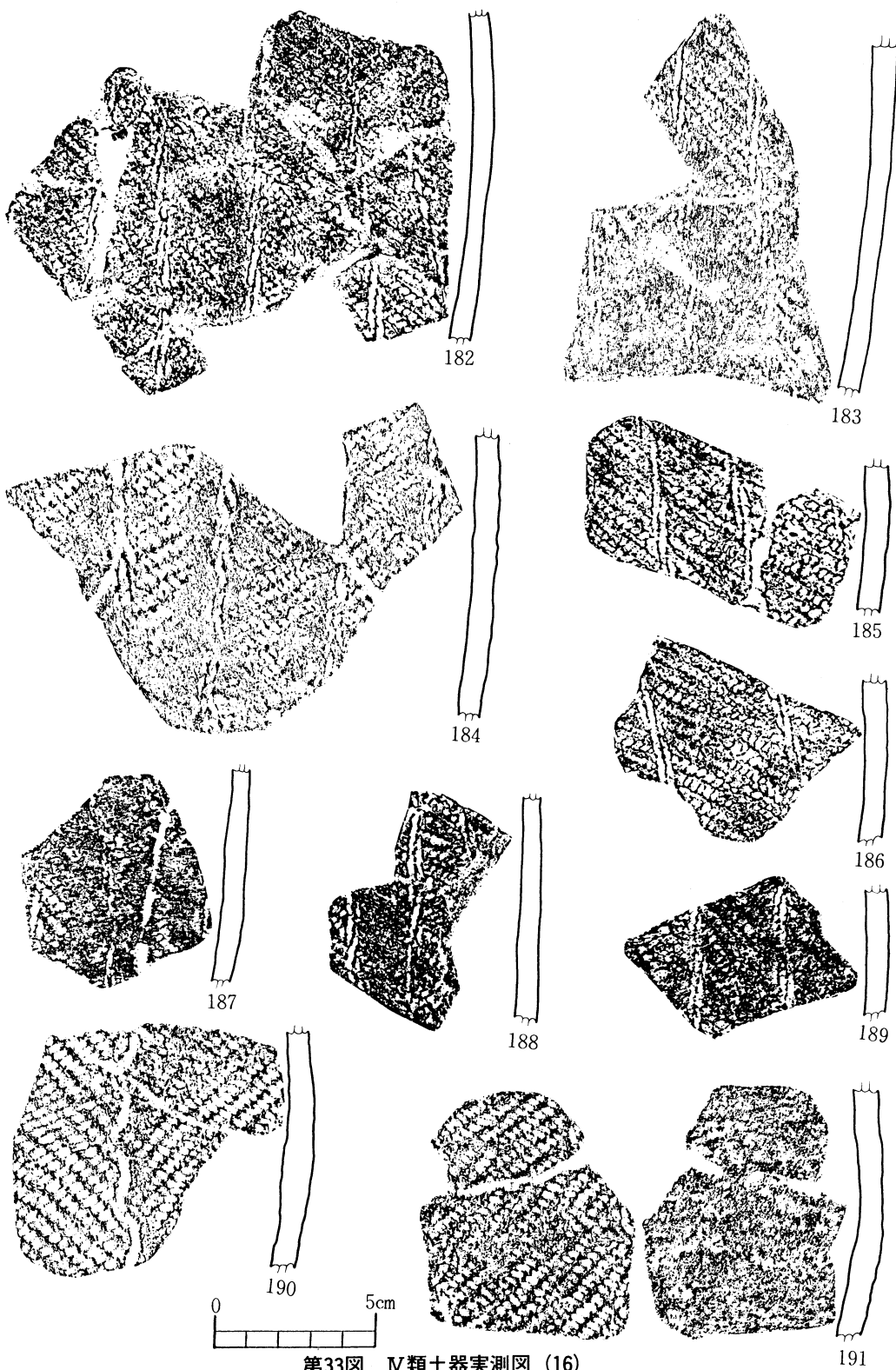
第30图 IV類土器実測図 (13)



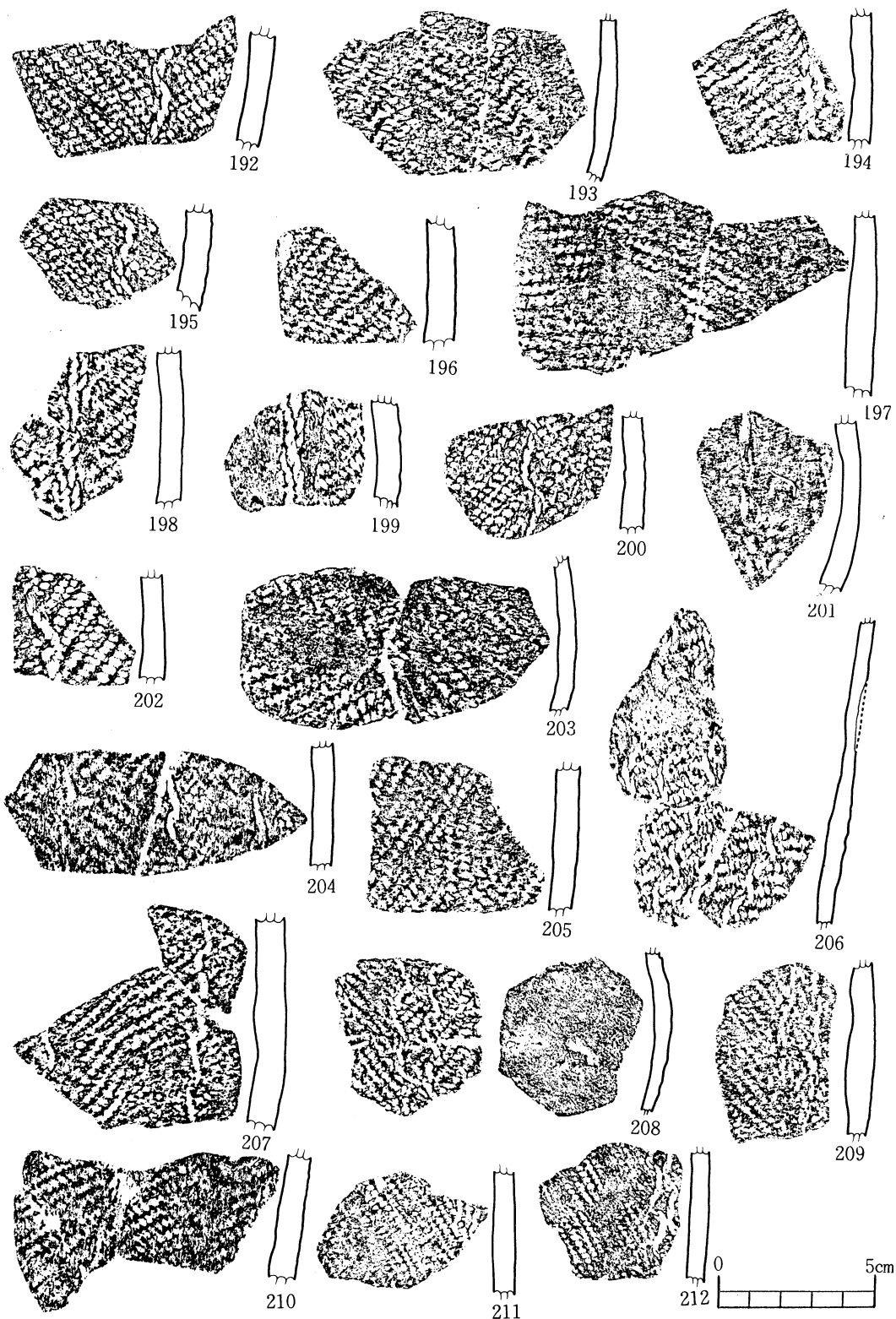
第31图 V類土器実測図(14)



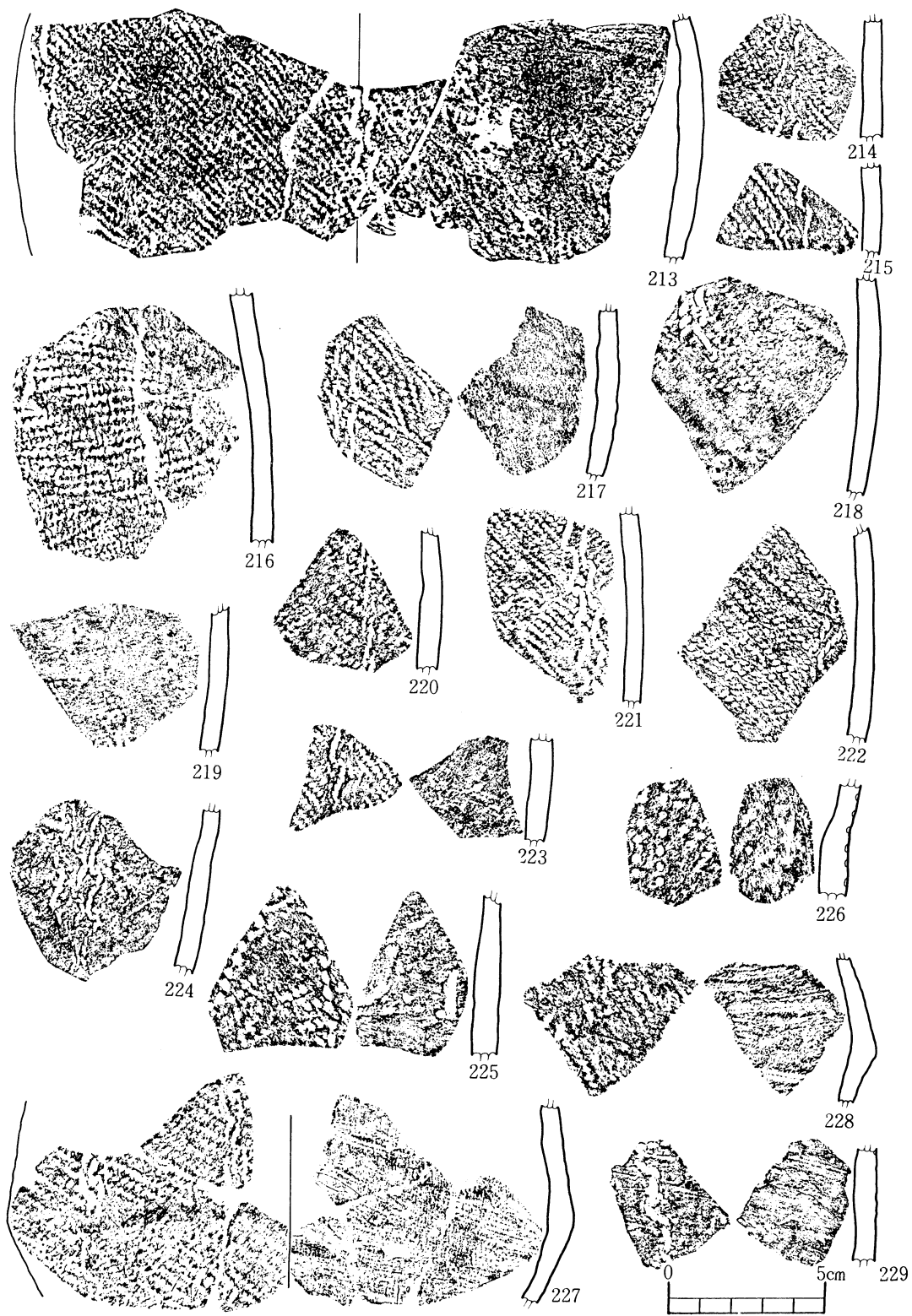
第32图 IV類土器実測図 (15)



第33图 IV類土器実測図 (16)



第34图 IV類土器実測图 (17)



第35图 IV類土器実測図 (18)



**f：肥厚部が無文のもの** (101～112)

口縁部の上半が肥厚するだけで、紋様が付けられないものである。101～105は口唇部と肥厚部下端に刻目を施すもので、この類で取り扱った。本遺跡出土のものには、僅かではあるが各器種や各器形に無文のものが含まれている。

**(ハ) その他** (第28図-113～130)

その他として、イの幅広肥厚口縁や口の幅狭肥厚口縁に属さないものを一括してここで取り扱う。全体に小型の器形で、ミニチュア土器の形態でもある。113～116・120～123は、口縁部が肥厚するタイプで口類に属すことも考えられるものである。紋様は凹線文と連点文で鋸歯状を構成する紋様である。胴部も口縁同様の紋様が繰り返され、縄文は施されない。124は小型の肥厚口縁部であるが、頸部付近に刺突文を巡らせ肥厚部と胴部には唯一縄文が施文されている。117～122は口縁部は肥厚せずにそのまま外反する。紋様は、凹線文と連点文を繰り返し施文する。125は口縁部を若干内湾気味に仕上げるものである。126～128は、口縁部は外反させ、口唇部は若干膨らませ丸くおさめる。129は小型の器形の肥厚口縁を呈する。口唇部と肥厚部下端に刻目が施される。130は、口縁外面に三角形の貼付突帯文を巡らせ、口唇部と突帯文の一辺を併せて口唇部としている。器形は鉢状になる。紋様は凹線文間に刺突文を施すもので、口唇部両端には刻目が施される。以上、これらは定形化した器形ではなく、特殊な器形を持つものとして捉えた。

**② 頸部** (第29図～第31図-131～176)

胴部が僅かに内湾し、そこから緩やかに屈曲し外反して口縁部をつくる。この緩やかな屈曲部が頸部に当たる。しかし、100のように胴部からそのまま外反して屈曲部をつくらないものもある。口縁部片で頸部の状態が判明する資料は少ないが、12のように頸部に刺突連点文を巡らすものや30のように突帯文状に盛り上げ刻目を付けるものなどがある。

第29図～第31図は、頸部から胴部上半の部位である。第29図は、頸部付近の破片で特殊な紋様が確認されたものを取り上げた。134は突帯文を貼付したもの、136・137は頸部付近にコブ状の突帯を貼付する特殊なものである。これらの中には胴部破片も存在しており、胴部に結節縄文を施さない一群も存在している。第30図・第31図は、一般的な施文がみられるものである。130～176のように、刺突文の間隔を若干あけて施文するものと168のように連続して密に施文し、刺突によって突帯文状に隆起させるものがある。この場合、ほとんどが胴部に結節縄文を施している。

**③ 胴部** (第32図～第35図-177～229)

第32図～第35図は、胴部片である。胴部は、緩やかに膨らんだ胴張りが一般的である。しかし、227や228のように、胴部中央で稜をつくって屈曲する特殊なタイプもある。

胴部の紋様には、結節縄文が施される。結節は、一結と二結がある。縄文の撚りは、LRは39片を数え、RLは27片である。同一個体を考慮すればあまり両者の開きはみられない。そのほか173にRだけの撚りが確認されている。結節を境に右左撚りが替わるものは10点存在している。また、結節の撚りは、LRの撚りはRで結び、RLの撚りはLで結ぶものである。

225と226は縄文の上から刺突文を施文する珍しいものである。さらに、229はRの結節だけを縦位に転がすもので、僅か一片の出土である。

#### ④ 底部 (第36図～第38図—230～265)

第36図～第38図は、底部である。底径は10cm程度の大きさが一般的であるが、264等のように5cm程度の小さいものも存在する。底部の底面の形態は、大きく上げ底を呈するもの、僅かに上げ底を呈するもの、ほぼ平坦面を呈するもの等に分けられる。底部側面の形態は、ほぼ垂直に近く立ち上がるもの、外方に広がって立ち上がるもの、大きく外方に広がって立ち上がるもの等がある。第36図は、底部側面に紋様が施文された比較的残りの良好なものである。これらのほとんどは、縄文や結節縄文が施文されている。

底部と側面の接着の仕方には、ほとんど同じ手法が看取される。249のように、底部円盤の中央を上げ底状に持ち上げて凸面をつくり、円盤の端部(円盤の周縁)は斜めに整形し、この斜めの周縁に胴部下端の側面を接着させる方法である。そのため側面は、若干外方に立ち上がり膨らみをつくって胴部へ続く。なお、上げ底の底部だけではなく、246や259のような平底の場合でも同じ手法がみられる。

#### ⑤ 補修孔 (第29図—150)

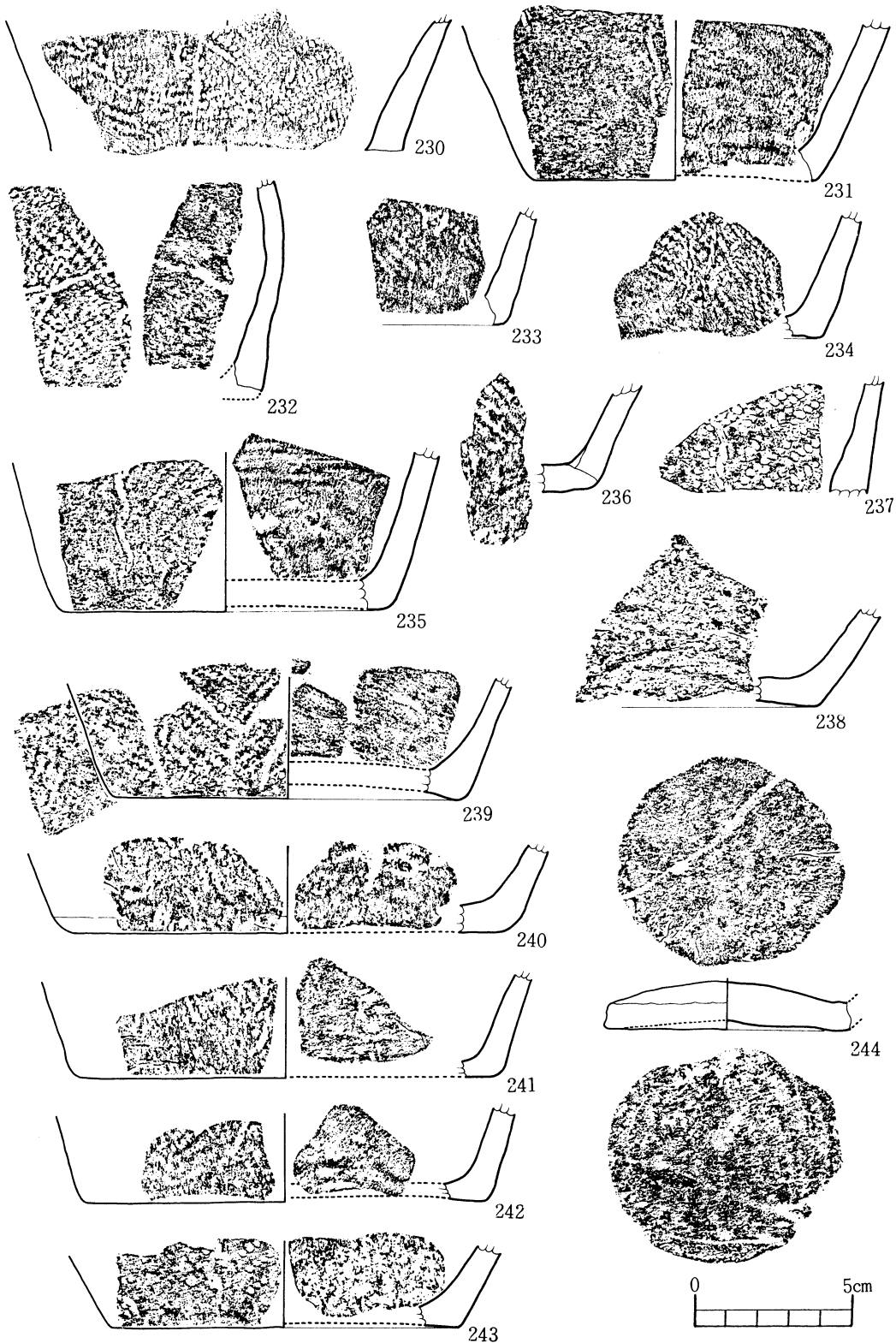
150は頸部の屈曲部の上位に穿孔した穴が存在する。外側の穴径は1.2mm程度を測り、内側は4mm程度と小さくなる。円穴は、外側からドリル状の器具で丁寧に穿孔されている。右側辺はシャープな縦割れが確認され、この割れ部分の補修孔と考えられる。

#### (2) 壺形 (第39・40図—266～278)

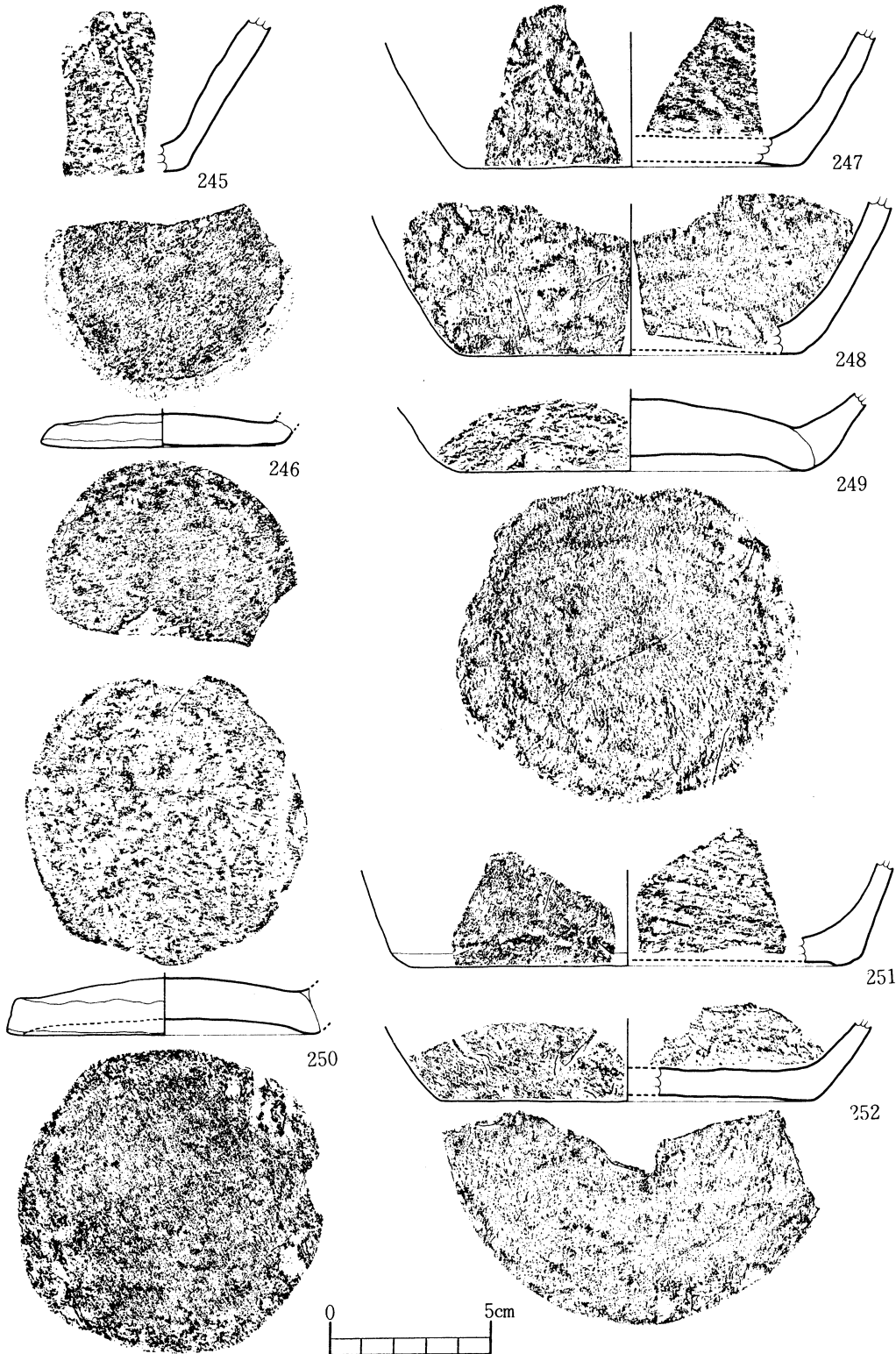
壺形は、細部には若干のバリエーションがみられるものの壺形として一括して促え、紋様上からa・bに細別して説明する。a類は紋様の付いた有文で、b類は紋様の付かない無文のものである。南九州の縄文時代の早期に該当する土器型式に、壺形土器の存在が近年明らかになりつつある。縄文土器の壺形土器という呼称の仕方には多くの問題があるが、一応ここでは、形態状から「壺形土器」として細分した。

#### a：有文 (266～272)

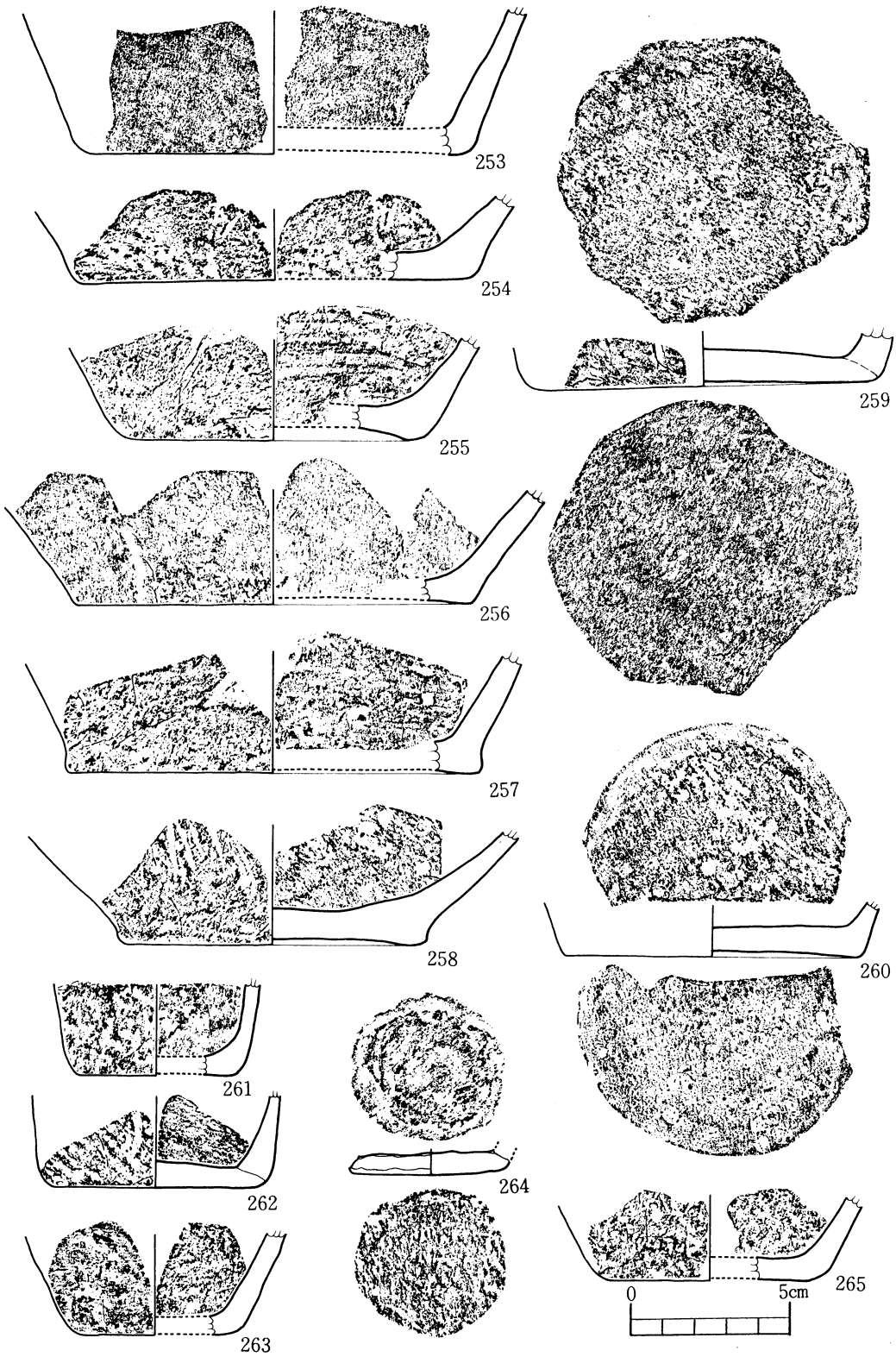
266～272は、AB9区からAB11区の間に出土している。壺形の器形を呈し、有文のものである。器形状はほぼ類似するが、紋様の施文が異なる。器形は、口縁部は内傾し、口縁上端に



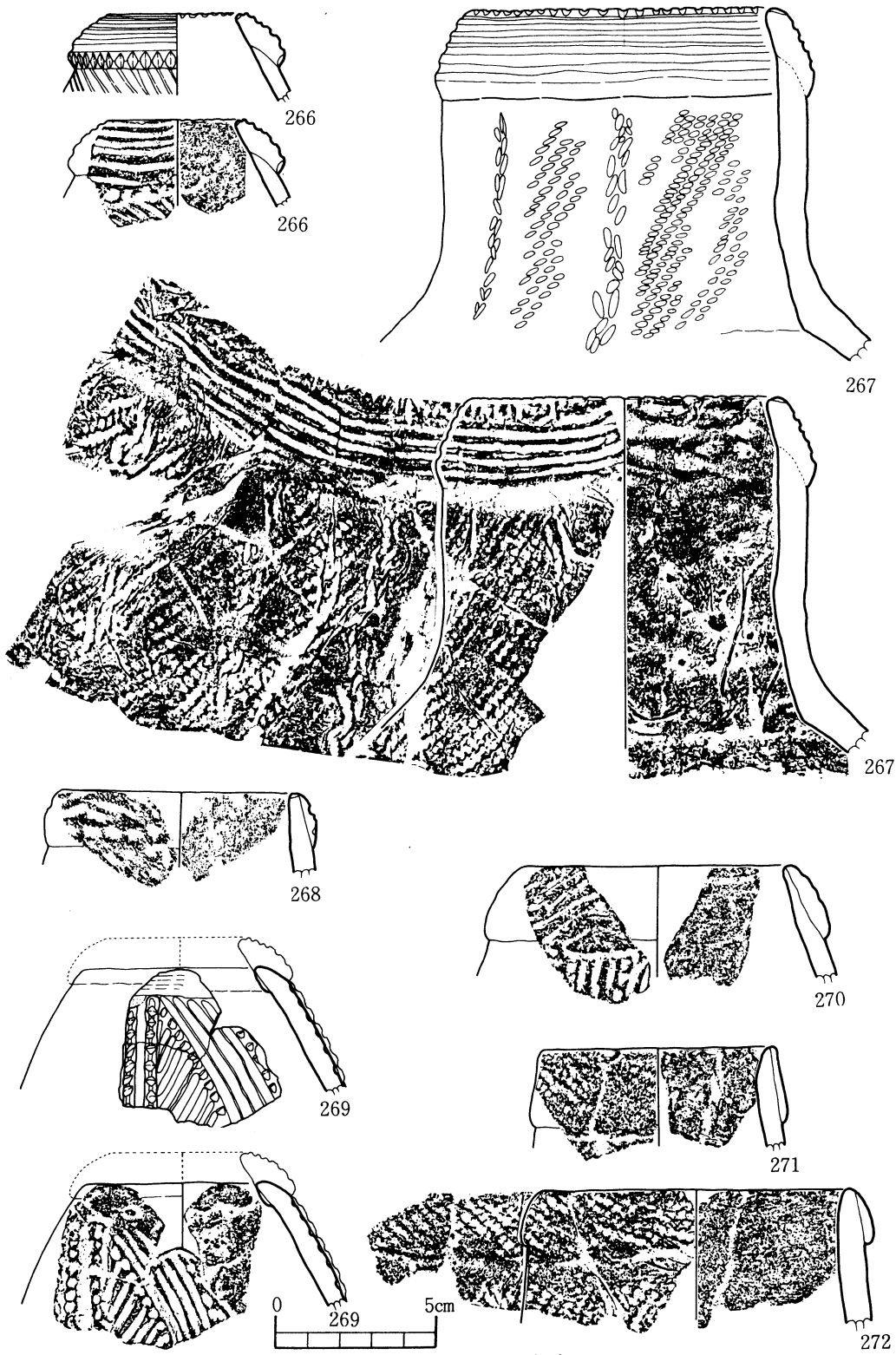
第36图 IV类土器实测图 (19)



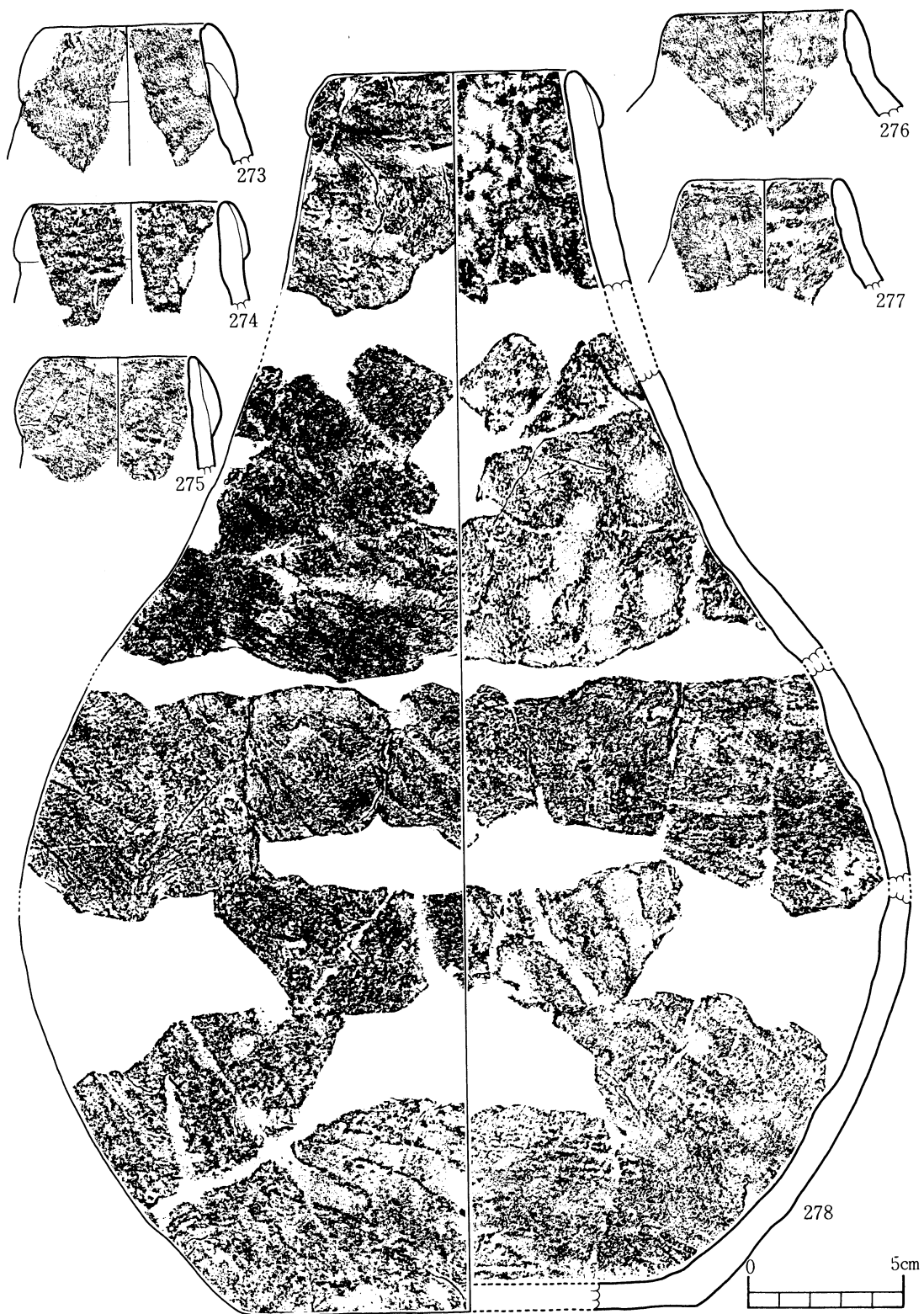
第37图 IV類土器実測図 (20)



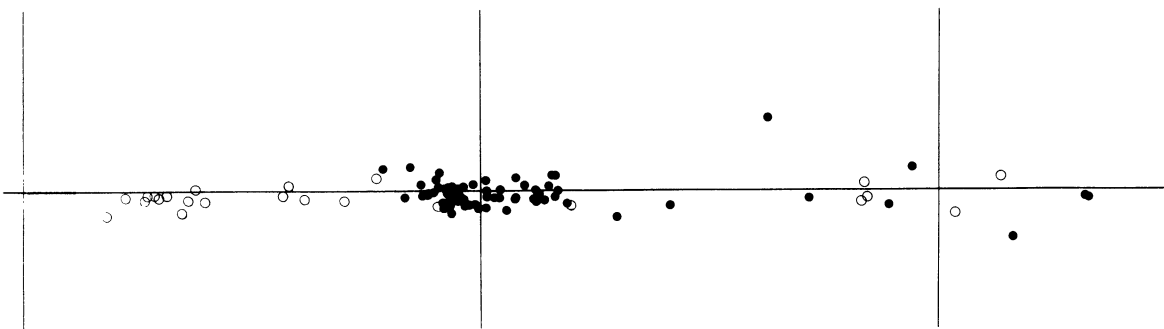
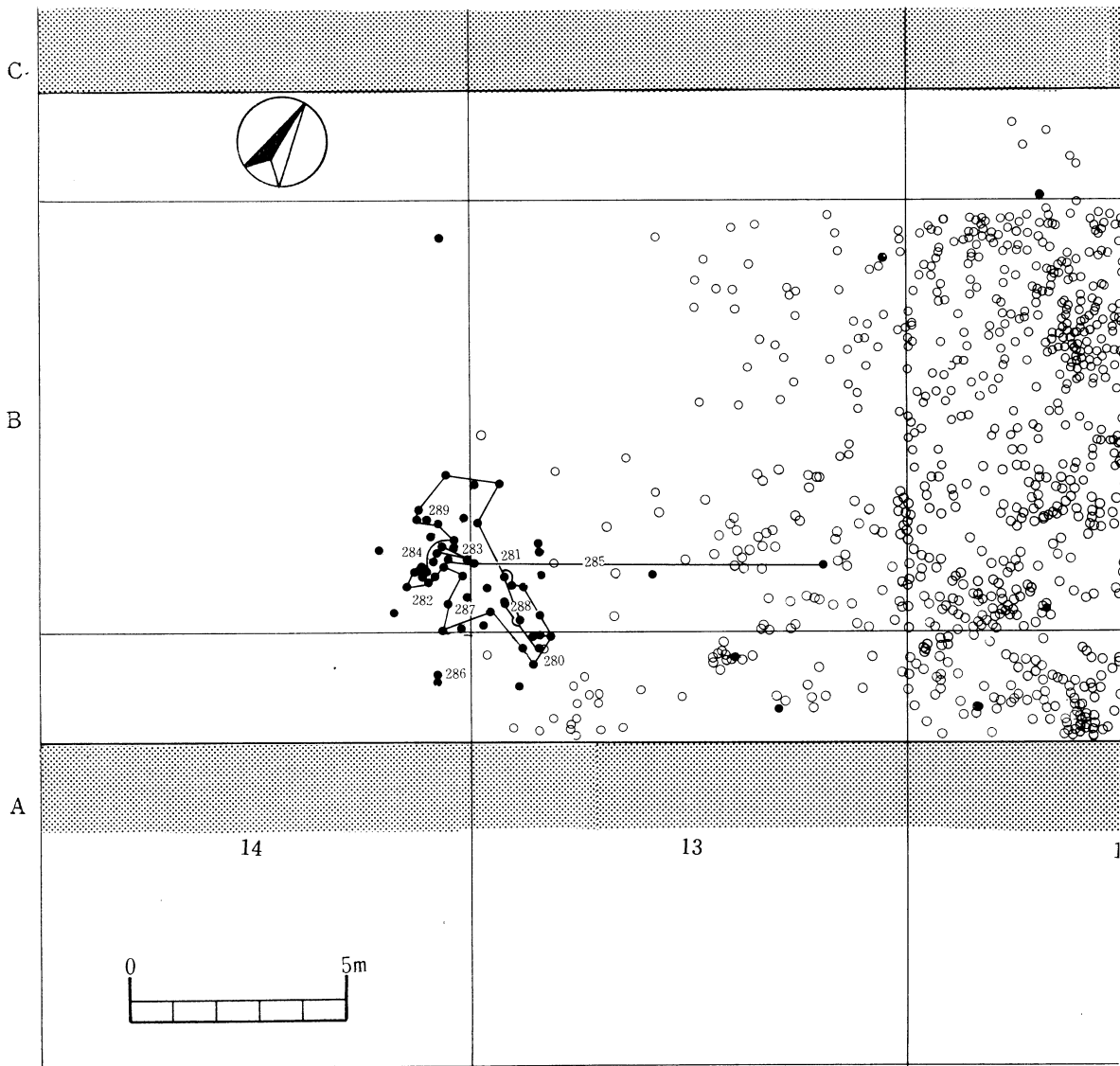
第38图 IV類土器実測図 (21)



第39图 IV類土器実測図 (22)



第40图 IV類土器実測図 (23)





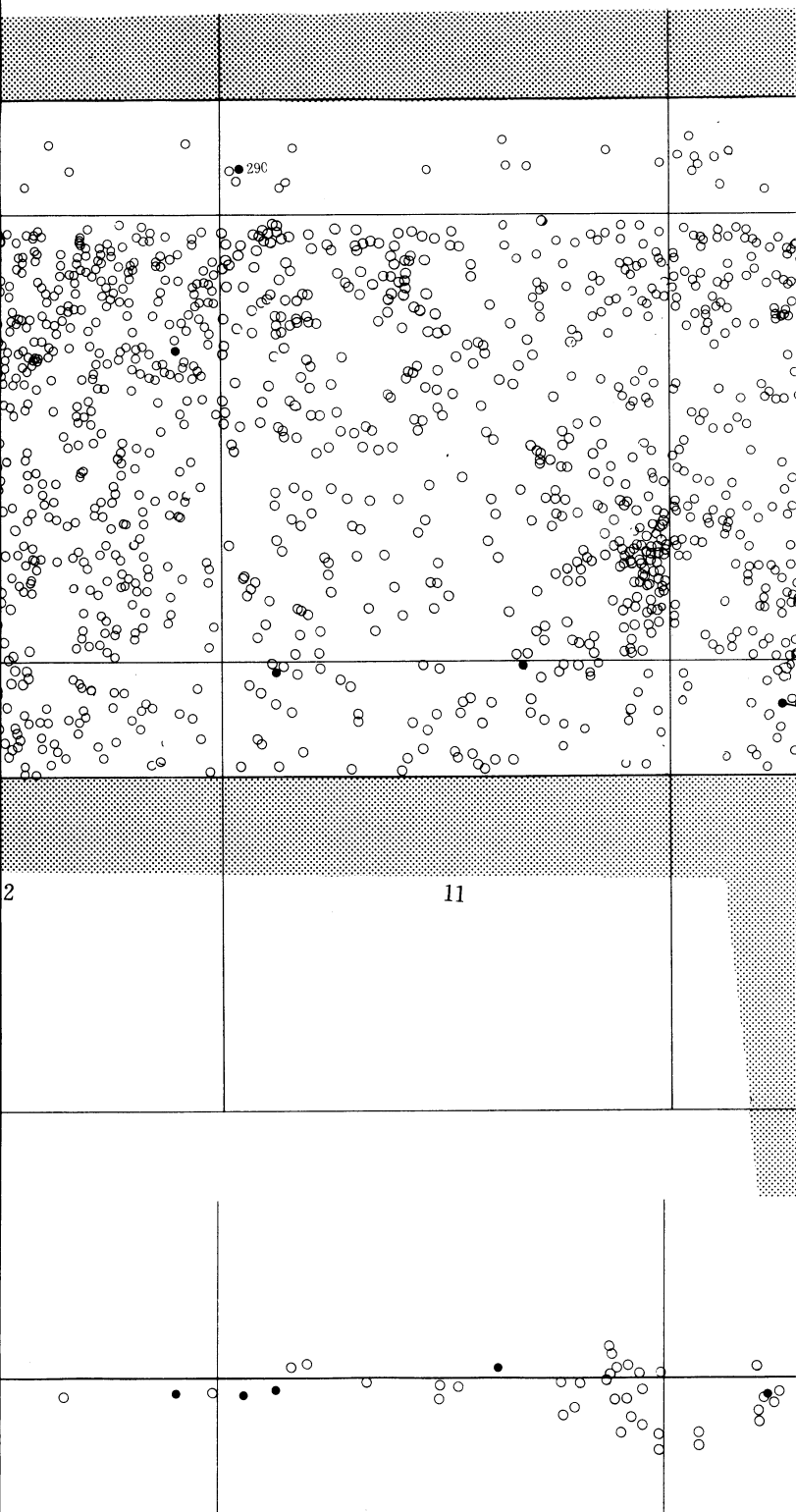
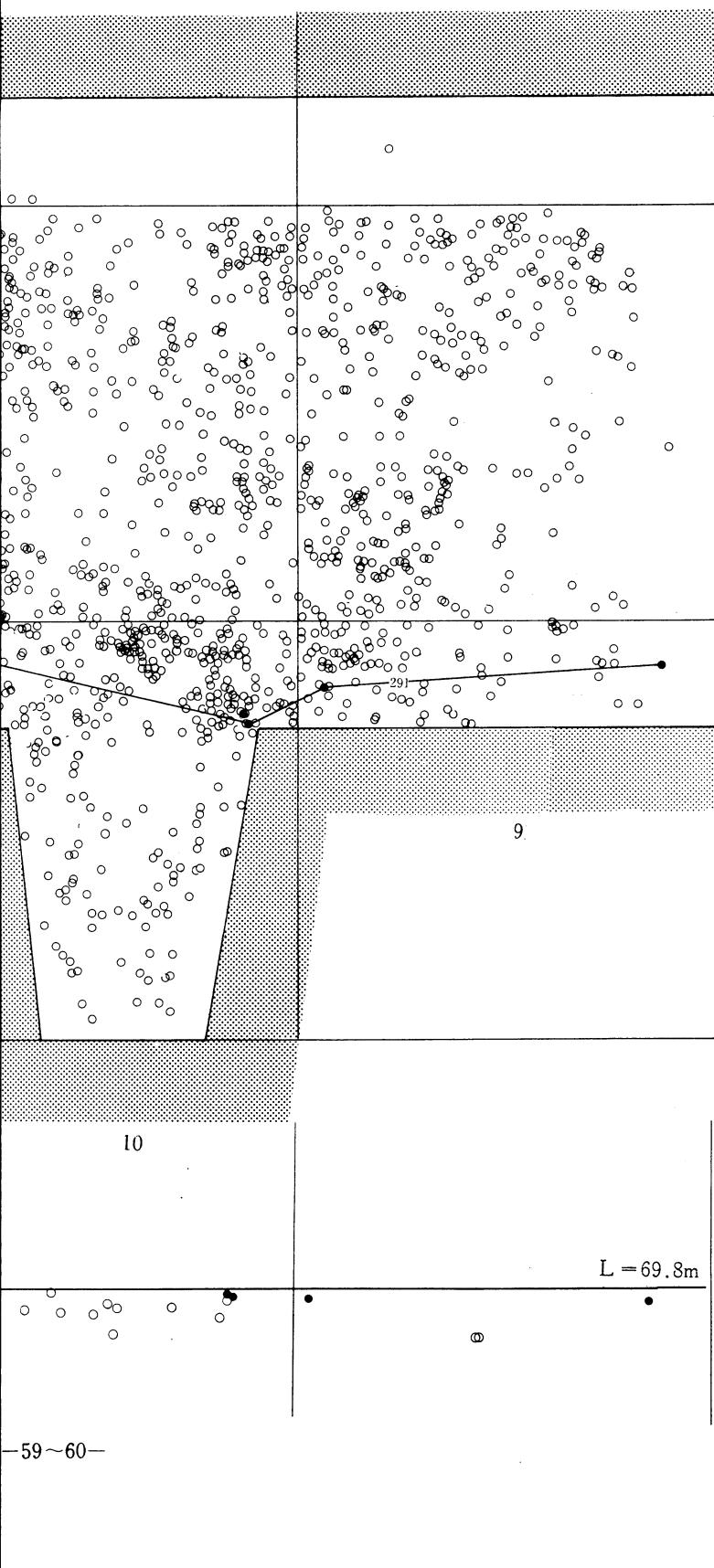


図 V類土器の分布と他類土器との比較



肥厚させた粘土帯を貼付して、さらにすぼまった形を呈するものである。

266・268～270は、同類の紋校構成がみられるものである。

266は、口縁上面の肥厚部分の口唇部に刻目を施し、肥厚部分には横位の凹線文を5条程度巡らせ紋様とする。肥厚部分の下端にも刻目が施される。肥厚部分より下位の部分には、斜位の凹線文が連続して施されている。口径は約4cmと小さい。

269は、口縁上面の肥厚部分が剥落しているもので、肥厚部分は輪積み状に積み足した状態が良く分かる。肥厚部分下の口縁部の紋様は、二条の粘土帯を縦位に貼付して、粘土帯の上には刻目を施す。粘土帯の側面には、両側に刺突文を施した凹線文帯を鋸歯状に構成して施文する。270は細片ではあるが、同様な紋様構成がみられる。

267は、頸部から口縁部を残す比較的大きな破片である。胴部から頸部では内湾し、頸部で屈曲して、直上して口縁部へいたる。口縁部上面では、粘土帯を輪積み状に積み足して、さらに狭まった肥厚口縁をつくる。口径は、9.5cmを測る。肥厚口縁の口唇部は丸くおさめ、上端に刻目を施す。肥厚口縁部には四条程度の凹線文を巡らす。肥厚口縁下には、結節縄文が施文される。縄文はRLで、結節はLで結ぶ。内面はナデ整形の丁寧な仕上げで、焼成は良好で精緻である。271と272は、肥厚口縁を若干側面に輪積み貼付するものである。肥厚部分とその下位には、縄文を施文する。

#### b：無文 (273～278)

273～278は、A B11区からA B13区の間に出土している。壺形の器形を呈し、無文のものである。器形状は、口縁の形に二通りがある。一つは有文と同様で、口縁部は内傾し、口縁上端に肥厚させた粘土帯を貼付して、さらに細まった形を呈するものである。他は、口縁部を内傾して丸く納めるだけで、粘土帯は貼付しないものである。

273～278は、有文同様肥厚口縁をつくるタイプである。肥厚口縁の貼付の仕方にも二通りがみられる。273は、口縁上端に輪積み状に積み足す手法である。274～278は口縁部側面に粘土帯を貼付して肥厚させるタイプである。278は、直接接合しない部分もあるが、同一個体と考えられるもので復元を試みたものである。器高約40cm、口径8cm、胴径約28cm、底径約15cmを測る。底部は幅広く、器高の3分の1の高さで最大となり約28cmを測る。そこから口縁部には大きく内傾し、口縁部は径約8cmと小さくなる。口縁外側には粘土帯を貼付し、肥厚口縁をつくる。口縁部周辺は、丁寧なナデ整形が行なわれる。器面全体は、ナデ整形が施されるが手捏ね状の凹凸が多い。

276・277は、口縁部に粘土帯を貼付しないものである。口縁部は内傾し、そのまま細まって丸くおさめる。口径は5cm～6cm程度を測り、器壁厚は6mm程度である。

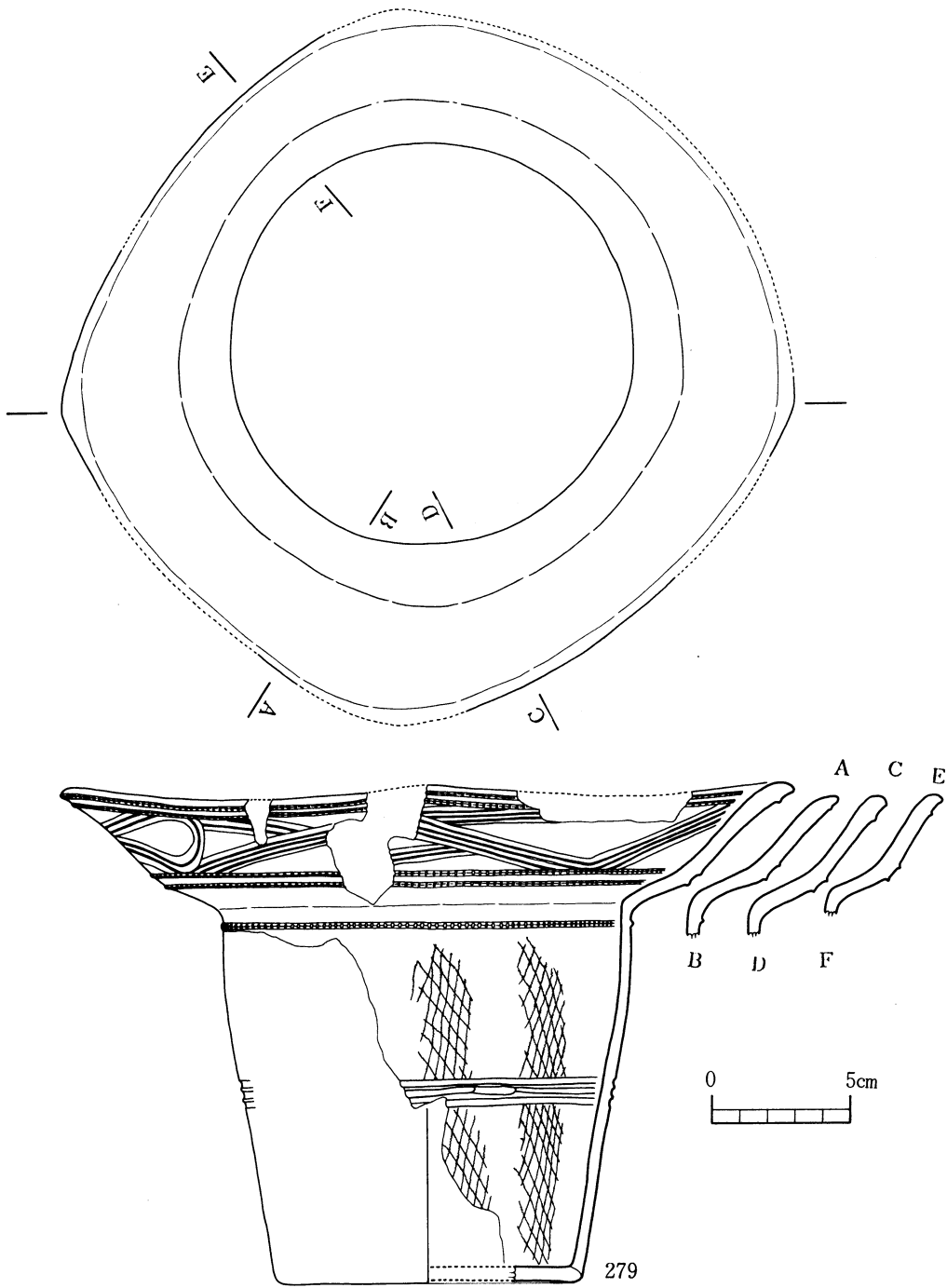
#### 6. V類土器 (第42図—279～290)

B-14区を中心に出土したもので、完形に復元されるものである。V類の主体を占める279～

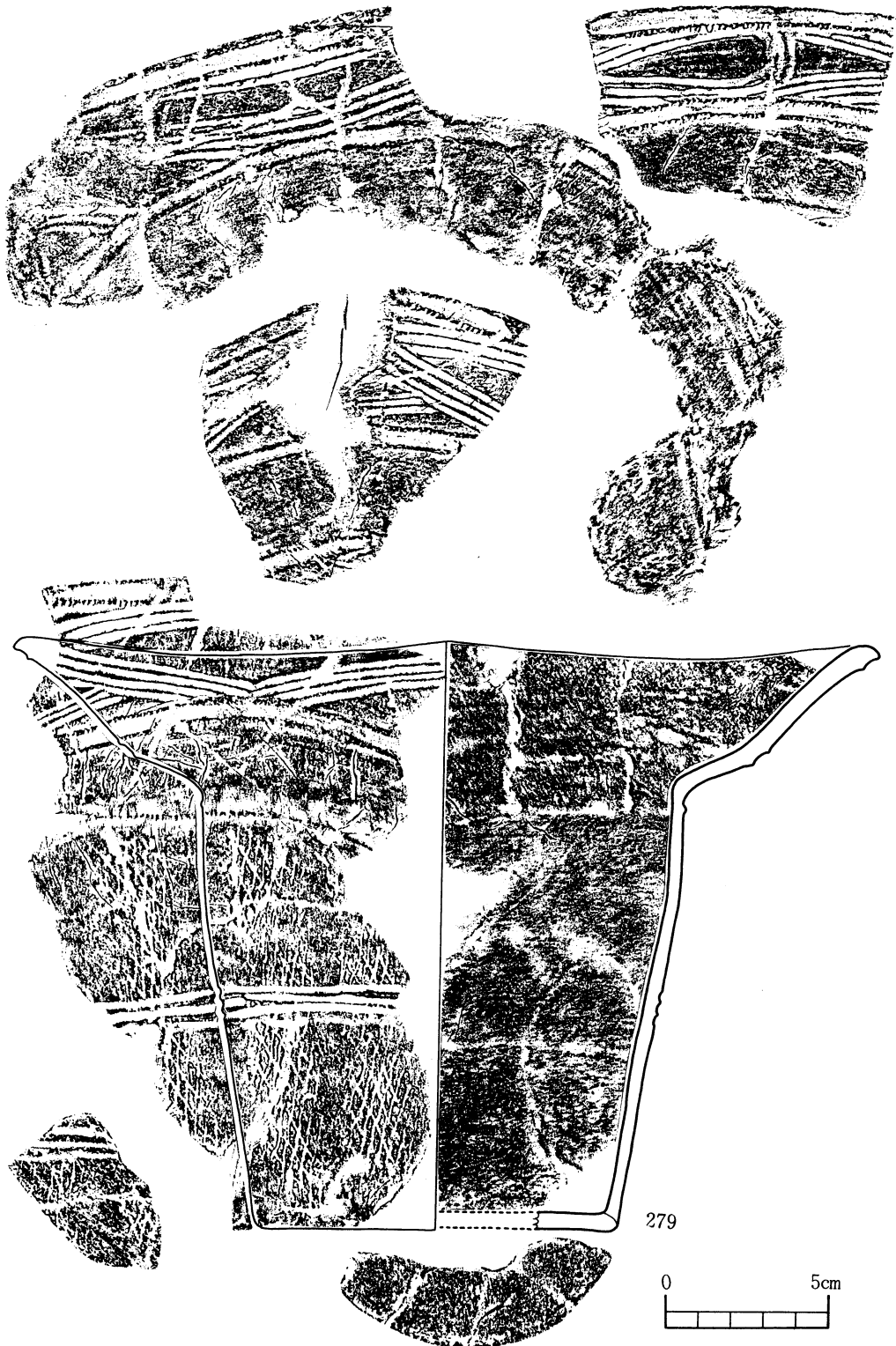
289は、一個体をなす破片である。290の一片だけは形態が異なり、別個体の破片である。口縁部は頸部から大きく外反し、二重口縁状に屈曲して波状口縁を呈する。波状口縁は四隅が山形に高くなり、上位からの平面形は方形を呈する。波状口縁の頂部での口径は、27cmを測る。頸部の直径は、約15cmを測る。胴部は底部からほぼ垂直に立ち上がり、円筒形を呈する。底部は直径11cmを測り、平底を呈する。底部の底面の厚さは5mm程度の薄い仕上げであるが、均整な仕上げと堅緻な焼きがみられる。胴部の器壁は、4mm～5mm程度と非常に薄い。口縁部の紋様は微隆突帯文と凹線文で飾る。口唇部外面直下と口縁下部の屈曲部には二条の、頸部には一条の微隆起突帯文を巡らせる。そして、二条の微隆起突帯文間には、四本を単位とした凹線文帯で幾何学文を描く。胴部は、格子の撚糸文帯を縦位に施文する。撚糸文は、R撚りの細い縄文を左から右に巻き、さらにそのうえを右から左に巻き返したものである。そして、胴部の中央部には三本の凹線文を撚糸文体の上から巡らせる。口縁部の紋様と併せ、華麗で特徴的な構図をつくる紋様帯である。

#### 7. VI類土器 (第45図-291)

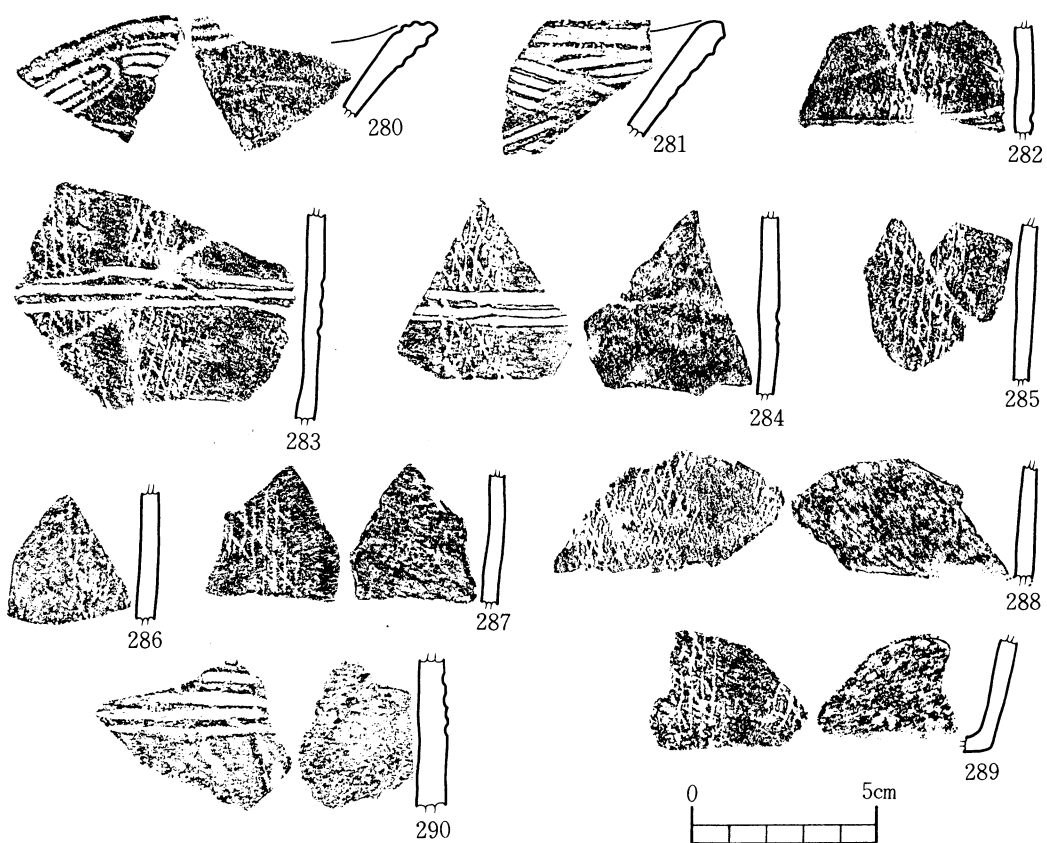
細片ではあるが、口縁部から胴部まで復元できる破片である。復元口径は、約26cmを測る。口縁部は大きく外反し、胴部は若干膨らみをもった円筒形を呈する。口縁部は、若干内湾気味に外反する。口唇部は僅かに斜めに尖り、この部分に刻目を施す。紋様は、頸部から口縁部外面は貝殻刺突連続文を横位に施し、胴部は条線文帯で飾る。条線文帯は、横位に施文されるが、一部屈曲する部分もみられ幾何学模様を描くことも考えられる。



第42図 V類土器実測図(1)



第43図 V類土器実測図(2)



第44图 V類土器実測図(3)



第45图 VI類土器実測図

## (2) 石器

X層からは、打製石鏃(11点)、石匙(1点)、未詳品(2点)、磨製石斧(2点)、局部磨製石斧(9点)、扁平打製石斧(2点)、小型石斧(2点)、石片(3点)、磨石・敲石類(9点)、凹石(2点)、石皿(5点)、軽石製品(1点)、棒状敲石(40点)の総数89点の石器が出土している。以下、石器の製作と形態について記述する。

### (a) 打製石鏃 (第47図-292~302)

製作は、298と301以外はすべて、二次加工が表裏全面におよんでいる。298は、表裏に剥片素材の主要剥離面を大きく残し、その剥離方向は同方向である。厚さも薄く、二次加工も縁辺部にとどまるのみである。先端が平たく未製品の可能性もある。301は、節理面を大きく残す。

形態のうち、全体的な大きさから見れば、297・299のような小形のものから、302のような大形のものまで変異がある。威力を考えて使い分けがなされていたのであろうか。柄との装着部には、すべてえぐりがあり、293・294・296のように全長に対しえぐりの深いものから、300・301・302のようにえぐりの浅いものまで変異がある。301・302のように大形のもの、えぐりが浅い。

石材は、292、293、298~300が黒耀石で、294~297、301、302がホルンフェルスである。

### (b) 石匙 (第48図-303)

表面に原面を残す横長剥片を素材とし、二次加工は縁辺にとどまる。つまみ部分もつくり出された縦長形の形状をもつ。石材は、粗粒砂岩を使用している。

### (c) 未詳品 (第48図-304・305)

304は、表面に原面を残す剥片であり、二次加工も見られる。つまみ部分のつくり出された横長形の石匙とも思われるが、判然としない。

305は、二次加工が表裏面に入念に施されている。石鏃・石槍の類とも思われるが、出土完形品の中に同大同形の見当たらない。

### (d) 磨製石斧 (第49~50図-306・307)

306は、全形が棒状で細長く、刃部は円刃となる。また、刃先の方から見ると刃部は、湾曲している。表面側では、上位に突出部が2ヶ所作り出され、裏面は平坦に仕上げられており、柄との装着に適した形状となっている。全面に整形の際の敲打の痕跡を見せるが、一応、器面は滑らかになっている。刃部付近は入念な研磨がなされ、非常に滑らかになっている。石材は、ホルンフェルスである。

307は、全形が棒状をなし、刃部に近くなるにつれて、幅狭となっている。片刃をなす刃部

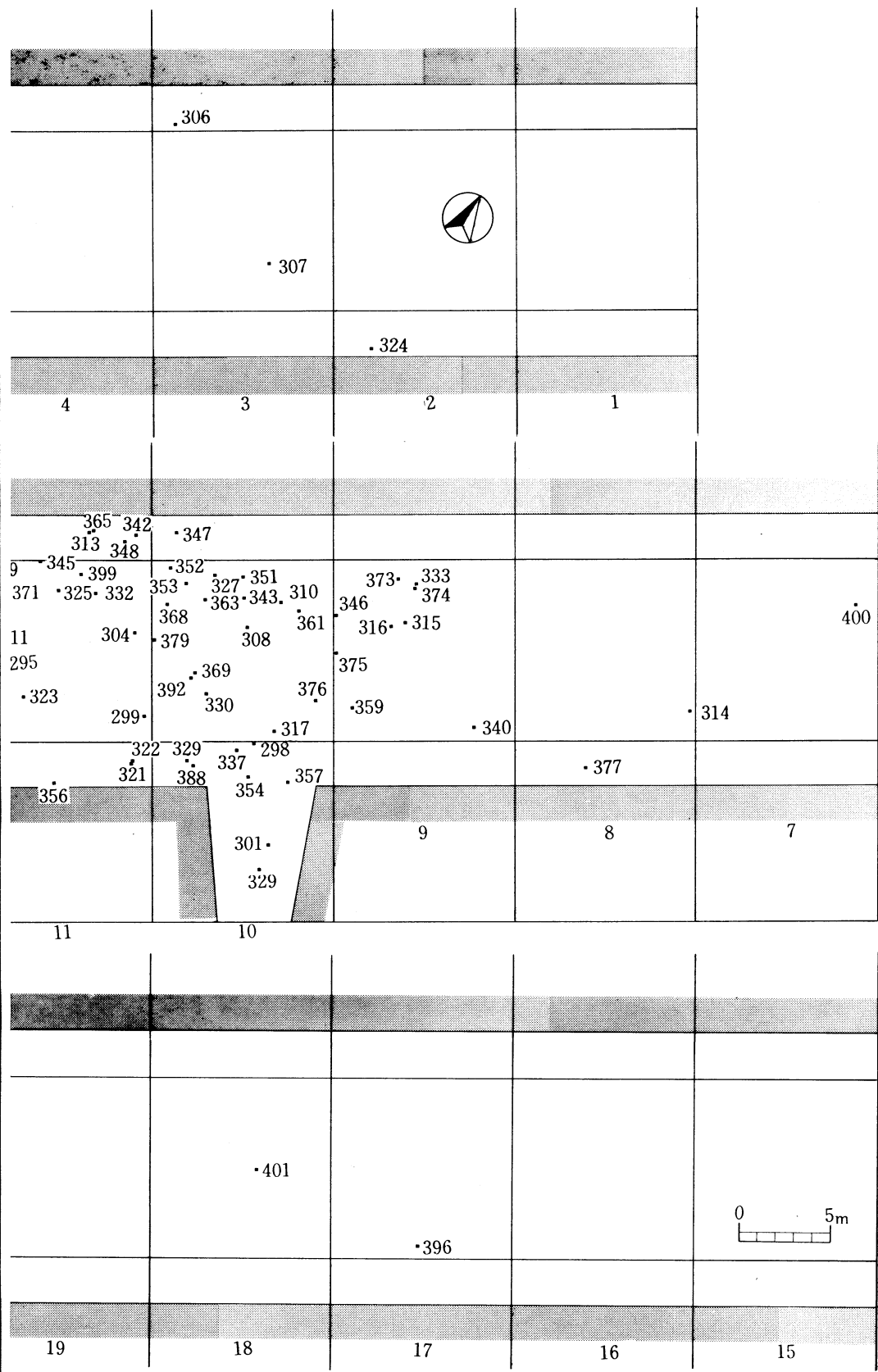


C		
B	334	358
A	6	5

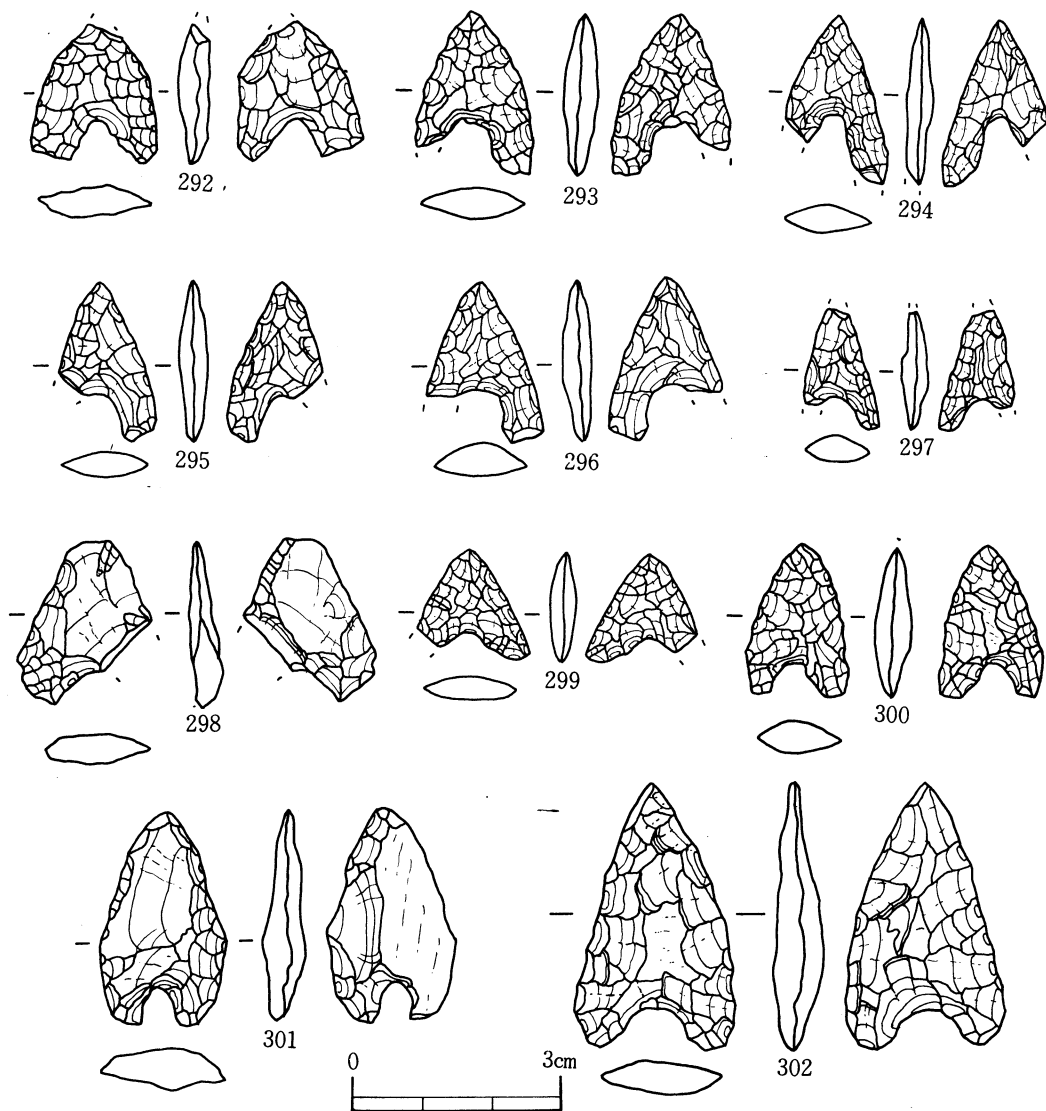
C			
B	302	303	344, 297, 394, 391, 300, 378, 309, 293, 292, 318
A	364, 339		320, 296, 370, 326, 366, 362, 336, 381

14                      13                      12

C			
B	398, 397, 392	393, 390	395
A	22	21	20



第46图 X類石器出土分布图



第47図 石器実測図(1)

の一面のみに縦位の線状痕も見られる。使用によるのであろうか。ただし、加工痕との識別は難しい。器面は、表裏共に滑らかになり、敲打痕は目立たない。側片および後端に敲打痕を残すものの、側片は摩耗しやや滑らかになっている。刃部付近は、入念に研磨され刃部が作り出されているが、裏面には剝離痕もとどめている。滑らかとなった器面には、線状痕もわずかに見られる。研磨加工の痕跡であろう。石材はホルンフェルスである。

(e) 局部磨製石斧

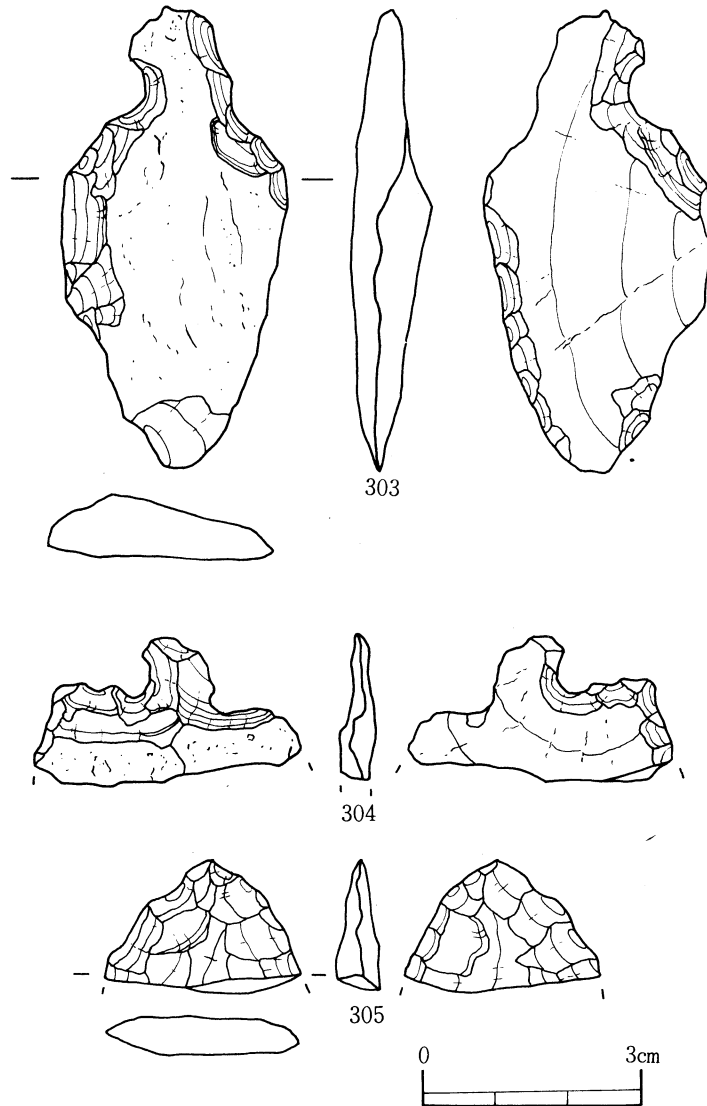
(第50～52図)

—308～316)

これらは、器面が剥離面と滑らかな面とからなる石斧形状をなすもので、石質は、硬質の粘板岩とホルンフェルスである。

316は、滑らかな面を見出せないが、石質・形状から、ここに加えた。全形は、308～311が細長く、312～316は幅広となっており、どれも厚みを有する。308は、円刃をなす刃部に入念な研磨がなされている。309は、スクリーン・トーン部分が非常に滑らかになり、一部に敲打痕も残す。

310は、滑らかな面に加工痕と思われる線状痕をわずかに見せる。312は、わずかに円みをもつ幅広の刃部に入念な研磨がなされている。313、314は、滑らかで平坦な面を側面から見ると石斧の刃部のような傾斜をなしている。石材は、308、310～312、314、315が粘板岩で、309、313、316はホルンフェルスである。

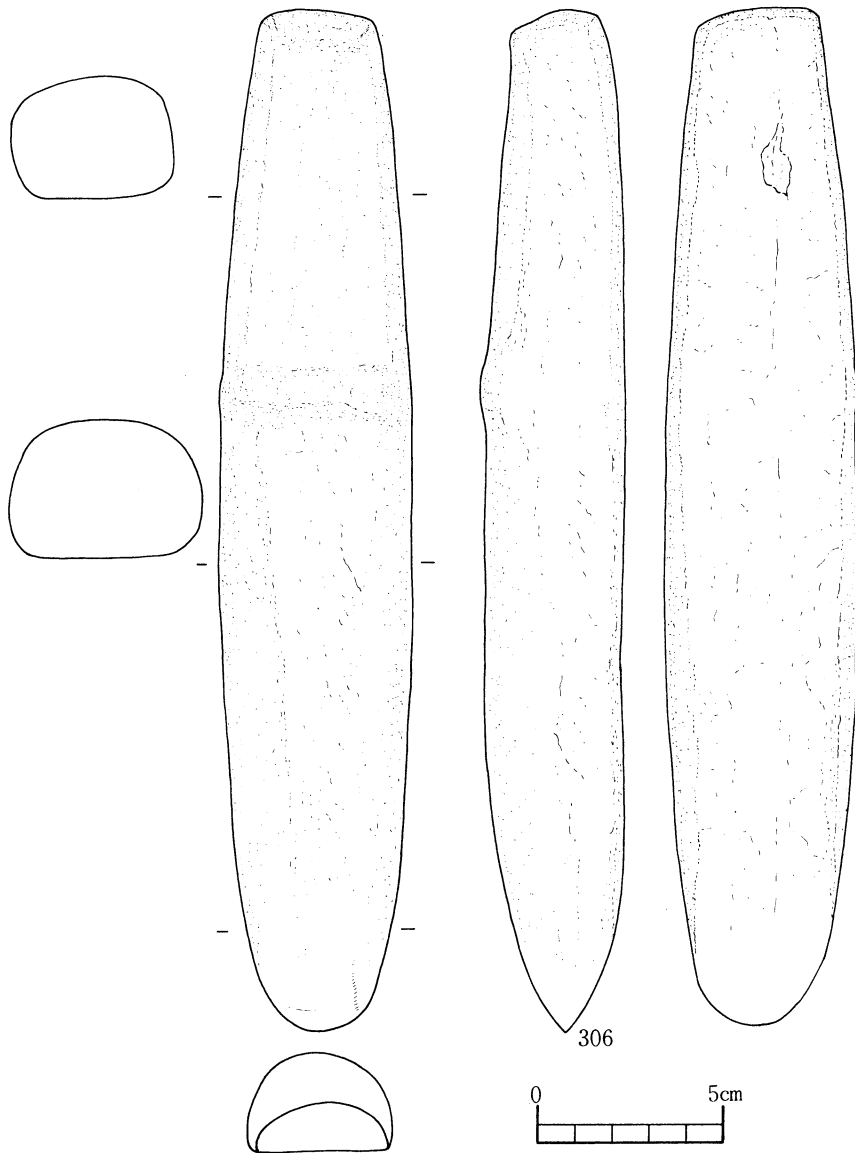


第48図 石器実測図(2)

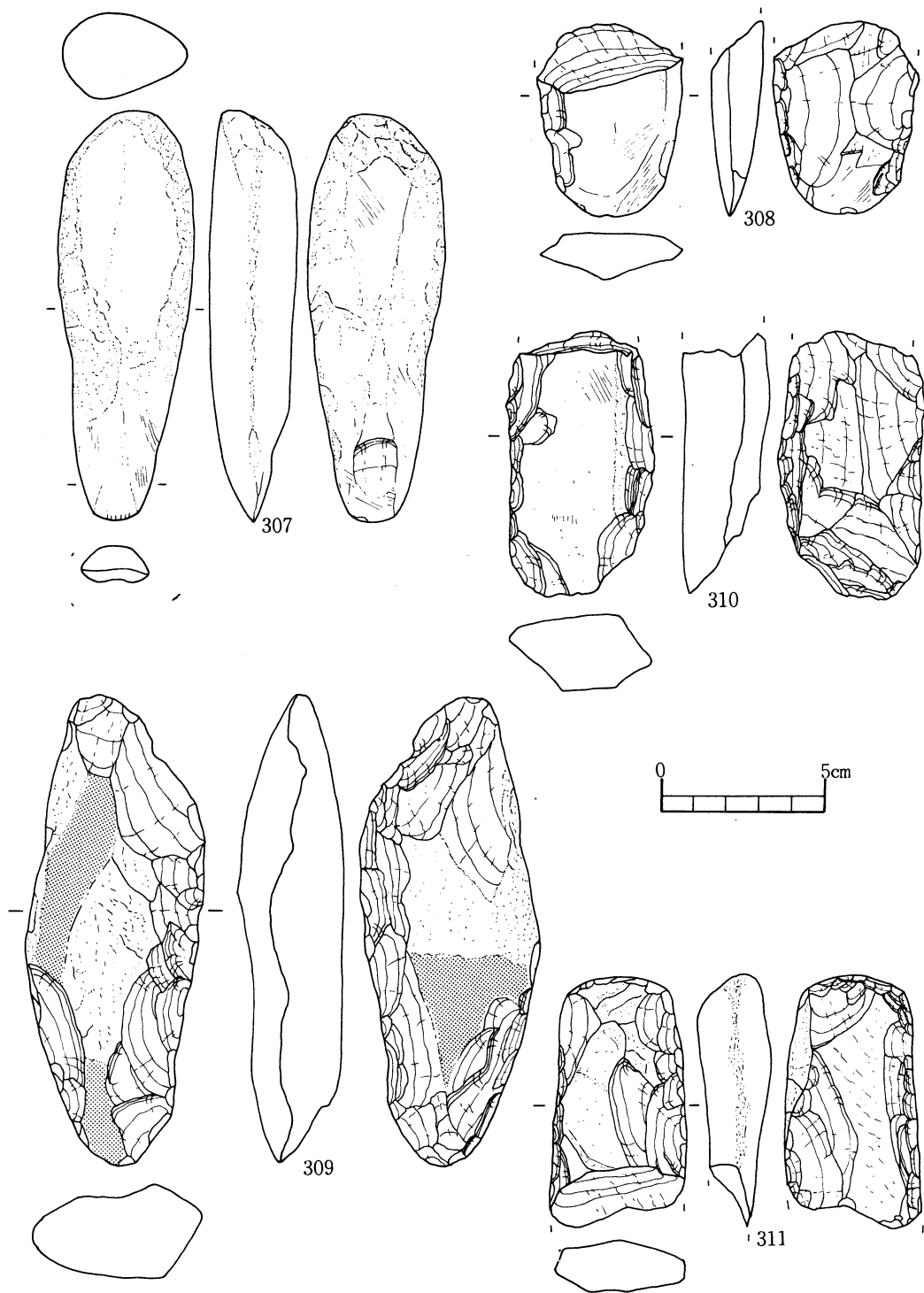
石材は、308、310～312、314、315が粘板岩で、309、313、316はホルンフェルスである。

(f) 扁平打製石斧 (第52図—317・318)

器面が、剥離面からなる石斧形状をなすものである。石斧の未製品とも考えられるが、形状は扁平で、しかも石質が軟質であることから、扁平打製石斧に分類した。石材は、粘板岩である。



第49图 石器实测图(3)

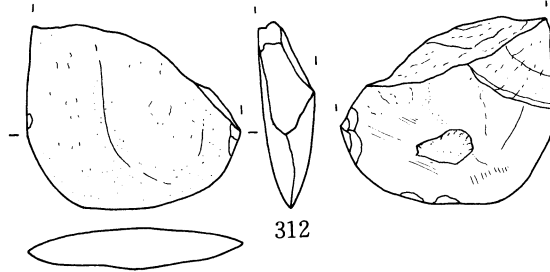


第50图 石器实测图(4)

(g) 小型扁平石斧

(第52図-319・320)

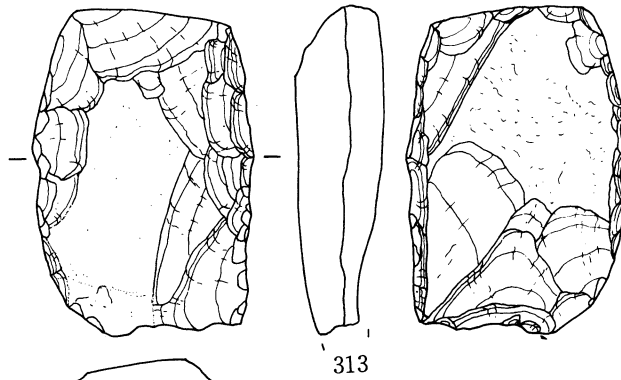
319は、入念な研磨がなされている。破損が著しいものの、刃部をわずかに残す。石材は、頁岩である。320は、剥離、摩耗が著しい。石材は、粘板岩である。



(h) 石片

(第52図-321~323)

おそらく破損した磨製石器から生じた石片であろう。



(i) 磨石・敲石

(第53~54図-324~333)

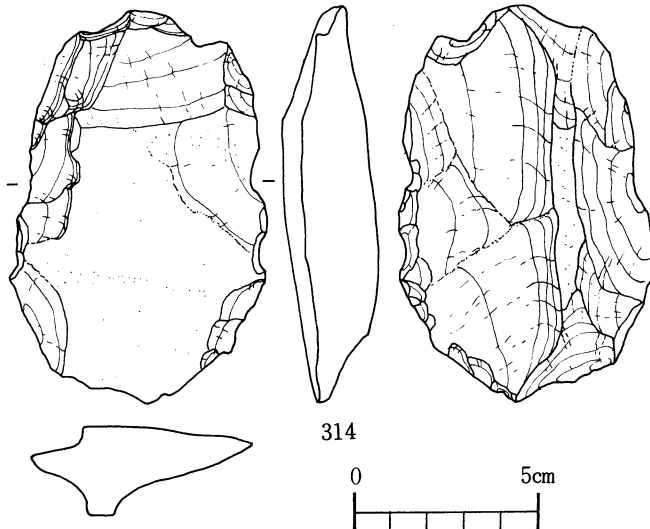
器面が滑らかな礫素材である。324~330は、側辺において、器面が粗い平坦面をもっている。



(j) 凹石

(第54図-334・335)

敲打によるくぼみをもつ。334は一端にも敲打痕をもち、335は側辺の一部が滑らかな平坦面となっている。

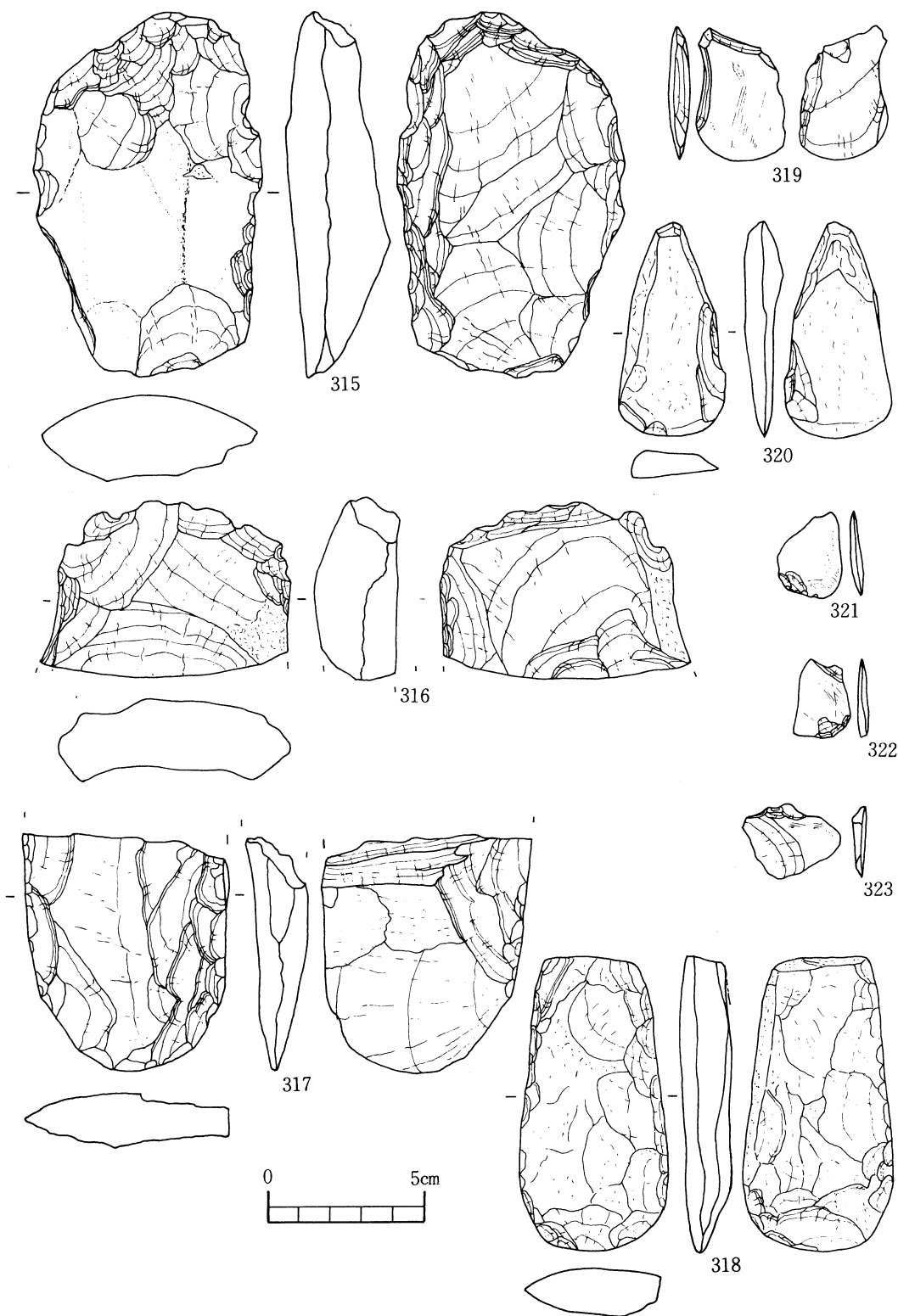


(k) 石皿

(第55図-336~340)

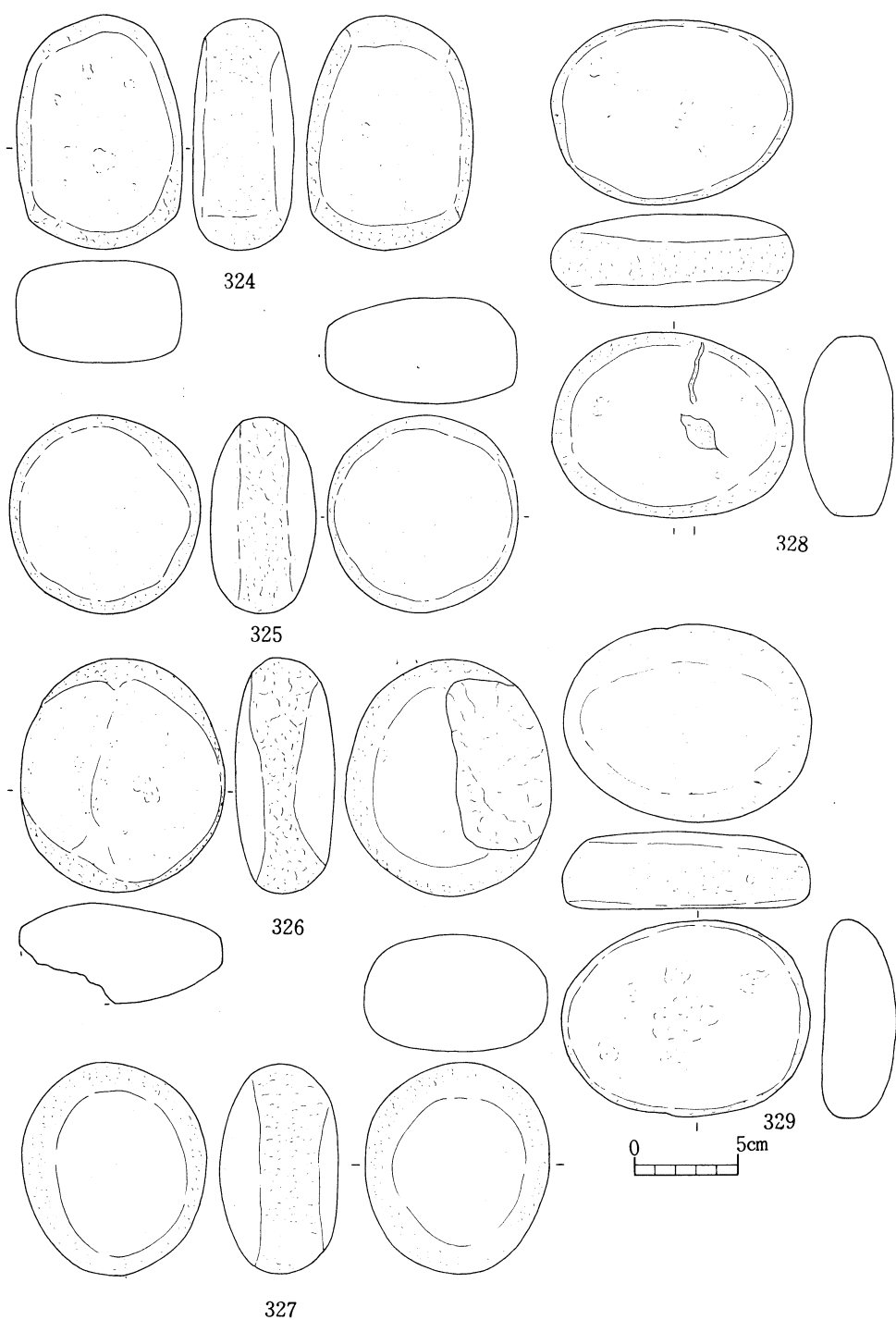
平坦面をもつ円礫素材による336、337と、扁平な角礫素材による338~340がある。スクリーン・トーン部分は、器面が非常に滑らかになっている。また、338は中央のくぼみが顕著である。

第51図 石器実測図(5)

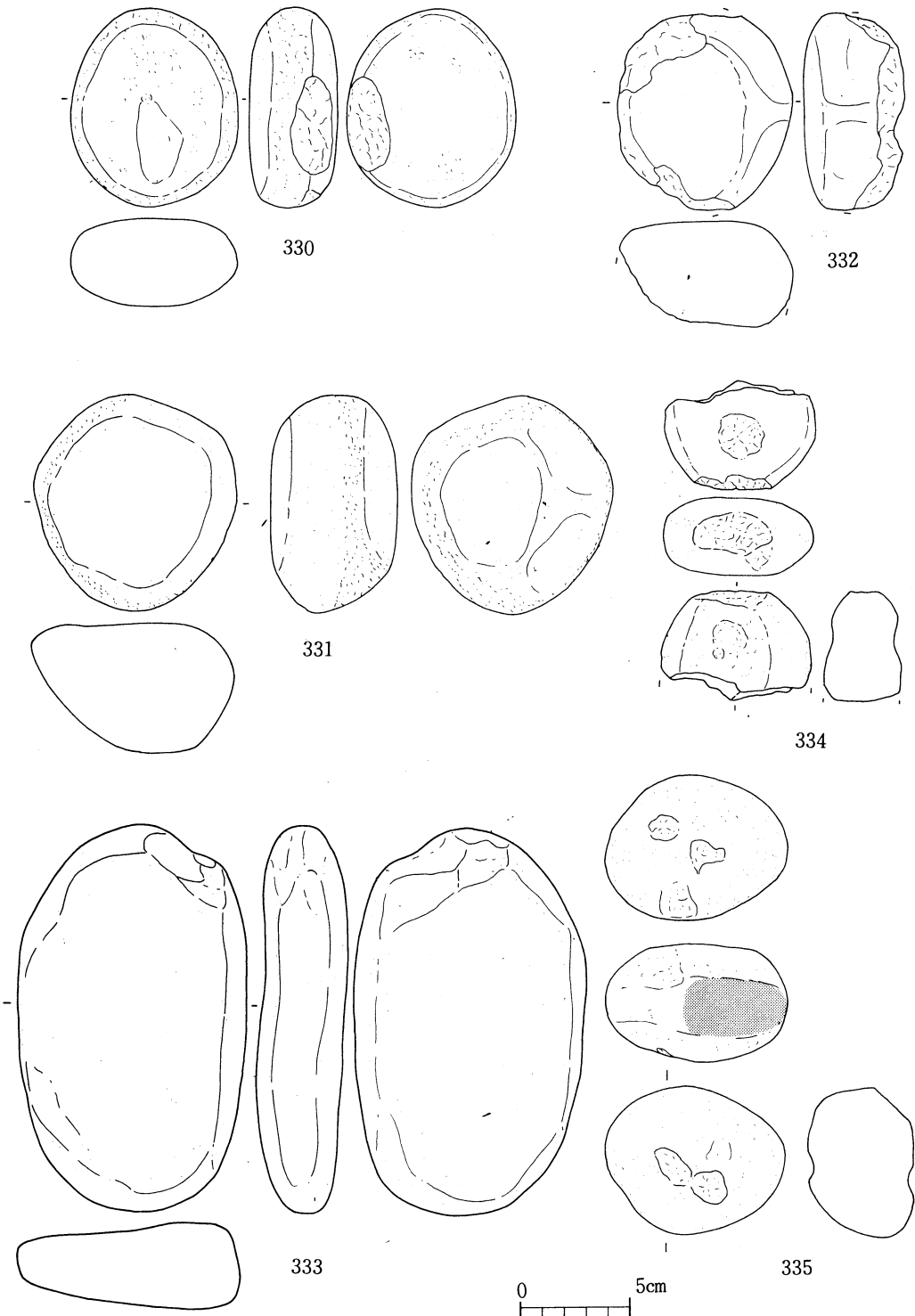


第52図 石器実測図(6)

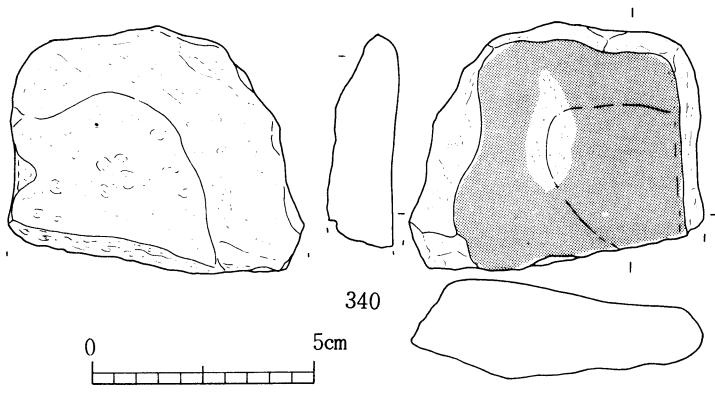
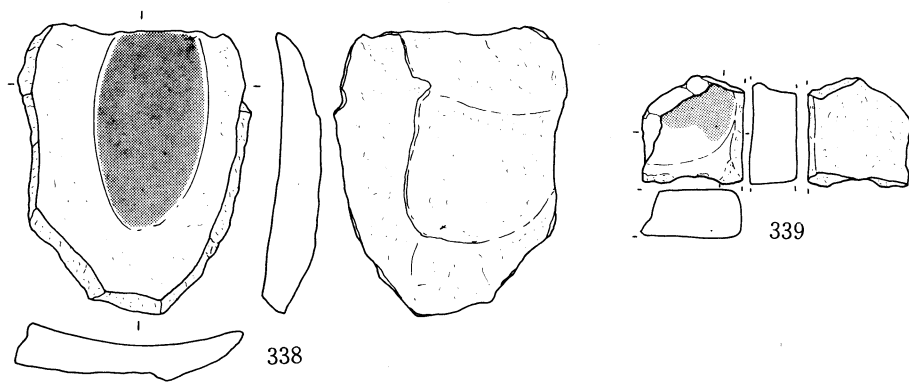
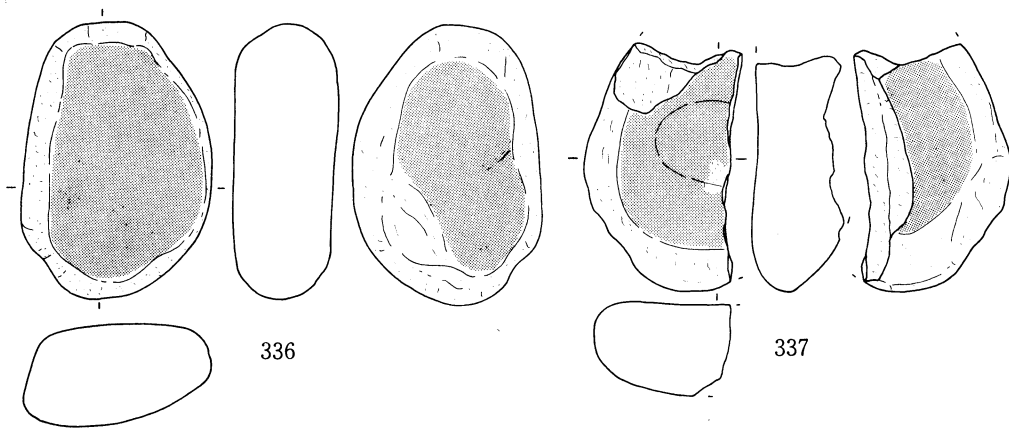




第53图 石器实测图(7)



第54图 石器实测图(8)

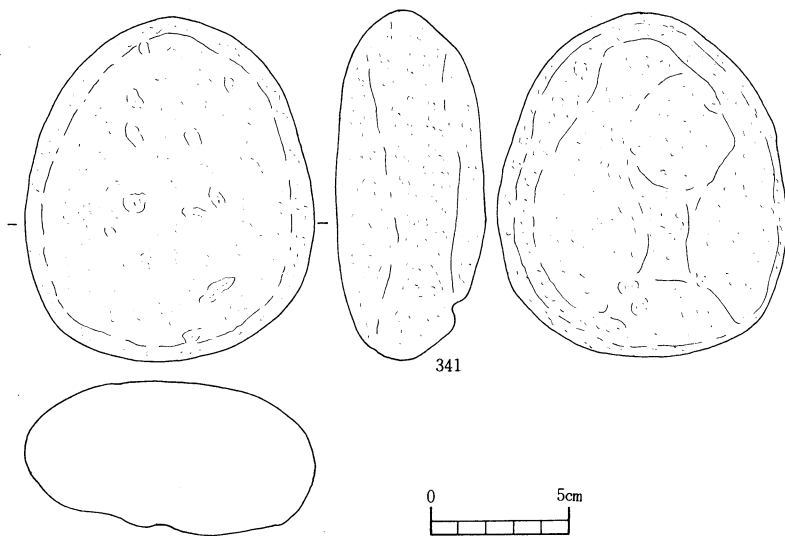


第55图 石器实测图(9)

る。

(I) 軽石製品 (第56図-341)

確かな加工の痕跡は見当たらないが、軽石製品の可能性をもつものとして一応取り上げたい。  
いびつな楕円形状を呈し、磨石・敲石類に似る。



第56図 石器実測図 (10)

(M) 棒状敲石 (第57図～第61図-342～381)

棒状の形態の敲石を一括して棒状敲石とした。全体で40点確認されたが、他の敲石の出土数と比較して著しくその数が多い。円形もしくは球形の敲石と比べて棒状敲石は、握り易さや着柄性の容易さ、さらには二次的な敲打器(例えばパンチ)としての利用が考えられる。このため、石器製作から植物加工等も含め、幅広い範囲の使用方が推測されるものである。なお、石材は354は砂岩であるが、他はすべてホルンフェルスである。

形態の分類は、使用痕の形状を中心に使用部位等でおこなった。

I類=敲打による「つぶれ」の使用痕を残すもの

a:長軸の一端に使用痕を有するもの

b:長軸の両端に使用痕を有するもの

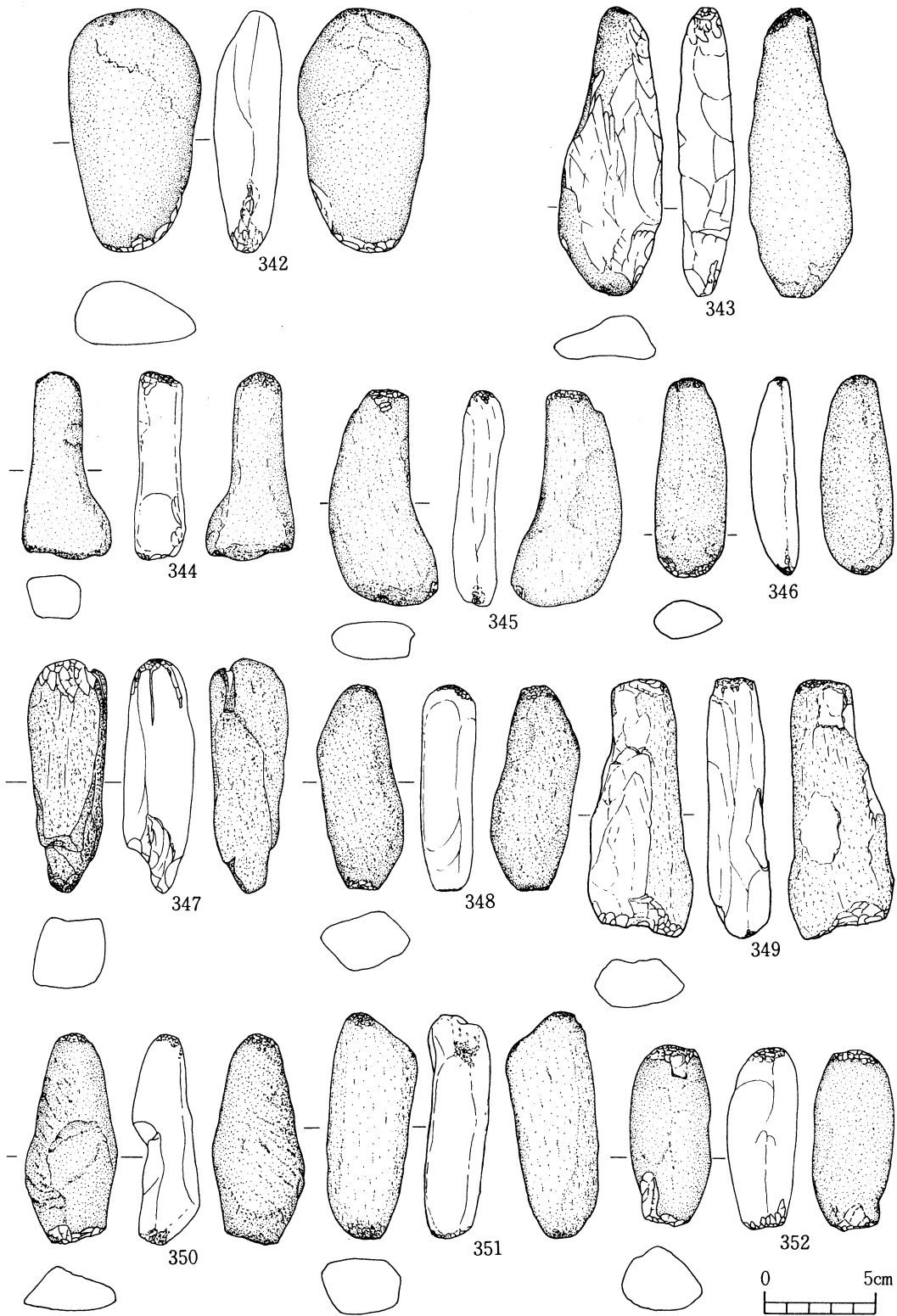
II類=剝離状の「われ」の使用痕を残すもの

a:長軸の一端に使用痕を有するもの

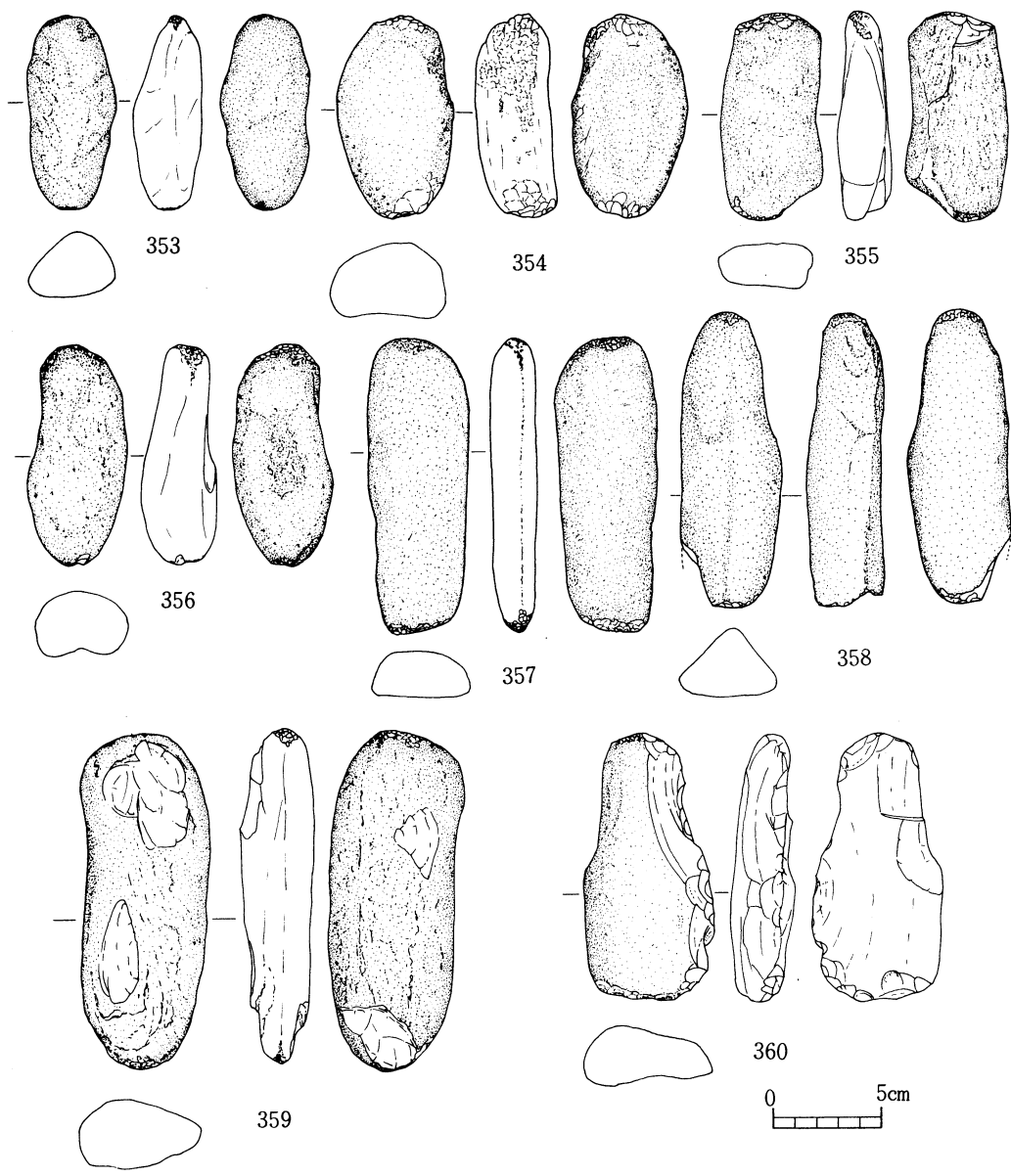
b:長軸の両端に使用痕を有するもの

III類=「つぶれ」「われ」の使用痕を一端にそれぞれ残すもの

IV類=その他



第57图 石器实测图 (11)



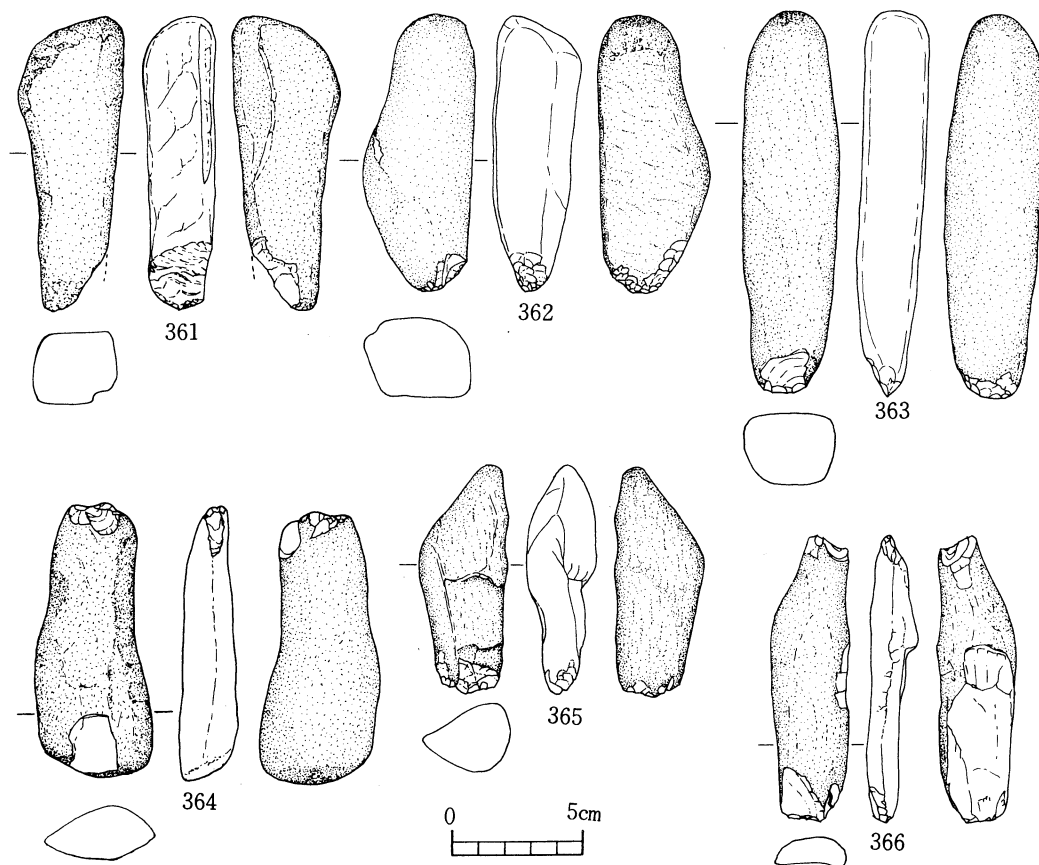
第58图 石器实测图 (12)

**I a類** (第57図-342~345)

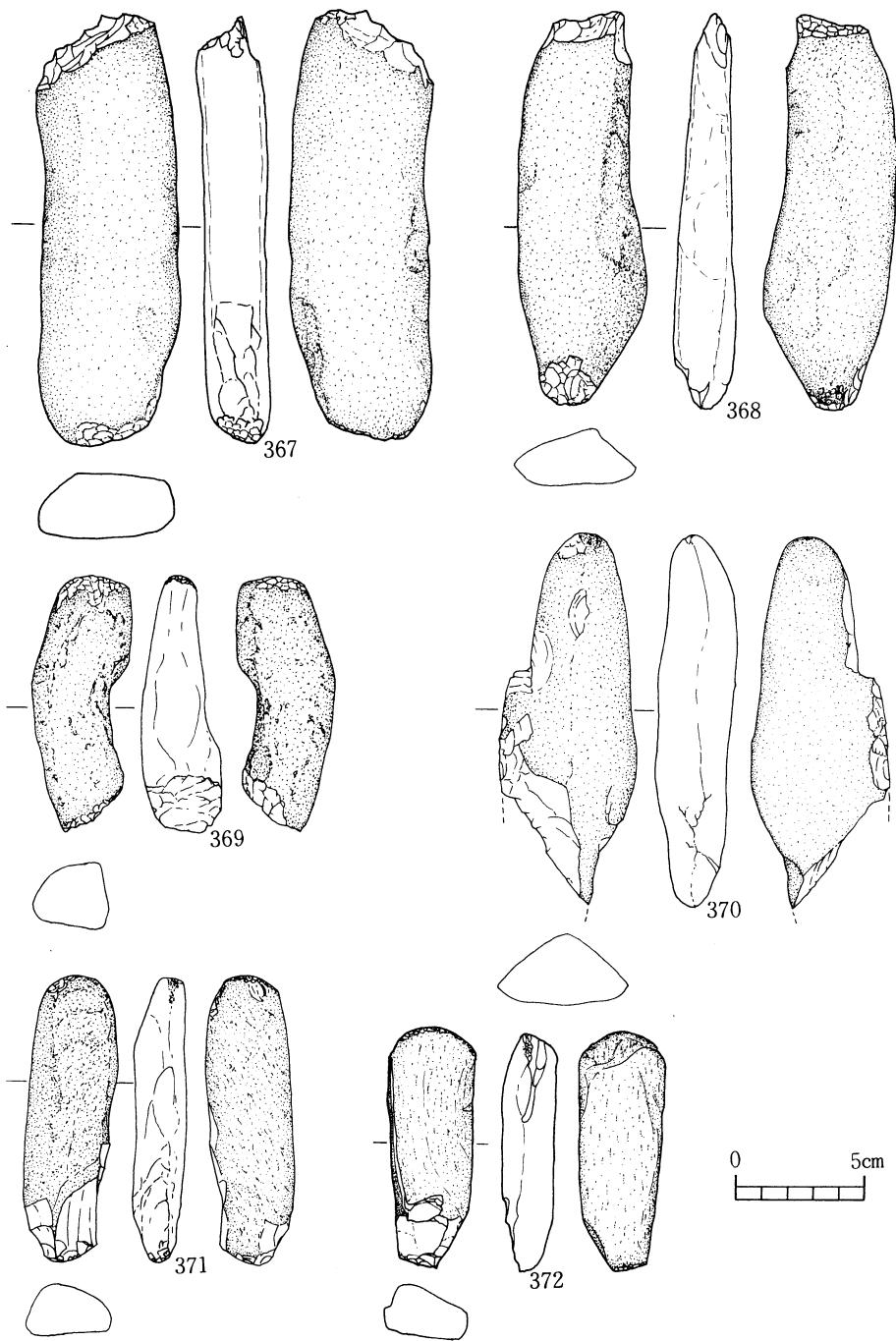
比較的扁平な自然礫を利用しており、長軸の尖った方に使用痕がみられる。342、344は、最も特徴的な激しい使用痕が認められる。343は、両端が尖る傾向にあり、表面に剝離がみられるが直接敲打によるものとは言い難い。

**I b類** (第57図・第58図-346~360)

全体の中で15点で37.5%を占め、最もその数が多い。348・352~354・356は、両端部にそれぞれ同等の敲打痕を有するものである。354は、ここで取り上げた棒状敲打石の中では最も円形に形をなし、側面の一部にも敲打痕を認め、唯一砂岩製である。352は一部剝離状の「われ」もみられるが、敲打痕が中心であり、度重なる敲打の結果、石材の亀裂によるものもしくは過度の衝撃を伴う敲打のためと考えられる。347・349・350・355~360は両端の使用の度合いが異なるものである。360は唯一剝片を利用した敲打石である。側面に整形剝離を有するが長軸両端には明らかに敲打痕をもつものである。346・351は、わずかに使用痕を残すものである。

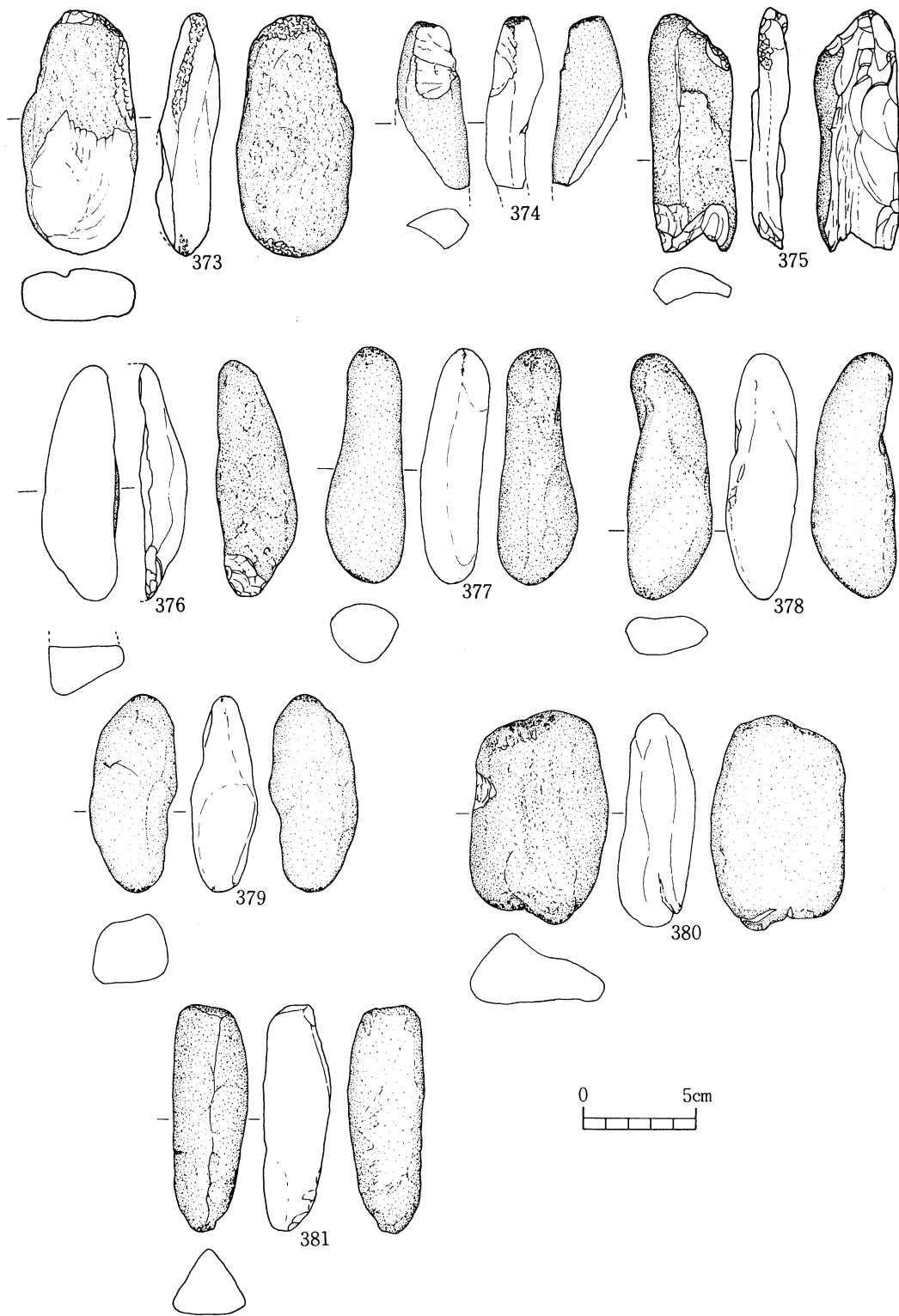


第59図 石器実測図 (13)



第60图 石器实测图 (14)





第61图 石器实测图 (15)

**Ⅱ a類** (第59図-361~365)

棒状の自然礫の尖部に「われ」状の剝離を有するものである。363は尖部に交互剝離状の使用痕がみられる。364の「われ」は、石質劣化による石材の敲打によって生じた可能性もある。

**Ⅱ b類** (第59図-366)

扁平な自然礫を用い、両端に剝離状の「われ」を有する。連続的な弱い敲打によるものではなく、強い衝撃が窺われる。

**Ⅲ類** (第60図-367~372)

一端に「われ」面を残し、一端に敲打痕を有するものである。367は大型の棒状敲石で、長さ17cm、重さ444gを測り最大である。使用痕も顕著であり、強い衝撃による痕跡と考えられる。368は一見Ⅱ b類のようであるが敲打による石材の劣化のための剝離が観察される。

**Ⅳ a類** (第61図-373~376)

激しい衝撃等によって破損した同類の敲石の欠損品である。Ⅱ類・Ⅲ類に近い分類に属すると考えられるが、全体形が不明なためⅣ a類とする。

**Ⅳ b類** (第61図-377~381)

ここに取り上げた4点には、明確な使用痕は認められないが、同類の棒状敲石の可能性もあると考えられるため対象とした。

### 第3節 V層の調査

#### (1) V層の概要

V層は、A～C、6～8区に集中して出土遺物がみられた。特に、B6区の西側では、口縁部と底部を欠損してはいるが、完形に近い状態の胴部（387）が逆さで置かれたと考えられる状態で検出された。出土遺物は、VI層（アカホヤ火山灰の二次堆積層で縄文時代前～後期該当の層）の上面に位置するV層（茶褐色土層）から出土している。出土遺物は量的には少ないが、薄い包含層は形成されており、近辺にV層該当の遺跡の中心が存在する可能性が強い。なお、V層は、縄文時代晩期に該当する。

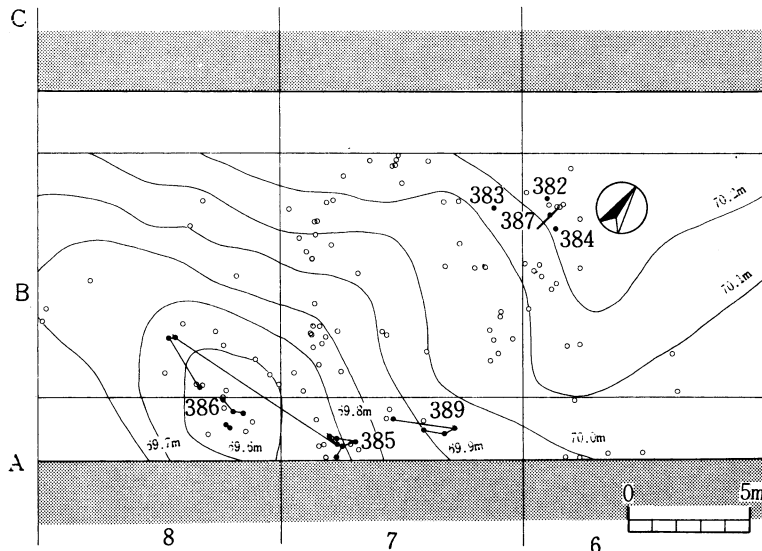
#### (2) 出土遺物

遺物は総数117点の出土がみられ、土器と石器に分かれる。

##### 1. 土器（第64図-382～389）

382～386は、口縁部片である。口縁部片は、深鉢と浅鉢の器形に分かれる。382・383は深鉢の口縁部片である。頸部で外反し、屈曲して口縁部をつくる。口唇部は薄くなり、丸くおさめる。器内外面は、丁寧なヘラ磨きの整形が施される。382は、口径19cmを測る。

384～386は、浅鉢の口縁部である。胴部は屈曲して稜をつくり、内湾して直上から大きく外反して口縁部にいたる。口縁部は若干肥厚してその部分に凹線文を巡らすタイプである。いずれも破片の復元口径であるが、384は口径40cm、385と386は口径45cmを測る大型のものである。器内外面は、丁寧なヘラ磨き整形が施される。387は、胴部から頸部付近で、原位置の状態で出土したものである。口縁部の方を下にした逆さの状態出土しているが、口縁端部と底



第62図 V層出土遺物分布図

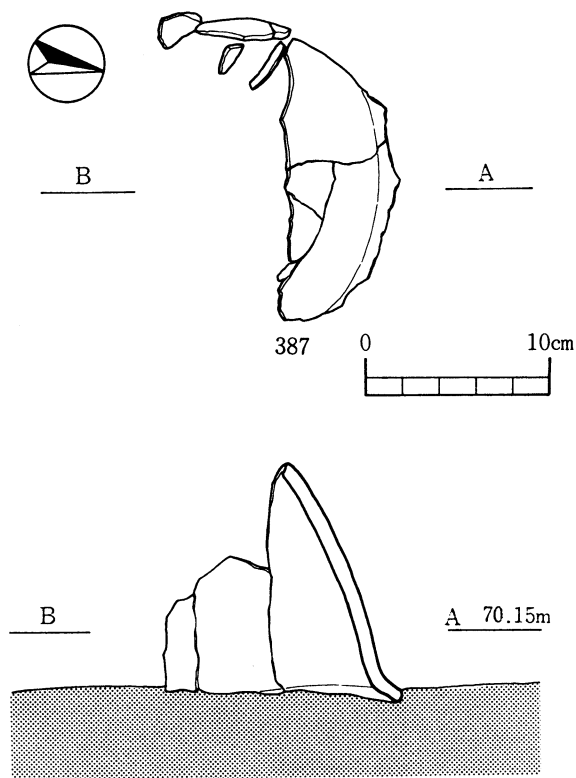
部は欠損している。胴部は胴張りで、頸部は縮まり屈曲する。胴部最大径は17cm、頸部の屈曲部は15.5cmを測る比較的小型のものである。

388と389は、胴部から底部破片である。388は底径は9cm、389は10cmを測る。388は、ほんの僅か上げ底状を呈する平底である。底部側端は垂直に仕上げ、その上から外反して胴部へ立ち上がる。389も同様であるが、より大きく外反する。いずれも、丁寧なヘラ磨き整形が施される。

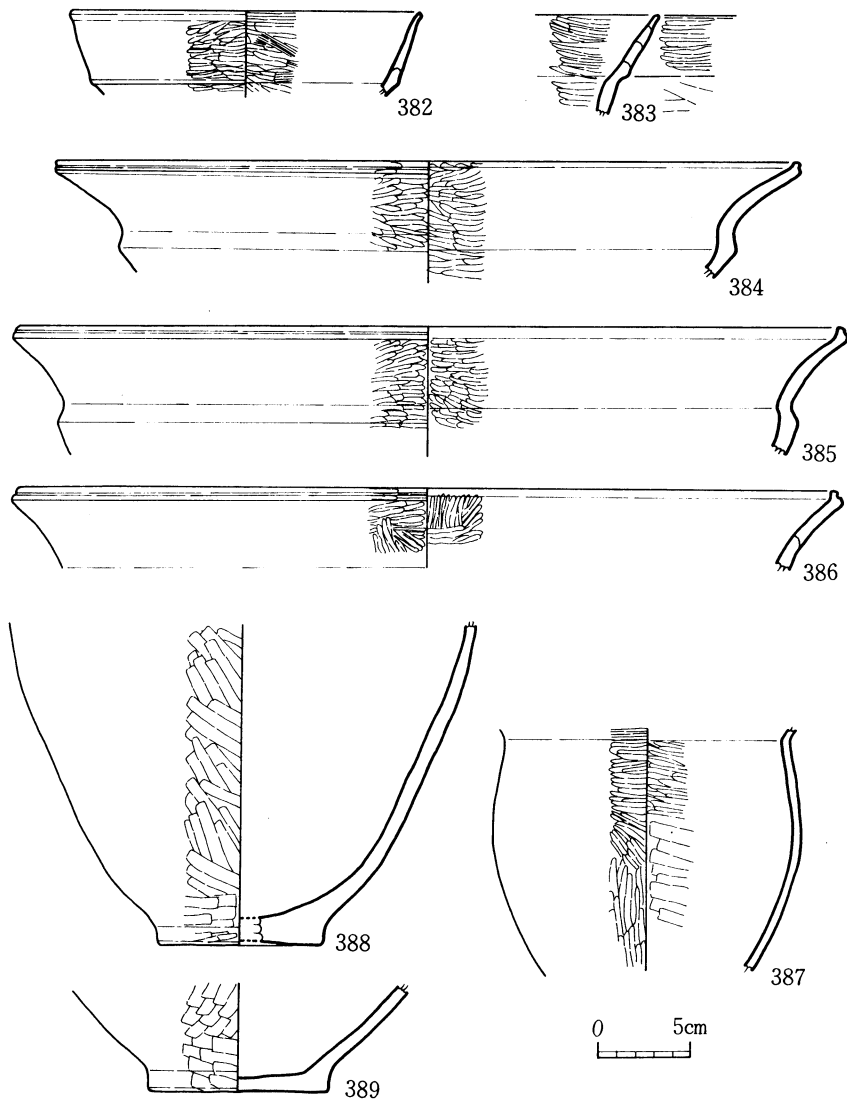
## 2. 石器 (第65図-390~401)

石器は、12点出土している。

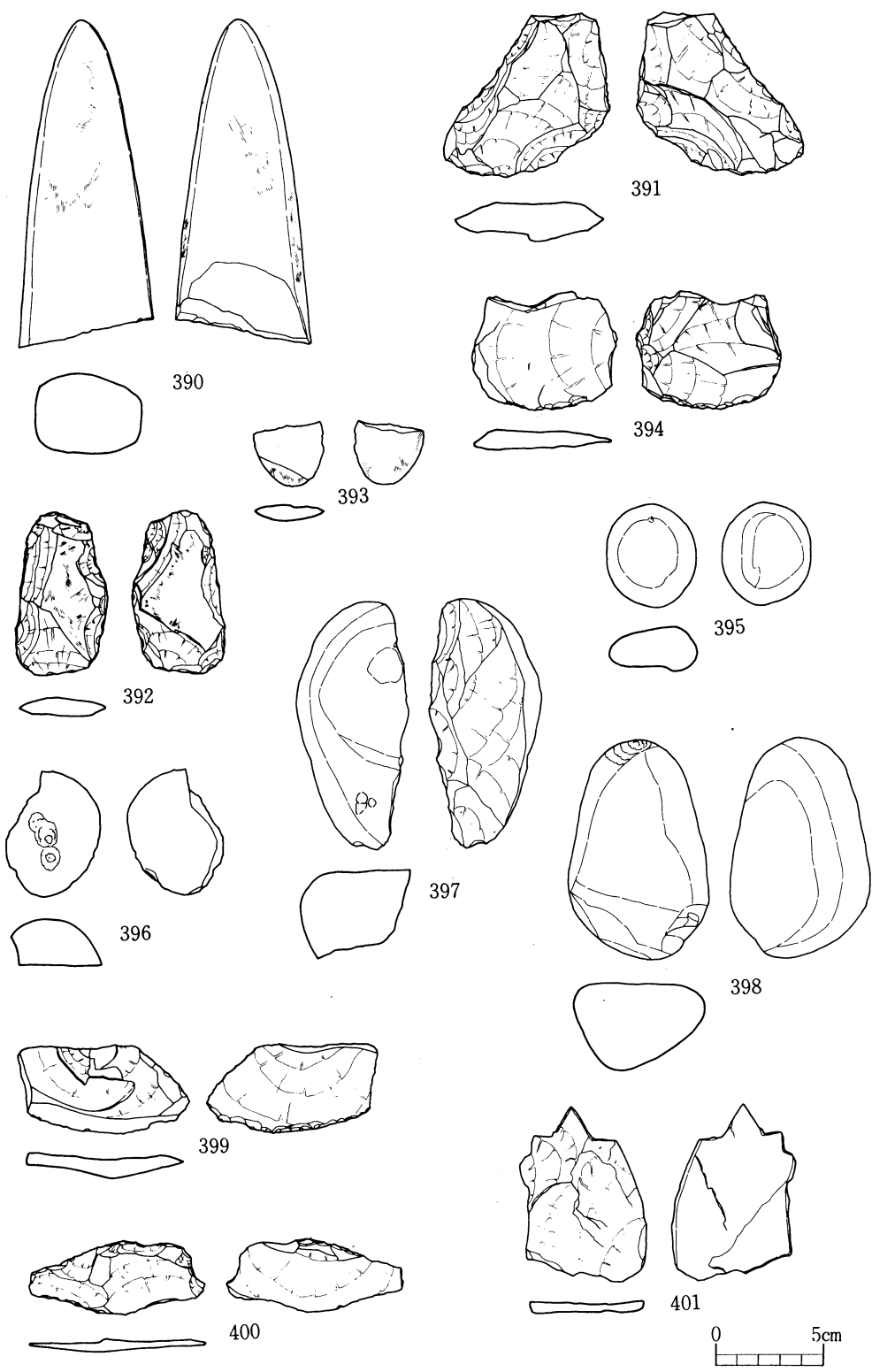
390は、刃部が折れた磨製石斧である。表面は丁寧に磨かれ、乳棒状の形態をもつ。391~394は打製石斧の一部と考えられるものである。丁寧な交互剥離がみられる。395~398は、磨石である。また、一部には敲打痕も確認され、敲石としても使用されている。395と396は小形の自然礫が使用され、397と398は扁平な比較的大形の自然礫が使用されている。391~401は、剥片である。



第63図 V層土器(387)出土状態



第64图 土器实测图



第65图 石器实测图

第1表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
1	I	69.66他	B-14 X	深鉢	口縁部	口径 17.8	長石・石英	ナデ	堅緻	茶褐色	器壁厚 0.9~1.2
2	〃	69.725他	〃	〃	〃	器壁厚 0.95~1.1	〃	〃	〃	黄茶褐色	
3	〃	69.715他	〃	〃	〃	〃 1.0~1.2	〃	〃	〃	茶褐色	
4	〃	69.73他	〃	〃	〃	〃 0.9	〃	〃	〃	〃	
5	〃	69.775	〃	〃	胴部	〃 0.9	〃	〃	〃	〃	
6	〃	69.77	〃	〃	底部 付近	〃 0.8~1.25	長石・石英	内-ナデ ケズリ	堅緻	茶褐色	
7	〃	69.74他	〃	〃	底部	底径 11.6	〃	〃	〃	〃	
8	〃	69.755	〃	〃	底部 付近	器壁厚 0.9~1.35	〃	〃	〃	〃	
9	II	69.74	B-13	〃	胴部	〃 1.15~1.3	〃	外-条痕 内-ナデ	〃	茶褐色	
10	〃	69.69	〃	〃	〃	〃 0.85~0.9	〃	〃	〃	〃	
11	III	69.46	A-13	〃	〃	〃 0.9~1.0	長石・石英 金雲母	内-ナデ	〃	暗茶褐色	
12	IV	69.33他	C-12	〃	復元	復元口径21.3復元高17.5	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7~0.9
13	〃	69.505	B-10	〃	口縁部	器壁厚 0.7~1.2	長石・石英	〃	〃	〃	
14	〃	69.7	B-13	〃	〃	〃 0.3~0.8	〃	〃	〃	〃	
15	〃	表層	〃	〃	〃	〃 0.6~0.7	長石・石英 雲母	ナデ	良好	茶褐色	
16	〃	69.2	B-9	〃	〃	〃 1.0~1.1	長石・石英(多)	〃	〃	〃	
17	〃	69.42	A-9	〃	〃	〃 0.7~1.1	長石・石英 雲母	〃	〃	褐色	
18	〃	69.76	B-12	〃	胴部	〃 0.6~1.0	〃	〃	〃	黄褐色	
19	〃	69.51他	B-10	〃	口縁部	口径 19.2	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7~1.0
20	〃	69.58	B-9	〃	〃	器壁厚 0.7~1.0	長石・石英	〃	〃	〃	
21	〃	69.52	C-11	〃	〃	〃 0.9~1.1	〃	〃	〃	〃	
22	〃	69.69	B-11	〃	〃	〃 0.7~0.8	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
23	〃	69.475	C-12	〃	〃	〃 0.8~1.3	長石・石英	〃	良	〃	
24	〃	69.46他	〃	〃	〃	〃 0.9~1.2	〃	〃	良好	〃	
25	〃	69.815	B-12	〃	〃	〃 0.9~1.0	〃	〃	〃	〃	
26	〃	69.725	〃	〃	〃	〃 0.7~1.2	〃	〃	〃	〃	
27	〃	69.76	〃	〃	〃	〃 0.6~1.2	〃	〃	〃	赤褐色	
28	〃	69.72	〃	〃	口縁部 付近	〃 0.8~1.2	〃	〃	〃	茶褐色	
29	〃	69.485	〃	〃	口縁部	〃 0.7~0.8	〃	〃	普通	〃	
30	〃	69.71他	B-11	〃	〃	口径 30.0	〃	〃	良好	〃	器壁厚 0.7~1.0
31	〃	69.51	C-11	〃	胴部	器壁厚 0.9~1.1	〃	〃	〃	〃	
32	〃	69.14他	B-10	〃	口縁部	口径 33.4	〃	〃	〃	暗褐色	器壁厚 0.7~1.4
33	〃	69.49	〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.4	〃	〃	〃	〃	
34	〃	69.525	C-10	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	〃	良	〃	
35	〃	69.46他	A-10	〃	〃	口径 21.5	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.6~0.8
36	〃	69.57	〃	〃	〃	〃 13.2	〃	〃	良好	〃	〃 0.4~0.9
37	〃	69.795	C-6	〃	〃	器壁厚 0.9~1.4	長石・石英(多)	〃	〃	黄褐色	
38	〃	69.73他	B-13	〃	〃	〃 0.6~1.3	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
39	〃	69.735	B-12	〃	〃	〃 0.8~1.4	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
40	〃	69.515他	A-13	〃	〃	〃 0.6~1.0	〃	〃	〃	赤褐色	
41	〃	69.575他	B-12	〃	〃	口径 32.0	〃	〃	良好	〃	器壁厚 0.7~1.1
42	〃	69.54	C-12	〃	〃	器壁厚 0.7~1.0	長石	〃	〃	黄褐色	

第2表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
43	Ⅳ	69.44	B-12 X	深鉢	口縁部	器壁厚 0.8~1.2	長石・石英(多)	ナデ	良好	黄褐色	
44	〃	69.25 他	B-9 〃	〃	〃	〃 0.6~1.2	長石・石英	〃	良	褐色	
45	〃	69.73	B-12 〃	〃	〃	〃 0.6~1.0	〃	〃	良好	黄茶褐色	
46	〃	69.67	B-11 〃	〃	〃	口径 19.9	〃	〃	〃	黄褐色	器壁厚 0.8~1.3
47	〃	69.62	B-12 〃	〃	〃	器壁厚 0.9~1.5	〃	〃	〃	茶褐色	
48	〃	69.14	B-9 〃	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	〃	普通	〃	
49	〃	69.71	B-11 〃	〃	〃	口径 11.5	〃	〃	良好	黄褐色	器壁厚 0.8~1.1
50	〃	69.625	C-12 〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.5	〃	〃	〃	茶褐色	
51	〃	69.25	B-9 〃	〃	〃	〃 0.6~1.2	〃	〃	〃	〃	
52	〃	69.425	C-10 〃	〃	〃	〃 0.5~0.8	〃	〃	〃	黄褐色	
53	〃	68.98	B-9 〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	〃	〃	〃	
54	〃	69.59 他	〃 〃	〃	〃	口径 19.6	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.6~1.3
55	〃	69.59	C-11 〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.2	〃	〃	〃	黄褐色	
56	〃	69.665 他	A-10 〃	〃	〃	〃 0.7~1.2	〃	〃	〃	暗褐色	
57	〃	69.445	C-12 〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	〃	〃	暗茶褐色	
58	〃	69.425	〃 〃	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	〃	〃	〃	
59	〃	69.61	A-10 〃	〃	〃	〃 0.7~1.2	〃	〃	〃	茶褐色	
60	〃	69.63	B-9 〃	〃	〃	〃 0.8~1.2	〃	〃	〃	〃	
61	〃	69.64	B-11 〃	〃	〃	〃 0.6~1.2	長石・石英 雲母	〃 〃	〃	赤褐色	
62	〃	69.58 他	A-10 〃	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石・石英	〃 〃	〃	黄褐色	
63	〃	69.705	A-11 〃	〃	〃	〃 0.5~1.3	長石・石英 雲母	〃 〃	〃	褐色	
64	〃	69.45	B-12 〃	〃	〃	〃 0.5~1.2	〃	〃 〃	〃	暗褐色	
65	〃	69.74	A-9 〃	〃	〃	〃 0.8~1.3	長石・石英	〃	良好	黄褐色	
66	〃	69.68	B-12 〃	〃	〃	〃 0.8~1.3	〃	〃	〃	茶褐色	
67	〃	69.2 他	B-9 〃	〃	〃	口径 47.4	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.8~1.9
68	〃	69.865	B-13 〃	〃	〃	器壁厚 0.8~1.1	〃	〃	〃	〃	
69	〃	69.74	A-10 〃	〃	〃	〃 0.7~1.8	〃	〃	〃	〃	
70	〃	69.425 他	B-9 〃	〃	〃	〃 0.7~1.7	長石・石英 雲母	〃	〃	灰褐色	
71	〃	69.29	〃 〃	〃	〃	〃 0.7~1.9	長石・石英	〃	普通	暗褐色	
72	〃	69.64	B-11 〃	〃	〃	〃 0.7~1.2	〃	〃	良好	黄褐色	
73	〃	69.775	B-12 〃	〃	〃	〃 0.6~1.4	〃	〃	〃	〃	
74	〃	69.5	C-11 〃	〃	〃	〃 0.9~1.5	〃	〃	〃	茶褐色	
75	〃	69.325	C-10 〃	〃	〃	〃 0.7~1.5	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
76	〃	69.315	〃 〃	〃	〃	〃 0.8~1.4	〃	〃	〃	〃	
77	〃	69.57	A-10 〃	〃	〃	〃 0.7~1.1	長石・石英	〃	〃	〃	
78	〃	69.485	A-12 〃	〃	〃	〃 1.0~1.1	〃	〃	〃	〃	
79	〃	69.56 他	B-10 〃	〃	〃	〃 0.8~1.5	〃	〃	〃	〃	
80	〃	69.36	A-12 〃	〃	〃	口径 20.8	〃	〃	〃	〃	
81	〃	69.58	B-10 〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.3	〃	〃	普通	黄褐色	
82	〃	69.515	A-9 〃	〃	〃	〃 1.4	〃	〃	良	〃	
83	〃	69.55 他	A-10 〃	〃	〃	口径 27.0	〃	〃	良好	黄~暗褐色	器壁厚 0.6~1.7
84	〃	69.735	A-13 〃	〃	〃	器壁厚 0.5~1.4	〃	〃	〃	茶褐色	



第3表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
85	Ⅳ	69.115	B-9 X	深鉢	口縁部	器壁厚 0.8~1.8	長石・石英(多)	ナデ	良好	茶褐色	
86	〃	69.725	B-13 〃	〃	〃	〃 0.7~1.5	長石・石英	〃	良	〃	
87	〃	69.585	B-11 〃	〃	〃	〃 0.6~1.6	長石	〃	良好	褐色	
88	〃	69.685他	B-10 〃	〃	〃	口径 27.2	長石・石英	〃	〃	黄褐色	器壁厚 0.7~0.4
89	〃	69.755	B-12 〃	〃	〃	器壁厚 0.5~1.3	〃	〃	〃	赤褐色	
90	〃	69.445	C-11 〃	〃	〃	〃 0.7~1.2	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
91	〃	69.5	〃 〃	〃	〃	〃 0.9~1.2	〃	〃	良	〃	
92	〃	69.64	A-11 〃	〃	〃	口径 35.6	長石・石英	〃	良好	〃	器壁厚 0.8~1.3
93	〃	69.61	C-11 〃	〃	〃	器壁厚 0.8~2.0	〃	丁寧な ナデ	〃	褐色	
94	〃	69.565	B-9 〃	〃	〃	〃 0.7~1.4	〃	ナデ	〃	黄褐色	
95	〃	69.42 他	B-10 〃	〃	〃	口径 27.1	〃	ナデ ケズリ	普通	茶褐色	器壁厚 0.8~2.0
96	〃	69.355	B-9 〃	〃	〃	器壁厚 0.8~1.4	〃	ナデ	良	〃	
97	〃	69.455他	A-10 〃	〃	〃	口径 16.8	〃	〃	良好	〃	器壁厚 0.9~1.6
98	〃	69.745	B-12 〃	〃	〃	〃 31.0	〃	〃	良	〃	〃 0.8~1.8
99	〃	69.225	B-9 〃	〃	〃	器壁厚 0.6~1.3	〃	〃	普通	〃	
100	〃	69.63 他	B-10 〃	〃	復元	口径 34.6	〃	〃	〃	〃	
101	〃	69.67	A-10 〃	〃	口縁部	器壁厚 0.7~1.2	長石・石英 雲母	ナデ	良好	茶褐色	
102	〃	69.595	B-11 〃	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石・石英	〃	普通	黄褐色	
103	〃	69.82	B-12 〃	〃	〃	〃 0.6~1.1	〃	丁寧な ナデ	良好	灰褐色	
104	〃	69.785	〃 〃	〃	〃	〃 0.5~0.9	〃	研磨 (ナデ)	〃	黄褐色	
105	〃	69.95	B-11 〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	ナデ	〃	褐色	
106	〃	69.81	B-13 〃	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	ナデ	〃	黄褐色	
107	〃	69.425他	B-9 〃	〃	〃	口径 31.8	石英	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.8~1.0
108	〃	69.045	〃 〃	〃	〃	器壁厚 0.8~1.8	長石・石英	不明	普通	〃	
109	〃	69.415	C-11 〃	〃	〃	口径 10.8	〃	ナデ	〃	暗褐色	器壁厚 0.5~1.0
110	〃	69.71 他	B-12 〃	〃	〃	〃 30.4	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7
111	〃	69.85 他	C-13 〃	〃	〃	〃 19.4	角閃石 石英	〃	〃	暗褐色	器壁厚 0.8~1.0
112	〃	69.55	A-10 〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.2	長石・石英	〃	〃	茶褐色	
113	〃	69.645	〃 〃	〃	〃	〃 0.6~1.1	〃	〃	良好	〃	
114	〃	69.68	B-10 〃	〃	〃	口径 17.8	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.5~1.0
115	〃	69.74	〃 〃	〃	〃	〃 13.0	〃	ナデ	普通	黄褐色	〃 0.5~1.0
116	〃	69.685	B-13 〃	〃	〃	器壁厚 0.5~1.0	〃	〃	〃	〃	
117	〃	69.66	A-12 〃	〃	〃	口径 13.8	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.0
118	〃	69.645	〃 〃	〃	〃	〃 13.8	〃	〃	〃	〃	〃 0.6~1.0
119	〃	69.59	A-13 〃	〃	〃	器壁厚 0.6~0.7	〃	〃	良好	灰褐色	
120	〃	69.545	〃 〃	〃	〃	口径 11.2	〃	〃	普通	黄褐色	器壁厚 0.6~1.0
121	〃	69.595	B-10 〃	〃	〃	器壁厚 0.6~0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
122	〃	69.545	A-12 〃	〃	〃	口径 12.3	長石	〃	〃	〃	器壁厚 0.5~0.9
123	〃	69.675	B-11 〃	〃	〃	〃 15.2	長石・石英	〃	〃	〃	〃 0.7~1.2
124	〃	69.525	C-12 〃	〃	〃	器壁厚 0.6~1.2	〃	〃	良好	赤褐色	
125	〃	69.64 他	B-10 〃	〃	小型 深鉢	口径 12.0	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.6~1.0
126	〃	69.65	A-9 〃	〃	深鉢	〃 14.6	長石	〃	普通	褐色	〃 0.5~1.0

第4表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
127	IV	69.49	A-10 X	深鉢	口縁部	口径 9.4	長石・石英	ナデ	普通	茶褐色	器壁厚 0.7~1.2
128	〃	69.78	〃	〃	〃	〃 12.7	〃	〃	良好	〃	〃 0.8~1.1
129	〃	69.62	B-13	〃	〃	〃 6.1	〃	〃	〃	赤褐色	〃 0.7~0.9
130	〃	69.78 他	B-10	〃	〃	〃 23.1	長石・石英(多)	〃	〃	茶褐色	〃 0.5~1.5
131	〃	69.66 他	A-10	〃	胴部	器壁厚 0.6	長石・石英	〃	〃	〃	
132	〃	69.55	B-11	〃	〃	〃 0.8~0.9	〃	〃	〃	黄褐色	
133	〃	69.7	A-10	〃	〃	〃 0.7	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
134	〃	69.375	B-11	〃	〃	〃 0.9~1.4	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
135	〃	69.655	A-12	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	〃	〃	茶褐色	
136	〃	69.43	B-11	〃	〃	〃 0.7~1.5	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
137	〃	69.865	〃	〃	〃	〃 0.7~1.4	〃	〃	〃	〃	
138	〃	69.75	B-10	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	〃	〃	
139	〃	69.715	B-11	〃	〃	〃 0.7~1.1	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
140	〃	69.305	C-10	〃	〃	〃 0.8~0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
141	〃	69.955	B-12 あせ	〃	〃	〃 0.8~1.2	長石・石英	〃	〃	〃	
142	〃	69.33 他	C-10	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
143	〃	69.575	A-10	〃	〃	〃 0.7~0.9	〃	〃	〃	〃	
144	〃	69.63	B-10	〃	〃	〃 0.6~0.9	〃	〃	〃	〃	
145	〃	69.59	〃	〃	〃	〃 0.9~1.2	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
146	〃	69.56	B-11	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石・石英 雲母	〃	〃	暗茶褐色	
147	〃	69.805他	〃	〃	口縁部	〃 0.8~1.2	長石・石英	〃	〃	暗褐色	
148	〃	69.69	〃	〃	胴部	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	茶褐色	
149	〃	69.485	B-12	〃	口縁部 付近	〃 0.7~0.8	〃	〃	良	黄褐色	
150	〃	69.52	A-9	〃	胴部	〃 0.9~1.2	〃	〃	良好	暗褐色	
151	〃	69.55	C-7	〃	〃	〃 0.9~1.1	〃	〃	〃	灰褐色	
152	〃	69.745他	B-10	〃	〃	〃 0.9~1.1	〃	〃	〃	黄茶褐色	
153	〃	69.505他	〃	〃	〃	〃 0.95~1.25	〃	〃	〃	茶褐色	
154	〃	69.41	C-11	〃	〃	〃 0.7~1.0	長石・石英 雲母	〃	〃	赤褐色	
155	〃	69.61	B-11	〃	〃	〃 0.6~1.1	〃	〃	〃	茶褐色	
156	〃	69.17	B-9	〃	〃	〃 0.7	長石・石英	〃	良	黄茶褐色	
157	〃	69.53	B-11	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	普通	黄褐色	
158	〃	69.245	B-10	〃	口縁部 付近	〃 0.7~0.9	〃	〃	良好	暗褐色	
159	〃	69.71	A-10	〃	胴部	〃 0.7~0.8	長石・石英 雲母	〃	〃	暗茶褐色	
160	〃	69.345	B-10	〃	〃	〃 0.6~0.8	長石・石英	〃	〃	暗褐色	
161	〃	69.08 他	〃	〃	〃	〃 0.6~0.9	〃	〃	〃	黄褐色	RL) 節
162	〃	69.63 他	A-13	〃	〃	〃 0.6~0.9	〃	〃	〃	暗~黄褐色	RL 節L
163	〃	69.65	B-12	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	〃	〃	茶褐色	LR
164	〃	69.715	〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	〃	〃	〃	RL
165	〃	69.81	〃	〃	〃	〃 0.4~0.5	〃	〃	〃	〃	RL 節L
166	〃	69.42	C-10	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	普通	黒褐色	〃
167	〃	69.45	B-9	〃	〃	〃 0.6	〃	ナデ	〃	茶褐色	〃
168	〃	69.505他	A-10	〃	〃	〃 0.4~0.9	長石(多) 石英・雲母	〃	〃	〃	〃

第5表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
169	Ⅳ	69.715	B-13 X	深鉢	胴部	器壁層 0.7	長石・雲母	ナデ	良好	黄褐色	RL 節L
170	〃	69.275	C-9	〃	〃	〃 0.6~0.9	長石・石英 雲母	〃	良	茶褐色	〃
171	〃	69.605	B-10	〃	〃	〃 0.6~1.0	長石・石英	〃	良好	〃	LR
172	〃	69.555	B-11	〃	〃	〃 0.9~1.0	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	LR) 節R
173	〃	69.6	A-10	〃	〃	〃 0.6~1.0	〃	〃	〃	〃	R
174	〃	69.47	B-11	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石・石英	〃	〃	〃	LR 節R
175	〃	69.76 他	B-12	〃	〃	〃 0.5~0.8	〃	〃	良	〃	LR
176	〃	69.32	C-10	〃	〃	〃 0.7~0.8	長石・石英 雲母	〃	良好	暗茶褐色	LR) 節R
177	〃	69.59 他	A-9	〃	〃	〃 0.6~0.8	長石・石英	ケズリ	〃	黄茶褐色	RL 節L
178	〃	69.605他	A-10	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	ナデ ケズリ	〃	茶褐色	〃
179	〃	69.55	〃	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	ナデ	〃	赤黄褐色	LR 節R
180	〃	69.37	C-10	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	良	茶褐色	LR) 節L
181	〃	69.52	A-10	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	良好	〃	LR 節R
182	〃	69.64 他	B-10	〃	〃	〃 0.7~0.8	長石・石英(多)	内面ケズリ	〃	赤褐色	〃
183	〃	69.64 他	A-10	〃	〃	〃 0.6~0.9	長石・石英	ナデ	〃	茶褐色	〃
184	〃	69.54 他	〃	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	RL 節L
185	〃	69.6他	〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	〃	〃	〃	LR 節R
186	〃	69.725	〃	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	LR 節R
187	〃	69.645	〃	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	〃	〃	〃
188	〃	69.66 他	〃	〃	〃	〃 0.7	〃	〃	〃	〃	〃
189	〃	69.09	B-9	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	〃
190	〃	69.615他	A-10	〃	〃	〃 0.8~0.9	長石・石英 雲母	ナデ ケズリ	〃	〃	LR) 節R
191	〃	69.595他	B-11	〃	〃	〃 0.9~1.0	〃	ナデ	〃	〃	LR
192	〃	69.46	〃	〃	〃	〃 0.8~0.9	〃	〃	〃	〃	LR) 節R
193	〃	69.545他	B-13	〃	〃	〃 0.4~0.6	〃	〃	〃	暗褐色	LR) 片
194	〃	69.57	B-12	〃	〃	〃 0.7~0.8	長石・石英	〃	〃	茶褐色	RL 節L
195	〃	69.725	B-11	〃	〃	〃 0.8~0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	赤褐色	LR 節R
196	〃	69.37	〃	〃	〃	〃 0.9	〃	〃	〃	茶褐色	RL 節?
197	〃	69.69 他	B-11	〃	〃	〃 0.7~0.9	〃	〃	〃	〃	LR
198	〃	69.946他	B-12	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	RL 節L
199	〃	69.77	B-13	〃	〃	〃 0.8~0.9	〃	〃	〃	黒褐色	〃
200	〃	69.71	B-9	〃	〃	〃 0.7	長石・石英	内面ケズリ	良好	茶褐色	LR) 節R
201	〃	69.715	A-12	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	ナデ	〃	〃	LR 節R
202	〃	69.46	B-11	〃	〃	〃 0.7~0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	LR) 節R
203	〃	70.2 9他	A-12	〃	〃	〃 0.5~0.6	〃	〃	〃	暗褐色	LR) 節なし
204	〃	69.47 他	B-9	〃	〃	〃 0.8	長石・石英	〃	良	茶褐色	RL 節L
205	〃	69.6	B-11	〃	〃	〃 0.7~0.9	〃	〃	良好	〃	LR
206	〃	69.62 他	A-10	〃	〃	〃 0.5~0.7	〃	〃	〃	〃	RL 節L
207	〃	69.93 他	B-12	〃	〃	〃 0.9~1.0	〃	〃	〃	〃	〃
208	〃	69.68	B-10	〃	〃	〃 0.4~0.6	長石	〃	〃	〃	〃
209	〃	69.095	B-9	〃	〃	〃 0.6~0.9	長石・石英	〃	普通	赤黄褐色	LR 節R
210	〃	69.735他	B-13	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	良好	黄褐色	RL 節L

第6表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	品種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
211	Ⅳ	69.6	B-12 X	深鉢	胴部	器壁厚 0.6~0.7	長石・石英	ナデ	良好	茶褐色	LR 節R
212	〃	69.551	〃 〃	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃	〃
213	〃	69.695他	B-11	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	〃	〃	〃
214	〃	69.77	B-14	〃	〃	〃 0.5~0.8	〃	〃	〃	〃	〃
215	〃	69.8	B-12 あぜ	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃	〃
216	〃	69.845	B-12	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃	〃
217	〃	69.56	B-9	〃	〃	〃 0.5~0.7	〃	〃	〃	〃	〃
218	〃	69.285	C-10	〃	〃	〃 0.5~0.8	〃	〃	〃	〃	RL 節L
219	〃	69.175	B-13	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃	LR 〃R
220	〃	69.66	B-10	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	〃	〃	〃
221	〃	69.515	B-12	〃	〃	〃 0.6~0.7	長石・石英	〃	〃	〃	〃
222	〃	69.35	C-10	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	良	〃	〃
223	〃	69.14	B-9	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	良好	〃	〃
224	〃	69.555	A-10	〃	〃	〃 0.6	〃	〃	〃	黄褐色	〃
225	〃	69.705	A-9	〃	〃	〃 0.8~1.0	〃	〃	〃	〃	RL
226	〃	69.285	B-9	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	〃	〃	〃	〃
227	〃	69.36 他	B-9	〃	〃	〃 0.5~0.8	〃	ナデ ケズリ	〃	茶褐色	LR 節R
228	〃	69.375	〃 〃	〃	〃	〃 0.4~0.9	長石	条痕仕上げ	〃	〃	〃
229	〃	69.78	〃 〃	〃	〃	〃 0.6~0.8	長石・石英	ナデ	良好	赤褐色	節L
230	〃	69.535他	B-10	〃	底部	底径 11.0	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚0.6~1.4 LR 節R
231	〃	69.665	B-12	〃	〃	〃 9.0	〃	〃	〃	〃	RL 節L
232	〃	70.04 他	B-12 あぜ	〃	底部 付近	器壁厚 0.7~1.0	〃	〃	〃	〃	RL 節R
233	〃	69.675	B-12	〃	底部	〃 0.9	〃	〃	〃	黄褐色	LR 〃R
234	〃	69.665	〃 〃	〃	底部	〃 0.6~1.1	〃	〃	〃	茶褐色	〃
235	〃	69.805	B-13	〃	〃	底径 10.0	〃	〃	〃	黄茶褐色	RL 節L
236	〃	69.56	B-11	〃	〃	器壁厚 0.9	〃	〃	〃	茶褐色	LR
237	〃	69.605	B-12	〃	底部 付近	〃 0.6~1.2	〃	〃	〃	〃	(LR 〃) RL 節R
238	〃	69.55	B-10	〃	底部	底径 16.3	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.8
239	〃	69.785	B-12	〃	〃	〃 11.0	〃	〃	〃	〃	LR 節L
240	〃	69.74	B-11	〃	〃	〃 14.0	〃	〃	〃	赤褐色	LR 節R
241	〃	69.455	A-13	〃	〃	〃 13.5	〃	〃	〃	黄褐色	RL 節R
242	〃	69.49	B-10	〃	〃	〃 12.6	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚0.7~0.8 RL 節L
243	〃	69.885	A-13	〃	〃	〃 11.0	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	RL 節L
244	〃	69.29	C-10	〃	〃	〃 7.5	長石・石英	〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.2
245	〃	69.865	B-12	〃	底部 付近	器壁厚 0.8~0.9	〃	〃	〃	黄褐色	〃
246	〃	69.68	B-12	〃	底部	底径 7.5	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7~1.1
247	〃	69.505	A-10	〃	〃	〃 10.5	長石・石英	〃	〃	〃	〃 0.9~1.3
248	〃	69.79	B-12	〃	〃	〃 10.5	〃	〃	〃	〃	〃
249	〃	69.035	B-3	〃	〃	〃 10.5	〃	〃	〃	〃	器壁厚 1.1~1.8
250	〃	69.065	B-9	〃	〃	〃 9.5	〃	〃	〃	〃	〃
251	〃	69.985	B-13 あぜ	〃	〃	〃 13.5	〃	〃	〃	〃	〃
252	〃	69.655他	B-12	〃	〃	〃 11.5	〃	〃	〃	茶褐色	〃

第7表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	品種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
253	IV	69.685	B-12 X	深鉢	底部	底径 12	長石・石英	ナデ	良好	茶褐色	
254	〃	69.765	A-10	〃	〃	〃 12.5	〃	〃	〃	〃	
255	〃	69.775	B-12	〃	〃	〃 9	〃	〃	〃	〃	
256	〃	69.73 他	〃	〃	〃	〃 12	〃	〃	〃	〃	
257	〃	69.7	A-11	〃	〃	〃 12.5	〃	〃	〃	黄茶褐色	
258	〃	70.425	B-13	〃	〃	〃 9	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.9~1.7
259	〃	69.835	B-13	〃	〃	〃 10.5	〃	〃	〃	〃	
260	〃	69.68	B-10	〃	〃	〃 9	〃	〃	〃	〃	
261	〃	69.61	A-12	〃	〃	〃 5	〃	〃	〃	〃	
262	〃	69.66 他	B-11	〃	〃	〃 6.5	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.6~0.9
263	〃	69.555	C-12	〃	〃	〃 5	〃	〃	〃	赤茶褐色	
264	〃	69.975	B-13	〃	〃	〃 4.8	〃	〃	〃	赤褐色	器壁厚 0.7
265	〃	69.62	B-10	〃	〃	〃 6.5	〃	〃	〃	茶褐色	
266	〃	69.65	A-10	壺	口縁部	口径 4.2	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	器壁厚 0.5~0.9
267	〃	69.345他	B-6	〃	〃	〃 9.3	長石・石英	〃	〃	〃	〃 0.8~1.2
268	〃	69.63	B-10	〃	〃	〃 7.3	〃	〃	〃	黄褐色	〃 0.7~0.9
269	〃	69.65 他	A-10	〃	〃	〃 4.2	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	〃 0.7~1.0
270	〃	69.255	B-9	〃	口縁部	〃 8.2	〃	〃	〃	〃	〃 0.7~1.0
271	〃	69.52 他	B-10	〃	〃	〃 7.0	長石・石英	〃	〃	黄褐色	〃 0.7~1.0
272	〃	69.725他	B-11	〃	〃	〃 9.6	〃	〃	〃	〃	〃 0.8~1.1
273	〃	69.635	B-12	〃	〃	〃 5.4	〃	〃	〃	茶褐色	〃 0.7~1.0
274	〃	69.855	B-13	〃	〃	〃 6.1	〃	〃	〃	〃	〃 0.6~1.0
275	〃	69.795	B-11	〃	〃	〃 4.8	長石・石英 雲母	〃	〃	黄褐色	〃 0.6~0.9
276	〃	69.88	B-12	〃	〃	〃 5.7	長石・石英	〃	〃	〃	〃 0.5~0.8
277	〃	69.63	A-12	〃	〃	〃 4.8	〃	〃	〃	〃	〃 0.6~0.7
278	〃	69.88 他	B-11	〃	復元	口径 8.0 復元高 40.0	〃	ナデ	〃	〃	〃 0.6~1.0
279	V	69.62 他	B-14	深鉢	〃	〃 25.6 〃 18.2	〃	〃	〃	茶褐色	〃 0.4~0.6
280	〃	69.75	A-13	〃	口縁部	口径 31.0	〃	〃	〃	〃	〃 0.5~0.7
281	〃	69.9	B-13	〃	〃	〃 32.5	〃	〃	〃	〃	〃 0.5~0.7
282	〃	69.785他	B-14	〃	胴部	器壁厚 0.4~0.5	〃	〃	〃	〃	
283	〃	69.835他	B-14	〃	〃	〃 0.4~0.5	〃	〃	〃	〃	
284	〃	69.675他	B-14	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	〃	〃	
285	〃	69.68	B-13	〃	〃	〃 0.4~0.5	〃	〃	〃	〃	
286	〃	69.73	B-14	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	〃	〃	
287	〃	69.69	〃	〃	〃	〃 0.4	〃	〃	〃	〃	
288	〃	69.735他	B-13	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	〃	〃	
289	〃	69.94	B-14	〃	底部	底径 10.2	〃	〃	〃	〃	
290	〃	69.67	C-11	〃	胴部	器壁厚 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	
291	VI	69.635他	A-10	〃	口縁部	口径 26.0	〃	〃	〃	黒褐色	器壁厚 0.6~0.7
382	晩期	70.365	B-6 VI	深鉢	〃	〃 19.0	〃	〃	〃	〃	〃 0.4~0.8
383	〃	70.2	B-7	〃	〃	器壁厚 0.4~0.8	〃	〃	〃	〃	
384	〃	70.3	B-6	浅鉢	〃	口径 40	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.6~1.2

第8表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(往・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
385	晩期	69.735他	A-7 Ⅲ下	浅鉢	口縁部	口径 45.0	長石・石英	ヘラ磨き	良好	黒褐色	器壁厚 0.6~1.1
386	〃	69.545他	A-8 Ⅲ下	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.7~0.8
387	〃	70.31 他	B-6 Ⅲ下	深鉢	胴部 頸部付近	器壁厚 0.5	〃	〃	〃	〃	
388	〃	70.155他	A-19Ⅳ上	〃	底部	底径 9.0	〃	〃	〃	〃	
389	〃	70.03 他	A-7 Ⅲ下	〃	〃	〃 10.0	〃	〃	〃	〃	

第9表 出土石器一覧表

番号	器種	出土区	層	標高	石材	最大長 cm	最大幅 cm	重 き g	備考
292	石 鏃	B-12	X	69.73	黒 耀 石	2.0	1.7	1.28	
293	〃	〃	〃	69.79	〃	2.4	1.7	1.3	
294	〃	B-10	〃	69.575	ホルンフェルス 泥	2.3	1.5	0.74	
295	〃	B-11	〃	69.86	〃	2.3	1.3	0.81	
296	〃	A-12	〃	69.63	〃	2.2	1.6	1.14	
297	〃	B-12	〃	69.35	〃	2.5	1.4	1.29	
298	〃	A-10	〃	69.625	黒 耀 石	2.3	2.0	1.45	
299	〃	B-11	〃	69.55	〃	1.5	1.6	0.6	
300	〃	B-12	〃	69.97	〃	2.4	1.2	1.22	
301	〃	A-10	〃	69.53	ホルンフェルス 泥	3.1	1.8	2.32	
302	〃	B-14	〃	69.98	〃	3.9	2.3	4.9	
303	石 匙	B-13	〃	69.78	粗 粒 砂 岩	6.4	3.0	15.4	
304	未 詳 品	B-11	〃	70.035	ホルンフェルス 泥	3.7	2.0	2.32	未 詳 品
305	〃	B-12	〃	69.74	〃	1.8	2.8	2.5	
306	磨 製 石 斧	C-3	〃	69.315	ホルンフェルス	27.8	5.2	868	
307	〃	B-3	〃	68.92	〃	12.6	4.3	178	
308	局 部 磨 製 石 斧	B-10	〃	69.76	粘 板 岩	5.9	4.5	38.1	
309	〃	B-12	〃	69.595	ホルンフェルス	14.4	5.5	265	
310	〃	B-10	〃	69.67	粘 板 岩	8.2	4.3	125.0	
311	〃	B-11	〃	69.645	〃	7.8	3.9	82.7	
312	〃	C-12	〃	69.475	〃	5.0	4.1	48.6	
313	〃	C-11	〃	69.455	ホルンフェルス	13.5	6.1	172.0	
314	〃	B-8	〃	68.62	粘 板 岩	10.8	6.0	150.0	
315	〃	B-9	〃	69.26	〃	11.8	6.9	280.0	
316	〃	〃	〃	69.32	ホルンフェルス	5.8	8.0	160.0	
317	扁 平 打 製 石 斧	B-10	〃	69.635	粘 板 岩	7.6	6.0	115.7	
318	〃	B-12	〃	69.665	〃	9.5	4.4	96.5	
319	小 形 扁 平 石 斧	B-11	〃	69.745	頁 岩	4.4	2.9	3.27	
320	〃	A-12	〃	69.615	粘 板 岩	6.9	3.4	25.7	
321	石 片	A-11	〃	69.75	頁 岩	2.2	2.7	2.01	
322	〃	〃	〃	69.765	〃	1.8	2.5	1.75	
323	〃	B-11	〃	69.75	〃	3.2	2.3	3.16	
324	磨 石 + 敲 石	A-2	〃	68.73	安 山 岩	11.4	8.2	710	
325	〃	B-11	〃	69.62	〃	14.7	14.3	675	

第10表 出土石器一覧表

番号	器種	出土区	層	標高	石材	最大長 cm	最大幅 cm	重さ g	備考
326	磨石+敲石	A-12	X	69.69	安山岩	11.6	10.0	743.0	
327	〃	B-10	〃	69.5	砂岩	20.4	19.0	780.0	
328	〃	A-10	〃	69.63	安山岩	11.9	9.0	627.0	
329	〃	〃	〃	69.585	〃	12.1	9.7	710.0	
330	〃	B-10	〃	69.55	〃	9.2	7.8	395.0	
331	〃	B-6	〃	69.445	巨晶花崗岩	10.0	9.5	718.0	
332	〃	B-11	〃	69.605	花崗岩	9.0	8.0	425.0	
333	〃	B-9	〃	68.545	ホルンフェルス	17.7	10.6	1,235.0	
334	凹石	B-6	〃	69.485	安山岩	7.0	5.0	158.0	
335	〃	C-12	〃	69.555	ホルンフェルス	8.4	6.8	354.0	
336	石皿	A-12	〃	69.625	花崗岩	24.8	17.0	6,050.0	
337	〃	A-10	〃	69.69	〃	22.3	13.9	3,500.0	
338	〃	〃	〃	69.57	〃	25.6	20.4	3,450.0	
339	〃	B-14	〃	69.71	〃	9.3	8.3	450.0	
340	〃	B-10	〃	69.29	〃	26.4	22.0	5,100.0	
341	軽石製品	A-5	〃	69.61	軽石	12.5	10.5	177.0	
342	棒状敲石	C-11	〃	69.33	ホルンフェルス	11.2	5.9	269.0	I a類
343	〃	B-10	〃	69.715	〃	13.1	4.6	170.0	〃
344	〃	B-12	〃	69.83	〃	9.4	4.0	99.7	〃
345	〃	B-11	〃	69.58	〃	9.7	4.5	131.0	〃
346	〃	B-9	〃	69.535	〃	10.0	3.2	79.1	I b
347	〃	C-10	〃	69.31	〃	10.6	3.5	152.0	〃
348	〃	C-11	〃	69.35	〃	9.3	3.5	142.0	〃
349	〃	C-13	〃	69.84	〃	11.7	4.6	217.0	〃
350	〃	B-12	〃	69.45	〃	9.6	4.0	121.0	〃
351	〃	B-10	〃	69.525	〃	10.2	3.7	180.0	〃
352	〃	〃	〃	69.41	〃	8.2	3.6	132.0	〃
353	〃	〃	〃	69.425	〃	9.0	4.0	155.0	〃
354	〃	A-10	〃	69.6	〃	9.4	5.4	264.0	〃
355	〃	C-12	〃	69.38	〃	9.7	4.4	163.0	〃
356	〃	A-11	〃	69.595	〃	10.3	4.4	195.0	〃
357	〃	A-10	〃	69.64	〃	13.6	4.6	258.0	〃
358	〃	B-5	〃	69.55	〃	13.8	4.8	278.0	〃
359	〃	B-9	〃	69.645	〃	15.7	5.7	477.0	〃
360	〃	C-12	〃	69.565	〃	12.5	6.0	233.0	〃
361	〃	B-10	〃	69.655	〃	11.3	4.1	164.0	II a類
362	〃	A-12	〃	69.64	〃	10.6	4.2	197.0	〃
363	〃	B-10	〃	69.5	〃	14.8	3.7	240.0	〃
364	〃	B-14	〃	69.755	〃	10.5	4.4	142.0	〃
365	〃	C-11	〃	69.45	〃	8.8	3.4	80.9	〃
366	〃	A-12	〃	69.795	〃	11.0	3.0	71.0	II b類
367	〃	A-1	〃	69.05	〃	16.8	5.25	444.0	III類

表11表 出土石器一覧表

番号	器種	出土区	層	標高	石材	最大長	最大幅	重さ	備考
368	敲石	B-10	X	69.445	ホルンフェルス	15.4	5.0	234	Ⅲ類
369	〃	〃	〃	69.61	〃	9.9	3.5	146.0	〃
370	〃	A-12	〃	69.48	〃	14.5	5.4	238.0	〃
371	〃	B-11	〃	69.715	〃	11.2	3.4	111.8	〃
372	〃	B-12	〃	69.46	〃	9.3	3.4	86.4	〃
373	〃	B-9	〃	69.21	〃	10.9	5.1	151.0	Ⅳa類
374	〃	〃	〃	69.08	〃	7.7	2.8	47.2	〃
375	〃	〃	〃	69.54	〃	10.8	3.7	82.5	〃
376	〃	B-10	〃	69.715	〃	10.6	3.5	117.3	Ⅳb類
377	〃	A-8	〃	68.965	〃	10.4	4.3	76.1	〃
378	〃	B-12	〃	69.78	〃	11.0	3.7	147.0	〃
379	〃	B-10	〃	69.545	〃	8.8	3.8	110.3	〃
380	〃	C-12	〃	69.355	〃	9.5	6.0	188.0	〃
381	〃	A-12	〃	69.62	〃	10.2	3.4	124.0	〃
390	磨製石斧	B-21	〃	70.175	〃	14.4	6.15	460.0	〃
391	打製石斧	B-12	〃	69.84	頁岩	7.7	7.5	114.9	〃
392	〃	A-22	Ⅵ	71.32	粘板岩	7.5	4.3	42.76	〃
393	〃	B-22	〃	〃	ホルンフェルス	2.8	3.25	8.37	〃
394	〃	B-12	X	70.37	頁岩	5.2	6.5	44.64	〃
395	磨石	B-20	Ⅵ	70.39	ホルンフェルス	4.8	4.1	58.95	〃
396	〃	B-17	〃	70.595	〃	5.8	4.25	60.38	〃
397	〃	B-22	〃	70.185	〃	11.3	5.15	295.0	〃
398	〃	〃	〃	70.56	〃	10.1	6.57	350.0	〃
399	スクレイパー	B-11	X	70.37	粘板岩	3.8	7.6	31.54	〃
400	〃	B-7	〃	70.215	半花崗岩	8.15	3.4	13.91	〃
401	〃	B-18	Ⅵ	70.535	〃	7.85	5.3	38.0	〃



## 第 Ⅲ 章 弥生時代の調査

### 第 1 節 調査の概要

弥生時代の調査は、確認調査の結果をもとに上層の戦跡遺構や近世遺構の発掘調査終了後に行なったが、道路建設工事の進行と年度毎の発掘調査の進捗状況との関係から各区の調査行程は若干異なっている。

調査区域は、道路用地の24mのうち当面開通の南側片車線の12mが対象となっている。つまり、北側の12mは緑地帯として保護されるため、今回の調査区域からは除外している。しかし、C19区～C21区にかけては、遺構の一部が緑地帯に拡がって検出されたため、その遺構の性格を明らかにするために拡張して調査を実施した。その結果、弥生時代の遺構の新知見や集落の構成を知る新資料を得た。

### 第 2 節 Ⅲ層の調査

#### 1. 遺 構

##### (1) 遺構の概要

前畑遺跡の弥生時代は、Ⅲ層中に包含層が形成され、その下層に薄い黄褐色のⅣ層が確認される位置で遺構が検出された。遺物包含層及び遺構は、A B16区～A B25区の間にとんでいて、遺構は、竪穴住居址3基、掘立柱建物跡8棟、円形周溝1基、溝状遺構3基（但し、建物に付随するものが2基）検出された。

住居址は、B7区(1号)、B C19区(2号)、B20区(3号)に所在し、いずれも方形の平面プランを呈するものである。1号及び2号住居址は、住居址内の床面に炭化木が多量に出土しており焼失家屋と考えられる。

掘立柱建物跡は、二通りのタイプがみられる。一つのタイプは1号～3号建物で、梁間が3間のものである。3号は、現水路建設時に破壊されているため全形は知り得ない。1号及び2号建物跡は、北側側辺の片側に溝が付く。いずれも2号及び3号住居址の西～北側近くのB C20区付近に位置し、住居址との関係が注目される。

二つ目のタイプは、梁間が1間のものである。4号建物は、1間×1間のタイプである。5号建物は用地外に延びるが、1間×2間の建物の可能性が高い。6号～8号建物は、1間×2間の同一タイプのものである。外側の4本柱の掘り方は大きくて深く、主柱に想定される。中柱は小さく浅い。いずれも住居址群から西南側に離れたA B21区～24区に検出された。

さらに、A20区の拡張区において、2号及び3号建物跡と切り合って円形周溝遺構が検出さ

れた。この切り合いで円形周溝と建物跡との時期差は明確であり、構築順が明らかとなる。

遺物は遺構を中心に出土し、総数約4,360点と多い。

## (2) 竪穴住居址

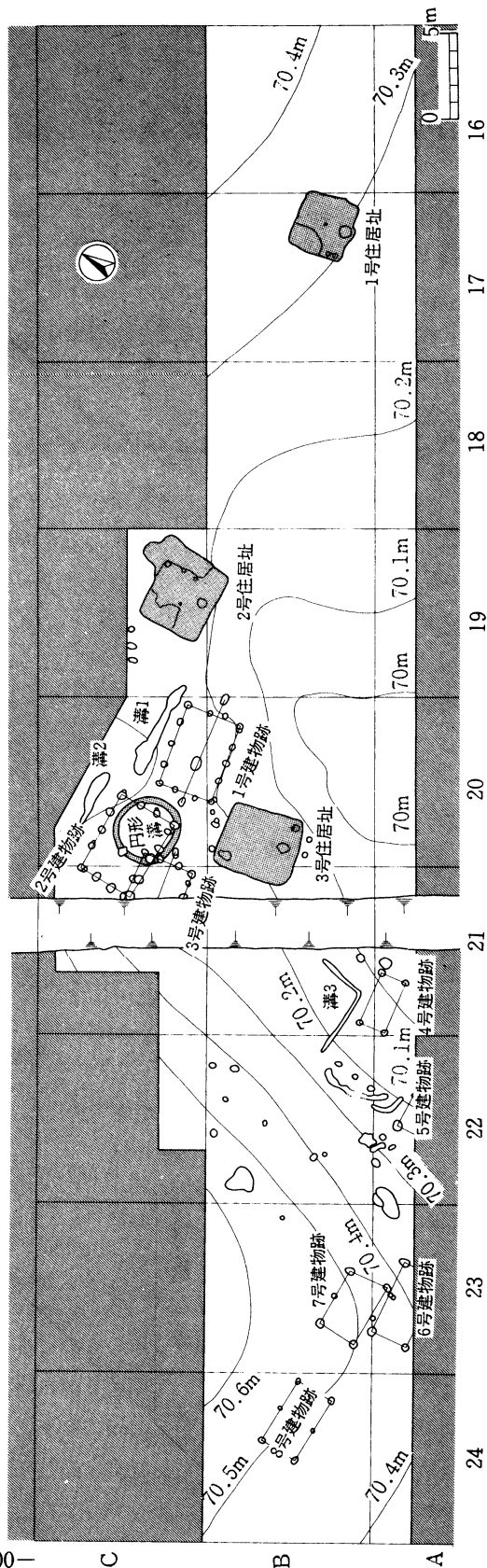
竪穴住居址は、B7区(1号)、BC19区(2号)、B20区(3号)に3基検出された。いずれも方形の平面プランを呈するものである。1号及び2号住居址は、住居址内に炭化木が多量に検出された。

### 1) 1号住居址 (第67~70図)

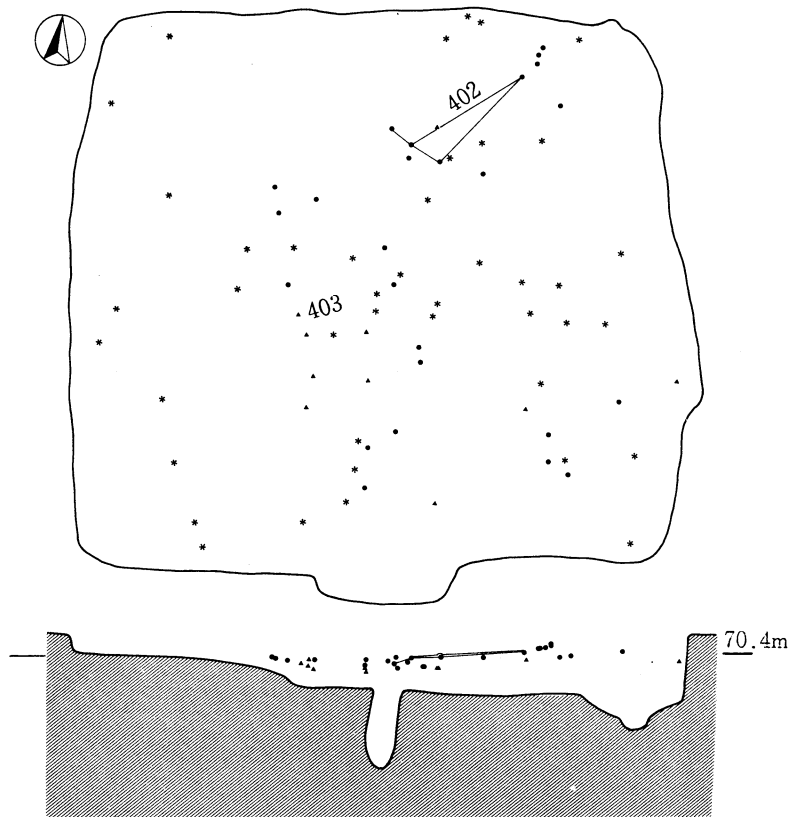
1号住居址は、B7区に検出された。わずかに東西に長い方形プランを呈する住居址で、検出面での平面規模は、略東西3.6m×略南北3.26mを測る。床面は、約40cmの深さを測る。

住居址のほぼ中央には、18cm×15cmの柱穴が1個検出された。柱穴の直上には二本の炭化木が直立した状態で存在した。柱穴内は、この炭化木の延長下面に柱木の痕跡が確認される(第68図)。柱痕跡は、約42cmの深さまで到達している。住居址内の炭化木は、この中央の柱穴に向かって放射状に検出されており、1号住居址は上屋構造が一本柱の可能性が高い。

住居址内の西側辺の北隅には、幅1.4mで長さ2.25mのベッド状遺構を備えている。ベッド状遺構は、中央に突き出した角部が若干崩壊しているが、床面より22cm高い壇になっている。住居址内の南側辺の中央部には、径70cm程度で床面より深さ20cmの円形の凹んだピットが検出された。このピットと接する南側辺は、わずかに張り出している。形状から入口の施設が想定される。このピットの西側でベッド状遺構の南側付近には、焼土痕跡と浅いピットが存在する。



第66図 Ⅲ層遺構配置図



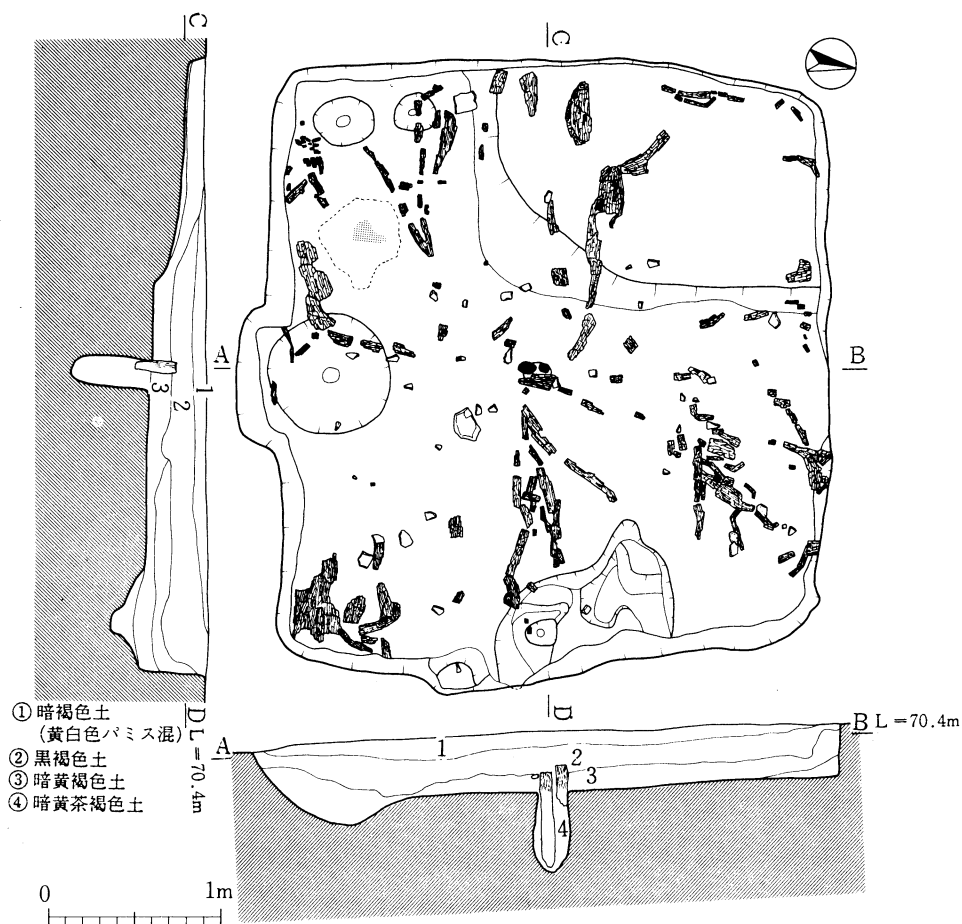
第67図 1号住居址遺物分布図

さらに、東側辺に接して、幅50cm、長さ100cmの不定形なピットが検出されたが、用途は不明である。

住居址内からは、総数35点の遺物が出土している。しかし、土器片はいずれも細片で形態の明らかなものは少ない。402は、唯一実測できた壺形土器の底部片である。また、住居址2号の中心に出土した、完形に復元される甕形土器（417）に接合する細片が二片出土している。この417の甕形土器は在地系とは著しく形態が異なり、移入土器であることが想定される。在地系土器との関係や住居址間での接合関係を含めて、極めて注目される資料である。403は、粒子の滑らかな石質で中央がやや凹んではいるが、平坦で滑らかな面をもつ砥石状の石器である。

## 2) 2号住居址 (第71~76図)

2号住居址は、B19区にわずかにかかる状態でC19区を中心に検出された。わずかに東西に長い方形プランを呈する住居址である。検出面での平面規模は、略東西4.6m×略南北3.75m



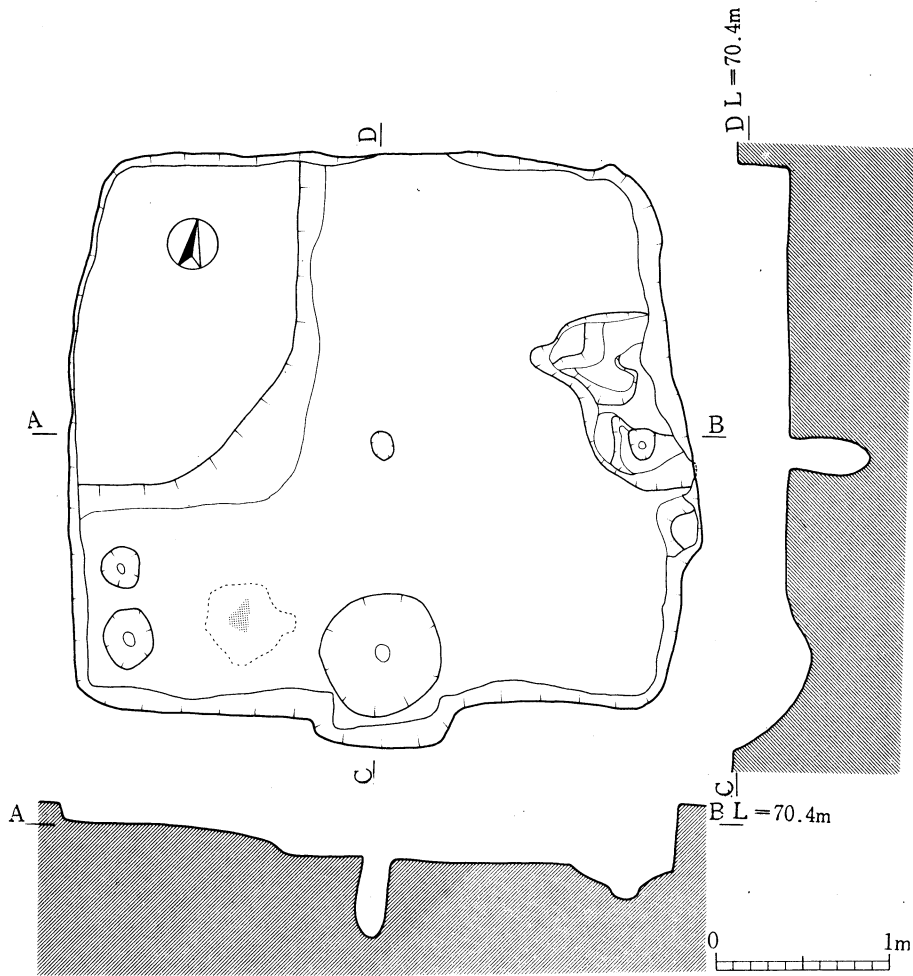
第68図 1号住居址遺物出土状況図

を測る。床面は、約50cmの深さを測る。北側辺の東寄りに、1m程度の張り出し部をもつ。

住居址のほぼ中央に、径15cm～20cmで深さ35cmの小規模な小さい二本の柱穴が検出された。その両脇、すなわち西側辺及び東側辺の北寄りに、ベッド状遺構を備えている。西側辺のベッド状遺構は幅1.30m×長さ1.60mを測り、東側辺のベッド状遺構は幅1.15m×長さ2.00mを測る。東側辺のベッド状遺構は床面より23cm高い壇をつくり、西側のものは11cmとやや低い。

床面のほぼ中央には炭化木が集中して検出された。主柱と考えられる二本の柱穴の中央の南寄りに、15cm～20cm程度の焼土が確認された。また南側辺寄りの中央部に径30cmの円形ピットが位置し、ピット外側の側辺寄りに長さ34cmを測る台石状の河原石（418）が出土した。

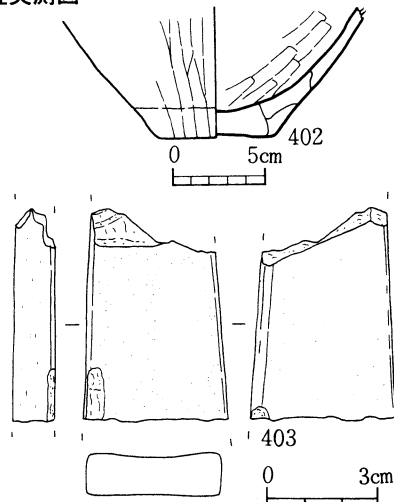
住居址内からは、総数242点の遺物が出土している。土器は、甕形・壺形土器などの破片がある。甕形土器は、口縁部は逆L字状に外反し、胴部にはシャープな二条の突帯文を巡らすタイプ（404）と、く字に外反して数条の突帯文を巡らすタイプ（405）とがある。甕形土器の底部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台をもつタイプで底部の中央はわずかに上がる。



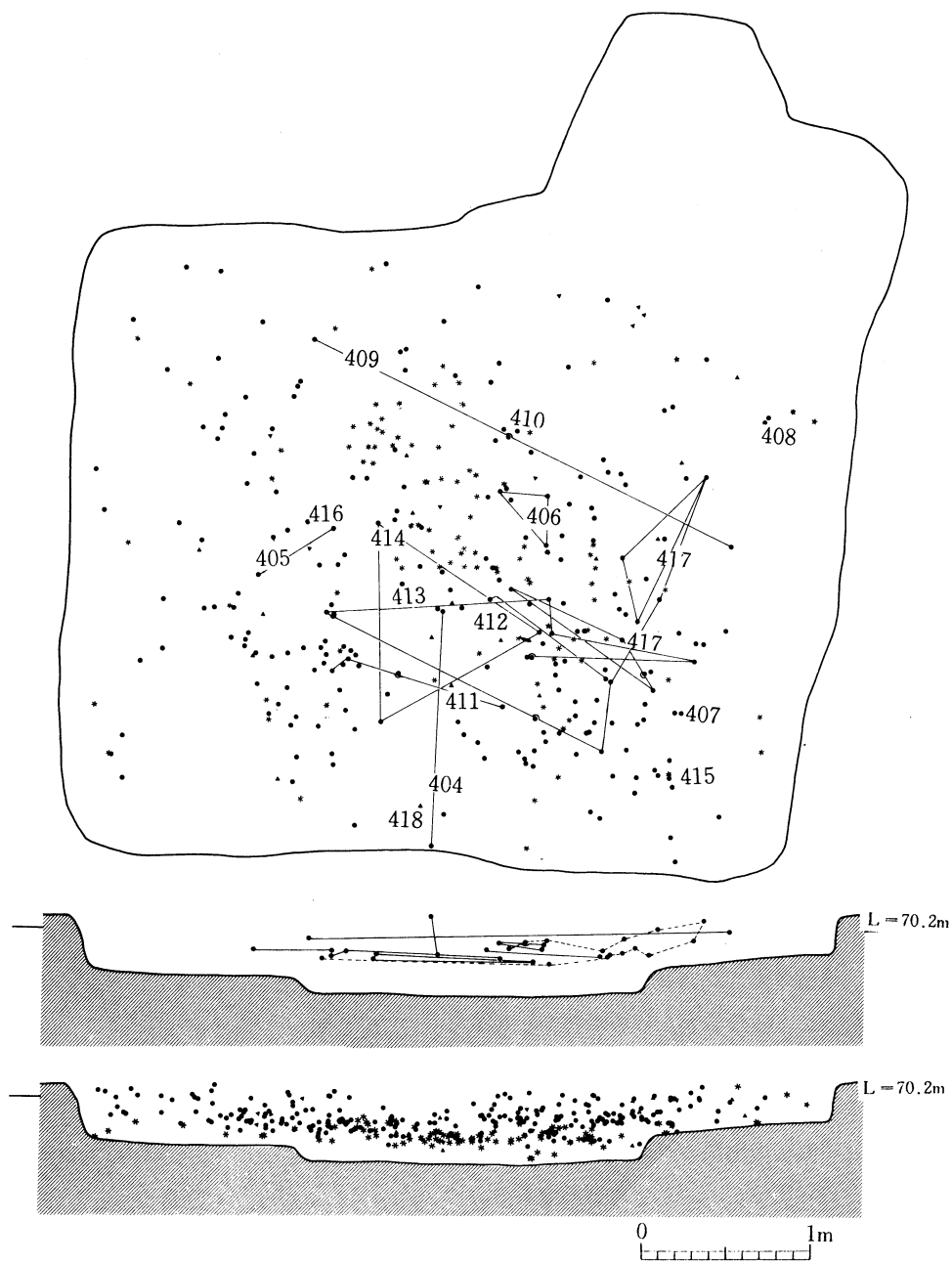
第69図 1号住居址実測図

底部裾部は、面取りが行なわれその上に凹線文状の凹みが施される。411は壺形土器の頸部で、412は底部片である。414は突帯文を巡らさない甕形土器である。415は、鉢形土器のラッパ状の脚部であろう。416は円盤状の裾拡がりの脚部で、端部には三角突帯文を巡らす珍しいタイプの脚部である。417は、甕形土器の完形に復元されるものである。口縁部は大きく外反し、丸みをもっておさめる。胴部は膨らみをもち、底部は平底である。器外面は粗い刷毛目状の条痕仕上げで、胴部上半から頸部にかけては煤の付着が多い。

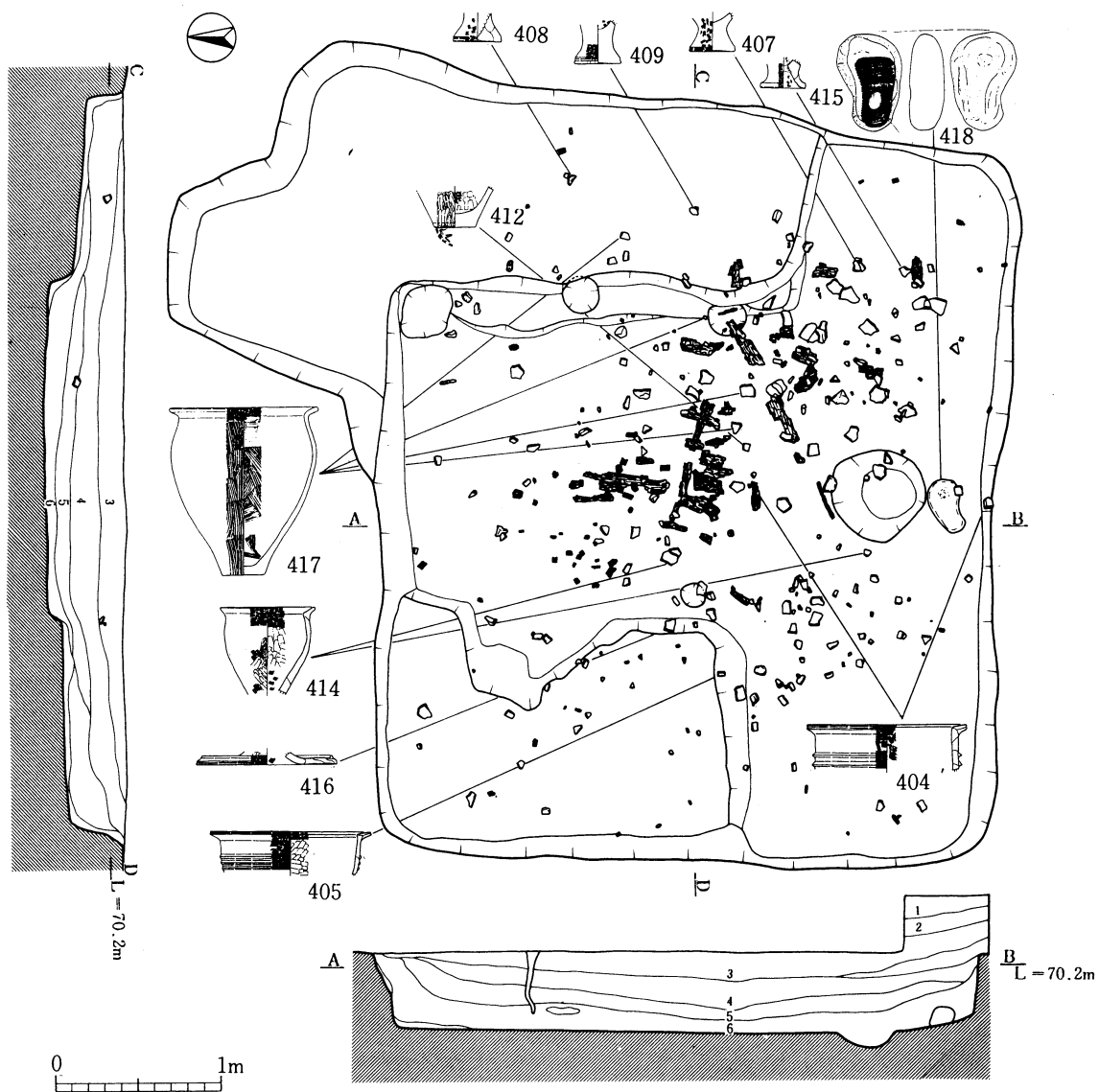
418は平坦面を持った大型の石器で、平坦面は滑



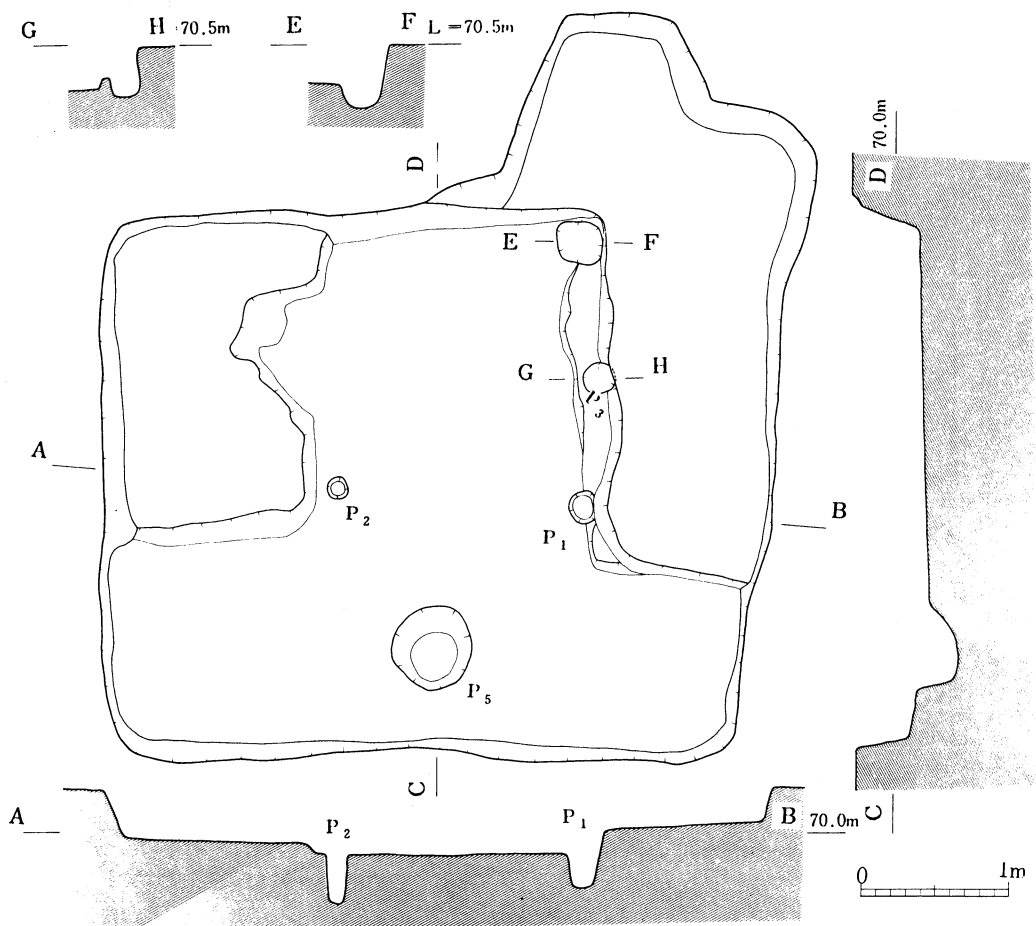
第70図 1号住居址出土遺物実測図



第71图 2号住居址遺物分布图



第72图 2号住居址遺物出土狀況图



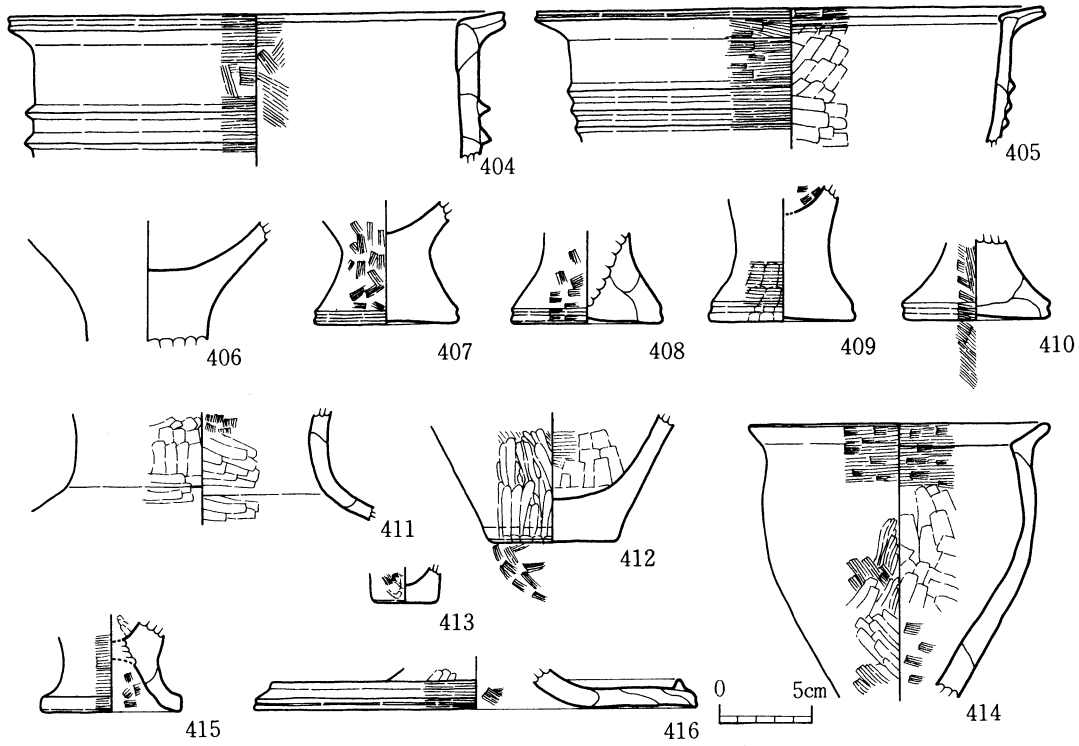
第73図 2号住居址実測図

らか（スクリーン・トーン部分）となり、一部に敲打痕もみられる。石皿あるいは台石的な使用が考えられる台石である。

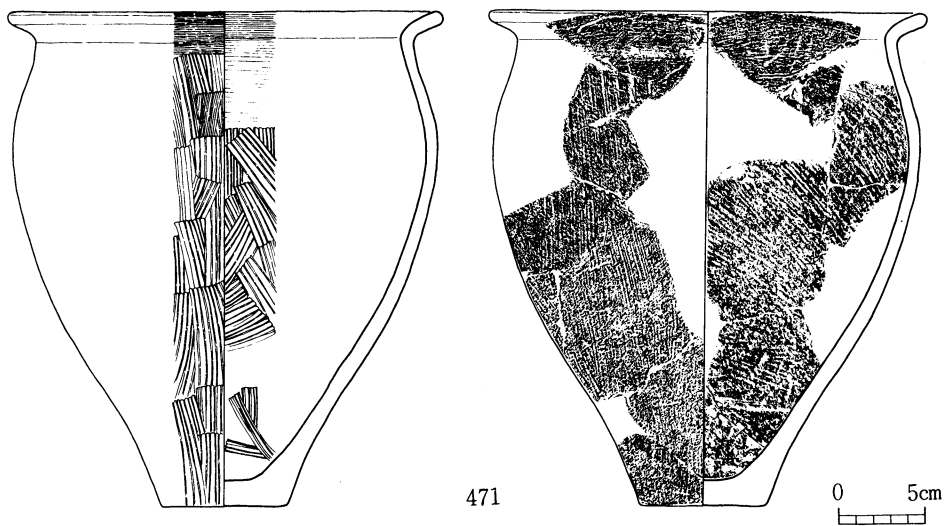
2) 3号住居址 (第77~79図)

2号住居址は、B21区に張り出す状態でB20区を中心に検出された。南北に長い方形プランを呈する住居址である。検出面の平面規模は、略東西3.8m×略南北4.6mを測る。床面は、約25cmと浅く、上面が相当削平されたことが考えられる。住居址内のほぼ中央には、85cm×50cmの楕円形の焼土が確認された。その北側辺寄りに、50cm×70cm程度の楕円形で深さ50cmのピットが存在し、その他には北西隅と南東隅に浅いピットが存在するのみである。しかし、住居

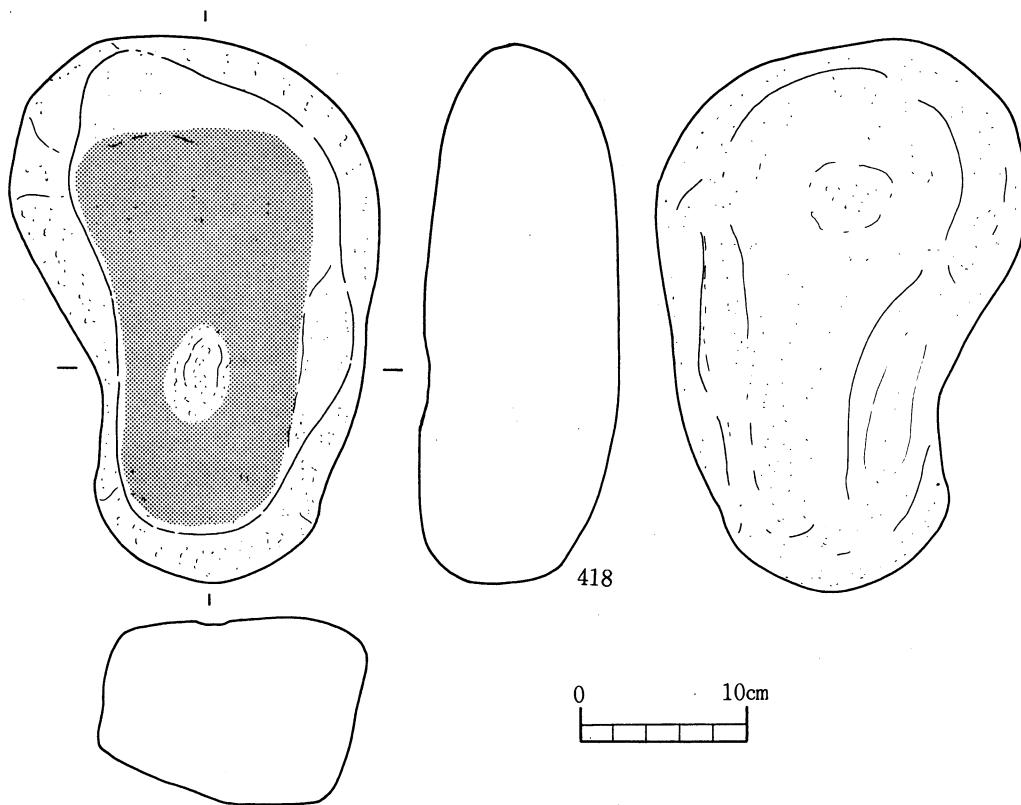




第74图 2号住居址出土遺物実測図(1)



第75图 2号住居址出土遺物実測図(2)

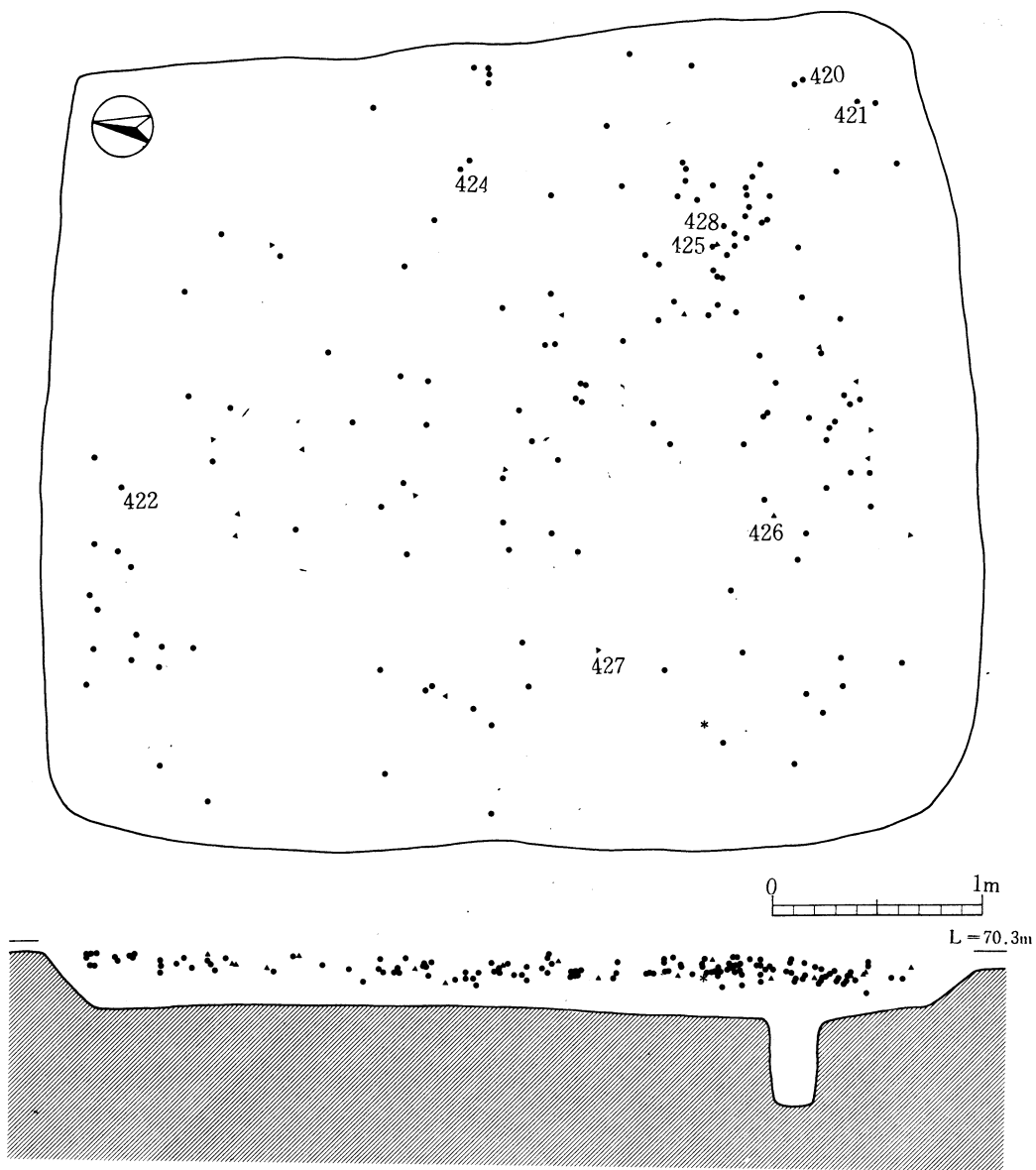


第76図 2号住居址出土遺物実測図(3)

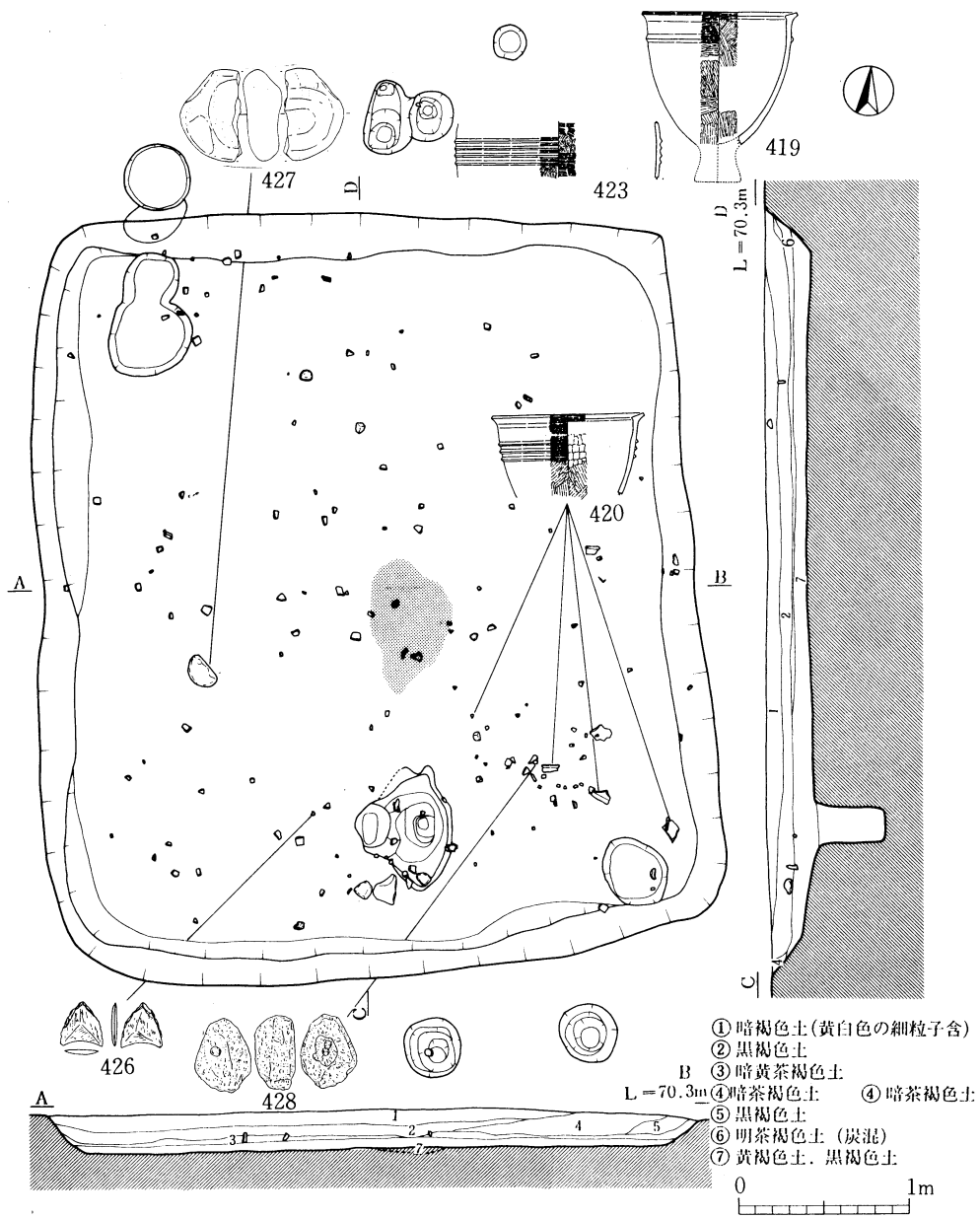
址の外側に住居址と関連すると考えられる柱穴が確認されている。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>はいずれも住居址長辺の中央延長上に位置し、棟持ち柱的性格の柱穴と考えられる。

住居址内からは、総数151点の遺物が出土している。土器は、甕形・壺形土器などの破片がある。甕形土器は、く字に外反して一条から数条の突帯文を巡らすタイプであるが、口縁の外反部の内面が張り出すという特徴がみられる。また、422のような短い外反部をもつものもある。424は壺形土器の口縁部で、425は底部と考えられる。

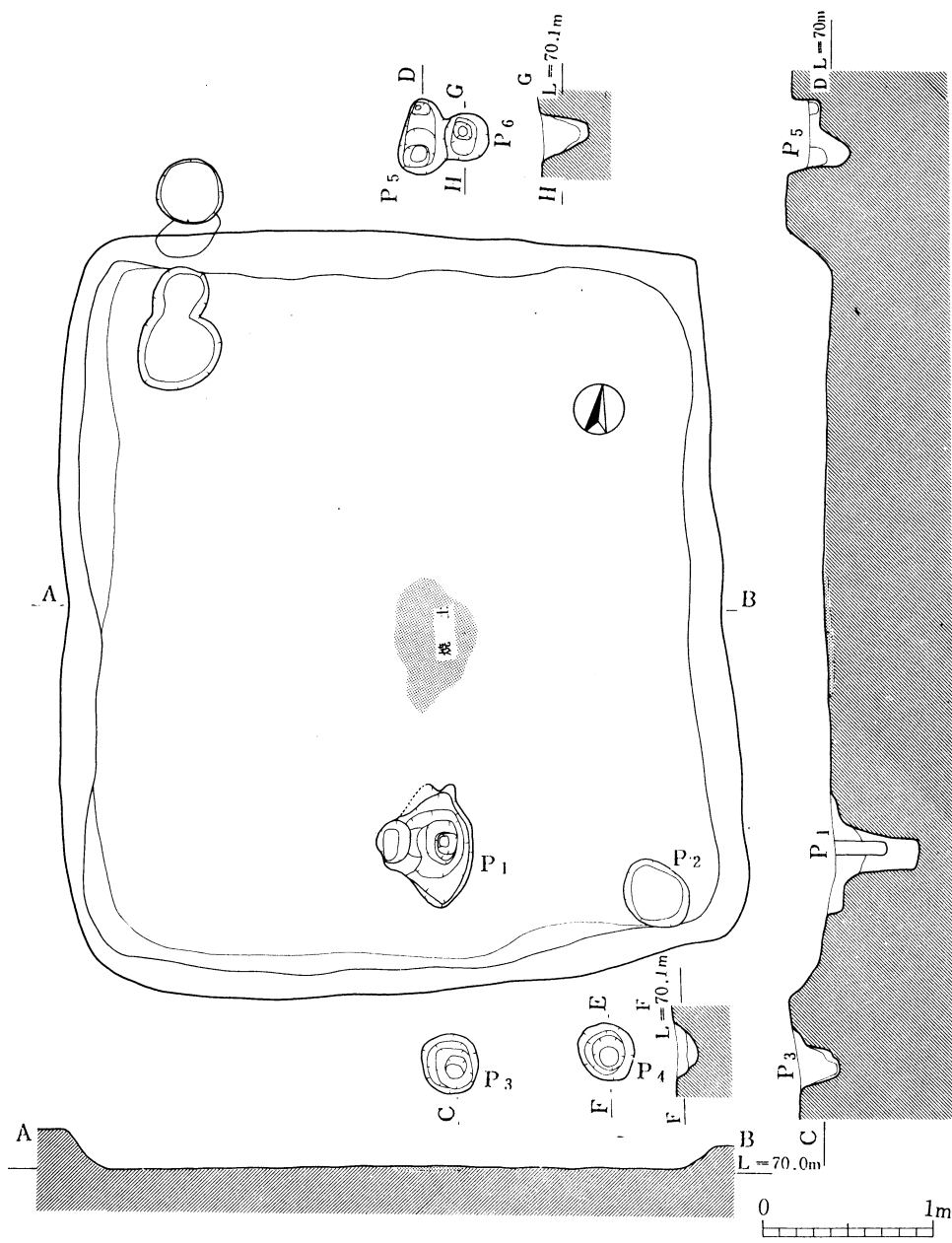
出土石器426は磨製石鏃である。入念に研磨されたえぐりの浅い三角形状を呈する。縁辺に剝落がみられる。427は中央のくぼんだ大型の石器で、表裏に敲打痕がみられる。石皿的な使用が考えられる台石である。428は軽石製品で深くくぼみをもつものである。くぼみは三ヶ所ある。



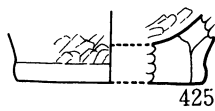
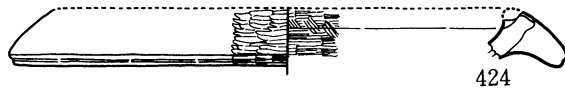
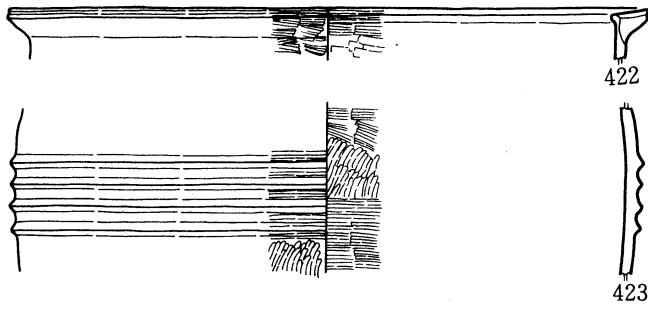
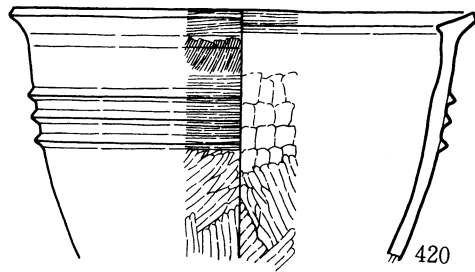
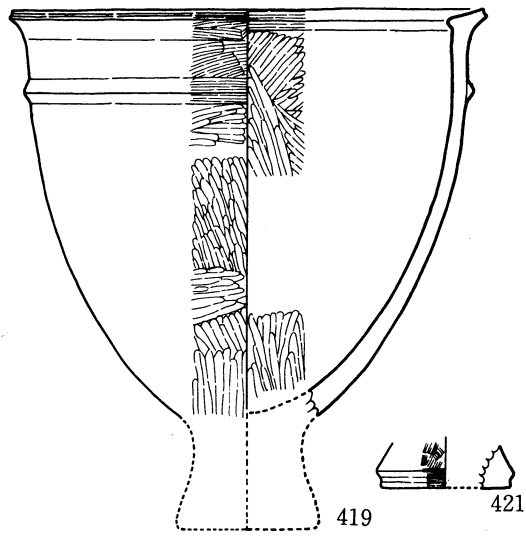
第77图 3号住居址遺物分布图



第78図 3号住居址遺物出土状況図

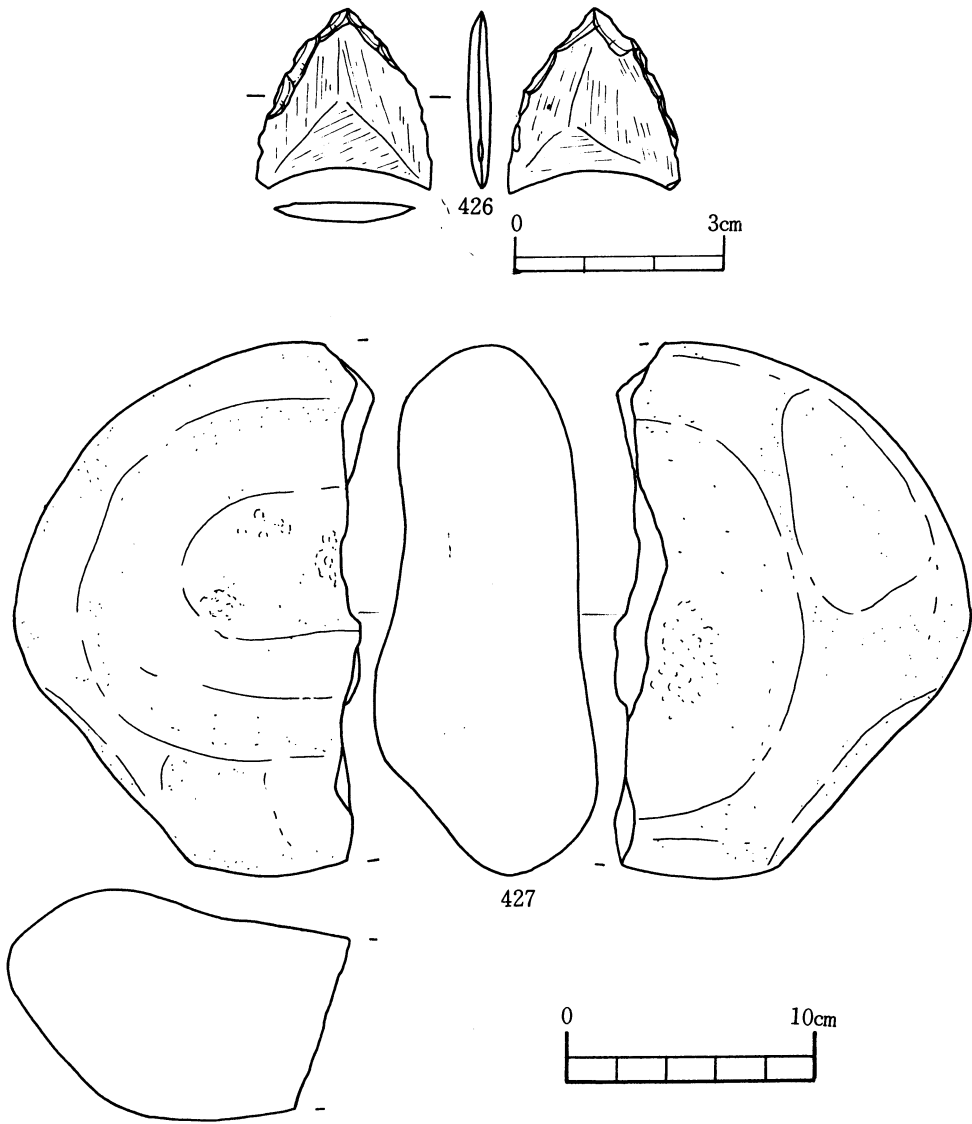


第79图 3号住居址实测图

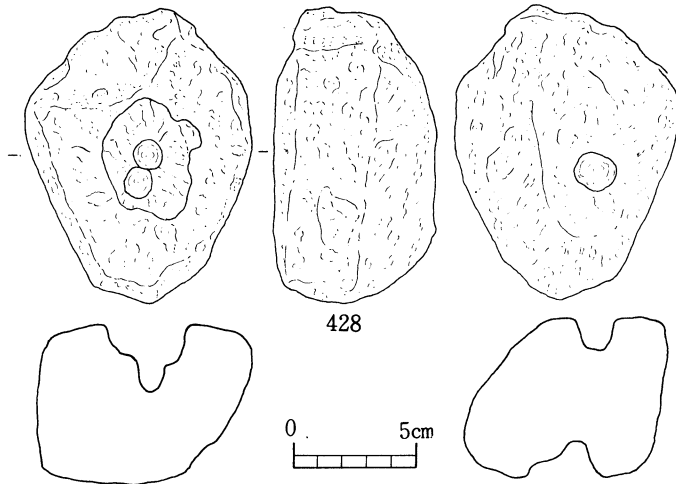


0 5cm

第80图 3号住居址出土遗物实测图(1)



第81图 3号住居址出土遺物実測図(2)



第82図 3号住居址出土遺物実測図(3)

### (3) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、幅12mという狭い調査区にもかかわらず総数8棟が発見された。8棟の内訳は、3間×4間のタイプが3棟、1間×1間が1棟、1間×2間が4棟である。さらに、3間×4間のタイプには、棟持ち柱を持つものと持たないものに分かれる。建物跡は、いずれも弥生時代の包含層のⅢ層下面で検出されたが、4号建物跡～8号建物跡付近はⅢ層包含層とともに若干の削平を受けていることが考えられる。

#### 1) 1号掘立柱建物跡 (第83～85図)

1号掘立柱建物跡は、B20区とC20区の境に検出された。2号竪穴住居址の西側に位置し、3号竪穴住居址の北東側に接近する位置にある。

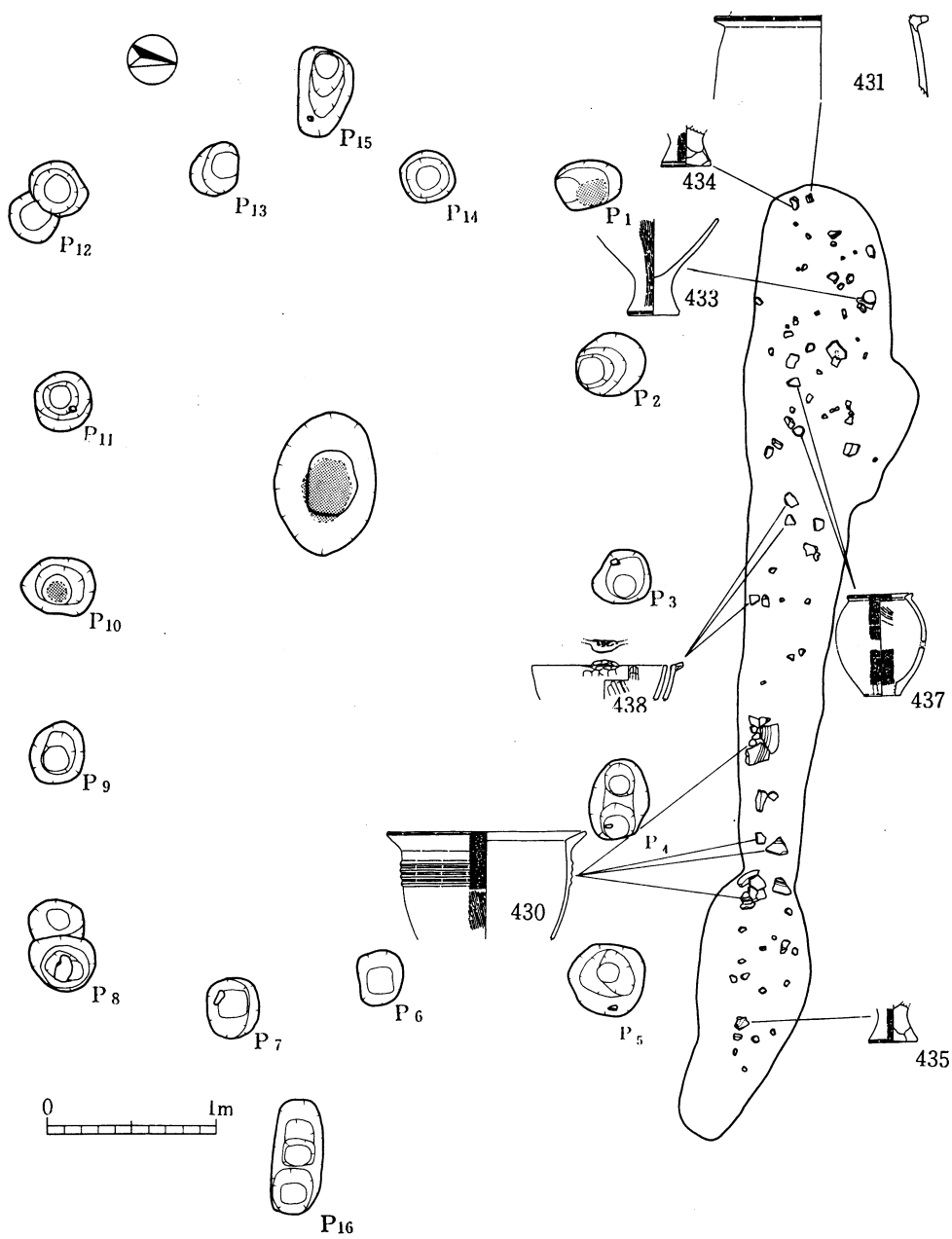
掘立柱建物跡は3間×4間の建物規模で、主軸をN-78°-Eの略東西方向にとる。掘立柱建物跡の形態は、略東西の梁間側に棟持ち柱を備えるタイプで、建物内の床面には炉跡状の焼土が確認され、北側の桁行間の外側には溝状の落ち込み部分が検出されるものである。

各柱穴は径35cm～50cm程度の比較的大きな掘り方がみられ、柱痕跡が確認されるものも存在する。特に、棟持ち柱のP<sub>15</sub>とP<sub>16</sub>は、柱穴の掘り方は梁間方向に拡った楕円形を呈し、柱痕跡は外側に寄った位置に検出されている。

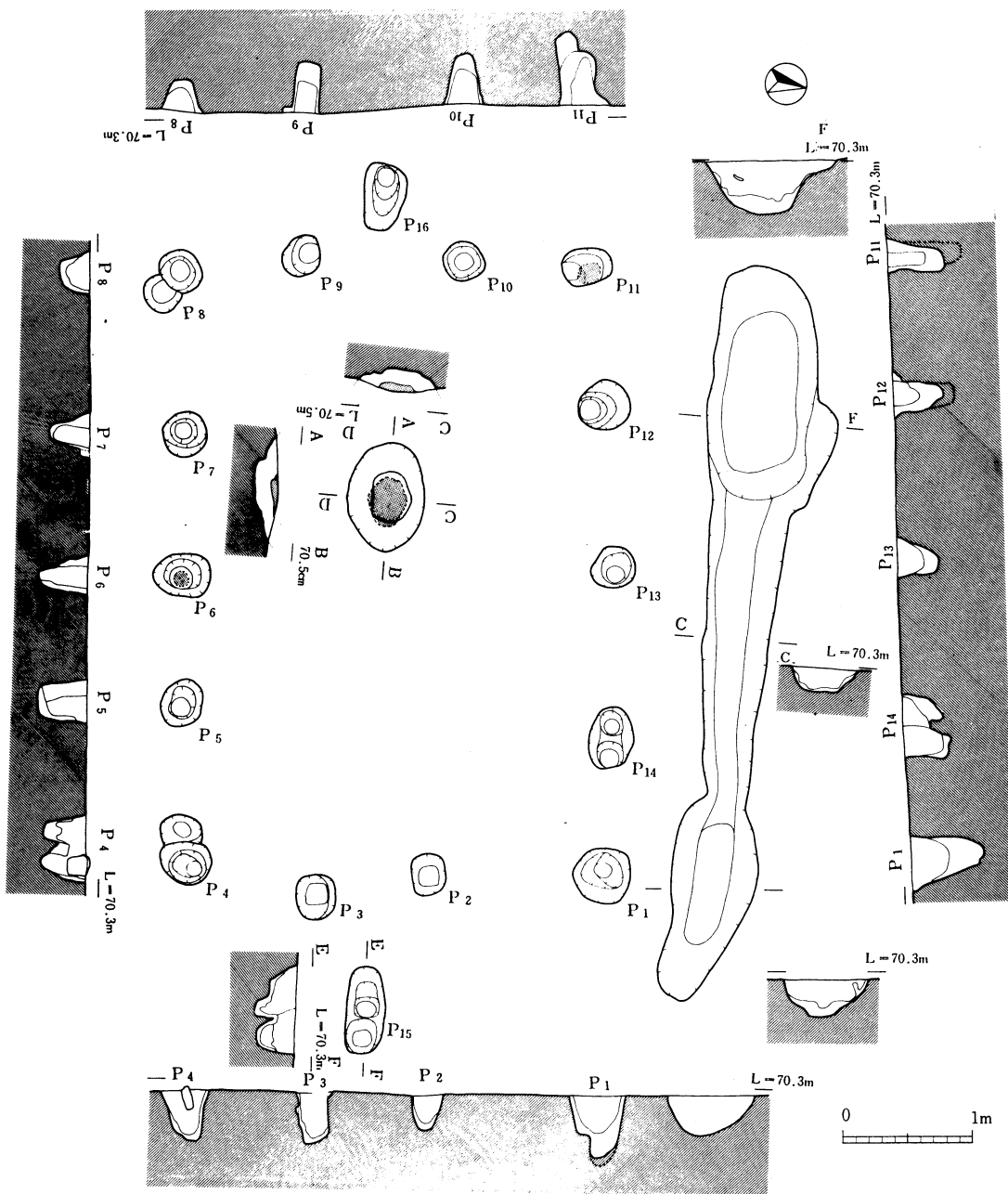
柱穴位置での建物規模は、次の通りである。

西側の梁間間 (P<sub>1</sub> - P<sub>12</sub>) は324cmで、東側の梁間間 (P<sub>5</sub> - P<sub>8</sub>) は329とほぼ等距離を測る。北側の桁行間 (P<sub>1</sub> - P<sub>5</sub>) は471で、南側の桁行間 (P<sub>12</sub> - P<sub>8</sub>) は470cmと全く等距離を測るもので、柱穴の均整な配置がおこなわれた建物跡である。しかし、各柱穴の

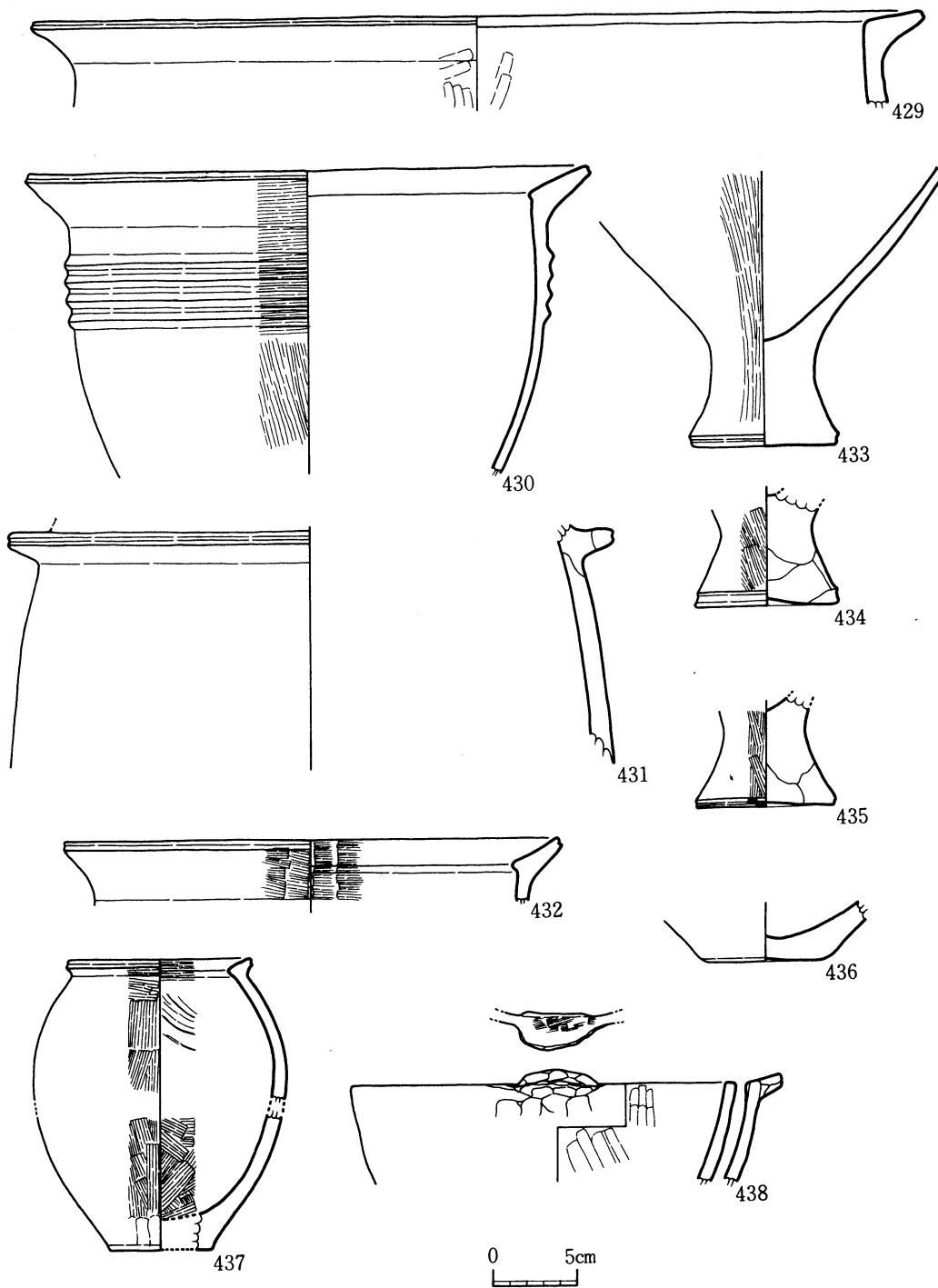




第83图 1号掘立柱建物跡遺物出土狀況図



第84图 1号掘立柱建物跡実測图



第85图 1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第12表 1号掘立柱建物跡の一覧表

P：柱穴 単位：cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	P	長径×短径×深さ
BC20区	N-78°-E	W-3間 324	N-4間 471	P <sub>16</sub> -P <sub>17</sub> 680	1	40×30×58	13	30×30×40
		E-3間 329	S-5間 470		2	40×40×49	14	35×30×40
梁間柱間		梁間間	桁行柱間	行行間	3	35×35×33	15	55×35×30
					4	50×35×37	16	70×31×35
P <sub>1</sub> -P <sub>14</sub> :100 P <sub>14</sub> -P <sub>13</sub> :122 P <sub>13</sub> -P <sub>12</sub> :104 P <sub>5</sub> -P <sub>6</sub> :136 P <sub>6</sub> -P <sub>7</sub> :90 P <sub>7</sub> -P <sub>8</sub> :105		P <sub>1</sub> -P <sub>12</sub> 324 P <sub>5</sub> -P <sub>8</sub> 329	P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :108 P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :132 P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :120 P <sub>4</sub> -P <sub>5</sub> :114 P <sub>12</sub> -P <sub>11</sub> :125 P <sub>11</sub> -P <sub>10</sub> :117 P <sub>10</sub> -P <sub>9</sub> :110 P <sub>9</sub> -P <sub>8</sub> :127	P <sub>1</sub> -P <sub>5</sub> 471 P <sub>12</sub> -P <sub>8</sub> 470	5	45×45×55	備考	
6	33×25×30		7		35×30×40			
					8	40×35×40		
					9	35×33×38		
					10	45×35×38		
					11	45×35×32		
					12	35×35×25		

柱間をみると若干いびつに配列している。柱間の計測数値は、西側の梁間柱間はP<sub>1</sub>-P<sub>14</sub>=100cm、P<sub>14</sub>-P<sub>13</sub>=122cm、P<sub>13</sub>-P<sub>12</sub>=104cm、東側の梁間柱間はP<sub>5</sub>-P<sub>6</sub>=137cm、P<sub>6</sub>-P<sub>7</sub>=90cm、P<sub>7</sub>-P<sub>8</sub>=105cmを測る。桁行柱間の北側はP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>=108cm、P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>=132cm、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>=120cm、P<sub>4</sub>-P<sub>5</sub>=114cmで、南側はP<sub>12</sub>-P<sub>11</sub>=125cm、P<sub>11</sub>-P<sub>10</sub>=117cm、P<sub>10</sub>-P<sub>9</sub>=110cm、P<sub>9</sub>-P<sub>8</sub>=127cmを測る。また、P<sub>4</sub>と隅柱のP<sub>8</sub>とP<sub>12</sub>には二ヶ所の掘り込みが認められ、立替えの可能性が考えられる。

棟持ち柱はP<sub>15</sub>とP<sub>16</sub>であるが、ほぼ梁間間の中央の線上に配置されている。なお、P<sub>16</sub>には、柱痕跡と考えられる落ち込みが同じ掘り方内に二個確認されている。そのため、P<sub>16</sub>の掘り方は長径70cmと長楕円形を呈している。棟持ち柱間の距離は、P<sub>15</sub>とP<sub>16</sub>の建物寄りの柱穴で660cm、P<sub>15</sub>とP<sub>16</sub>の外側の柱穴で680cmを測る。なお、柱穴の掘り方は、梁間方向へ向いた楕円形を呈しており、掘り方内の柱痕跡の位置から観察しても、斜めに掘られていることになる。柱穴位置からの建物の床面積は、約15㎡にあたる。

1号掘立柱建物跡には、北側の桁行間に並行して溝状遺構が検出されている。溝状遺構は、西側は梁間の線上から始まり、東側は梁間の線上からさらに1m程度東へ延びている。溝内は東西両端の一部が幅広くなり、この部分は検出面からの深さも深い。溝幅は、最大幅105cm、最小幅35cmを測る不定形な平面形を呈する。溝内からは、多量の遺物が出土している。

柱穴に囲まれた建物内床面の梁間間のほぼ中央で、桁行間の西側から3分の1の位置に、焼土が確認された。焼土部分の周辺は、長径85cm×短径60cmの楕円形状の変色部分が確認され、その中央に長径43cm×短径33cmの楕円形状の掘り方がある。この掘り方の上部に、長径38cm×短径30cmの楕円形状の焼土が存在している。焼土は、標高70.37mの高さで検出されている。

溝や柱穴は検出面の形状からみると若干の削平を受けていることが考えられるが、焼土はほぼ原位置の高さで検出されたことが考えられる。この焼土面の高さで、建物の床面を想定することは可能である。

429～438は、1号掘立柱建物跡に付設された溝内出土の遺物である。

429～435は、甕形土器である。429は逆「L」字状に外反する口縁部片である。430・432は、口縁部が「く」字状に外反するタイプである。口縁内面は僅かに張り出し、稜をつくる。430は、口径33.6cmを測る。頸部に僅かに隙間を置き肩部には四条の貼付突帯文を巡らせる。口縁部と突帯文間は丁寧な横位の刷毛ナデ整形で、胴部は刷毛目が施される。431は、口縁直下に台形上の幅広い貼付突帯文を巡らせる大型の甕形土器である。433～435は、甕形土器の底部である。甕形土器の底部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台である。底部裾部の端部は、面取りが行なわれその上に凹線文状の凹みが施されている。底面は、一般的には平坦な平底を呈するが、434・435は僅かに上げ底状の凹面をつくる。

436は、壺形土器の底部で平底である。

437は、口径11.0cm、復元器高17.3cmの完形に復元される小壺である。底部は平底で、胴部は球状に張る。口縁部は内湾し、「く」字状の短い拡張部を付ける。端部には凹線文状の凹みを施す。口縁部付近は横位の丁寧なナデ整形が行なわれ、胴部は刷毛目で仕上げられる。

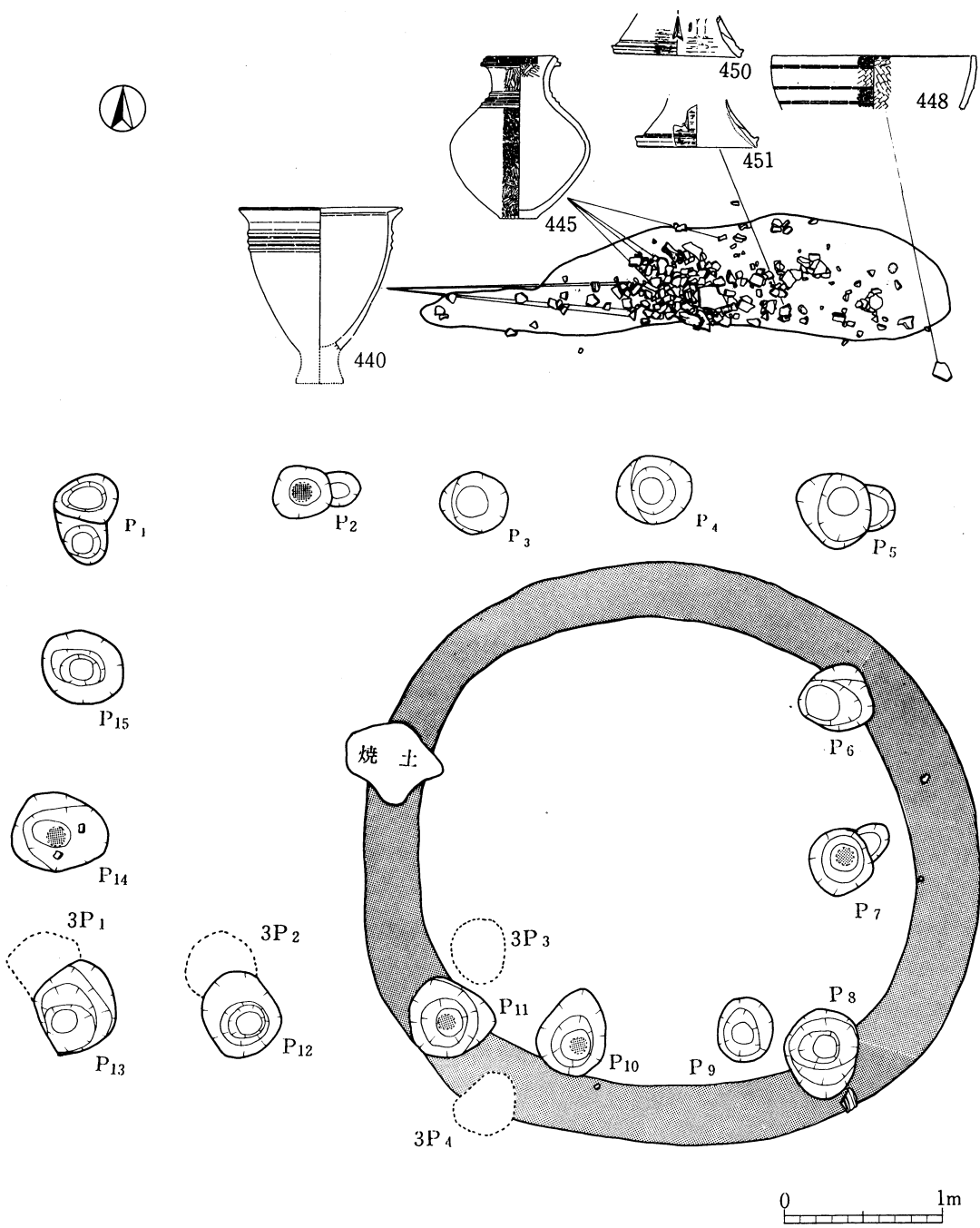
438は、口縁部が内湾気味に外反した鉢状の器形を呈す。口縁部は平坦におさめるが、幅5cm程度の把手状の張り出し部を付ける。

## 2) 2号掘立柱建物跡 (第86～90図)

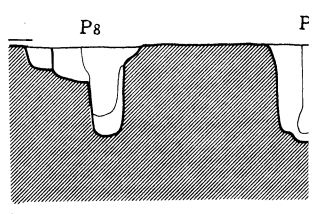
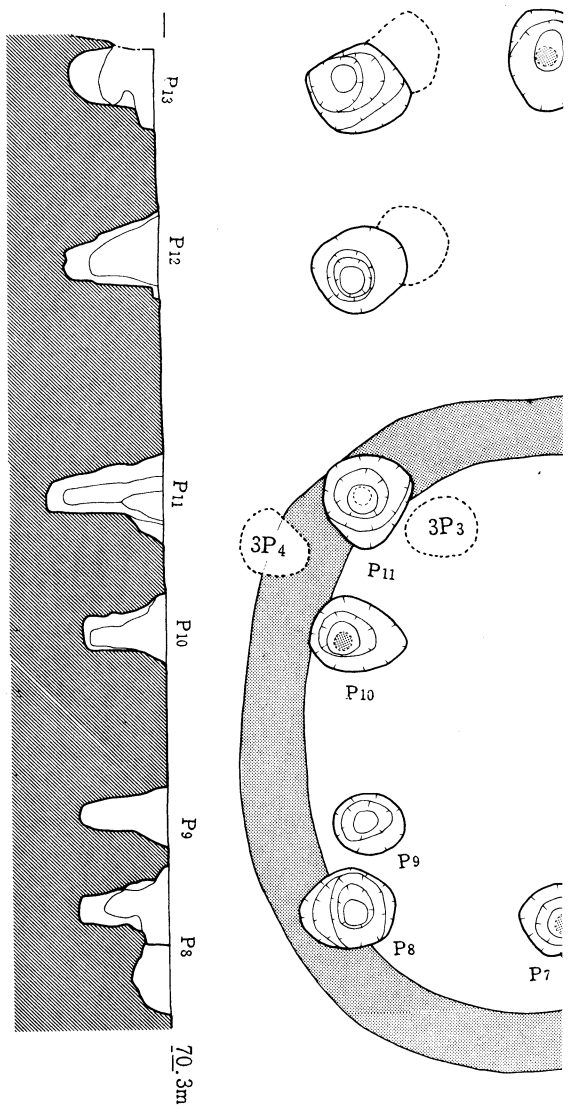
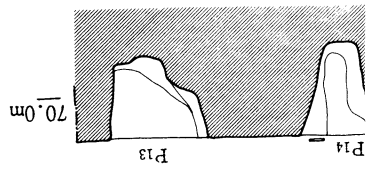
2号掘立柱建物跡は、C20区とC21区の境に検出された。2号竪穴住居址の西側に位置し、3号竪穴住居址の北西部に位置する。また、2号掘立柱建物跡は、3号掘立柱建物跡と円形周溝遺構との複雑な切り合い関係が確認されている。検出状態の切り合い関係を観察すると、円形周溝遺構を3号掘立柱建物跡が切り、3号掘立柱建物跡と円形周溝遺構を2号掘立柱建物跡が切った関係になる。すなわち、円形周溝遺構→3号掘立柱建物跡→2号掘立柱建物跡の順に構築されたことになる。第87図でみると、3号掘立柱建物跡のP<sub>4</sub>が円形周溝遺構を切り、2号掘立柱建物跡のP<sub>12</sub>とP<sub>13</sub>が3号掘立柱建物跡のP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を切り、2号掘立柱建物跡のP<sub>6</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>11</sub>と炉跡状の変色部分が円形周溝遺構を切っている。

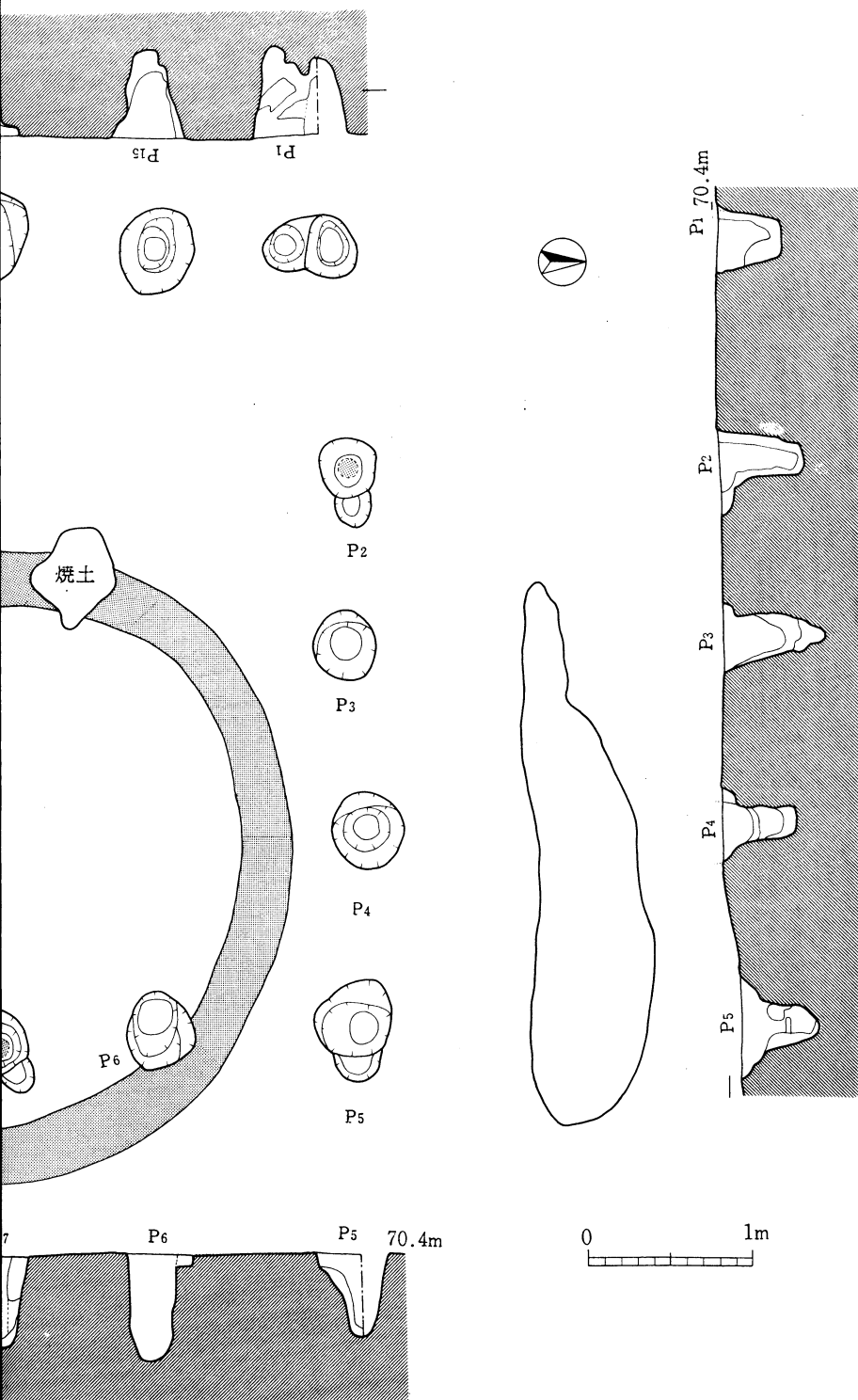
2号掘立柱建物跡は3間×4間(南側の桁行間は5間)の建物規模で、主軸はN-86°-Eを向く。2号掘立柱建物跡は、建物内の床面に炉跡状の変色部分が確認され、北側の桁行間の外側には1号掘立柱建物跡と同様の溝状の落ち込みが検出された。1号掘立柱建物跡に付くような棟持ち柱は存在しない。

各柱穴は径50cm～60cm程度の大きさに1号掘立柱建物跡より若干大きな掘り方がみられ、柱痕跡が確認されるものも多い。また南側桁行柱間が、北側桁行間より1間多い事実は注目される。



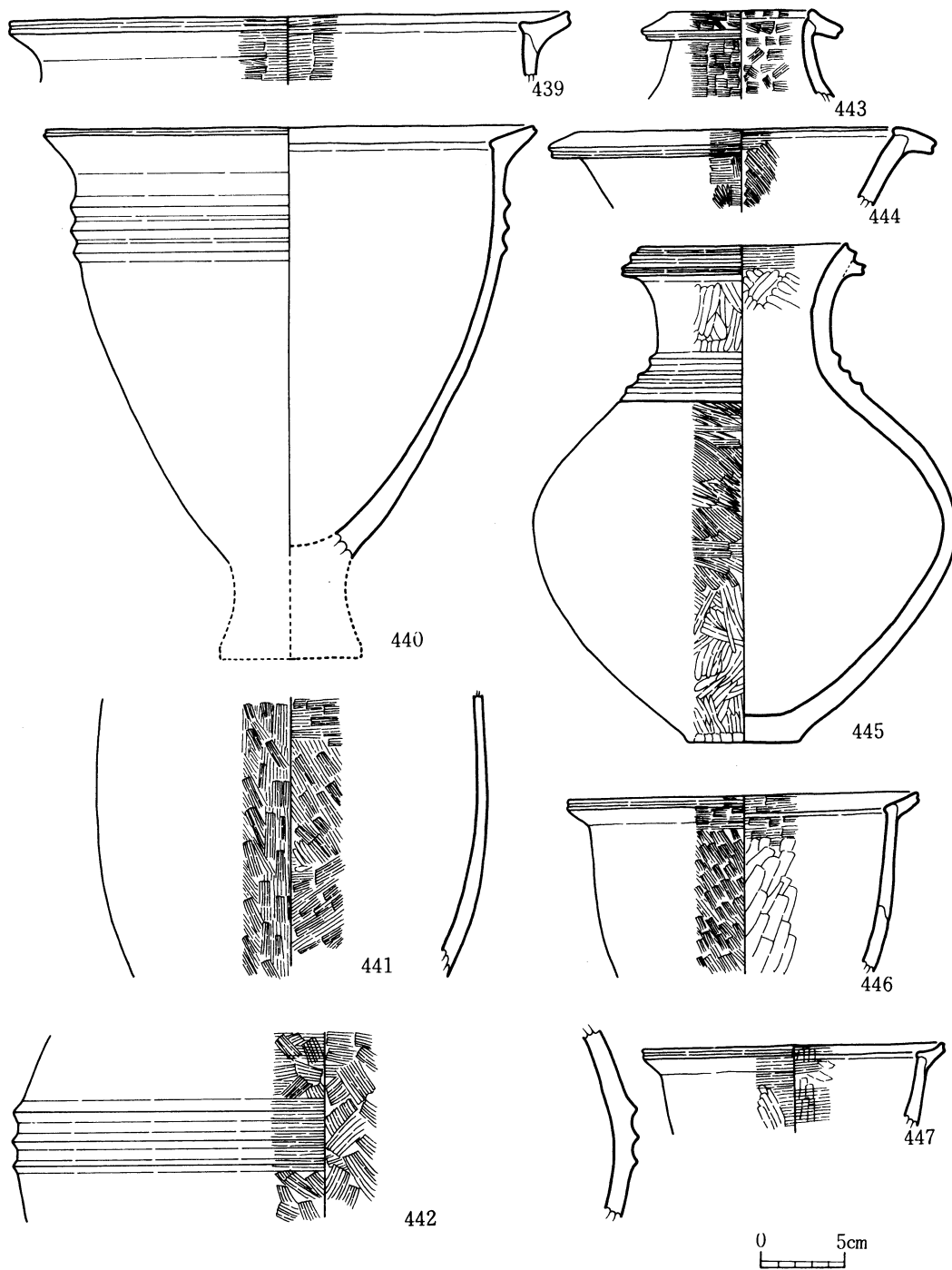
第86图 2号掘立柱建物跡遺物出土状況図





第87图 2号掘立柱建物跡実測图



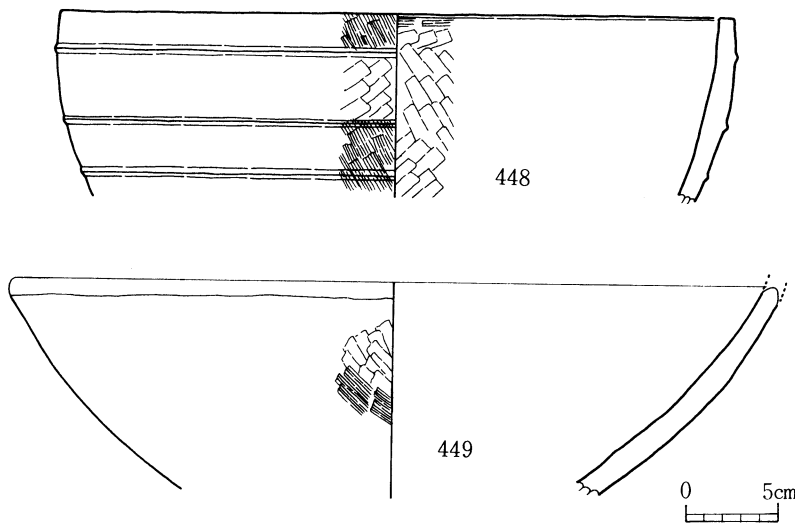


第88图 2号掘立柱建物跡出土遺物実測図(1)

第13表 2号掘立柱建物跡の一覧表

P:柱穴 単位:cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	P	長径×短径×深さ
C20・21区	N-86°-E	W-3間 336	N-4間 485		1	40×35×58	13	60×50×50
		E-3間 349	S-5間 487		2	35×35×54	14	60×50×55
					3	45×40×63	15	55×50×56
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	4	50×45×47	備考		
P <sub>1</sub> -P <sub>15</sub> :110	} P <sub>1</sub> -P <sub>13</sub> 3 3 6	P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :138	} P <sub>1</sub> -P <sub>5</sub> 4 8 5	5	50×50×51			
P <sub>15</sub> -P <sub>14</sub> :108		P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :109		6	50×45×66			
P <sub>14</sub> -P <sub>13</sub> :119	} P <sub>5</sub> -P <sub>8</sub> 3 4 9	P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :115	} P <sub>13</sub> -P <sub>8</sub> 4 8 7	7	45×40×58			
P <sub>5</sub> -P <sub>6</sub> :130		P <sub>4</sub> -P <sub>5</sub> :124		8	55×50×53			
P <sub>6</sub> -P <sub>7</sub> :99		P <sub>13</sub> -P <sub>12</sub> :118		9	40×35×52			
P <sub>7</sub> -P <sub>8</sub> :122		P <sub>12</sub> -P <sub>11</sub> :127		10	55×45×48			
		P <sub>11</sub> -P <sub>12</sub> :85		11	55×52×68			
		P <sub>10</sub> -P <sub>9</sub> :107		12	55×50×56			
		P <sub>9</sub> -P <sub>8</sub> :53						



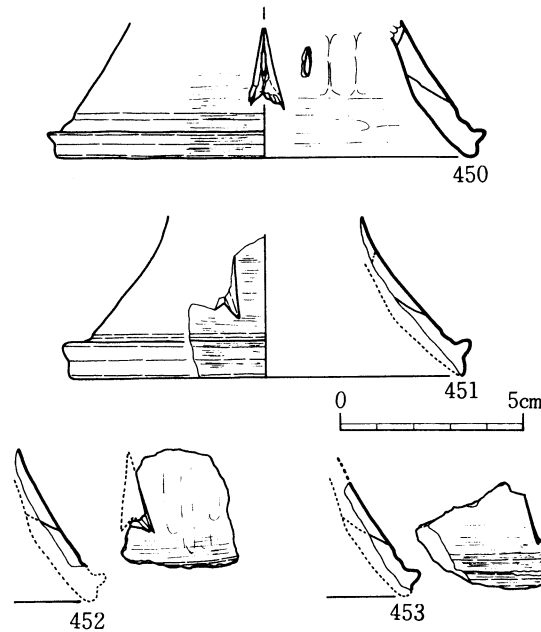
第89図 2号掘立柱建物跡出土遺物実測図(2)

柱穴位置での建物規模は、次の通りである。

西側の梁間間(P<sub>1</sub>-P<sub>13</sub>)は338cmで、東側の梁間間(P<sub>5</sub>-P<sub>8</sub>)は352cmと若干長い。北側の桁行間(P<sub>1</sub>-P<sub>5</sub>)は488cmで、南側の桁行間(P<sub>13</sub>-P<sub>8</sub>)は490cmと全く等距離を測る。各柱穴の柱間をみると若干いびつに配列している。柱間の計測数値は、西側の梁間柱間はP<sub>1</sub>-P<sub>15</sub>=110cm、P<sub>15</sub>-P<sub>14</sub>=108cm、P<sub>14</sub>-P<sub>13</sub>=119cm、東側の梁間柱間はP<sub>5</sub>-P<sub>6</sub>=130cm、P<sub>6</sub>-P<sub>7</sub>=99cm、P<sub>7</sub>-P<sub>8</sub>=122cmを測る。桁間柱間の北側はP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>=138cm、P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>=109cm、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>=115cm、P<sub>4</sub>-P<sub>5</sub>=124cmで、南側はP<sub>13</sub>-

$P_{12} = 118\text{ cm}$ 、 $P_{12} - P_{11} = 127\text{ cm}$ 、  
 $P_{11} - P_{10} = 85\text{ cm}$ 、 $P_{10} - P_9 = 107\text{ cm}$ 、  
 $P_9 - P_8 = 53\text{ cm}$ を測る。また、  
 $P_2$ と $P_7$ と隅柱の $P_1$ と $P_5$ には二  
ヶ所の掘り込みが認められ、立替えの  
可能性が考えられる。

2号掘立柱建物跡には、北側の桁行  
間に並行して溝状遺構が検出されてい  
る。溝状遺構は、西側は桁行柱 $P_3$ が  
ら東側に残り、東側は梁間間の線上か  
らわずかに東へ延びている。溝は床面  
をわずかに残す程度の残存であるが、  
上部には遺物は重なって多量に出土し  
ている。溝は、最大幅80cm程度が残存  
している。



第90図 2号掘立柱建物跡出土遺物実測図(3)

柱穴に囲まれた建物内床面の梁間間のほぼ中央で若干西側梁間間寄りに、焼土によると考えられる変色部分が確認された。変色部分は、長径65cm×短径55cmの楕円形状を呈する。変色部分は、標高70.30mで1号掘立柱建物跡の焼土と同レベルの高さである。溝や柱穴は検出面の形状から若干の削平を受けていることが考えられるが、変色部分はほぼ原位置の高さで検出されたものと考えられる。この焼土面の高さで、建物の床面を想定することが可能である。柱穴位置からの建物の床面面積は、約16㎡にあたる。

439～453は、2号掘立柱建物跡に付設された溝内出土の遺物である。

439～441は、甕形土器である。440は、口径29.4cmを測る。口縁部は「く」字状に外反し、口縁直下には若干隙間を置いて貼付突帯文を三条巡らす。441は、胴部下端に近い部位であるが、若干不安定な器形を呈する。

442～445は、壺形土器である。口縁部の器形は、それぞれ異なる。443は、内湾気味にすぼまった口縁部に、垂れ下がった口縁拡張部を付ける。口径は、8.5cmと小さい。444は、大きく外反した口縁部に若干垂れ下がり気味の幅広い口縁拡張部を付けるタイプである。445は、壺形土器の完形品である。口径12cm、器高29.7cmを測る。口縁部は直線的に外反し、比較的短い。口縁端部の外側に台形状の貼付突帯文を巡らせ、口縁拡張部とする。頸部には三条の貼付突帯文を巡らせる。胴部は、ソロバン玉状に大きく張る。底部は、安定した平底を呈する。口縁拡張部と突帯文間は横位の丁寧な刷毛ナデ整形で、頸部や胴部は刷毛目やヘラ磨き整形で堅固に仕上げる。442は最大胴部に貼付突帯文を巡らしている。

446・447は、口径20.8cmと18.0cmを測る鉢形土器である。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は「く」字状に外反する。

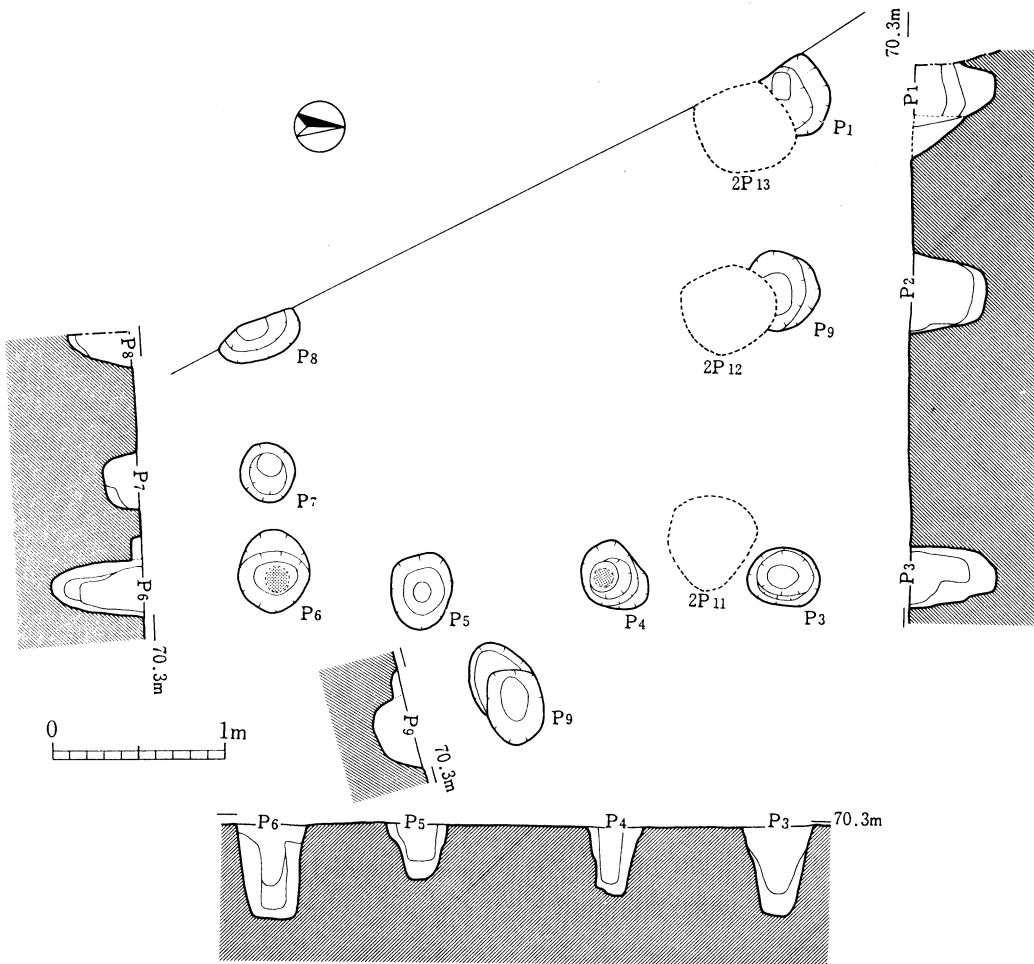
448は、浅鉢形を呈する珍しい器形である。口縁部は内湾気味に外反し、口唇部は平坦におさめる。器外面には、間隔を置いて細い丁寧な貼付突帯文を巡らせる。

449は、底部に近い胴部片で、上端は粘土帯が剥落した部分である。珍しい器形である。

450～453は、高杯の脚部で、ほぼ同個体と考えられる。脚部は接地面へ大きく広がる。底部側面は面取り状に整形され、上端は上方にはねる。器面には矢羽根状の透かしが彫られ、透かしは裏面まで貫通している。裏面には、しぼり痕も観察される。底部付近は横位の丁寧なナデ整形がみられ、上位はへら磨き状の仕上げで堅固である。

### 3) 3号掘立柱建物跡 (第91図)

3号掘立柱建物跡は、C21区を中心にC20区へわずかに延びる位置に検出された。3号竪穴住居址の北西側に位置する。また、3号掘立柱建物跡は、2号掘立柱建物跡と円形周溝遺構との複雑な切り合い関係が確認されている。検出状態の切り合い関係は先に説明した通りである。



第91図 3号掘立柱建物跡実測図

第14表 3号掘立柱建物跡の一覧表

P：柱穴 単位：cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	P	長径×短径×深さ
C20・21区	N-82°-E	W-3間：?	?	?	1	45×40×47	8	50×?×37
		E-3間：295			2	45×45×43	9	60×40×22
梁間柱間		梁間間	桁行柱間	桁行間	3	43×35×51	備考 棟持ち柱付	
$P_3-P_4:105$ $P_4-P_5:106$ $P_5-P_6:85$		$P_3-P_6$ 295	$P_1-P_2:122$ $P_2-P_3:164$	$(285+a)$	4	40×40×40		
			$P_6-P_7:79$ $P_7-P_6:67$		$(146+a)$	5	45×35×33	
				6		50×40×55		
				7	35×33×18			

なお、3号掘立柱建物跡は、西側の梁間間と南側の桁行間の一部は用水路によって破壊されている。検出された柱穴は、東側の梁間間と北側の桁行柱間2間と南側の桁行柱間2間だけである。なお、東側の梁間間の東方向に棟持ち柱が検出されている。柱穴の配置から、3号掘立柱建物跡の棟持ち柱と想定される。各柱穴は径35cm～50cm程度の規模の大きいものである。

3号掘立柱建物跡は西側梁間間部分は削平されているため、桁行間方向からの主軸はN-82°-Eを測る。

柱穴位置での建物規模は次の通りである。

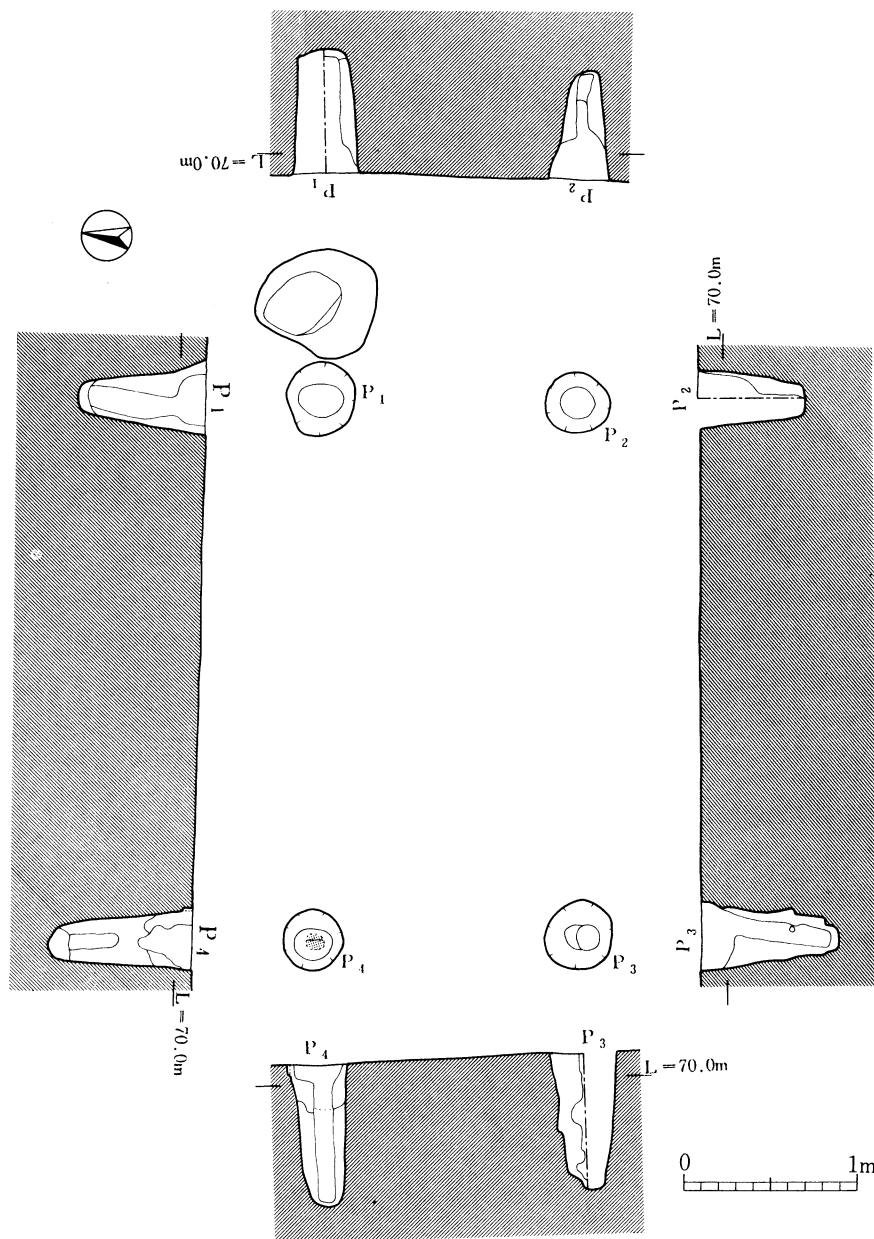
東側の梁間 ( $P_3-P_6$ ) は 295 cm を測るが、西側の梁間は削平のため不明である。残存する柱穴の柱間をみると柱間の距離が不均整である。特に、南側の桁行柱間の  $P_6 \cdot P_7$  は、柱間が近く、2号掘立柱建物跡と同様、南側桁行柱間は1間多く柱間をもつタイプと考えられる。柱間の計測数値は、東側の梁間柱間は  $P_3-P_4 = 105$  cm、 $P_4-P_5 = 106$  cm、 $P_5-P_6 = 85$  cm を測る。桁行柱間はいずれも西側が削平されており、第11表に記載した柱間だけが判明しているだけである。なお、棟持ち柱にあたる柱穴の中心は、東側の梁間間の線上から東方向に約70cm程度離れた距離に位置する。

4) 4号掘立柱建物跡 (92図)

4号掘立柱建物跡は、A21区を中心にB21区へわずかに延びる位置に検出された。これまでの3号掘立柱住居址や1号～3号掘立柱建物跡とは、若干距離をもって南方向へ離れた位置に所在する。直ぐ北側には、直角に曲がる形態の不明な溝状の遺構が配置する。柱間の長い方を主軸にとれば、主軸はN-82°-Eを向く。

4号掘立柱建物跡は、略東西に長い1間×1間の建物跡である。柱間の長い方を桁行間とすれば、西側の梁間柱間は  $P_1-P_4 = 150$  cm で、東側は  $P_2-P_3 = 158$  cm を測る。北側の桁行柱間は  $P_1-P_2 = 312$  cm で、南側は  $P_4-P_3 = 316$  cm を測る。

4号掘立柱建物跡で注目すべきは、柱穴の規模である。柱穴の大きさは径35cm～45cm程度を測るが、第12表のように柱穴の深さは検出面から62cm～85cmと非常に深いことが大きな特徴と



第93図 5号掘立柱建物跡実測図

第15表 4号掘立柱建物跡の一覧表

P:柱穴 単位:cm

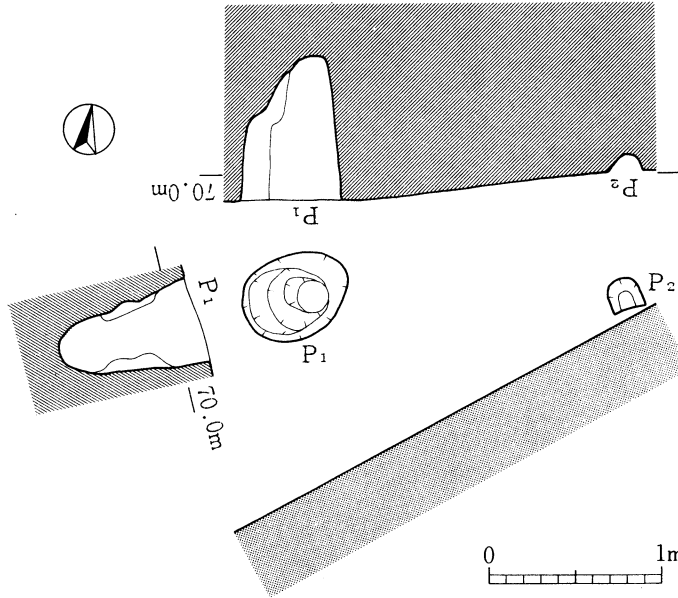
出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	備考
A・B21区	N-82°-E	W-1間 150	N-1間 312		1	38×35×62	
		E-1間 158	S-1間 316		2	40×40×80	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	37×35×84		
P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :150		P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :312		4	45×40×75		
P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :158		P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :316		5			

してあげられる。

5) 5号掘立柱建物跡 (第93図)

5号掘立柱建物跡は、A22区に位置するが、柱穴の位置から建物の中心は用地外に延びることが考えられる。主軸はN-83°-Eを向き、4号掘立柱建物跡の略南西方向に位置する。

5号掘立柱建物跡からは、柱穴が二本検出された。P<sub>1</sub>はその規模から主柱と考えられ、長径65cm、短径50cm、深さ85cmの大きなものである。P<sub>2</sub>は長径20cm、短径20cm、



第93図 5号掘立柱建物跡実測図

深さ10cmと規模は小さく、これは1間×2間の建物の中柱(添柱)と考えられる。柱間(これは桁行柱間にあたる)は、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>=183cmを測る。

6) 6号掘立柱建物跡 (第94図)

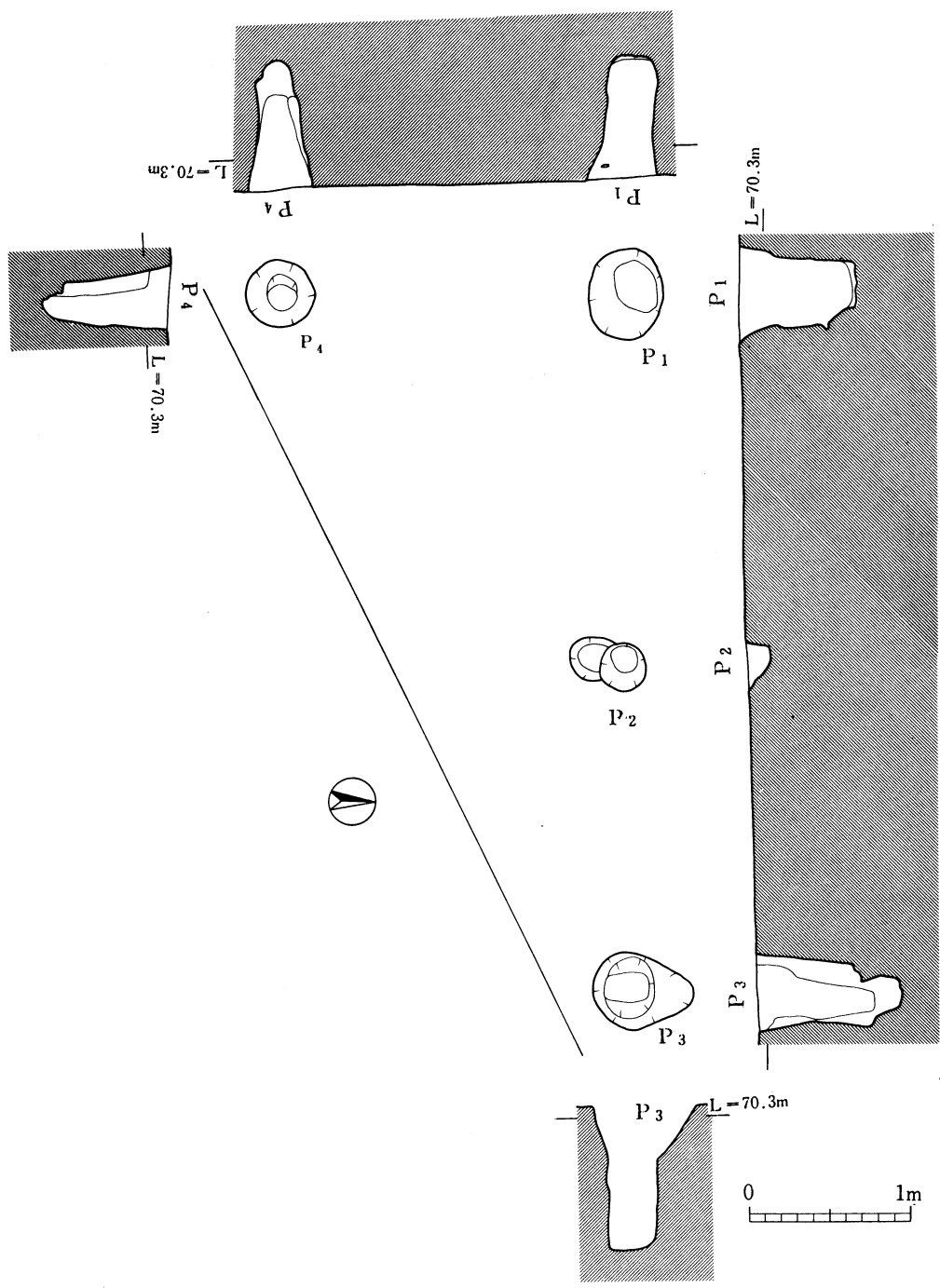
6号掘立柱建物跡は、A23区に検出された。1間×2間が想定される建物で、南側の桁行方向の二本は用地外に延びている。柱間の長い方を主軸とすれば、主軸はN-84°-Eを向く。

西側の梁間柱間は、P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>=214cmを測る。北側の桁行間は、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>=444cmを測る。桁行柱間はP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>=234cm、P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>=210cmを測る。なお、主柱にあたるP<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>はいずれも深く74cm~91cmを測る。中柱にあたるP<sub>2</sub>は、わずか16cmと浅い。

第16表 6号掘立柱建物跡の一覧表

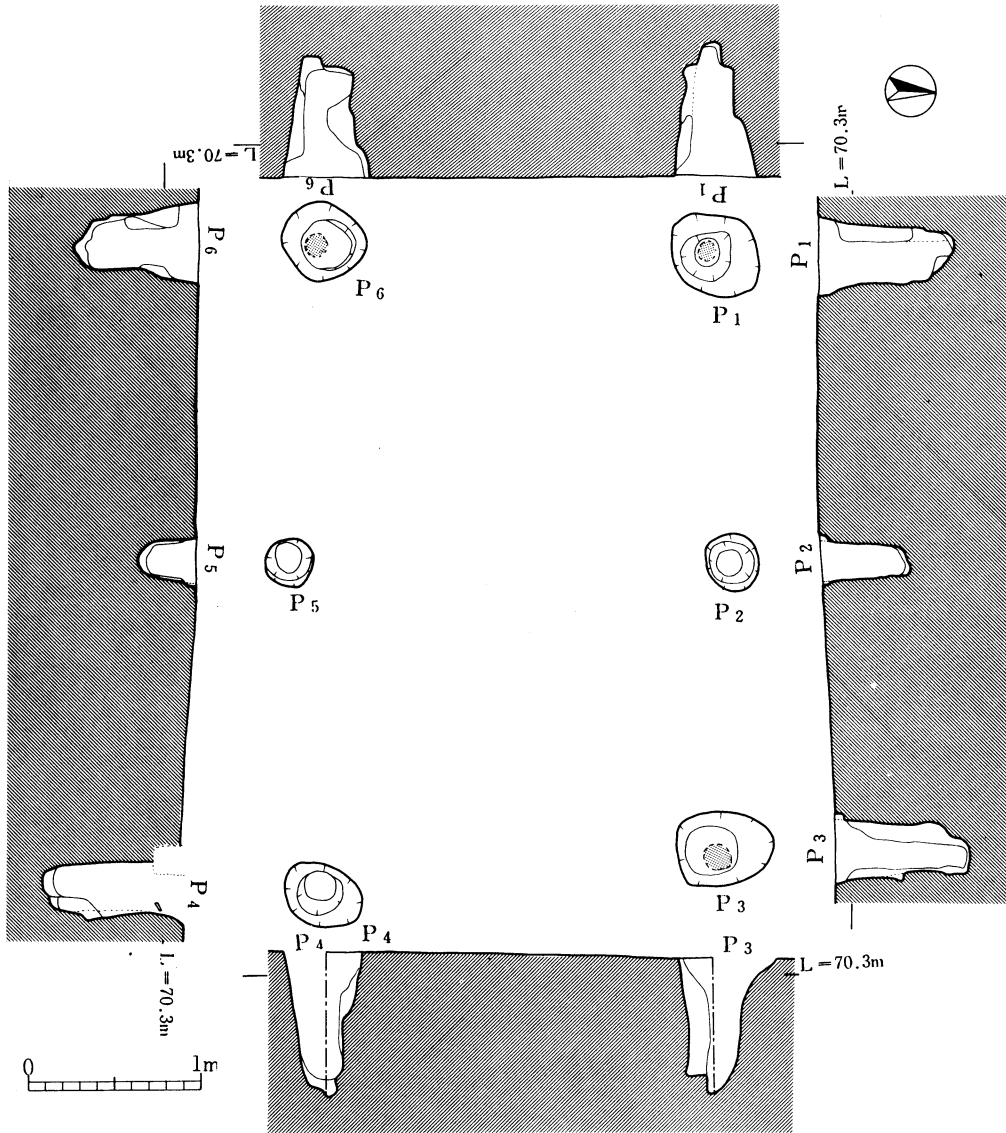
P:柱穴 単位:cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	備考
A23区	N-84°-E	W-1間 214	N-2間 444		1	57×50×74	
					2	30×30×16	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間		3	65×50×91	
P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :214		P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :234 P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :210	P <sub>1</sub> -P <sub>3</sub> 444		4	43×42×81	
				5			



第94图 6号掘立柱建物迹实测图





第95図 7号掘立柱建物跡実測図

第17表 7号掘立柱建物跡の一覧表

P:柱穴 単位:cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	備考
A・B23区	N-89°-E	W-1間 228	N-2間 353		1	50×45×79	
		E-1間 230	S-2間 372		2	32×32×52	
梁間	柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	55×47×79	
P <sub>1</sub> -P <sub>6</sub> :228			P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :182	} P <sub>1</sub> -P <sub>3</sub>	4	48×40×80	
P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :230			P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :170		} 3 5 3	5	
			P <sub>6</sub> -P <sub>5</sub> :182	} P <sub>6</sub> -P <sub>4</sub>	6	50×48×72	
			P <sub>5</sub> -P <sub>4</sub> :191		} 3 7 2	7	

7) 7号掘立柱建物跡 (第95図)

7号掘立柱建物跡は、B23区を中心に検出され一部A23区に延びる。ほぼ6号掘立柱建物跡の北側に並列する。建物は、1間×2間である。主軸方向は、N-89°-Eを向く。

建物の規模は、梁間間がP<sub>1</sub>-P<sub>6</sub> = 228 cmとP<sub>3</sub>-P<sub>4</sub> = 230 cmで、ほぼ同距離であるが、桁行間はP<sub>1</sub>-P<sub>3</sub> = 353 cmとP<sub>6</sub>-P<sub>4</sub> = 372 cmと南側桁行間が若干長い。そのため、建物の柱穴の配列は、若干いびつになる。

柱穴の規模は、主柱が深さ72cm~80cmで、中柱は深さ35cmと52cmを測る。7号掘立柱建物跡の特徴の一つは、この中柱が深いことがあげられる。

8) 8号掘立柱建物跡 (第96図)

8号掘立柱建物跡はB24区に検出されているが、この建物跡は本調査区では最も西方に位置することになる。建物の規模は1間×2間で、7号掘立柱建物跡の西方に位置する。主軸方向は、N-90°-Eを向く。

建物の規模は、梁間間がP<sub>1</sub>-P<sub>6</sub> = 224 cmとP<sub>3</sub>-P<sub>4</sub> = 227 cmを測り、桁行間はP<sub>1</sub>-P<sub>3</sub> = 396 cmとP<sub>6</sub>-P<sub>4</sub> = 394 cmのほとんど同距離を測る。このように8号掘立柱建物跡の柱穴は、最も均整に配列している建物である。

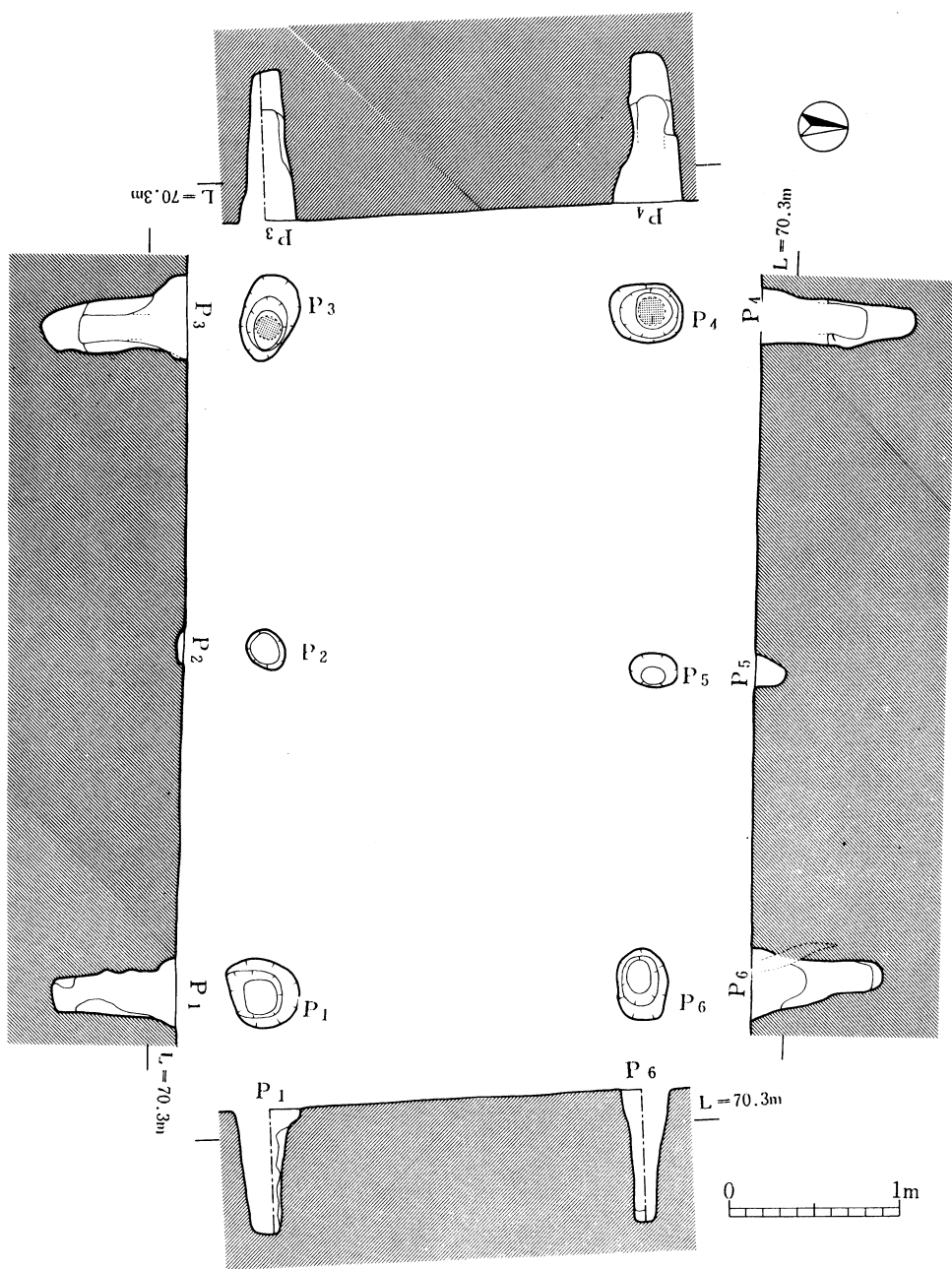
柱穴の規模は、主柱は74cm~91cmと深い、中柱は5 cmと18cmを測る浅いものである。

453は、建物のP<sub>5</sub>の埋土中から出土した甕形土器の口縁部片である。口縁部は、逆「L」字状に外反するタイプで、外方に拡張した端部平坦面には凹線文状の凹みを施す。口径は、19 cmを測る。口縁部付近は丁寧な横位の刷毛ナデ整形がおこなわれ、その他は刷毛目が施される。

第18表 8号掘立柱建物跡の一覧表

P:柱穴 単位:cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	備考
B24区	N-90°-E	W-1間 224	N-2間 396		1	42×40×74	
		E-1間 227	S-2間 394		2	25×22×5	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	51×33×87		
P <sub>1</sub> -P <sub>6</sub> :224 P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :227			P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :204	} P <sub>1</sub> -P <sub>3</sub>	4	43×35×91	
			P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :191		} 396	5	
			P <sub>6</sub> -P <sub>5</sub> :178	} P <sub>6</sub> -P <sub>4</sub>	6	43×30×79	
			P <sub>5</sub> -P <sub>4</sub> :216		} 394		



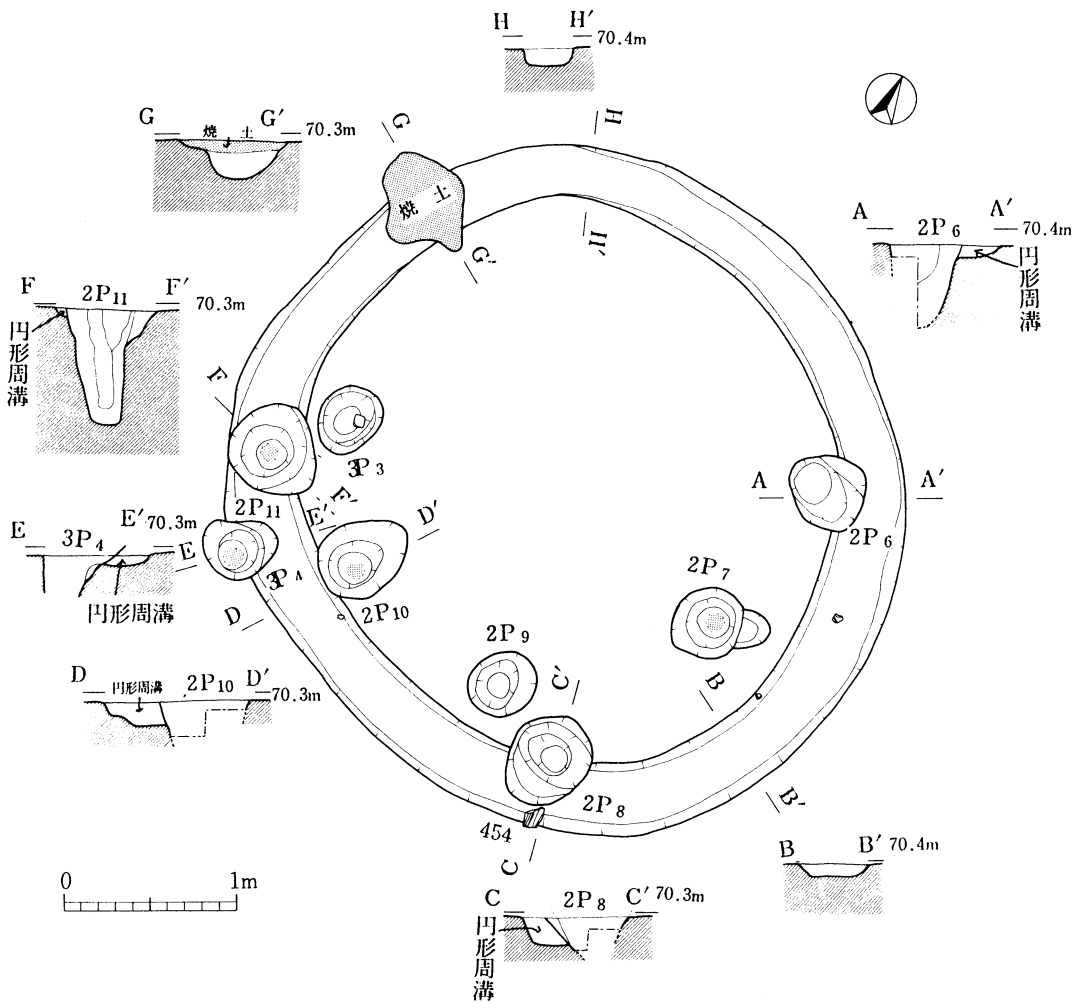
第96图 8号掘立柱建物跡実測図

(4) 円形周溝遺構 (第98図・第99図)

円形周溝は、C20区に位置している。円形周溝遺構は、2号掘立柱建物跡と3号掘立柱建物跡との複雑な切り合い関係が確認されている。検出状態の切り合い関係を観察すると、円形周溝遺構を3号掘立柱建物跡が切り、3号掘立柱建物跡と円形周溝遺構を2号掘立柱建物跡が切った関係になる。すなわち、円形周溝遺構→3号掘立柱建物跡→2号掘立柱建物跡の順に構築されたことになる。第87図でみると、3号掘立柱建物跡のP<sub>4</sub>が円形周溝遺構を切り、2号掘立柱建物跡のP<sub>12</sub>とP<sub>13</sub>が3号掘立柱建物跡のP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を切り、2号掘立柱建物跡のP<sub>6</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>11</sub>と炉跡状の変色部分が円形周溝遺構を切っていることになる。

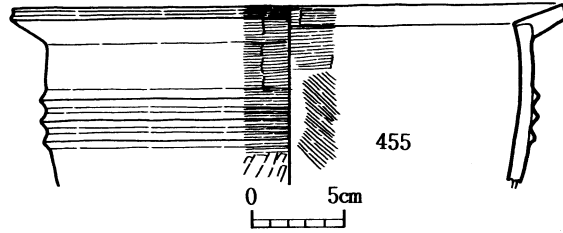


第97図 8号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第98図 円形周溝遺構実測図

円形周溝遺構は、周溝の外周で東西方向4.00m（内径3.14）×南北方向3.75m（内径3.00）を測り、若干東西に長い。周溝の幅は、35cm～45cm程度が検出されている。なお、円形周溝遺構は、



第99図 円形周溝遺構出土遺物実測図

本体の周溝以外は、これに付属すると考えられる遺構は検出されていない。ただ、C-C'断面の近くの周溝内から、甕形土器の口縁部破片（455）が出土している。

周溝の切り合い状態と周溝の規模をみると、次のようになる。A-A'断面では、2号掘立柱建物跡の柱穴のP<sub>6</sub>で切られている。この部分で周溝の深さは7cm程度を測る。B-B'断面では、周溝の幅は40cmで深さは7cmを測る。C-C'断面では、2号掘立柱建物跡の柱穴のP<sub>8</sub>に切られているが、周溝の深さは15cmを測る。D-D'断面では、2号掘立柱建物跡の柱穴のP<sub>10</sub>に切られているが、周溝の深さは13cmを測る。E-E'断面では、3号掘立柱建物跡の柱穴のP<sub>4</sub>に切られているが、周溝の深さは5cmと浅い。F-F'断面では、2号掘立柱建物跡の柱穴P<sub>11</sub>で切られている。G-G'断面では、周溝の上に焼土による変色部分がのっている。変色部分の厚さは7cm程度がみられ、それ以下15cmが周溝の深さである。H-H'断面では、周溝の幅は30cmで深さは10cmを測る。以上が切り合い関係や周溝の規模であるが、このように円形周溝遺構は、2号掘立柱建物跡や3号掘立柱建物跡によって切られており、これらの遺構に先だって円形周溝が存在したことが判明した。

円形周溝遺構の溝内からの出土遺物は、455の甕形土器の破片が1点ある。455は、口径29.6cmを測る。口縁部は、「く」字状に外反し、胴部は若干丸味をもつ。胴部には頸部屈曲部から若干隙間を置いて三条の貼付突帯文が巡らされるタイプである。口縁部から貼付突帯文間は横位の丁寧な刷毛ナデ整形が施され、それ以下はヘラナデ整形の仕上げがみられる。

## 2 出土遺物

前畑遺跡の一般の遺物の出土傾向は、住居址や掘立柱建物跡などの遺構からは完形品に近い遺物がまとまって出土しているが、Ⅲ層の包含層においては遺物はさほど多くない。一つには、耕作土（表層）直下が包含層であり、後世において削平されていることにも起因している。住居址の周辺は、旧道が存在し、戦時中は掩体壕など大規模な工事が行なわれ大々的な破壊を受けている。

出土遺物には、土器と石器がある。土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、丹塗土器などがある。石器には、磨製・打製石鏃、磨製・打製石斧、磨石、砥石などがある。

### 1) 土器 (第101～106図)

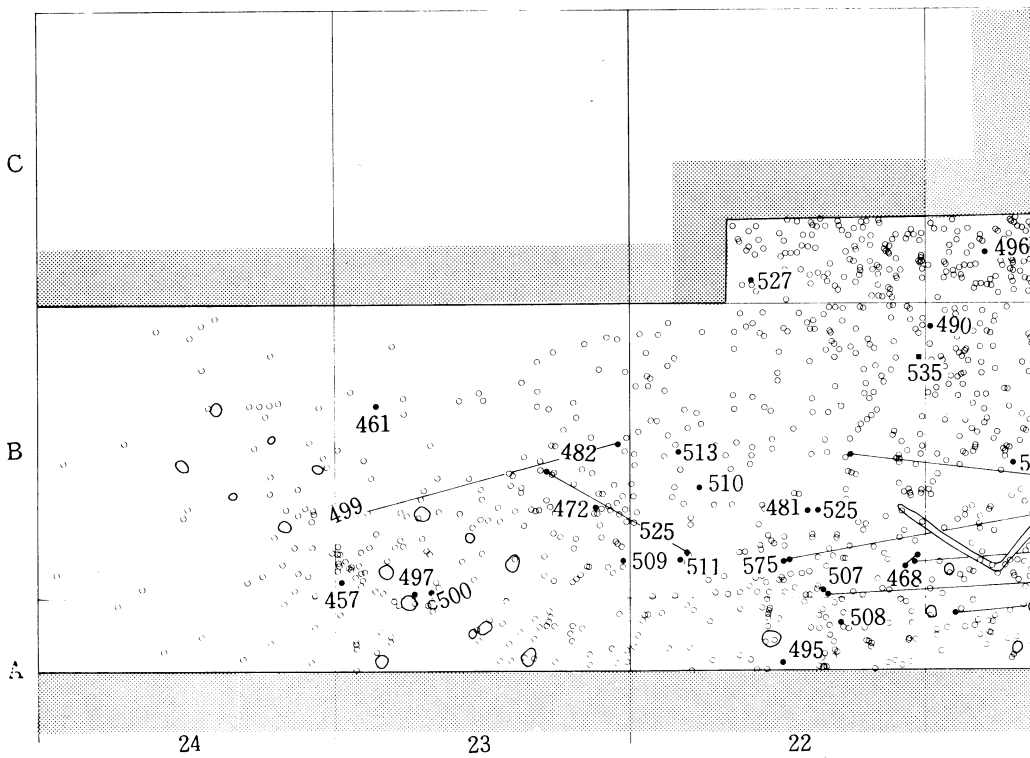
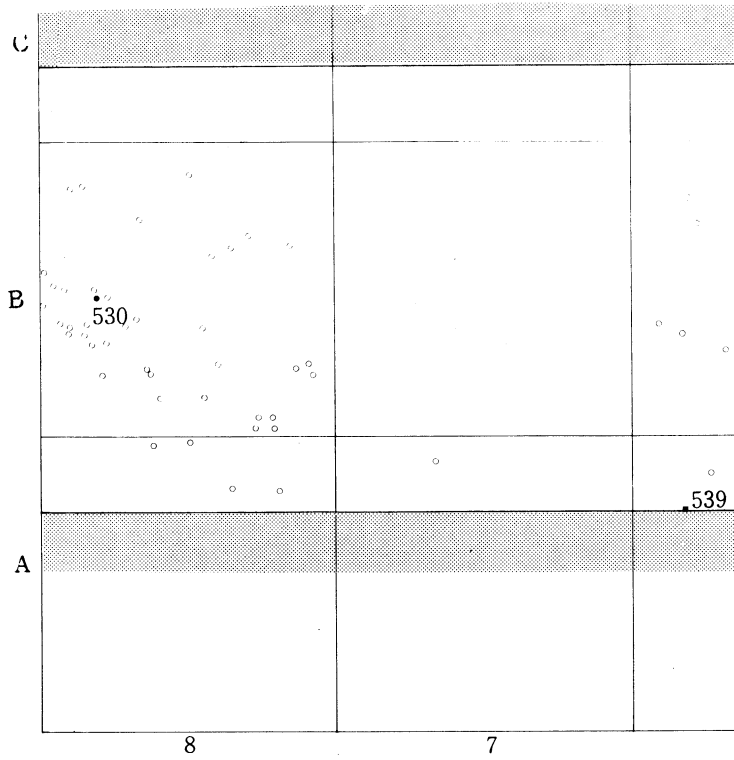
出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、丹塗土器などに分けられる。特に、丹塗土器は細片が多く器形が定かではないが、袋状口縁土器を含んでいる。在地系土器とは区別が明確であり、住居址出土の甕形土器や掘立柱建物跡付設の溝内出土の高杯形土器などと共に注目されるものである。

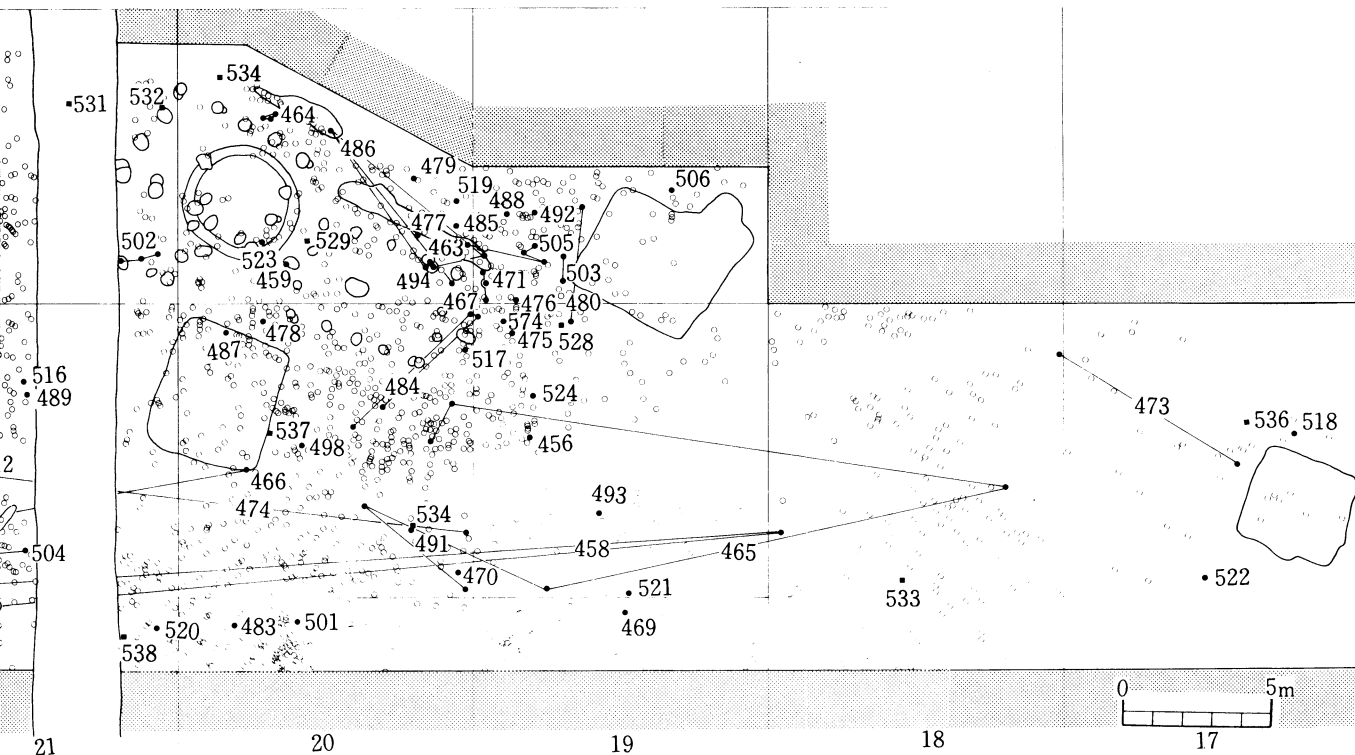
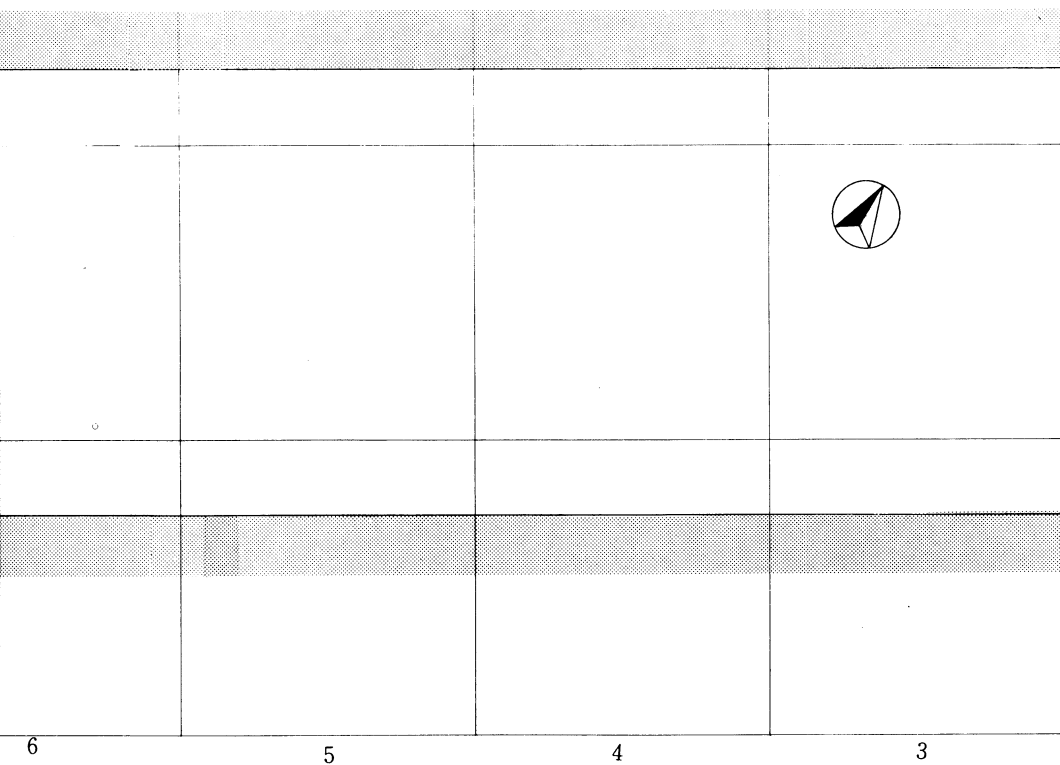
#### ①甕形土器 (第101図～第103図-456～500)

甕形土器の器形には、二つの形態がみられる。一つは、比較的大型の甕形土器で口縁部が逆「L」字状に近く外反するタイプで、口縁部の直下には台形状の太くて力強い突帯文を一条巡らすタイプである。本遺跡では定かでないが、このタイプの底部は平底を呈することが判明している。二つめのタイプは、一般的な甕形土器で「く」字状に口縁部が外反して、肩部から頸部には突帯文を数条貼付するものである。このタイプの底部は、充実した脚台を呈する。両者はいずれも甕形土器で呼称されるが、形態上は大きな違いがみられる。

456～461・469は、前者の甕形土器に属すタイプである。456は、細片のため定かでないがもう少し逆「L」字状に起きる可能性がある。459・461のように口縁直下に太い貼付突帯文を巡らす。このタイプは大型の器形が一般的であるが、本遺跡では469のように口径20cm程度の小型のものがみられる。口縁部は若干上方に上がるが、逆「L」字状に近い外反である。口縁部下には、三角形の貼付突帯文が一条巡っている。小型のためか、貼付突帯文も三角形で小さい。口縁部付近と突帯文上は丁寧な横位のナデ整形が施されるが、そのほかはヘラ磨き整形が一般的である。

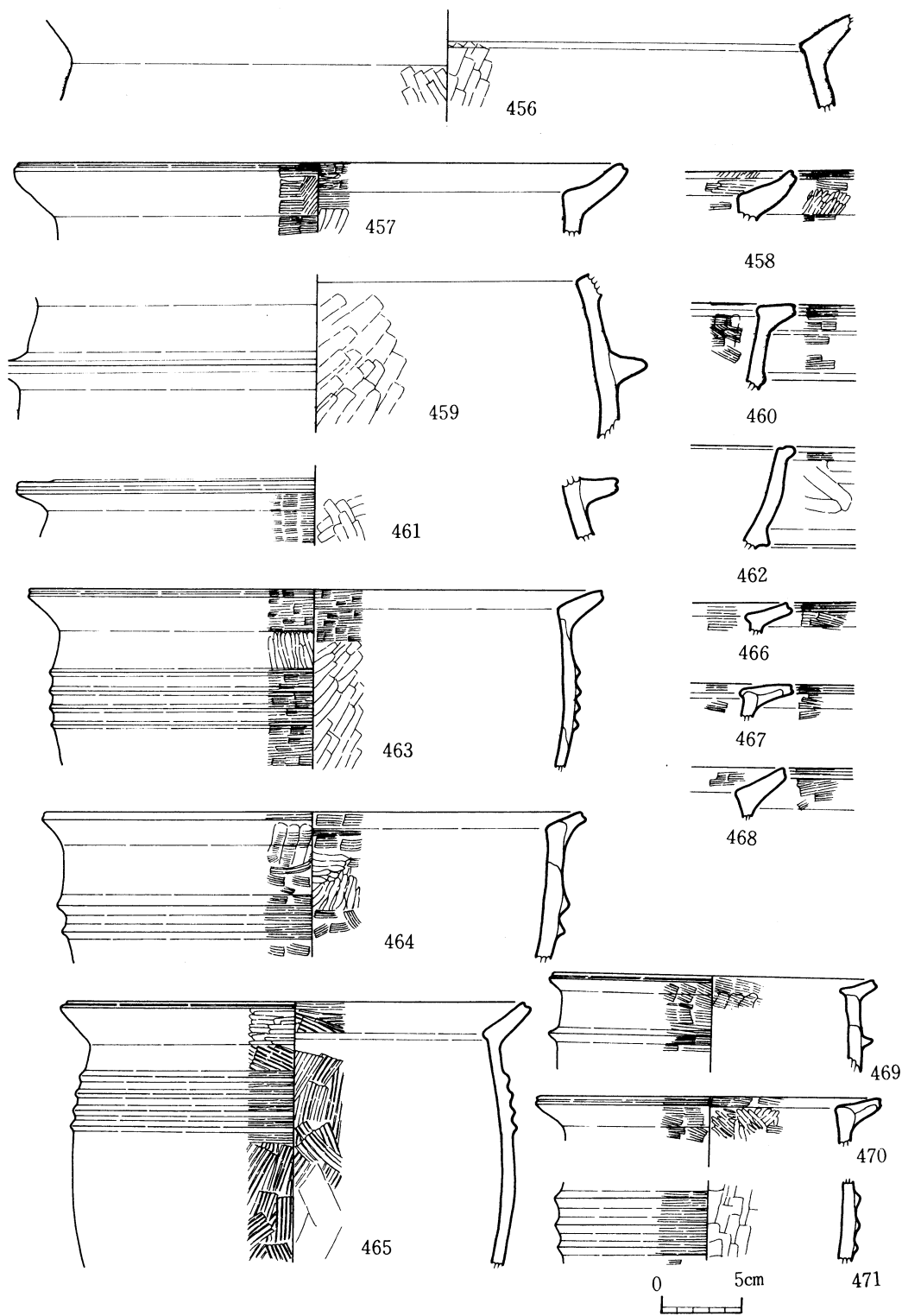
463～468・470・472～483は、一般的な甕形土器である。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部平坦面には凹線文状の凹みが施される。465のように、「く」字状口縁が大きく立ち上がるものもある。472～483は、細片の復元図のため口縁部の外反の角度は定かでない。口縁部内面は、463のようにシャープな稜をつくるものと465のように内側に突帯文状に張り出して稜をつくるものがある。





第100図 Ⅲ層遺物出土分布図





第101图 Ⅲ層出土遺物実測图(1)

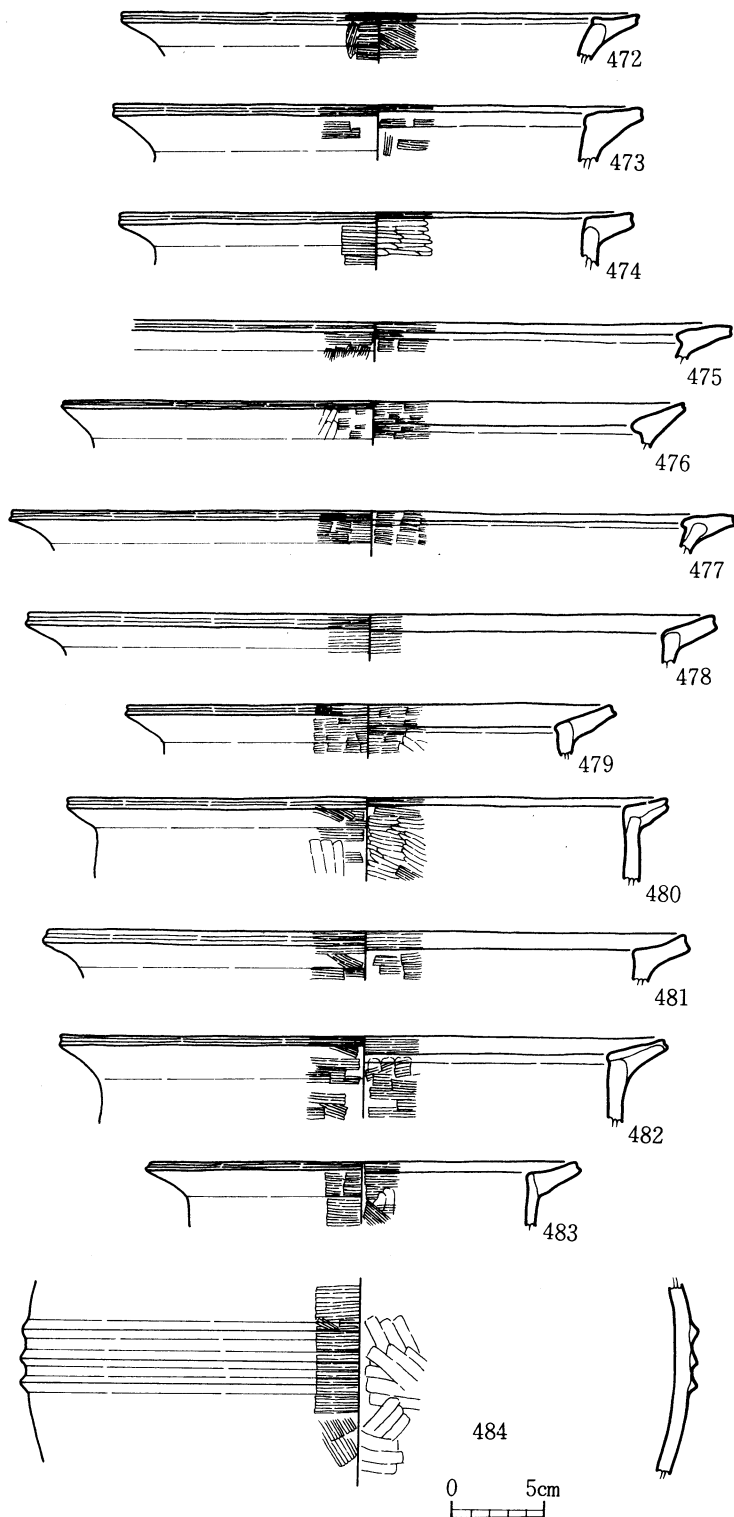
胴部上半の肩部には、貼付突帯文が数条巡らされる。本遺跡出土の甕形土器は、口縁部が外反する頸部下に若干隙間を置いて突帯文の貼付が始まっている。口縁部付近と突帯文上は、横位の丁寧な刷毛ナデ整形が施され、その他の部分は刷毛目やへら磨きの整形がみられる。

496～500は、甕形土器の底部である。甕形土器の底部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台である。底部裾部の端部は、面取りが行なわれその上に凹線文状の凹みが施される。しかし、490～500のように、面取りを行なわず丸味をもって仕上げるものもある。底面は、一般的には平坦な平底を呈する。しかし、490・491・495のように、底面が上げ底状にわずかに凹面をつくるものもある。

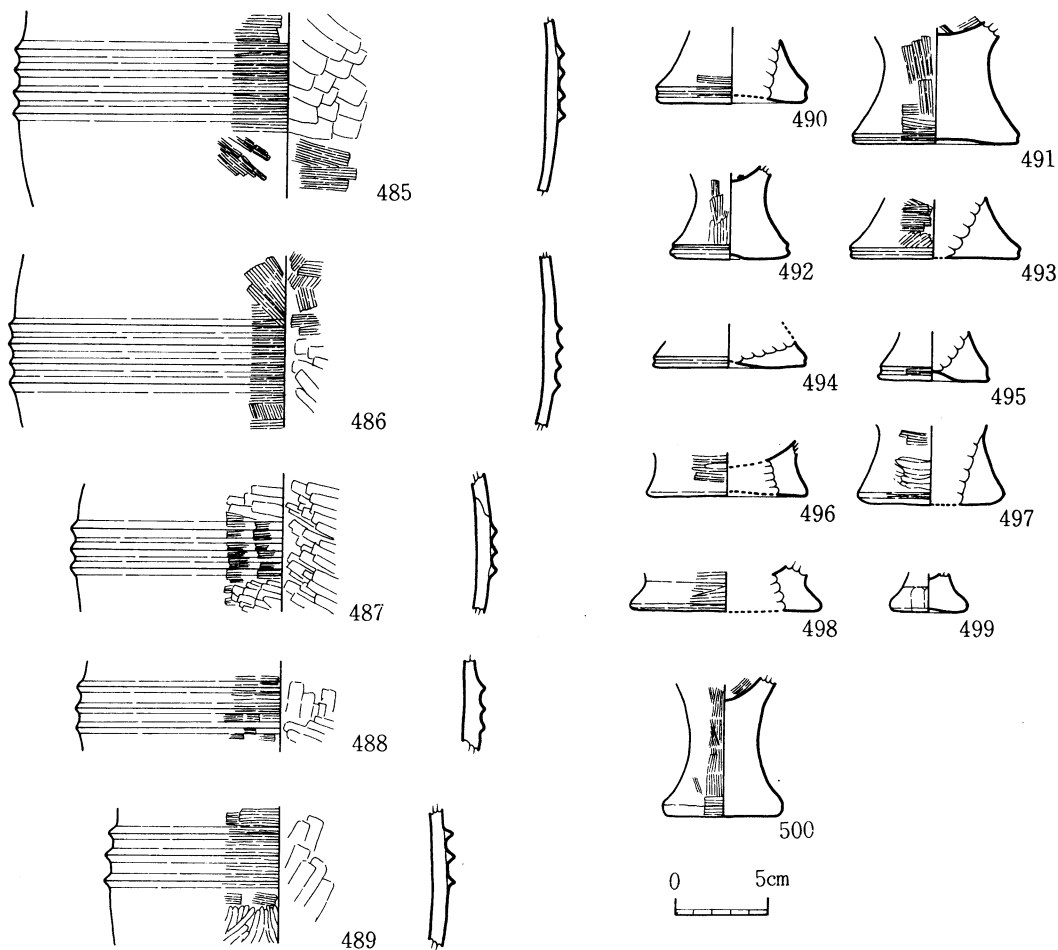
## ②壺形土器

(第104図—501～519)

本遺跡の包含層出土の壺形土器は、出土量が少ない。口縁部が明らかな



第102図 Ⅲ層出土遺物実測図(2)



第103図 III層出土遺物実測図(3)

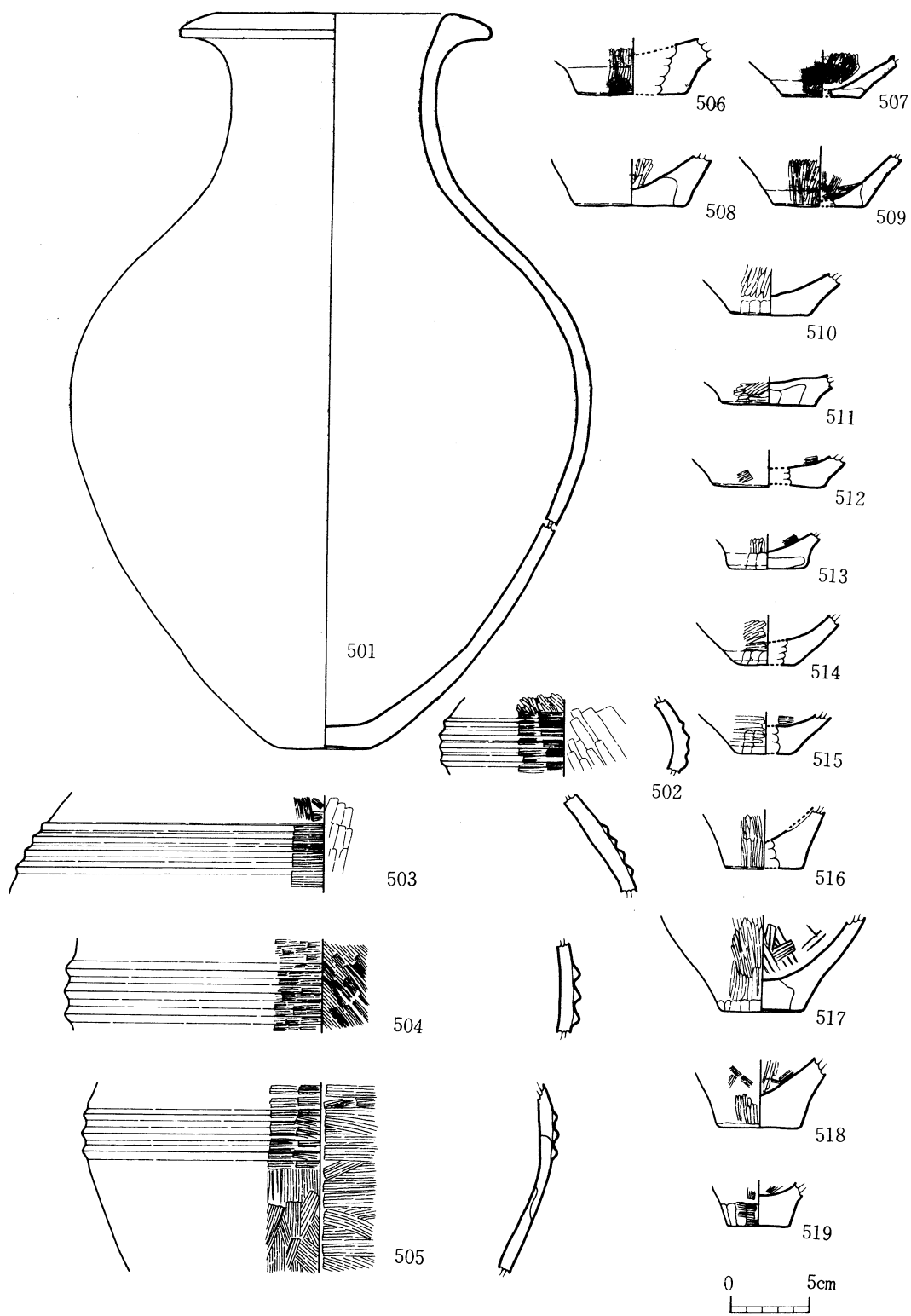
ものが1個あるのみで、胴部片はその形状から壺形土器に含め、底部は平底の形態から含めたものである。

501は、包含層出土で唯一完形に復元できたものである。器高47cm、口径14cm、最大胴部38.5cmを測る大型の壺形土器である。外反した三角形の口縁部は外方に若干垂れ下がり気味に拡張する。頸部は縮まり、肩部はナデ肩で、ほぼ中央で最大胴部をつくる。底部は、わずかに上げ底気味の平底を呈する。器内外とも、廃棄後の剥離・剥落が激しく、整形手法は不明である。502~505は、その形状から壺形土器に含めたものである。502は、胴部が円盤状に大きく張るもので、最大張部に貼付突帯文が四条巡っている。504・505も同様に、胴部最大張部に貼付突帯文を巡らすタイプである。503は、肩部に突帯文を巡らすものである。

506~519は、壺形土器の底部として取り上げた平底である。

③鉢形土器 (第105図-520~524)

鉢形土器と考えられる細片が、5片出土している。壺形土器と同様に口縁部は「く」字状に



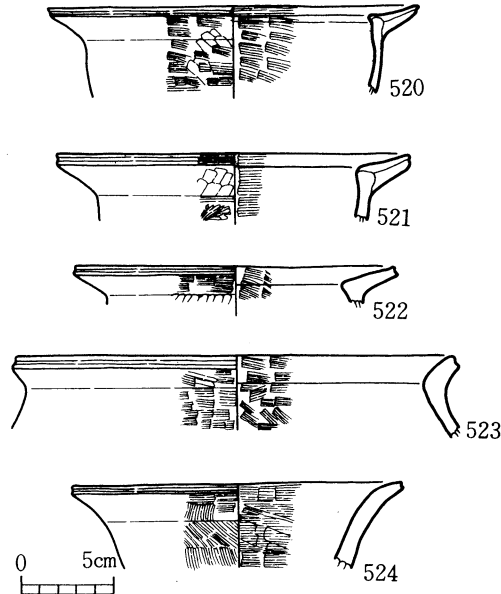
第104图 Ⅲ層出土遺物実測图(4)

外反するが、口径は20cm弱の小型である。細片のため、形態状は取り留めも無いが一応鉢形土器に類別しておく。

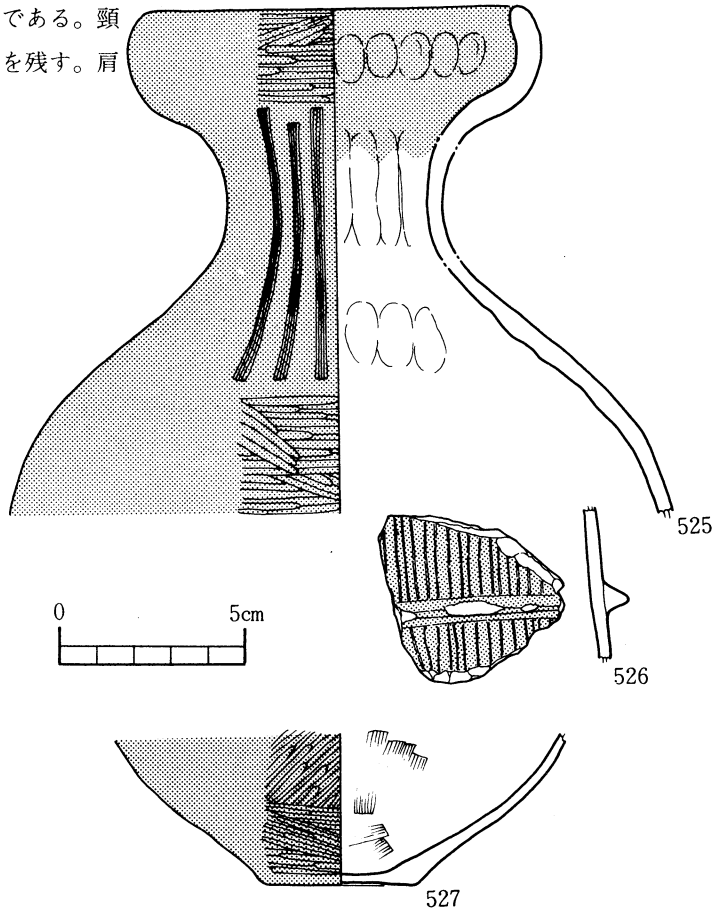
③丹塗土器 (第106図-525~527)

丹塗土器は、A B 20区~A B 24区の包含層中とA B 3区・A B 8区の比較的離れた二ヶ所の区域から総数45点出土している。器形が判明するものを図化したものであるが、他の大多数は特色の少ない胴部片である。

525は、同一固体と考えられる破片から口縁付近と頸部付近と肩部付近から、復元図化したものである。口縁部は、頸部から大きく外反して立ち上がり、途中から袋状に内湾したいわゆる袋状口縁を呈するものである。頸部は強く締まり、内面には絞り痕を残す。肩部は緩やかなナデ肩が推定される。外器面は、丁寧なヘラ磨きで堅固に仕上げる。その上には、頸部から肩部にかけて縦位に暗文が施文される。さらに器面全体には、丹塗が施されている。器内面は、口縁部の袋状に内湾する部分や肩部付近はナデ整形と共に指圧痕を残す。強く締まった頸部の内面は、絞り痕が明瞭に残存する。内面は、頸部上部まで丹塗が施される。胎土は、非常に細粒で良質な白粘土を使用している。526は直線的な器面を呈する胴部片であるが、中央には三角突帯文を貼付する。器面には縦位の暗文を施し、さらに器面全体には丹塗がみられる。胎土は525とほとんど同じ



第105図 Ⅲ層出土遺物実測図(5)



第106図 Ⅲ層出土遺物実測図(6)

である。527はC-22区から出土したもので、平底の底部である。底部下端まで丹塗が施される。器外面は、胴部付近は斜位に底部付近は横位に丁寧なヘラ磨き手法が施される。

## 2) 石器 (第107～109図)

石器は、包含層からは、総数13点の出土がみられた。磨製・打製石鏃、磨製・打製石斧、磨石、砥石などがある。

### ①磨製石鏃 (第107図-528～532)

528～530は、完成品であり、入念な研磨加工が施され、器面は非常に滑らかになっている。形状は、えぐりの浅い三角形を成す。531・532は、器面が鈍く、形状の類似から未成品と思われる。532は、周縁に整形痕を残す。

### ②打製石鏃 (第107図-533～535)

全面は、入念な二次加工が及ぶ。533は、両端に突起をもち、えぐりも浅い。534・535は、深いえぐりが入る。形態的に見て、534・535は本遺跡縄文時代早期例に類似し、533も早期に見られる。縄文期の所産が混入した可能性が大きい。

### ③剝片 (第107図-536)

### ④扁平打製石斧 (第108図-537)

片面に原面を残す横長剝片を素材とし、縁辺に二次加工が及ぶ。細長い撥形の全形を呈す。刃部付近に縦位の線状痕がみられ、扁平な本例を土掘具と考えれば、使用の方向と一致する。また、刃部付近の器面は、滑らかになっている。スクリーン・トーン部分は、器面が非常に滑らかとなっており、柄との装着を考えた場合、装着部分と一致する。

### ⑤石斧 (第109図-538)

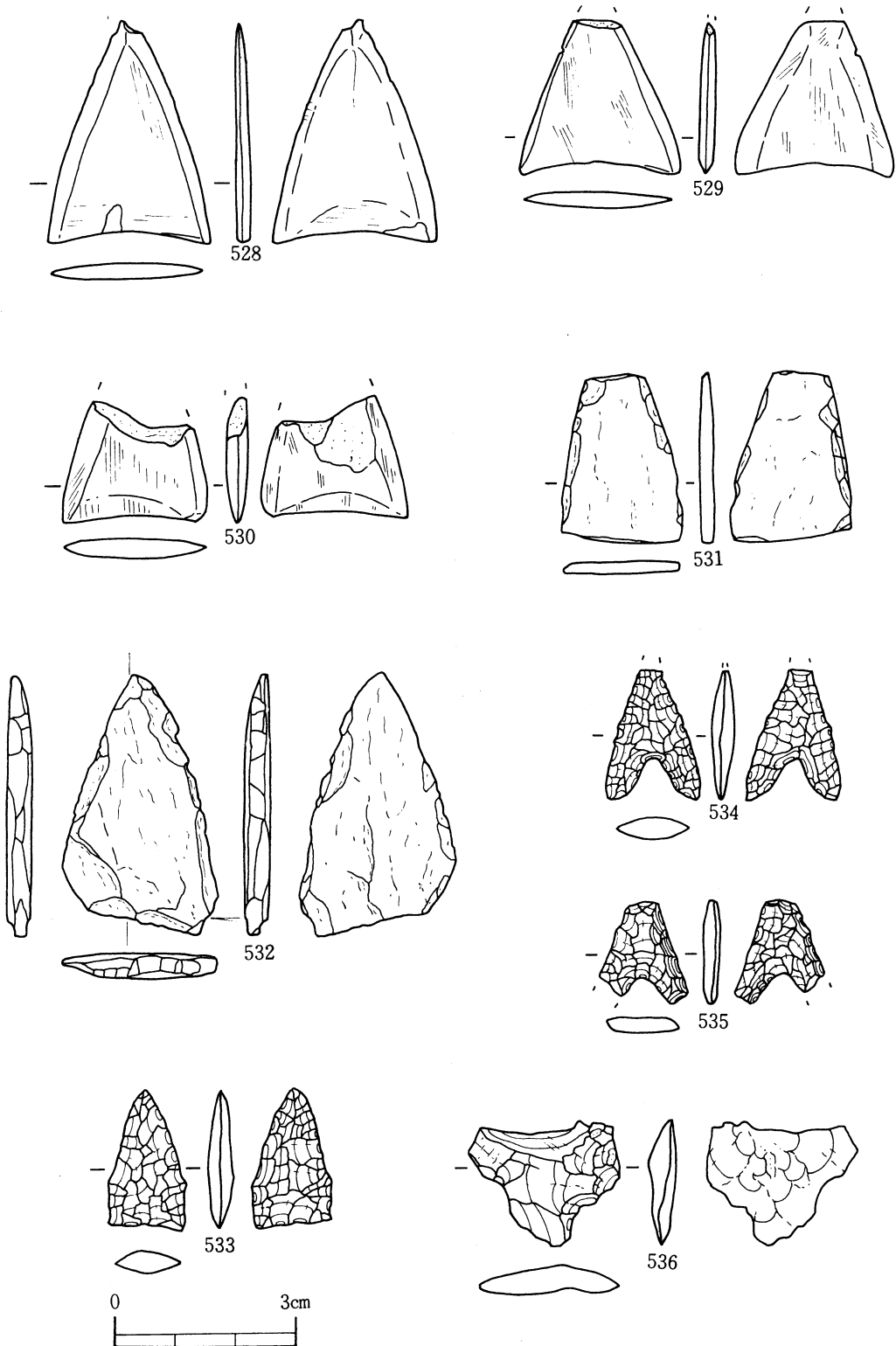
形状からみて石斧であろうが、敲打器に転用されたのであろうか、刃部にあたる部分は平たくつぶれている。

### ⑤磨石 (第109図-539)

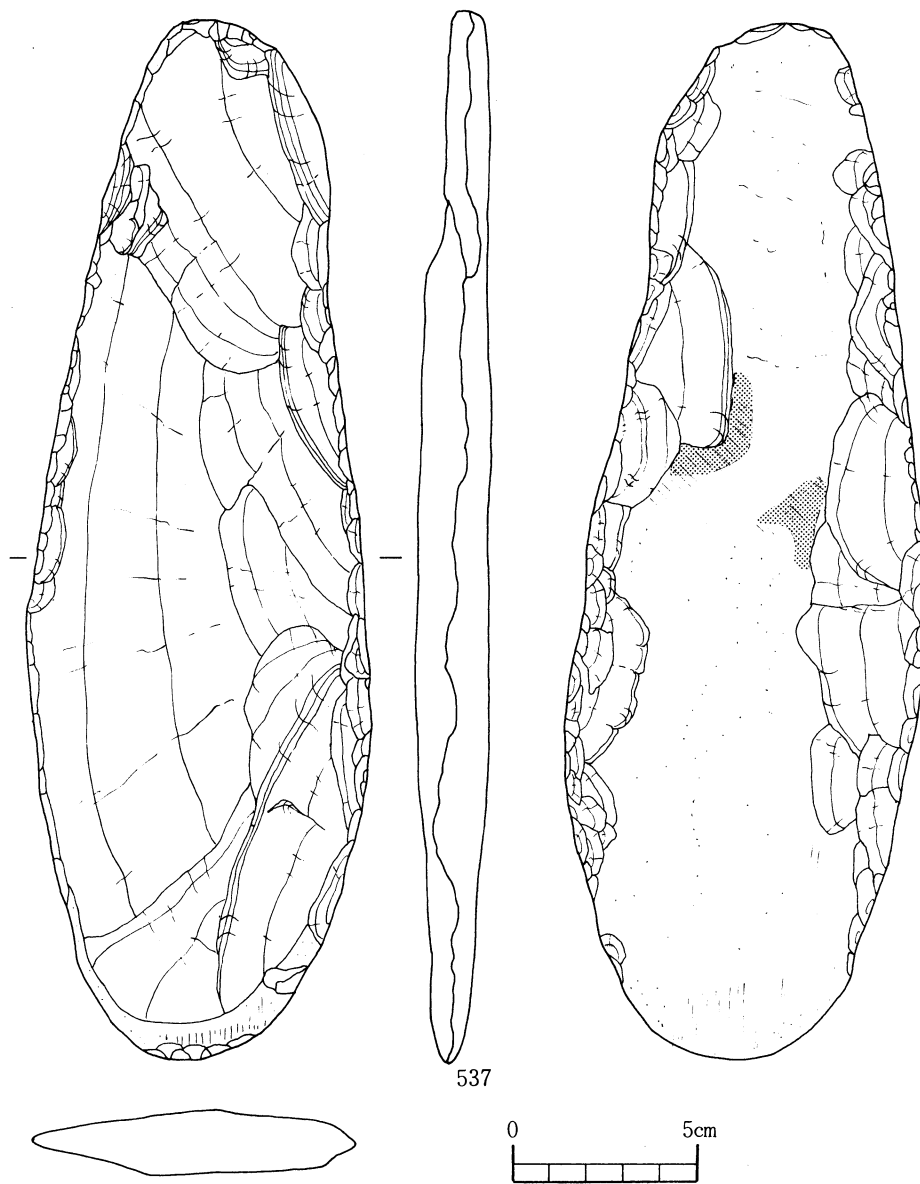
磨石の破片である。

### ⑥砥石 (第109図-540)

粒子の細かな石材を利用し、平坦面をもつ。スクリーン・トーン部分は、平坦でかつ器面が非常に滑らかになっている。

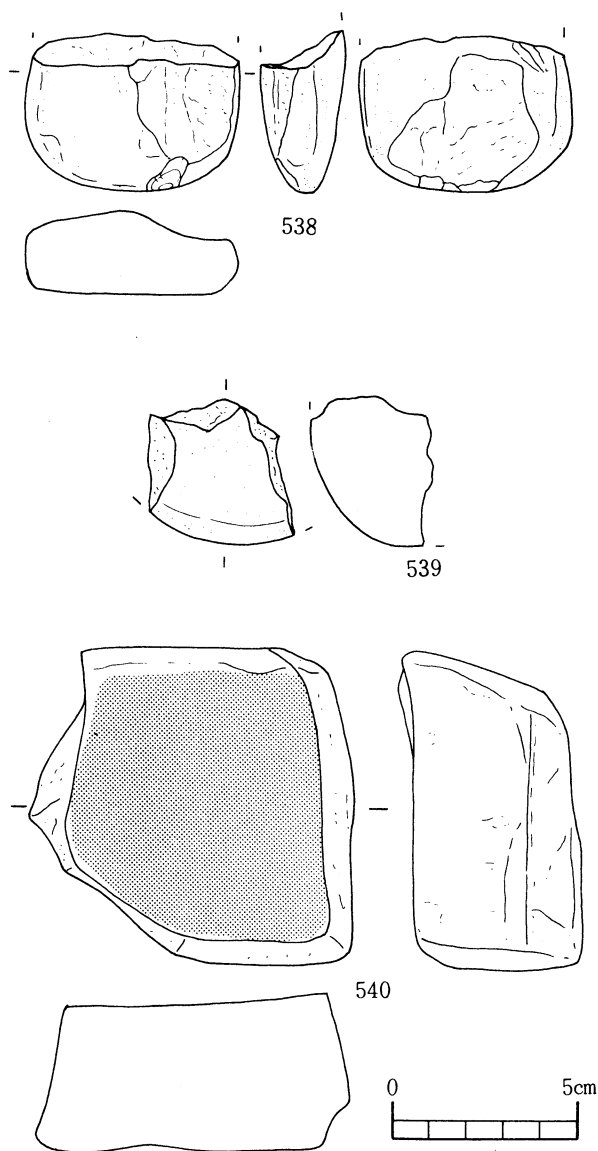


第107圖 Ⅲ層出土遺物実測図(7)



第108図 Ⅲ層出土遺物実測図(8)





第109図 Ⅲ層出土遺物実測図(9)

第19表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(往・高・厚)cm	胎土	調土	焼成	色調	備考
402	弥生	70.42 他	住 1	壺	底部	底径 6.4	石英・長石 黒雲母・砂粒	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	良好	④暗褐色 ⑤黒褐色	
404	〃	69.995他	住 2	甕	口縁部	口径 26.8	石英・長石 黒雲母	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	〃	④黒褐色～暗茶褐色 ⑤暗褐色	
405	〃	70.03 他	〃	〃	〃	27.4	〃	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④黒褐色～暗茶褐色 ⑤黒褐色	スス付着
406	〃	70.09 他	〃	〃	底部	底径 6.5	〃	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④暗茶褐色	外面剝落
407	〃	69.85	〃	〃	〃	7.8	〃	④ケ目 ⑤ハケ→ナデ	〃	④明茶褐色 ⑤暗褐色	
408	〃	70.075	〃	〃	〃	8.2	〃	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④茶褐色	
409	〃	70.125他	〃	〃	〃	7.8	〃	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色 ⑤暗褐色	
410	〃	70.045	〃	〃	〃	8.0	〃	④ミガキ ⑤	〃	④明茶褐色	
411	〃	69.965他	〃	壺	頸部	頸径 13.9	〃	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④暗褐色～茶褐色 ⑤暗褐色	
412	〃	70.01 他	〃	〃	底部	底径 7.0	石英・長石 角閃石	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	〃	④黒褐色～茶褐色 ⑤暗茶褐色	
413	〃	69.955	〃	〃	〃	3.4	石英・長石 黒雲母	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④茶褐色 ⑤	
414	〃	69.95 他	〃	甕	口縁部 底部付近	口径 16.0	石英・長石 角閃石	④ハケ目 ⑤ハケ→ナデ	〃	④黒褐色～明灰褐色 ⑤暗褐色	スス付着
415	〃	70.035	〃	〃	底部	底径 7.6	石英・長石 雲母・砂粒	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④明茶褐色 ⑤暗褐色	
416	〃	70.015	〃	高杯	脚部	器厚 1.0~1.1	石英・長石 黒雲母	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④茶褐色 ⑤	
417	〃	70.075他	〃	甕	口器	径高 24.6 57.4	石英・長石 黒雲母	④ハケ目 ⑤	〃	④黒褐色 ⑤暗褐色	
419	〃	70.235他	住 3	〃	口器	径高 23.2 28.2	石英・長石 黒雲母	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④黒褐色～暗茶褐色 ⑤茶褐色	スス付着
420	〃	70.095他	〃	〃	口縁部 胸部	口径 25.2	石英・長石 黒雲母	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④黒褐色～暗茶褐色 ⑤茶褐色	スス付着
421	〃	70.145	〃	〃	底部	底径 7.0	石英・長石 黒雲母	④ミガキ ⑤	〃	④黒褐色	
422	〃	70.18	〃	〃	口縁部	口径 34.6	〃	④ハケ目 ⑤ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色 ⑤暗灰褐色	
423	〃	70.235	〃	〃	胸部	胸径 34.4	〃	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④黒褐色～暗茶褐色 ⑤暗茶褐色	スス付着
424	〃	70.085	〃	壺	口縁部	口径 30.2	〃	④ハケ目 ⑤ミガキ	〃	④茶褐色 ⑤暗茶褐色	
425	〃	70.23	〃	〃	底部	底径 10.2	〃	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④明灰褐色 ⑤明褐色	
429	〃	70.37	C-20ミソI	甕	口縁部	口径 53.0	〃	〃	普通	④暗茶褐色 ⑤	内外面共に剝落
430	〃	70.24 他	〃	〃	口縁部 胸部	口径 33.6	〃	④ハケ→ナデ ⑤	良好	④暗褐色～暗黄褐色 ⑤暗茶褐色	
431	〃	70.345他	建IミソI内	〃	〃	36.0	石英・長石 黒雲母	〃	普通	〃	内外面共に剝落
432	〃	70.235他	〃	〃	口縁部	口径 29.5	〃	④ハケ→ナデ ⑤	良好	④黒褐色 ⑤	
433	〃	70.24	〃	〃	底部	底径 8.6	〃	④ハケ目 ⑤ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色～暗黄褐色 ⑤黒褐色	
434	〃	70.395他	〃	〃	〃	〃	石英・長石 黒雲母	④ハケ目 ⑤	〃	④明茶褐色	
435	〃	70.14 他	〃	〃	〃	8.2	〃	④ハケ目 ⑤ハケ→ナデ	〃	④暗茶褐色 ⑤	
436	〃	70.09	〃	壺	〃	7.6	石英・長石 黒雲母・砂粒	④ハケ目 ⑤	普通	〃	内外面共に剝落
437	〃	70.335他	C-20ミソI	〃	復元器	径高 11.0 17.3	〃	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	良好	④茶褐色～暗茶褐色 ⑤暗茶褐色	
438	〃	70.27 他	建IミソI	〃	口縁部	口径 26.4	石英・長石 黒雲母	④ハケ→ナデ ⑤	普通	④茶褐色 ⑤暗茶褐色	
439	〃	70.375	C-20ミソ2上	甕	〃	33.6	〃	④ハケ→ナデ ⑤	良好	④黒褐色～暗茶褐色 ⑤暗褐色	
440	〃	70.38 他	〃	〃	復元器	径高 29.4 30.8	〃	〃	〃	④暗褐色～茶褐色 ⑤茶褐色～暗茶褐色	
441	〃	70.355他	〃	〃	胸部	胸径 23.1	石英・長石 黒雲母	④ハケ目 ⑤ハケ→ナデ	〃	④黒褐色～茶褐色 ⑤暗茶褐色	
442	〃	70.38	〃	壺	〃	37.4	〃	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④黒褐色～茶褐色 ⑤茶褐色	
443	〃	70.35	C-21ミソ2上	〃	口縁部	口径 8.5	〃	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④茶褐色 ⑤明灰褐色	
444	〃	70.38 他	C-20ミソ2上	〃	〃	19.0	〃	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④暗褐色～暗茶褐色 ⑤明茶褐色～暗茶褐色	
445	〃	70.345他	〃	〃	完形	復元口径 12.0 復元高 29.7	〃	④ミガキ ⑤ハケ→ナデ	〃	④茶褐色～暗茶褐色 ⑤黒褐色	
446	〃	70.36他	〃	鉢	口縁部 胸部	口径 20.8	石英・長石 黒雲母	④ハケ目 ⑤ハケ→ナデ	〃	④暗褐色～暗茶褐色 ⑤黒褐色～明茶褐色	
447	〃	70.285	B-21 III	〃	口縁部	口径 18.0	〃	④ハケ目 ⑤ハケ→ナデ	〃	④暗褐色 ⑤暗茶褐色	
448	〃	70.465	C-20ミソ2上	浅鉢	〃	36.4	〃	④ハケ→ナデ ⑤	〃	④明燈褐色 ⑤暗茶褐色	

第20表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
449	弥生	70.36	C-20溝2上	壺	胴~ 底部付近	胴径 41.6	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ→ナデ	良好	㊦暗茶褐色 ㊧	内面剥落
450	〃	70.36	B-20Ⅲ下	高杯	脚部	底径 11.2	石英・長石	㊦ミガキ ㊧	〃	㊦明灰褐色 ㊧暗灰褐色	矢羽根 スカシ
451	〃	70.35	C-20溝2上	〃	〃	〃 10.6	〃	㊦ミガキ	〃	㊦黒褐色	
452	〃	70.36	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	
453	〃	70.36	〃	〃	〃		〃	〃	〃	㊦暗灰褐色	
454	〃		建Ⅴピット5	甕	口縁部	口径 17.7	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ ㊧ハケ→ナデ	〃	㊦暗褐色 ㊧	
455	〃	70.3	円形周溝内	〃	〃	〃 29.6	〃	㊦ハケ→ナデ ㊧	〃	㊦暗褐色~暗茶褐色 ㊧暗黄褐色	茶褐色 スス付着
456	〃	70.395	B-19Ⅲ	〃	口縁部 付近	〃 50.0	〃	〃	普通	〃	内外面共に 剥落
457	〃	70.65	B-23〃	〃	口縁部	〃 37.4	〃	㊦ハケ→ナデ	良好	㊦茶褐色 ㊧暗黄褐色	
458	〃	70.23他	B-22〃	〃	〃	器壁厚 0.8~1.6	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧	
459	〃	70.45	C-20Ⅲ下	〃	〃	〃 0.8~1.1	〃	〃	普通	〃	内外面共に 剥落
460	〃		〃	〃	〃	〃 0.9~	〃	㊦ハケ→ナデ ㊧	良好	㊦暗褐色 ㊧暗茶褐色	
461	〃	70.62	B-23Ⅲ	〃	突帯部	〃 1.0	石英・長石 角閃石	㊦ハケ→ナデ ㊧	〃	㊦明暗褐色 ㊧暗茶褐色	
462	〃	69.535	Z-1Ⅲ2-1	〃	口縁部	〃 0.95~	〃	〃	〃	㊦暗黄褐色 ㊧暗灰褐色	
463	〃	70.47	C-20Ⅲ下	〃	口縁 ~胴部	口径 35.6	石英・長石 黒雲母	〃	〃	㊦黒褐色~暗褐色 ㊧暗褐色	
464	〃	70.52他	〃	〃	〃	〃 33.6	〃	〃	〃	㊦黒褐色~暗茶褐色 ㊧明茶褐色~暗茶褐色	
465	〃	70.335他	B-20Ⅲ	〃	〃	〃 28.6	〃	〃	〃	㊦黄褐色~暗黄褐色 ㊧黄褐色	
466	〃	70.37他	B-22〃	〃	口縁部	器壁厚 0.9	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ ㊧	〃	㊦暗茶褐色 ㊧暗褐色	
467	〃	70.41	C-19Ⅲ下	〃	〃	〃 0.7~1.3	〃	㊦ハケ→ナデ ㊧	〃	㊦暗褐色 ㊧	スス付着
468	〃	70.35他	B-22Ⅲ	〃	〃	〃 0.8~1.4	〃	〃	〃	㊦暗褐色~暗茶褐色 ㊧暗灰褐色	
469	〃	70.34	A-19Ⅲ	〃	〃	口径 20.0	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧暗茶褐色	
470	〃	70.255	B-20Ⅲ	〃	〃	〃 20.8	〃	〃	〃	㊦暗灰褐色 ㊧暗黄褐色	
471	〃	70.415	C-19Ⅲ下	〃	胴部	胴径 18.4	〃	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊧	
472	〃	70.58	B-23Ⅲ	〃	口縁部	口径 27.8	〃	〃	〃	〃	
473	〃	70.63他	B-17〃	〃	〃	〃 28.4	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧暗茶褐色	
474	〃	70.325他	B-22〃	〃	〃	〃 26.8	〃	〃	〃	㊦黒褐色~暗茶褐色 ㊧暗黄褐色~茶褐色	
475	〃	70.44他	B-19〃	〃	〃	〃 38.4	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧明茶褐色	
476	〃	70.45	C-19Ⅲ下	〃	〃	〃 33.2	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧暗茶褐色	
477	〃	70.49	C-20Ⅲ下	〃	〃	〃 34.0	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧暗褐色~明茶褐色	
478	〃	70.31	B-20〃	〃	〃	〃 37.0	〃	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊧暗黄褐色	スス付着
479	〃	70.555	C-20〃	〃	〃	〃 26.0	石英・長石 角閃石	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊧暗黄褐色	
480	〃	70.505他	C-19〃	〃	〃	〃 32.2	石英・長石 黒雲母	〃	〃	㊦黒褐色~明茶褐色 ㊧暗茶褐色	
481	〃	70.37他	B-22Ⅲ	〃	〃	〃 34.0	〃	〃	〃	㊦暗褐色~暗黄褐色 ㊧暗茶褐色	
482	〃	70.545他	B-23〃	〃	〃	〃 32.3	〃	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊧明茶褐色	
483	〃	70.25	A-20Ⅲ下	〃	〃	〃 22.6	〃	〃	〃	㊦黒褐色~暗黄褐色 ㊧暗茶褐色	スス付着
484	〃	70.59他	B-20Ⅲ	〃	胴部	胴径 36.6	〃	〃	〃	㊦黒褐色~暗茶褐色 ㊧暗茶褐色	
485	〃	70.44	C-20Ⅲ下	〃	〃	〃 29.8	〃	〃	〃	㊦黒褐色~暗茶褐色 ㊧暗茶褐色	スス付着
486	〃	70.48他	C-20Ⅲ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	㊦茶褐色~暗茶褐色 ㊧黒褐色~明灰褐色	
487	〃	70.41	B-20Ⅲ下	〃	〃	〃 23.0	〃	〃	〃	㊦暗灰褐色 ㊧	
488	〃	70.49	C-19〃	〃	〃	〃 22.2	石英・長石 角閃石	〃	〃	㊦明灰褐色 ㊧	
489	〃	70.445	B-21Ⅲ	〃	〃	〃 18.8	〃	㊦ミガキ ㊧ハケ→ナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊧	
490	〃	70.42	〃	〃	底部	底径 8.2	石英・長石 黒雲母	〃	普通	㊦暗灰褐色	外面若干剥 落

第21表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調土	焼成	色調	備考
491	弥生	70.26	B-20 III	甕	底部	底径 9.0	石英・長石 黒雲母	㊦ケズリーナデ ㊧ハケーナデ	良好	㊦暗茶褐色 ㊧茶褐色	スス付着
492	〃	70.455	C-19 III下	〃	〃	〃 6.6	〃	〃	〃	〃	
493	〃	70.45	B-14 III	〃	〃	〃 9.3	〃	㊦ハケーナデ	〃	㊦暗褐色	内面欠落
494	〃	70.45	C-20 III下	〃	〃	〃 8.4	石英・長石 角閃石・砂粒		普通		内外面共に 剥落
495	〃	70.355	A-22 III	〃	〃	〃 6.2	石英・長石 小礫	㊦ハケーナデ	良好	㊦明黄褐色	内面欠落
496	〃	70.41	C-21 III	〃	〃	〃 8.0	石英・長石 黒雲母	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊧	
497	〃	70.62	B-23 III	〃	〃	〃 8.0	〃	〃	〃	㊦暗黄褐色	内面欠落
498	〃	70.38	B-20 III	〃	〃	〃 10.2	〃	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊧茶褐色	
499	〃	70.55	B-23 〃	〃	〃	〃 4.2	〃	㊦ハケーナデ ㊧	〃	㊦暗茶褐色 ㊧茶褐色	
500	〃	70.665	〃	〃	〃	〃 6.2	〃	㊦ケズリーナデ ㊧ハケーナデ	〃	㊦茶褐色 ㊧暗茶褐色	
501	〃	70.17	A-20 〃	壺	復元 復元高	復元口径 47.0 復元高 14.0	〃	㊦ハケーナデ ㊧	〃		
502	〃	70.375他	C-21 III下	〃	胴部	胎径 16.0	石英・長石 黒雲母	㊦ハケーナデ ㊧	〃	㊦暗茶褐色 ㊧	
503	〃	70.43 他	C-19 〃	〃	〃	〃 39.8	〃	㊦ミガキ	普通	㊦暗茶褐色	内面剥落
504	〃	70.305他	B-22 III	〃	〃	〃 32.8	〃	㊦ハケーナデ ㊧ハケ目	良好	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊧暗茶褐色	
505	〃	70.39 他	C-19 III下	〃	〃	〃 30.0	〃	㊦ハケ目 ㊧ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊧	
506	〃	70.48	〃	〃	底部	底径 7.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	㊦ケズリーナデ ㊧ハケーナデ	〃	㊦暗褐色 ㊧暗灰褐色	
507	〃	70.37	B-22 III	〃	〃	〃 5.0	〃	㊦ハケーナデ ㊧	〃	㊦暗茶褐色 ㊧暗黄褐色	
508	〃	70.305	A-22 〃	〃	〃	〃 7.2	〃	㊦ハケーナデ	普通	㊦暗褐色	外面剥落
509	〃	70.54	B-23 〃	〃	〃	〃 6.8	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ目 ㊧ハケーナデ	良好	㊦暗茶褐色 ㊧暗黄褐色	
510	〃	70.6	B-22 〃	〃	〃	〃 5.0	石英・長石 角閃石	㊦ハケーナデ ㊧	〃	㊦茶褐色 ㊧	
511	〃	70.33	〃	〃	〃	〃 6.2	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ ㊧ハケーナデ	〃	㊦茶褐色 ㊧暗褐色	
512	〃	70.37	B-21 〃	〃	〃	〃 7.0	〃	㊦ハケーナデ ㊧	普通	㊦暗灰褐色 ㊧	内外面若干 剥落
513	〃	70.565	B-22 〃	〃	〃	〃 5.2	〃	〃	良好	㊦暗褐色 ㊧	
514	〃	70.42	B-19 〃	〃	〃	〃 3.8	〃	㊦ミガキ ㊧ハケーナデ	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊧暗褐色～明茶褐色	
515	〃	70.495	B-22 〃	〃	〃	〃 3.4	〃	〃	〃	㊦暗褐色 ㊧明茶褐色	
516	〃	70.39	B-21 〃	〃	〃	〃 5.0	石英・長石 角閃石	㊦ミガキ	〃	㊦茶褐色	内面欠落
517	〃	70.375	B-20 〃	〃	〃	〃 5.5	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ ㊧ハケ目	〃	㊦明茶褐色 ㊧	
518	〃	70.475	B-17 〃	〃	〃	〃 5.2	〃	㊦ミガキ ㊧ハケーナデ	〃	㊦暗灰褐色 ㊧暗褐色	
519	〃	〃	C-20 III下	〃	〃	〃 4.0	〃	㊦ナデ ㊧ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊧茶褐色	
520	〃	70.2	A-21 〃	鉢	口縁部	口径 19.8	〃	㊦ハケーナデ ㊧	〃	㊦暗茶褐色 ㊧明茶褐色	
521	〃	70.385	B-19 III	〃	〃	〃 18.8	〃	〃	〃	㊦暗褐色～茶褐色 ㊧暗褐色～明茶褐色	
522	〃	70.6	B-17 〃	〃	〃	〃 17.0	〃	〃	〃	㊦暗褐色～明茶褐色 ㊧明茶褐色	
523	〃	70.425	C-20 III下	〃	〃	〃 23.3	〃	㊦ミガキ ㊧ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊧茶褐色	
524	〃	70.495	B-19 III	〃	〃	〃 17.5	石英・長石 角閃石	㊦ハケーナデ ㊧	〃	㊦暗茶褐色 ㊧	
525	〃	70.37 他	B-22 III	壺	〃	〃 9.9	微粒	㊦ミガキ ㊧	〃	㊦赤褐色 ㊧	円塗り
526	〃	70.04	B-8 III	〃	胴部	器壁厚 0.4~0.6	〃	円塗り ヘラミガキ	〃		〃
527	〃	70.31	C-22 III下	〃	底部	底径 4.0	〃	〃	〃	㊦赤褐色 ㊧暗茶褐色	〃

第22表 出土石器一覽表

番 号	器 種	出 土 区	層	標 高	石 材	最大長	最大幅	重 さ	備 考
403	砥 石	住 1		70.34	砂 岩	5.7	3.7	42.57	
418	台 石	住 2			半 花 崗 岩	32.9	22.2	11,550.0	
426	石 鏃	住 3		70.105	頁 岩	2.6	2.5	2.07	
427	石 皿	〃		70.09	半 花 崗 岩	21.6	14.2	3,800.0	
428		〃		70.23	軽 石	11.9	8.4	150.0	
528	磨 製 石 鏃	B-19	Ⅲ	70.41	粘 板 岩	3.6	2.7	2.75	
529	〃	C-20	Ⅲ下	70.435	〃	2.5	2.6	1.96	
530	〃	〃	〃	70.54	〃	2.0	2.4	1.94	
531	〃	C-21	〃	70.3	千 枚 岩	2.8	2.0	1.06	
532	〃	〃	〃	70.315	〃	4.2	2.6	5.23	
533	〃	B-18	Ⅲ	70.38	黒 耀 石	2.4	1.5	1.66	
534	〃	B-20	Ⅲ下	70.11	〃	2.2	1.3	0.87	
535	〃	B-22	Ⅲ	70.33	〃	1.7	1.4	0.50	
536	〃	B-17	〃	70.48	〃	2.4	2.2	1.87	
537	磨 製 石 斧	B-20	Ⅳ上	70.16	粘 板 岩	28.4	9.5	663.0	
538	〃	A-21	Ⅲ下	70.145	砂 岩	4.2	5.9	56.0	
539	磨 石	A-6	Ⅲ下	70.04	巨 晶 花 崗 岩	4.0	4.0	67.0	
540		B-12	Ⅳ上	70.49	砂 岩	8.65	8.6	577.0	

## 第Ⅳ章 近世墓の調査

### 第1節 近世墓の概要

近世墓は、A B12区～13区とA B20区の二ヶ所で計7基発見された。そのうちのA B12～13区は、墓壙が密集して検出されており、さらに用地外の南側に延びることが想定されている。墓壙の検出状態から、墓所の可能性が考えられる。A B20区では、単独に2基が検出された。特に、A B19区からA B20区ではその後の戦時中の遺構が検出されており、近世墓との関係が興味深い。これらの近世墓からは、古銭、ガラス玉、鉛玉、楠など多数の副葬品がみられる。

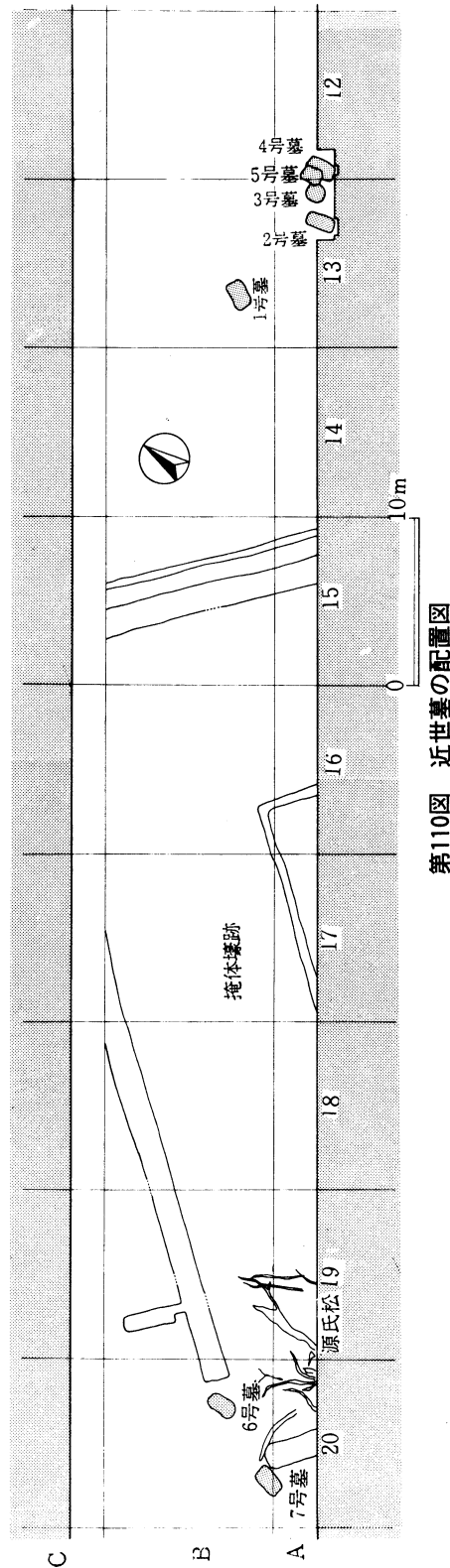
#### 1 1号墓 (第112図)

1号墓は、B13区の南側に検出され、2号墓から5号墓までのグループとは単独に若干離れて位置している。1号墓の形状は、長さ1.71m×幅1.00mの長方形プランを呈し、検出面からの深さ1.12mを測る。墓壙の主軸は、N-36°-Eで、ほぼ北東方向を向く。墓壙内には、人骨は遺存していない。

墓壙の床面付近には、古銭6枚と豆板銀1個の計7個が埋納されていた。古銭は、すべて「寛永通寶」である。豆板銀は、一部を三日月状に欠いた不変形な楕円状を呈し、「是」と読める押印が施されている。最大長1.80cm、最大幅1.45cm、重さ6.79gの小粒である。

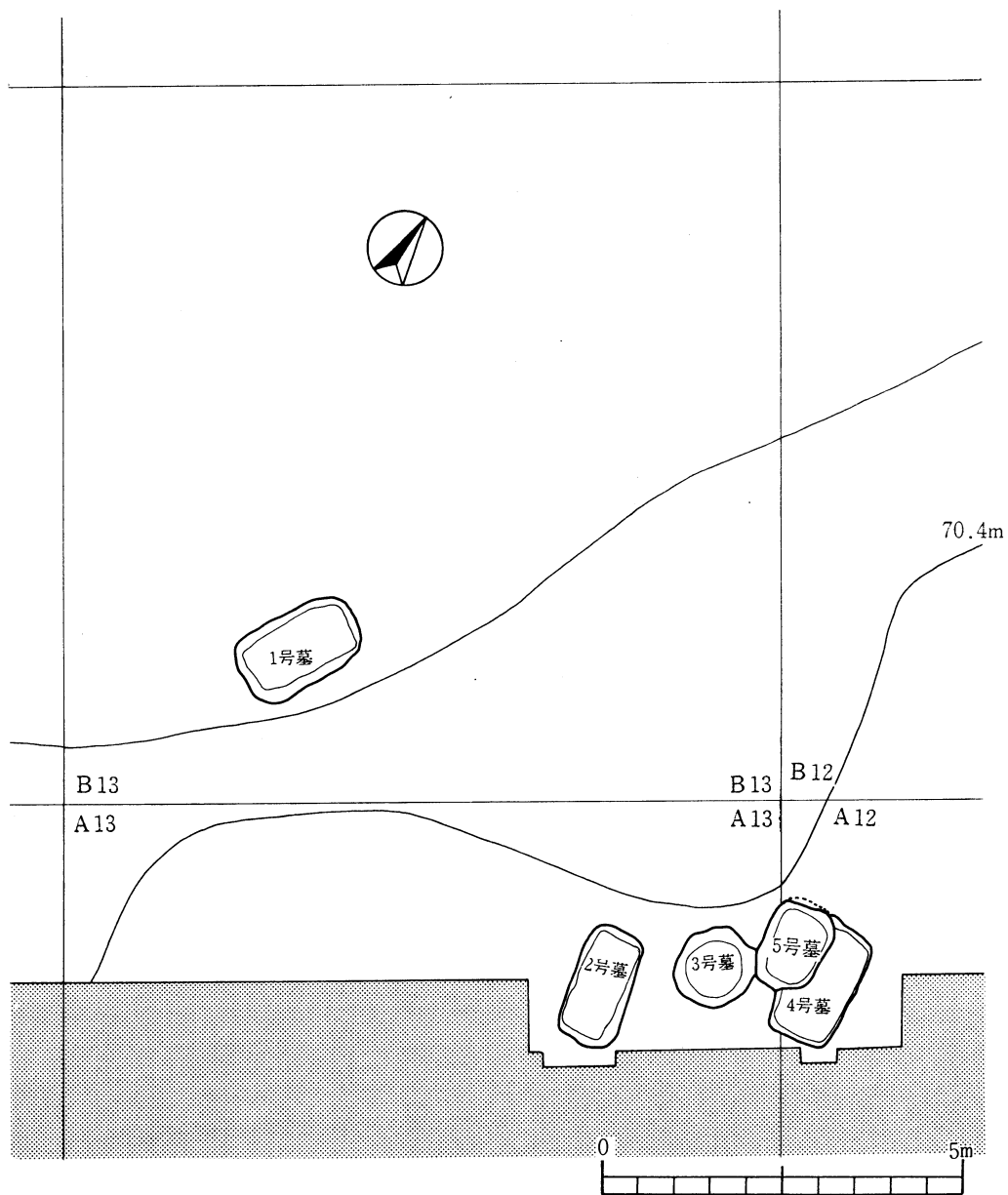
#### 2 2号墓 (第114図)

2号墓は、A13区の北側に位置し、東側の3号墓に隣接して検出された。2号墓の形状は、長さ1.62m×幅0.80mの長方形プランを呈し、検出面からの深さは

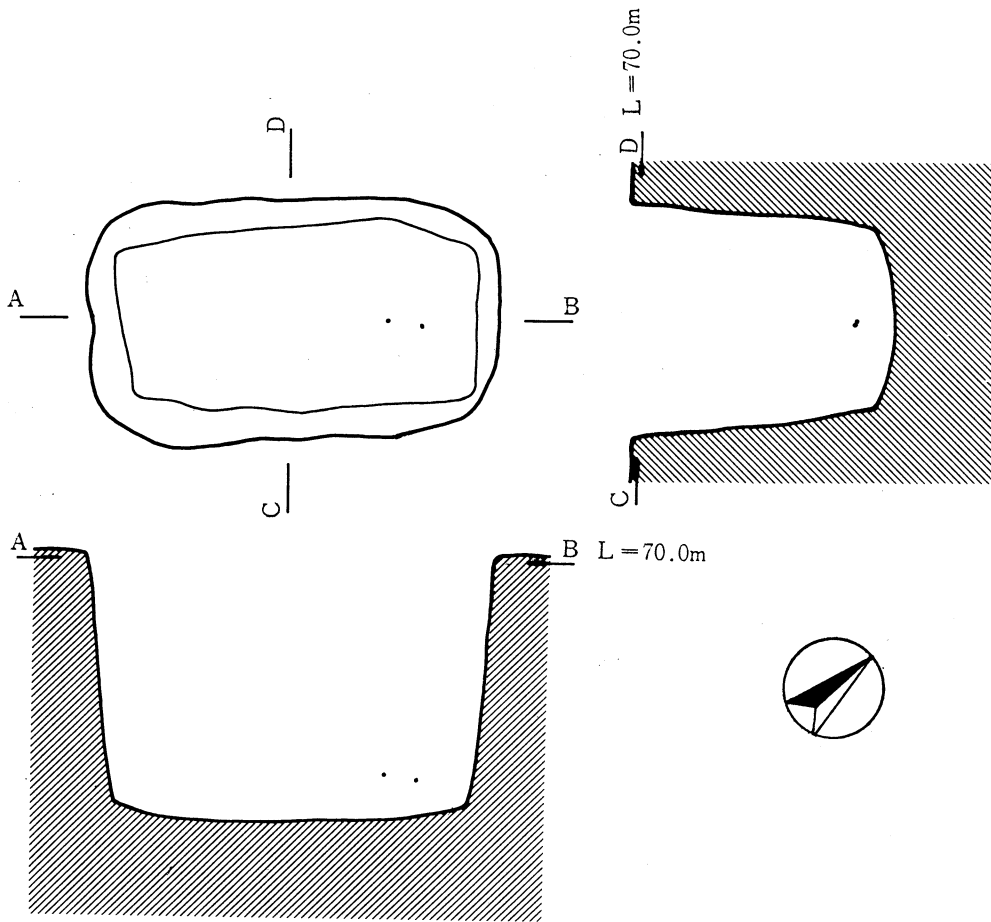


1.24mを測る。墓壙の主軸は、 $N-8^{\circ}-W$ のほぼ北方向を向く。墓壙内には、人骨が遺存しているが保存状態は良くない。

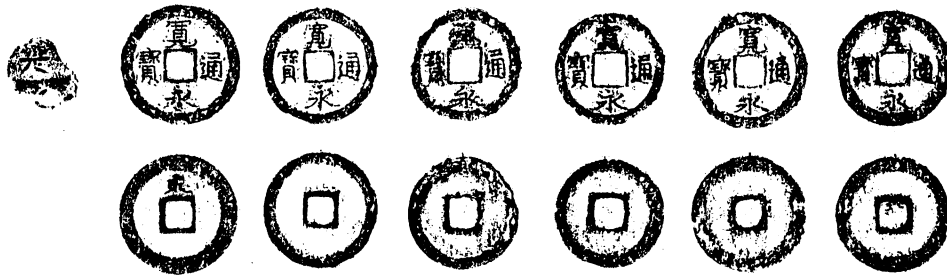
壙の床面付近には、古銭7枚とガラス玉1個が埋納され、他に釘状の鉄片がみられた。古銭は、すべて「寛永通寶」である。ガラス玉は、直径0.7cmの小粒のもので、中央に数珠状の穿孔が施されている。



第111図 墓壙配置図



第112図 1号墓実測図

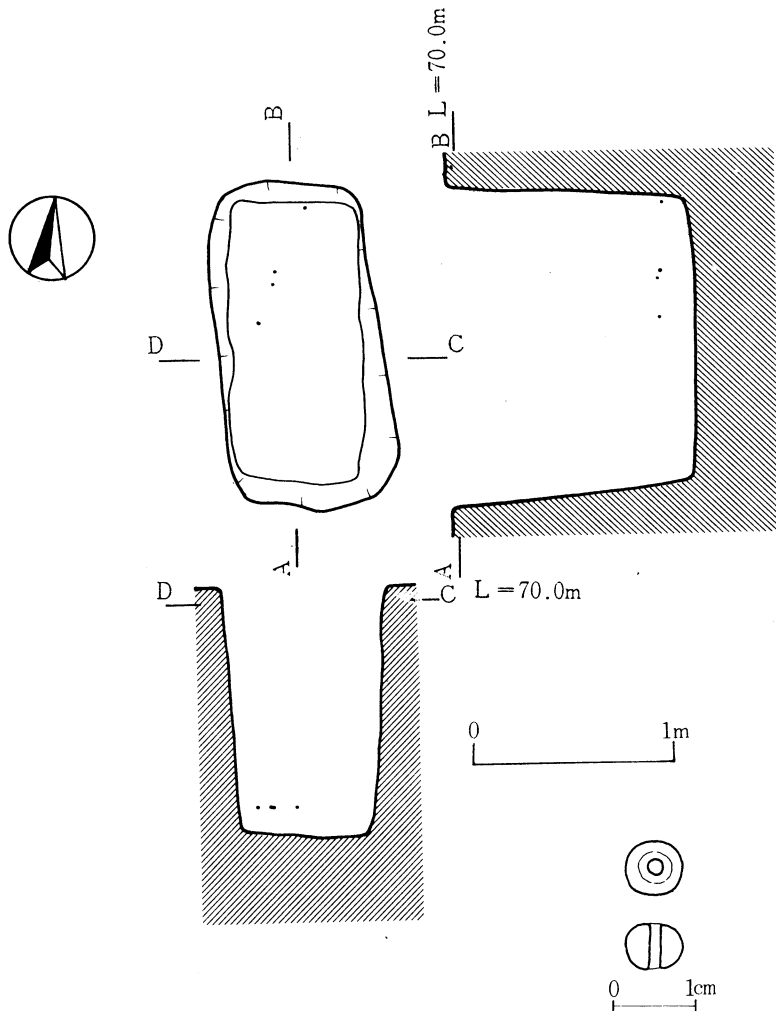


第113図 1号墓出土古銭

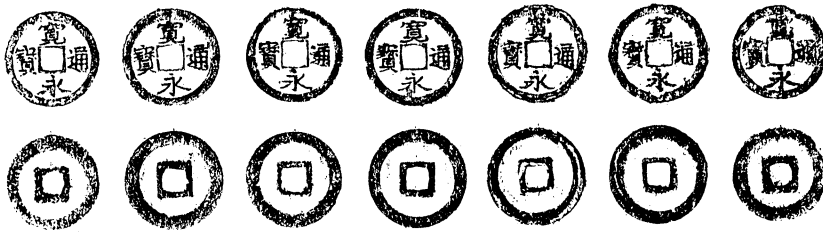
1号墓 出土銭一覧

		22	23	24	25	26	27
銭名	豆板銀	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶
縦長cm	1.80	2.52	2.44	2.37	2.31	2.42	2.43
横長cm	1.45	2.52	2.45	2.34	2.29	2.46	2.44
重さg	6.79	2.27	2.22	2.57	2.30	2.37	3.11





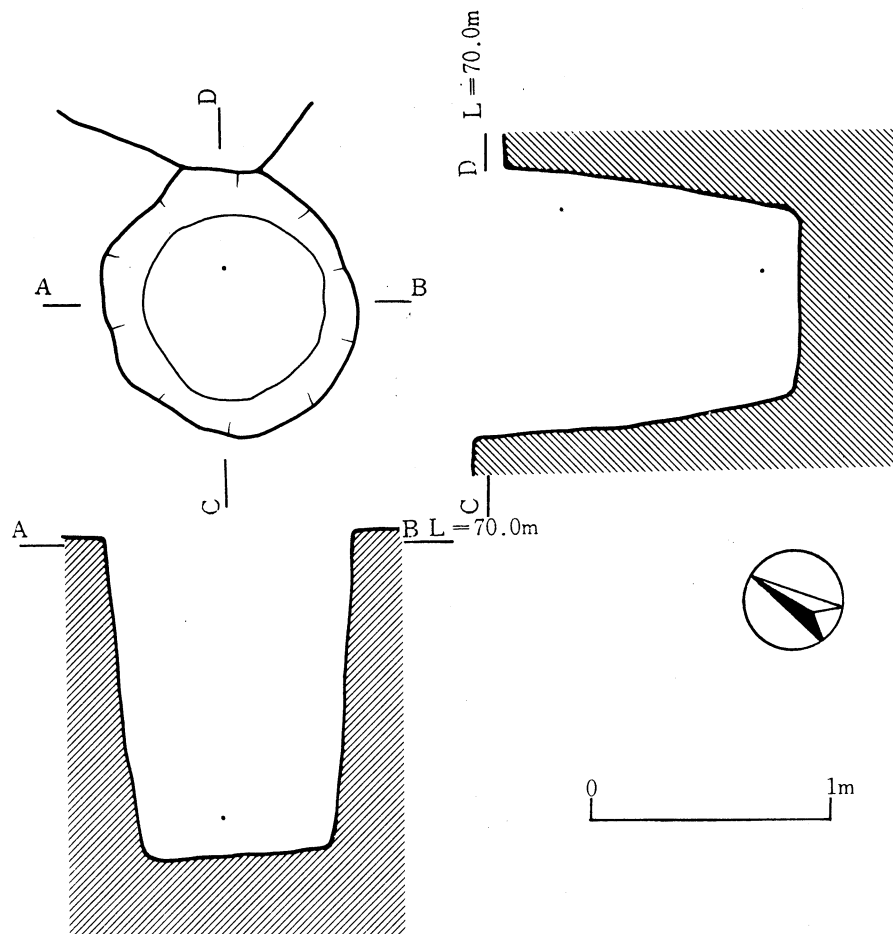
第114図 2号墓実測図 ガラス玉実測図



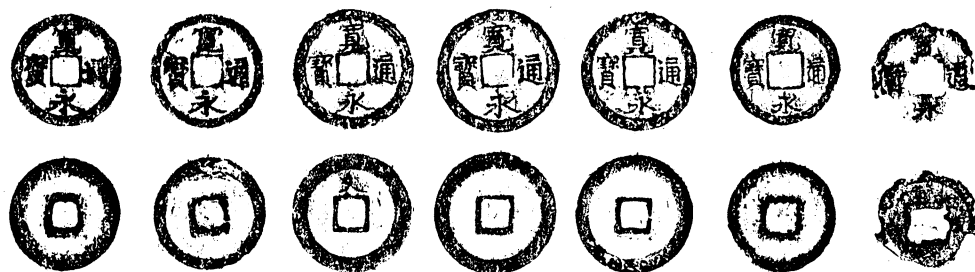
第115図 2号墓出土古銭

2号墓 出土銭一覧

	8	9	10	11	12	13	14
銭名	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶
縦長cm	2.39	2.47	2.40	2.45	2.45	2.47	2.37
横長cm	2.39	2.48	2.40	2.45	2.46	2.48	2.34
重さg	3.11	3.25	2.77	3.71	3.71	3.30	3.09



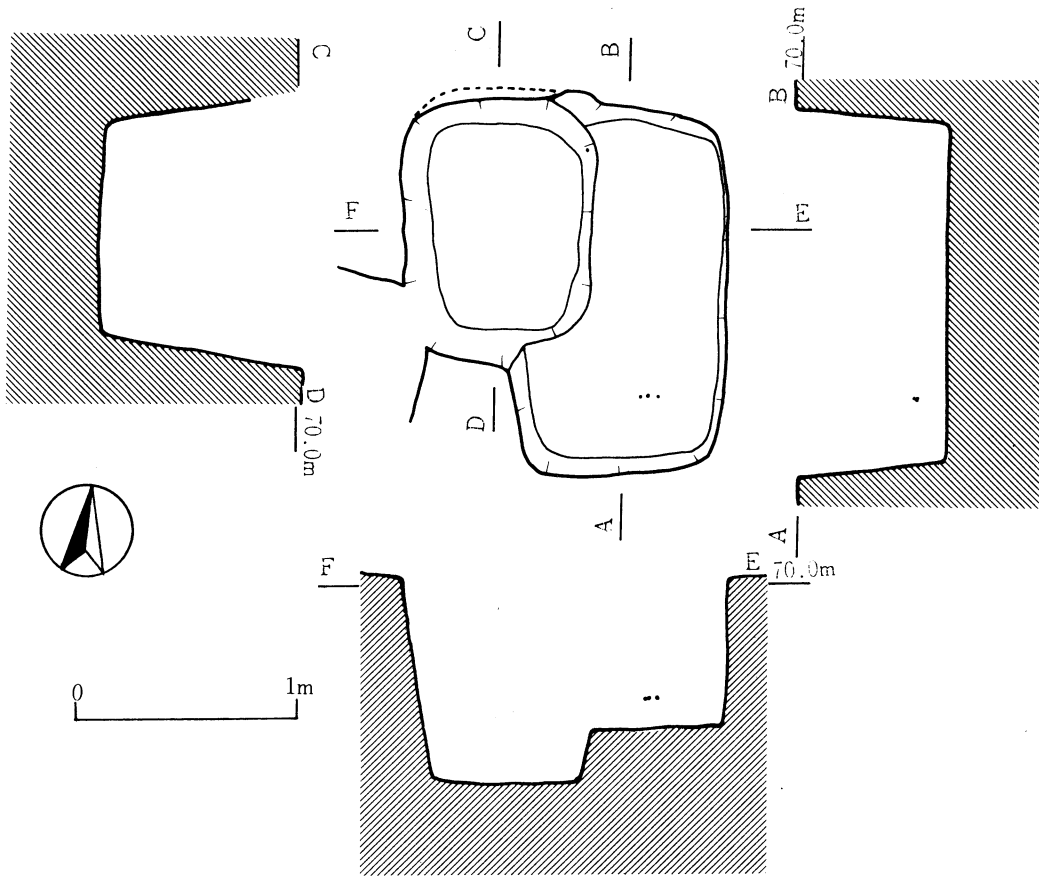
第116図 3号墓実測図



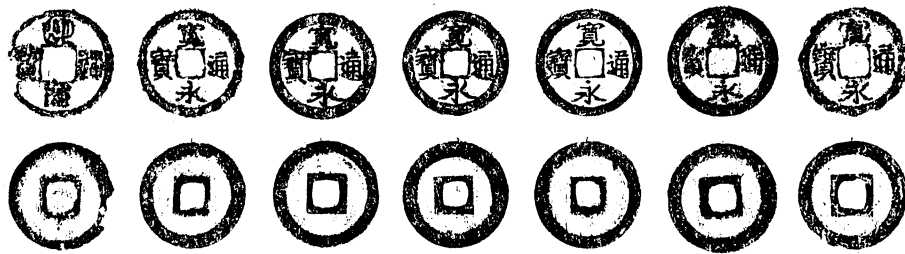
第117図 3号墓出土古銭

3号墓 出土銭一覧

	15	16	17	18	19	20	21
銭名	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶
縦長cm	2.36	2.37	2.53	2.58	2.47	2.30	2.10
横長cm	2.35	2.36	2.52	2.57	2.47	2.30	2.27
重さg	2.27	1.91	3.03	2.32	2.23	1.75	1.43



第118図 4号墓・5号墓実測図



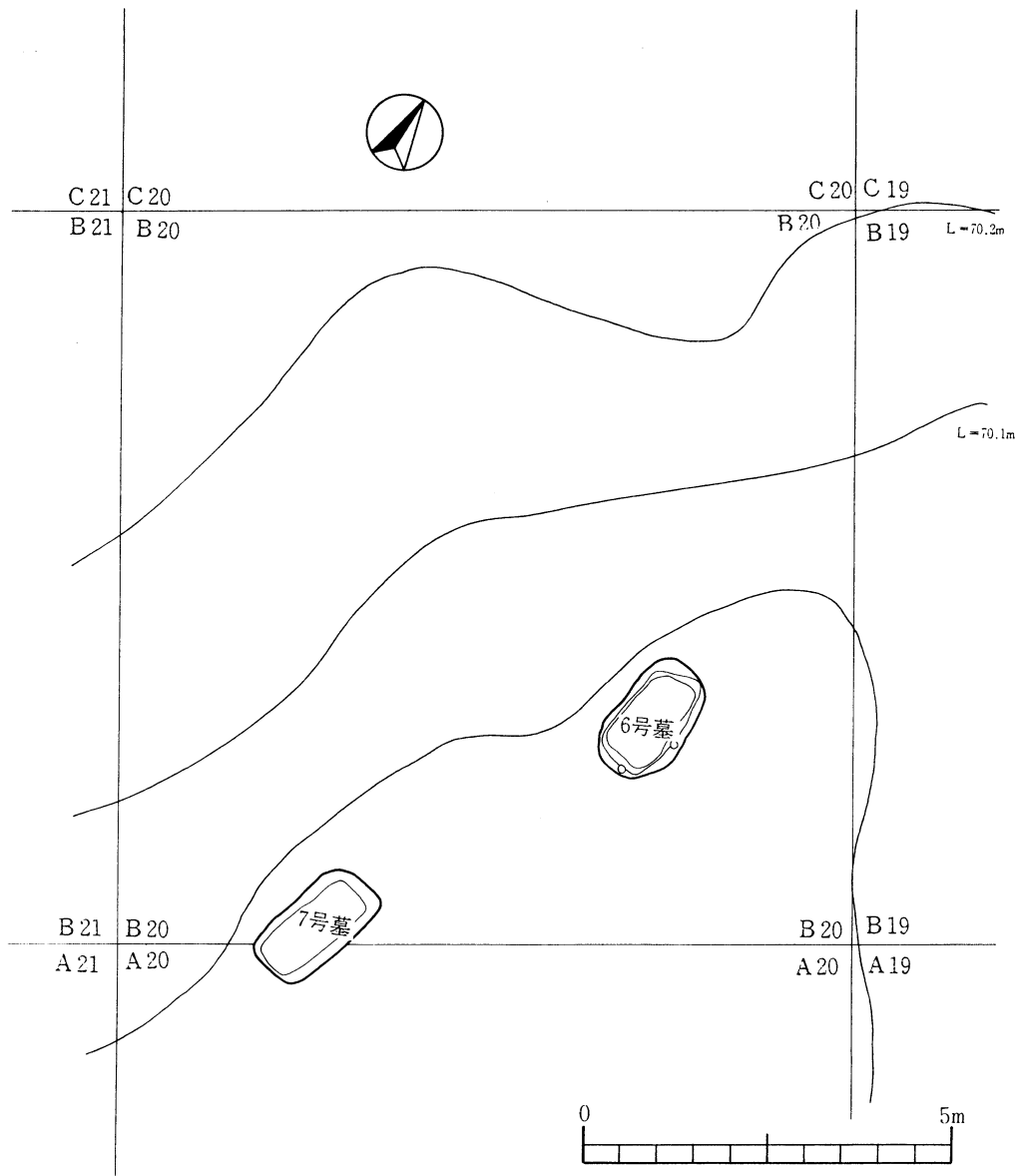
第119図 4号墓・5号墓出土古銭

4号墓 出土銭一覧

	1	2	3	4	5	6	7
銭名	明道元寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶
縦長cm	2.46	2.45	2.43	2.44	2.46	2.52	2.50
横長cm	2.46	2.45	2.43	2.48	2.45	2.52	2.50
重さg	2.40	2.91	3.14	3.53	3.24	3.24	2.50

### 3 3号墓 (第116図)

3号墓は、A13区の東側寄りに位置し、2号墓と4号・5号墓に挟まれて検出された。2号墓の形状は、直径1.11m×1.04mの円形プランを呈し、検出面からの深さは1.24mを測る。今回発見された墓壙のなかでは、唯一の円形タイプである。墓壙内には、保存状態は良くないが人骨は遺存している。



第120図 墓壙配置図(2)

墓壇の床面付近には、古銭7枚が埋納されている。古銭は、すべて「寛永通寶」である。

#### 4 4号墓 (第118図)

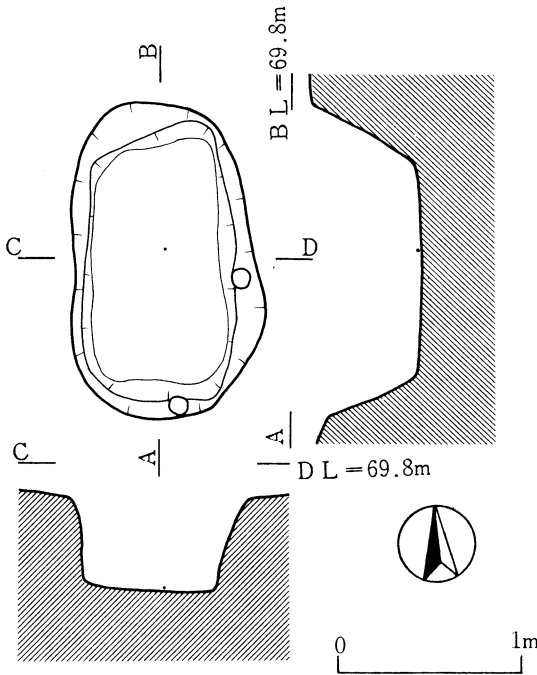
4号墓は、A12区の西側に位置し、5号墓に西側の側辺が切られた状態で検出された。今回発見された墓壇では、最も東側に位置する。4号墓の形状は、長さ1.65m×幅1.00mの長方形プランを呈し、検出面からの深さは0.67mを測り浅い。墓壇の主軸は、N-7°-Wのほぼ北方向を向く。墓壇内には、保存状態は良くないが人骨は遺存している。

墓壇の床面付近には、古銭7枚のほか楕状の木片が埋納されている。古銭は、1枚は「明道元寶」で、他の6枚は「寛永通寶」である。楕は、約2cm程度の長さの歯の部分が残存している。塗漆などはみられない。

#### 5 5号墓 (第118図)

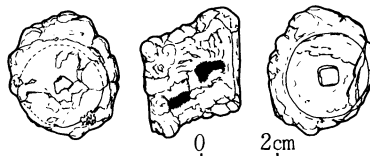
5号墓は、A12区とA13区の境に検出され、東側の側辺は4号墓を切っている。3号墓と4号墓に挟まれた位置で、4号墓を切った状態で検出された。5号墓の形状は、長さ1.25m×幅0.84mの長方形プランを呈し、検出面からの深さは0.92mを測る。今回発見された方形プランの墓壇では、最も規模が小さい。墓壇の主軸は、N-5°-Wのほぼ北方向を向く。墓壇内には、保存状態は良くないが人骨は遺存している。

床面からは古銭などの出土はまったく無く、人骨のみの出土であった。



第121図 6号墓実測図

6号墓は、B20区に検出された。1号墓から5号墓のグループとは約70m程度離れており、別な墓所が考えられる。6号墓の南5mに、7号墓が位置する。6号墓の形状は、長さ1.70m×幅0.97mの少し楕円状の長方形プランを呈し、検出面からの深さは0.60mを測



第122図 6号墓出土古銭

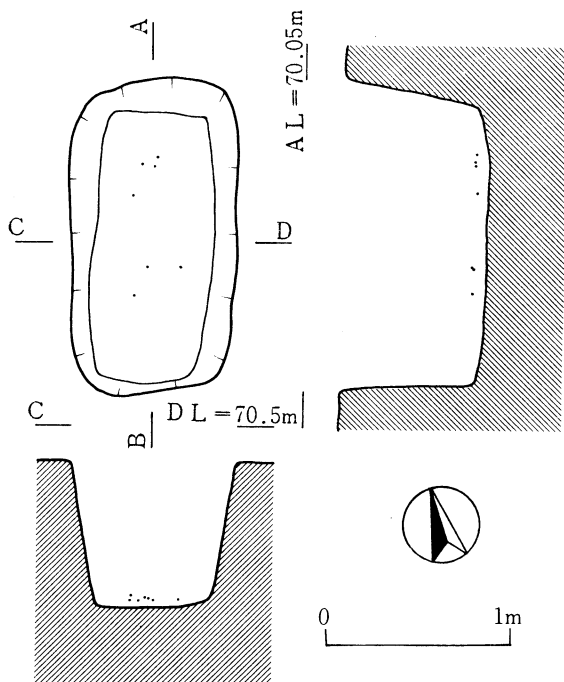
り最も浅い。墓壇の主軸は、N-7°-Eのほぼ北方向を向く。墓壇内には、人骨は遺存していない。

墓壇の床面付近には、古銭17枚程度が付着したまま出土した。さらに、古銭の袋と考えられる布痕が、鍔上面に確認される。現在のところ銅貨の遊離は出来ていないが、最上部は「洪武通寶」と読み取れるものである。これまで一墓壇内の出土古銭は7枚が一般的であったが、6号墓は17枚と最も多く、また、明銭の「洪武通寶」が含まれている点などから、近世墓との相違が指摘される。

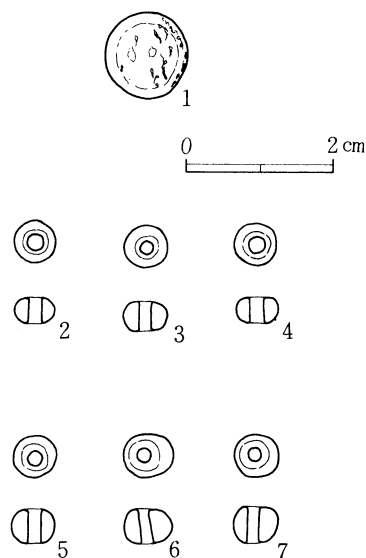
### 7 7号墓 (第123図)

7号墓は、A20区とB20区の境で、6号墓のほぼ南側の位置に検出された。7号墓の形状は、長さ1.70m×0.90mの長方形プランを呈し、深さは0.79mを測る。墓壇の主軸は、N-15°-Eで北方向からわずかに東を向く。墓壇内には、人骨は遺存していない。

墓壇の床面付近からは、鉛玉(註1)1個とガラス小玉6個の計7個が出土した。鉛玉は、直径約1.20cmの大きさを測り、ガラス小玉は直径0.5cm~0.65cmと小さい。小玉は、直径約1.5mm程度の大きさの穿孔がある。ガラス小玉には、透明度の強いものと不透明なものに分かれる。



第123図 7号墓実測図



第124図 7号墓出土ガラス玉実測図

## 第2節 鹿屋市前畑遺跡出土の近世人骨

小片丘彦・峰 和治（鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座）

鹿屋市前畑遺跡の発掘調査で、1987年8月に検出された近世の土壌墓5基のうち4基に人骨が遺存していた。今回、その人骨を調査する機会を与えられたので、ここに概要を報告する。

### <2号墓人骨>

脳頭蓋、歯および下肢骨が断片的に遺存する。脳頭蓋では、矢状縫合と右ラムダ縫合の周辺部および左右側頭骨だけが消失をまぬがれ、原形をとどめている。骨壁は全体に厚くはないが、正中矢状頭頂弦長122mm、ラムダ-右アステリオン間距離98mmと径は大きい。観察可能な頭蓋三主縫合には内外板ともに閉鎖は見られない。歯は、顎骨と歯根が腐食していたため、下記の歯式に示す22個（歯種不明1を含む）の歯冠だけが遊離した状態で遺存していた。

7 6 5 4 3 2 1		1 2 3 4 5 6 7
7 6 5 4 1		3 6

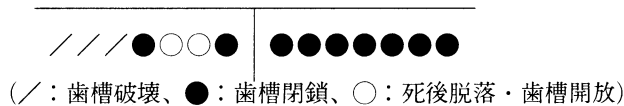
咬耗は大部分がMartinの2度であるが、第2大臼歯の象牙質露出は軽微である。齶蝕は見られない。

体肢骨は腐食が著しく、わずかに右側の大腿骨と脛骨が同定できただけである。ただ、この二骨が平行して検出されたことから、膝関節は屈曲状態であったことがうかがわれ、頭蓋と下肢骨の出土位置が離れていることや、この土壌の底が長径約1.5mの長方形であることを考え合わせると、上体は仰臥または側臥で伸展し、下肢だけを屈曲した埋葬姿勢が推測される。

頭蓋の諸径、縫合、歯の咬耗状態などから、本人骨は壮年男性と考えられる。

### <3号墓人骨>

脳頭蓋、下顎体および体肢骨の断片が遺存する。脳頭蓋は底を欠くものの概形はよく保存されている。計測値と非計測的小変異の有島を表に示す。頭長が大きく(187mm)、頭蓋長幅示数(74.3)は長頭型の下限に入る。眉間や眉弓の隆起は破損のため観察できないが、乳様突起は頑丈で、後頭隆起も認められる。三主縫合は、矢状縫合の内板前方部で閉鎖が始まっている以外はすべて離開している。下顎骨は、右小臼歯部から左大臼歯部までの下顎骨が遺存する。歯は上下顎とも全く検出されなかったが、下顎の歯槽の状態は次のとおりである。



3 2 | の歯槽窩は拡大しており、| 3 の歯槽閉鎖は不完全である。

体肢骨では左上腕骨、左右大腿骨および左脛骨の各骨体部破片が同定できる。左大腿骨体の上部は、破損のため矢状径が計測できないものの横径は34mmと幅広く、扁平性がうかがわれる。脛骨体中央部の断面形は Hrdlicka のV型を呈し、扁平とはいえない。

頭蓋の径、縫合や歯槽の状態、体肢骨の大きさなどから、本個体は熟年男性と推定される。

なお、本例も保存不良のため埋葬姿勢の確定は難しいが、左の下肢骨が膝関節を屈曲させた立て膝の状態を検出され、頭蓋がそのすぐ脇に位置していたことから、坐棺か早桶に屈身状態で納められたものと考えられる。これは、円形掘り込みという土壌の形態ともよく合った姿勢といえる。

#### < 4号墓人骨 >

左側の頭頂骨、側頭骨および後頭骨の一部が遺存するだけである。本墓からは櫛が出土しており、女性の可能性が高いが、性判定に有用な人骨の部位は欠失している。脳頭蓋の骨壁の厚さは中程度で、側頭骨錐体の大きさや形状から推して、成人とみてよいであろう。なお、頭頂切痕骨（左）が認められる。埋葬姿勢は不明である。

#### < 5号墓人骨 >

4号墓の北西隅を切り取るように掘り込まれた長方形土壌墓で、脳頭蓋、歯および下肢骨が断片的に遺存する。脳頭蓋では、頭頂部と頭蓋底を大きく欠損し、計測可能な部位はほとんどない。眉間や眉弓の隆起はほとんどなく、鼻根も平坦で、前額部の立ち上がりは急である。両側とも外耳道骨瘤の形成は見られない。顎骨が腐食しているため、次に示す遺存歯はすべて遊離歯である。

8	6 5	3		1	3	8
	4 3			4 5		

咬耗は6]が Martin の3度、8]8が1度、他歯は概ね2度である。5]には遠心隣接面齶蝕が、8]には咬合面小窩齶蝕がある。大臼歯には顕著な歯石沈着が見られる。

部位を同定できる体肢骨としては、左寛骨片と左右大腿骨体上部片が遺存する。計測はできないが、大腿骨体は細いようである。

前頭骨の形状、遺存歯の咬耗度および大腿骨の大きさを総合して、本個体は壮年後半期の女性とみられる。

埋葬姿勢としては、出土時の各骨の配置から、上体を仰臥または側臥で伸展し、下肢を屈曲させた状態が考えられる。

#### おわりに

近年、南九州地域（鹿児島県本土および宮崎県）においても近世の人骨資料は徐々に増えている。主な出土例としては、発掘年度順に枕崎市松之尾遺跡（中世末～近世）、川内市成岡・



西ノ平遺跡、宮崎学園都市堂地東遺跡、川内市麦之浦貝塚、大口市広徳寺跡古墓・王城古墓、大根占町出口遺跡、都城市貴船寺跡などの諸遺跡があげられよう。しかし、そのほとんどが深い墓壙への埋葬であるため人骨の遺存状況は概して悪く、南九州近世人に共通する特徴をつかむところまでには至っていない。わずかに頭蓋長幅示数に関しては、長頭に傾く個体の多いことが指摘されている。江戸や大阪などの大都市部で大量に出土した近世庶民の頭蓋は、長頭の中世人から現代人へと短頭化していく過程の途上にあつて、長幅示数の平均値は概ね中頭型の範囲に属す。一方、非都市部あるいは農山漁村の近世人については、中世人的特徴のひとつである長頭性を色濃く残していたのではないかということが、近年の人骨資料の積み重ねで明らかになりつつある。従来南九州人については、弥生時代人骨と現代人の資料をもとに短頭性が強調されてきただけに、非都市部の近世人骨を追加する意味とも合わせて、当地域での近世墓調査に際してさらに保存の良い人骨の出土が期待される。

表1 前畑遺跡近世墓出土人骨資料

	墓壙の形	性	年齢	埋葬姿勢
2号墓	方	男性	壮年	仰臥または側臥、下肢屈曲
3号墓	円	男性	熟年	屈身
4号墓	方	女性	成人	不明
5号墓	方	女性	壮年	仰臥または側臥、下肢屈曲

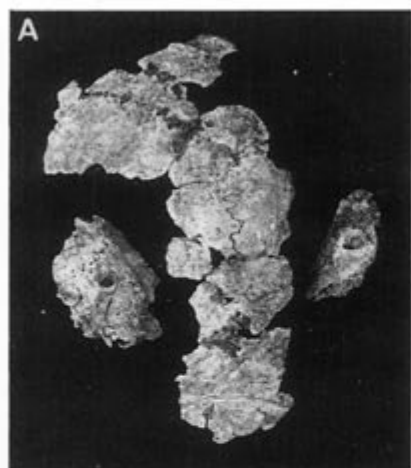
表2 前畑遺跡3号墓人骨の頭蓋計測値・示数

1	頭蓋最大長	187	8/1	頭蓋長幅示数	74.3
8	頭蓋最大幅	139	20/1	頭長耳高示数	62.6
9	最小前頭幅	92	20/8	頭幅耳高示数	84.2
10	最大前頭幅	110	9/10	横前頭示数	83.6
11	両耳幅	124	9/8	横前頭頭頂示数	66.2
12	最大後頭幅	106	26/25	前頭矢状弧示数	34.2
24	横弧長	322	27/25	頭頂矢状弧示数	33.9
25	正中矢状弧長	380	28/25	後頭矢状弧示数	31.8
26	正中矢状前頭弧長	130	27/26	矢状前頭頭頂示数	99.2
27	正中矢状頭頂弧長	129	28/26	矢状前頭後頭示数	93.1
28	正中矢状後頭弧長	121	28/27	矢状頭頂後頭示数	93.8
29	正中矢状前頭弧長	117	29/26	矢状前頭示数	90.0
30	正中矢状頭頂弧長	117	30/27	矢状前頭示数	90.7
31	正中矢状後頭弧長	104	31/28	矢状後頭示数	86.0

表3 前畑遺跡3号墓人骨の頭蓋非計測的小変異

	右	左
ラムダ小骨	—	—
ラムダ縫合骨	—	—
横後頭縫合痕跡	—	—
アステリオン小骨	—	—
頭頂切痕骨	—	—
翼上骨	△	—
前頭縫合残存	—	—
眼窩上神経溝	—	—
外耳道骨瘤	—	—

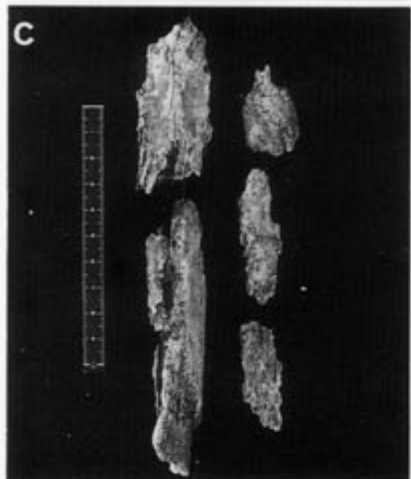
—：なし    △：観察不能



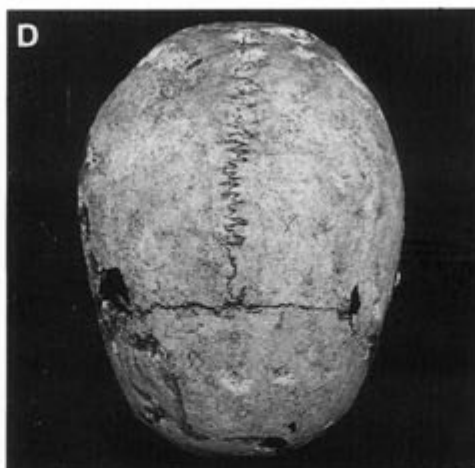
A



B



C



D



E



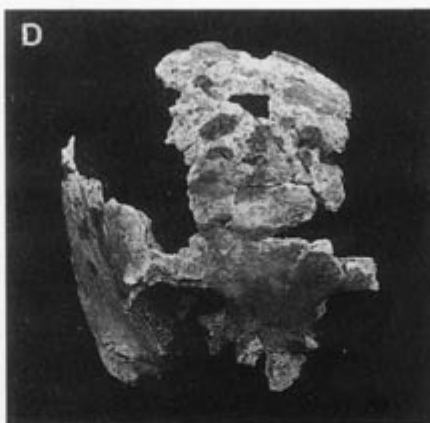
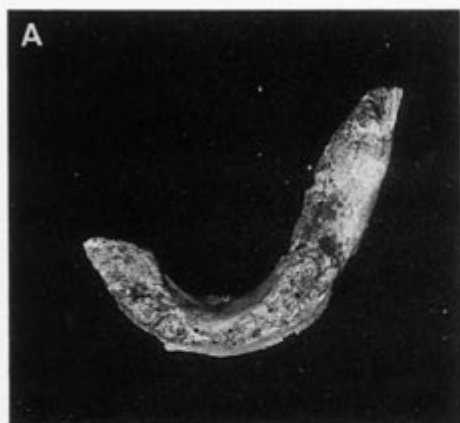
F

2号墓出土人骨

- A. 頭蓋冠ほぼ上面
- B. 復元した上顎歯列弓
- C. 下肢骨片

3号墓出土人骨頭蓋

- D. 上面
- E. 前面
- F. 側面 (左)



3号墓出土人骨

A. 下颏体上面

B. 下肢骨片

4号墓出土人骨

C. 头盖侧面 (左)

5号墓出土人骨

D. 头盖前面

E. 头盖侧面 (右)

F. 下肢骨片

### 第3節 前畑遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭

桜木 晋一（九州帝京短期大学経営情報科講師）

#### 1. 前畑遺跡の出土銭貨

本遺跡では、発掘された7基の墓のうち1号・2号・3号・4号・6号墓から六道銭が出土している。これらの六道銭は、俗に「三途の川の渡し賃」と言われており、六道の六という数字から通常6枚だと考えられているが、必ずしも6枚ではないことを本遺跡の銭貨は示している。全国的な傾向としては、6枚一組の六道銭が一番高い割合を示しているのは事実であるが、鹿児島県においては7枚一組のものの割合が最も高いという点に特色がある。この七という数の意味については、六地藏にそれぞれ1枚渡し6枚、プラス故人の持念仏または阿弥陀如来への賽銭として1枚、計7枚という考え方があるが、定かではない。但し、本遺跡の1号墓の銭貨や5号墓の数珠玉からは、6プラス1という思想の存在を窺うことができる。

発掘される中・近世墓は墓標を伴わないケースが多い。しかし、最近の研究によりこのような墓でも、出土銭貨の組合せから墓の造営時期の推定ができるようになってきた。渡来銭が国内に流通していた中世に終止符を打つべく、徳川幕府は公鑄貨である寛永通寶を寛永13年（1636）に鑄造を始めて以来（＝古寛永）、背面に「文」字を有するいわゆる文銭を寛永8年（1668）、さらに新しいタイプの銅銭である新寛永を元禄10年（1697）、素材の銅が不足したことによって鉄を素材とする寛永鉄銭を元文4年（1739）に鑄造開始している。これらの銭貨は都合の良いことに三十年程の間隔をもって鑄造されており、いずれの銭貨の占める割合が高いかで、おおよその埋葬年代を知ることができるのである。以下、銭貨の組合せから本遺跡の各墓の造営時期を推定してみることにする。

1号墓からは、豆板銀1枚と寛永通寶6枚が出土している。六道銭として豆板銀が使用されているのは、筆者の知見の限りでは本例のみである。豆板銀には「是」が読める。6枚の寛永通寶の組合せから時期を推定すると、文銭1枚と新寛永5枚なので、流通通貨がほとんど新寛永になってしまっていた時期で、且つ寛永鉄銭が1枚も混入していないことから、1740年頃の墓であると考えられる。マ頭通（通の字の旁上部がコではなくマになっているもの）と呼ばれている寛永通寶が含まれていることから、俗説では京都七条銭・鳥羽銭・伏見銭がマ頭通であり、これに従えば1726年以降ということになり、1740年頃であることを支持することになる。

2号墓は7枚全てが古寛永なので、1668年の文銭出現以前、つまり17世紀中期の墓であると推定できる。

3号墓からは、古寛永2枚、文銭1枚、新寛永4枚が出土している。新寛永が4枚で多いが、古いタイプの寛永通寶である古寛永と文銭も3枚混じっていることから、新寛永が流通し始めてから間もない時期の18世紀初期であると考えられる。

4号墓は北宋銭の明道元寶（1032年初鑄）1枚と古寛永6枚の組合せである。この墓は2号墓とほぼ同じ時期か、渡来銭が混入していることから、2号墓よりも若干古い可能性はある。

いずれにしても17世紀中期の墓であると推定できる。

6号墓の17枚については寛永通寶を含まず、明銭の洪武通寶（1368年初鑄）なので、1636年の寛永通寶公鑄以前の墓であると考えられる。枚数が二桁と多いのも、中世の六道銭の特徴である。

1～5号墓と6～7号墓は区域も離れており、1～5号墓は近世墓、6～7号墓は中世墓であると考えられる。従って、5～6号墓が中世末に造営され、近世に入って4号墓→2号墓→3号墓→1号墓の順で墓の造営が行われたと、銭貨からは推定できる。

## 2. 鹿児島県下の出土六道銭

前節で前畑遺跡の5基の墓について造営時期を推定したが、鹿児島県下で報告がなされている他の出土六道銭についても、ここで考察を加えてみる。

鹿児島県では表1のように、現在までのところ12の六道銭出土遺跡が知られている。発掘された全墓数に対して、六道銭を副葬した墓の割合が約8割と高い。筆者が現在まで集積している六道銭副葬率は、九州全体では1割強なので、九州の他県と比較すると群を抜いて高い。発掘精度の高さもあるが、六道銭を副葬する習慣が、鹿児島県下に定着していたことを知ることができる。

表Ⅱはこれらの遺跡なかで、銭貨の内容がわかるものについて分類したものである。六道銭の枚数は6枚と7枚のものが多い。特に7枚の割合が高いのは鹿児島県の特徴である。これほどまとまって7枚セットで出土する地域は、現在までのところ知られていない。また、渡来銭のなかで洪武通寶の占める割合が圧倒的に高いのも鹿児島県の特徴である。17世紀初期に鑄造されていたと言われている加治木銭との関係も考慮しなければならないが、背面に文字の読めるものはほとんどない。

成岡遺跡は墓数も多く、良好な六道銭の資料である。この墓地は墓壇Aにより中世末ないし近世初期から営まれていることが判るが、鉄銭をわずかに含むことによって18世紀中期までの墓群であると推定できる。但し、最も新しい墓標は文化9年（1812）のものであり、19世紀初期までは墓が造営されていたことが判る。17号墓壇の2枚と18号墓壇の5枚の銭貨は、切り合いの関係から7枚セットだった可能性もある。また、10号墓壇からはガン首銭が出土している。これはキセルの火皿の部分を押潰して平にして、丁度銭の格好にしたものであるが、九州では、六道銭として使用されたものとしては唯一の発掘例であろう。

王城古墓は、紀年を有する墓石と墓壇が対応しているという点で貴重な遺跡である。現在までのところ、実年代が判る墓で六道銭を副葬したものはほとんど知られておらず、考古学的手法を使用して墓の造営期を推定している。王城古墓の4基はそのうちの3基について銭貨の判別ができ、すべての墓に古寛永・文銭・新寛永が2枚ずつ副葬されていた。新寛永を2枚含む古いタイプの寛永通寶も4枚存在することから、18世紀初期の墓であろうと推定できるが、墓石にも1708～1721年を記しているのである。考古学的手法でも、概ね実年代をおさえることが

表Ⅰ 鹿児島県六道銭出土遺蹟一覧表

	遺跡名	墓数		文	献
1	松ノ尾	7	2	枕崎市教委 1集松ノ尾遺跡	1981
2	成岡	29	21	鹿児島県教委 28集成岡・西ノ平・上ノ平遺跡	1983
3	西ノ平	9	9		
4	麦ノ浦貝塚	2	2	川内市土地開発公社 麦ノ浦貝塚	1987
5	王城古墓	4	4	大口市教委 4集広徳寺跡・王城古墓	1985
6	広徳寺跡	1	1		
7	石峰	6	2	鹿児島県教委 12集石峰遺跡	1980
8	中尾田	1	1	鹿児島県教委 15集中尾田遺跡	1981
9	薩摩国分寺跡	1	1	川内市教委 国指定史跡、薩摩国分寺跡環境整備事業報告書	1985
10	出口	2	1	大根占町教委 (2) 出口遺跡	1988
11	前畑	7	5	鹿児島県教委 1990刊行予定	
12	鎌石	2	2	鹿児島県教委 1990刊行予定	

表Ⅱ 鹿児島県出土六道銭の内訳

遺跡名	遺構番号	枚数	内訳							備考
			渡	古	文	新	鉄	不明	その他	
松之尾 (枕崎市)	13号人骨	7	7							洪武通寶 7
	17号人骨	7	7							洪武通寶 7
成岡 (川内市)	墓壇 A	4	4							洪武通寶 4
	4号墓壇	7		1		6				
	6号墓壇	7		4	1	2				
	7号墓壇	7		2		5				
	8号墓壇	6				3	2	1		
	10号墓壇	7		2		4			1	その他はガン首銭
	11号墓壇	2		2						
	12号墓壇	7		1	1	5				
	13号墓壇	7		2	2	3				
	14号墓壇	7		1		6				
	15号墓壇	7		3		4				
	17号墓壇	2				2				
	18号墓壇	5				3		2		
	19号墓壇	6		1	1	4				
	20号墓壇	6		1	1	4				
	21号墓壇	7		1		4	2			
22号墓壇	7				7					
23号墓壇	7		1		2	3	1			
24号墓壇	7		3		4					
25号墓壇	7		3		4					
26号墓壇	4		1		3					
西ノ平 (川内市)	中世墓壇 A	10	10							元豊通寶他
	中世墓壇 B	5	5							洪武通寶 5
	火葬遺構	7	7							洪武通寶 7
	1号墓	7		1	4	2				
	2号墓	7		2	2	2	1			
	3号墓	7		2	1	3	1			
	4号墓	6				6				
5号墓	6			1	2	2	1			
6号墓	7	1	1	2	3				景德元寶 1	
王城古墓 (大口市)	1号墓	6		2	2	2				
	2号墓	6		2	2	2				
	3号墓	6		2	2	2				
	4号墓	6						6		
前畑 (鹿屋市)	1号墓	7			1	5			1	その他は豆板銀
	2号墓	7		7						
	3号墓	7		2	1	4				
	4号墓	7	1	6						明道元寶 1
鎌石 (志布志町)	1号墓	7		2		5				洪武通寶
	2号墓	7		4		3				

できるということを示している。但し、3号墓の1枚はマ頭通であり、これは大きな問題を提示している。このマ頭通は享保11年（1726）の京都七条銭と古泉界で言われている銭貨にみうけられるが、墓石の紀年は寛永5年（1708）である。他の墓石と入れ違っていたとしても下限が享保6年（1721）である。まったく別の場所から墓石をもってきていない限り、このような現象は起こり得ない。つまり、マ頭通の鑄造期について疑問を投げ掛けているのである。古泉界において一般的に云われている考え方の中には、文献や実物その他の明確な証拠によって裏付けられていないものも多くあり、考案に使用する際には注意を要する。

### 3. セリエーション分析

最後にセリエーションを使用して、17世紀から18世紀中期にかけての銭貨流通の実態を考察してみよう。

器物の出現→盛行→消滅に至る量的変化のパターンは、ふつう「軍艦型のカーブ」になることは、よく知られている。これを銭貨の分析に利用して描いたのが図Ⅰと図Ⅱである。銭貨は伝世の問題があり下限年代は決定できないが、その初鑄年が知られているので、時間軸上において上限の年代を固定できる利点をもつ。セリエーション作成の手順を簡単に述べると、

① 横軸には、年代の古い順に左から渡来銭、古寛永、文銭、新寛永、寛永鉄銭を並べ、縦軸は、上を古い年代とする時間軸とする。

② 九州地域で出土した、65例の6枚組六道銭（図Ⅰ）と30例の7枚組六道銭（図Ⅱ）を、一例ずつ軸の中心から対称になるように絶対値で配列し、軍艦型カーブを描くようにする。

③ ②の際、二種以上の銭が含まれているセットを軸上に配列する場合、最も新しい銭の示す上限年代よりも遡った軸上には配列しない。

従来は6枚セットの六道銭についてのみセリエーションを組んでいたが、鹿児島県では7枚セットの六道銭が多いので、他の九州地域から出土している7枚セットのものを組み込んで図Ⅱを作成した。

資料数に違いこそあれ、図Ⅰと図Ⅱを比較して判ることは、描かれた軍艦型カーブの形態に差がないことである。幕府公鑄貨である古寛永・文銭・新寛永・寛永鉄銭の交替は、漸移していることがわかる。つまり、新銭が徐々に流通市場に登場してきたことが読み取れる。但し、渡来銭と古寛永通寶の間には不連続性があり、これは自然な状態で徐々に古寛永通寶が流通市場に浸透しだしたのではないと考えられる。つまり、幕府が渡来銭を速やかに回収し、それに代わって幕府公鑄貨である古寛永通寶が大量に流布したと想像できる。このセリエーションのパターンを読み取ることによって、徳川幕府の銭貨政策の一端を垣間見ることができる。

研究のあまり進んでいない中・近世の考古学ではあるが、出土六道銭の研究からだけでも、貨幣経済史の復元的研究や宗教儀礼の復元など、さまざまな問題を解くカギが与えられる。特に鹿児島県は他の地域と比較して、7枚セットの六道銭の割合が高いという特徴が認められる。



図-1 九州地方出土六道銭 完全セットセリエーション

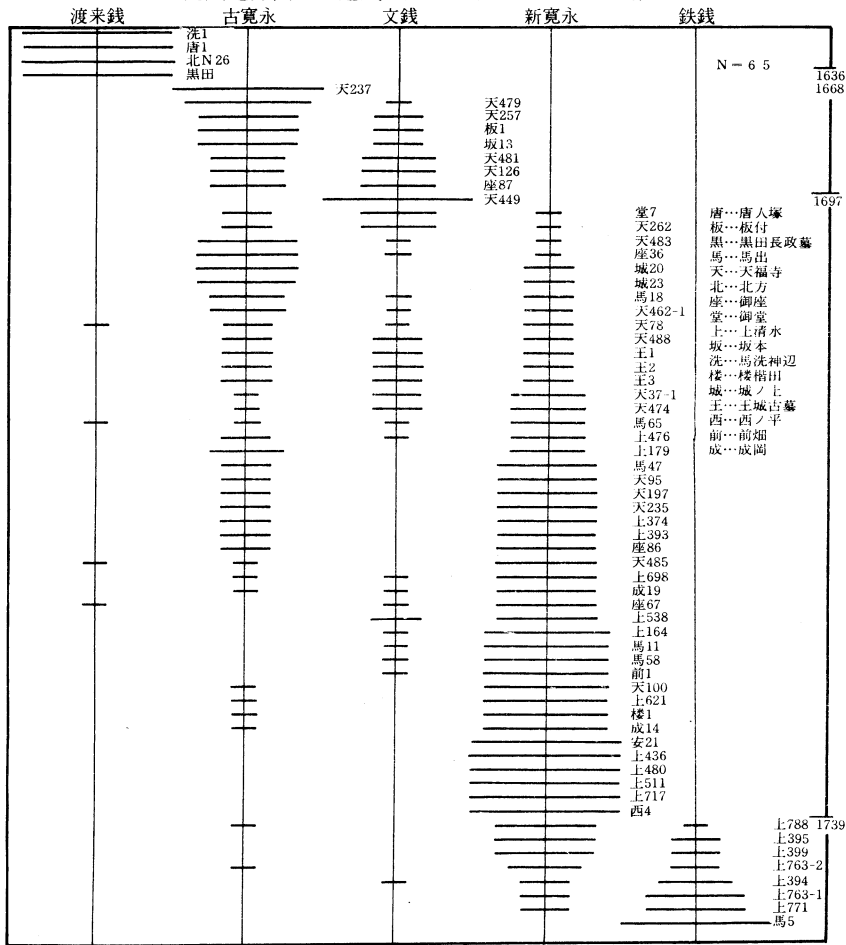
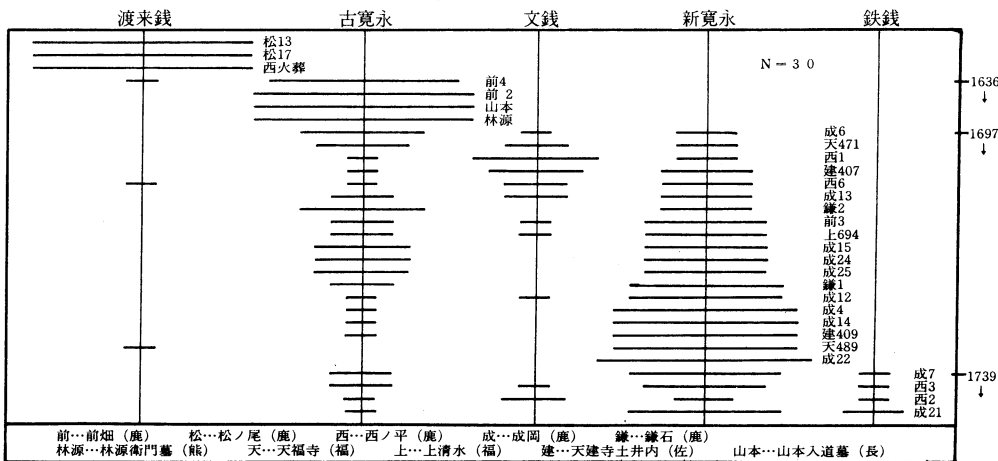


図-Ⅱ 九州地方六道銭7枚セットセリエーション



これは銭の枚数を7とすることと、何らかの宗教上の数の信仰とが結びついていたことを示している。また、これは六道銭の研究が、各地域における埋葬習俗と深い関係を持っていたことを意味するものであり、六道銭の研究が、民俗学や宗教儀礼との関係において考察されねばならないことを示している。さらに、六道銭の中で洪武通寶の占める割合が高いという点も、加地木銭その他の中世における本邦鑄造銭の問題を考える際の手がかりとして重要な資料といえる。今後ますますの資料集積とその分析に期待したい、

#### 参 考 文 献

- 鈴木公雄：「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銅銭流通」『社会経済史学』第53巻6号、1988。  
鈴木公雄：「出土六道銭の枚数と墓の保存状態」『考古学の世界』新人物往来社、1989。  
櫻木晋一：「博多22次（天福寺）と箱崎・馬出遺跡群の出土六道銭」『福岡県地域史研究』第9号、1990。  
櫻木晋一：「九州の六道銭研究の現状と課題」『九州帝京短期大学紀要』第2号、1990。  
魚津市教育委員会：『印田近世墓』1981。  
本田道輝：「鹿児島県下出土の銭貨集成」『鹿大史学』第35号。  
佐々木四十臣：「葬送儀礼と六道思想」『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』瀬高町教育委員会、1989。

## 第 V 章 発掘調査のまとめ

前畑遺跡は、縄文時代、弥生時代、近世墓群、戦跡遺構など各時代の遺構・遺物が比較的良好に検出され多大な成果が得られた。なかでも、縄文時代と弥生時代については、現在南九州で最も問題が提起されている時期に該当し、今回の調査の成果は、問題解決の一助となる部分も少なくない。なお、近世墓群についても本県の近世墓研究への指針を提供するような成果が得られ、また戦跡遺構の発掘調査及び報告は本県では初例となった（戦跡遺構は『西原掩体壕』として第5分冊で取り扱った）。

### 第1節 縄文時代について

前畑遺跡の縄文時代は、二文化層（V層とX層）に存在したが、その中心的成果はX層の縄文時代早期に該当するものであった。X層の文化層は、アカホヤ火山灰層（IX層）直下に存在する多量の遺物を含む包含層で、その下位には6基以上の集石遺構が遺存していた。包含層の形成される微高地は、北側の縁辺部が傾斜し、調査区内は遺跡の北端であることが確認された。そして、この微高地の縁辺部に、集石遺構は検出されている。なお、遺跡は南側の用地外に広範囲に広がることが想定される。

集石遺構は、掘り込みや石組み状態が看取されるものは3号と6号集石だけで、他は石を集めたままの状態のいわゆる集石となっている。包含層から出土し、集石に利用されたと思われる焼石の分布状態は第5図のようになるが、焼石の密集する部分がみられる。包含層の形成時に流失した可能性もある。集石遺構は時期を特定するものは無いが、層位的にIV類土器に伴うことが想定される。なお、集石以外の遺構は確認されていない。

X層に出土する遺物は、土器と石器がある。

土器は、形態上の特徴からI類～VI類の大きく6つの類別を試みた。そのうちIV類土器が、本遺跡の主体を占める土器群である。

I類土器は、最近、倉園B式土器<sup>(1)</sup>と呼称した型式に属するもので石坂式系の土器である。II類土器は、条痕文は前平式土器に酷似するが特定できる部位の出土はみられない。III類土器は、山形の押型文土器である。田村式平行期に比定されよう。

IV類土器は、本遺跡では最も大量に出土し、そのほとんどがAB9区からAB13区間に安定した状態で出土している。IV類土器の器形は、深鉢形と壺形がある。深鉢形は、平椀式土器に該当するものである<sup>(2)</sup>。壺形は平椀式土器の紋様要素を取り入れたものが存在するが、この期の壺形土器の出土例は初見である。近年、横川町中尾田遺跡<sup>(3)</sup>や球磨郡山江村合戦ノ峰遺跡及び高城跡<sup>(4)</sup>や都城市荒ケ田遺跡<sup>(5)</sup>などで完形に近い手向山式期の壺形が発見された。南九州の縄文早期の段階に壺形の器種の存在が確認され、新しい問題が提起された。その後、本遺跡において、後続する平椀式土器の段階にも壺形土器が存在することが判明したことは、南九州の縄文早期

後半の段階に深鉢形の他に壺形の器種がセットとして存在したことを裏付ける形となった。

Ⅳ類土器の深鉢は、口縁部の形態から二つのタイプに細分された。一つは幅広の肥厚口縁をもつタイプで従来の平椀式土器にみられるタイプである。紋様の特徴から a～g の 7 類に細別して説明したが、胴部施文に結節縄文を施文するタイプであり、同一型式に含まれることが考えられる。他方は、幅狭な肥厚口縁をもつタイプで a～f の 6 類に細別したが、これも従来散見される形態であるが、このような形で細別が試みられたのは良好な出土量の所以である。このタイプも胴部紋様は結節縄文を施文するものであり、紋様の細別は個体差に拠ることが考えられる。なお、幅広肥厚口縁は口縁部が明瞭な山形の波状口縁をつくり、幅狭肥厚口縁を有するものは緩やかな波状口縁を呈するという差異がある。平椀式土器には、この二つの器形が存在することが指摘される。さらに、平椀式土器の底部の形態も明らかになった。

なお、胴部破片に特異なものが二種みられる。一つは 227・228 で「く」字状に胴部中央が屈曲するものである。先行する手向山式土器の強く影響を残すものであろうか。他方は 229 の胴部片で、結節だけを縦位に転がすものである。志布志町白木原遺跡<sup>(6)</sup>では結節縄文の片方の縄文を切り取った施文具で結節から片側の縄文を施文するタイプが出土し、牧園町界子仏遺跡<sup>(7)</sup>では 229 と同様の結節だけを転がした胴部をもつ完形に近いものが出土している。これらは平椀式土器から後続する塞ノ神 A a 式土器を繋ぐ移行型式とすることが可能であろう。

Ⅴ類土器は、塞ノ神 A a 式土器<sup>(8)</sup>（または椀ノ原式土器）に比定される完形土器である。同一層の上部から比較的まとまって出土しており、近辺にこの期の遺跡が存在することが考えられる。Ⅵ類は細片から復元したものであるが、塞ノ神 B c 式土器<sup>(9)</sup>（または三代寺式土器）の範ちゅうに属するものである。

以上、出土土器を従来の土器型式に当てはめて説明したが、本遺跡の中心となるⅣ類土器の他に前後の土器型式が断片的にみられる。このことはこの遺跡周辺は、早期中葉から後葉にかけての格好のキャンプサイトであったことを窺い知ることができる。

Ⅹ層出土の石器は、打製石鏃、石匙、磨製石斧、磨石、敲石、凹石、石皿、棒状敲石など多種にわたる。特に、磨製石斧と棒状敲石は注目すべき発見といえる。306 の石斧は全面敲打による仕上げがみられ、片刃は円刃で上部に二ヶ所の突出部を作り出した精巧なものである。いわゆるチョーナ型の石斧で、これまでほぼ同形態が西之表市立山遺跡<sup>(10)</sup>から採集されているだけで、発掘調査での出土は初見である。342～381 の棒状敲石は、包含層出土の自然礫から確認したもので、近年この時期の遺跡で散発的に出土しているものである。一般的な敲石、敲打器、石器製作のハンマーストーンなど色々利用が考えられるもので、今後注目すべき一群である。

## 第 2 節 弥生時代について

弥生時代はⅢ層に検出され、各種の遺構の検出や多量の遺物の出土がみられた。遺構は、竪穴住居址 3 基、掘立柱建物跡 8 棟、円形周溝 1 基、溝状遺構 3 基などがある。特に、8 棟の掘立柱建物跡の検出は、多くの新知見や多大の成果をもたらした。

狭い幅の調査区にもかかわらず検出された遺構は、集落内での建物配置の構成を如実に示している。まず各建物の配置は、竪穴住居址と平地式建物跡や円形周溝が東側のブロックにまとまり、高床倉庫跡群は西側にまとまって建てられている。つまり、居住区と倉庫群が分離された形態を採っており、このような集落構成が判明したことは大きな成果であった。

各遺構の特徴は、次のようなものがある。竪穴住居址は、1本柱の小型住居(1号)、一辺に張り出しを持つ住居(2号)、外側に主柱を備える住居(3号)とそれぞれ異なる。1号、2号住居址は多量の炭化木が遺存し、焼失家屋であった事も判明した。なお、さらに注目すべきことはこの2基の住居址から、北部九州系の須久式系の甕形土器が接合して出土していることである。次の3間×4間規模の3棟の建物は、炉跡が検出されたことや桁行間の片方が5間になるものもあり平地式建物であることが判明した。また、高床に比べて柱穴の深さが浅いことから平地式の可能性が窺える。さらに、1号と3号建物には棟持ち柱が所在し、しかもこの棟持ち柱は建物に向かって斜めに立てられている事実も判明した。最近、鹿屋市王子遺跡<sup>(11)</sup>、国分市上野原遺跡<sup>(12)</sup>でも発見されており、南九州の平地式建物の上屋構造として流布していたことが考えられる。鹿屋市王子遺跡の建物跡の棟持ち柱の角度については再考の必要があろう。さらに、2号、3号建物跡と円形周溝は切り合い関係が確認され、円形周溝→3号→2号建物跡の順に構築されている。つまり棟持ち柱を備えない2号建物跡が最後に建てられたことになる。また、1号と2号建物跡には北側の桁行間側に溝状遺構が備えられ埋土には多量の遺物が混入している。そして、2号建物跡の溝からは瀬戸内系の矢羽根透かしの高坏の脚部が出土している。つまり、この瀬戸内系の遺物は最後の段階に出現したことになる。この建物跡の一辺に溝が備え付けられるタイプは、高知県田村遺跡<sup>(13)</sup>や岡山県稼山遺跡<sup>(14)</sup>にみられるが、発見例は極めて少ない。

円形周溝遺構については各説あるが、本遺跡では3号及び2号建物跡に切られて検出され、本遺跡では最も早い段階につくられた遺構にあたる。円形周溝は、中ノ丸遺跡に次いで検出であった。直径約4mで内径は3.15m程度の広さをもつ規模である。中ノ丸遺跡の二つの円形周溝とは、ほぼ同じ規模である。用途は不明である。

4号～8号掘立柱建物跡は、その形態から高床倉庫が想定される。4号は1間×1間の柱間で、他の4棟は1間×2間の柱間を持つ建物である。主柱はいずれも深く、中柱は浅い。

そのほか、4号建物から7号建物までの空間には、直角に曲がる浅い溝や柱穴などが検出されたが、遺構として組み合わせるものは存在しなかった。集落を囲む施設や居住区と倉庫群との区分の施設など発見されなければならない多くの課題が残っている。

出土遺物は、土器と石器があるが、住居址や建物跡に付属する溝などの遺構から出土するものが比較的多い。特に、在地系土器の山ノ口式土器に伴って出土する移入土器の関係が遺構によって明らかにされたのは大きな成果であった。2号住居址からは、1号住居址にも接合する完形に復元される須久式土器と高坏あるいは器台状の脚部の出土がある。これは須久Ⅱ式の範ちゅうに属することが考えられ<sup>(15)</sup>、中期後半に位置付けられるタイプである。また、最後の段階の

2号建物跡に付属した溝からは瀬戸内系の矢羽根透かしの高杯が出土することになる<sup>16</sup>。

本遺跡から出土する在地系土器は、山ノ口式土器の範ちゅうに属するものである<sup>17</sup>。甕形土器は大甕と脚台付きの甕形土器に分かれる。大甕は外反する口縁部の下に突帯文を巡らすもので口縁部と突帯文間には隙間が置かれるタイプである。このタイプの小型の甕も存在し、逆「L」字状のシャープな形態で平底を呈することが考えられる。脚台付きの甕形土器は、「く」字状に外反した口縁部の屈曲部の下に若干の隙間を置いて突帯文が巡らされるタイプである。脚台は、ほとんどが充実した平底である。壺形土器は、口縁部は短く僅かに外反し、口縁外側に突帯文を巡らせこの部分までを口縁拡張部とするタイプで、頸部付近には数条の突帯文を巡らしている。このタイプはよくみられるもので、中ノ原遺跡、中ノ丸遺跡、中原山野遺跡にもあり、また鹿屋市王子遺跡や高付遺跡<sup>18</sup>、山川町成川遺跡<sup>19</sup>などでも出土し、長期間続く形態であることが分かる。また、525・527はB22区などの包含層からの出土であるが、暗文を施した袋状口縁を呈する丹塗土器である。北部九州系土器で中期後半に属すタイプで<sup>20</sup>、在地系土器との関連などで重要な共伴資料といえる。

以上、在地系土器と移入土器の在り方をみてきたが、前畑遺跡出土の山ノ口式土器は中期後半の終末期に位置付けられるものとする。

石器は、磨製石鏃や扁平打製石斧、磨石、砥石などのほか2号・3号住居址からは台石が出土している。住居址出土の台石は、中原山野遺跡や中ノ丸遺跡などの住居内からも出土しており、住居内の必需品であったことが窺われる。

### 第3節 近世墓について

前畑遺跡では、7基の近世墓が発見された。近世墓は、6基が方形の掘り方を呈し1基が円形の掘り方をもつタイプであった。1号から5号と6号・7号の二つの墓域に分かれる。1号から4号は、7枚の古銭を埋納するタイプで規格性が強い。特に、豆板銀や渡来銭を含めての7枚の埋納は注目される。また6号の17枚の古銭の埋納や7号の鉛玉とガラス玉の7個の関係も興味深い事例である。なお、近世墓のまとめについては、第IV章の第2節及び第3節に玉稿を頂いたのでこれにかえたい。

註

- (1) 新東晃一 1989 「南九州の円筒土器と角筒土器」『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』
- (2) 河口貞徳 1972 「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』 第6号
- (3) 鹿児島県教育委員会 1981 「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 (15)
- (4) 熊本県教育委員会 1988 「高城跡」『熊本県文化財調査報告』 第95集
- (5) 宮崎日々新聞 1989.2.3付けに掲載。
- (6) 志布志町教育委員会 1988 「白木原遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』 (13)
- (7) 牧園町教育委員会 1989 「界子仏遺跡」『牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書』 (1)
- (8) 河口貞徳 1972 「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』 第6号  
新東晃一 1988 「塞ノ神式土器再考」『日本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論文集
- (9) 註8に同じ
- (10) 鯨島安豊 1978 「立山出土のチョーナ型土器について」『潮流』第2号 種子島考古学研究会
- (11) 鹿児島県教育委員会 1985 「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 (34)
- (12) 鹿児島県教育委員会 1988 「鹿児島県上野原遺跡」『日本考古学年報』 39
- (13) 高知県教育委員会 1986 「田村遺跡群」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (14) 金関恕・佐原真編 1986 「弥生集落」『弥生文化の研究』 7
- (15) 下籾信行・竹末純一氏の御教示による。
- (16) 高橋 護 1983 「山陽」『弥生土器』 I
- (17) 河口貞徳 1981 「新南九州弥生土器集成」『鹿児島考古』 第15号
- (18) 鹿屋市教育委員会 1984 「高付遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)』
- (19) 鹿児島県教育委員会 1983 「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 (24)
- (20) 註 (15) に同じ

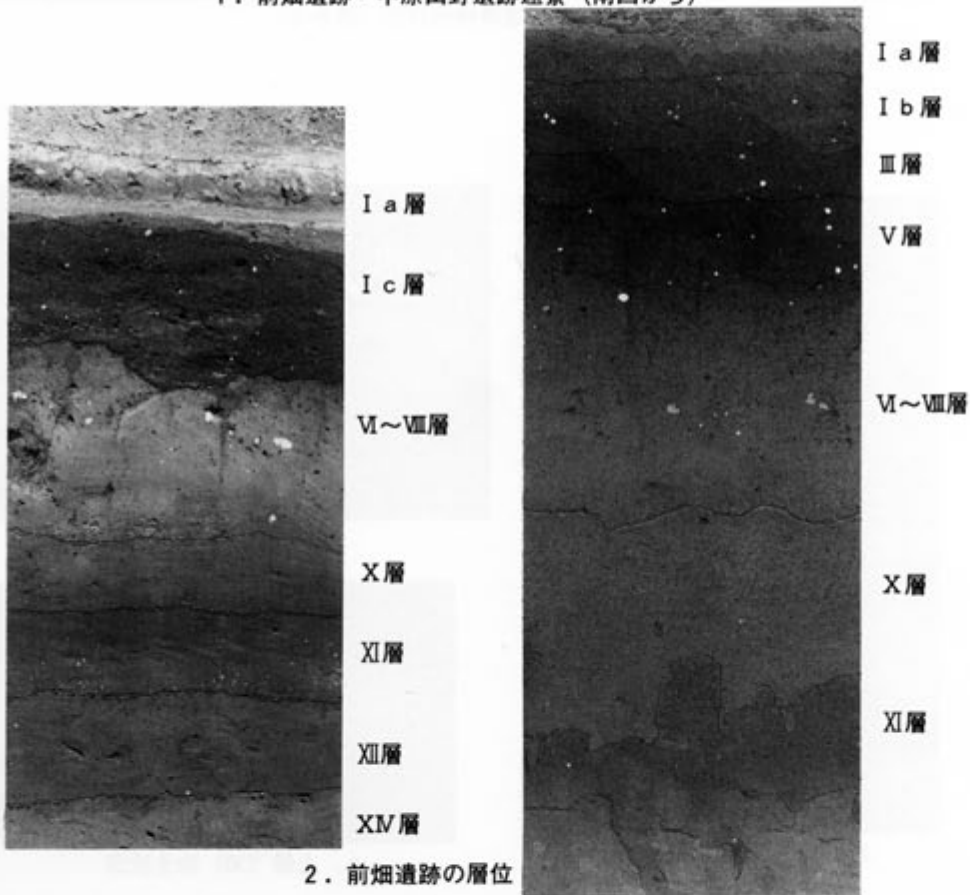
図 版

PLATES





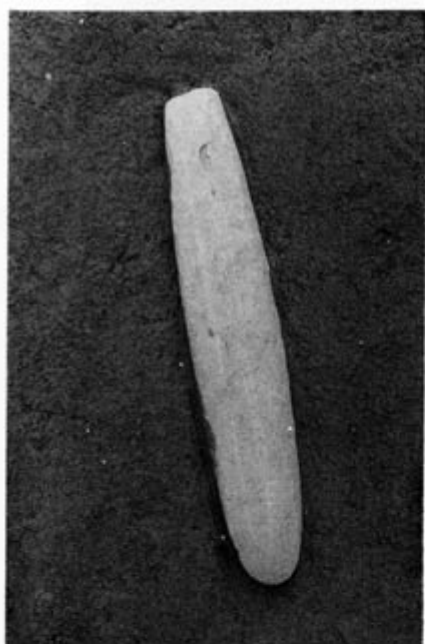
1. 前畑遺跡・中原山野遺跡遠景（南西から）



2. 前畑遺跡の層位



1. 集石遺構検出状況 (西から)



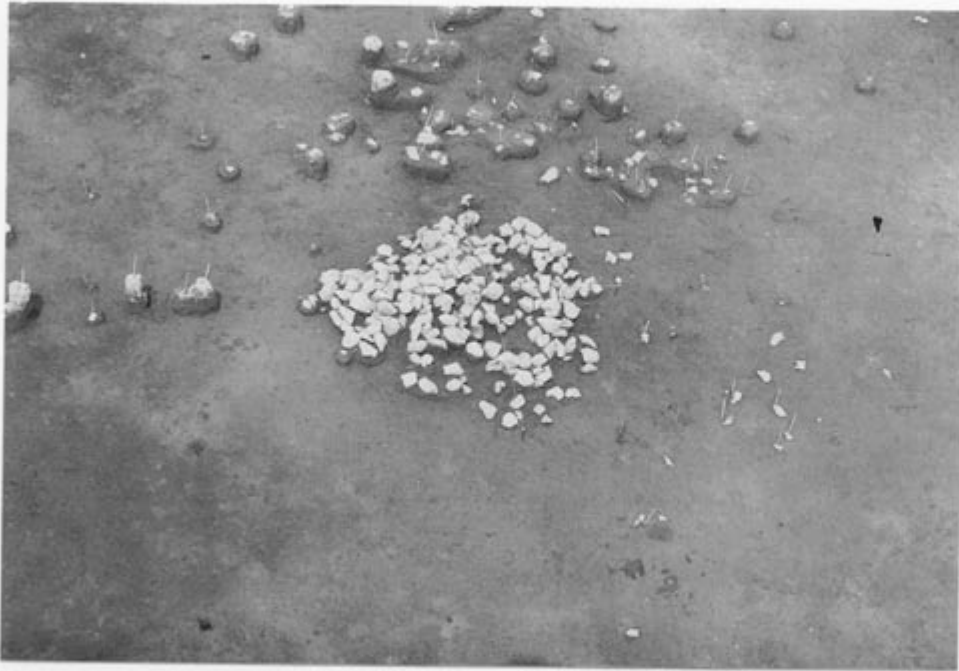
2. 石斧 (306) 出土状況



3. X層検出状況



4. 土器 (30) 出土状況



1. 4号集石と周辺の検出状況



2. 3号集石



4. 6号集石

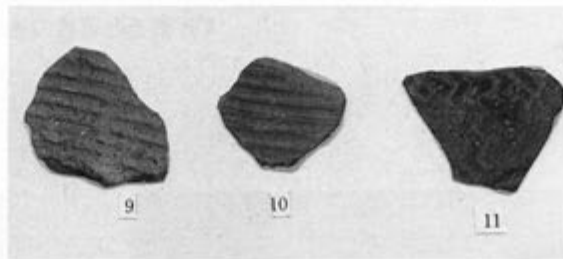
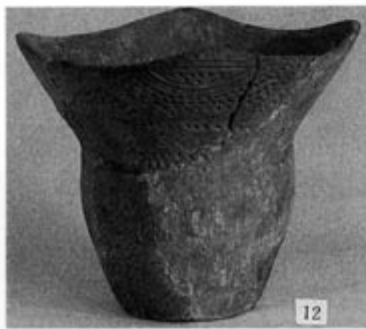
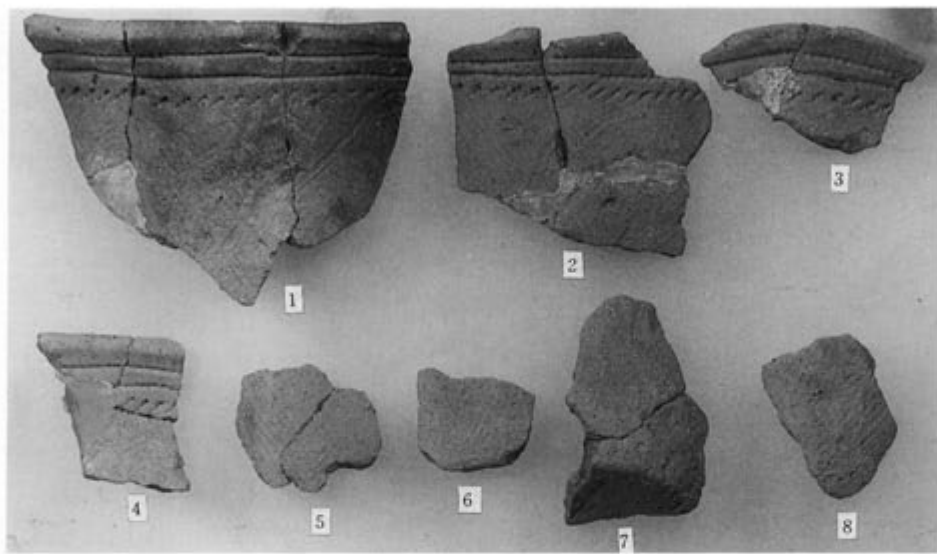


3. 3号集石断面

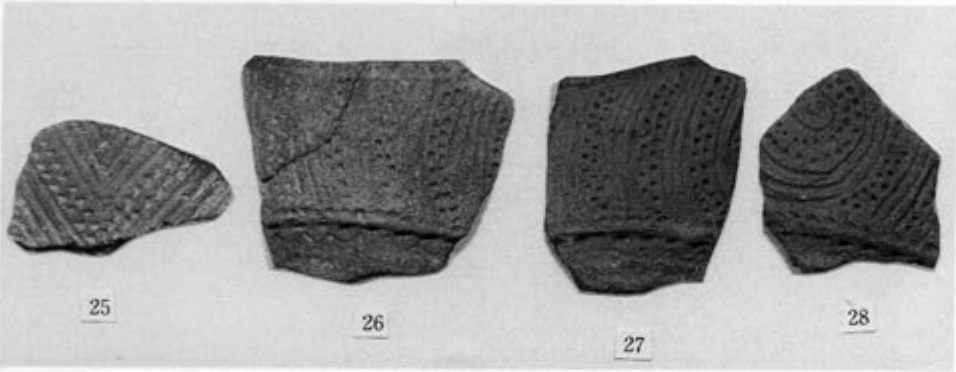
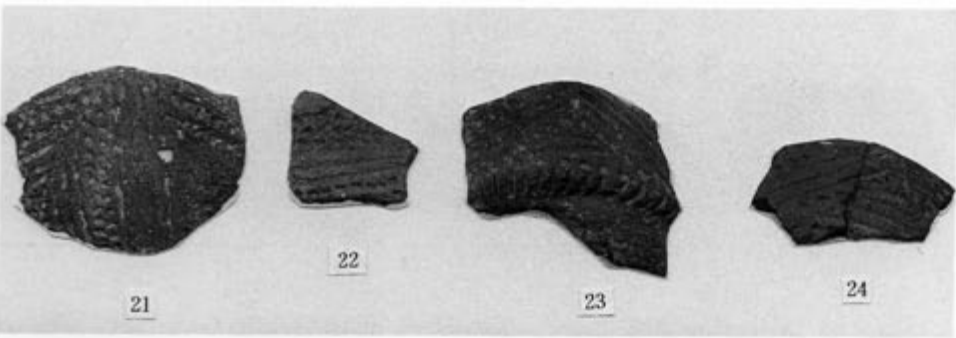
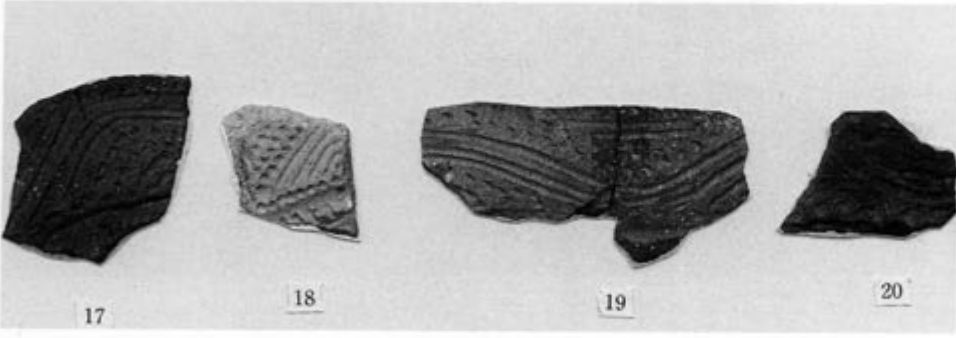
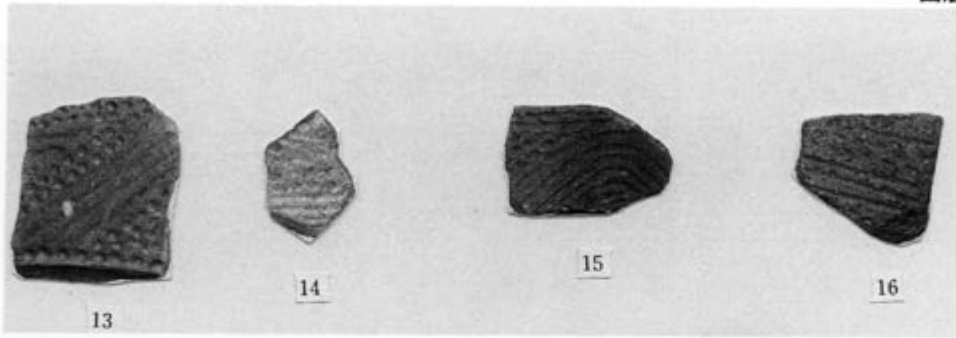


5. 6号集石断面

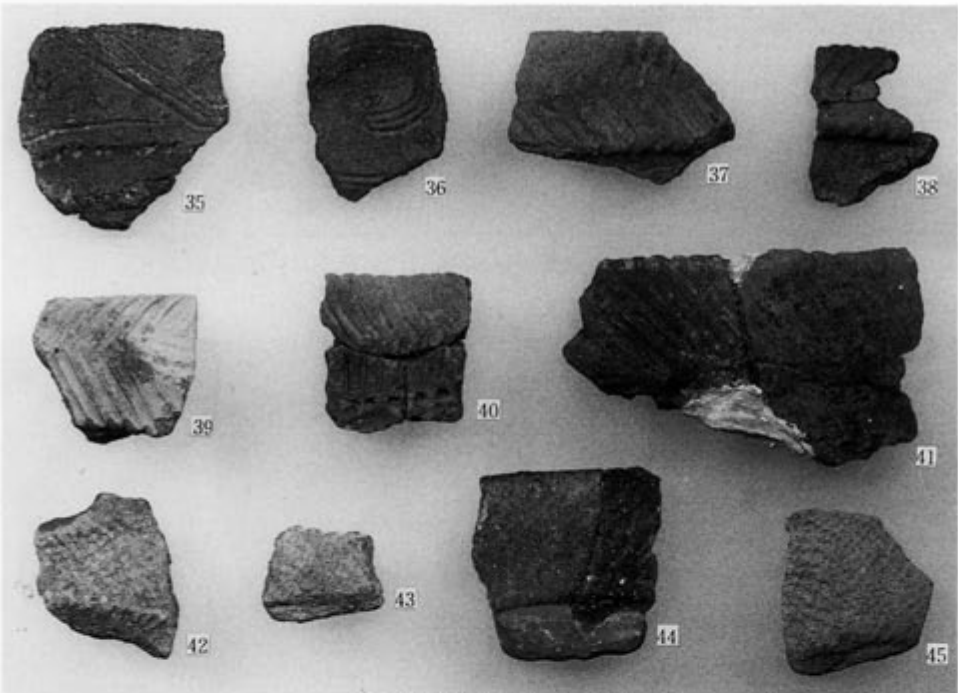
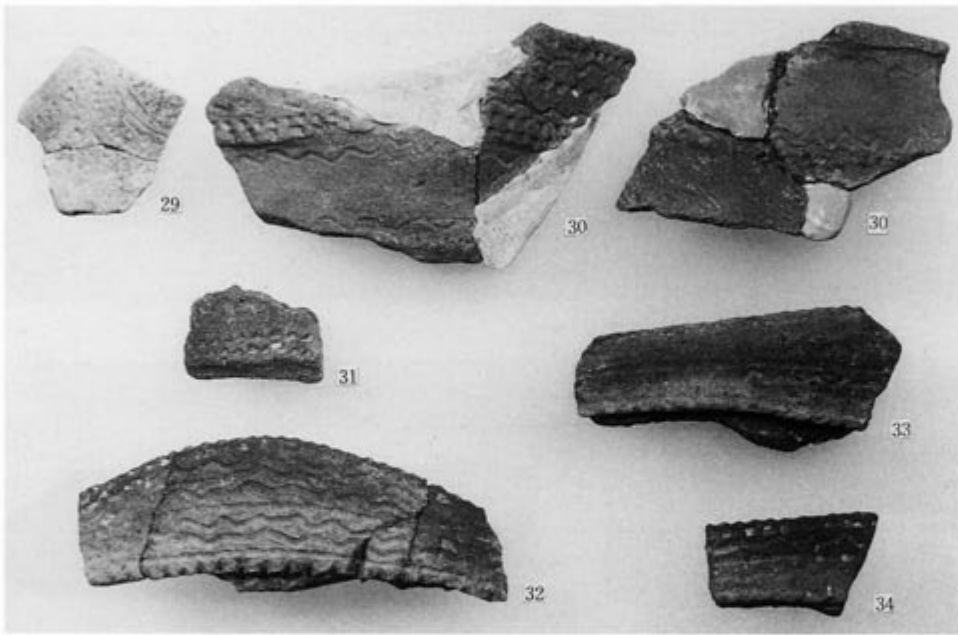
図版 4



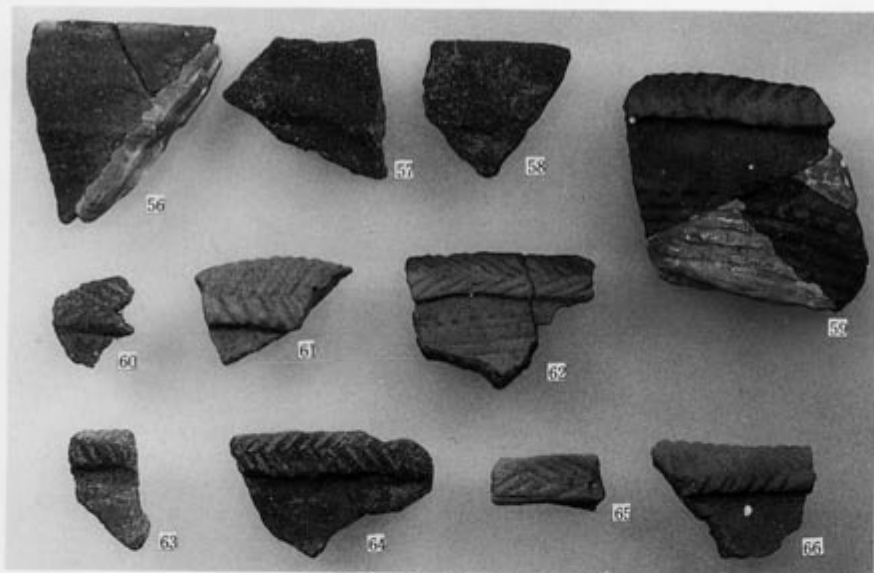
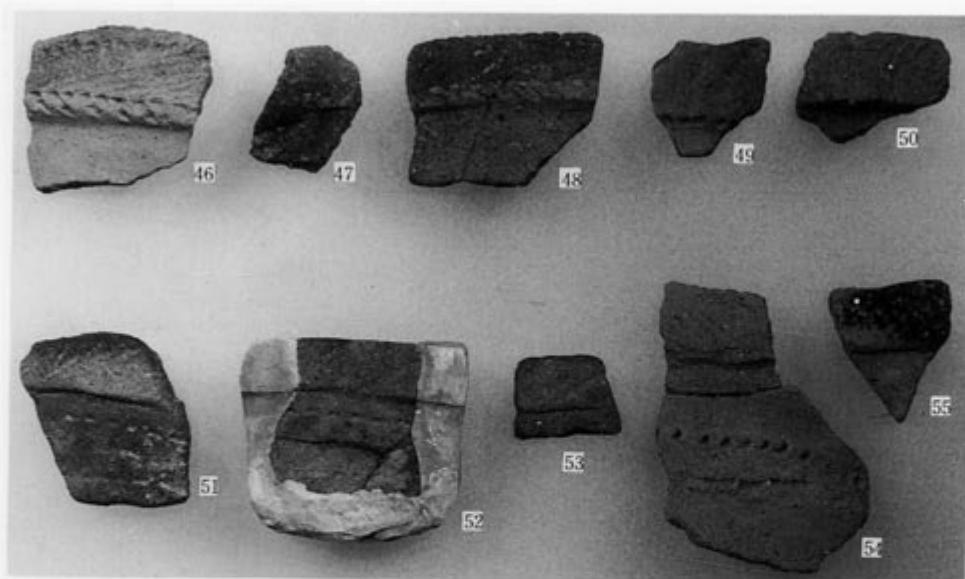
1. 縄文土器 (X層) (1)



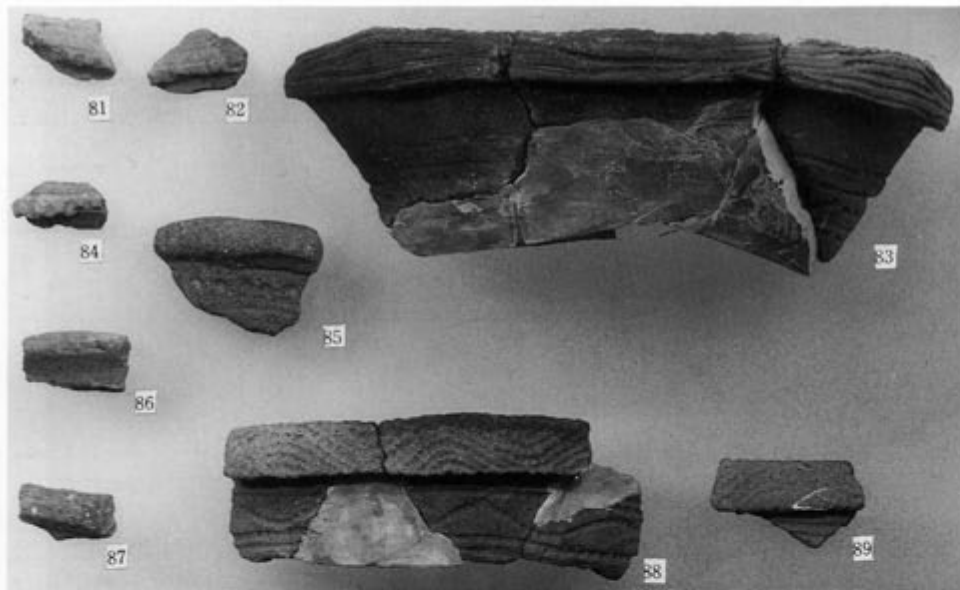
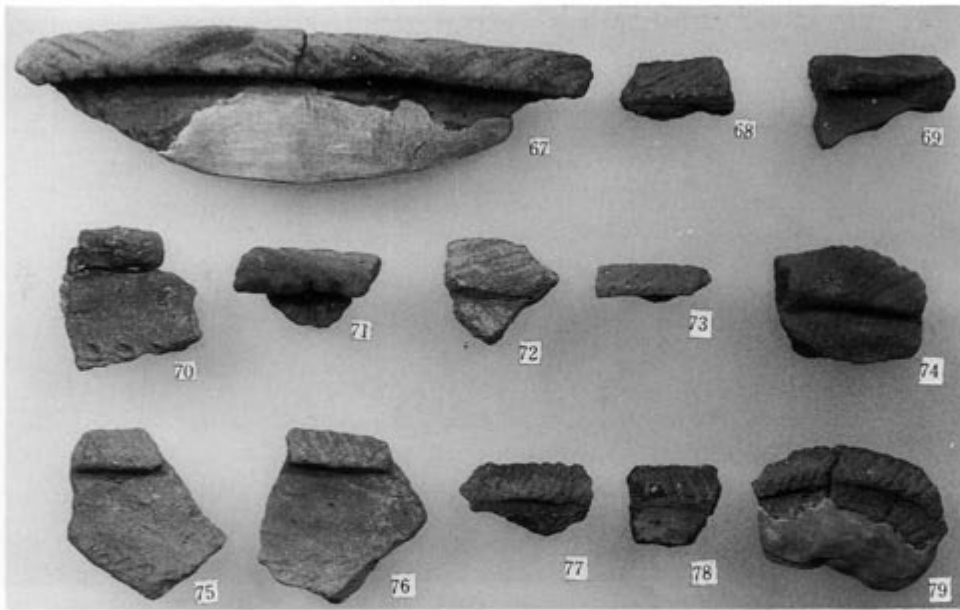
1. 縄文土器 (X層) (2)



1. 縄文土器 (X層) (3)

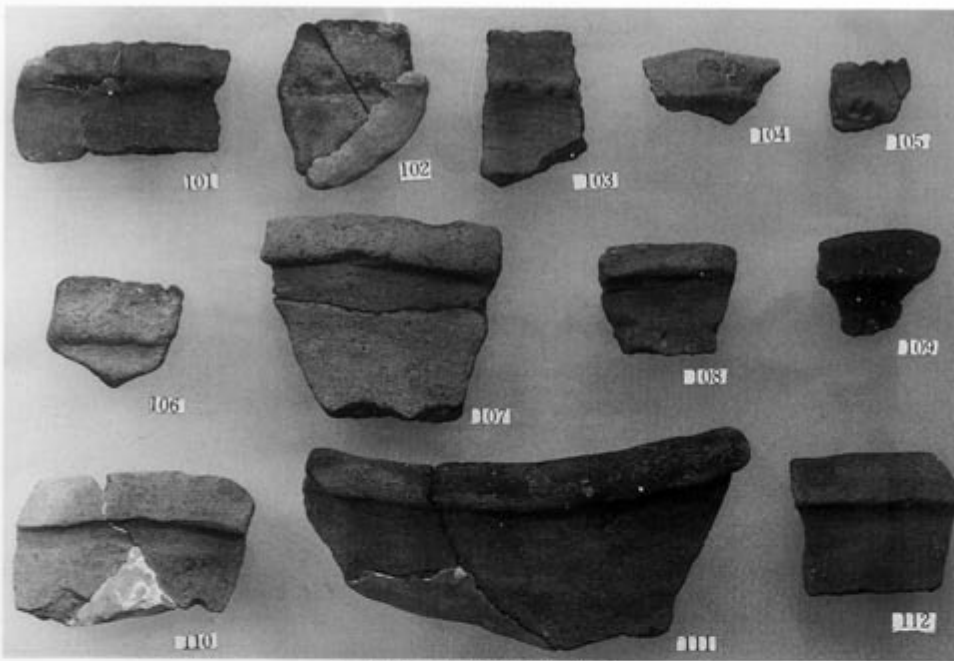
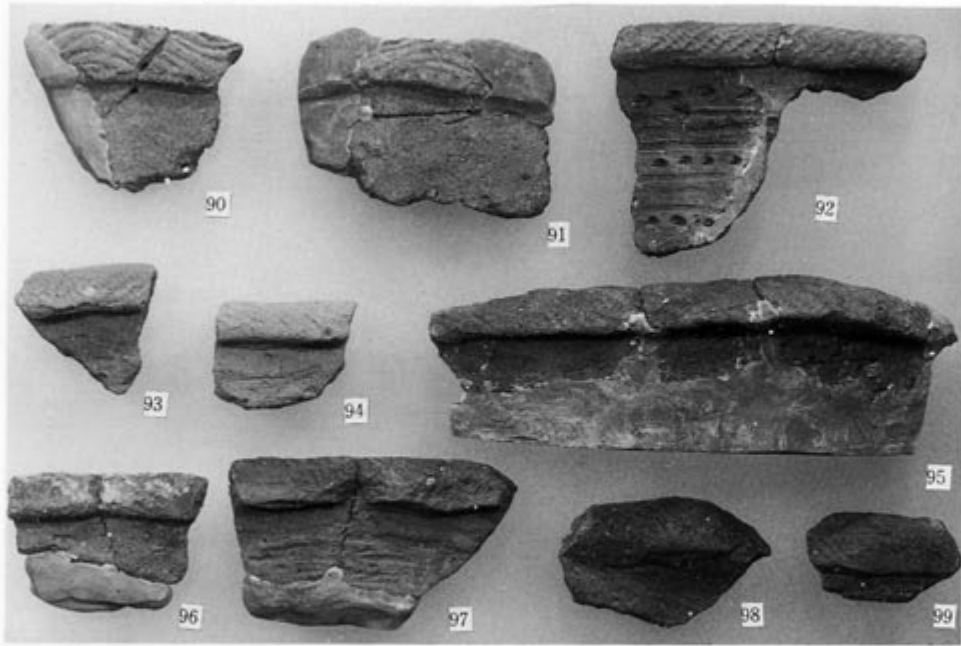


1. 縄文土器 (X層) (4)

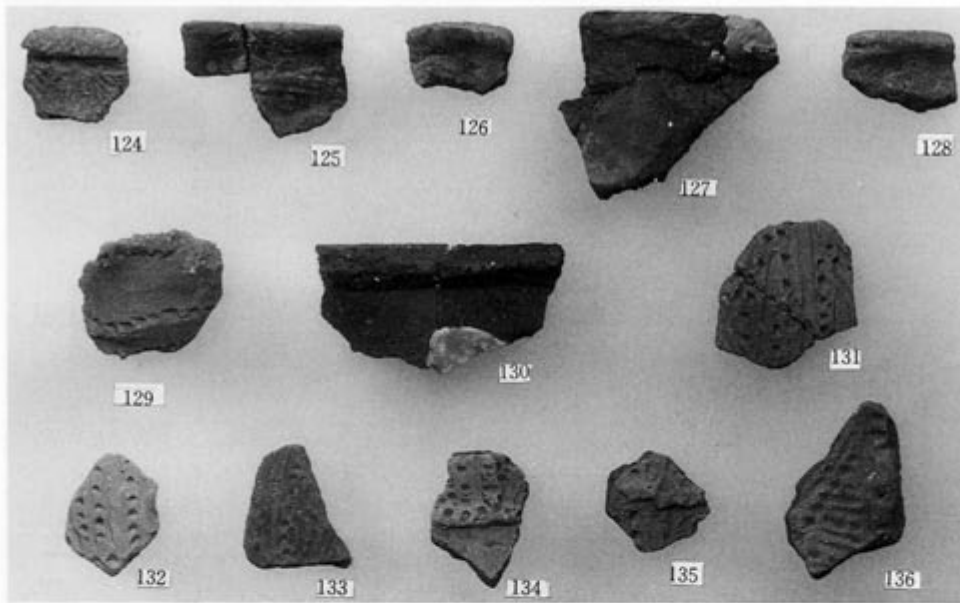
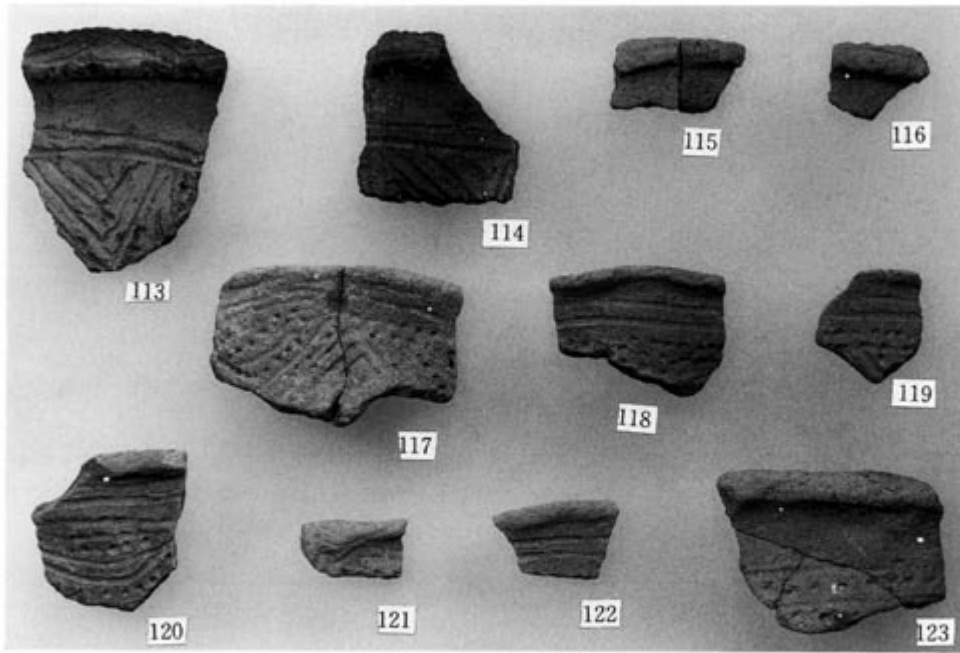


1. 縄文土器 (X層) (5)

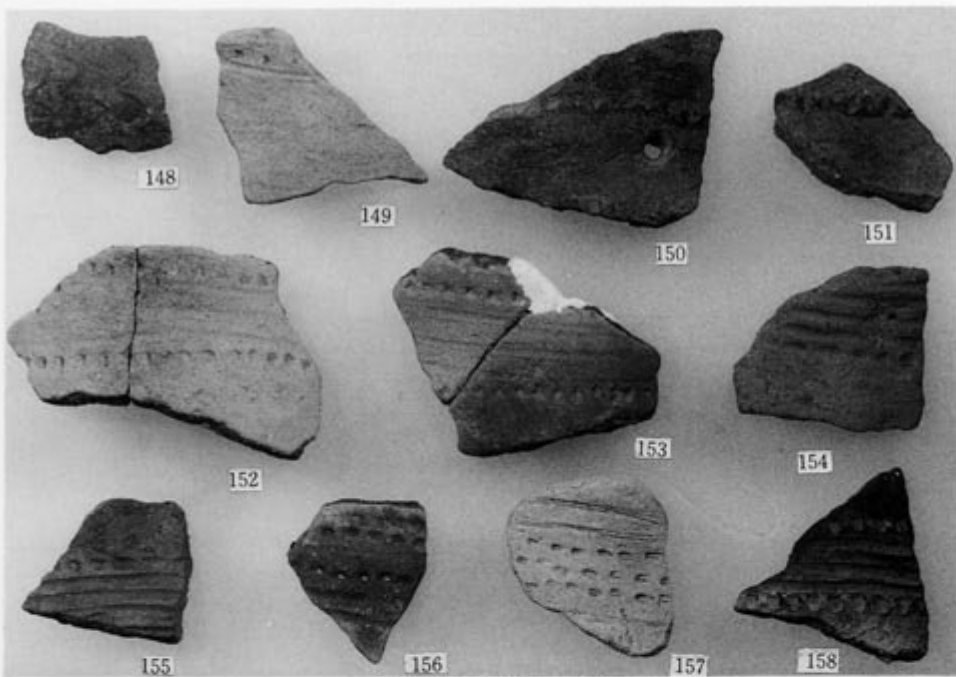
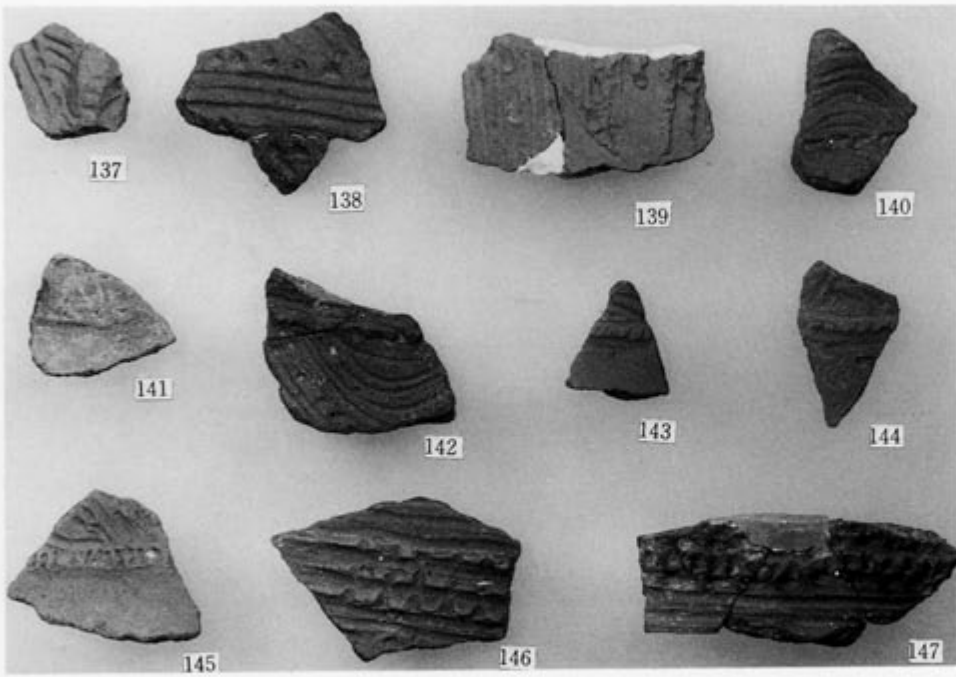




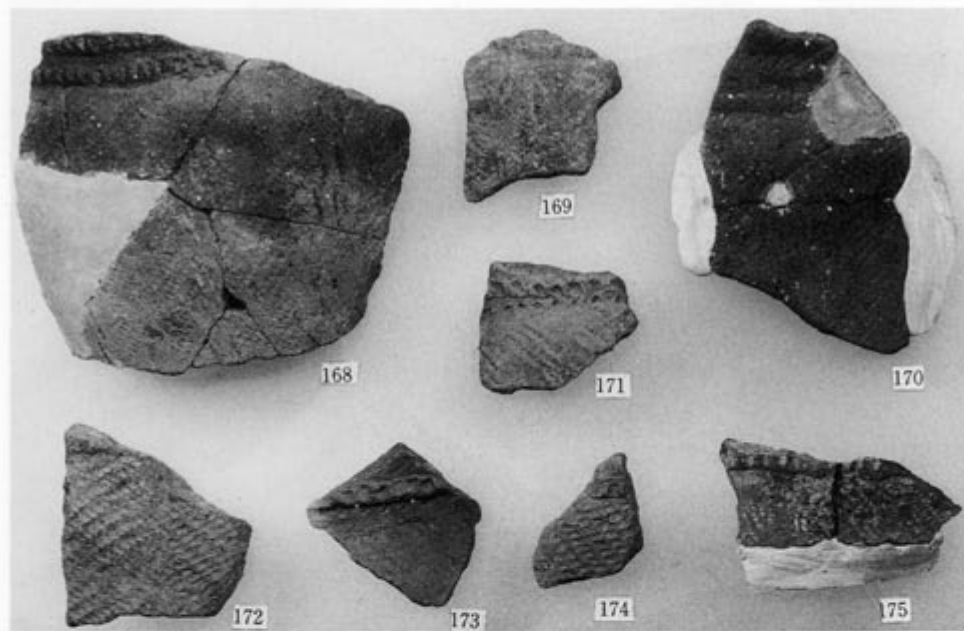
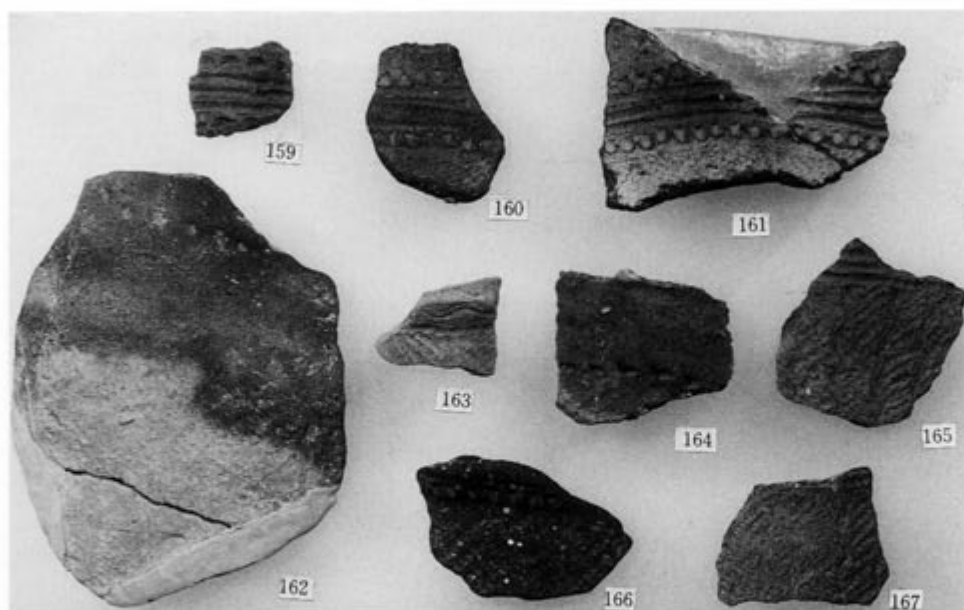
1. 縄文土器 (X層) (6)



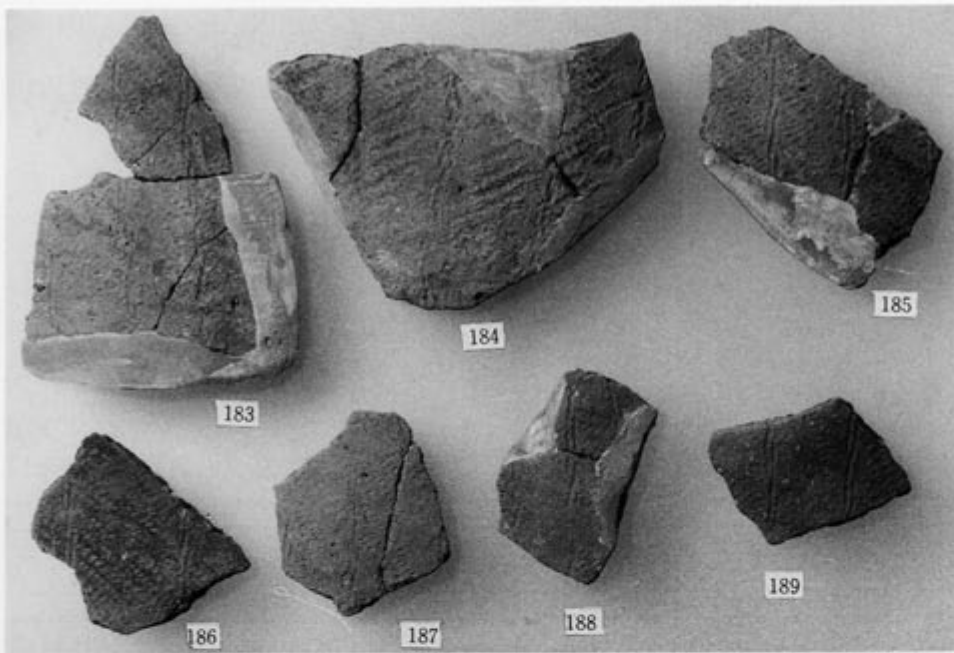
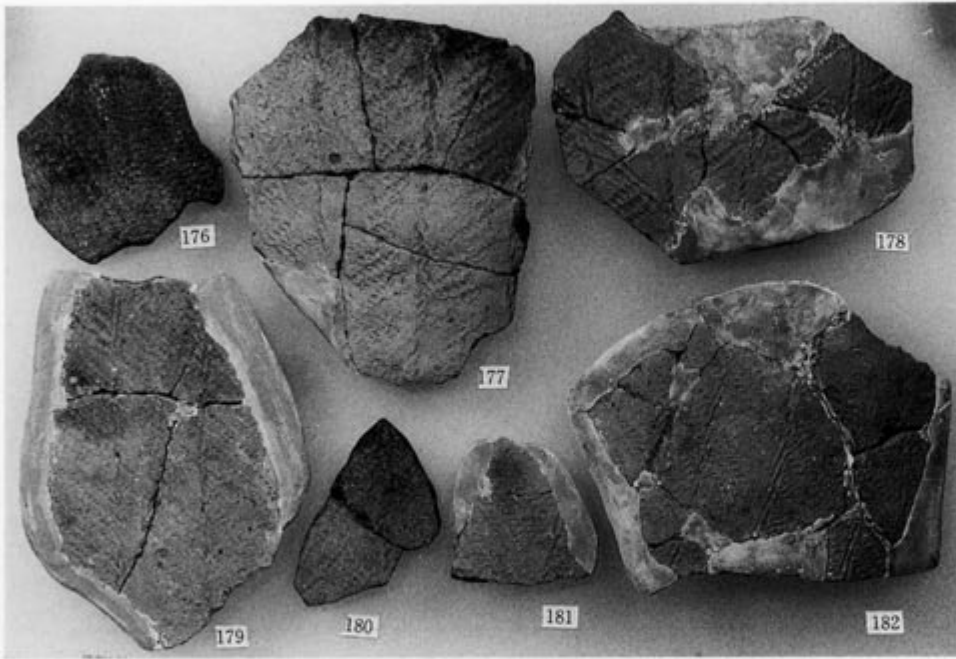
1. 縄文土器 (X層) (7)



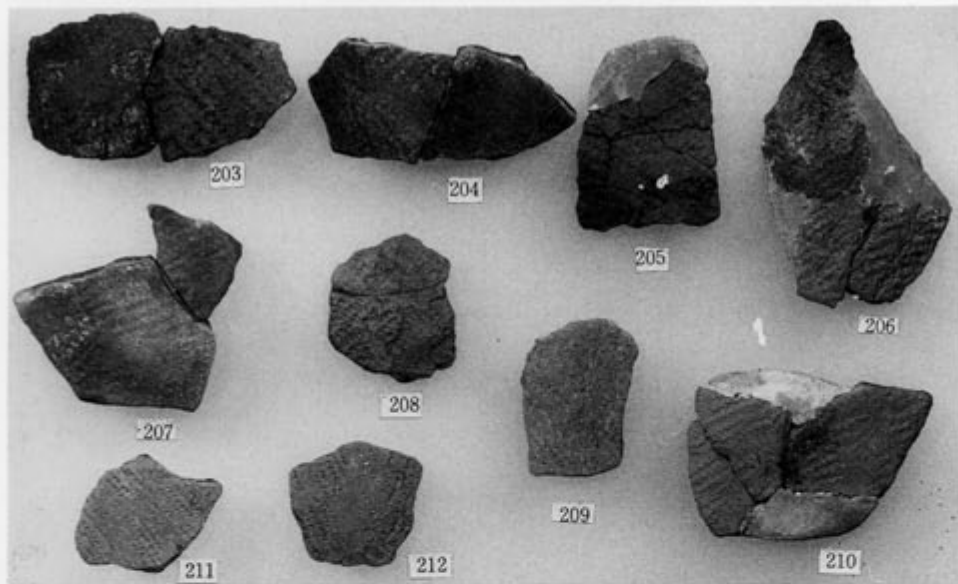
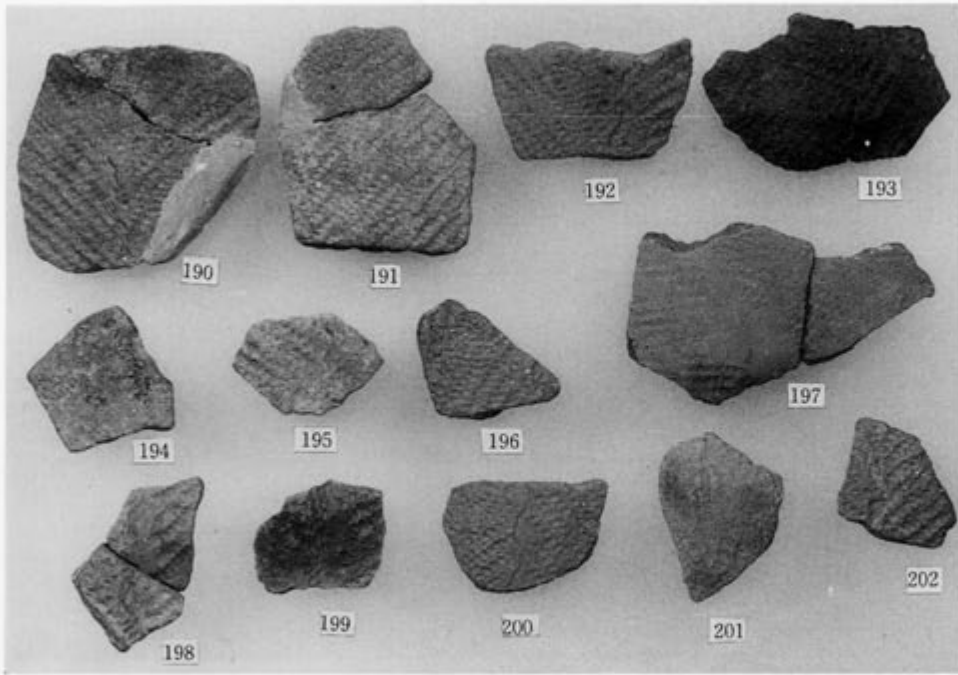
1. 縄文土器 (X層) (8)



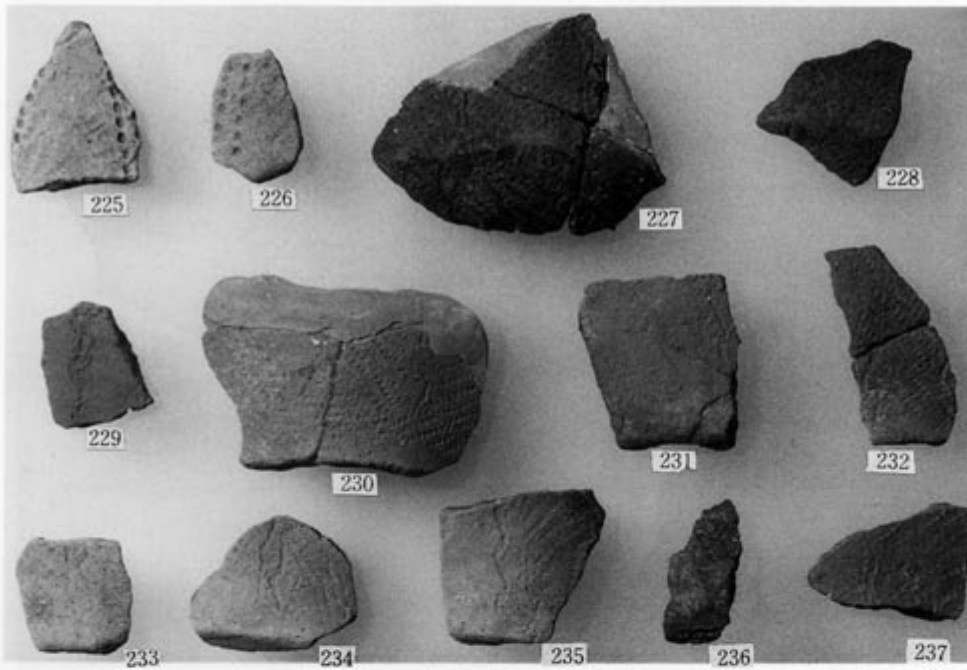
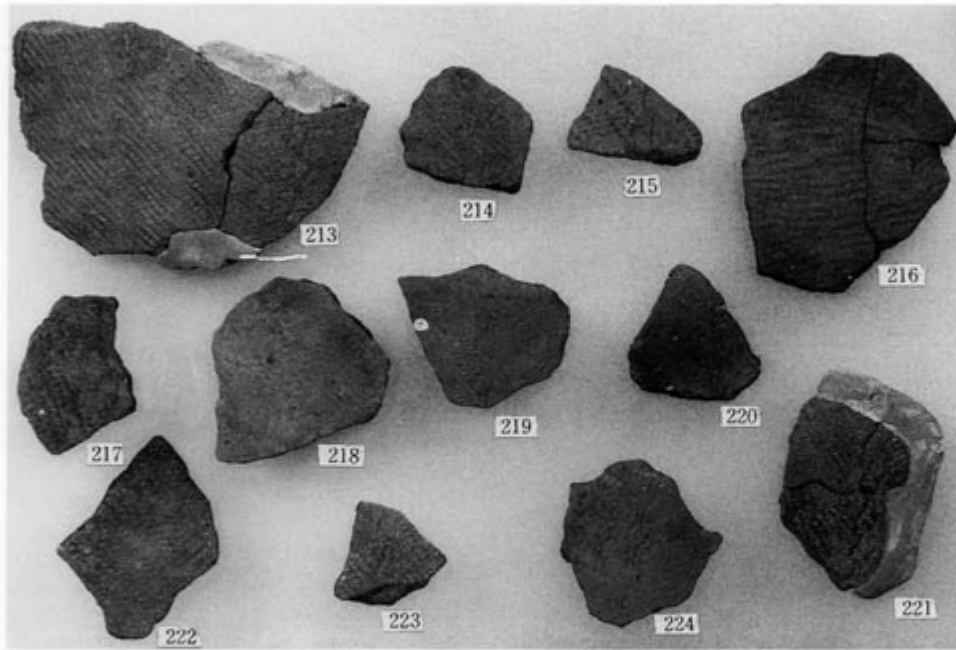
1. 縄文土器 (X層) (9)



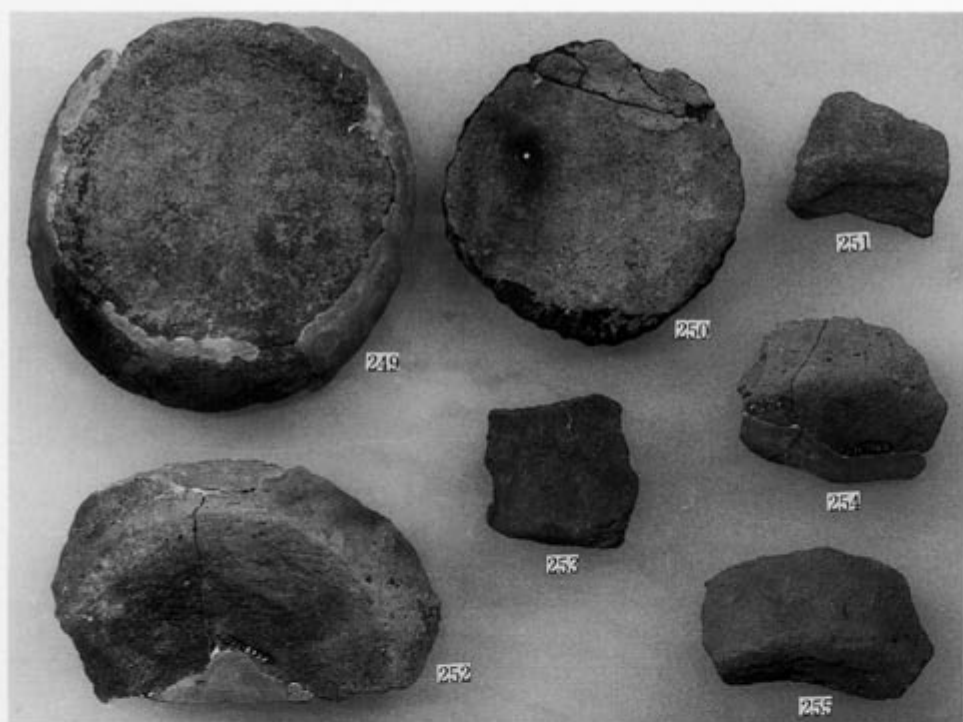
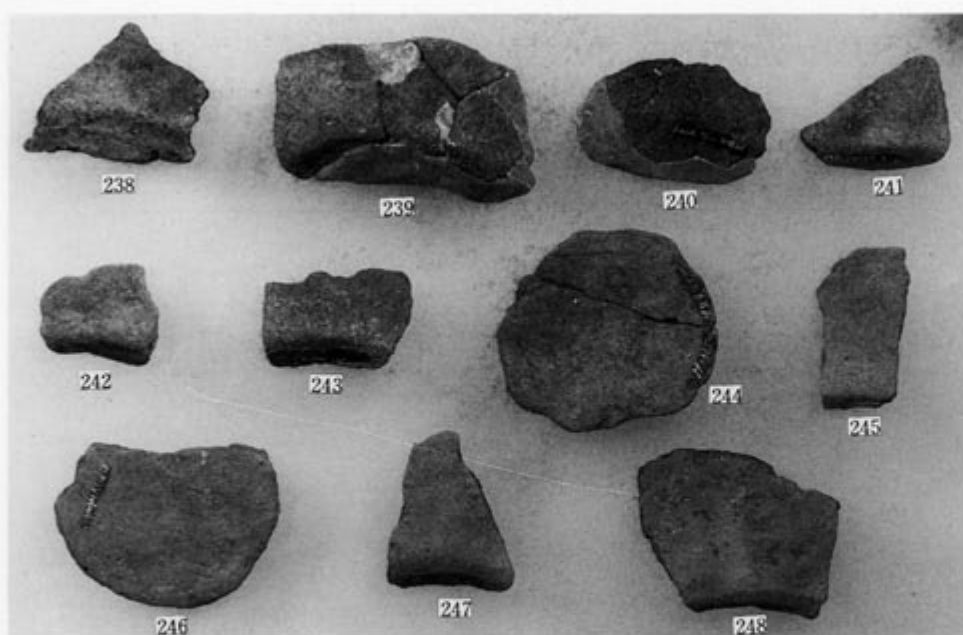
1. 縄文土器 (X層) (10)



1. 縄文土器 (X層) (11)

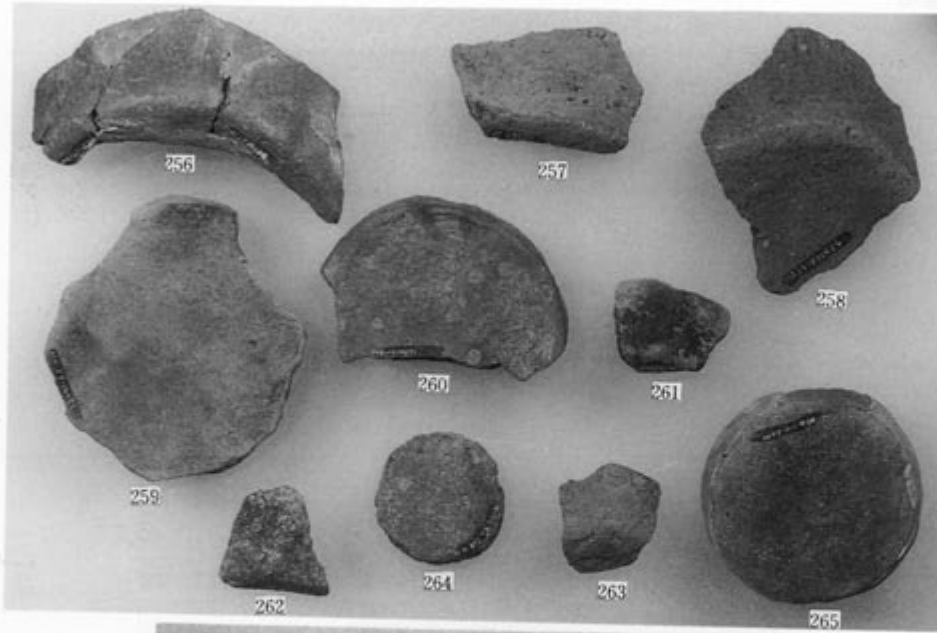


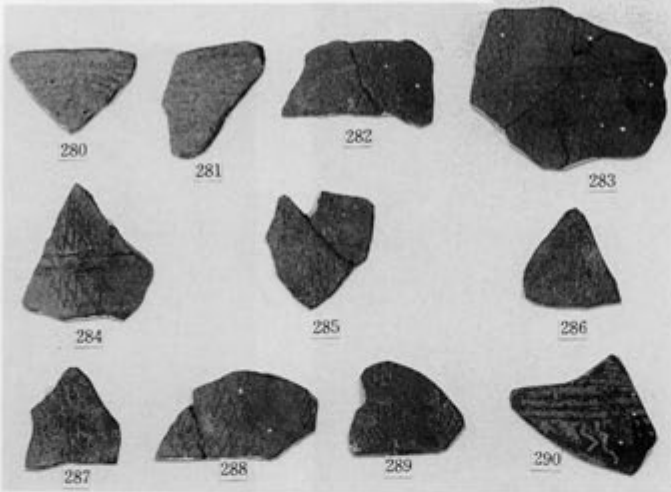
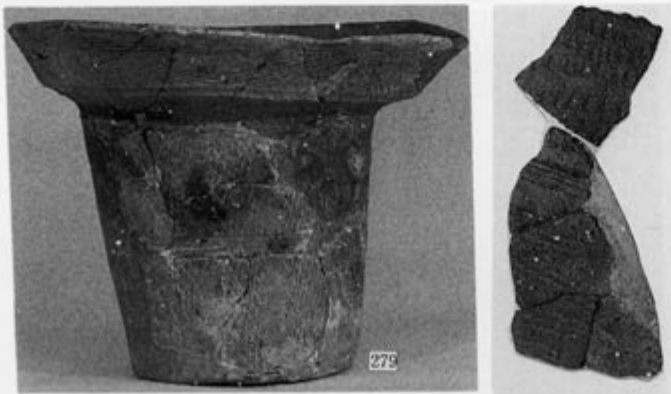
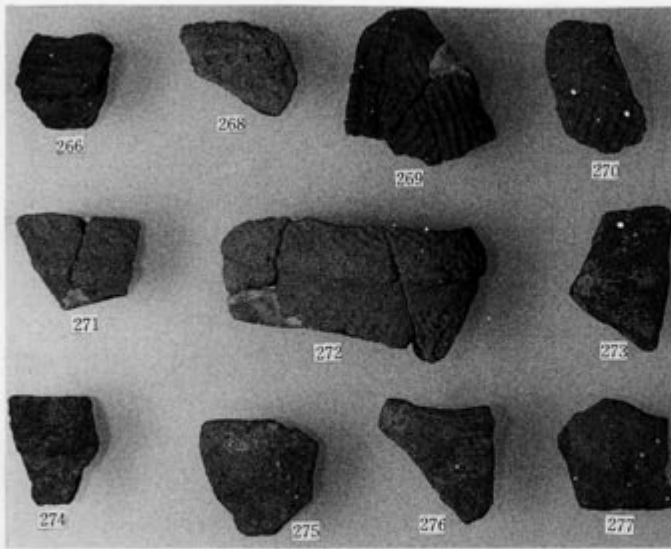
1. 縄文土器 (X層) (12)



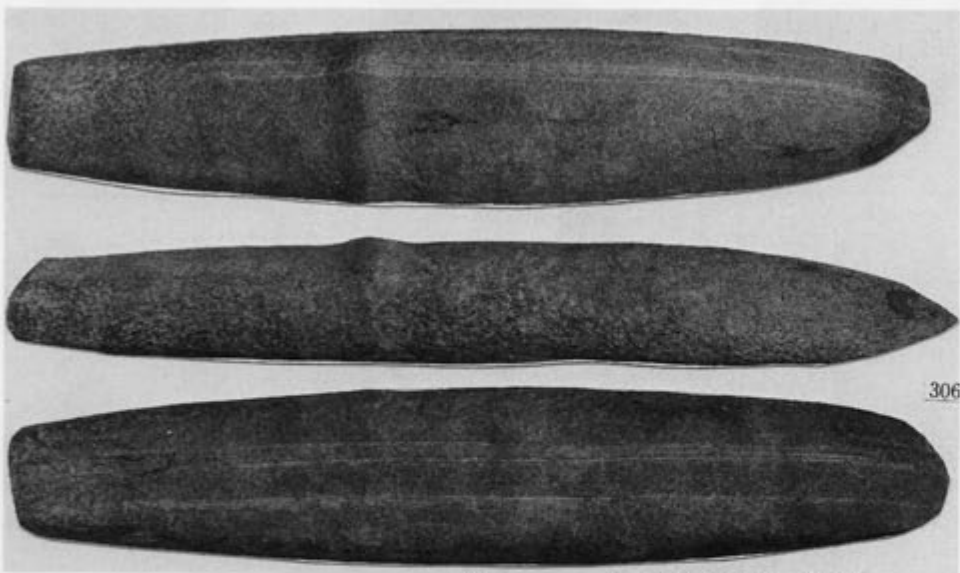
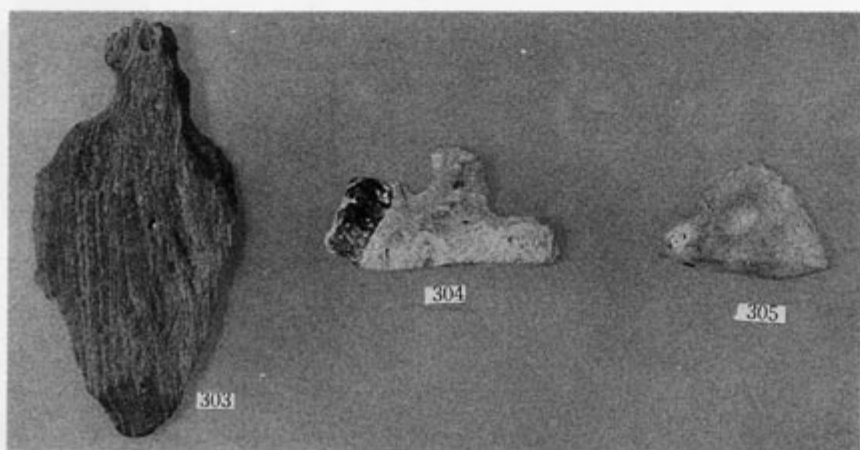
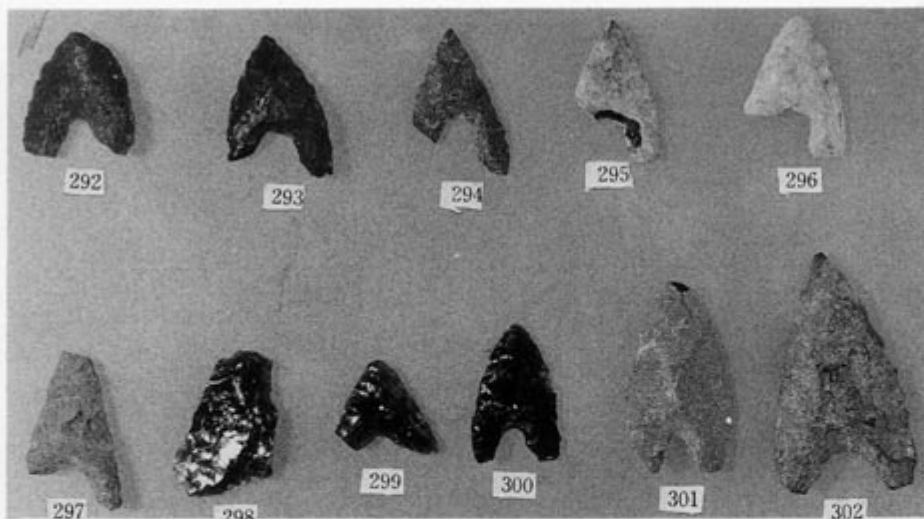
1. 縄文土器 (X層) (13)

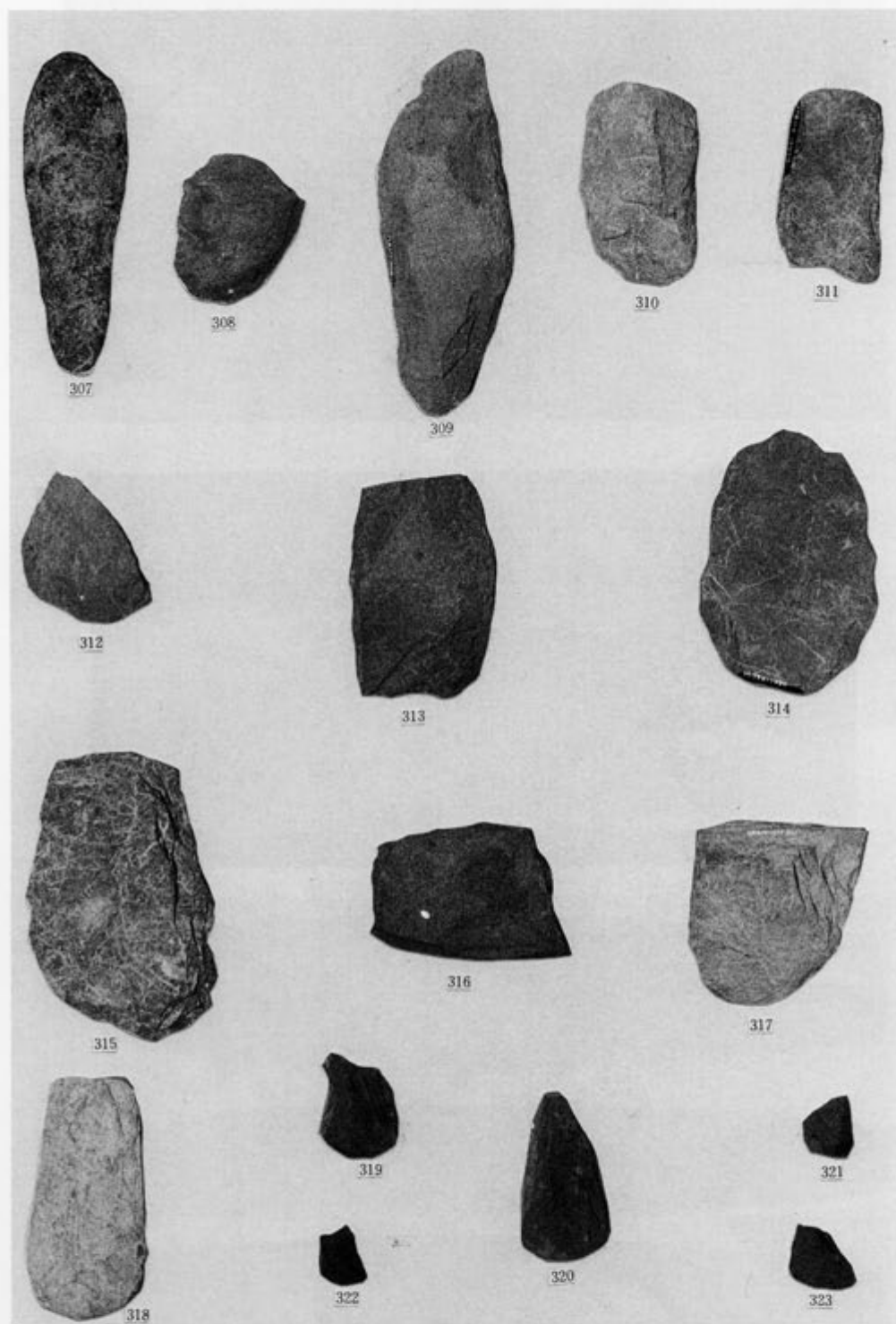




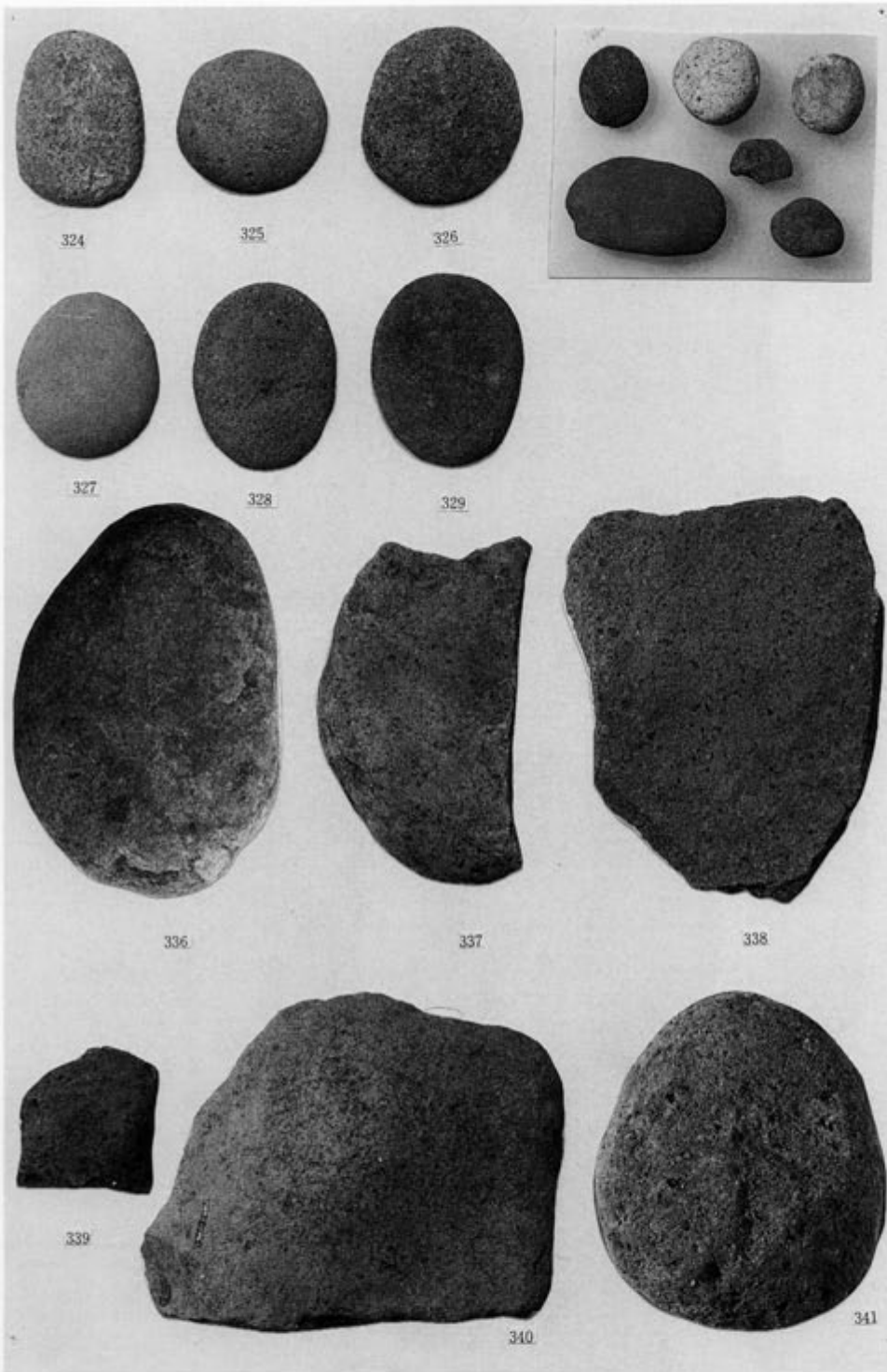


1. 縄文土器 (X層) (15)

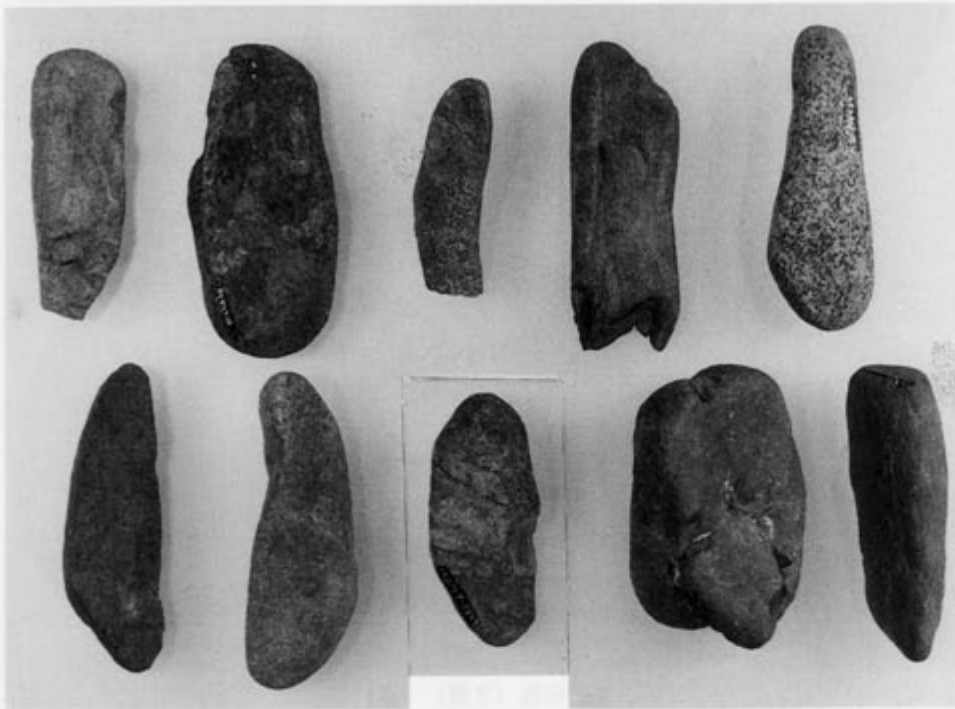
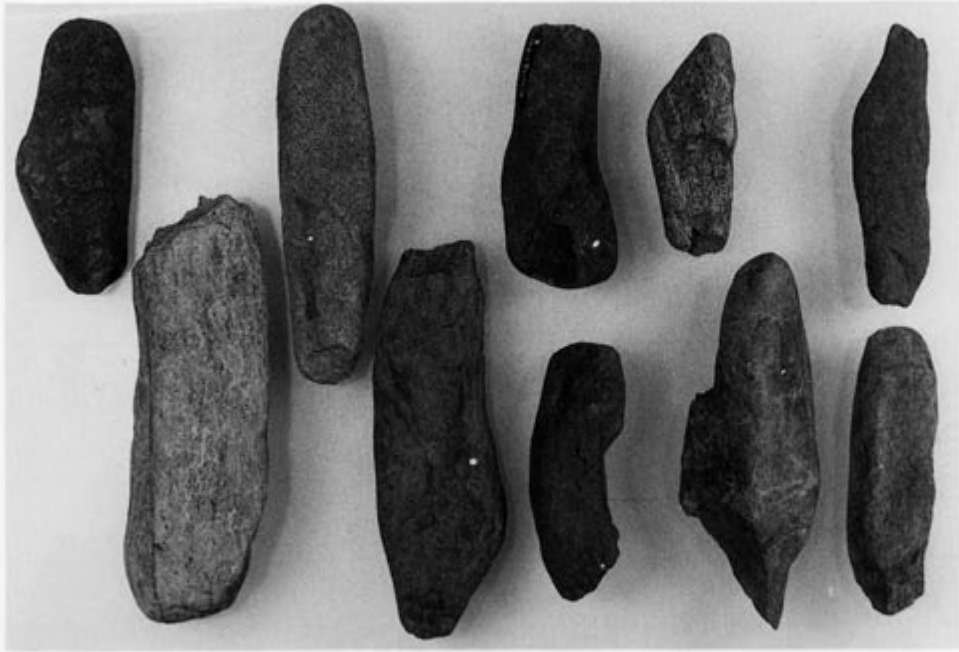




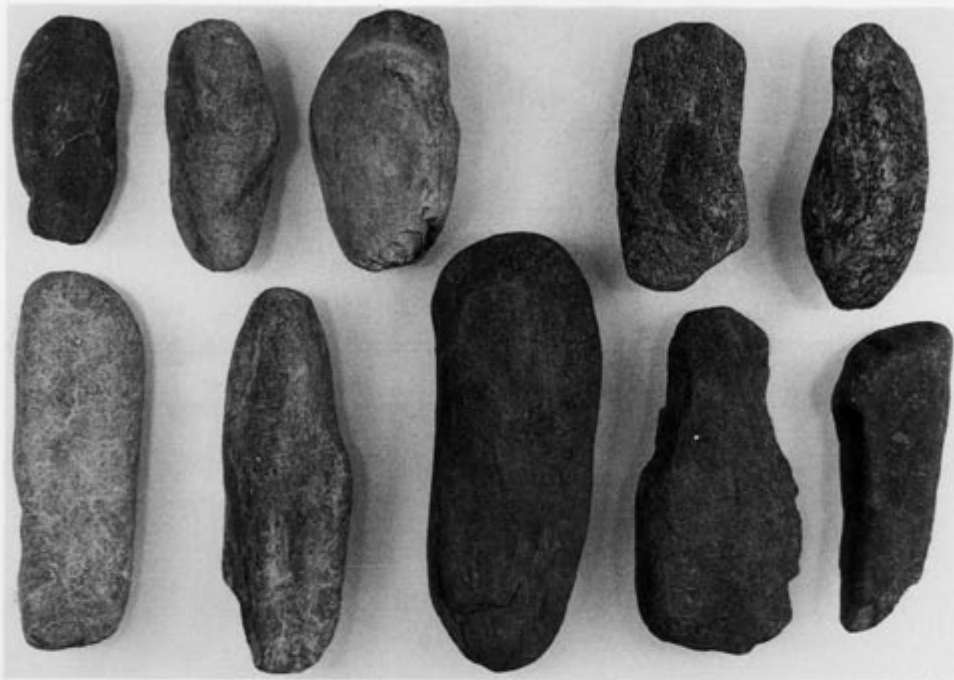
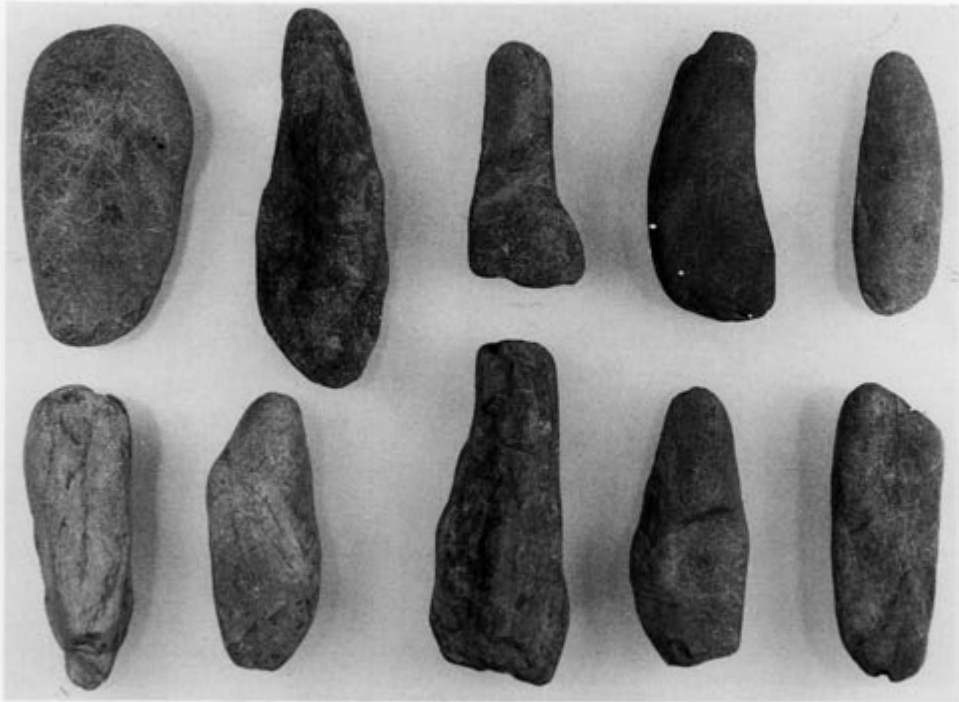
1. 石器 (X層) (2)



1. 石器 (X層) (3)



1. 石器 (X層) (4)



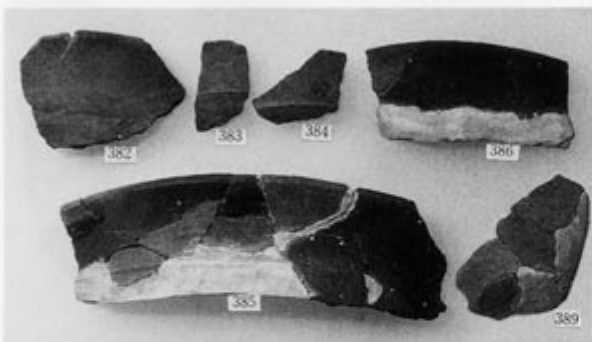
1. 石器 (X層) (5)



1. VI層遺物出土状態 (東から)

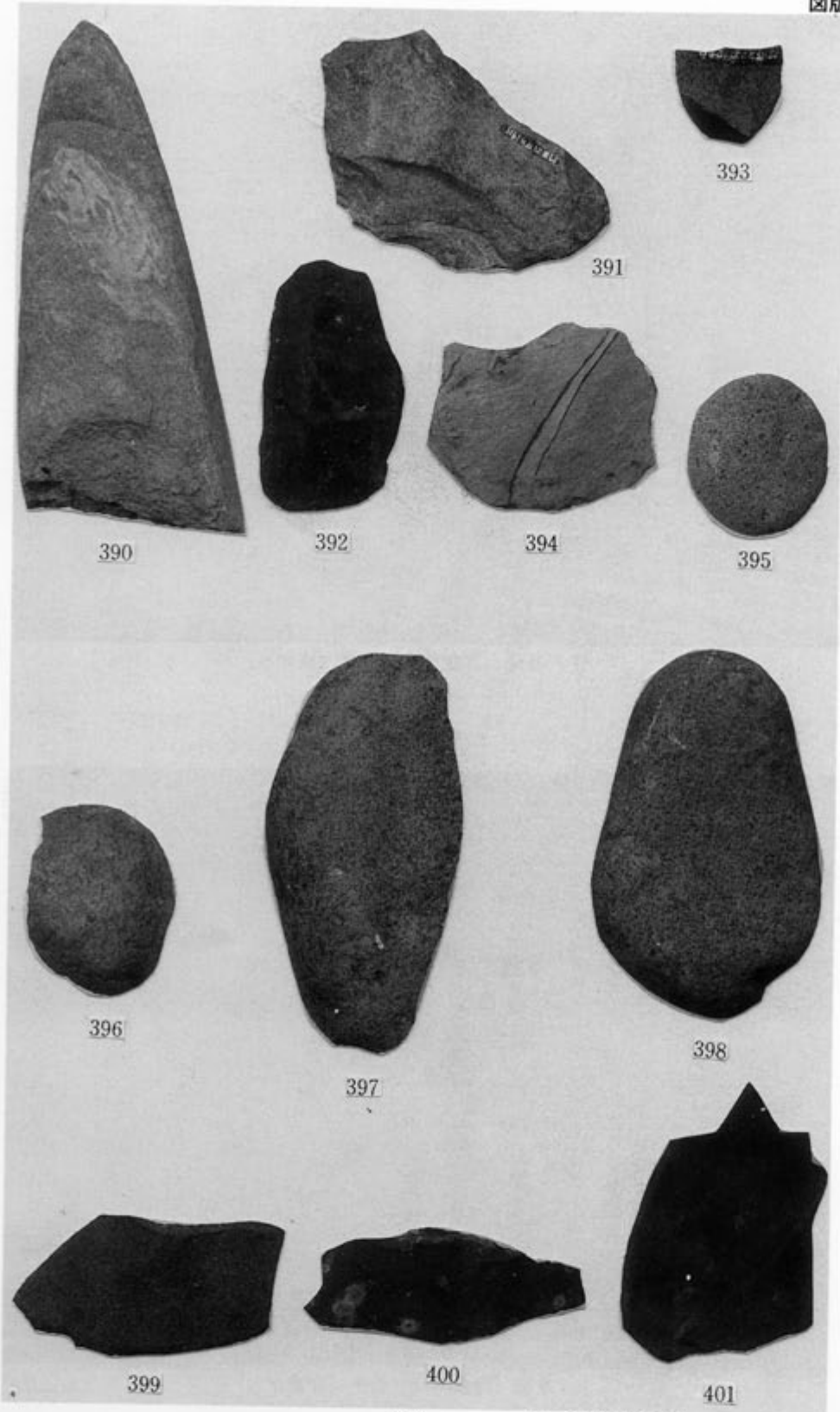


2. VI層土器出土状態 (387)



3. 縄文土器 (VI層)



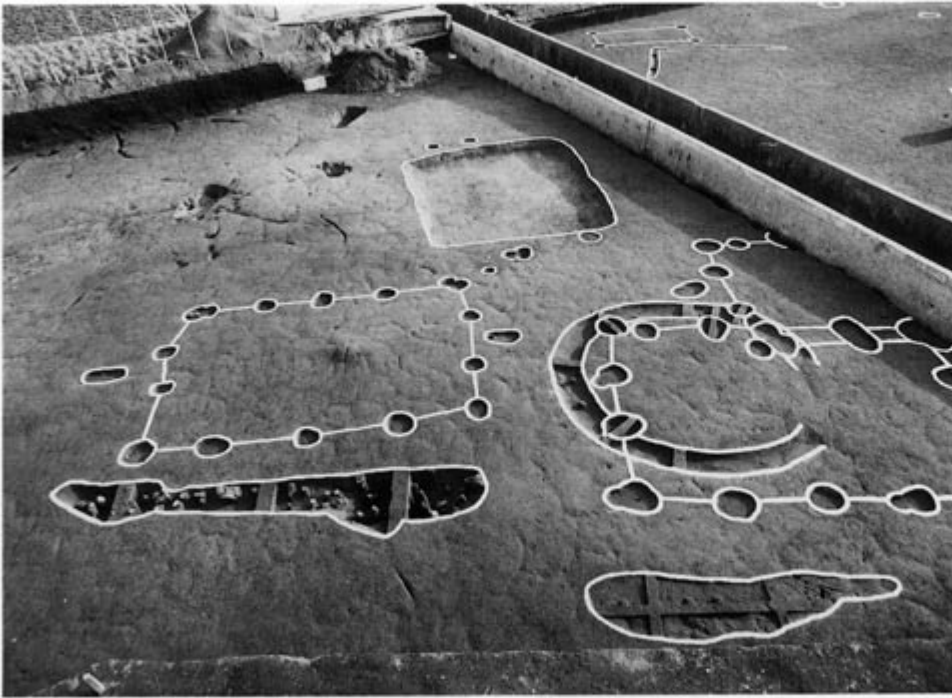




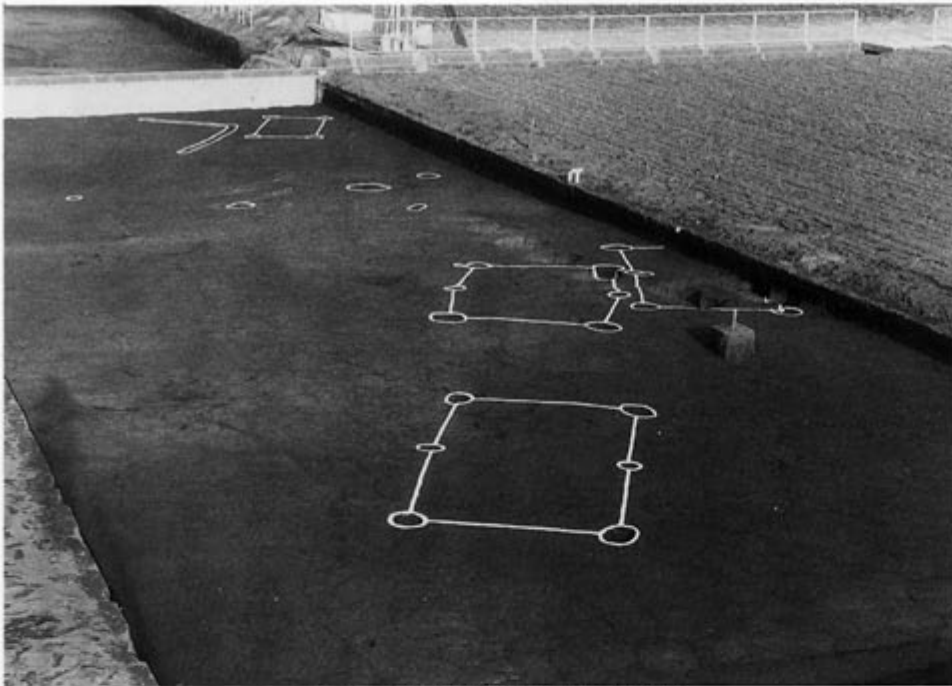
1. III層（弥生時代）全景（東から）



2. III層（弥生時代）全景（北東から）



1. Ⅲ層 (弥生時代) 遺構近景 (北から)



2. Ⅲ層 (弥生時代) 遺構近景 (西から)



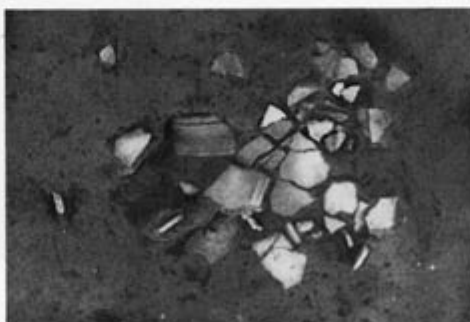
1. III層遺物出土状況遠景（東から）



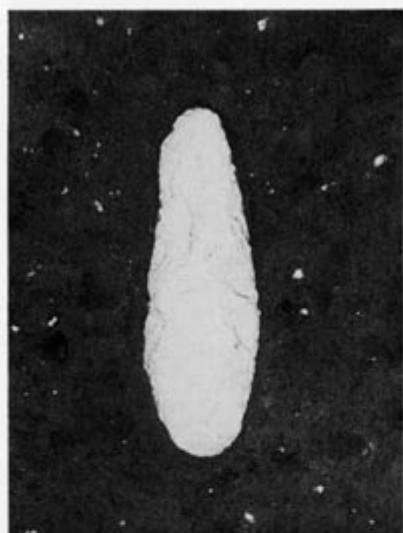
2. 土器出土状況



3. 土器出土状況



4. 土器出土状況



5. 石器 (537) 出土状況



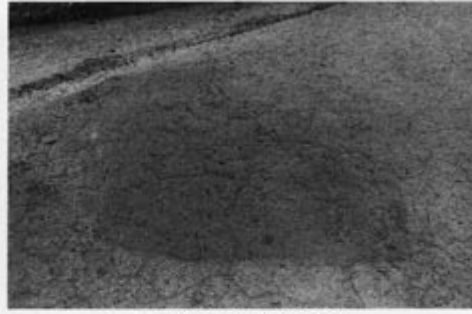
6. 鉄片出土状況



7. 石鏃 (528) 出土状況



1. 1号住居址遠景（東から）



2. 1号住居址検出状況



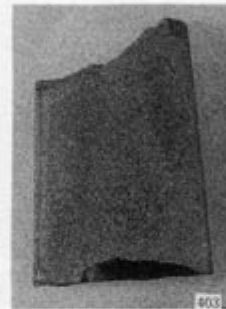
3. 1号住居址掘り下げ状況（北から）



4. 1号住居址掘り下げ状況（南から）



5. 柱炭化木検出状況



6. 1号住居址出土遺物



1. 1号住居址全景



2. 1号住居址全景



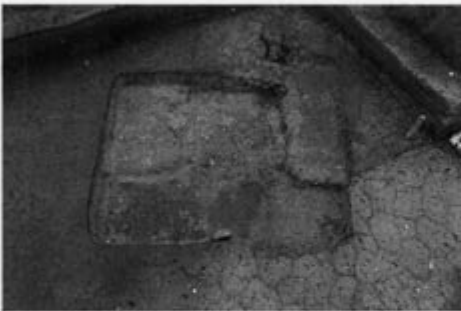
1. 2号住居址検出状況



2. 住居址掘り下げ状況



3. 炭化木出土状況



4. 住居址床面検出状況



5. 2号住居址遠景 (南から)

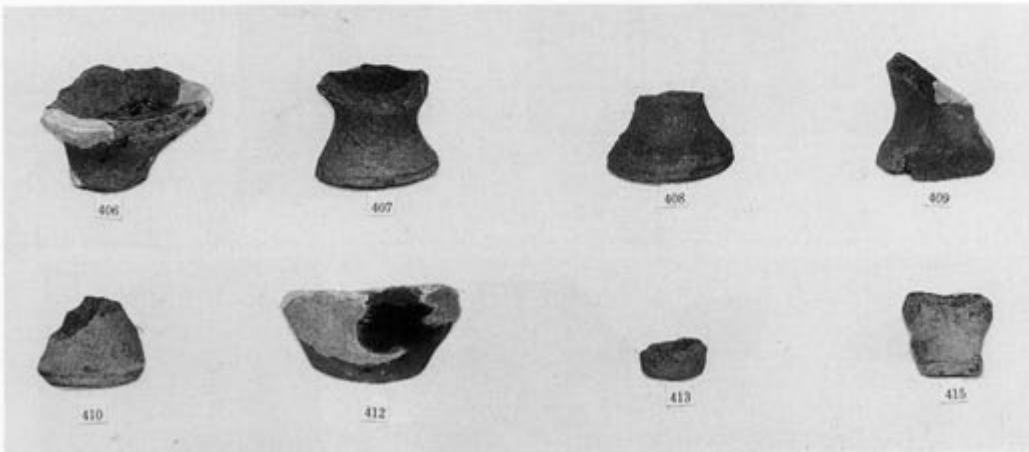
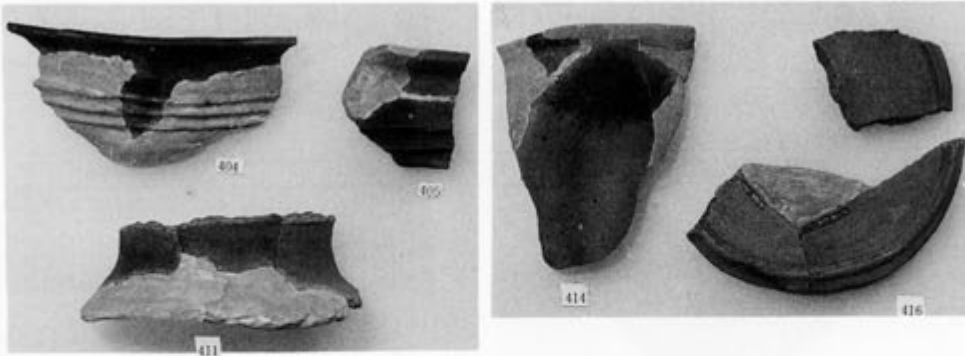


1. 2号住居址検出状況（南から）

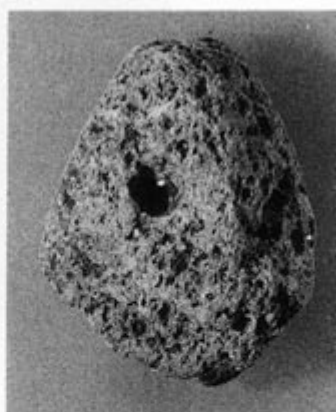
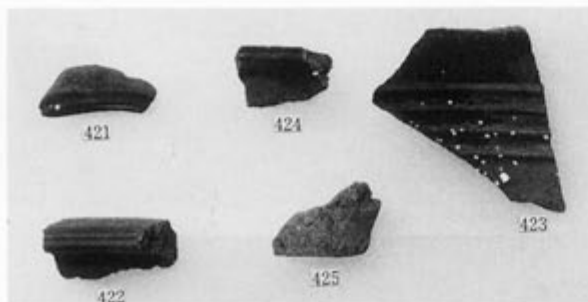


2. 2号住居址全景（南から）

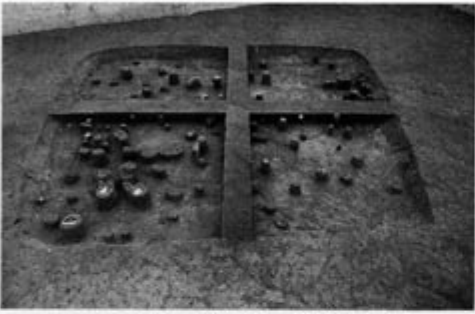




1. 2号住居址出土遗物(1)



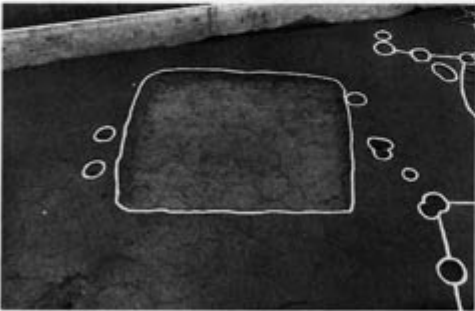
2. 2号住居址出土遺物(2)



1. 3号住居址掘り下げ状況 (1)



2. 3号住居址掘り下げ状況 (2)



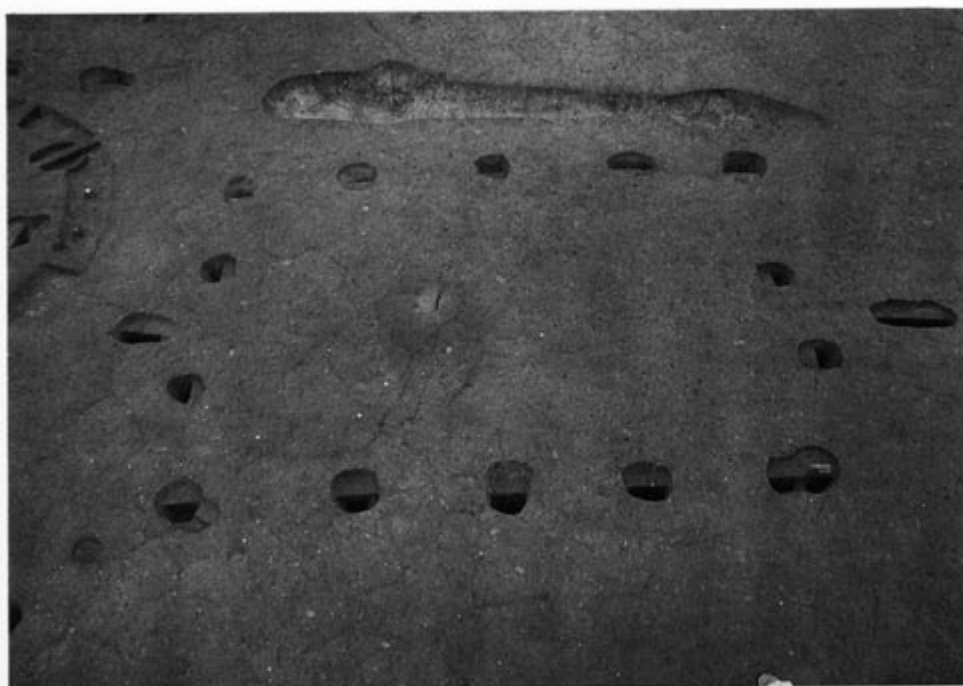
3. 3号住居址全景



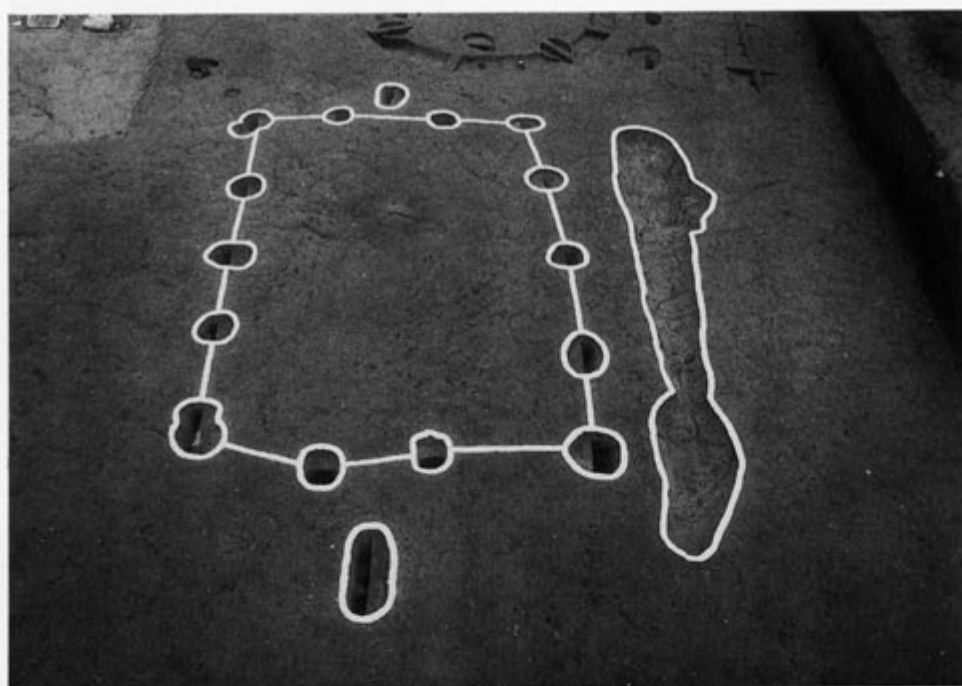
4. 3号住居址遠景



5. 3号住居址全景



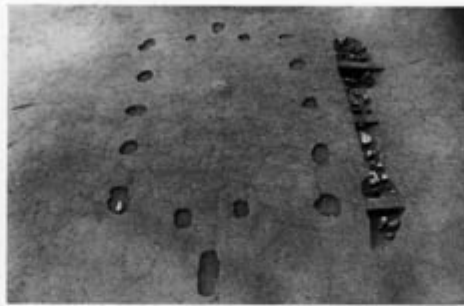
1. 1号掘立柱建物掘り下げ状況 (1)



2. 1号掘立柱建物掘り下げ状況 (2)



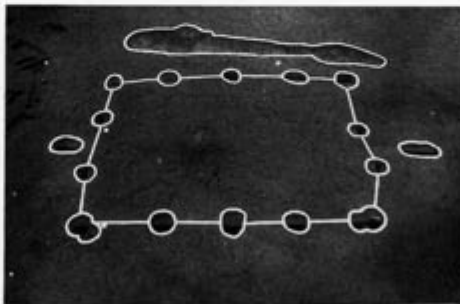
1. 1号掘立柱建物検出状況



2. 掘り下げ状況 (1)



3. 掘り下げ状況 (2)



4. 検出状況



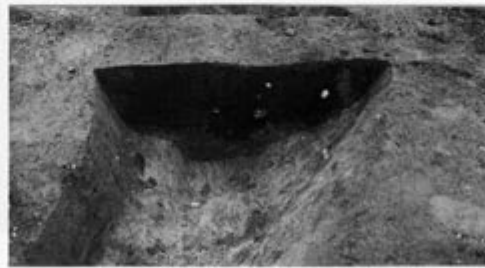
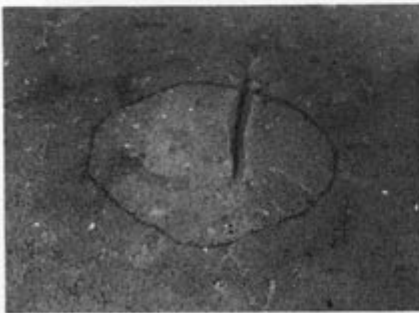
5. 1号掘立柱建物検出状況



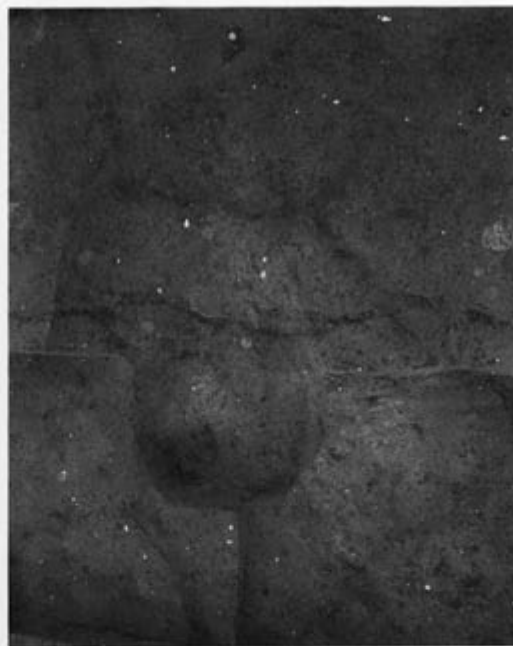
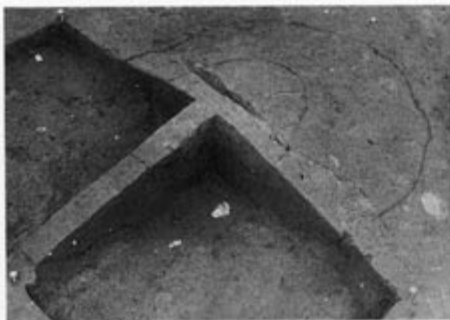
1. 柱穴掘り下げ状況



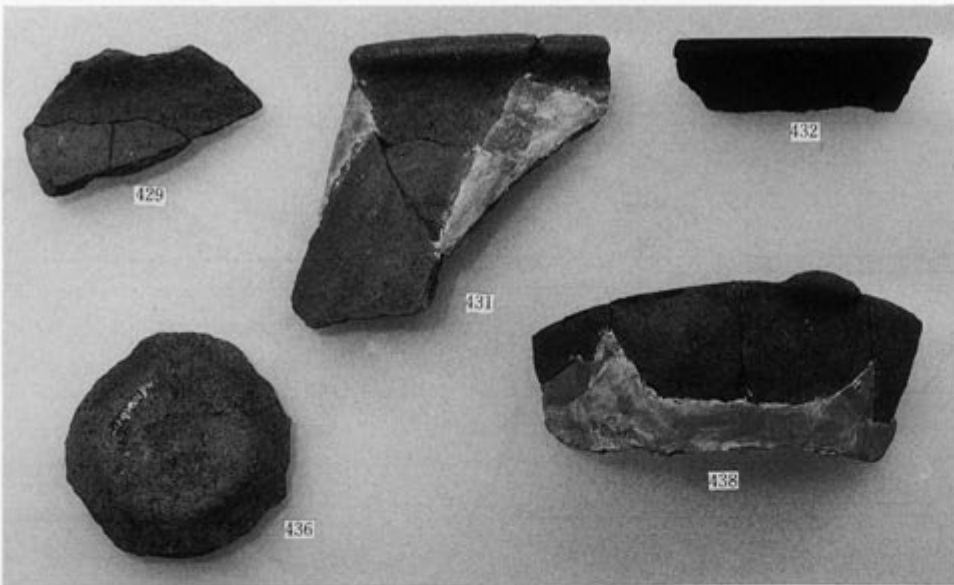
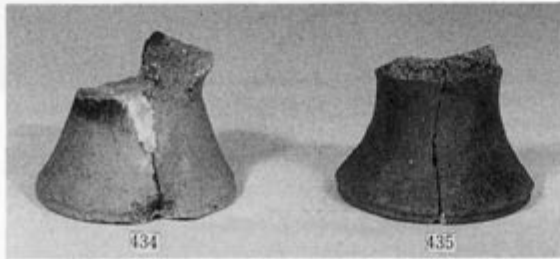
2. 溝1断面 (1)



3. 溝1断面 (2)



4. 建物内路址検出状況



1. 1号掘立柱建物・溝1出土遺物

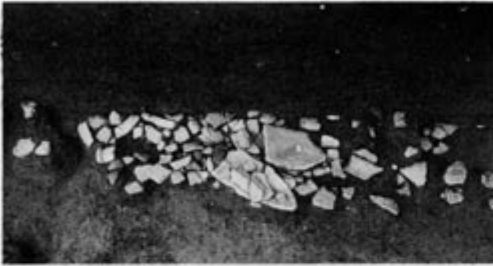


1. 2号据立柱建物検出状況（北から）

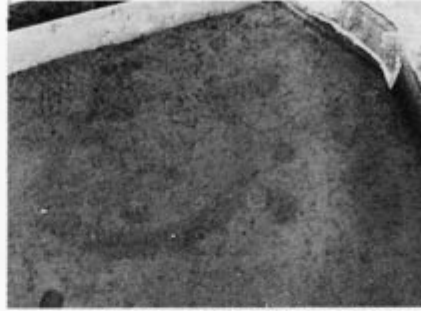


2. 2号据立柱建物掘り下げ状況（北から）





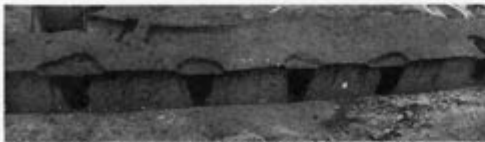
1. 溝2遺物出土状況 (南から)



3. 2号掘立柱建物検出状況 (北から)



2. 溝2遺物出土状況 (南から)



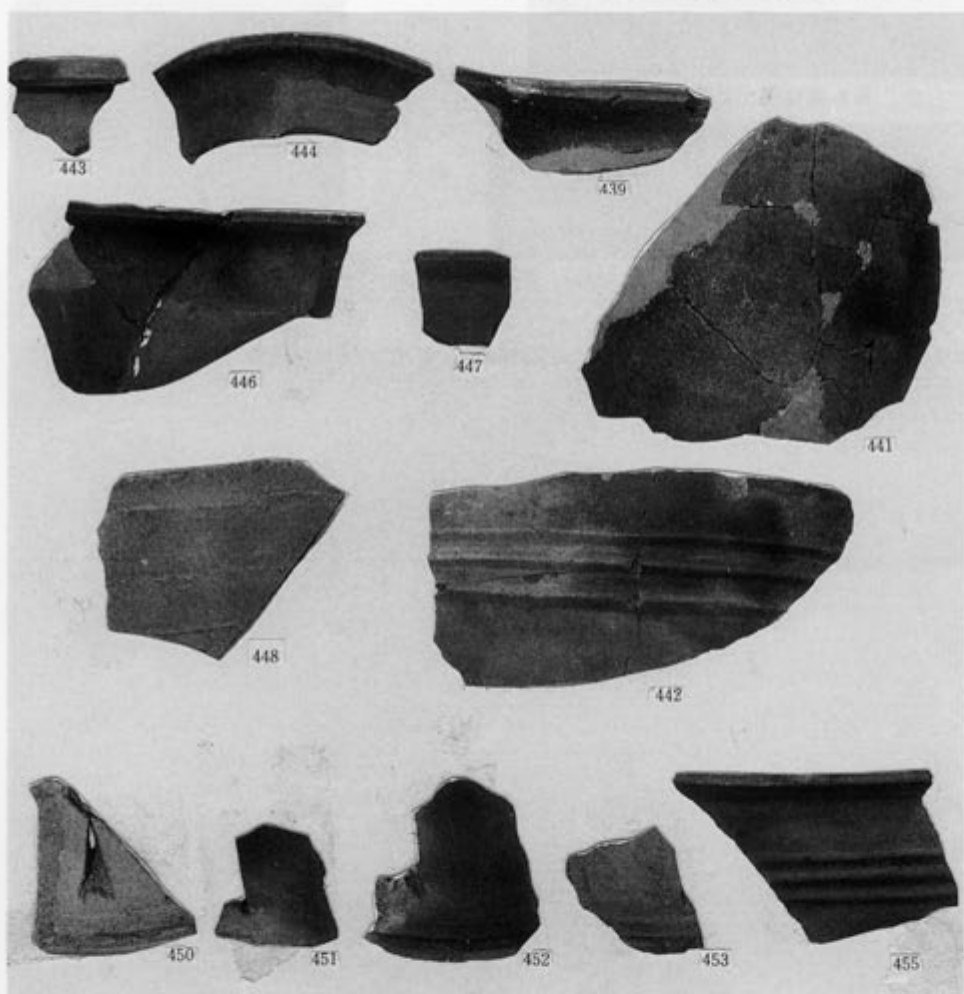
5. 柱穴掘り下げ状況 (北から)



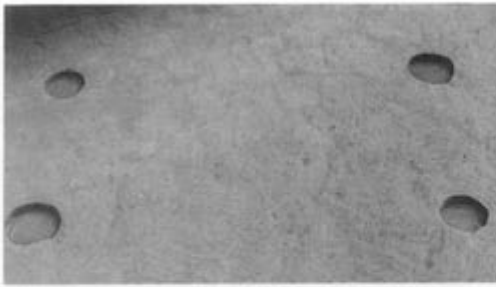
4. 溝2全景 (東から)



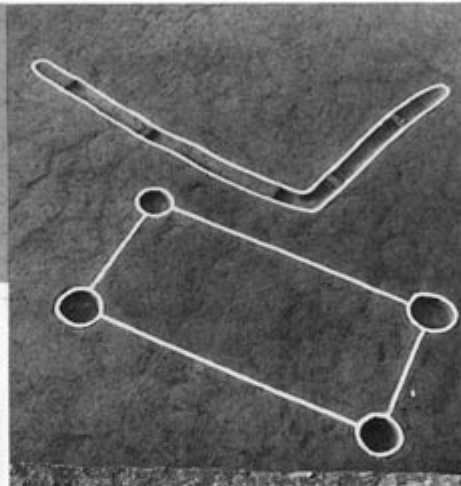
6. 2号掘立柱建物遠景 (北から)



1. 2号掘立柱建物（沟内）出土遺物



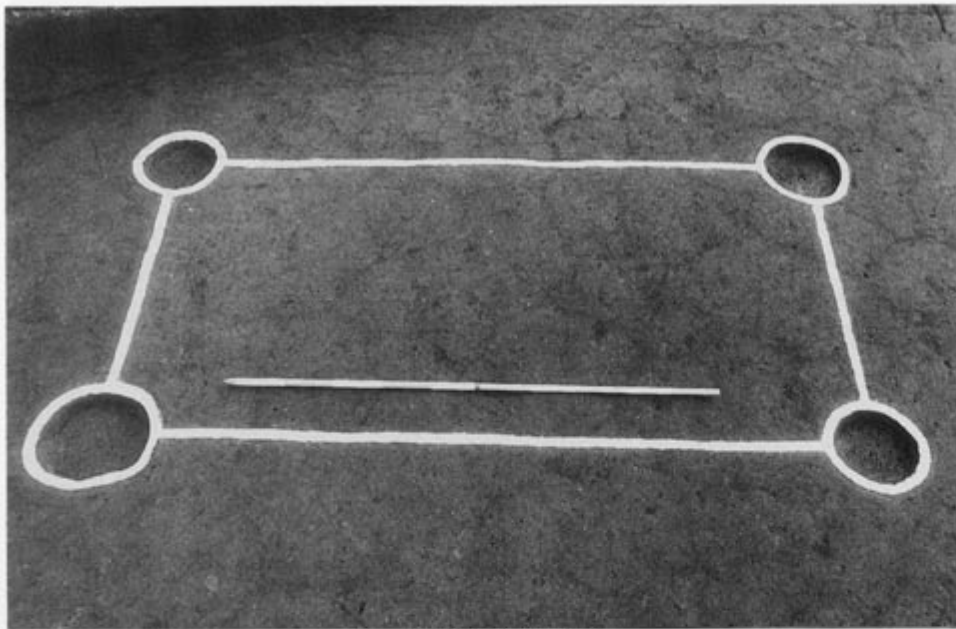
1. 4号据立柱建物掘り下げ状況



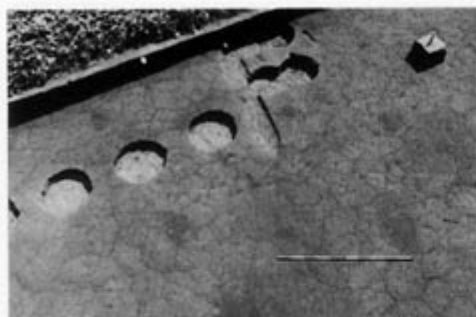
3. 4号建物と溝3遠景



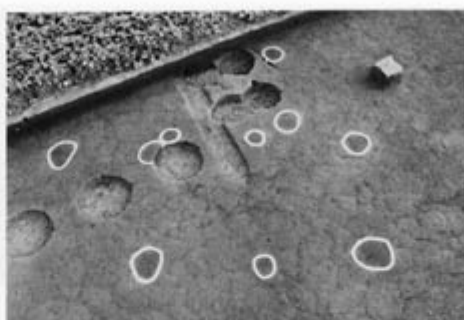
2. 作業風景



4. 4号据立柱建物全景



1. 6号・7号建物検出状況(1)



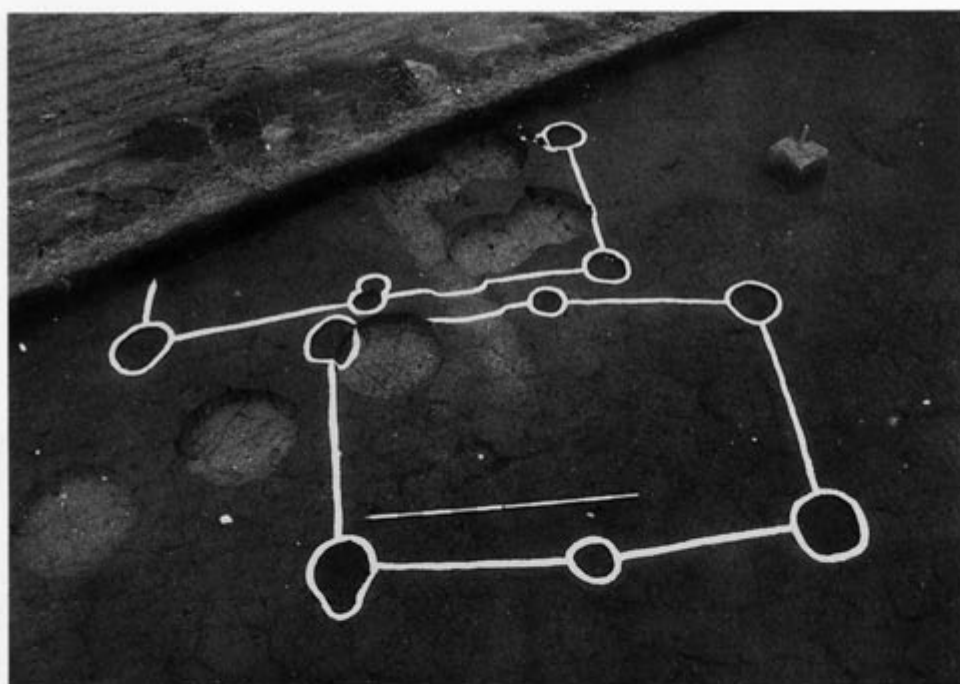
2. 6号・7号建物検出状況(2)



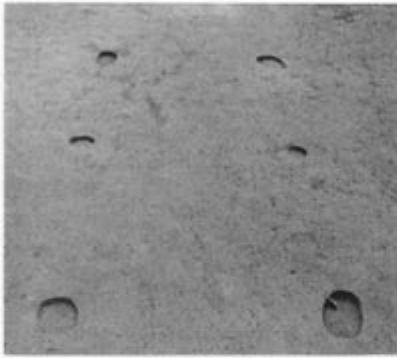
3. 6号・7号建物掘り下げ状況



4. 6号・7号・8号建物遠景



5. 6号・7号掘立柱建物全景



1. 8号建物掘り下げ状況（東から）



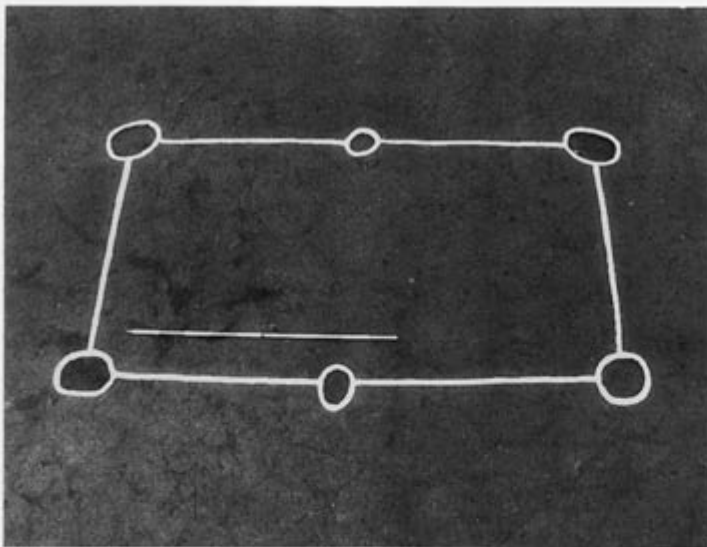
2. 建物群遠景（西から）



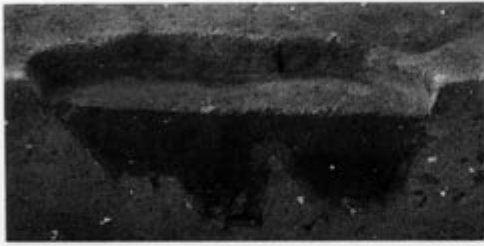
3. 8号建物柱穴出土遺物



4. 柱穴掘り下げ状態



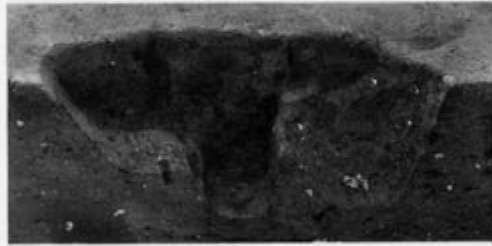
5. 8号建物全景（東から）



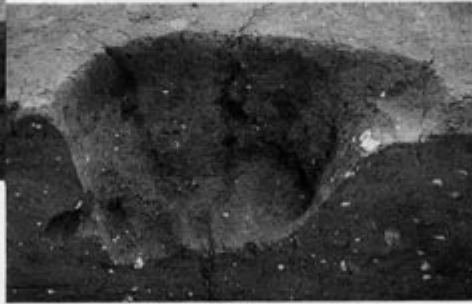
1. 1号建物跡柱穴 (No16)



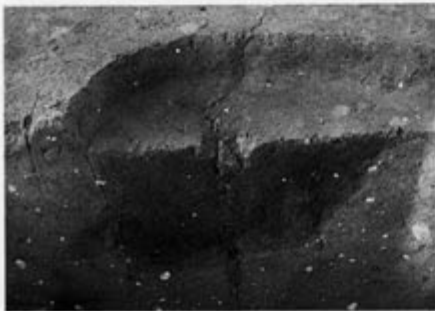
2. 3号建物跡柱穴 (No9)



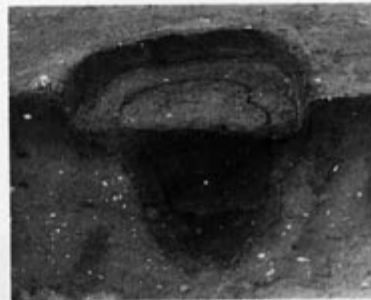
3. 1号建物跡柱穴 (No15)



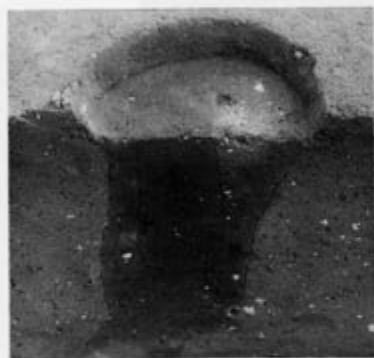
4. 3号建物跡柱穴



5. 3号建物跡柱穴



6. 4号建物跡柱穴



柱穴検出状態

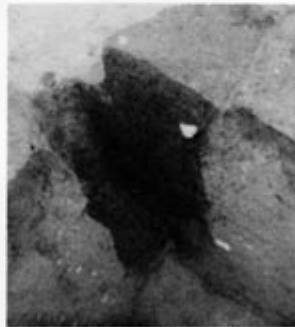




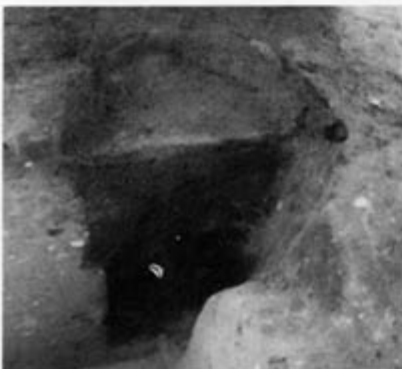
1. 4号建物跡柱穴



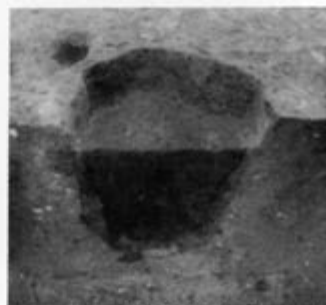
2. 5号建物跡柱穴



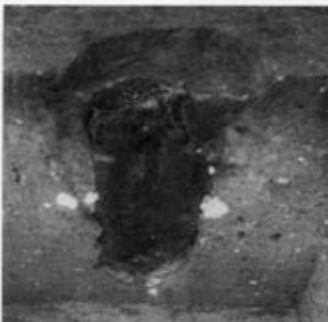
3. 7号建物跡柱穴 (No 2)



4. 7号建物跡柱穴 (No 1)



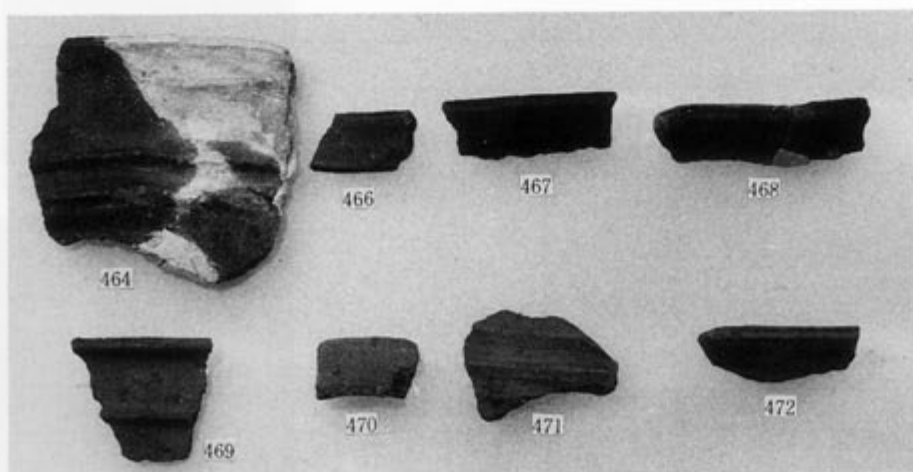
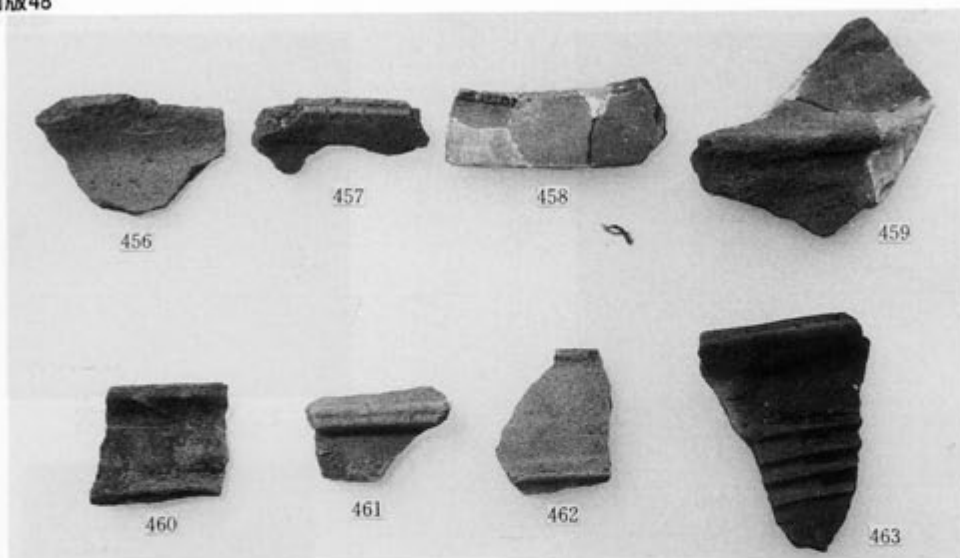
5. 7号建物跡柱穴 (No 3)



6. 7号建物跡柱穴 (No 6)

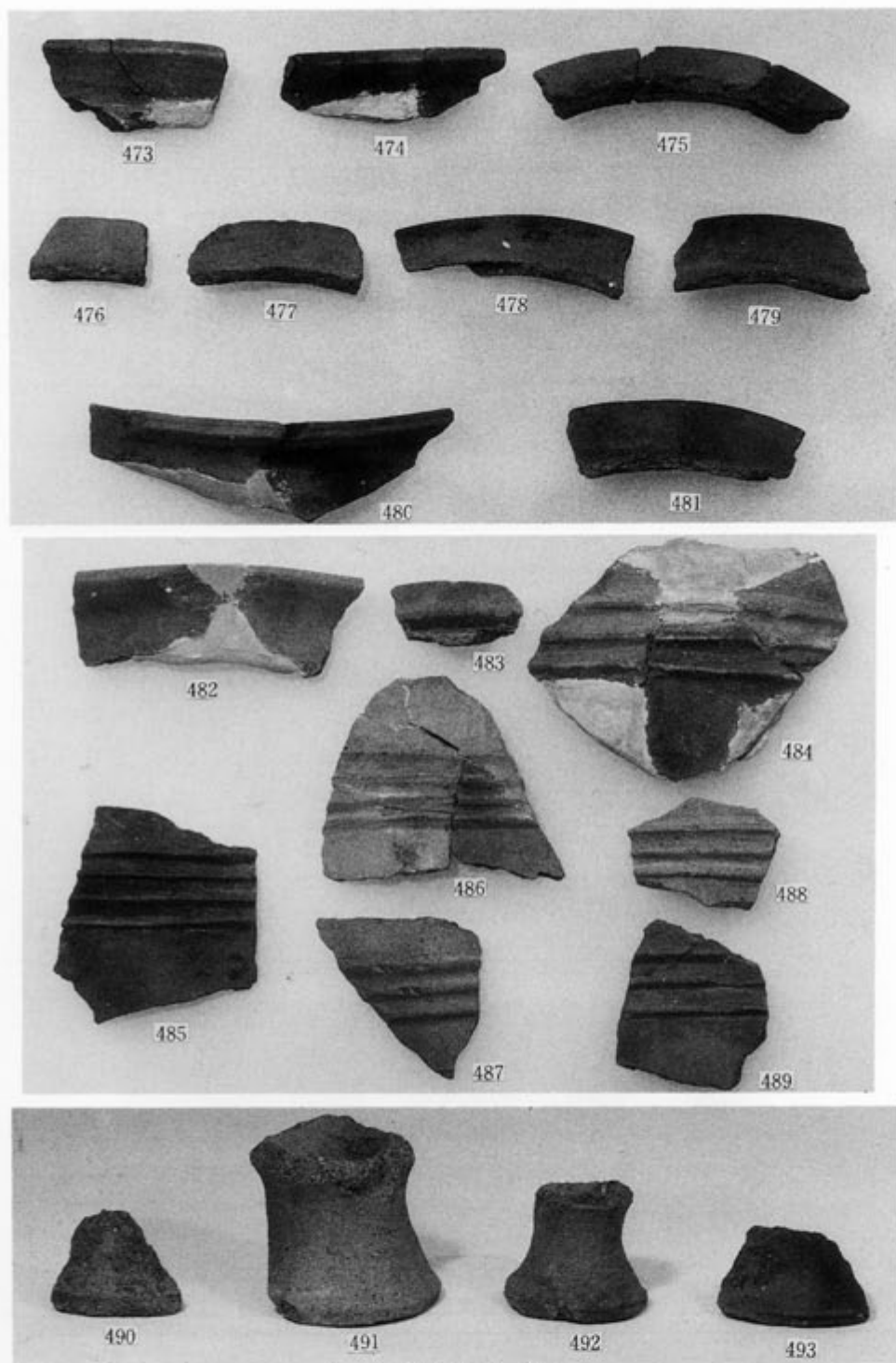


7. 円形周溝と建物跡柱穴の切り合い

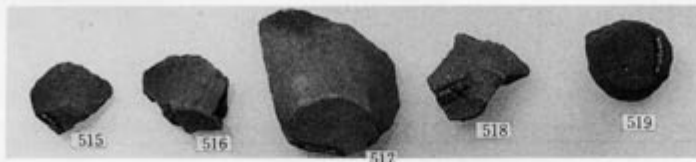
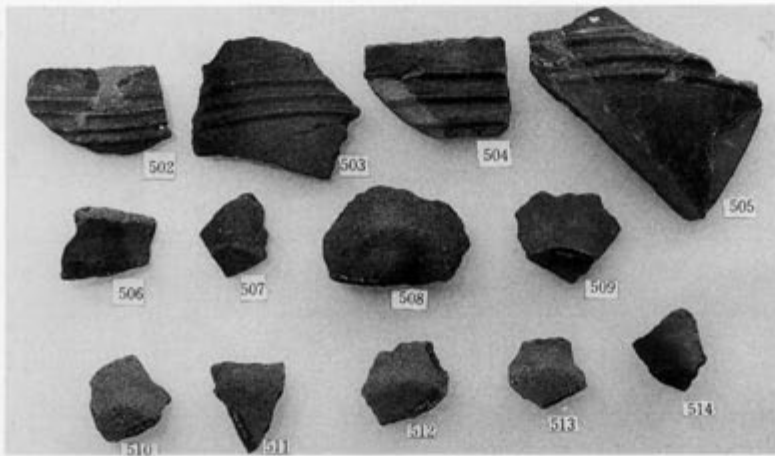
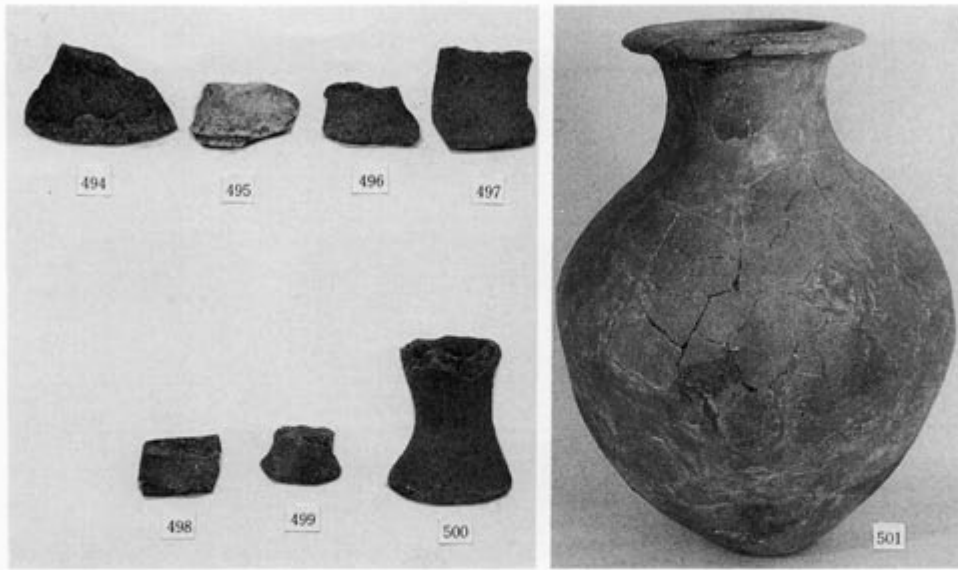


1. Ⅲ層出土土器(1)

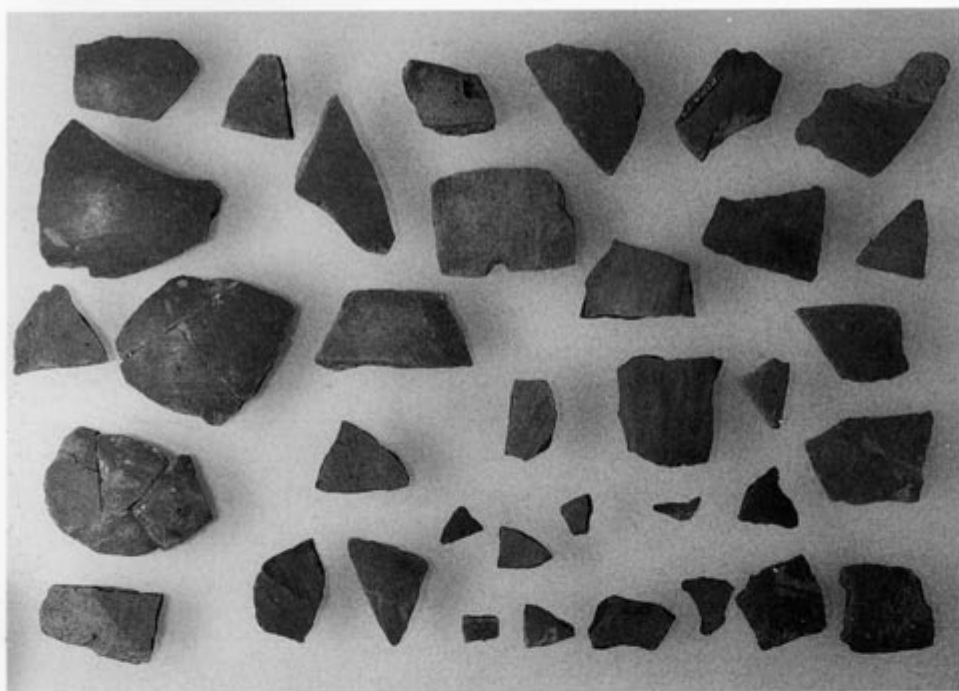
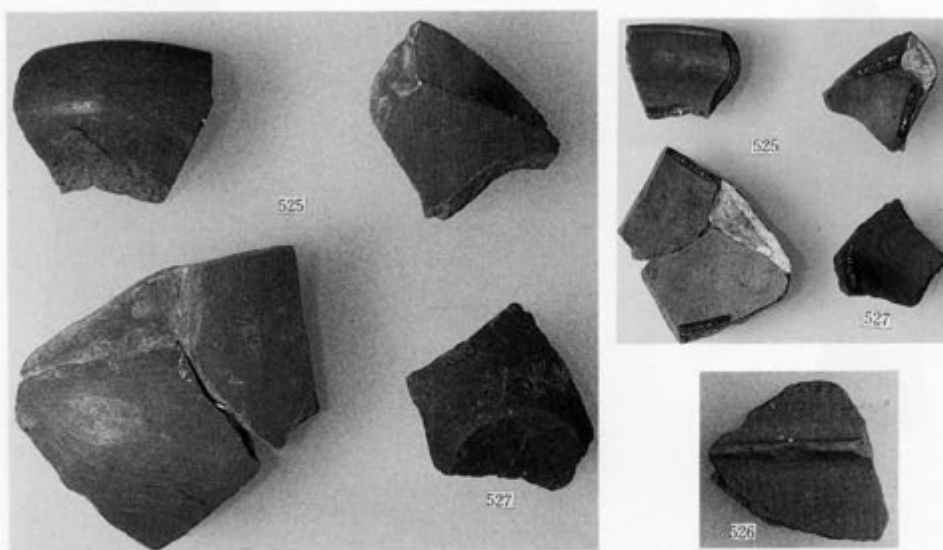




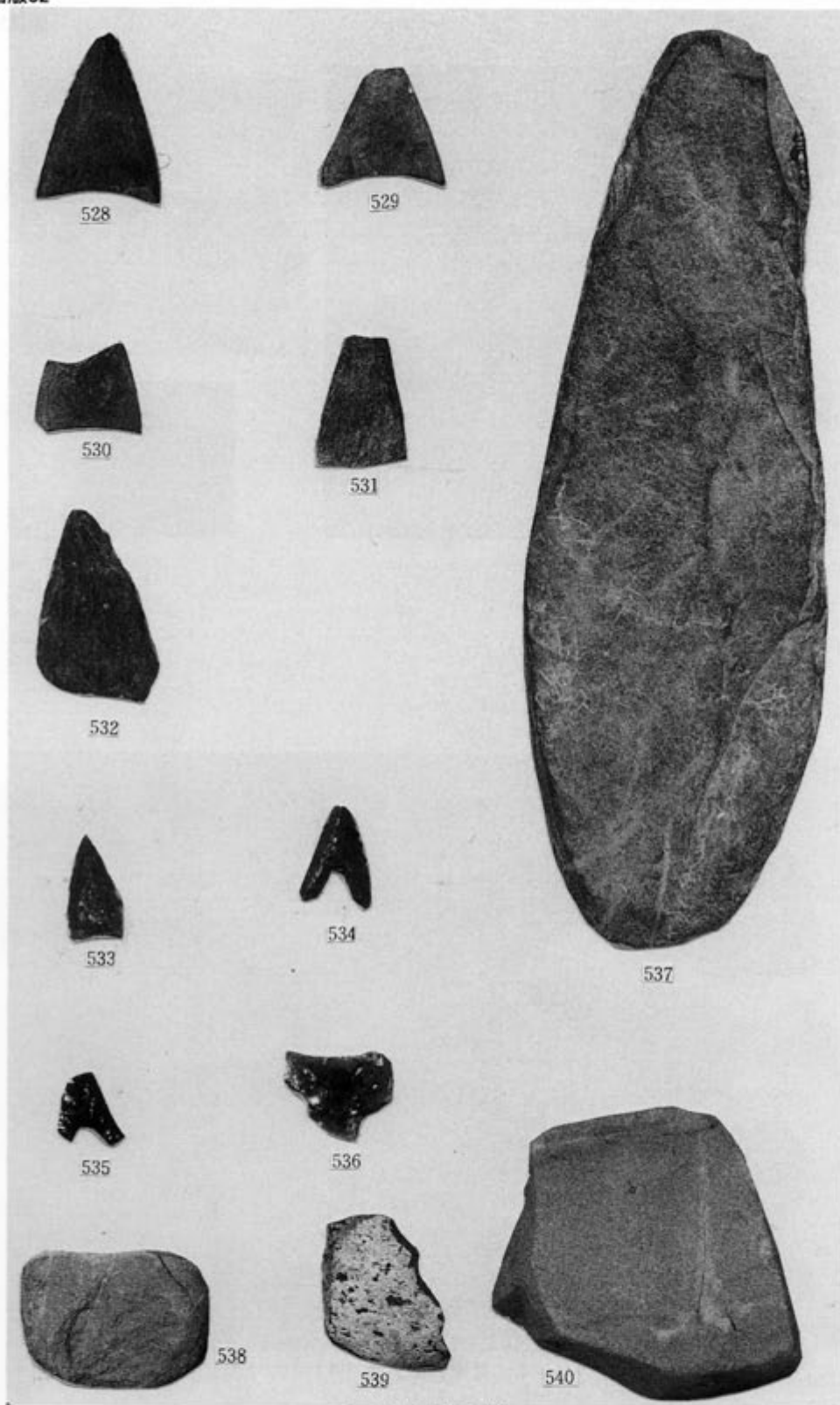
1. III層出土土器(2)



1. Ⅲ層出土土器(3)



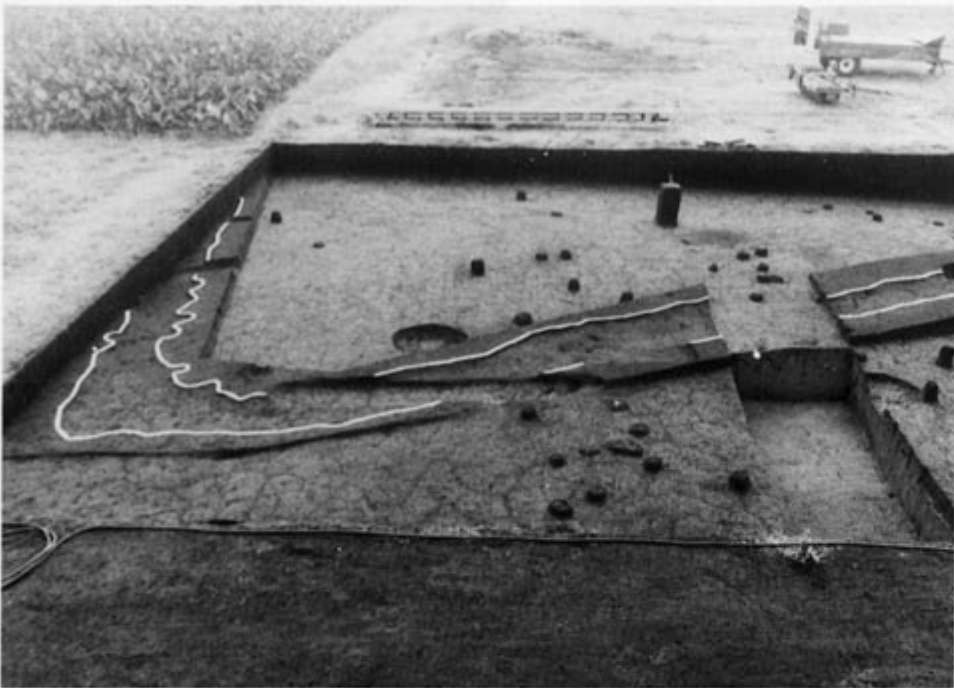
1. Ⅲ層出土土器(4)



1. Ⅲ層出土石器  
—230—



1. 中・近世溝状遺構



2. 中・近世溝状遺構



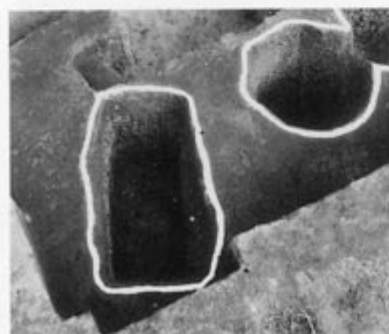
1. 1号墓 (北から)



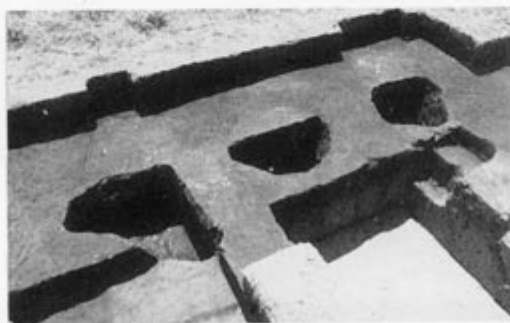
3. 1号墓作業風景



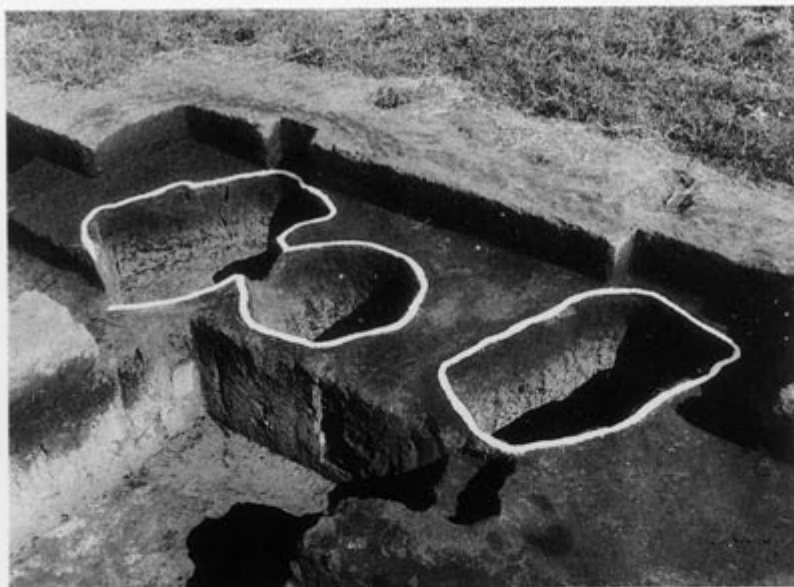
2. 1号墓遺物出土状態



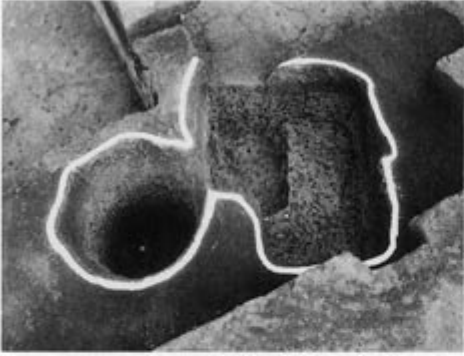
4. 2号・3号墓 (東から)



5. 2～5号墓 (北から)



6. 2～5号墓 (北西から)



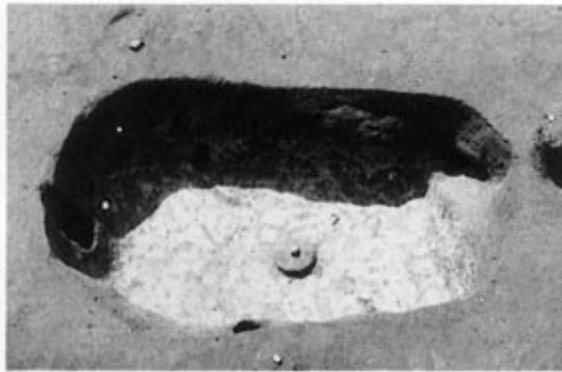
1. 3～5号墓 (東から)



2. 4号墓出土状態



3. 4号・5号墓 (東から)



4. 6号墓 (北から)

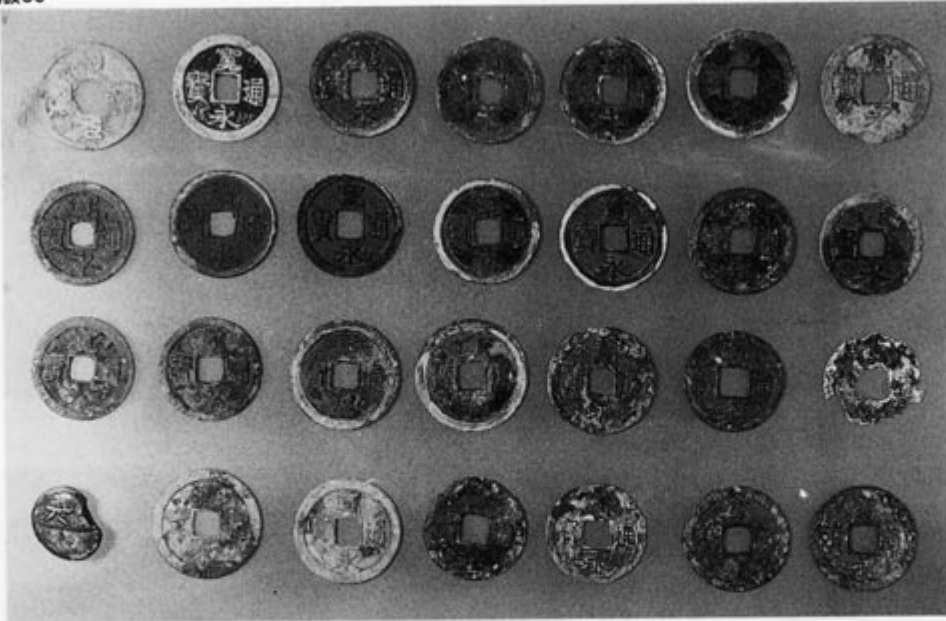


6. 7号墓 (東から)

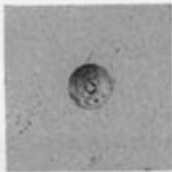


5. 7号墓出土遺物

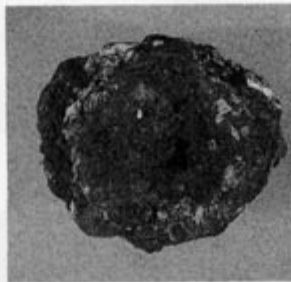




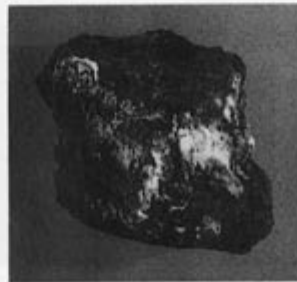
1 古銭 (1号～4号墓)



2. ガラス玉 (2号墓)



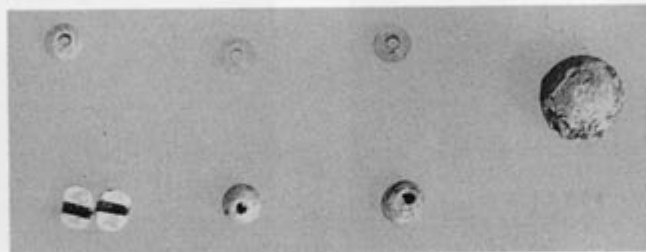
3. 古銭 (6号墓)



4. 櫛 (4号墓)



5. 古銭 (6号墓)



6. 数珠玉 (7号墓)



## あ と が き

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の発掘調査は足掛け四カ年にわたり、ようやく調査報告書を刊行する段階を迎えた。そして、前回に続き、前半の昭和60年度及び昭和61年度に調査を手掛けた「中ノ原遺跡（弥生時代）」と後半の昭和62年度及び昭和63年度に調査を手掛けた「中原山野遺跡」と「西原掩体壕跡」と「前畑遺跡」の整理作業と報告書作成を完成した。

大浦・郷之原地区の台地に展開するこれら4遺跡の発掘調査は、古代史研究上、多くの成果を提供してくれた。時代としては、縄文時代から戦跡遺構などの現代にわたる多時期に及ぶ豊富な資料である。

縄文時代早期では、前畑遺跡の集石遺構群の検出とそれに伴う多量の平椀式土器を中心とする遺物の出土である。特にこれまで本県では比較的希薄であった平椀式期の成果は、縄文土器研究に大きな成果を与えることが期待される。

弥生時代はまた多くの成果が得られた。中ノ原遺跡や中原山野遺跡では、各形態の竪穴住居址や多量の遺物が得られた。その極め付けは、前畑遺跡の弥生時代の集落跡の発見である。3基の竪穴住居址と3棟の平地式建物跡及び5棟以上の高床倉庫跡の検出は、弥生時代の集落構成を知る貴重な成果となろう。また、多量に出土する在地系の山ノ口式土器に今回共伴して出土した移入土器（北部九州系土器や瀬戸内系土器）の在り方は、南九州の弥生時代中期終末期から後期初頭の土器編年に大きな示準を与えてくれた。

さらに、七基の近世墓の発見も今回の成果の一つにあげられる。副葬銭の埋納形態は、南九州の近世墓研究の指標となろう。

また、掩体壕や誘導路などの戦跡遺構の発掘調査は、鹿屋の歴史上の記録として見逃してはならない資料である。

発掘調査中は、『古代史探訪』をはじめ各機関の研修会も実施された。また地域住民の多くの見学、さらには現地説明会や公民館での遺跡説明会なども実施して、埋蔵文化財への理解と啓発にも努めたつもりである。なお、遺跡だより「うらごのはい」の発行は、発掘調査を円滑に進めたと共に参加者の大きな記念となった。

最後に、発掘調査や整理作業において、地元の鹿屋市教育委員会や大浦町及び郷之原町の地域の方々の様々な便宜や協力を頂いた。深謝の意を表したい。

### 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (52)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書 (Ⅲ)

### 前 畑 遺 跡 (第6分冊)

発行日 平成2年3月

発 行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 中央印刷株式会社 〒892 鹿児島市春日町12番16号